「――新入生の皆さん、入学おめでとう」

　やたら肩幅が広く目つきの鋭いオッサンが壇上でこちらを睨みながらマイク越しに話している。この学校の校長だというが、その雰囲気はスーツを着ていても明らかにカタギではない。

「我が国が誇る国立冒険者高等学校。ここには最新の知識と最高の環境がある」

　そう、ここは冒険者学校の入学式、らしい。らしいというのは――

「精進し、選び抜かれた諸君らの才能をさらに磨き上げ、国民の期待に応えていけるよう期待している」

　気づいたらこの席、扇状に席が並ぶ講堂にいたからだ。

　もしかして壮大なドッキリかと疑ってもみたが、小物かつ小市民である俺にそんなことしても大したリアクションなど取れるわけがなく、視聴率的にも意味がない。にしてもここは――

「冒険者大学進学、特殊任務部隊、高位冒険者が在籍する攻略クラン。それぞれ希望する進路や目標があると思うが、仲間達と切磋琢磨し」

　この巨大な講堂も、あの厳つい校長も見覚えがある。前の方にいる真っ赤な髪を刈り揃えた男子生徒に、軽いウェーブがかかった桃色のセミロングの女子生徒も知っている。

　周りには両刃の斧や槍のようなものを持ち込んで入学式に臨んでいる学生もチラホラ見える。中央の一番先頭には派手な色の着物を着た女の子が、その隣にフルプレートメイルも見える。

　間違いない。ここはあのゲームのオープニングの場面だ。

「貴重な学校生活を、悔いのない充実したものにできるよう過ごしてもらいたい」

　まさか。本当にゲーム内に来られるとは。

“——新生们，祝贺你们入学。”

一个肩膀宽阔、目光犀利的中年男子站在讲台上，透过麦克风盯着这里说话。虽然他是这所学校的校长，但他的气息明显不是一个普通人。

“这里是我们国家引以为豪的国立冒险者高等学校。这里汇聚着最新的知识和最优越的环境。”

没错，这是冒险者学校的入学仪式。而“似乎”是因为——

“我们期待你们发奋图强，进一步提升你们的才能，以应对国民的期望。”

不知不觉，我已经坐在一个扇形的礼堂里了。

也许这是个巨大的恶作剧，但是对于我这个小市民来说，我没有什么太大的反应，对于收视率也没有意义。但无论如何，这里——

“无论是前往冒险者大学，还是特殊任务部队，或者是进入高级冒险家攻略团队，我认为你们都有各自想要追求的目标。希望你们与同伴们相互切磋、共同成长。”

我熟悉这个巨大的礼堂和那个严肃的校长。我认识前排的男学生，他留着红色平头，还有那个留着桃色半长发的女学生。

周围的学生们有些拿着类似双刃斧和长枪的武器参加入学典礼。最前面的一名女生穿着华丽的彩色和服，旁边还有一个全副武装的骑士。

毫无疑问，这里就是那个游戏的开场场景。

“希望你们度过一段充实无悔的宝贵学校生活。”

难以置信，我真的来到了游戏内。

　\*・・\*・・\*・・\*・・\*・・\*

　より強力で珍しい武器と防具を探し集め、凶悪強大な敵との死闘を潜り抜けながらダンジョン深層を目指し攻略する本格派アクション、でもあり、幾人かの可愛い女の子達――後に実装されたＤＬＣ（※１）で女性プレイヤー向けのためにイケメンも複数人用意！――と恋愛が楽しめる恋愛学園アドベンチャーを織り交ぜた、ダンジョン恋愛ＶＲＭＭＯ、ダンジョンエクスプローラークロニクル。通称「ダンエク」。

　要するに「ドキドキの恋をしながらダンジョン潜らない？」ってゲームだ。

　プレイするにはＶＲ用のヘッドマウントディスプレイと手にはめるグローブ型のコントローラー、そしてモーションキャプチャーカメラが必要なため初期コストが高く、またゲームを作ったメーカーも無名。発売当初は全く売れず、知る人ぞ知るといったゲームだった。

　しかし美麗なグラフィックに完成度の高いアクション、奥深いゲームシステムがじわりじわりと口コミで噂になり、後に追加された攻略キャラやカスタマイズモード、ＰｖＰや数百人規模で参加できる戦争モードで人気に火が着き、ゲーマーなら誰もが知るほどのゲームとなるまで時間はそれほどかからなかった。

俺は学生時代にハマってから、社会人になってもずっとこのゲームを続けていた。最初の頃は下手っぴだった操作も今ではボス攻略や対人戦を幾度も繰り返し、かなり上手くなったと自負している。まぁ上には上がいるもんだが。

这是一款名为“迷恋地下城”的游戏，它融合了全面动作剧情和浪漫学园冒险的要素。游戏的简称为“Daneku”。

总的来说，这是一款“在浪漫的恋爱中攀登地下城”的游戏。

为了玩这个游戏，需要VR头戴式显示器、手套型控制器和运动捕捉摄像头等设备，因此初始成本较高，而且游戏制造商也不太知名。在发售初期，它根本没有受到欢迎，只是少数人知道的游戏。

但是，它拥有美丽的图形、高完成度的动作和深奥的游戏系统，逐渐在口碑上流传开来。之后，添加的攻略角色、定制模式、PvP和数百人参加的战争模式使其变得更加受欢迎。不久之后，它成为了每个游戏玩家都知道的游戏。

我从学生时代开始沉迷于这个游戏，即使成为了一名社会人，我也一直在玩。刚开始我操作很拙劣，但现在我已经反复攻克了许多Boss和对战，自认为相当擅长。当然，总有人比我更厉害。

　家に帰るとすぐにシャワーを浴びて、レンジで温めた冷凍食品を掻き込み、コントローラーのグローブを装着。腕を振り回すので、壁や物に当たらないようにポジション取りをしてゲームを起動する。

　掌で空中をなぞり、生体認証ログイン。メール着信のマークが付いている。ダンエク運営からだ。

「よし、ちゃんとアップデートのメールが来てるな」

　数日前に「次期大規模アップデートのテスター参加権が貰えるよ！」という運営主催のゲームイベントがあり、まんまとその餌に釣られて参加したのだが、そのイベント内容は本当に地獄だった。

　ゲームイベント会場には数万人のプレイヤーが集結し、期待に胸を膨らませてクエストを待ち望んでいた。「やぁお前もきたのか」「楽しみだぜ」「腕が鳴るぜ」「クリアできたら結婚するんだ」などと和気藹々とした雰囲気を作り出そうとしているものの、景品であるテスター参加権を虎視眈々と狙っているのはモロバレ。どいつもこいつも出し抜いてやるというギラついた目付きを隠せていない。

　何気ない会話で密かな牽制をしていると、突如として空から漆黒の超巨大ドラゴンが墜ちてきて、数万トンの巨体に踏み潰された参加者の一割が早速蒸発。混乱の中、トッププレイヤー達が何とか態勢を整えて反撃するが分厚い表皮に弾かれてまともに攻撃が通らない。時間を置かずドラゴンが即死級ダメージの極太レーザーを乱発し、次々にプレイヤー達が塵芥と化す。

回到家后，我立刻洗了个澡，热了一些冷冻食品，戴上手套式控制器。我挥舞着手臂，确定自己的位置以避免撞到墙壁或物品，然后启动游戏。

在掌心上追踪空中轨迹，进行生物识别登录。我注意到有一封来自“Daneku”游戏运营方的邮件。

“好的，收到了更新邮件。”

几天前，游戏运营方组织了一个活动，宣布可以参与下一次大规模更新的测试者会获得资格。我被这个诱饵吸引而参加了活动，但实际上这个活动非常恶劣。

在游戏活动场馆，成千上万的玩家聚集在一起，期待着完成任务。他们互相交谈，试图营造出和谐愉悦的氛围，“嗨，你也来了啊？”、“我很期待”、“这会考验我们的技能”、“如果我们能通关，我们就结婚吧”等等。但是，大奖的测试者资格吸引了很多人的注意，他们瞪着眼睛，企图抢夺这个机会。

在平淡的交谈中，他们暗中阻止对方。突然，一只漆黑的超巨型龙从天空中降落下来，数万吨的巨体踩扁了参加者的十分之一，他们立即消失了。在混乱中，顶级玩家们设法重新组织阵容并反击，但他们的攻击被厚实的表皮弹开，无法造成有效打击。不久后，龙发射了一系列致命的巨型激光束，玩家们一个接一个地变成了尘埃。

　それでも集まっているのは歴戦のプレイヤー達だ。何とか壊滅を回避し態勢を整えたのは流石といったところか。約２時間に渡る死闘の末、参加者の半数以上が犠牲になりながらも攻略法を編み出しバランスブレイカードラゴンを倒す……が、それは序章。

　ドラゴンのドロップアイテムを求めて死体に群がるプレイヤー達を尻目にイベント会場が崩壊。そこから死の脱出ゲームが開始した。ルートを間違えたら即死、探知無効の即死トラップのオンパレード。道中にもボスクラスのモンスターが集団で、しかも連携しながら襲ってくる始末。その上、脱出タイムリミット有り。

　結果的にクリアすることができたものの、ほぼ運要素という糞バランス。あんなの俺以外の誰がクリアできるんだってくらいの難易度だった。

　とはいえ運も実力のうち。勝ち得たものは素直に喜ぼうぢゃないか。報酬となる大規模アップデートのテスター参加権が添付されているメールを開いて確認。思わず顔が緩んでしまう。

　早速インストールを開始する。許諾契約書に書いてあることを斜め読みすると。

「えーと、このパッチをインストールしてプレイ開始をすると、ゲーム内へ転移します……え？　転移？」

　転移ってどういう意味？　そういうゲーム設定なのか、言い回しに過ぎないのか。運営もほとほと頭がおかしいので深く考える必要もあるまい。

「テスターだから既存のキャラは使えず、まっさらの状態からか」

　キャラは「おまかせキャラ」にするか、自分でキャラメイクする「カスタムキャラ」を選ぶかだが、面倒なので「おまかせキャラ」でいくことにする。ある程度プレイして気に入らなければキャラメイクをし直せばいいだろう。

「よしインストールは無事に完了。それじゃ早速始めるぜ！」

　そして俺はゲームスタートのボタンを勢いよく押したのであった。

尽管如此，仍然有经验丰富的玩家聚集在一起。他们设法避免了灭亡，这可以说是不错的表现。经过近两个小时的死斗，虽然参加者的半数以上牺牲了，但他们制定了攻略方法，最终击败了平衡破坏者龙......但那只是序章。

在围着尸体争夺龙掉落物品的玩家的眼前，活动场地崩溃了。从那里开始，死亡逃脱游戏开始了。如果路线错了就会立刻死亡，到处都是探测无效的即死陷阱。路中还有集体袭击的Boss级怪物，而且还可以协同作战。而且，还有脱逃的时间限制。

虽然最终达成了清关目标，但那几乎是靠运气。那个难度实在太高了，除了我还有谁能通关呢？

然而，运气也是实力的一部分。我们获得的胜利，就应该真诚地庆祝。打开邮件，确认里面附带的大规模升级测试者参加权的奖励。我不由自主地放松了表情。

马上开始安装。对授权协议书进行了斜读。

“嗯，安装这个补丁并开始游戏后，将会转移到游戏内......嗯？转移？”

转移是什么意思？是那种游戏设定，还是只是说法上的说法呢？运营商也是一脸懵逼，所以也没有必要深入考虑。

“因为是测试者，所以不能使用现有的角色，必须从一个空白状态开始。”

选择使用“代表角色”还是自己制作“定制角色”，但那很麻烦，所以我决定使用“代表角色”。如果你玩得不舒服，可以重新制作角色。

“好的，安装已经成功。那么让我们开始吧！”

于是，我按下了开始游戏的按钮。

　\*・・\*・・\*・・\*・・\*・・\*

　ふむ。

　俺がここにいる経緯を思い出してみたがやはりアップデートプログラムのせいなのか。そんなことがありえるのだろうか。

　たしかに日頃「ダンエク」の世界に行って俺ＴＵＥＥＥしたい！　モテたい！　あのヒロインとチュ～したい！　って妄想してたけどさ。……いい歳こいて恥ずかしいって？　男は何歳になっても冒険心に満ち溢れているもんなんだよ。

――ということで少し整理しておこう。

嗯。

我回想起我来到这里的经过，可能是因为更新程序吧。这种事情真的可能发生吗？

确实，平时我会幻想着去“Daneku”世界，成为英雄，受到欢迎，和那位女主角接吻......虽然我已经到了一定年龄了，这很羞耻吗？男人无论年龄多大都应该充满冒险精神。

* 总之，让我整理一下。

　Ｑ１、ここは現実なのか。　それともゲーム？

　「ダンエク」では校長のスピーチ、アナウンスなどはアドベンチャーゲームのように会話ウィンドウ内に言葉が表示されていた。しかし今そんなウィンドウは何処にも見当たらない。またどこを見てもゲームとは思えない段違いのグラフィック解像度。情報量が一目瞭然だ。

　ダンエクも美麗なグラフィックだが、よく見ればＣＧだとすぐに分かるレベルではあった。だが今の俺の視界は――巨大な武器や防具などのファンタジー要素を無視すれば――目を凝らしても現実にしか見えないリアリティがある。近くに座っている生徒の衣擦れの音や、椅子の軋む微かな音なんてゲームにはなかった。

　したがって、ここはゲームではなくゲームが現実となった世界と考える方が自然。元々ダンエクは現実世界の仮想化、いわゆる「メタバース」を意識して作られた圧倒的な情報量を有するゲームであるものの、正直この作り込みがゲームだとしたら度を越している。とはいえ、もう少し情報が欲しいところだ。

　Ｑ２、ここがゲーム内ならログアウトすることはできるのか？

　ゲームのときは常に表示されていたインターフェイスからログアウトの項目が選択できたが、現時点で視界内にはそれらしきモノは何も見えない。それ以前に今まではログアウトなんてせずともヘッドマウントディスプレイを頭から直接外せばゲームから離れることはできた……が、今の俺はそんなものを頭にかぶっていない。

　そういえば会話ウィンドウはともかく、インターフェイスは学校で端末が配られてから見えるようになった気もする。ログアウトできるかどうかの判断はそれまで保留にすべきか。

　Ｑ３、元の俺はどうなった？

　不明だ。意識だけがこちらにあり、体は元の世界にあるケースも考えられる。アップデートプログラムの説明に書いてあった”転移”というのが真実ならば、元の世界に体は無いのだろうか。確かめるにも実際にログアウトするしかない。

　Ｑ４、俺は果たして帰りたいのか？

　元の世界に帰らなければならない理由は、ある。

　まだ入社して数年とはいえ、俺がいなくなれば手がけていた案件が止まるし、多くの人に迷惑もかかる。それに一人暮らしとはいえ家賃や光熱費も掛かっている。放っておくのはまずいかもしれない。

　だが。あちらに俺の体は無く、これが完全なる転移だとしたら……

　それなら割り切ってこの世界を楽しんでしまおうか。どうしようもないときはどうしようもないのだから。幸か不幸か俺には家族がいないし、俺がいなくなって悲しむ人もいない。帰ることができたならその時に考えればいい。

Ｑ１、这里是现实还是游戏？

在“达尔文游戏”中，校长的演讲和公告等都会在对话窗口内显示出来。然而，现在无论在哪里都看不到这样的窗口。另外，即使不考虑巨大的武器和防具等幻想元素，视觉上也有现实感。靠近的学生的衣服摩擦声和椅子微微的响声，游戏中都没有这样的声音。因此，认为这里不是游戏而是游戏变成现实的世界是自然的。虽然“达尔文游戏”本来就是一个意识到现实世界虚拟化的“元宇宙”意识的游戏，但如果把这种制作工艺当成游戏的话，就有点太过分了。但是，我还想再多一些信息。

Ｑ２、如果这里是游戏中，能够退出吗？

在游戏中，可以随时从界面中选择退出。但是，目前视线内没有看到类似的选项。此外，以前只要摘下头盔显示器就可以离开游戏……但是，现在的我没有戴着那个东西。

顺便说一下，虽然会话窗口不见了，但是自学校发放终端以来，界面应该是可以看到的。可以暂时搁置退出能否执行的问题。

Ｑ３、我原来的身体去了哪里？

不明确。只有意识在这里，身体可能在原来的世界。如果“転移”这个术语在更新程序的说明中是真实的，那么我在原来的世界是否没有身体呢？只有通过实际退出才能确认。

Ｑ４、我是否想回去？

原因是必须回到原来的世界。虽然刚刚入职才几年，但如果我不在了，处理的项目就会停止，会给很多人带来麻烦。此外，虽然是一个人住，但还有租金和公用事业费用。不能放任不管。但是，如果我的身体不在那里，如果这是完全的“転移”的话……

那么，我就割舍一切，享受这个世界吧。在无法控制的时候，只能无能为力。幸运的是，我没有家人，也没有人会因为我离开而感到难过。如果可以回去，那时再考虑吧。

　色々な考えや疑問が湧いてくるが確かなことは何も分からない。密かな興奮と混乱に身を包まれ、周りの生徒らに質問攻めを仕掛けたい衝動に駆られる。だが今は冷静になるべきだ。落ち着け、俺。

　入学式の壇上で複数の教職員が、要約すると「頑張ってね」という長い挨拶をし終え、やっと入学式が終わるようだ。

「――以上をもちまして、冒険者高等学校入学式を終了します。この後は各クラスにてホームルームを行います。Ａクラスから退席してください」

　Ａクラス。

　「ダンエク」のストーリーでは後に生徒会長になるものや、有名冒険者や有名商社の子弟など、錚々たる実力者が多数在籍していた。続いて退席していくＢクラスやＣクラスでも主人公のライバルやイベントでキーとなるキャラも垣間見える。

各种想法和疑问在脑海中涌现，但确切的事情却一无所知。我被秘密的兴奋和混乱所包围，有冲动向周围的学生发起问题攻势。但现在我应该冷静下来。冷静点，我。

在入学典礼的讲台上，多名教职员工总结了一番，最后说了一句“好好加油”，入学典礼好像就结束了。

“以上是本次冒険者高等学校入学典礼的全部内容。接下来各班将进行教室内部的协商，请A班的同学们先离开。”

A班。

在《DanMachi》中，有后来成为学生会长的人物，还有众多实力强大的冒险家和名门商人的子女等人才。接着离开的B班和C班中也能看到主角的竞争对手和关键角色。

　メインストーリーの登場人物を思い出しながら生徒達の顔を見ていると。

「では、最後にＥクラスの皆さん、どうぞ」

　周囲が一斉に立ち上がり出口へ向けて移動を開始する。これから俺が在籍するクラスはどうやらＥクラスのようだ。ゲームでも「主人公」でプレイしたり、カスタムキャラを作るときはＥクラスからのスタートとなる。俺は「おまかせキャラ」を選んだのだが、カスタムキャラ扱いなのだろうか。

　講堂から外へ出た生徒達は探り探りで周りを見たり緊張した空気を醸し出しながら教室まで無言で歩いている。窓から見える景色は圧巻だ。巨大な訓練施設やら大型テナントの売店、工房それぞれに結構な金が掛かっているのが一目で分かる。

（こんな凄い学校で学べる生徒は幸せだろうな）

　俺が元の世界で通っていた高校は何の変哲もない古びた学校だったので、施設の差が歴然。この国立冒険者学校は、資源確保などの商業的、政治的な理由から国を挙げて運営され、国庫から莫大な金が投入されている、という設定を思い出す。

　二度目の高校生活を送るかもしれないことに対して回顧の念と複雑な感情を抱きつつ階段を上り「１－Ｅ」と書いてある教室へ到着。

（はぁはぁ……おかしい。妙に息が上がるぞ……はぁ）

　階段を上ることがとにかくきつい。そういえば妙に腹が出てるな。手足もふっくら、というより膨らんではち切れそうだ。もしかして俺、デブキャラ？

　どんなキャラにされたのか気になったのでトイレに行って鏡の前に立つと――

回想起《ダンジョンエクスプローラーズ》中的主要角色，观察着学生们的面孔。

“那么，最后请Ｅ班的同学们进场。”

周围的人同时站起来，开始朝出口移动。接下来，我所在的班级似乎是Ｅ班。在游戏中，如果选择“主角”或创建自定义角色，则从Ｅ班开始。我选择了“让我帮你创建角色”，但是否被视为自定义角色呢？

从礼堂出来的学生们小心翼翼地四处张望，沉闷的氛围贯穿教室。从窗户外看到的景象令人印象深刻。巨大的训练设施、大型商店和工作室等都需要巨额资金才能建造。

（能在这样一个厉害的学校学习真是太幸福了）

我在原来的世界里上过的高中是一所毫无特色的古老学校，设施之间的差异非常明显。这个国立冒险者学校是由国家为了资源开发等商业、政治原因而全力运营的，从国库中注入了大量资金，我想起了这个设定。

回顾过去，我可能会度过第二次的高中生活，心中涌起了复杂的情感，一边爬楼梯一边到达了写着“1-E”的教室。

（呼呼……奇怪，我的呼吸变得很急促……呼呼）

爬楼梯实在太累了。话说回来，我的肚子好像凸出来了。手脚也变得圆润，或者说是胀得快要爆炸了。难道我是胖子角色？

因为好奇我到厕所看镜子，然后……

　豚と見紛うような男が映っていた！

　これでもかというほど脂肪がついた顔に肥えた体。ジャンボサイズの学生服。そしてこの顔は……ヒロインの一人に纏わりついて悪事を働く悪役かつセクハラキャラ。

　通称――

「ブタオじゃねーかっ！！！」

（※１）ＤＬＣ

　ダウンロードコンテンツ。メーカーがインターネットを通じて配信し、ユーザーがダウンロードして利用できるコンテンツの略称。ダンエクでは無料で定期的に受けることができる。

　「おまかせキャラ」を選択したら「ブタオ」になった件。

　つい先程まで「せっかくゲームの世界に来れたのだからヒロインとイチャイチャしつつ無双できるんじゃね」的な感じで学校生活に淡い期待を抱いていた。それが今、木っ端微塵に砕け散ったわけだ。

　鏡に映っているのは身長１７０ｃｍほどで、紺色の髪をオールバックにした男子高校生。しかし体重が１００ｋｇは余裕で超えていそうな超肥満体で、首も脂肪で埋まって見えない。さして暑い日でも無いのに階段を上っただけで汗だくだく。息も途切れ途切れ。

「これ……本当に俺か？」

　鏡の中の男も驚いたようにこちらを覗き込んでいる。あたかも俺をトレースしたかのように。そんな姿を見ると意識が消え入りそうになり現実逃避したくもなる。

一面镜子里映射出一个看似肥大得如猪一般的男子！脂肪堆积在他的脸上和身体上，学生服也是巨型尺寸。而这张脸，是游戏中一个恶役兼猥亵角色缠着其中一个女主的脸。

通称——「豚夫」！！！

（注1）DLC即下载内容的缩写，制造商通过互联网发布并供用户下载使用的内容。在《DANEC》中，玩家可以定期免费获得。

我原本还怀着些许期待，想着既然来到了游戏世界，不就可以和女主谈恋爱，顺带无敌地打败一切吗。但现在，这些希望像是泡影般破灭了。

照片中映出的男子身高约170厘米，头发梳成向后梳的深蓝色短发。然而体重超过100公斤，他的脖子和脸也被脂肪掩盖，几乎看不清。即使在并不太热的天气下，上楼梯也让他汗流浃背，喘不过气来。

“这……真的是我吗？”

镜中的男子也惊讶地凝视着这个虚像，仿佛在追溯他自己。看到这种场景，我甚至觉得自己的意识也随之消失，想要逃避现实。

　元の世界では標準体重で一度も太ったこともなかったため、階段を上がってちょっと移動しただけでこれほどの息切れは経験が無い。ドッキリかもしれないので――ドッキリなわけがないが――試しに変顔をしたりモノマネ芸をしてみるが鏡の前の男はどうみても俺だった……

「むおぉ……おまかせキャラなんて選ぶんじゃなかった……」

　頭を抱えて蹲るが、出ている腹が突っかかる。

　「おまかせキャラ」というのは自動でランダムの能力と見た目が作られるキャラだと思っていたが、まさか既存のキャラのどれかのことだったとは。Ｅクラスには格好いいキャラなんていくらでもいるのに、よりにもよってブタオを引くあたり運が無い。

　ブタオとは、とあるヒロインの攻略ルートに入ると登場する悪役キャラのことだ。

　度々下ネタでヒロインを困らせ、そのヒロインと仲良くなる主人公に対しても嫌がらせを散々繰り返す。最後には主人公に粛清され退学に追い込まれ、主人公とヒロインが結ばれハッピーエンド、といった流れがあったのを思い出す。

　とはいえブタオは主人公のライバルとかではない。強くもなく邪魔なだけの不快モブキャラなので俺も思い入れなどなかった。ゲームでも”ブタオ”呼びだったため本名なんて覚えてない。

在原来的世界里，由于标准体重从未增加过，所以从未经历过只是爬了一会楼梯就这么喘不过气来的情况。尽管这可能是一个恶作剧，但镜子里的男人却毫无疑问是我本人……

“呃……我不该选‘随机角色’……”

我捧着头蹲了下来，可是我的大肚子碰到了膝盖。

我原本认为“随机角色”是一种自动创建具有随机属性和外观的角色，但我绝不曾想到它竟然是指已经存在的某个角色。在E班里有许多帅气的角色，但是运气这么差，却抽中了“布塔奥”这个角色。

“布塔奥”是攻略某个女主角线路时出现的反派角色。

他总是用下流的言行骚扰着女主角，不断地给主角和女主角制造麻烦。最后被主角除掉，被迫退学，主角和女主角得以在一起，这就是他的故事情节。

但是，布塔奥并不是主角的对手。他不强大，只是一个让人不舒服的不重要的配角，所以我没有什么感情。在游戏中他也一直被称为“布塔奥”，我甚至不记得他的真名了。

「そういえばブタオとあのヒロイン……早瀬カヲル（はやせかをる）は確か幼馴染で許嫁だったか」

　早瀬カヲルの情報を思い出す。

　すらりと伸びた四肢に長い睫毛と切れ長の目、腰まで伸びた髪を後ろで一本に結んだ和風な感じの女の子。剣道を嗜んでいて中学時代から全国大会で優勝したこともあるほどの腕前で、学力も高く文武両道、才色兼備。性格もサバサバしていて誰にでも分け隔てなく接する――ただしブタオ以外。

　ゲームを進めていけば早瀬カヲルは主人公の強力なパートナーとなり恋人にもなるわけだが、ブタオからしてみれば好意を抱いていた幼馴染かつ許嫁を、爽やかイケメン主人公に簡単に取られるのは我慢ならなかったのだろう。反撃手段がセクハラなのが救えないけれども。

“顺便提一下，说起来，那个叫做布塔欧的家伙和那个女主角早瀬香织（はやせかおる）好像是青梅竹马，还是未婚妻？”

他想起了早瀬香织的信息。

身材修长，长长的睫毛和双眼皮，将长长的头发束成了和风式的后发式，剑道很拿手，从中学时代开始就在全国大赛上获胜，学业和武艺兼备，才华出众。性格开朗，对任何人都平等对待，除了布塔欧。

虽然在游戏中，随着情节的发展，早瀬香织成为了主角的强大伙伴并最终成为了恋人，但对布塔欧来说，他不想让他曾经心怀爱意的青梅竹马和未婚妻，这个清新帅气的主角轻易地被夺走。虽然用性骚扰作为反击手段不可取，但布塔欧可能也无法控制自己的情绪了。

　問題は入学当初からブタオ――悲しきかな今は俺のことだが――と彼女は険悪な状況になっているということ。こちらの世界でもゲームと同様に嫌われているのかは分からないが、トラブルの元になるかもしれないのでなるべく近寄らないでおくべきか。

　――しかし何故だろう。

　早瀬カヲルのことを思い浮かべるほどに焦燥感のようなものを感じる。もしかして頭のどこかにブタオの記憶や感情が残っているのだろうか……。何か思い出せそうな気もするが、どこかにつっかえたように記憶を引き出せず、モヤモヤする。

　このままここで考えていてもストレスでおかしくなりそうだ。教室へ戻るとしよう。

　何度目かの深いため息をつきながら教室へ入ると、例のヒロインから刺すような視線を感じた。ここは気づかない振りをして無視だ。

（この時点で相当嫌われてるな）

　ブタオの記憶から何も引き出せないので、これほど関係が拗れた原因も解決方法も分からない。時間が解決してくれることを期待しよう。

　気を取り直して自分の席を探す。前から成績順に並んだ席らしいが、なんと俺の席は一番後ろ端の”学年最下位”の席だった……。はて。入学試験ってどんなのだっけ。

　この冒険者学校高等部のＡクラスからＤクラスまでは冒険者中等部からの進学、いわゆるエスカレーター組で、国がダンジョン探索能力があるものを特別に選抜した生徒達だ。

　一方、Ｅクラスだけは外部受験組。受験倍率は優に１００倍以上あり、そこを勝ち抜いてきた相当なエリート、という設定だったはずだ。

　ブタオがこの学校に入れたということは、そんな化け物じみた倍率を勝ち抜いて入ってきたのだろうか。何か特別なスキルがあるとかか？　最下位だとしても受かっただけ凄いし自信を持とうじゃないか。

　クラス内の何人かは知り合いなようで話をしているのもいるが、やはり緊張のせいか教室自体がピリピリとした空気が漂っている。主人公やヒロインもまだ大人しく初々しいね。

　そんなクラスメイト達をぼんやり眺めていると。まだ二十代だろうか、スーツ姿の若い男が教室に入ってきた。

「皆、席につけ。これからホームルームを始める。まずは俺のことと、この学校。そして成績や進路についても説明する」

　自己紹介によるとクラスの担任、村井一（むらいはじめ）先生という。冒険者大学卒。ということは、この冒険者高校も優秀な成績で卒業したＯＢなのだろう。細身ではあるものの、一つ一つの動作や身のこなしからして只者ではなさそうだ。学校の教師というより軍人っぽい。この一年間はこの先生が指導していくとのこと。

　自身のことを説明し終えると、次に学校についてホワイトボードに箇条書きで書いていく。

「この学校で良い成績を収めれば、国立冒険者大学の推薦枠が得られたり、あるいは冒険者になる際に優遇措置を受けることができる。一流クランや民間企業からもスカウトがくるだろう。これら人気のある進路は基本的に成績の順位で割り振られていく」

　国立冒険者大学はダンジョン関連に特化した特殊部隊、またはダンジョン省の官僚候補となる人材の育成を目的としている大学だ。元居た世界で言えば防衛大学や気象大学のイメージに近い。先生によると冒険者大学進学が一番人気の進路なので成績順で割り振るらしい。

　次に優遇措置。

　この学校の生徒には公務員のように様々な特典が付いており、冒険者ギルドにあるダンジョン施設が半額、または一部無料で利用できる。日本の国公立大学の学生のようなちょっぴりお得な待遇と似ている。利用の際は申請が必要な場合があるので注意するようにとのこと。

　あとは冒険者学校の生徒は冒険者ランク（１～１０級があり、１級が一番高く１０級が一番低い）のうち９級からスタートでき、簡単な手続きで即ダンジョンに入ることができる特典がある。普通の人は手続きの後、身元証明、筆記試験、講習、実地訓練の後に１０級からのスタートとなり相当に面倒らしい。

　冒険者ギルドでのクエストの受注には冒険者ランクによる制限が課されていたり、一定以上の等級では国からも優遇措置が施される。冒険者ランクを上げることは基本的にメリットしかないので、常日頃から意識してクエストを熟し昇級試験を受けてみて欲しいとのこと。

　またこの学校は卒業後の進路も多様とのこと。

　ダンジョン関連はホットな分野で市場規模は大きく研究開発も盛んだ。例えばこの世界の発電所は過半数が魔石を使ったもので、エネルギー産業の多くがダンジョン資源に支えられているともいえる。この魔石発電はＣＯ２も出さない上にコストも火力発電より安く、しかも小型化できるためかなり普及しているようだ。

　他にもダンジョンから取れる素材を利用した素材技術革新も相当なもので、軍需産業やＩＴ産業も多大な恩恵を受けている。これらはとにかく富を生み、世界中が競って投資し研究開発を行っている。そのための優秀なダンジョン探索員は官民問わず多くの機関が喉から手が出るほど欲していて、冒険者学校には好待遇で青田買い目的のスカウトが来るそうだ。

　もちろん普通の大学へ進学することもできる。この冒険者学校の偏差値は相当に高く、去年の卒業生の進学先も錚々たる大学名が並んでいる。

　そして成績について。

「ここでいう成績というのは主に勉学とダンジョン攻略での成績の二つ。校内での試合やイベント、大会なども成績に加算されるが、それはまた後の機会に説明する」

　ただダンジョン内で活躍できればいい、というわけではなく、学業も成績に考慮されている。学力はダンジョンという未知の環境に対する適応力を高め、ステータスのＩＮＴ上昇にも影響が出るから重視されているそうだ。一応俺は元居た世界で二流とはいえ大学は出ているし、学力勝負というならちょっとは有利かね。

「ダンジョン攻略は仲間と協力して進めるものだ。同時に君らは成績を競い合うライバルでもある。是非精進してもらいたい」

　ダンジョン攻略はゲームのときでも基本的にソロより前衛後衛のバランスがいい職業で組んで潜ったほうが効率が良かった。例外として浅層ではソロのほうがいい場合もある。パーティーメンバーを見つけて組むか、ソロでひっそりと潜るか。それは後で考えるか。

「それでは今から端末を配るので、名前を呼ばれたらここに来い」

　腕にはめてボタンを押すと目の前に映像が浮かぶ機能が付いたハイテクなウェアラブル端末だ。空中に文字などを表示する技術は元の世界でもあったが、ウェアラブル端末としてこれを実現できたことはないはず。これもダンジョン科学の恩恵を受けた一端なのだろう。ガジェット好きのオラはワクワクが止まらないぜ。

　早速、端末にあるボタンを押して開いてみると、目の前に１５インチほどの大きさの画面が開いた。他人の開いている画面も見えるので網膜に映しているのではなく、空中に投影しているタイプだ。

　トップ画面には名前やステータスが書いてある。

＜名前＞　成海颯汰

＜レベル＞　１

＜ジョブ＆ジョブレベル＞ニュービー　レベル１

＜冒険者階級＞：―未登録―

＜ステータス＞

最大ＨＰ：７

最大ＭＰ：９

ＳＴＲ：３

ＩＮＴ：９

ＶＩＴ：４

ＡＧＩ：５

ＭＮＤ：１１

＜スキル　１／２＞

・大食漢

・＜空＞

　ふむ。ブタオの名前は成海颯汰というのか……そんな名前だったような。元居た世界の俺はおっさんに片足突っ込んでたし、高校生活を送るうえで若返ってくれたのはポジティブな面ともいえる。

　レベルとジョブレベル（※１）は共に１だ。戦ったことがないから１なのだろう。ちなみに【ニュービー】ってのは「初心者」や「新参者」とかいう意味で、初期状態なら例外を除いて最初のジョブは【ニュービー】となる。経験値を貯めてジョブレベルを上げていけば特定のスキルを覚えたり、他のジョブへジョブチェンジしたりもできる。

　冒険者階級が未登録になっているのは、現時点では冒険者ギルドで登録をしていないからだろう。ダンジョンに入るなら早い所、冒険者ギルドへ行ったほうがいいと心にメモしておく。

（ステータスの能力値は……正直低いな）

　ゲームではこの初期能力を決めるのに何度もリセットマラソン（※２）をしてＡＬＬ１０以上のステータスとレアスキルを狙ったものだ。育ってしまえば初期ステータスなんて誤差みたいなものになるが……まぁ文句を言っても変わる事は無いので気にしないでおこう。

　これらの数値は入学試験のときのジョブチェンジ装置で測定した数値らしい。それが冒険者学校のデータベースに送られてこの端末に転送されたもなので、リアルタイムのステータスが反映されているわけではないといことは注意しなければならない。

　――そして。

（……え？　《大食漢》なんてスキルは初めて見た。というかコレのせいで太ってるんじゃないのか？）

　この世界ではダンジョンでレベルやジョブレベルを上げていなくても初期の状態からスキルを覚えている人もいる。攻撃スキルや回復魔法なんてのを覚えていると序盤におけるダンジョンダイブがスムーズになるため、俺もリセットマラソンをして良スキルを狙っていたものだが……《大食漢》なんてスキルが果たして何の役に立つのか。

　文字からして大量に食べそうなスキルだけど……もしこの体で生きていくことを強いられるならば、さっさと他のスキルで上書きしてダイエットに励んだほうが良いかもしれない。ダンジョンに潜るなら階段を上がるだけで息を切らしている場合ではないのだ。

　他には電話やメール、カメラ、ＳＮＳ機能がある。ダンジョン内で仲間との通信にも使えるし、これで作戦指示や指揮も可能なようだ。レポート提出などにも使う機能もある。

（さて肝心のログアウトの項目だが……無い。やっぱり無いぞ。ログアウトできないのか？）

　やはり意識だけがゲームの世界にあるのではなく、完全な転移なのだろうか。端末のインターフェースにログアウト項目がない以上、他に帰る手段は思いつかない。どうしても帰りたいというわけではないが、ブタオになってしまったせいで鬱々とした気分だ。

　せっかく夢にまで見た「ダンエク」の世界の中に来ることが出来たのに……

（※１）レベルとジョブレベル

レベルは上がればステータスも上がり恩恵を受けることができる。「ダンエク」での最大レベルは９０だった。

ジョブレベルは最大で１０まで。ジョブレベルを上げることでスキルを覚えることがある。ジョブチェンジすればジョブレベルは１からスタートとなる。ジョブによってはステータスにボーナスが加わる。

（※２）リセットマラソン

ゲームをリセットしニューゲームから再び始め、キャラを作り直して良いボーナス値のステータスや特典を狙う方法。略して「リセマラ」とも言う。

　ホームルームでの連絡事項や説明が終わり、今日のところはお開き。次は来週の月曜日からの授業となる。

　早速ダンジョンに潜りたいクラスメイトの何人かが集まり、パーティー構成について話し合っている。まだ誰もダンジョン経験は無くジョブも【ニュービー】のはずなので、みんなで囲って叩く作戦で行くようだ。初心者でも行けるような浅い階層は敵も弱いし回復役やサポート役が入った構成を考えるより、皆で殴ったほうが手っ取り早いので間違ってはいない。

　俺はといえば訳の分からないスキルしかない上に、この体形。参加したいと声を掛けても躊躇されるだけだろう。しばらくはソロで潜ろうか、いや、潜るのは良いがこの贅肉を落とすことも考えねば……などと考えていると。突然、教室に角刈りゴリマッチョとその取り巻きらしき男達がやってきた。

「Ｅクラスの落ちこぼれ共！　こちらはＤクラスを仕切る、刈谷勇（かりやいさむ）という方だ。今からお前らを選抜して俺達の配下にしてやる。ステータスとスキルを教えろ」

　入学初日に落ちこぼれも何も無いだろうに、服を着崩した細身の取り巻きＡが勝手なことを話し始める。紹介された刈谷本人は教壇の上で腕を組んで静かに目を閉じ仁王立ちしている。

　そういえばゲーム序盤にそんなイベントがあったな。たしかコイツらに目をつけられる女の子を守るために主人公が庇い、１ヶ月後に決闘イベントとかいう流れだったか。

「おい、刈谷さんを待たせるな。まずはお前、ステータスを見せろ」

　取り巻きが近くにいた男子生徒を指差す。だが男子生徒は突然やってきての上から目線の指示に不服のようだ。

「なんでいきなり来たお前らに見せなきゃいけないんだよ」

　すると小太りでロン毛が絶望的に似合ってない取り巻きＢの目つきが変わり、息が詰まるような淀んだ空気が場を支配する。

「……おい。お願いしてるんじゃねぇ、命令してんだぞ、あ？」

　これがレベル差による強者の《オーラ》か。至近距離で猛獣に息を吹きかけられたような威圧感が向けられる。

　レベルはダンジョンでモンスターを倒し、一定量の経験値を集めれば上がるのだが、それと同時にＨＰやＳＴＲなど肉体的にも大幅に強化され、超人じみたことができるようになる。

　この肉体強化はダンジョンから漂う「魔素」が場に満ちていることが条件で、ダンジョン内部か、ダンジョン入り口から範囲１５０ｍほどまでしか効果がない。この魔素が満ちている場のことを「マジックフィールド」と呼ぶ。

　逆に、マジックフィールド外なら肉体強化はされないが、冒険者学校の校舎はダンジョン入り口を覆うように作られていて、この教室もマジックフィールド内。つまり、レベルを上げたことによる肉体強化がモロに出てしまうのだ。

　その肉体強化された状態で《オーラ》を垂れ流すと威圧になるわけだが……かわいそうに、威圧された男子生徒は取り巻きの前に縮こまってしまっている。

「あ……うぅ、こっ、これです……」

「さっさと見せりゃ弱い者いじめなんてしねーよ。やっぱりＥクラスはレベル１の【ニュービー】か」

　Ａ～Ｄクラスは中等部からのエスカレーター組。一般的には１５歳以上しか入れないダンジョンに、彼らは３年も早く入ってレベルアップを経験している。そんな奴らとレベルアップを一度もしたことがない俺達が戦っても勝負になんてなるわけもなく、ワンパンで軽くぶっ飛ばされるくらいの実力差はあることだろう。

「次、そこのデブ！　早く見せろっ！」

　小太り長髪の取り巻きＢが俺をデブデブと指差す……が、お前も大概デブだからな。別に言い争うつもりは無いので端末から俺のステータスを見せる。

「っか～っ、何だこの低いステータスと使えなさそうなスキルは。雑魚すぎるな！　次、お前」

　はい、雑魚認定きました……まぁいいけど。これからレベルアップして無双しちゃうもんね！　悔しくないもんねっ！

　心の中で取り巻きＢにシャドーボクシングをしていると、次にゆるふわピンク髪の女の子が指名される。そうそう、この子が目を付けられるんだっけか。

　彼女はダンエクのヒロインであり、女主人公としても選べる重要キャラ。三条桜子（さんじょうさくらこ）さん、通称「ピンクちゃん」だ。親しみやすく愛嬌を感じる大きなタレ目に、これまた大きなお胸。大人しめの雰囲気が男性の庇護欲を掻き立てる。

　女主人公なだけあって数々の男を手玉に取るシナリオも用意されており、逆に言えば彼女を敵に回すと怖そうなので距離を開けておくべきキャラの一人とも言える。

「お前カワイイじゃん。能力は……レベル１だし微妙だが、特別に俺達のパーティーに入れてやるよ」

「えっ、えっと……」

　おどおどしているピンクちゃんの顔を無遠慮に覗き込む取り巻きＡ。下卑た顔つきの取り巻きＣが彼女の肩を掴もうとするが――

「嫌がっているじゃないか」

　そこらでは見ないほど整った顔をした男子生徒が、少女へ向けて伸ばされた腕を制止する。

　燃えるような鮮やかな赤髪に金色の瞳。人好きのする笑顔を向けられているはずなのに、取り巻きたちは得体のしれない圧迫を受けたかのように怯んでしまう。

「な……テメェ何者だっ」

「僕はＥクラスの赤城。今はレベル１だけど、いずれこの学園最強になるつもりだよ」

　取り巻きたちが突然の最強発言にドッと笑い出す。それでも相当自信があるのか赤城君の顔には憤怒や動揺は一切なく、笑顔を絶やさないのは大したメンタルだ。

　そう、彼こそがダンエクの主人公、赤城悠馬（あかぎゆうま）。レベル１の初期値ですら異常に高いステータスを持ち、クエストを進めていけば【勇者】という強力なジョブに就くことができる。甘いマスクで１０人を超えるヒロインも同時攻略可能。色々な意味でまさに超人。

　ゲームで彼をメインキャラとして使っているときは爽やかさを保ちつつ、ストイックで向上心のある姿に好感が持てたが、ブタオとなった今はいけ好かないヤリチン野郎としか思わない。というかコイツに俺は粛清される可能性があるのか……

　見下していたＥクラスの生徒が最強を語ったことで気に障ったのか、刈谷は閉じていた目を開き、赤城君を睨む。

「冒険者がどういうものなのかも何も知らない無知野郎が……調子に乗りやがって」

「かっ、刈谷さん。しょうがないっすよ、しょせんコイツはＥクラスの雑魚だし」

　こめかみに青筋を浮かべながら怒り心頭の刈谷。慌てた取り巻きたちが宥めようとする。こいつはＤクラスの中でも頭一つ抜けて強いのだ。

「本当に最強になれるかどうか俺が直々に試してやる。そうだな……１ヶ月後でいいか」

「……」

　スケジュールを確認しているのだろうか、端末の画面を見ながら刈谷が静かな口調で挑発する。怒りに任せて暴れると思った取り巻き達は、刈谷の冷静な態度を見て安心する。

（ここまではゲーム通りの流れと同じになっているな）

　この刈谷イベントはメインストーリー上のシナリオではなく、あくまでサブイベントの扱い。強制受諾イベントではない。

　仮にこの挑発を受けた場合は１ヶ月後に闘技場にて決闘イベントとなる。そこで主人公が勝てば、このクラスのヒロイン達の好感度が少し上がり、背後にいるＢクラスの支配者イベントに発展する。受けない場合はその時点でイベント失敗扱いとなり、受けて負けた場合と同様にヒロインの好感度がやや下がる。

　ならば引き受ければいいと思うが、刈谷に勝つことはゲームを知り尽くしたベテランプレイヤーでなければ難しいという大きな問題がある。端的に言えばこのイベントは”二周目用”なのだ。

　１ヶ月という短い期間で効率よくレベルを上げ、装備を揃え、相手の武器特性とスキルを見切りつつ、急所やカウンターを狙う戦闘スタイルの確立。それくらいできてようやく勝つことができる相手なのだが――

　そういえば俺は今、ゲーム主人公ではなくブタオなのである。

　別に赤城君のこの後の選択に興味がないわけではない。だが、このイベントが進んだところでブタオに影響があるようなことは起きないだろうし、イケメン主人公である赤城君のハーレム具合が捗るか否かという問題でしかない。

　つまり「腹減ったなぁ」とか「やっぱりピンクちゃんのおっぱいデカいなぁ」などと大して変わらない事項であり、刈谷イベントなんてものは鼻をほじりながら気楽に眺めていられる状況に過ぎないのだ。

　そんな俺の心情とは裏腹に、尚も睨み合いが続く赤城君と刈谷。

「この学校には怪物がわんさかいる。１ヶ月の猶予とはいえ俺程度を倒せないようなら最強になるなんざァ……土台無理な話だ。違うか？」

「……違わない。受けて立つさ」

　背筋を伸ばし、真っ直ぐと刈谷の目を見つめて宣言する赤城君。その答えに囃し立てる取り巻きたちと、ざわざわとどよめくクラスメイトたち。３年早くダンジョンに潜ることができたアドバンテージを、たった１ヶ月で覆せという無理難題を受けるとはクラスメイト達も思ってはいなかったようだ。

「決闘はセーフティールール、闘技場で行う。死にはしないが……それでも腕の一本や二本くらいは覚悟しとけよ」

「……あぁ」

　さすが主人公。刈谷の《オーラ》を正面から受けても余裕のようだ。一方の俺はといえば、心臓を鷲掴みされたかのような恐怖を感じてビビってしまった……少しちびったかもしれん。威圧マジ怖い。

　刈谷たちが「お前の顔と名前は覚えたからな」と捨て台詞を吐きながら教室を出ていくと、赤城君はウィンクをして不安に揺れているピンクちゃんを気遣う。クラスメイトたちも心配だったのか駆け寄り、頑張ってくれと激励する。

　異性にちゃんと配慮できる上に、満ち溢れる自信で不安な空気を一変させるムードメーカー。あっという間にクラスの中心になるとは、これがカリスマか。悪役かつ小悪党のブタオと対極にいる存在と言える。

　だが、どう考えても刈谷イベントの受諾はメリットよりデメリットが大きい。最強なんてものは宣言するものではなく周りに認められるものだと思ってる俺からすれば、リスキーな挑発に乗っているようにしか見えない。まぁそこが物語の主人公と小物である俺との違いってことなのかもしれないが。

　さてと。色々と考えたいこと、やりたいこともあるので今日はもう帰ろう。自分の荷物を纏め、教室から出ようとすると――

「ちょっと」

　背後から不機嫌そうな声を掛けられる。振り向くとブタオの幼馴染であり許嫁の早瀬カヲルが腕を組みながら立っていた。

　ただ棒立ちしているだけなのに、切れ長の目に真っ直ぐ鼻筋が通った美しい顔、モデルのようなスタイルのせいで周囲の目を引く。ダークカラーの髪を高い位置で一本に縛ったポニーテールが、より清潔感を高めていて実に似合っている。

　ゲームのときのグラフィックよりも格段に美人になっている彼女に突然声を掛けられ、心の準備していなかった俺は浮足立ちそうになる。

「今日、どうするの……？」

「……」

　どうするの、とは。何か約束でもしていたのだろうか。

　ゲームではブタオが彼女に対し一方的にダル絡みをしていたような気がするが、幼馴染でもあるのでゲームには描かれていなかったやり取りが裏ではあったのかもしれない。

「何とか言ったらどうなの……」

　組んでいる腕の人差し指をトントンさせているのを見る限り、どうやら相当苛立っているご様子。

　ゲームを開始したらいきなり転移させられブタオとなった俺には、ゲーム情報以外で判断できる材料がない。そもそも、いきなり他人に入れ替わるとかハードモードすぎやしないか。

　ここで理不尽だと言ったところで何も解決しない。適当に言葉を濁し逃げに徹したほうがいいだろう。まずは色々と情報を集めるために時間が欲しい。

「今日はちょっと用事を思い出して。すまないな」

「……そう。それじゃ」

　さしてこちらに興味が無いようですぐに視線を外し、赤城君のいる集団へと戻る幼馴染。とりあえず乗り切れたようなのでここを後にしよう。

（というかこの焦燥感のようなものは何なんだ……ブタオの感情なのか？）

　イケメン主人公に幼馴染が取られてしまうことを気にしているのかね。あれだけの美人なら他の男も放っておかないだろうし、その心配も分からんでもない。

　だが、ゲーム通りならば彼女に無理に関わろうとすればするほどブタオの立場は悪くなり、その先には粛清と退学が待っている。学校を辞めるかどうかは措いておくにしても、障害となりえるこの感情は抑えておくべきだな。

　――　早瀬カヲル視点　――

　無事入学式が終わりホッとしている反面、私の幼馴染であり不本意ながら許嫁となってしまった成海颯太も最下位とはいえこの冒険者学校に合格してしまったことに、今更ながら非常に不満であると同時に歯痒い思いをしている。この学校の品格と品位を押し下げているようではないか。

（せっかく彼奴から離れられると思っていたのに）

　冒険者学校に入ったのは憧れている冒険者のように自分もなりたかったというのが一番大きい。しかし次の次くらいの目的は、彼奴と離れることができるという打算的な意味もあった。それなのに。

　小さな頃はまだよかった。性格が卑屈で捻くれていて怠惰なのもいずれ治ってくれると信じていた。

　だが中学に入ったくらいからか、いやらしい粘着質な目で――特に胸部を――見てくるようになり、ここ１～２年ではまるで私のことを己の所有物であるかのように周りに言い触らし、時にはセクハラ紛いな行為を受けて恥辱に塗れ、中学時代は常に肩身が狭い思いをしてきた。

　共に冒険者学校に合格した――してしまった――ことで最近では成海家のご両親から「カヲルちゃんの得意な剣術を颯太にも教えてあげてくれないか」と頼まれてしまい、私のストレスは日々うなぎ登りとなっている。本当は断りたかったけれども、小さな頃からお世話になっている彼らの頼みは受けざるを得なかった。

　仕方がないので稽古に付き合ってみたのの、まるでダメ。彼奴の場合、あれほど膨らんだ体ではまともに動くことはできずすぐに放り投げてしまう。稽古以前の問題だ。

　そんな訳でまずダイエットからはじめようと糖質と脂質の控えめなバランスの良い食事を組んであげた。……というのに、陰でコソコソと大量のスナック菓子を食べていたり、早朝のランニングを誘っても走る気は全くなく、あろうことかデートと勘違いし、無視して走ると癇癪を起こす始末。

　今日は共に素振りの稽古をやろうと約束していたのに……案の定やる気が見られない。この２週間、私なりに頑張ってみたものの、はっきりいって時間の無駄でしかなかった。こんなのがどうして最難関と言われる冒険者学校に合格できたのか。面接官の目が節穴でないか精密検査を勧めてやりたい。

　別にやる気が無いのなら構わない。私とて成海家ご両親にお願いされたから義務感でやっているだけ。そこに愛なんてものはない。だがもうこれくらいやればもう十分だろう。私もこれからは必死に鍛えていかねばならないので彼奴の面倒を見る余裕も無くなるはず。

　――だから最大の難題を一刻も早く解決しなくてはならない。

　ここまで私を追ってきた執念には驚きを禁じ得ないが、結婚するなど絶対に御免だ。もちろん成海家のご両親には申し訳ないとは思っている。だが私とて乙女であり恋愛によって殿方と結ばれたいという願いを持ち合わせている。彼奴の見た目は改善できる可能性はあるので目を瞑るにしても、あの向上心の無い怠惰で卑屈な性格を許容することは絶対に無理だ。

　何としても許嫁を破棄せねばならない。……が、破棄するにもあの”結婚契約魔法書”の在処を掴む必要がある。ここ何年も成海家に入って調べてはいるものの彼奴は抜けているようでなかなか尻尾を出さない。手がかりも無く進展も無い。

　あれがある限り私は彼奴に逆らえない。その内、私の体を貪ろうと卑猥な命令をしてくるのも時間の問題だ。そのことを考えると焦りと苛立ちが募るばかり。

（あぁ、彼のように勇敢で気概のある男だったのなら）

　つい先程、ガラの悪いＤクラスの生徒を追い返しクラスの中心となった男子生徒が目に入る。名前は赤城といったか。

　自信に満ち溢れたあの目、気高い立ち振る舞い。強くなろうという前向きな姿勢を見ていると、私のささくれ立ち荒んだ心も落ち着いていく。

　そして彼と彼奴との大きな大きな違いを認識させられ、再び深いため息をつくのだった。

　入学初日が終わり帰途につく。

　何の心構えもなく突然ゲームの中に転移。一体何がどうなっているのか腰を落ち着けてじっくりと考えたいので、自分の部屋があるであろう学生寮に向かって歩いているところだ。

　この冒険者学校は全国から生徒が集まってくる。そのためほとんどの生徒はこの学校に隣接する寮から通っているのだ。俺も同様に寮住まいかと思いきや――

「あんれぇ……ナルミ君だっけ。君ぃ寮に登録されてないよ？　自宅から通学してるんじゃないの？」

「えぇ……あの、ココってどこですかね。住所教えてくれませんか？」

　寮の入り口にある部屋割り表をみてもブタオの名前がなかったので寮の管理人さんに聞いてみたところ、どうやら自宅からの通学だったようだ。

　管理人さんから「まだ若いのに……」と小声で憐れみを受けつつ冒険者学校入学案内のパンフレットを手渡される。表紙を捲って所在地を見てみれば、見知った場所が書かれていた。そういえばダンエクの世界はほぼ同時代の仮想日本が舞台だった。

　元の世界でこの付近には遊びに来たことがあるが、山と海が眺められる風致公園と閑静な住宅地だったはず。それなのに校内から見える周囲の景色はビルやマンションだらけだ。ここら辺りは今深く考えも答えは出さそうなので管理人さんに礼を言い、調べてもらった自分の家とやらを目指してみることにする。

　やけに厳重で頑強そうな正門から外に出ると学校前はホテルやデパート、複合商業施設が立ち並ぶ繁華街になっていた。一見、元の世界の街並みと同じように見えるが、通行人を見れば鎧を着ていたり大きな武器を背負っている人もいるので間違いなくダンエクの世界だと分かる。

　そんな街並みを眺めながら５分ほど歩いたところで目的地の住所に辿り着く。

　家の一階部分は店舗になっており、入口上部には『雑貨ショップ　ナルミ』と大きく書かれている看板がある。雑貨屋だろうか。家の表札もちゃんとブタオの苗字である「成海」なので間違いはない。しかし車も置いてあり、どうみても俺一人で住んでいる家ではないな……

（これ入っていいのか？　でも知らない家に入るのは抵抗が……いや俺はここを知っている？）

　辛うじて記憶を引き出せたのか、目の前の建物を見ると既視感と実家のような安心感が湧いてきた。というかここブタオの実家なんだろうけど。

　しばらく店の前でうろうろしていると店の中からエプロンを着た四十路くらいの女性が声を掛けてくる。

「あら、颯太だったの。不審者かと思ったじゃない」

「えぇと……ただいま……」

　柔和な顔とスラっとした細めのスタイル。ブタオの太ったイメージとかけ離れているので母親ではないと思ったが……何とブタオの記憶がこの四十路美人が母親だと言っている！

「おにぃ。おかえり～」

　奥から小学校高学年から中学生くらいだろうか、大きなパーカーを着た童顔の髪の短い女の子が髪留めをしながら出てきた。これまた可愛い子だが……俺を「おにぃ」と呼ぶということは、この娘がブタオの妹だというのか！

「そんな目を見開いて……どうしたの？」

「あ、いや。何でもない」

　美形なサラブレッドからロバ……いや豚が産まれるものなのか。この世の神秘に触れた気分になる。

　そんな不思議な感慨に耽りながら、ふらふら家へと入る。母娘は冷蔵庫の前で今日のご飯をどうするか話し合っていて、特に俺のことは気にしていないようだ。

　俺の部屋は……階段を上がって２階の奥か。

　少しずつブタオの記憶を引き出すコツのようなものが分かってきた。どうやら思い出そうとするプロセスがいつものそれと違うようだ。別の人格を意識して覗き込むような感じなので今まで勝手が分からなかった。

　普段の思考は主体が俺だし、すぐに引き出せる記憶も元の世界の俺と特に変わらない。だが早瀬カヲルや家族など思い入れがある人物と話したとき、無意識的にブタオの感情がフラッシュバックされることがある。それらは俺の心情とは明確に違うので分かりやすい。

　例えば早瀬カヲルを思い浮かべたときの焦燥感だったり、先程の母娘を見た時の安堵の感情。俺には美人の恋人なんておらず、家族もいなかったので唐突にあふれ出す経験のない感情に戸惑いを感じた。

　これらを踏まえると俺はただ転移してブタオの体に入り込んだのではなく、俺という人間にブタオの記憶や感情が付随し混ざりあって同化している、というのが正解かもしれない。

　突然異世界から知らない人に乗っ取られたブタオ君にはすまないと思うし、俺としてもさっさと出ていってやりたいのだが――というかダンエク運営が全て悪いのだが――出ていく方法がそもそも分からない。

　今後出ていくにも、もしくはこの世界でブタオとして生きるとしても、情報を色々と集めて上手く乗り越えていかねばならない。

　さて何から手を付けて行こうか。

　\*・・\*・・\*・・\*・・\*・・\*

　ブタオの部屋は北東に位置しているため、日当たりがそれほど良くないのか薄暗い。中に入ると床が古いせいなのか、はたまた重い体重のせいなのか少々軋む。

　記憶を取り出しながら見渡せば何の違和感も無く、むしろ酷く落ち着く。突然の転移で勝手がわからず今まで何気に緊張していたのだと初めて気づく。ベッドの上に荷物を投げ捨て、ほっと一息……というか。

（汚ねぇ部屋だな、オイ！）

　違和感は確かに無いが、そこら中に脱ぎすてた衣類や菓子袋が散乱し、書籍や漫画が積み重なって半分ごみ屋敷と化しているではないか。仕方がないのでテレビでも付けながら片付けるとする。

　テレビ画面には恰幅のいいオッサンが国会の壇上で何やら話している。画面下には名前と上院議員で伯爵という説明が書かれている……伯爵ねぇ。

　「ダンエク」の世界設定は日本を模したものになっている。だが模したものというだけで政治システムや国際関係、国民の考え方は民主主義の現代日本と大きく異なる。強権的で軍事色が強い政治に、貴族制を採用しているなど、どちらかといえば戦前の大日本帝国に近いだろうか。

　まず政治システムだが、貴族院とも呼ばれる貴族のみの上院と、庶民院とも呼ばれる庶民でもなれる下院で政治を行っている。貴族は領地を持っているわけではないが単なる称号というわけでもなく、司法では裁かれないとか爵位に応じた政治力を行使できるなど幾つもの既得権益や強力な社会的特権も持っている。

　学校にも貴族やそれに仕える士族が何人もいるので対応する際は注意が必要だろう。流石に切捨御免なんてないと思うが。成海家は……どうみても平民だな。

　そして調べてみれば、ダンジョンが登場する明治初期くらいまでは日本と酷似していることが分かる。戦国時代の武将や徳川幕府の将軍の名前も教科書や端末で参照した限りでは同じだし、明治維新も知っている通りだ。だがその後にダンジョンが登場したことで現代日本になる過程が大きく枝分かれし歴史が変わっている。

　この国の皇族や政治家はどうなっているのか調べてみたが明治以降では名前が一人も一致しない。ダンジョンが原因で継承権者が変わったのか、あるいはこの国は明治以前の日本をモチーフにしただけで全く別物の国なのか。今のところ後者のように思えるが、もう少し情報を集めたいところだ。

　チャンネルを変えてみる。するとどこやらの冒険者くずれのテロリストが政治家を誘拐したというニュースが出てくる。これも国内の話。元の世界の日本と比べ随分と治安が悪い。

　本来マジックフィールド内でしか効果がない肉体強化だが、そのマジックフィールドはこの世界の十数年ほど前に人為的に作ることが成功している。それ以来レベルアップを繰り返し、銃弾すら効かなくなった冒険者くずれによる武力の行使が問題となっているのだ。

　いくつものテロリストが冒険者くずれを取り入れ、その武力を背景に政治的主張をする一方、国もそれに対抗して冒険者を育成し配備。外交や諜報分野では超人的肉体を持った冒険者が暗躍しているという。世はまさに冒険者時代なのだっ！　なんつって。

　スポーツなどはマジックフィールド検知システムを導入して肉体強化を排除し、公平なことをアピールしているようだ。そりゃ巨大な龍をも倒す肉体でサッカーなんてやられたら……それはそれで見てみたい。

　テレビを消して今度は落ちていた新聞を見てみる。日付は……四年前？　腕の端末で今日の日付を確認すると、これは昨日の新聞ということが分かる。

　四年前といえばダンエクが発売した頃か。何か関係があるのか。

　時間が巻き戻ったなら株価チートできるんじゃないかと思い、新聞の経済面を見てみる。いくつか見知った会社があるにはあるが、いわゆる財閥系列会社が経済を牛耳っていて同じ名前がついた会社名ばかり。日経平均も数値がかなり違っていて元の世界の知識は使えないことが分かった。４コマ漫画を見てみると……お、ボコちゃんがやってる。

　次に部屋に置いてあるＰＣでインターネットを見る。普段通りのニュースサイト、動画サイトは特に変わっている箇所は見つからない。しかし色々なサイトを見てみると何やらおかしいな事に気づく。先程から下着を着てポーズを決めているグラビアっぽいのならヒットするが、全裸画像が一向に見つからない。検閲が厳しいのだろうか。こんなに思想と自由を制限してたら国が発展しないと思うのだが如何なものか。

　――以上のことを踏まえると、この国は戦前の日本の政治体制がそのまま続いた仮想日本……のようなものと言える。明治までは日本の歴史通りなのに、世界にダンジョンが現れた大正から昭和初期くらいから歴史が大きく変わっていることが分かる。

　第二次世界大戦で日本は決定的な敗戦を免れてはいるものの、領土は今の日本と同じ。どうやったら無条件降伏を受けずに元日本領を明け渡したのか疑問だ。

　ゲームでは単なるワールド設定に過ぎなかったし、そういうものだと割り切っていた。だがそんな世界に転移したとなると話は変わってくる。

　ダンジョンが発見されたことでこういった仮想日本が出来上がったというのはゲームの裏設定集を読んでいるようで調べていて面白いが、問題はゲームが現実となったこの世界が、とても面倒で不安定な状態になっているということだ。主義主張を持った超人共が跳梁跋扈する世界なんてどう考えてもおかしなことなる。

　冒険者は冒険者ギルドの管理下で取り締まられているとはいえ、テロリスト、もとい冒険者くずれのせいで政情や治安が悪化している。そも、貴族がのさばるこの国では人権すらあやふやの可能性すらある。こちらの社会の常識を元の日本と同じと考えて人権だ、裁判だ、警察だ、などという考えは早々に修正すべきだろう。

　そして忘れていけないのは、この世界設定が「ダンエク」だということ。つまりダンエクのシナリオやイベントが現実に冒険者学校、延いては世界各地で起こりえるということだ。

　早速ゲーム序盤でお馴染みの「刈谷イベント」が発生したわけだが、あの流れは全て俺の記憶通りの展開となった。ゲームで起こったことがこの世界でも起こるという確たる証拠と言える。まぁ刈谷イベント程度ならはっきりいってどうでもいい。あの結果がどうなろうと俺に大した影響があるわけでもないし。

　だがダンエクではシナリオによっては諜報部隊との抗争や国家レベルの戦争、ダンジョン一帯が更地になるなんて危険極まりないイベントもある。そんなことが起きたら正直手に負える気がしない。

　そして困ったことにイベント巻き込まれ体質の「主人公」が同じクラスにいるのも問題だ。個々の破滅的なシナリオは、そちらの進まないようにある程度誘導できるかもしれないが、ゲームのメインストーリーで起こる事象については不可避かもしれない。

　ゲームならそういった危険なイベントは盛り上がる要素となるのに、それが現実化すれば厄介でしかないというのは皮肉でしかない。

　今後起きるかもしれない様々なトラブルに対応できるよう、さっさとダンジョンに潜ってレベルを上げておくべきか。明日と明後日は学校が休みで課題があるわけでもない。たっぷり潜る時間はある。それにダンジョンに行って遊んでみたいしな。

　そのようなことに思いを巡らしながらも１時間程でようやく片付く。部屋の片隅には紐で縛られ分別されたゴミが積みあがっている。また別の日にゴミに出せばいいか。

　あと片付けているときに見つけたのだが、何だろうなこの”結婚契約魔法書”ってのは。普通の色紙のように見えるけど、魔法書というからには何らかの魔法が掛かっているのだろうか。

　不思議に思いブタオの記憶を探ってみると、どうやら小さな頃に早瀬カヲルと結婚の約束した手形のようなものらしい。よって魔法書でも何でもない。「大きくなったらブタオ君のお嫁さんになってあげるっ！」って感じのやつかな。微笑ましいね。

　思い出の品なら捨てるのもどうかと思うのでタンスの奥にでもしまっておくとしよう。

　一頻り部屋掃除が終わり、時刻は正午を少し回ったところ。時間はたっぷりあるのでダンジョンに潜ろうと思う。が、その前に腹が鳴きやまないので腹ごしらえをしておこう。

　ブタオの記憶を見る限り朝食で結構な量を食っているはずなのに、眩暈すら覚えるほど無性に腹が減る。《大食漢》とかいうスキルがこの異常な食欲を引き起こし、ブタオをこんなに太らせたのではないかと疑っている。

　ダンジョンダイブをするにあたりこの体ではまともに動けるとは思えないのでダイエットは必須。食事は控えめにしておきたい。

　それにも拘わらず――

（ちょっと、これは流石に多いのではないかね）

　目の前に、ご飯とおかずが山のように積まれている。ざっと２０００キロカロリーはあるだろうか。しかも揚げ物と炭水化物だらけで野菜はほぼ無し。太ってくださいと言わんばかりの量とメニューだ。

「あの、悪いけどこれからは量を少な目にしてくれないかな」

「大好物の唐揚げとコロッケなのに。風邪でも引いたのかしら」

　頬に手を当て心配そうに聞いてくるブタオの母親。昼飯を用意して貰っておいて何だが、これだけの量を毎日食ってるならそりゃ太る。先程からお腹がグゥグゥと鳴り、目の前のものを平らげよと訴えかけてくるが精神力で抑え込む。

「ダイエットしたいからさ。野菜中心がいいな」

「おにぃ、いつから野菜食べれるようになったの？」

　妹が垂れ気味の眉尻をさらに下げて疑問を呈する。まずいと思い、急いで記憶を引き出してみると……どうやらブタオは果物すら食べられなかった筋金入りの野菜嫌いだった模様。ここは適当に誤魔化すしかない。

「俺も冒険者学校に入ったわけで、意識を変えていこうと思ってね」

「確かに……ちょっとぽっちゃりしてるかしら？」

「おにぃはそのくらいが丁度いいと思うけどな～」

　身長１７０ｃｍそこそこなのに体重も余裕の１００ｋｇオーバー……１２０ｋｇくらいあるかもしれない。控えめに言っても「ぽっちゃりどころじゃないだろ」というツッコミを押し殺し、愛想笑いをしておく。

「でも、おにぃはもうダンジョン行くんだ」

「さっさとレベル上げようと思ってな」

「……ふ～ん」

　目の前にいるのはブタオの妹とはとても思えない可愛らしさを誇る、喜怒哀楽が分かりやすそうなショートカットの童顔女子。名前は成海華乃（なるみかの）。現在中学三年生で来年はブタオと同じ冒険者学校に行きたいと受験勉強を、そして武術スクールに通って頑張っているところらしい。

　その妹が何やら俯いてブツブツ言い始める。もしかして疑われている？

「……おにぃ。私もダンジョン連れてって」

「へ？　でもお前まだ中三だろ」

「華乃、無理を言っちゃ駄目でしょ」

「ぶーぶー！　行きたーい！」

　ダンジョンに行きたいと駄々をこねる妹。ダンジョン入場には１５歳未満は原則禁止、中学生は不可という法律がある。ダンジョン浅層の１～２階ならば中学生でも勝てる敵ばかりだけれど絶対安全というわけではない。国は国民を守るために年齢による入場制限をしているのだ。

　本来は１５歳ではなく１８歳未満が禁止だったのだが、人工的なマジックフィールド――ＡＭＦ（Ａｒｔｉｆｉｃｉａｌ　Ｍａｇｉｃ　Ｆｉｅｌｄ）と呼ばれている――の登場により、肉体強化を利用した犯罪やテロが頻発し秩序が混乱。より多くの優秀な冒険者を幅広く育成したい国は法改正し、入場制限を１５歳に引き下げた経緯がある。

　それでも１５歳未満かつ中学生である妹はダンジョン入場の許可が下りることはないが。

　目の前で母が妹を宥め、その妹が甘えてくる。家族がいない俺にはこの光景がとても温かく、儚いものに見える。

　小さな頃は家族がいたがほとんど記憶に無く、こんな感じだったのかなと目の前のやり取りを見て思い出す。体を乗っ取ってしまったせめてもの罪滅ぼしとして、ブタオが心から愛している家族は何としても守ってやりたいし何かしてやりたいものだ。通常なら入ることは出来ないダンジョンだけど抜け道は幾つかあるしな。

「しばらくは無理だけど、良い子にしてたらいつか一緒に行くか」

「えぇーやったー！　じゃあ約束だよ」

　余程ダンジョンに入りたかったのか、連れて行く約束をするとご機嫌で鼻唄を口ずさみながら自分の部屋へと戻っていく妹。母親も店番のため戻っていった。

　去っていく彼女たちの後ろ姿を見ながら、そっと安堵のため息を吐く。

　先程は中身を怪しまれはしなかったものの、いつもと違うと思われたはず。いきなり「中身が入れ替わっちゃいましたーてへぺろ」なんて言ったところで頭がおかしくなったと心配されるだけだし、言うつもりはない。

　家族に余計な混乱を招かぬよう、そしてこの世界で生きていけるように、普段のブタオがどんな人間でどんな喋り方で癖があるのか、記憶を取り出し情報を整理しておく必要がある。独り身が長かったので、他人と暮らしていくということに戸惑い、頭が回っていなかった。

　しかしながらブタオの記憶や感情は意識的にも無意識的にも表に出てきているので、完全に別人になったわけではない。”新生ブタオ”という存在になったというべきか。本当に妙なことになったものだ。

　疑問に思うこともある。見た感じブタオと家族の関係は良好だし、特に心配もされていない。これがどうして学校であんな風に自意識過剰で破滅的な性格になったのか。早瀬カヲルに対する執着が原因なんだろうが、果たしてそれだけなのか。

　ゲームでのブタオに関してはひたすら嫌な奴に描かれているだけので情報が不足している。学校ではなるべく目立たないよう、また早瀬カヲルには出来るだけ絡まないよう慎重にいきたいところだ。

　腹八分どころか五分目すら届いていない少な目の昼食を終え、タンスにあった中学時代のジャージに着替えてダンジョンへ行く準備をする。太ももや腹がピチピチになっていることから、中学時代より更に太ったことが窺える。まったく。

　魔石入れのリュックを背負い階段を降りると母親が店のレジ前でゴソゴソとやっていた。

「今からダンジョン潜ってくる」

「手ぶらじゃない。何も持っていかないの？」

「部屋にバットあったからそれを持っていくよ。今日は１階しか行かないからそれで大丈夫」

　ダンジョンの１階は条件次第で隠しモンスターも出現するが、基本的にはスライムしかでないためバットで十分だろう。オリエンテーションのときに学校で武器レンタルが出来るようになるので、そのときに良いのがあれば借りてみよう。

　これからの起きるであろう危機から自分と家族を守るためには、まず何よりも俺が強くなくてはならない。先は遠いかもしれないが気合いれていこう。

　\*・・\*・・\*・・\*・・\*・・\*

　再びダンジョンのある学校にダイエットを兼ねて走りながら向かう。

　ゆっさゆっさと脂肪を揺らしながら頑張って走ろうとしているものの、そこらを歩いている人よりやや速い程度の速度しか出ない。家から学校までは歩いて５分程度しかない距離なのに、半分ほどの距離で息が上がり、汗もだくだく。このままではダンジョン内で体力が尽きそうなので結局歩くことにした。急に動くものだから体がビックリしているのかもしれない。

　それにしてもこの辺りは本当に人が多い。

　元の世界ではこの辺りは田園都市で静かな住宅街や公園が多くあった記憶はあるが、こちらの世界では全国から冒険者やダンジョン関連企業が集まり、人口８０万人以上の大都市となっており巨大経済圏を作り上げている。日本にはここにしかダンジョンがないためだ。

　また地価も高騰しているようでワンルームの家賃も東京都心を超えている。裏路地にあり大して広くはない成海家の家ですら地価は相当なものになっているようだ。

（買い食いポイントも多い。こりゃ誘惑に負けないようにしないと）

　周りの店を眺めながら、ダンジョンへ入るにはどうすべきだったか思い出す。

　通常、ダンジョンに入るには色々と面倒くさい登録と面接、何回かの講習を受け、その後に筆記試験を受けなければならず、その方法では数ヶ月掛かる。一方、冒険者学校の生徒は国による厳重な審査をすでにパスしており、端末見せるだけで即冒険者証が発行されると担任の先生が言っていたのを思い出す。

　なのでまずは冒険者ギルドへ向かおう。

　冒険者ギルドは異世界ファンタジーではお馴染みの組織だが、この世界の冒険者ギルドでも似たようなことをやっている。冒険者の登録、管理やアイテム売買、クエストなどもここで発注と受注が可能だ。

　ファンタジーの冒険者ギルドとの違いは、まずなんといっても利用者が多いこと。冒険者登録数は１０００万人を超え、毎日１０万人以上が利用する巨大組織だ。冒険者ギルドの建物内には民間企業が研究開発や出店していたり、病院や図書室などの公共施設があり、冒険者以外の利用客も多い。

　またダンジョン内外における怪我人の治療や治安も管理したり、冒険者による抗争においてもギルドに所属する高位冒険者を派遣して警察や自衛隊のような役割も担っている。そのため冒険者ギルドの建物は４０階を超える近代的な高層複合ビルとなっている。

　そんな冒険者ギルドという名の巨大ビル入り口で立ち止まり、思わず見上げてしまう。

「校舎からも見えていたが、でっけぇな……」

　人通りが多い中で立ち止まるのも何なので、エントランスからそそくさと中へ移動するとしよう。

　中はレンガ調のモダンな造壁と大理石の床になっており、数百人が動き回っても余裕があるほどの大きな空間があった。左側には銀行のような受付がずらりと並び、右側には多数のエレベーターやエスカレーターでせわしなく移動する人たちが見える。

　確かここでも絡まれるイベントがあったが、今の時間は比較的人通りが少なくガラの悪い冒険者はいないようだ。

　新規受付は……あっちか。

「いらっしゃいませ。ご用件は何でしょうか」

　人当たりが良さそうな受付嬢がニコニコと聞いてきた。しっかり教育ができている。ファンタジー小説のように冒険者の見た目やランクで態度をコロコロ変える受付嬢なんて流石にいないか。

「新規登録したいのですが」

「冒険者学校の生徒さんですね。その腕の端末ＩＤ番号と名前をこちらに記入してください」

　腕にしている冒険者学校の端末を見た受付嬢は登録書類を渡してきた。端末ＩＤはこれか。

「こちらが冒険者証となります。冒険者学校の生徒さんなので登録料は掛かりません。冒険者階級は９級からとなります。冒険者に関することはこのマニュアルに書いてありますが、何かわからないことがありましたらいつでもいらしてくださいね」

　以降はこの冒険者証か腕の端末を入り口にある機械にかざせば中に入れるようになる。冒険者証は身分証明書にもなるので大事にリュックへしまっておこう。マニュアルはまた後で読めばいいか。

　それではダンジョン入口へ向かうとしますか。ワクワクが止まらないぜ。

　――ダンジョン。

　大正の初め頃、突如現れた異界への入り口。

　内部と外部の往来は可能だが電波や光は行き来できないため、入り口の境界面は真っ黒。空間的に別物。異空間なのである。

　発見当初は地獄だの鬼が出るだの、はたまた神隠しされるだの様々な理由で恐れられていた。しかしモンスターを倒したときに落とす魔石がエネルギーになると分かると、我が国は戦争そっちのけで軍を動員し、ダンジョン攻略に動いた。

　最初のうちは銃剣をメイン武器にして深層を目指していたが、そのうち銃が効きづらいモンスターが増えて軍の被害が甚大となり、一定階層以上の攻略が止まってしまう。

　だからといって国の上層部はエネルギー資源である魔石や未知なる素材を諦められるわけがなく、政府主導でダンジョン攻略に向けて研究、開発し、大きく力を注ぐことになる。

　軍だけではなく広く募った民間人――後に冒険者と呼ばれる――も育成し、レベル上げを支援。そのため法整備や育成のための教育機関――後の冒険者学校――や行政改革を行いダンジョン省庁を創設、多くを巻き込んで再び攻略を開始する。

　世界では貴重なエネルギー資源が産出されるダンジョンの支配権を巡り、紛争や内戦、国家間戦争なども起こり多くの難民が生まれたが、幸い日本には一つだけだが国内にダンジョンが現れ、他国から狙われることなくエネルギー資源の確保ができた。

　ダンジョンで産出された魔石は、海外頼みだった日本のエネルギー事情を大きく改善させ、世界に誇る魔石エネルギー企業もいくつも誕生しエネルギー輸出国へと発展。経済成長にも大きく貢献した。

　ここまでは日本も世界も順調だった。

　今から１５年前。フランスのとある民間企業が一時的だが人為的なマジックフィールド作成に成功したと発表。

　本来、肉体強化が現れる範囲はダンジョン内と入り口から１５０ｍ程までしかなかったのだが、この発明により場所を問わず至る所で肉体強化が発揮できるようになった。これにより世界は良くも悪くも新時代へと強制移行することとなる。

　考えても見てほしい。銃弾も効かず、剣の一振りで大岩をも砕き、走れば１００ｍを数秒で駆け抜けるような超人共がいる世界を。

　肉体強化は農業や建設業など経済面で利益も得たが、当然のごとくテロリストや政治、宗教団体にマジックフィールドを悪用され、ついには米国大統領が殺される事態が起こった。

　武装したボディーガードが多くいたにも関わらず、たった一人のテロリストによって大統領とボディーガードごと剣でぶった斬られるというショッキングな映像が流れ、世界中の人々を震撼させた。

　それに目を付けた国や組織は多額の金を積んで冒険者を雇い入れ、国家間紛争にも投入。工作、諜報、暗殺部隊要員にも使われ、戦争、外交のやり方が大きく変化。この頃から政治、宗教、傭兵組織が次々に表舞台に立ち、各国の安保にも深刻な影響を与え始める。

　国連によりマジックフィールドとダンジョンは悪用阻止のため厳格に管理されることになったが、それでも未発見のダンジョンを使われているせいか、冒険者による犯罪は後を絶たない。対応は後手に回っている。

　――という感じのが冒険者マニュアルに書いてあった。

　これがここ十年のことだというが……いやぁ深刻だね。この辺りは家でもさくっと調べたが、米国大統領までマジックフィールドの被害に遭っていたとは。

　ゲームのときはこういう世界観なんだなと頭の片隅にでも置いておき、ダンジョン潜りつつ能天気にヒロイン攻略と冒険者無双を楽しんでいれば良かったんだけども。

「そうえいばクラスメイトにも他国のエージェントがいたっけかぁ」

　後に局地戦争や工作員と戦うためのトリガーとなるイベントキャラがＥクラスに在籍しているのだ。彼女と行動を共にして降りかかるイベントをクリアしていけばダンジョン攻略において大きなアドバンテージが得られるが……正直関わりたくない。

　暗鬱になりかけたが余計なことは考えず、今はダンジョンダイブを頑張るとしよう。

　\*・・\*・・\*・・\*・・\*・・\*

　ダンジョン入口は、地下１０階、地上１８階の冒険者学校校舎の１階部分にある。

　校舎は中等部と高等部、大学が共用。中等部は１階と２階、高等部は３階から５階、その他は冒険者大学や研究機関、民間企業などが使用している。

　元の世界では小山の麓に位置していたであろうダンジョン入口だが、貴重なマジックフィールドを隈なく利用する関係上、小山を半分取り除きダンジョン入口を中心とした巨大建造物を作り上げた。それにはダンジョン資源に対するこの国の執念を感じる。

　ダンジョン内に入るにはまず冒険者ギルド前の広間に行き、そこに駅の改札口のように一人ずつ入るための機械があるので、冒険者証、または腕の端末を複数ある機械にかざす必要がある。俺の場合は学校で貰ったウェアラブル端末をかざせばいい。

　ギルド前の広間は一日で数万人以上が出入りするため、多くの冒険者でごった返している。

「しかし派手な人が多いな」

　革製の軽鎧ならまだ地味なほうで、ピカピカに磨かれた金属製の鎧や極色彩のローブ、マントを装着したり、巨大な武器を引っ提げている冒険者もチラホラみえる。この世界の時代設定は現代だが、周りの人だけみるとファンタジー世界そのものだ。俺のようにジャージにバットなんて人はよほどの初心者だけだろう……というか俺だけか。

　改札から中へ入り、行列の流れに沿ってゆっくりと歩きながらダンジョン入口前に立つ。縦横１０ｍほどの巨大な入り口だ。境界面は光を何も反射しないため驚くほど真っ黒。黒すぎて異様である。入るときはゲームではなかったヌメっとした感覚が体を包みこみ、思わず息を止めてしまう。

　数秒で境界を通り過ぎると中は１００ｍ四方ほどの広間になっていて、広間の端のほうには外界と太い配線で繋がれた通信施設がいくつも設置されている。電波は届かないが有線なら外との通信が可能なようで、入り口には外からケーブルの束も通されている。ダンジョン内でも端末を使えるようにするためだろう。

　休憩所や売店もあるが、どの席も埋まっていて非常に混雑している。すぐそこが入り口なのだから、ここで休むくらいなら外へ出て休んだほうがマシと思ってしまうのは如何なものか。

　そこからも人の流れに逆らわず分岐もない一本道を進む。

　内部は巨大な洞窟となっており、地面は平らだが天井や側面は巨大な炭鉱のようにゴツゴツとしている。光源がないにもかかわらず明るい。壁が発光しているわけでもなく、透過する光が壁全体から降り注いでいるようだ。

　モンスターは……全くいない。モンスターがポップした瞬間に近くにいる冒険者が殺到し瞬殺しているせいだろう。とにかく人が多すぎる。これではろくに戦えないためさらに奥へ進む。

　入り口から１時間ほどかけて２ｋｍほど歩いただろうか。ダンジョン２階へと続くメインストリートからわざと外れ、人通りの少ない場所へ向かう。ここに来るまでいくつか分岐があったが、学校の端末にはダンジョン内で使えるＧＰＳ機能に加え、自動マッピング機能もあるため浅層では迷うことはない。

　そしてどうやらこのダンジョンはゲームのときの内部構造と全く同じなようだ。今後のダンジョンダイブも計画が練りやすくなり捗ることだろう。

　逆に誤算もある。ここまで来るのに１時間も掛かるとは思わなかった。マジで人多すぎだろ。毎回こんな人がいる場所を通るのは億劫だ。今後のダンジョン計画をどう修正すべきか考えながらゆっくりと歩いていると、目の前に黒い靄が現れる。モンスターがポップする前兆だ。

　靄が消え、かわりに出てきたのは２０ｃｍほどの大きさの薄青の塊、スライム。

　モンスターはポップした瞬間から数秒ほど動かないという特性がある。その特性を利用し隙だらけのスライム目掛けてバットを振り下ろすと、スライムはゼリーが砕けるようにバラバラに散った。

　スライムの破片も十秒ほどで靄となって消え、後には小指の爪ほどの大きさの魔石だけが残った。このくらいの魔石だと買い取り十円ってところだろうか。時給効率は物凄く悪いが、これだけ人がいればしょうがない。

　ゲームにおいてスライムはモンスターレベル１であり、俺もレベル１なので経験値は１００％入る計算になる。自分のレベルより下のモンスターを倒すと経験値が減り、逆に自分よりレベルが高い場合は経験値ボーナスが貰える仕組みだ。あくまでゲームと同じならば、だが。

　レベル２になるためにはレベル１のモンスターを１００匹以上倒さなければならない。さくっと倒してレベル２になる予定であったのだけれど、ポップ待ちしているとかなり時間がかかりそうだ。

「もうちょっと奥へ行けばスライム部屋があるんだったな……」

　ダンジョン１階の北東には、スライムを３匹を集めると合体して大きな特殊個体に変化する小部屋があり「スライム部屋」とも呼ばれている。経験値も普通のスライムの１０倍で、さらにモンスターレベルも２のため経験値追加ボーナスも貰えてダブルで美味しいのだ。ゲーム開始時はまずこの合体スライムを倒すのが攻略セオリーとなっている。

　先程の場所からさらに３０分ほど歩き、スライム部屋近くまで来ることができた。もう周りに人がいないためかスライムが瞬殺されることなく疎らに見える。

　スライムは人を見つけてもこちらが攻撃を仕掛けない限り攻撃してこないパッシブモンスターなので、軽くバットで叩いてヘイト（※１）を溜め、こちらに注意を向ける必要がある。

　よし、やってみるか。

　手筈通りにスライム３匹のヘイトを集めてスライム部屋へ駆け込むと……

「おぉ合体が始まった」

　薄い水色をしていたスライムは一つにまとまると数秒ほどで色が変わり、より深い青のスライムへと変化する。気持ち動きが早くなったか？

　合体スライムは敵を認知次第、積極的に攻撃をしかけてくるアクティブモンスターのため注意が必要だ。元のスライムの重さは２～３ｋｇほどだったが合体後は１０ｋｇ近くなり、その分、二回りほど大くなる。時速数十キロでバウンドして腹に飛び込んでくる攻撃を喰らったらその場で悶えるほど痛いだろう。まぁ俺には分厚い脂肪があるから平気かもしれないけどね。

　初めは警戒し、少しの間だけ合体スライムの攻撃パターンをみていたが、どうやらゲームと同じく真っ直ぐにこちらに飛び込む単調な動きしかしないようだ。ボールを避ける感覚でスライムの動きを予測し、半身ずらしてバットを叩きこむ。

　普通のスライムは芯に当たれば一撃で倒せたが、合体スライムになると二発以上当てないと倒せそうにない。それほど難しい相手ではないので問題はないが。今日はレベル２になるまで頑張るとしよう。

　休み休みで数時間ほどスライム部屋を利用して狩りを続ける。合間に近くを散歩してみたものの、合体スライム狩りをしている冒険者は俺以外に見当たらない。モンスターレベル２としては倒しやすく人気のモンスターなのだが、もしかして知られてないのだろうか。

「お、レアドロップゲットォ。ラッキー！」

　スライムリング。鈍く光る赤銅色。ＶＩＴ＋２の効果が付与されている指輪だ。気休め程度しか生命力が上がらないがこんなのでも序盤はうれしいものだね。サイズはこの太い指よりさらに大きいが、マジックアイテムは装備すれば装備者に合わせて大きさが変わるため気にすることはない。

　その後も合体スライムを狩り続けてトータルで１０匹ほどだろうか、ようやくレベルアップが来た。初めは体から一斉に熱がこみ上げ酔った感覚が気持ち悪く、調子を崩したのかと思ったが、すぐに治まり体がスッと軽くなる。

　体の動きも僅かに良くなった気がする。ステータスも上がってるはずだが確認するには冒険者ギルドの鑑定所か、１０階の隠し部屋にあるストアにいく必要がある。鑑定所でステータスを鑑定すると端末のステータスも更新されてしまうので、急激なレベルアップの仕方をすると目立つので避けたほうがいいかもしれない。まぁレベル２や３程度なら変に思われないだろうけど。

「しかしレベルアップは全能感がでるな、癖になるというか。ってもうこんな時間か」

　端末から時間を見れば、現在すでに夜７時を回っている。腹も減ったし足も疲れた。今日は終わりにして家に急いで帰ろう。

（※１）ヘイト

モンスターからの敵対心のこと。モンスターはヘイトが高いプレイヤーを優先して狙うため、ボス戦などでは後衛にターゲットが行かないようヘイト管理には注意を払う必要がある。

　初めてのダンジョンダイブを終えてヘトヘトになりながら家路につく。

　合体スライムはそれほど労せず倒せたのは良かったが、往復で３時間ほど歩いたので足がヤバい。というか……冒険者学校に入るというのに体を全く鍛えてなかったというのはどういうことだ、ブタオよ。

　玄関を這うように進みやっとのことで靴を脱ぎ捨てる。すぐにでも寝たいところだが、飯を食えと胃がうねりを上げるので茶の間に行くとオッサンが飯を食っていた。一見二十代かと思うような気の優しそうなイケメンだが、よく見れば目尻にシワも刻まれ、うっすらと白髪も生えているので四十代だと分かる。この人はブタオの親父で『雑貨ショップ　ナルミ』のオーナー兼店長。記憶は取り出してあるので対応も大丈夫……のはずだ。

「颯汰。もうダンジョンに潜ったんだってな」

「まだスライムしか倒してないけどね」

　片方の眉を上げ興味深そうに聞いてくる親父。この表情の豊かさは妹に似ているな。

「俺も冒険者稼業で食っていけたらいいんだけどなー。何か面白いもの拾ったらうちの店に置いてくれよ」

　親父は昔、冒険者をしていた経験があり現在はレベル４。今でもたまに飲み仲間と潜っていて４階まで行ったことがあるそうだ。だがその程度では食っていけるほどの収入には至らず、かといってこれ以上の探索やレベルアップには命がいくつあっても足りず。冒険者稼業は才能が無ければとても割に合わないという。

　それでも冒険者に未練があり、一念発起して冒険者知識を活かせる冒険者グッズの小売店を開いて今があるらしい。

　ビールをちびちびしながら「専業で食っていける冒険者なんぞほんの一握りなんだぞ」とか「冒険者学校に受かるほどの才能はあるはずだから頑張ってくれ」などと再びぼやき始める。ブタオに冒険者の才能なんてあるとは思えないし、俺にはゲーム知識しかないけども。

「まぁ自分のペースで学校もダンジョン潜りも楽しんでいくさ。お宝見つけたら親父の店に置くから期待していてくれ」

「男はデカい夢もたないとな！　はっはっは」

　明日と明後日は休みだしダンジョン潜る時間はたんまりある。どうやって攻略していこうか、などと考えつつ飯のお代りは……やめておこう。

「おにぃ、冒険者学校ってどんなだった？」

　隣でそば耳を立てつつ飯を食っていた妹が次は私の番だと興味津々に聞いてくる。

「どうって。施設は凄かったな」

「凄いってどんな？　あとダンジョンはどうだった？」

　俺がこの世界に飛ばされたのもブタオが入学したのも今日のことで、まだ施設も利用したことはない。ゲームではよく利用してたけどな。

「施設は遠くから見ただけだ。来週にあるオリエンテーションで説明を受けてからしか使えないっぽいぞ。ダンジョンもまだ１階しかいってないから何とも言えん」

「へぇ……私も早くダンジョンいってみたいなぁ。市で募集してたダンジョン体験ツアーはあるけど、あれって指導員の後ろついていくだけで戦っちゃダメだし。参考にならなそう」

　妹は来年の冒険者学校受験のためにダンジョン情報を色々仕入れたいようだ。ブタオの記憶を見る限り、冒険者学校入学試験は学力、運動能力に加えて潜在能力を見るようだが……潜在能力って何だ？　初期スキルや初期ジョブのことだろうか。

　ダンエクにおけるスキルは、特定のジョブに就いてジョブレベルを上げれば覚えることが出来る。それとは別にキャラメイク時に初期からランダムでスキルが付いている場合があり、ブタオの場合は《大食漢》というよく分からないスキルを最初から覚えていた。

　ジョブに関しても初期時に【ニュービー】ではなく、レアジョブの場合がある。しかしこれに関してデメリットもあるため一概に良いというわけではない。【ニュービー】はジョブレベルが最大となる１０レベルで貴重なスキルを覚えるためだ。しかも他のジョブから【ニュービー】にだけはジョブチェンジできないため、ある意味特殊なジョブともいえる。

　初期スキルで良いスキルを引けば多少序盤で有利に立てるとはいえ、入学においてそこまで優遇するほどのものではなく、初期ジョブにおいても【ニュービー】であろうと無かろうと一長一短だ。どちらも優遇するほどのものでは無いと思う。

　そもそもの話。この使えない初期スキルと、とても鍛えてるとは思えないこの体で難関と言われる冒険者学校に受かっている時点で大量の疑問符がつく。何か秘密があるのだろうか。もしかしてめちゃくちゃ頭が良いとかだったり。

「まぁ慌てるな妹よ。兄ちゃんもまだ入学式を終えたばかりだ。けど試験に関しては俺のほうでも探っておくよ」

「ほんと？！」

「冒険者学校の試験ってアレだろ、コネがいるんじゃないのか」

ビール片手に親父が聞いてくる。

「コネって、おにぃが受かってる時点でコネなんて大して関係無さそう」

「そりゃそうだな、わっはっは！　母さんビールもう一杯」

「今日はもうそれでおしまい。颯太、さっさとお風呂入ってきて」

　俺も食ったしさっさと風呂に入るか。

　明日もダンジョンに潜る予定なのでマッサージをしながら湯船につかり、この世界のことにぼんやりと考える。

　常に一人で生きてきた俺にとって、家族と共に生きていくということは何とも不思議な感覚だ。とても安心ができ、実に居心地が良いものだ。この感情はブタオのそれが表に出ているだけかもしれないが……大切にしていきたいね。

　そして元の世界に帰る手段についてだが、現状は何も分からないまま。当然あちらに俺の体があるかどうかは確認が出来ないしログアウトの方法も不明。この世界が未だにゲームなのか現実なのかすら曖昧だ。精巧に出来たメタバースという線も捨てきれないが、余りに出来過ぎているので現実の可能性が高い。

　ログアウト出来ず、この世界で生きていくにしてもゲーム知識が当てになるのかどうか。明日もダンジョンに潜るとして少し情報集めと実験をしておこうか。

　それにしても食ったばかりなのに腹が減る。毎晩空腹に苦しみそうだ。本当にこの胃はどうなっているのだろうか……

　\*・・\*・・\*・・\*・・\*・・\*

　翌日、土曜日の早朝。

　『雑貨ショップ　ナルミ』は土日こそが稼ぎ時だ。朝から両親たちが伝票のチェックや売り物の確認で動き回る中、俺はダンジョンダイブへと赴く準備を終えて家の前でストレッチをしている。

　ダンジョン内で足が攣ったり故障してしまうと重大な事故になり兼ねないので念入りに太い脚を伸ばす。意外に柔らかい体に密かに驚いていると、後ろから野太い声が掛けられた。

「おう、颯太君。調子はどうだい？」

「おはようございます、辰さん」

　振り返ると厳ついオッサン……ではなく、早瀬カヲルの親父であり『早瀬金具店』のオーナーの早瀬辰（はやせたつ）さんがいた。

　冒険者用の武器から鍋や包丁などの生活用品まで幅広く販売しており、自身でも武器を作るほどの腕前を持っている。ブタオの親父と辰さんは今でも一緒にダンジョンに潜るダンジョン仲間で、成海家と早瀬家はブタオが産まれる前から家族ぐるみの付き合いをしている。

　ゲームでは主人公が早瀬カヲルと仲良くなっていくと、手助けをしてくれるサブキャラとして登場する。ブタオにも優しくしてくれる気のいいオッサンだ。

「カヲルは庭で稽古してるよ、颯太君も一緒にどうだい？」

　善意で言ってくれているのだろうが……この人は俺がカヲルに嫌われてることを知らんのだな。まぁここで断るのもなんだし挨拶くらいしていくか。

　早瀬家の庭はちょっとした広さがあり、小さな日本庭園っぽくなっている。四季折々の植物が植えられていて木々も丁寧にカットされ、鯉が泳いでいる池も見事だ。そんな庭を見れいれば長年時間を掛けて手入れしている辰さんの姿を自然に思い出す。ブタオの記憶の取り出しが慣れてきた証拠だ。

　その整った庭の中央で熱心に木刀を振るうカヲルがいた。こうして少し離れて見てるととても絵になる。声を掛けようか迷っていると、向こうから声を掛けてきた。

「……颯太か。休日のこんな朝早くから起きているなんて珍しい」

「そこで辰さんに会ってな。カヲルにも一応挨拶しておこうと思ってさ」

「そうか。私はちょっとこれから出かけるので忙しいのだ」

　ブタオは彼女を「カヲル」呼びしていたので不自然にならないよう呼び方は統一しておかないといけない。それにしても俺を見るや否や露骨に不機嫌顔にするじゃないか。先程までの精悍な顔を綺麗に歪ませている。

　カヲルも忙しそうだし挨拶も済ませたし、さっさと退散してストレッチを再開しようか考えていると「こんにちはー！」という元気のいい声が聞こえた。

　表にいた辰さんが客人をこちらへ案内したようで、庭に入ってきたのは主人公の赤城君。背筋を伸ばし赤い髪を陽光で光り輝かせながら歩く姿は高校一年生だというのに貫禄抜群だ。その後ろに三条桜子さん――通称ピンクちゃん。ふわふわとしたボリュームのあるピンク髪とおどおどとして入ってくる雰囲気が小動物のよう可愛らしい。

　最後に入ってきたのは――立木直人（たちぎなおと）君か。長く暗めの髪色をセンターパートにし、メガネをかけたインテリキャラ。彼は赤城君のルームメイトで、メインストーリーでは相棒として活躍する重要キャラでもある。

「ここにいたんだね、カヲル」

「……ユウマか。ダンジョンに行く前に稽古を少しな」

　花が咲くような笑顔で嬉しそうに迎え入れるカヲル。俺と随分と対応が違うじゃないか……まぁブタオだしな。しかしまだ一日しか経っていないのに互いを呼び捨てとは。男女問わず距離の縮め方が上手いね。

「あれ？　君は……」

　四人で朝の挨拶をしている傍らにポツンと立っていると、ようやく俺に気づいた赤城君。だけど名前が出てこないようだ。まぁ俺は入学式が終わってすぐに帰ったから覚えているわけ無いか。

　それでも横に立っていた立木君は俺の姿を覚えていたらしく、こっそり耳打ちでクラスメイトだと教えた模様。

「あぁ、クラスメイトだったのか。僕たちはこれからダンジョンに行くんだけど、君も一緒にいくかい？」

　こういう誰にでも手を差し伸べる優しい性格がカリスマを産むのだろうけど、空気は読めないタイプのようだ。俺を誘ったことでカヲルとピンクちゃんの女子二人が露骨に嫌な顔をしているじゃないか。でもピンクちゃんに嫌わる理由はないと思うんだが……見た目か。この暑苦しい見た目が原因なのか。デスヨネー。ワカリマス。

　不穏な空気をすぐに察知したのか立木君が動く。

「ユウマ。いきなり誘うのも彼に悪いから今日は俺達だけで潜ろうよ」

「……そっ、そうよね。お弁当も四人分しかないし」

　赤城君の空気が読めないという唯一の欠点をフォローし、トゲの立たないように纏めようとするフォロリストの立木君。ピンクちゃんはお弁当を作ってきたようで、ウサギのマークが入ったランチバッグを大事そうに抱えている。

　そも俺はダンジョンにはソロで潜るつもりなのだ。今の状態ではまともに動けず足手まといになるかもしれないという心配もあるが、ゲーム知識や実験など試したいことが沢山あるので多人数だと都合が悪い。

「気にするな。俺もちょっと用事があるからな。頑張ってきてくれ」

「あぁ。それじゃ月曜日に学校でな」

　再び四人でこれからのダンジョンダイブについてワイワイと話し合う。カヲルも楽しそうにコロコロと笑っている。

　――そんな姿を見ているとシクシクと心が痛む。

　”俺”ではない別の経験からくる感情が『カヲルを取られるな』『諦めるな』と盛んに訴えかけてくる。本当に彼女を好きだったんだな……

　だがちょっと考えてみて欲しい。

　現時点でカヲルの俺に対する好感度はゼロどころか大きくマイナス領域だ。その状況であのイケメン主人公相手に彼女を取り合うのは正直分が悪すぎる。変に付きまとったり、こちらに向いて欲しいからとセクハラして破滅するよりは、スッパリ諦めて別の恋を探してみることをお勧めしたい。

　確かにカヲルは目を見張るほどの美人だし、気立ての良い性格で周りからも好かれている良物件だ。それでも他に目を向けてみれば、冒険者学校にはゲームをモチーフにしたせいか、美男美女が多く在籍しているし、実力されあれば容姿は気にしないって子も多い。これから頑張って実力をつけて良い娘を探すのもアリだろう。

　ゲームで俺のお気に入りだったヒロインの次期生徒会長ちゃんとかはマジでおススメだ。容姿端麗で才色兼備、超金持ちで爵位持ち。実力がある者なら性格、容姿、生まれ問わず婿に迎えたいという最強の逆玉物件。マイナスポイントの多いブタオには最高の条件を持ち合わせていると言える。

　まだこちらの世界での彼女は見たことないが、後でブタオに遠目からでも見せてあげたいものだ。

　早瀬家から帰ってきてストレッチを再開。一通り伸ばして温めた後、リュックに弁当と水筒を入れて再びスライム部屋にやってきた。

　何度かひやりとした場面はあったものの順調に合体スライムを狩り続け、スライムリングも１個ゲット。いい時間になったので昼食を取り始める。

　ゲームでは指輪の装備スロットが２枠分しかなかったため、両手に１個ずつの合計２個までしか装備できなかった。物は試しと指に３個とも嵌めてみたら全て装備できたのだ。リアルタイムのステータスが見られないので３個分の効果があるかは分からない。

　このようにゲームとは違う仕様も出てきているため、色々と実験したり調べる必要があるというわけだ。冒険者ギルドにある図書室にもダンジョン関連の本が沢山あったはずなので帰りにでも寄って情報を仕入れてみるとしよう。

　それにしても誰もいない。

　ダンジョン１階のＭＡＰは数ｋｍ四方ほどの平面上にある。スライム部屋はその隅のほうに位置していて歩いて辿り着くにはいくつもの分岐を通り抜けなければならない。それでもあれだけいた冒険者たちが誰一人として来ないというのは何故なのか。

　ここよりも２階への階段のほうが近いし、同じモンスターレベル２の相手をするなら手っ取り早く２階のモンスターを狩りに行ってるのだろうか。しかし合体スライムは２階にポップするゴブリンと経験値量は同じでも、より楽に倒せる上、スライムリングというレアドロップ品も結構な確率で落とす。やはりスライム部屋というものを知られていないのかもしれない。

　まぁいないならいないほうが好都合。あれだけいた冒険者が数少ないスライム部屋に押しかけられても俺が困るだけなのだから。

　アクティブモンスターがいないためゆっくりと寛ぎながらカロリー控えめの物足りない昼食を食べ終え、スライム狩りを再開。そして２時間ほど経った頃――

「レベル３キター！」

　軽い酔いのような状態が覚め終わり活力が漲る。バットを振る速度が段違いになったぞ。フンッフンッ！

　ジョブレベルのほうは確認ができていないが、まだ７には至ってないはず。随時ステータスを確認できる手段が欲しいところだ。

　初期ジョブである【ニュービー】はジョブレベル７でアクティブスキル（※１）の《簡易鑑定》、最大のレベル１０でパッシブスキル（※２）である《スキル枠＋３》を覚える。

　《簡易鑑定》は文字通りアイテムや所持スキルを鑑定できるスキルだ。深層のアイテムや特殊スキルは鑑定できない場合が多いが、序盤において大抵のものは鑑定可能なので重宝する。

　人やモンスターに対しても鑑定できるが、【やや強い】とか【とても弱い】とか自分を中心とした相対的な強さ基準の判定しかできず、ステータスやスキルなどの所持数は分かるがそれが何なのか分からない。大雑把な情報しか得られないのだ。また相手に鑑定を使うと気づかれてしまうため、不用意な使用は厳禁。下手に使えば探りを入れていると思われトラブルの原因となってしまう。

　もう一つの《スキル枠＋３》はダンエクのシステム上、非常に重要なスキルだ。

　ダンエクでは、スキル枠以上の数のスキルは覚えられない。スキルを多く覚えたいならスキル枠をそれだけ増やす必要がある。スキル枠はレベルを１０上げるごとに一つ増えるが、ゲームを始めたばかりの状態だとスキル枠は二つのみ。なのでレベル３の俺では二つまでしかスキルは覚えられない。

　スキル枠が全てスキルで埋まっていて、新たにスキルを覚えたい場合は、既存のスキルを一つ消して覚えるしかない。異常な肥満と食欲の根源と疑われる《大食漢》というスキルを消すときはこのシステムを利用するつもりだ。

　そんな貴重なスキル枠を増やすのが《スキル枠＋３》。他のジョブでもスキル枠を増やすスキルはあるが、それらを全て覚えてスキル枠を最大まで増やしても尚、スキル枠制限に苦しめられる。なので【ニュービー】で覚えられる《スキル枠＋３》は絶対に回収しておきたいスキルなのだ。

「さてと。２階に上がるか、それともスライム狩りを続けるかだが……」

　レベルが３になったため、モンスターレベル２の合体スライムでは経験値がやや減少してしまう。しかしここは非常に狩りやすく、おそらく２階に行ったとしても混んでいるだろう。それに――

「二階であの四人に会ってしまったら気まずいしな」

　カヲル達は二階で狩るとか言っていた。空気を読んで赤城君の誘いを断っている手前、鉢合うのは避けなければならない。キャッキャウフフしている中でブタオ登場とか目も当てられやしない。

　レベル４まではここで狩り続けたほうが良さそうだ。

　結局夕方まで合体スライムを百匹近く狩り続け、スライムリングは計五つ手に入れることができた。試しに全部右手につけてみたが特に変わった感じがしない。しかも見た目が何だかギラギラして悪趣味だ。ゲームのときは性能優先で見た目にはそれほど拘らなかったが、この世界では見た目も気を付けたほうがいいかもしれない。

　少し早いが今日は切り上げて、情報収集のため冒険者ギルドのビルへ向かうことにしよう。

　\*・・\*・・\*・・\*・・\*・・\*

　冒険者ギルドがある高層複合ビルの１Ｆ。

　ここでは新規受付の他、アイテムや素材、魔石の買い取りも行っており、ダンジョン帰りの冒険者や業者が取引し賑っている。ぱっと見ただけでも数千人はいるだろうか。書き入れ時の海鮮市場のような雰囲気だ。

　アイテム売買所では買い取りの値段が書いてある冊子があったのでスライムリングの値段を調べてみたものの、どこにも載っていない。リストには無いようだ。登録料を払ってオークションに出すこともできるが、それほど貴重なものでもないため家族にでもプレゼントするとしよう。

　売買所を後にしてエレベーターに乗り、目的地の図書室がある１８Ｆに向かう。入った先は天井が吹き抜けになっており、木目調の壁が落ち着いた雰囲気を作り出している上品な広間だった。ヨーロッパの有名な図書館をモチーフにしているらしく、一目で金が掛かっているのが分かる。

　ここでは冒険者証があれば自由に本を読むことができ、借りることもできる。蔵書数はそこらの市民図書館と比べても多く、ダンジョン関連以外にも様々な本が置いてある。

　足音がしない上質なマットに密かに驚きながら、ダンジョン関連の本を探して歩く。

　日本ダンジョンモンスター図鑑というのが目についたので開いてみる。一昨年発行の本で、目次を見る限り２９階までのモンスター情報が挿絵付きで書かれている。それ以上の深層モンスターは探索が不十分なため情報を集めているそうだ。

（２９階ってまだ中層にも達してないじゃないか）

　ゲームでは１階から３０階までは浅層、３１～６０階まで中層、それ以上が深層と呼ばれていた。２９階は浅層の範囲。ちなみに俺がゲーム時に潜っていたのは９０～１００階の超深層だ。

（そういえばダンエクの世界のＮＰＣ（※３）には、高レベル冒険者ってほとんどいなかったな……）

　仮にこちらのダンジョン攻略の最前線が３０階前後だとするならば、最前線にいる攻略クランメンバーのレベルも３０前後となってくる。ゲーム時での最前線プレイヤーがレベル９０だったのと比較すれば、状況が大きく変わってくる。

　とはいえ、こちらの世界の冒険者が「下手糞」という訳ではないだろう。

　ゲームではダンジョンで死んだらアイテムロストと衰弱のペナルティーを負うものの、ダンジョン入口で復活できたが、どうやらこの世界では死んだらその場で蘇生魔法を唱えられる仲間がいなければお終いのようだ。

　痛みも疲れもなく命を失う恐怖の無いゲームの中でなら、死ぬかもしれないボス戦でも鼻歌を歌いながら戦える。しかし死んだら終わるこちらの世界では、リスクを極限まで減らすダンジョンダイブとなるのは容易く予想ができる。同列に比べるのがそもそもおかしいのだ。

（もしくはＤＬＣがない発売当初の可能性もあるのか……）

　ゲーム発売当初の上限レベルは３０でカンストだった。この時点ですでに存在したメインやサブストーリーに関するＮＰＣキャラ達は、どのシナリオでもそれほどレベルが高い設定ではなかった。ブタオもストーリー後半の退学時ですらレベル１０いくかどうかだ。

　当時はダンジョンに深く潜ろうにも４０階前後が限界だったが、幾たびのＤＬＣ発売により、様々なジョブやクエスト、アイテムが追加され、上限レベルも最大９０まで引き上げられた経緯がある。

　そんな訳で現在攻略している最前線の階層が３０階前後ということは、この世界はＤＬＣが無い「発売当初のゲームの世界と同じ」という線が考えられるのだ。

　てっきり俺はこの世界が転移直前と同じで、カンストはレベル９０と考えていた。その場合キャラのビルドは剣も魔法も使えるバランス型が強い。

　しかし最大レベルが３０止まりでジョブやアイテムもゲーム発売時と同じとなると、育成方針はバランス型ではなく、前衛か後衛のどちらかに絞った特化型のほうがいいのかもしれない。理由はいくつかあるが、ゲーム発売時ではスキル枠数とジョブが限られているためだ。

（本当に３０カンストなのか調べる必要がでてきたな。でも運営からのメールにはアップデートっていってたし、レベル３０カンスト時代に戻ることなんてあるのか？）

　調べる方法はいくつかある。ＤＬＣにしかないアイテムやジョブ、追加エリアや追加モンスターを見つけることができれば、少なくても初期の世界ではないと判明する。それはもう少しダンジョンに潜ってみないと分からない。

　次に近くにあった「最新」と書かれたジョブ辞典があったので手に取ってみる。裏表紙を見れば発行は……去年か。

　ジョブは初期ジョブ、基本ジョブ、中級ジョブ、上級ジョブ、最上級ジョブと５段階にクラス分類されており、この順でより強力なジョブが用意されている。これらのジョブがどの程度実装されているかで、この世界のＤＬＣ実装具合が分かるのだ。

　例えば最上級ジョブはゲーム発売時には一つも実装されていなかった。これが一つでも記載されていたら何かしらのＤＬＣが実装されているとみていい。

　早速ページを捲り、ジョブ辞典に書かれているジョブを斜め読みしてみる。

　初期ジョブの【ニュービー】に、２段階目である基本ジョブの【ファイター】、【キャスター】、【シーフ】の３職。これは転移する前でもこの初期ジョブと基本ジョブに変更も追加も無かった。

　３段階目である中級ジョブは【ウォーリア】、【アーチャー】、【プリースト】、【ウィザード】の四つ……のみ？　４段階目の上級ジョブでは【聖女】と【侍】しか書かれていない。

　これらのジョブはＤＬＣで追加されたジョブではなく、初期からあった。しかし中級ジョブには【ナイト】や【魔法戦士】、上級ジョブには【アサシン】や【狂戦士】なども初期からあったはず……。パラパラとページを捲り探してみるが見当たらない。

　どうして書かれていないのだろうか。知られていないのか、もしくは隠匿されているのだろうか。冒険者くずれやテロリストが猛威を振るう世界だということを考慮すれば、国や国際機関が情報を隠匿、もしくは制限している可能性は十分あり得る。

　【ニュービー】についても読んでみたが、どうにもおかしい。

　要約すると「【ニュービー】に大した恩恵はなく、早めに中級ジョブにチェンジしたほうがいい」と書かれている。【ニュービー】のジョブレベルをカンストさせたときに取れる《スキル枠＋３》という重要スキルについてはどこにも書かれていない。これを取り逃すと後々苦労するはずなのに、そんなことがあるのだろうか。

　今度はスキル辞典という本を手に取って読んでみる。目次からスキル一覧を見てみるが《簡易鑑定》は載っていても《スキル枠＋３》は載っていない。上級ジョブの【侍】や【聖女】についての項目も見てみたが、特殊条件で得られるスキルについても何一つ書かれていなかった。

　このスキル辞典も去年発行のはずなのに情報が穴だらけ。はっきり言って辞典と呼べる代物ではない。他にも十冊ほど読んでみたが、似たようなことが書かれていただけで足りない箇所も同じく書かれていなかった。

　結果から言えば、図書室で調べた限りではＤＬＣで追加された要素は確認できず、ゲーム発売時の環境と同じ「ＤＬＣの無い世界」の可能性が高い。しかし仮にＤＬＣが無いに世界してもここにある資料の情報不足感は否めない。書かれていないからといってそれが無いと断定するのもどうなのか。オラますます混乱してきたぞっ。

　まぁ攻略を進めていけば分かることだし今焦って結論を下す必要はないか。分からないことも多いけど、少しずつ情報を集めていくとしよう。

　明日辺りにスキルの「マニュアル発動」をやってみようと思う。ゲーム初期には無かったスキルの発動方法なので、これができるならＤＬＣの可能性を否定できなくなる。

（※１）アクティブスキル

スキルを使用しないと効果がでないスキル。

（※２）パッシブスキル

スキル枠にあれば使用しなくても効果がでるスキル。

（※３）ＮＰＣ

プレイヤーキャラクター（ＰＣ）ではなく。ノンプレイヤーキャラクター。ゲーム世界の住人など設定された行動をするキャラクターのこと。

　以下はジョブのまとめ。()内のジョブは転移後の世界では知られていない未知のジョブ

初期ジョブ――何もジョブチェンジしていない場合のジョブ

【ニュービー】

基本ジョブ――初期ジョブから最初にジョブチェンジできるジョブ、最初からこのジョブの場合もある。

【ファイター】　【キャスター】　【シーフ】

中級ジョブ――基本ジョブのジョブレベルを上げると就くことができるジョブ

【ウォーリア】　【プリースト】　【アーチャー】　【ウィザード】

（ナイト）　（魔法戦士）

上級ジョブ――中級ジョブのジョブレベルをいくつか上げるか、適正が必要

【聖女】【侍】

（アサシン）（狂戦士）

最上級ジョブ――最終的なジョブ。ウェポンマスターは颯太がこの世界に来る直前に使っていた

（ウェポンマスター）

　翌日のよく晴れた日曜日。朝から南風が強く吹いている。

　元の世界での俺は花粉症で、この季節にこれだけ晴れて風が強いと鼻がズルズルして気分が滅入っていたものだが、ブタオはそういったことがなく快調そのもの。

　カヲル達は今日も朝早くからダンジョンへ向かったようだ。ゲームではパーティーに誘えるなら様々な生徒と自由な編成で組むことができる。そこで最初期から誘えて能力が高いカヲル、ピンクちゃん、立木君の三人を選んでパーティーを作った赤城君は慧眼と言えるだろう。このメンツならメインストーリーや個別シナリオ、イベントを進める上で非常に効率が良いからだ。

　それに赤城君は刈谷イベントを受託してしまったので何としてもレベルを上げなくてはならない。１ヶ月で刈谷を倒すのは相当な難易度になるとは思うが、負けたらＥクラスの空気が悪くなるので頑張ってもらいたいね。

　一方で、センチメンタルなブタオマインドがささくれ立っている。『どうしてオレを誘わないんだ！』なんて思っているのだろうか。だがそんな精神ではこれからやることに響くので、深呼吸をして落ち着かせる。今日はマジックフィールドで色々と実験を行うつもりなのだ。

　向かう場所は学校のマジックフィールドエリア。警備員が見守る正門から入る。日曜にも拘らず部活動やサークル活動のために登校している生徒が多く、静かな場所を求めて歩く。第二運動場へ行く途中にベンチがあったのでそこにしようかね。この辺りもマジックフィールド内のはずだ。

　今日やることはスキル実験。

　俺のスキル枠には《大食漢》というスキルしかないが、ダンエクにはスキル枠になくても使えるスキルが３つある。《小回復》、《トーチ》、そして《オーラ》だ。

　《小回復》はＭＮＤ依存の回復スキル。ただし大した傷は治せず、ＭＰ効率も非常に悪い。このスキルが使い物になるくらいＭＮＤが高いなら、上位の《回復》を覚えて使ったほうが遥かに良いという、いわゆる「死にスキル」だ。今の俺のＭＮＤならほぼ全量のＭＰを費やして、ささくれを治せる程度でしかないだろう。ささくれに悩んでいる人には価値があるのかもしれないが。

　《トーチ》は掌に小さな光球を浮かべ、周りを照らすスキル。しかしこれも死にスキルと言える。貴重なＭＰをこのスキルに使うくらいなら、素直に懐中電灯を持って行った方が良いからだ。

　最後に《オーラ》。刈谷イベントで取り巻きのモブが威圧してきたが、アレが《オーラ》だ。本来はレベル差がある雑魚モンスターを寄せ付けないために使うものだが、レベル差がある人間やモンスターに使うと威圧として作用する。安易に脅しとして使うアホが多くいそうなので「アホ発見器スキル」としても名を馳せていることだろう。

　この３つの中で実験に選ぶのは《トーチ》だ。今の俺にささくれは――ブタオマインドのささくれ以外に――無いし、《オーラ》は通行人がびっくりするかもしれない。初期スキルの《大食漢》は常時発動型のパッシブスキルだろうし除外。

　ということで早速試みる――が。

「……え、どうやって使うんだ？」

　ゲームではグローブ型コントローラーのショートカットキーを押せば、登録してあるスキルは自動で発動できたが、今はそんなグローブは装着しておらず押せるボタンなんてない。仕方がないので小学校のとき練習したカメ○メ波の要領――もちろん当時も撃てなかったが――で念じてみた。

「はぁ……ぁああぁああああああっ！！！」

　この世界でなら上手くいくと思ったけど、何の反応もなく途方に暮れてしまう。どうすりゃいいんだ？

　良案が思い浮かばなかったので図書室へ行き「サルでも分かる！　スキル発動入門」という本を借りてみた。若干こちらを挑発している表紙絵が気になるものの、挿絵が多く分かりやすそうなのでこれにした。

　この本によると「一般的には魔力を感じるところからはじめる」とのこと。魔力は魔法道具から簡単に放出させることができ、それほど出力が無いものが適任らしい。冒険者ギルドの売店に該当する魔法道具がないか探してみたら、懐中電灯のような灯りの魔石道具があった。これを買ってみよう。

「このスイッチを押すと光るのは分かるが、魔力ってどう出すんだ？」

　灯りの魔法道具の中がどうなっているのか分からなかったので分解してみると、小さな魔石と魔法陣が描かれた数ｃｍほどの大きさの金属板が入っていた。この魔法陣が魔力を光にエネルギー変換させているのだろう。

　この魔法陣の一部を外し、わざと失敗させて起動してみると……思った通り魔力そのものが流れ出てきた。

「魔力って無色透明なのな」

　見た目では出ているのかどうか分からないので触ってみると何かチクチクというかピリピリとした不快な感触があった。

「で、これに似た感触を出せと……はっ……はぁあぁあぁああ！」

　やはりどうしても力んでしまい、カ○ハメ波の練習っぽくなる。近くを通った女子生徒に笑われてしまった。てへっ。

　再び本を手に取り、サルが体からやんわりと魔力を放出している図と、その下の説明を読み返す。図解にされても無理な気がするが……試しに道具の魔力回路を戻して灯りの道具を動作させてみる。

「普通に点くよな……」

　しばらく気長にピリピリした感覚と点燈を繰り返しながら試行錯誤してみる。この世界に魔力というモノがあるのは間違いない。俺のステータスにもＭＰが９と書いてあったし俺にも魔力はあるはず。己を信じよ！　はぁああぁああ！

　……っとまた悪い癖がでてしまう。

　今まで力任せに無理やり魔力を出そうとしていたが、このサルのように体内にあふれている何かを外へ出すように手をかざしてみる。すると道具を利用してないにもかかわらず、ピリピリはしないが掌に何かが溢れている感覚を掴んだ。

「これが俺の魔力か？　ならば……」

　次に《トーチ》を念じつつ魔力を放出。するとキラキラとしたエフェクトが手元に舞い上がり、豆電球にも劣る光量の小さい光の玉がぽわんと出てきた。

「できだぞ！　いぃぃやっふぅううぅうう！」

　はっ……いかんいかん。また周りの人に白い目で見られてしまった。でも魔法を使えたことでファンタジー世界に来たという実感がようやく湧いてきた。スライムをバットで殴っているだけではどうにも異世界という感覚が掴めていなかったのだ。

　まぁ常日頃からダンエクの世界に入りたいと思っていたわけで、テンションが上がりまくるのは大目に見て欲しい。

　よし次。これなら「マニュアル発動」もできるのではないだろうか。

　先程のスキル発動方法は「オート発動」と呼ばれている。ゲームのときは、覚えているアクティブスキルをショートカットキーに登録すれば、そのボタンを押すだけで発動するお手軽発動法のこと。

　ワンボタンでスキルが発動するのは使用したいときにいつでも確実に発動するため、大きなメリットとなる。デメリットとしては、ショートカットキー登録は最大４つしかセットできないし、再使用するためのクールタイムも、消費ＭＰも大きくなったりする。

　それとは違って体のモーションを使ったり指で魔法陣を描いたりして発動するのを「マニュアル発動」という。元の世界ではプレイヤーの前方に置いてあるモーションカメラとグローブ型コントローラーでスキルの成否を判定していた。

　マニュアル発動は高レベルの技になると動作が複雑化し、体全体のモーションを混ぜて入れなければならず、さらに入力の時間も長くなるためミスも多くなる。しかし発動さえ成功できればクールタイムも消費ＭＰも大幅に減少し、強力な武器となりえる。簡単なモーションのスキルならデメリットもほぼ消える。

　またスキルの動作にマニュアル発動を組み込み、スキルとスキルをつなげる「スキルチェイン」と呼ばれる発動法や、スキルモーションは成功させるが発動はさせない「フェイクスキル」など高度な駆け引きもできる。これらはとにかく対人戦や強敵相手に重宝したものだ。

　マニュアル発動はスキルアクションにおいて大幅な自由度をもたらし、ダンエクの核心とも言えるシステムとなっていた。

　ただ裏技扱いなのか、ゲーム内では一切説明がなかった。情報を集めるにはインターネットで探すのが一般的だが、全てのスキルモーションがインターネットで公開されているわけでもなく、中には僅かな人にしか知られていないモーションもある。

　マニュアル発動とオート発動は一長一短なので織り交ぜて使うのが一般的な戦い方だ。

　ということで、早速マニュアル発動を試してみよう。《トーチ》は魔法扱いなのでマニュアル発動の方法はモーションではなく、魔法陣を描く方法となる。

　まず魔法陣を書くぞ、と目の前の盤面を掌でなぞるモーションで開始する。その後に空中に《トーチ》の魔法陣である逆三角形を描くだけ。

　何度か試したが、どうやら描き終わるときに魔力を放出するのではなく、魔力が指から出るように空中をなぞることで初めて成功した。オート発動のときと同じく《トーチ》エフェクトが飛び出す。キラキラの光量が少しだけ多いかもしれない。

　さらに次の実験をすべくダンジョンの１階の奥へ移動し、周りに人がいないかどうか確認する。

　ゲームではオートでもマニュアルでも、誰でも発動できる３つの初期スキルか、スキル枠にあるスキルしか発動しなかったが、試しにまだ覚えていないスキルのモーションをやってみる。

「まずはそうだな……召喚魔法とかやってみるか」

　複雑な幾何学模様の魔法陣を一気に描ききる。一生懸命覚えた魔法陣だが、ゲームのときは結局スキル枠が足りなかったので消してしまっていたスキルだ。

「召喚！　ヨルムンガンドォ！！」

　スキル《ヨルムンガンド》は神性持ちの巨大な蛇を召喚する魔法。物理耐性、魔法耐性が共に非常に高く、周辺にいる全てのモンスターのレベルを下げるという強力なデバフスキルも持っている。モンスターレベルは７５。召喚できるならコイツだけで中層までスイスイと攻略することが可能となるだろう。

　……が、当然のように発動はせず。期待はしてなかったけども。魔法陣にミスはなかったはずだが、魔法陣を描いている最中に魔力が全く通っていなかったので失敗する予感がヒシヒシとしていた。

　失敗した理由として、レベルが足りてないとかＭＰが足らないとかいうより、ただ単に今現在のスキル枠に《ヨルムンガンド》がないから発動しないのだと思う。

　だが物は試し。試すだけならタダだしな。次はスキルモーションをやってみよう。

「よく使ってた技だと《マジックランス》だが、せっかくバット持ってるしメイス系のスキルにするか」

　深く考えずに目の前のスライム目掛けてゲームで何度もやった剣舞のような複雑なモーションを正確になぞる。これからやるのは最上級ジョブ【ウェポンマスター】で覚えるスキルだ。

「真空裂衝撃ィ！！！」

　大剣かメイスでのみ発動することができる対軍スキル《真空裂衝撃》。高密度のオーラにより、前方広範囲に破壊的なダメージを与える大技の１つだ。

「なにぃい！？　発動しただとぉ………うぉお、きつぃ……」

　発動と同時に視界が真っ赤なエフェクトと破壊音に包まれ、体のエネルギーがぐんぐんと吸い取られる感覚に陥る。

　このスキルはＳＴＲと武器依存のためか威力がやけに低く、数匹のスライムに当たったものの１匹も殺せていない。

　手に持ったバットは粉々に砕け散り、持っている以上のＭＰを持ってかれた俺は、その場で気を失ってしまった……

　\*・・\*・・\*・・\*・・\*・・\*

　翌日の月曜日。

　ダンジョン内で気絶し、スライムに絡まれていたところを救助された俺は「冒険者学校史上最弱の男」として学校中の話題を独占することとなった。

「颯太～カヲルちゃんが迎えにきたわよ～」

　一階からお袋がそんな掛け声を掛けてくる。幼馴染であるカヲルとは中学時代から毎日一緒に登校するという謎の約束を交わしていたようで、それは冒険者学校に入った今でも変わらない。あんな美人な娘に迎えに来て貰えるとは……幸せ者め。

　急いで制服を着て階段を降りると、しかめっ面というほどではないが決して機嫌がいい顔ではないカヲルが腕を組んで待っていた。

「遅いぞ颯太。……まぁいい、それでは行くとしよう」

「おうよ」

　長い髪を翻し颯爽と歩きだすカヲル。一緒に並んで歩いていくのかと思って横に並ぶと、それを拒否するかのように足を速める。なので無言のままやや後ろを歩く形となった。そんなに嫌なら何故律義に迎えにくるのかね。……まぁ、登校するといっても学校まで数百メートルしかなく、大した話をするほどの時間も無いので気にしないことにした。一緒に登校できるだけ有難いと思わなきゃね。

　しかし。先程からチラチラとこちらを見てくるのは何だろうか。俺の前を歩いているから振り返る動作で分かりやすい。目が合うと急に顔をそらす。もしかしてブタオに惚れ直したとかかな。なんちって。

　そんな都合のいいことを考えつつ春の街中を歩く。今日の朝の空気はやや冷たいが、汗っかきの肥満体には優しい温度だ。植えられている桜はもう八割方散っており、落ちた花びらを掃除している清掃員が何人かいる程度。生徒のほとんどは寮住まいなので、登校で正門を通る生徒はそれほど多くないのだ。

　今日から本格的な学校生活――二度目だが――が始まるのかと感慨深く下駄箱に靴をしまっていると、何人かが俺を見ながらヒソヒソと話している。寝ぐせ直ってないのかと思い、手櫛で髪を撫で付けつつカヲルと共に教室へ入ると……

「おい、お前。スライムに負けたんだってな」

　えーと、名前はまだ知らないクラスメイトが俺に話しかけてきた。

「スライム？」

「ダンジョン１階のスライムに負けて救助されたって」

　そう。昨日はなんと救助されたのだ。気づいたら冒険者ギルドにある医務室に寝かされていた。なんでも発見時は複数のスライムにどつかれてたらしい。分厚い脂肪のおかげか軽い打撲だけで特に異常は無く、すぐ帰ることはできた。帰る際に「君、重くて大変だったよ～」と愚痴られたけども。いや、それよりも。

「え、みんな知ってるの？」

「救助員がお前を連れて出てくるところを他のクラスのやつが見たって。学校中の噂になってるぞ」

「だっせぇな、スライムなんて子供でも勝てるのに、どうやって負けるんだよ」

「まじで～ヤバすぎるでしょ～、アハハハッ」

　別にスライムに負けたというわけではない。実験目的で大技を撃ったら何故か成功し、ＭＰが枯渇。その後に視界が暗転し気絶してしまったのだ。

　……とはいえ。そんなこと言いったらゲームの知識があると思われるし、これが未知の情報なら――多分そうだろうが――テロリスト共が闊歩するこの危険な世界では、十分に命を狙うに値する理由となりうる。まぁ頭がおかしいと思われるほうが可能性が高いか。

「あ、あぁ。ちょっと体調が悪くてね、えへへっ」

　ここは当たり障りのないように適当に誤魔化しておこう。だがクラスメイトの追撃は止まらない。

「おいおい、学年最下位つっても限度があるだろ。Ｅクラスの足引っ張んなよ」

「そーよ、それにアンタ……臭くない？」

「まるで豚みたいだし。お前今日からブタオな」

「ブタオって。ギャハハ」

（やべぇ、白い目で見られてる。オラ恥ずかしいっ）

　カヲルが登校中……今思えば侮蔑の表情を滲ませながら俺をチラチラと見ていたのはもしかしてスライムに負けたことを知っていたからか。教えてくれたら……いや、すでに噂は広まってたし教えてもらっても何も状況は変わらないだろうな。

　あとブタオってあだ名を付けられたのはこのタイミングではなかったはず。全てがゲーム通りというわけではないのか？　まぁブタオと呼ばれるのも時間の問題だしどうでもいいか。

　しっかし何故発動したのかマジで分からん。試しに選んだ《真空裂衝撃》はスキル枠には無いスキルで、発動出来るほどのＭＰだって持っていない。それなら《ヨルムンガンド》が発動しなかったのは一体何か理由が……

「ホームルーム始めるぞ。席につけ」

　縮こまって色々考えていると担任の村井先生が来た。ホワイトボードに今日の予定を書き出していく。

「今から自己紹介をやってもらう。その後はオリエンテーションだ。学校の授業システムや施設の紹介。その後にダンジョンの入り方を説明する。……ダンジョンについてはもう入っていた奴がいたらしいがな」

　と、俺を見ながら話す村井先生。クラスから笑いが出る。てへっ。

「それでは自己紹介。廊下側の前から順にするか」

　中等部からエスカレーター式で進学してきた内部生のＡからＤクラスと違い、このＥクラスだけは高校からの外部生となるので、中学まではバラバラ。俺に至っては異世界出身の元サラリーマンだけどな。

　自己紹介してもらいつつ、ダンエクキャラのおさらいでもしておくか。そんなわけでＥクラスの筆頭は――

「赤城悠馬です。東京の東中学ってとこから来ました。武器は片手剣、【ウォーリア】志望です」

　この赤い短髪のイケメンが「ダンエク」の主人公、赤城君。鍛えて成長していけば勇者という非常に強力な特殊ジョブに就くことができる。だがいくたびのＤＬＣによりカスタマイズキャラが最強となったため、主人公はあまり使われないキャラとなってしまった。とはいえステータス的に非常に恵まれており強いことに変わりない。彼の今後の動向次第で厄介なイベントが起こる可能性があり、最も注視すべきキャラだ。

「三条桜子と申します。北海道から来ました。【プリースト】志望です。鈍器も杖もいけます。よろしくお願いします」

　三条さん、ことピンクちゃんは、ダンエクのヒロインの一人で人気も高かった。今はややぽっちゃりだが、ダンジョンで揉まれるうちにボンキュッボンになるという色んな意味で成長著しいゆるふわ系女子。

　そしてなんとＤＬＣ追加後には主人公としても使用可能で、イケメン共も攻略でき個別シナリオも追加されている。クエストを進めていけば【聖女】に、ＢＬモードだと【ソーサリー】にもなることができる。当然能力値も非常に高く、赤城君を上回るほどの超強力キャラ仕様となっている。あの可愛らしい見た目からは想像しにくいね。

「立木裕司。千葉出身。志望は【ウィザード】だ。今後ともよろしく頼む」

　立木君は赤城君と同じ寮のルームメイト。士族出身で上位者の雰囲気を持つ。その硬い雰囲気のため誤解されやすいが彼は非常にフレンドリーで思いやりのある少年なのだ。陽気な赤城君と少し影がある立木君のペアは多くの腐女子ファンを唸らせた。ＢＬモードでは彼も攻略可能だ。

「早瀬カヲル。神奈川出身【ウォーリア】志望です。武器は刀。よろしく」

　カヲルもヒロインの一人で、見た目も能力も共に超ハイスペックな女の子。カヲルルートではブタオが悪役として登場する。シナリオを進めると退学に追い込まれてしまうかもしれないので、彼女関連のシナリオやイベントには進行具合も注視していきたい。

　またブタオとは家が隣同士で幼馴染かつ許嫁。嫌われている割には接点は多く、一緒に通学をしていたりする。関係性的に距離が近いのか遠いのか上手く掴めない。ただ、こちらからセクハラなり嫌がらせをする気は無いので、彼女との関係はそれほど悲観的に考えなくてもいいかもしれない。

　それよりも現時点では彼女と赤城君が仲良さげに話すと、俺の内なるブタオマインドがシクシクと痛むことのほうが問題だ。放置しておくと俺までネガティブ思考に陥るので適度にケアしていくべきだろう。

　そして別の意味で注意しなければならないのは――

「久我……琴音。愛知から。武器は短剣と弓を予定。【アーチャー】志望」

　彼女はメインクエスト「久我の叛乱」のキーとなるクエストキャラ。見た目はおかっぱで大人しそうな日本人だが、アメリカの情報収集部隊出身という身分を隠して学校に転入してきた日系アメリカ人だ。彼女のイベントを進めると、共にテロリストを討つか、情報を抜こうとしたのを咎めて彼女を討つか、という選択を強いられる。今、不用意に近づくのは危険だろう。

　ちなみに、さきほどから上級ジョブ志望とは言わず中級ジョブ志望ばかりなのは理由がある。この世界で上級ジョブになれているのはほんの一握りの頂点冒険者のみで、上級ジョブ志望というのは現実的ではないかららしい。それでも言うやつは言うけども。

「磨島克幸が嫡男、磨島大翔、新潟で準爵の士族をやっている。武器は刀、目指すは【侍】！　後衛の仲間を募集中だ！　あ、お前はいらねーわ」

　俺のほうをみながら言われてしまった。これでは誰もパーティー組んでくれなくなるので、なんとか挽回せねば……。しかし士族か。特権階級を相手にするときは気を付けないとな。

　次は個人的に気になる女の子。

「大宮皐と言います。高知出身ですっ。武器は魔導書かメイスを使う予定で【ウィザード】志望です。みんな頑張っていきましょう！」

　左右の髪を低い位置でまとめ、おさげを垂らした可愛らしい小柄な女の子。ゲームではこのＥクラスの委員長的なポジションで、上のクラスからの圧力をどうにかすべくこのクラスをまとめようとするも、上級生や派閥から目を付けられ失敗し挫折してしまう。果たして彼女はこの世界でもそうなるのか……

　その後も自己紹介は続く。クラスメイトには主人公をはじめ美男美女の割合がかなり多い。そのせいで逆に俺の容姿が浮きまくっているけど、気にしたら負けだろう。

　最後に俺の番がやってきた。ジョブ志望はまだ決めてないけど何がいいかね。ステータス的におかしくない【プリースト】とでもしておくか。

「成海颯太。神奈川出身。武器はバット使ってました。志望は【プリースト】です。よろしくぅ！」

　横ピースを出してウケを狙ったが「バットって……」「……あれが史上最弱の男……」「スライムに負けるとか……」「所詮ブタオ……」などとヒソヒソと冷めた話し声が聞こえる。おい、ブタオは関係ないだろ。

　はぁ。二度目の高校生活は前途多難そうだなぁ……

「それではオリエンテーションに移るとしよう。逸れないよう俺の後をついてこい」

　これから外の施設を見て回ると村井先生が言う。教室の窓から外を見ただけでも多くの施設が立ち並んでいるのが確認できる。Ｅクラスの生徒たちが一斉に立ちあがりオリエンテーションに思いを巡らせ、先生の後について校舎内をぞろぞろと練り歩く。

　ここ冒険者学校はダンジョン攻略だけではなく勉学にも重きを置いている。

　自習室、音楽室、理科室などの特別教室や、教材、実験道具、視聴覚関連の設備にも相当の金が掛かっていて見て回る場所は多い。俺が元の世界で通っていた公立の高校とは使っている器具のレベルが違うのが一目で分かる。この音響施設一体いくらだよ。

　これほど金が掛けられるのは、国から莫大な予算が下りているためだ。それに加え官僚とズブズブで民間企業からの献金も絶えない。その辺りの理由もあって一般の学校とは違い、桁外れの資金が集まるのだろう。

　先生からは「ダンジョンだけにかまけているとクラス昇格はできないから頑張れよ」と、ありがたい薫陶を賜りつつ、今度は一度校舎から出て外の施設の見学に向かう。

　ちなみに「クラス昇格」とは１年間を前期、後期と分け、それぞれの期末にダンジョンと学力によるクラス編成を行うシステムのこと。Ｅクラスでも成績が良ければＤクラス、Ｃクラスと個人昇格が可能だ。

　だが１回の昇格ではどんな良い成績を取っても１つ上のクラスまでしか昇格できない。ＥクラスからＡクラスになるには高校３年間、６回の昇格チャンスのうち、最低でも４回の昇格が必要となる。逆に成績が悪ければ降格することもある。

　Ａクラスで卒業できれば自動で冒険者大学へのフリーパスが貰えるため、Ｅクラスの皆も必死で頑張るようだが……Ｅクラスは他クラスと違って初めてのダンジョンダイブも高校からなので、本気でＡクラスを目指すとなると入学から１年間以内でＤクラスと張り合う程度の能力が求められる。俺ならともかく、ゲーム知識の無いＥクラスの皆には酷く不利な条件のように思える。

　そんなことを考えて歩いていると一際大きな施設の前にたどり着いた。

「ここは闘技場だ。もちろんこの全域がマジックフィールド内でスキル訓練に耐えうる強度を誇る。刃先を潰した武器や様々な金属製防具も各種用意している。利用には事前に登録が必要なので注意しろ」

　ダンジョンのスキル確認や対人戦の訓練はここで出来るようだ。外でもやろうと思えば出来るが、強力なスキルを発動すると器物損壊してしまう恐れがあるので気を付けないといけない。

　そして先生によると闘技大会や冒険者大学へ進学を考えているなら対人戦は訓練しておいたほうが良いとのこと。対人戦の技術はもちろん重要だが、レベルが低いうちは素直にレベルを上げたほうが強くなるので俺はそちらを重視するつもりだ。

　次に微かに薬品の臭いがする保健室のような場所に連れてこられる。

「ここは医務室。《中回復》や《簡易再生》ができる【プリースト】の先生が平日なら常駐している。ダンジョンや訓練で怪我したらすぐにここへ来るように」

　まだ若い【プリースト】のイケメン先生がにこやかに手を振っている。刃を削り攻撃力を殺した武器とはいえ、殴り合うなら怪我の１つもすることはあるだろう。《簡易再生》は指の一本二本程度の欠損なら治せるというので頼もしい限りではあるが、あまりお世話になりたくない。

　次は入り口が大きく開いた工場のような建物が並ぶエリアに連れてかれた。建物内にはいくつもの種類の武器が並び、その奥には金属製品の鍛造をするための治具やエアーハンマーがいくつも見える。ここで鋼やダンジョン産の金属の精錬、加工を行っているのだろう。

「ここは武器、防具だけでなく、魔法道具も研究している工房が集まっている。民間からの出店もあるので失礼のないように」

　素材を持って工房の鍛冶職人に交渉すれば安く作ってもらえるという。ダンジョン産の素材には魔力を帯びた金属もあるため、いい素材が手に入ったら工房へ依頼するのもいいかもしれない。

　冒険者ギルドの店舗でも作成依頼は出せるし、高レベルになればダンジョン内の隠し店舗でも武器防具を取引できるので、じっくり見比べてみたいものだ。カヲルと仲良くなれば辰さんにも依頼することは可能だが……これは今は除外しておこう。

「工房では生徒相手に武器も貸し出している。まだ自分の武器を持ってないなら後でここで借りに来るといい。それほど上級の武器は置いてないが、１０階までならこのクラスの武器でも十分だろう」

　レンタル品の武器を見てみれば、剣やメイスにしても色々な重さや長さのものが置いてある。下手に店で買うよりかは借りたほうが安上がりだし品質も良いようだ。昨日、バットが木っ端微塵に壊れたので丁度いい。

　工房の次は部活説明のため部室棟へ。この一帯には専用の部室と訓練施設が集まっており、これまた随分と金が掛かっている。トレーニング機器や武具、資金などを提供しているスポンサーがいるようで、至る所に企業名のロゴが見える。

「この学校の部活とは総じてダンジョンダイブに関するものだ。武器やジョブによって活動が分かれている。特定ジョブの知識を増やすため、または自分の得意な武器を鍛えるためにも部活動参加を奨める。今週末に部活動勧誘式があるが、希望者はそれを見てよく考えてから入るように」

　武器に関する部活は剣術部、弓術部などがあり、剣術部でも第一剣術部、第二剣術部など、同じ剣術でも派閥やスポンサーで分かれている。ゲームでも部活に関連するイベントは豊富にあったが、俺はダンジョンに潜る時間が欲しいから入らないでいこうかと思っている。帰宅部サイコー！

　……まぁ正直なところ、部活関連は醜悪な人間関係や暴力への対処など、面倒なイベントが満載なので回避したいというのが本音。それなりの報酬はあるが、あれらをリアルで経験したいとは思わない。主人公に任せた。

　最後にＥクラス一行はダンジョンの入り口付近へ。

　この学校の校舎や施設は入り口から半径１５０ｍほどの限られたマジックフィールド領域をフルに活用するため、ダンジョン入り口を覆うように建っている。マジックフィールドは冒険者教育のために使うのはもちろん、ダンジョン産の資源や素材の研究を行うのにも必須。

　しかしダンジョン内部へ入るには冒険者ギルド広場にある改札を通る必要がある。学校内からは入り口付近に行くことは出来ても、セキュリティーを通さず中に入ることはできない決まりだ。

「冒険者証の登録は冒険者ギルドでしてもいいが、まだやってないならこの用紙に必要事項を書いてこちらに提出しなさい。すぐにでも冒険者証が発行しよう」

　いちいち冒険者ギルドへ登録しに行く必要はなかったようだが、少しでもダンジョンに早く入りたかったので問題は無い。

「それではいい時間なので今から昼飯とする。向こうにあるのが学食。今後も利用を考えているなら回数券を買っておくといい」

　先生が時計を見ながら学食を指さす。外でも食べられるようテラス席があるのでレストランのようだ。学食入り口周辺ではすでに沢山の生徒が集まっていて、巧妙によく出来た食品サンプルメニューを眺めている。

　日替わり定食が２８０円……だと……しかもご飯と味噌汁はお代り自由！？　このボリュームでこの値段なら弁当じゃなくてもいいかもしれない。俺の胃腸が唸るぜ！

「１３時に冒険者ギルド前の広場に集合としよう。ダンジョンに入るから食いながらでも三人から五人程度の班を作っておけ」

　ダンジョンではモンスターが奇襲を仕掛けてきたり落とし穴などのトラップもあるめ、一人にトラブルが起きても互いの安全を確認できるようパーティーを組み、複数人で潜るのが基本だ。

　でも、やらかした俺と組んでくれる人なんているのだろうか……

「俺と組みたいヤツいるかー？　前衛２、後衛２募集」「あたし《マジックアロー》使えるよ～？　誰か組まない？」「こちら前衛１後衛１。サーチスキル持ち優遇しまーす。いないかな」「ねぇねぇ君、俺と組まない？」「え～どうしようかな～」

　一斉にパーティー募集や自身の売込みが始まる。まだ飯の前だってのに陽キャ共は楽しげに勧誘し始める。陰ながらこっそりそば耳を立ててみると。

（やはり攻撃スキル持ちが一番人気か）

　低階層では特殊エリアを除き、凶悪なトラップやモンスターもいないので事故率が低く、効率が重視される傾向があるようだ。クラスメイトの募集要項を聞いてみれば回復よりも攻撃スキルが人気なのも頷ける。

「赤城君、よかったら私たちとどうかな？」

　赤城君が複数の女子から勧誘合戦させられている。羨ましいっ。イケメンのうえに最初から《剣術マスタリー》とかいう超優良スキルを持っているから、人が集まるのも当然と言えば当然なのだけれど、どうやらカヲル達と組むようで誘いを断っている。

　ピンクちゃんとカヲルが立木君の手を引っ張りながら赤城君を呼んでいる。あの四人は上手くやっているようだ。……うっ、まずい。またブタオマインドが悲しみの雄叫びを上げそうなので何か気をそらさねば。そうでなくてもボッチ濃厚で泣きたいのに。

「みんなっ、あそこ空いてるからまずは席を確保して食べながらパーティー談義しましょうかっ」

　委員長体質の大宮さんが「学食入り口で集まっているのも邪魔になるので」と言いながらが空いている席を指さす。そういうことならと席に荷物を置いてランチを頼みにいくクラスメイト達。

　ネガティブ思考に包まれそうなので俺も飯を食って気を紛らわすとしよう。今日の日替わり定食は、ご飯に味噌汁、鯵フライとサラダに漬物と非常にバランスがいい。ご飯を山盛りにして席に着く。

「それじゃ頂きましょうっ」

　大宮さんの号令で昼食開始となる。食べながら端末でステータスを見せ合い、自分をアピールして売り込んでいくクラスメイト達。最初のパーティー編成はそれほど重要ではないが、初めてのダンジョン探索なので皆真剣に取り組んでいるようだ。

　俺もさり気なく初期スキル持ちだとアピールするものの、苦笑いどころか露骨に嫌な顔をされて泣けてくる。まぁ《大食漢》とか「いつも腹ペコで大食い可能です」と言ってるようなもんだしアピールになんてなるわけがないか。

　食事が始まって数分だというのに数人組のパーティーが次々出来上がり、和気藹々とした雰囲気に。この後は武器を借りに行こうかという話になっているようだが……

「また組んでない人いる？　あ……ブタオね」

「スライムにすら負ける奴なんてパーティーに入れてもね～」

「あいつマジで負けたの？　あの体型だから？」

「誰か入れてあげなよ～、あ、ウチはもう満員だし無理だけど」

　俺の学園生活、初っ端からコケ過ぎた。な、泣いて無いもんね。ちょっと花粉が目に染みただけだ。

　だがそんな中でも拾う神あり。

「もうっ、成海君だってちゃんとこの学校に受かった生徒なんだからっ。じゃぁ、よかったら私達のパーティーにくる？」

　ふと顔を上げると大天使が――いや違った。大宮さんが微笑んでいた。

「ほ……ほんとっすか！　ありがとうございますっ！」

　ゲームでは次期生徒会長派だった俺だが、こりゃもう委員長大宮派に転向するしかねぇ。

「ええ～！？　サツキ、ほんとに入れるの？」

　眼鏡のカワイ子ちゃんが大宮さんの勧誘発言に反応する。どうやら大宮さんと同じパーティーメンバーのようだ。俺にあんな噂が立てば反対寄りなのは仕方がないのかもしれない。

　だがボッチになってたまるかという反骨精神を前面に、何食わぬ顔で「ヨロシクオナシャース！」 と、にこやかに挨拶しておく。女子パーティーに入れるなんてオラちょっぴり興奮しちゃう。

　「じゃぁちょっと断り入れてくるねっ」とどこかへ行ってしまう大宮さん。眼鏡の女の子によると他に三人の女子グループと合流する予定だったらしく、俺のためにその女子グループへ辞退を申し出にいったとのこと。俺が入ると六人グループになってしまうからだ。なんだがすまないね。

　戻ってきた大宮さんが早速作戦会議をしようと近くに席を寄せてくる。少し吊り目のくりっとした顔が小動物感がして可愛らしい。シャンプーか何かのいい香りがしてきて内なるブタオマインドも大興奮だ。いや俺のマインドかも。

「じゃぁお互いの情報交換でもしましょうかっ。まずは私からね。名前は大宮皐よっ」

　これが私のステータスだと端末から画面を開いて見せてくる。覗いてみると【ウィザード】になりたいという割にはＡＧＩが高く、近くの敵の気配を察知する《気配察知》を持っていた。ゲームでは希望通り【ウィザード】になってたが、小柄ですばしっこそうだし【シーフ】方面の適性もあるかもしれない。

「私は新田利沙だよ～。【アーチャー】やりたいと思ってたけど～、最近は魔法系もいいかな～なんて」

　真っ直ぐのセミロングで眼鏡ッ娘の新田さん。やや垢抜けていてキュートというよりビューティーな雰囲気のお姉さん系女子だ。言動は柔らかく天然っぽくみえるが、瞳の奥には何か冷静な思考を感じる。【アーチャー】志望とのことで、すでに自前の弓を肩に担いでいる。

「んじゃぁ俺は……」

「知ってるよ、成海君でしょ。今有名だしね～……スライムに負けたってホントなの？」

「リサ、そんなこと聞いたらダメだよっ！」

「い、いやいいんだ。一応【プリースト】志望だけど、メイス振り回して前衛やろうかと思ってる」

　マイナス方向の有名人ね。強さこそ正義という冒険者学校だしマイナスに見られるのはデメリットが大きい。ちょっとくらいは弁明したほうがよかったかもしれない。昨日医務室に運ばれたときにステータスを計測して更新してあるので見せてみるか。

「もうレベル３なんだ～……あれ～？　じゃあスライムかゴブリンは沢山倒してるってことなの～？　パワーレベリング（※１）……は、１、２階程度では流石にやらないよね～」

　人差し指を頬に当てて首を傾げる新田さん。レベル３ならスライムなんかに負けることもおかしいし、レベルが上がるほど倒してるのに負けることはもっとおかしいと口にする。

「あの時はちょっと体調が悪くなってさ」

「やっぱりっ。この学校に受かってる生徒はスライムなんかに負けないよっ」

　フレンドリーに接してくれる大宮さんと新田さん。思っていたよりも俺に対する拒否反応がなくてびっくりするほどだ。新田さんについてはこれほど美人なのにストーリーに出てきた記憶はない。まぁ主人公やヒロインと接点が無ければゲームに登場することもないので、それほど不思議なことではないか。

　陣形確認をしながらの食事を終え、武器工房へ向かうことに。レンタル料は無料だが端末で登録する必要があると教えてくれたので良い武器があったら借りてみよう。ダンジョン産の金属は入っていない普通の鋼製武器とはいえ、買ったとしたらＰＣ一式くらいの値段がするそうだ。

「これなんてどうっ？」

「この弓いい感じかも～後で借りてみようかな」

　ワイワイと武器選びに精を出す大宮さんと新田さん。俺も良いメイスがないかとレンタルコーナーを物色。手に持って握りを確かめてみるが、やはり金属の武器となると小型の武器ですらずっしりとした重みを感じる。負担となりそうだ。現時点のＳＴＲで振り回すなら木製のほうが良いだろうか。鬼の棍棒のようなトゲトゲが付いた木製メイスがあったのでそれにしておいた。

「そろそろ１３時だし、集合場所に向かいましょうかっ」

「成海君、レベルが一番高いし頼りにしてるよ～？」

「ははは、頑張ります」

　\*・・\*・・\*・・\*・・\*・・\*

　多くの冒険者が行き交う冒険者ギルド前の広場。

　ぱっと見えるだけでも数千人はいるだろうか。突入前に作戦会議を開いていたり、茣蓙を敷いてフリーマーケットのようなものを開いている人もいる。ここは行商をするにも登録制となっているらしいが、ここで店を開けるなら儲かりそうだ。

　集合指定場所である時計台の下を見れば、クラスメイトのほとんどがすでに集まって会話していた。

「オレ、もうレベル２だぜ」

「すっごーい」

「でも他のクラスはもう１０を超えてるのがいるらしいよ」

　俺や赤城君達と同じように端末が配られたその日にダンジョンに潜ったクラスメイトも何人かいたが、それはどうやら少数派のよう。ほとんどは冒険者ギルドの図書室で情報収集や資料集めをしていたらしい。

　この国のダンジョンの入場条件は１５歳以上――ただし中学生は不可――だ。中学を卒業してすぐにダンジョンに入ろうにも、通常は冒険者講習を経て実地訓練とテストと通過する必要があり、冒険者申請から１０級の冒険者証を貰うまでに最短でも２カ月ほど時間が掛かってしまう。

　一方、冒険者高校の生徒なら冒険者ギルドにて端末を見せればすぐに９級の冒険者証を貰えるという特典がある。中学卒業と同時に申請するより端末が配られるまで待ったほうが潜るまでの期間が早いのだ。よってＥクラスのダンジョン履歴は、端末を配られた入学式以降、つまり最長でもここ３日間しかないことになる。

　クラスメイト達はその３日間をモンスターを調べるだけでなく、武具調達やパーティーの連携確認、冒険者ギルドの見学など様々なことに費やしていたようだ。

（慎重すぎる気もするが、俺もゲームの知識が無かったらそうしてたのかな）

　周囲の雑談に耳を傾けながら大宮さん達と集合場所で待っていると一際派手な冒険者集団がやってきた。

　ピカピカに磨かれた金属製の全身鎧に大げさな装飾が施された大剣を担ぐリーダーらしき前衛の男。その後ろにマジックアイテムらしき紋様のローブと仮面をしている後衛らしき冒険者が複数人続く。

（冒険者高校の校章を付けてるってことは同じ学校の生徒……校章の色からして三年生か）

　全身防具なんて着てたら生徒なのか一般の冒険者なのか分からなくなるため、授業中のダンジョンダイブでは胸の位置に冒険者学校の生徒を意味する校章を付ける校則がある。装備を見るにレベル２０前後だろうか。広場にいる冒険者のほとんどがレベル１０以下なのでＳＴＲ要求値が高めの重装備はかなり目立つ。

「すげぇ装備だな。冒険者高校の生徒らしいぞ」

「レベル２０を超えてるって本当？」

「まだ高校生なのにそんなに高いなんて凄げぇ」

　周りにいる冒険者達がヒソヒソと話しながら見ていると、全身鎧の男が突如《オーラ》を発する。

「……邪魔だ。どけ」

　沢山いた人たちは強者による《オーラ》で威圧され、広場に道が出来る。そこを先輩方は我が物顔で通り過ぎて行った……

（おいおい、レベルが高めとはいえ一般人に向かって威圧的に振舞っていいものか？）

　俺も刈谷イベントのときにあの圧をモロに受けたが、何か巨大な生物に心臓を鷲掴みにされたような感覚になったのを覚えている。通行の邪魔になったとはいえ安易に他所の人たちに対してあれ以上の圧を掛けるとか、この学校のコンプライアンスは一体どうなっているのか問いただしたい。

　そういえばゲームだったときも学校にいるレベル高い奴らは妙に高圧的だった。俺だって強くなれば少しはイキりたくもなるかもしれないが……こういうのを見ると不快だし、自重していくべきなんだろうな。

「よし、みんな揃ってるか？」

「はぁはぁ……すみません、遅れました」

　定時になり先生が点呼を取ろうとすると、学校方面から赤城君が走ってやってきた。その後ろにカヲルとピンクちゃん、立木君が息を切らせながら走り込んでくる。工房で武器を選んでて思いのほか時間が掛かってしまったと言ってる。レンタル品とはいえ武器は冒険者の命とも言えるものだし仕方が無いね。……しかし、いちいちブタオマインドが嫉妬で暴走しそうになるのは止めてほしいものだ。

「それではパーティーのリーダーを決めて、メンバーの名前を報告しろ」

　うちのリーダーは当然大宮さん。パーティーごとに報告が終わると胸に付ける冒険者学校の紋章が配られ、順次ダンジョンへの移動を開始する。

「あの機械に冒険者証か腕の端末を当てれば入れるようになる。報告を済ませた者から順に入れ」

　パーティーごとに端末を掲げ、ダンジョン入口へ行くための通路へ入る。昼過ぎだからか、それほど混まずに境界面まで来ることができたのは幸いだ。クラスメイト達は真っ黒で異様な境界面に躊躇なく潜っていくが、この粘着質な感触はどうにも慣れそうにない。

　入り口から入って少し進んだ場所で一度集合し、先生が今日の予定を説明していく。どうやら今回は２階までの道を往復するだけらしい。端末の地図で現在位置を確認しながら歩くようにと言われ、各パーティーごとのＭＡＰ管理役が端末を弄りながら２階へのメインストリートを誘導し移動する。

　１階入り口から２階へ行く通路は冒険者の行列が途絶えず出来ている。モンスターが現れた瞬間に倒されるのは俺が最初に入った時と同様で、倒すモンスターが全くいない。

（こりゃ武器を借りても全く使う機会がないぞ）

　クラスメイトの何人かは重い武器を借りて担いでいるが無駄な労力になりそうだ。先程から女子に良い所を見せようとしていた男子も頭を垂れる。

「人だらけ。これじゃ観光名所みたいなものね～」

「道を外れないと冒険者だらけねっ」

　初めてこの世界のダンジョンに来たときは人の多さに驚いたが……日本全国から何十万人も集まるならこうも混雑してしまうのは致し方無し。特に、階と階を繋ぐメインストリートは人の行列が途切れない。もし１階で戦いたいならこのメインストリートを外れた場所に行くか、夜中など人の少ない時間帯に入るしかない。

　ゲームではダンジョン内にプレイヤーしかおらず、浅層なんてすぐに通り越すためガラガラだった。ゲームとそれが現実化した世界ではこういった違いもあるようだ。

　入り口から２ｋｍ程歩いただろうか。そこには数百メートル手前からでも見えるほど巨大な空洞が見える。天井には照明が炊かれていてここから見るとかなり眩しい。広間の奥には２階へ続く階段もあり、救急所、トイレなどの標識もある。オリエンテーションはここがゴールだ。

　クラスメイトの点呼を終えた先生がここでホームルームを始める。

　階段を降りた先にも広場があり、一階と同様に自動販売機や軽食を出す休憩所がある。ただお値段は多少高く、下の階に降りるほど値段が上がっていく。モノを買うなら外で買っておいたほうがいいと先生が忠告してくれる。

　高山でもジュースが高くなる仕組みと同じで手間賃や運賃が含まれているから高くなるのはやむを得ない。ここに来るまで小型輸送車を何台か見たが、そういったサービスのための荷物も運んでいるのだろう。

　また４階には宿泊施設やアイテム取引所などもあるが、かなり割高なので基本的に特権階級や観光客でないなら利用しないそうだ。ゲーム内でも４階に宿泊施設があったものの終始ダッシュで高速移動ができたため、そんな階層で宿泊をする人はいなかった。

「今日は少し早いがここで解散するとしよう。この後はパーティーで狩りをするなり自由にしていい。明日から普通に授業だから遅れるなよ」

　今はまだ二時を過ぎたばかり。大宮さんに１階を一緒に回ろうかと誘われたが、２階を回りたかったので断腸の思いで遠慮しておいた。可愛い女の子達とダンジョンダイブを楽しむのも良いが、一刻も早く先へ進みたいという欲が出てしまったのだ。

　「お互い頑張ろうね」との激励を貰い、笑顔で別れることに。彼女達にはボッチから救ってきれた借りができた。いつか恩を返したいね。

（※１）パワーレベリング

高レベルプレイヤーに助けてもらって経験値を稼ぎ、高効率かつ安全にレベル上げをすること。

　――　早瀬カヲル視点　――

　冒険者学校に入ってすぐにユウマ、ナオト、サクラコという素晴らしい仲間と出会えたのは僥倖も非常だ。

　入学初日にユウマと話す機会があり――実は私から話しかけたのだが――冒険者について話が盛り上がって、流れでダンジョンに潜ることになった。この土日は非常に充実した時間を過ごせた。

　これからどうやって強くなっていくべきか、ダンジョンを攻略していくか。また成績を上げてＡクラスを狙っていくか。私にとってどれも手探りで悩ましい問題であった。それらについて真剣に相談し励まし合っていける仲間ができたというはこの上なく幸せなことだと思う。

　ユウマは勇気があり向上心も高く、才能の塊だ。今までも鍛えはいたものの、それほど剣術の心得はないと言っていた。しかし獰猛に襲い掛かってくるゴブリンを倒すその姿は見事であり貫禄すらあった。Ｄクラスのならず者に対しても毅然とした態度で立ち向かったのはカッコよかった……私とて乙女であり、あのような姿には心を打たれても仕方が無かろう。

　ナオトは一見仏頂面に見えるが非常に気配りができ、紳士的であることは私の中で彼の評価を上げる大きなポイントとなっている。また彼の魔術関連の賢知は広く深いということが分かった。剣しか知らない私は魔術方面には疎い。これから先、一流冒険者を目指すにおいて魔術師と組むこともあるだろう。その際にナオトと共に戦った経験と、そこから学びえる知識は大いに糧になるはずだ。

　サクラコは、失礼だがあのふわふわした見た目と性格なのであまりダンジョンで期待できないと思っていた。しかし近接戦において同じダンジョン初心者とは思えないほど高い運動能力を持ち、回復魔法も使いこなし、おまけに視野も広い。彼女の才能には舌を巻くばかりだ。もしかしたらユウマをも超える才能があるのではないだろうか。

　そんな素晴らしい仲間に比べて私には大した才能を持ち得ているわけでも無く、あるとすれば幼少よりやっていた剣道くらいしかない。それでも剣術という分野で皆と話し合い貢献できたのはこの上ない満足感と充足感を齎した。こんな私でも役に立てるのだと。

　だがこのままでは才能溢れる彼らの隣には居続けられないだろう。今後も背中を任せられる関係でいられるよう、これまで以上に必死に努力しなければならない。学校生活にも気合も入るというものだ。

　とはいえ、今日のオリエンテーションは２階までのメインストリートを往復するだけ。まともに戦闘なんてすることは無く、すでにここは通った道。目新しいものもない。

「１階はモンスターも弱いし、どうせなら３階まで行きたいものだな」

　少しつまらなそうに言うユウマ。確かにレベルアップを経験している私達にここは物足りない。この四人なら２階ですらもう余裕だろう。

「でも、これが終わったら解散ですし。この後また四人で狩りにいきませんか？」

「あぁ、僕もそう思っていた。カヲルもどう？」

　ナオトがこちらに顔を向け聞いてくる。もちろん、望むところだ。

「せっかくいい武器をレンタルして持ってきたのだからな。お供させてもらおう」

　了承の言葉と笑みで返す。お互いくすりと笑いながらダンジョンを確かめるように一歩一歩を踏み歩く。これからのことを見据えるように目の前を見てみれば――

　――恰幅の良い男子生徒が大股で歩いているのが目に入った。胃がピリリと痛む。

　昨晩のことだ。

　風呂から上がり、予習でもしようかというとき”ストレス”がやってきた。

　なんと颯太がスライムごときに負け、搬送されたというショッキングなニュースがサクラコから齎されたのだ。学校の掲示板に書き込まれ、噂になっていたらしい。

　スライムといえば入場制限が下りる年齢ならばまず負けることはありえない。さらにいえば子供でも勝てると言われている最弱のモンスター。それなのになんたる無様。醜怪極まりない。

　成海家のご両親は颯太の無事を喜んでいたが、あんな体たらくを知って心を痛めているに違いない。私がもっと厳しく鍛えてやれば良かったのだろうかと呵責に苛まれそうになるものの、本人にやる気が無いのだから何を言っても無駄だろう。

　今朝も迎えに行ってやったのだが、昨晩のことについて何も気にしていないようで、呑気に欠伸を繰り返して向上心のかけらも見られない。冒険者学校の生徒ならばスライムにすら敗北したことにもっと気にするべきではないのか。

　しかし私のほうでも気になることはある。

　あれほど私に執心していた颯太が、入学式以降ほとんど構ってくることなく大人しくしている。いつもなら無意味に電話をしてきたり突然押しかけてきたり、デートをしろと強要してきたりするのに。土曜の朝練の時に少し話はしたが、いやらしい目で見てくることも無ければ、ユウマ達とのダンジョンダイブにも割り込んでくることもなかった。

　今日だってパーティーを組めと言われたとき、必ず私を誘いに来ると身構えていたというのに一言も声を掛けてこなかった。

　――もしかして私に関心が無くなった？

　いや、それなら”結婚契約魔法書”を返却すべきだろう。あれがある限り、私は大きな弱みを握られ逆らうことができない。それを返さないということは私に対する執着は捨てずに持ち続けているということだ。

　それにあれほど努力を嫌い成長が皆無だった颯太がそんなに急に変わる訳が無い。現に目の前で、あんなに鼻の下を伸ばしてデレデレしているではないか。ここはダンジョンで、オリエンテーションの最中だというのにデートタイムと勘違いしている。実に情けない。

　両サイドにいる女子は……確か大宮さんと新田さんだったか。きっと颯太がクラスメイトから忌避されているのを放っておけなくて、同情心から組んであげたのだろう。彼女たちは彼奴の本性を知らないのだ。この後にでもセクハラ被害に合わないよう忠告しておくべきだろうか。

　はぁ。彼奴のことを考えるだけで、ため息が止まらない。

　私は一流の冒険者に近づけるよう頑張りたいし、自由な恋ができるようにもなりたい。颯太のための時間なんて取りたくはないのだ。一刻も早くこの身を縛る結婚契約魔法書の在処を見つけ、後顧の憂いを断たなければならない。

　今のところなんの手がかりも掴めていない。余りにも颯太を嫌いすぎて疎遠になりすぎているせいかもしれない。我慢して近づき颯太の機嫌でも取るべきか。でもあの視線には耐えがたい……

　一番いいと思うのは妹の華乃ちゃんと仲良くなって堂々と成海家に遊びに行くことだが……最近は華乃ちゃんに声を掛けても反応は悪く、嫌われている可能性すらある。彼女は兄である颯太を慕っているので、私の颯太を嫌う態度に気づかれたのかもしれない。

　全く、前途多難とはこのことだ。

　後ろ髪を引かれる思いで大宮さん新田さんと別れ、初めての２階へと足を踏み入れる。

「さてと……ゴブリン戦か」

　ゴブリン。モンスターレベルは２。ゲームでは身長１００～１２０ｃｍほどの亜人種で、顔は醜く、肌は緑色。非力だが知性はそれなりに高く、人間を見つけたらすぐに襲わず角待ち攻撃を狙ったり徒党を組んでくるズル賢さがある。１階にいるスライムと比べれば格段に危険度は高い。とはいえ所詮は子供並みの身長と力しかなく、単体なら棍棒にさえ気を付けて戦えばそう難しい相手ではない。

　一方で稀に出現するゴブリンチーフは金属製の武器を持っている場合があるので注意したほうがいいだろう。肉体的な強さは普通のゴブリンとそう変わらず、モンスターレベルも３なので経験値的には美味しいモンスターとも言えるが。

　３階へ行く道は当然のように混んでいるため、ゴブリンが比較的ポップしやすい「ゴブリン部屋」と呼ばれる場所へ移動する。ここに湧くゴブリンは倒しても比較的早くポップし、他の場所と比べゴブリンチーフが抽選ポップ（※１）しやすいのだ。

「ここもあまり人がいないんだな。どうしてだ？　まぁ、いないならいないほうがいいか」

　ゴブリン部屋をこっそり覗くと２体のゴブリンがキャッキャと話し合っていた。あれも歴とした言語なんだろうか。しばらく観察していると１体が丁度近くに来たので後ろからトゲ付きの棍棒を振り下ろす。

「後頭部アターック！！」

　一撃で沈み魔石となるゴブリン。手ごたえありだ。ここを叩かれれば普通の人間でも一撃。残ったもう一体のゴブリンは驚いたのか、もしくは怒ったのか、棍棒を構えながら大声を上げてこちらを威嚇する。

「来ないならこっちから行くぞっ」

　圧倒的なリーチに加え威力でも勝る俺はアグレッシブにメイスを振り下ろす。それに対しゴブリンは手持ちの棍棒を横にして俺の攻撃を頭上で受け止めた！　やるじゃねーか。

「だがお腹がお留守だぜ」

　ゴブリンの腹を蹴り上げるとゴブリンは仰向けに吹っ飛ぶ。その隙を逃がさずすぐに距離を埋めて再びメイスを振り下ろすと呆気なく魔石となった。

「しっかしスライムと違って対人型は何だか後味が悪いな。死体が残らないだけマシか……」

　スライムとは違いゴブリンは人の形をしているため微妙な後味の悪さが残るが、ゴブリンの顔を近くでみると絶対に相いれない生物だと分かるから気にする必要はないな。

　この魔石は……１００円もしないだろう。ダンジョン歴数日でもここに来ようと思えば来れる。そこらの一般人でも倒せてしまうモンスターの魔石なんてそんなもんだ。レベル上げのオマケと割りきって倒しまくるとしよう。

　モンスターは基本的に黒い靄から姿を現した瞬間は２～３秒ほどは無防備に立ち尽くしているだけなので、その僅かな時間に攻撃を与えられるならば大きなアドバンテージが得られる。

　そのアドバンテージを得るには「スライム部屋」や「ゴブリン部屋」のようなモンスターがポップする時間と場所が確定してることが条件だ。このゴブリン部屋ではゴブリン３体がきっちり１０分間隔で倒した順にポップするため、一人なら丁度いいペースで狩ることができる。

　こういった場所は階層に数か所ほどしか無く、ゲームだったときはレベル目的のプレイヤーに人気すぎて場所取りが困難だった。だがこの世界ではあまり人気が無いのか、それとも知られていないのかは分からないが、周りに人がいる気配はない。つまりは独占できて美味しい。

　それにしても。初めはあまりの体重と筋力の弱さによる鈍い動きに抵抗があったものだが、数日も経てばこの体にもだいぶ慣れてきた。ちょっとしたバランスのとり方や休憩タイミング的なものが感覚的に分かるようになって、体調管理も随分としやすくなった。

　とはいえ、この体型で戦い続けるのはデメリットが大きすぎる。体重超過による動きの低下自体はレベルアップによる肉体強化で補正できるとしても、今後厳しくなるであろう戦いのために少しでも余力を残しておきたい。長期戦を強いられればすぐに息が上がってしまうし、下手すれば死ぬ可能性があるのだから。

　筋肉痛の様子を見ながら、もう少しトレーニングの負荷も上げていいかもしれない。まぁ一番きついのは食事制限なんだが。

　それから順調に５体ほど狩った頃――

「おっと、金属製の武器持ってるぞ。ゴブリンチーフか？」

　ゴブリンチーフだろうと何だろうと最初の数秒は棒立ちのため、関係なく一発で仕留めてやるぜと思ったら、頭に兜をしてやがった。しょうがないので武器を持ったほうの肩に振り下ろす。

「ッギャーアアッギャッギャ！！」

　痛みのため悲鳴を上げて武器を落としてしまったゴブリンチーフ。痛みに耐えながらなんとか武器を拾おうとするが、それを読んでいた俺のほうが早い。残った左腕にメイスをぶち当て、その後に横殴り。

　ぶっ飛んだゴブリンは魔石と化し、同時に錆びた短剣も落ちた。

　マジックアイテムではなく普通の短剣っぽいが、見ただけでは確実なところは分からない。鑑定するにも金が掛かるので、早い所《簡易鑑定》のスキルが欲しい所だ。

「兜をしてる場合があるからファーストアタックに後頭部以外のパターンも考えとくか」

　その日は夕食前まで狩り、レベルは上がらずレベル３のまま。無理はせず今日のところは切り上げる。ボロボロの武器を３つ手に入れたが使い道など無いためクズ屋にでも売ってしまおう。お小遣い程度にはなるかもしれない。

　\*・・\*・・\*・・\*・・\*・・\*

　通常授業が始まる。二度目の高校生活なので授業内容なんか余裕かと思いきや、高校一年の授業としてはかなりハイレベルな問題を解かされ、この学校のレベルの高さに舌を巻く今日この頃。

　ホームルームが終わって放課後になるとクラスメイト達はさっさと教科書をしまい、仲の良い者同士で集まりダンジョンダイブの予定作りをしている。

　赤城君はピンクちゃんといつも話しているが、ダンジョンのほうは頑張っているのだろうか。今月中にレベル１０程度にならないと刈谷を倒すには難しくなるはず。まぁ、あの余裕そうな態度を見る限り何か考えでもあるのだろう。

　カバンに荷物を纏め、ゴブリン戦をイメージしつつ教室から出ようとすると、鈴が鳴るような凛とした声に引き留められた。

「ちょっと」

　振り返れば幼馴染で許嫁のカヲルがいつものように腕を組み、若干不機嫌そうな顔で立っていた。そういえば学校では颯太と名前で呼ばないんだな。

「どうした？」

「……そろそろ。練習したほうがいいのではないか？」

「あれ、ダンジョン１階ではない……ここって学校か？」

　この場所にもゲートの魔法陣があるのでちゃんとしたゲート部屋のようだが、魔法陣があること以外は学校の教室にそっくりだ。だが窓は無い。周りを確認していると２０秒ほどでゲートは閉じ、壁には魔法陣模様の溝だけが残る。その壁の逆方向には机が山積みになっている。

　教室に似た薄暗いゲート部屋から外へ出てみる。思った通り冒険者学校の内部だったようで、階段を上ると見覚えのある１階のエントランスがあった。ということはゲート部屋は学校の地下１階にあるということか。

「どうなってんだ……何でダンジョン外部にゲート部屋があるんだ？」

　ゲームのときも何度もゲートのお世話になっていたが、ダンジョンの外に出たことなんて一度もなかった。ダンジョンの構造やシステムがゲームと違うというのは元プレイヤーのアドバンテージが損なわれ、計画の変更を余儀なくされるかもしれない。これは悩ましい問題になりえるな。

　そも、こんな場所にゲート部屋があるのは何故なのか。人為的に作られた？　仮に人為的にゲート部屋を作る技術があるならば、日本はダンジョン攻略においてもっとリードしていてもおかしくはないはず。

　試しにもう一度戻って隅々まで調べてみても何の判断材料も見当たらず。うーむ。

　しかしながら、学校内からセキュリティーを介さずダンジョン内に入れるのは嬉しい誤算かもしれない。家族をダンジョンに入れるために《ゲート》スキルかマジックアイテムを用意しようと考えていたけど、これでその問題は解決されたようなものだ。

　毎回人ごみに揉まれる正規の入り口にはうんざりしていたし、次からはこの場所をこっそり使わせてもらうとしよう。

　　――　立木直人視点　――

　すでに入学式から２週間ほど経ち、このＥクラスもようやく落ち着いてきた。休憩時間になれば冒険者学校だけあって必然的にダンジョンの話題が多くなる。

「ゴブリン余裕だったぜ」

「私達もパーティーで２階に行くんだけど、良かったら教えてよ～」

　今、窓際で話している男子生徒達は２階を周回しているようで、ゴブリン戦の時の勇姿を女子に身振り手振りで伝えている。ゴブリンは鈍器を持った子供程度の強さでしかないが下手な所を殴られれば大怪我するし、金属武器で攻撃してくるゴブリンチーフは強敵となる。さらにゴブリンは人型なので殺すことに抵抗を覚える冒険者も多く、ここを乗り越えてやっていけるか試金石となるモンスターでもある。

　ダンジョンダイブ初心者はモンスターとの戦闘やダンジョン内での移動に慣れるために、２階の周回が推奨される。安全マージンを考えれば１階周回でもいいが、誰でも勝ててしまうスライムしかいないので経験になるとは言い難い。クラスメイトの皆が１階を飛ばし、こぞって２階周回をしているのはそれが理由だ。

　レベルアップを競い、毎日潜っているクラスメイトも多い。この学校に入ったからには誰しもがＡクラス入りを目標にしているからだ。

　もっとも、現時点で最前線に立てているのは僕たちのパーティーだろう。僅か１０日でユウマもカヲルもサクラコも、そして僕もレベルも３となり、オークやゴブリンメイジ狩りのため３階を周回出来るほどだ。そろそろ４階に行ってもいい頃合いだろう。このまま突っ走り、立ち止まるつもりはない。

　この学校は自分だけが如何に優秀だとしても、それだけで這い上がることは困難だ。レベルアップとダンジョン攻略には優秀な仲間が欠かせない。しかしそんな優秀な生徒はどのパーティーからも人気が高く、引く手数多となってしまう。Ａクラスへ昇格するにはどれだけ優秀な仲間をどれだけ早く確保できるかが焦点となる。

　その点、驚異的な才能を誇るユウマと寮のルームメイトであったことは幸運だったし、サクラコとカヲルという美しくも才能のある女子とパーティーを組めたことは利運であったのかもしれない。

　また情報の量と正確性、速度も重要だ。どんな生徒がいてどれほど優秀なのか。加えてダンジョンダイブの攻略情報も欠かせない。何気ないクラスメイトの会話には思いがけない情報が潜んでいることを僕は知っている。そしてそれらの情報を得ることが可能なのも、僕に《聴覚強化》というスキルが備わっていたおかげだ。

　指向性を持ったスキルなので音源が乱雑に点在している教室内でも特定の方向だけを狙って誰にも気づかれず聞くことが出来る。冒険者学校の入学試験や面接試験でもこのスキルのおかげで乗り切れた部分もあった。ズルくても活かせるのなら使うべきというのが僕の持論だ。

「この刀買ったんだ、結構したけど」

「ＤＵＸじゃん、すっげぇ」

　教室後方にいる生徒が布袋に包まれた日本刀を取り出す。ＤＵＸとは冒険者間では有名な武具ブランドで、値段は少々高いが自前で武具開発を行い数多くのユーザーに信頼されているメーカーでもある。

　武器は冒険者の命と呼べるもの。レンタルでもいいと言っているような輩はいつまで経っても底辺のままだろう。僕は祖父から代々家に伝わる魔法杖を持ってきてある。この点からもスタート地点からして優位に立てている。

　……そういえば、バットを武器にしていた阿呆がこのクラスにいたような気がする。誰だったか思い出そうとしていると教室中央ではユウマを取り囲んでいる女子達がキャーキャーと黄色い声を上げる。

「悠馬君、今度一緒にダンジョンどうかな？」

「あ、ずっるーい。私も誘おうと思ってたのに～」

　ユウマは男の僕ですら見惚れるほどの端正な顔立ち、そして誰とでも紳士的に分け隔てなく接する態度は彼のカリスマ性を一層際立たせている。あれで冒険者としての才能まで与えるのだから「天は二物を与えず」なんて諺は戯言に過ぎないのだろう。

「悠馬君に比べて、あのブタオは……」

「義理だとしてもアレとは絶対組みたくないよね」

「スライムに勝てないってある意味凄いー」

　ブタオ……あぁ、教室の最後方にいるあの太った男のことか。真実かどうか分からないがスライムに負けたという悪い噂が広まっており、ろくにパーティーを組めない状況になっているという。

　今後も誰とも組めないならばダンジョン攻略もままならず、レベルを上げることも難しくなるであろう。経験値効率の良い「同じの強さ」のモンスターを倒そうにも、ソロでは何度も無傷で倒し続けられるわけもなく、かといって格下を倒しても微々たる経験値しか手に入らない。加えて緊急時には誰も助けてくれない。ソロダイブなどというものは不安定で長続きしないと歴史が証明している。

（近々、クラス対抗戦もある。足を引っ張らなければいいのだが……）

　女子生徒達が悪口をあんまりにも大声で言うものだから、ブタオは目尻に涙を浮かべ、無駄に横方向へデカい体を精いっぱい縮こませているではないか。

「な～る～み～君っ」

「あ、大宮さん……」

「落ち込まないで～組む人がいないなら私達が組むよ～？」

「ありがとう、新田さん。でも今のところ大丈夫だよ」

　優しい声を掛ける大宮と……知的な感じで実は個人的に気になっている新田。確かオリエンテーションでも彼と組んであげていたな。仲間外れを放っておけない優しい性格なのだろう。

　この学校の成績は学力やダンジョン攻略など個別に採点されるものが大部分だが、クラス対抗戦などクラスとしての成績加算もあるため、できるならば落ちこぼれを出したくない。ブタオがこのままソロダイブを強いられ、クラスの足を引っ張るようなら僕の方で救済しようかと思っていたけど、大宮達がやるなら任せてしまってもいいだろう。僕としてもそれほど余裕があるわけではないのだから。

　居た堪れない気持ちになったのかは分からないが、ブタオは「トイレへ行ってくる」と言ってそそくさと教室を出て行く。するとカヲルが立ち上がり大宮の元へ。

「……あの、大宮さん」

「ん、早瀬さんだっけ。どうしたの？」

　目を伏せがちに何か言いにくそうにしていたものの、やがて決心したのか相手の目を見つめて話を切り出す。

「……成海颯太にはあまり近づかないほうがいい」

「えっと、それはどうして？」

「……あまりいい人間じゃない……から。これは忠告」

　そういえばブタオとカヲルとは知り合いなんだったな。家に迎えにいったときに彼がいたのに驚いた記憶がある。親しい間柄かと思いきや、どうやら軋轢があったようだ。

「でも私は成海君のことを高く評価してるんだっ」

「私もサツキと同じ意見かな～？　これでも人を見る目はあるほうだからね。忠告はどうも～」

「……」

　てっきりカヲルの言葉を聞いてブタオから距離を置くのかと思いきや、大宮も、そして新田もきっぱりと迷わず忠告を拒絶する。その返答が意外だったのかカヲルのほうもたじろいでしまう。

「……そう。でも忠告はしたから」

　そういう最後に告げると少し寂しそうにうつむき加減にして席に戻るカヲル。

　ふむ、健気で素直な性格のカヲルが忠告するほどか。相当に良くない人物なのかもしれないが、実際に組んでダンジョンに潜ってみたあの二人の意見も気になる。ブタオの評価はまだ決めず、要注意人物程度に留めておくべきか。

　そして別の方向には気になる話題をしている二人組がいる。どちらもスポーツが得意そうな女生徒だ。

「ねぇ、どの部活入るか決めた？」

「”部活動勧誘式”があるみたいだから、それみて決めようかなって」

「やっぱり”第一”の名がつく部活が人気高そうねー」

　学校では色々と行事がある。

　まずは近日開催される部活動勧誘式。

　冒険者学校の部活動は少し特殊で、冒険者に役立つ部活がメイン。剣術、弓術、魔術、職人を育てる工学などの種類がある。それぞれに特化した専用の施設があり、トレーナーも専属し、その部活に合った最適なカリキュラムが組まれているという。この育成システムは冒険者学校の目玉とも呼べる。

　オリエンテーションのときも見てきたが、どこぞの大手スポーツジムかというほど施設が整っていてとにかく金が掛かっているのが分かる。

　部活動勧誘式はそれら部活動の紹介を新入生に対して行う式のこと。それを見て僕らはどこに入るか決めようという訳だ。

　部活動では部活動大会で優秀な成績を収めれば成績ボーナスを貰えるため、Ａクラス入りし冒険者大学を目指す生徒において参加は絶対。今のところ魔法職を目指したいので魔術部に入部希望だ。出来れば一番規模の大きい第一魔術部に入部したいと考えている。魔術研究や戦術研究も盛んなようで見識を深めるため是非参加してみたい。

　そして生徒会長選挙もある。

　これはＡクラスの近くを通りすがったときに耳にしたものだが、生徒会長選挙が７月に行われるようだ。そしてなんと１年Ａクラスの女子生徒が立候補するという。

　この学校の生徒会長は、通常の学校のそれと比べて桁違いの政治力を持つ。生徒会の扱う金が数十億円規模なので、それに比類する発言力があるのも頷ける。そしてそんな美味しい役職は必然的に奪い合いになるもの。

　生徒会長になるには多くの生徒の票を集めなければならない。多くの票を集めるにはこの学校の主たる派閥を説得し、支持を取り付ける必要が出てくる。その派閥とはかの有名な”八龍”というやつだ。

　冒険者学校には数多くの団体・派閥があるが、八龍とはその中でも特に大きな８つの派閥のこと。下位に多くの生徒や派閥を従えていたり、有名冒険者クランや大企業とも繋がっていることから発言力は非常に高い。

　現時点で判明している八龍は”生徒会”、”第一剣術部”、”第一魔術部”、”第一弓術部”、”Ａクラス同盟”の５つ。これらの派閥はマスコミにもよく取り上げられていて、僕が入学する前から知っている対外的にも有名な派閥だ。後３つあるというが今は分からない。

　そして生徒会長に立候補するだけでも、八龍のうちいくつかの後ろ盾が必要となってくる。その後ろ盾を、高校生になってまだ間もない１年生が得ているというのは実に驚くべき話であろう。

　残りの３つの派閥、そしてその１年生。僕がこの学校でのし上がるためにも調べておく必要があるな。

　今日は午後の授業は無く、講堂にて部活動の紹介をやるという。クラスメイト達はどこの部活に入ろうかと楽しそうに話し合っている。

　この学校の部活はオリエンテーションのときに言われたようにダンジョンダイブのための部活がメインだ。剣術部、弓術部など使用武器による部活だったり、ウィザード研究部、ウォーリア研究部などジョブに関する部活もある。また将来、ダンジョンに関する研究や工師方面に行きたい人などはアイテム作成部や鍛冶部なども人気だ。

　なんにせよ自分の目指す方向にいる先人達と話し合い、指導を願えるならこれほど心強いものはない。

　ＡクラスからＥクラスまでの１年生一同が再び巨大な講堂に集まる。定時になると照明が落とされ、生徒会らしき男子生徒が壇上に出てきた。

「これより部活動勧誘式を行う。部活動には様々な優遇措置があるし成績にも反映されるものもある。有望な新入生には多数の勧誘が来ているだろうが、この勧誘式を参考にして選んでもらいたい。それでは始める」

　Ｅクラスに勧誘なんて話は……来てない。クラスメイト達も勧誘されてる人がいるのかキョロキョロしていた。

（これはＥクラスだけハブられてるパターンかな）

　入学して数日も経てば他クラスと交流が少しはあるのかと思っていたが、どうやらＥクラスは外部生だから、というよりも単に弱者と思われ、他のクラスとの関係が非常によろしくない。交流どころか喧嘩売ってるレベルで見下されている。

　それは１年生だけでなく２年生、３年生のＥクラスも同じようだ。

　どの部活紹介もＡクラスやＢクラスのほうばかり向いて熱心にアピールしている。あってもＤクラスまで。Ｅクラスに対しては入会を拒むような事は言わないが、歓迎している感じはまるでしない。

　――そんな中。

「Ｅクラスの新入生の皆さん、我が第四剣術部はどなたでも歓迎いたします。スポンサーなどはついていませんが、他の部活のようにＥクラスだからと雑用ばかりさせたりしません。真面目に部活動を頑張りたい方、向上心のある方。見学だけでもいいので覗いてみませんか？」

　袴を着た女生徒がこちらの方を向いて勧誘の言葉を述べる。

　あの人は主人公のストーリーでは重要人物で、サブヒロインでもあるギュー先輩、もとい松坂柚奈（まつざかゆずな）先輩で、２年生。後に赤城君と一緒に第四剣術部を率いて第一剣術部と大戦争をする一本芯の通った女性だ。

　そのギュー先輩によると、これまでＥクラスが上位クラスの運営している部活入ってもろくに練習させてもらえず、雑用ばかりさせられ、さらにはイジメも多々起こっていたという。そのためＥクラスはＥクラス専用の部活を作って活動するようになり、第四剣術部もそういった経歴で出来た部活だと説明する。

　彼女の話し方はほんわかな雰囲気があるものの、話している内容は深刻なもので、クラスメイト達もこの説明により他クラスが入るような部活はヤバいと気づいたようだ。

「雑魚は雑魚同士集まってろよ！」

「でも雑用係欲しいじゃん」

「そうそう、でも少しくらいは鍛えてやってもいいんじゃない」

　まだギュー先輩が話しているというのに、他クラスからヤジが浴びせられる。先輩に向かってその態度は何なんだ。

（……はぁ。そりゃこれから強くなって見返すってイベントが盛りだくさんで起こるわけだ）

　主人公の赤城君もストーリーでは上位クラスに色々絡まれて度々決闘イベント起こしてた。この後もＡクラスばかりの第一剣術部に入部しようとして「Ｅクラスだから」と門前払い喰らうイベントがあったはずだ。そこで赤城君はギュー先輩とＥクラスの先輩方がいる第四剣術部に拾われ、第一剣術部に見返すために必死に頑張るようになる。

　そのイベントを進めれば飛躍的に能力が向上するボーナスもあるが、その過程は結構な闇がある。応援してるぜ。

「っち……ダンジョンにちっとばかし早く入れたからって相当天狗になってんな」

　同じクラスメイトである磨島君は士族だけあってプライドも高い。もっとも、磨島君だけでなく、皆が見返してやりたいと思ってるだろうが……現時点ではＥクラスが徒党を組んだところで上位クラスを相手にしても勝てるわけがない。

　Ｄクラスの刈谷にしてもすでにレベル１１で、【ファイター】のジョブに就いている。レベル３以下のＥクラスなんてワンパンで沈められるくらいに強いのだ。

　俺もレベルを１から５まで上げたわけだが、肉体強化をしていないそこらの格闘家を倒せる程になっているはずだ。レベル１上げただけでは各能力の向上幅は微々たるもの。しかし動体視力、腕力、体力、耐久力と全ての能力値が上がるため総合的な戦闘能力は大きく高まる。

　クラスメイト達は思いつめたように、もしくは悔しそうに俯く。見返したいけど実力が無いのだ。

　この学校では闘技大会や品評会もあり、部活単位で好成績を残せばクラス昇進にも好影響が出るシステムを取っている。

　あれほど露骨な態度を取る部活に入るくらいならＥクラスの先輩方が立ち上げた部活に入るほうが無難に思えるが、Ａクラスが入るような部にはスポンサーが大金を投下しており、施設も指導者も段違い。第一剣術部の部室なんてどこの金満コンドミニアムだよ！　ってくらい高級感が凄かったのを覚えている。あれを見て諦めろというのも酷な話だ。

　一方のギュー先輩が在籍している第四剣術部は「校内の敷地内で貸せるところはない」と許可が下りず、校外にあるボロアパートの一室を借りて細々とやっている。またマジックフィールド内の良い練習場は上位クラスがいる部活に粗方抑えられているため、第四剣術部は練習場所探しに相当苦労しているはず。まぁそれも上位クラスや生徒会が裏で手回ししているのが理由なのだけど。

　Ａクラス入りを目標に入学し頑張ってきたＥクラスの生徒たち。「どの部活に入るべきか」という以前の問題に頭を抱えている。

　つまりは八方塞がりというやつだ。

　\*・・\*・・\*・・\*・・\*・・\*

　歓迎式が始まるまではあれだけ楽しそうだったのに、帰りは重苦しい空気に包まれている。教室に帰っても会話はほとんど無い。顔を覆って静かに泣いている子もいる。

「みんなっ、あんなのでいいの？　確かに今の私達は弱いかもしれないけど。どうにかしてこの学校を変えていきましょうっ！」

　大宮さんが涙を滲ませながら訴える。俺もこんな実力至上で差別主義の学校どうかと思うよ。ゲームだったときはそういう設定ね、って感じで適度に流して楽しめたけどさ。

「そんなこと言ってもよ、あいつらにぎゃふんと言わすにはやっぱ強くなるしかないだろ」

「見返してやりたいけど……今の私達じゃ……」

　髪の短い女の子が「絶対……絶対に強くなってやる」と手を握り締めて言う。

　といっても上位クラスだって必死だ。ＢからＤクラスの生徒達も虎視眈々とＡクラス入りを目指し努力している。上位のクラスが中学、高校合わせた６年間で勝負しているのに対し、Ｅクラスは高校生活の３年間だけで追いつかなければならない。

　ゲーム知識を持っているならともかく、そうでないなら並大抵の努力では無理だろう。

（まぁＥクラスには主人公やピンクちゃんなどの規格外な主人公やヒロインもいれば、エージェントもいる極めて特異なクラス。俺が何かしなくてもこのまま弱者ポジションに留まり続けるとは思わないが）

「でも僕は第一剣術部を訪ねてみようかな。初めは認められないのも仕方がないさ」

　さすがは爽やかイケメン主人公の赤城君。ポジティブだね。やはりこの後にＡクラスだらけの第一剣術部に突撃するのか。一人称の「僕」も段々と荒んで「オレ」になる日が来るのは近い。

　立木君は先程から眉間にシワを寄せて考え込んでいる。彼やピンクちゃん、カヲルが上手く赤城君をサポートできるよう祈っておこう。暴走されると面倒だし。

　また気になると言えば、現在ではかなりの実力者で米国エージェントでもある久我さんだが、彼女は我関せずの構え。頬杖をしながら窓の外を見ている。Ａクラス入りなんて目指してるわけがないので当然だろう。ただシナリオによっては動くこともあり得るので注視すべき人物だ。

「ねぇねぇ～成海君は～、どこの部活にはいるの～？」

　クラスの様子をぼんやりと眺めていると、前に座っていた眼鏡ッ娘の新田さんが話しかけてきた。彼女も久我さんと同じように勧誘式について大して気にしていないようにみえる。

「今すぐ入らなきゃいけないってわけでもないし、ゆっくり考えてみようかなって思ってるよ」

「そうよね～私もホントは第一弓術部に入りたかったけど～。無理そうならＥクラスの先輩が作った部活を見て回ろうかな～」

　実を言えば俺は部活に入る気など全く無く、関心も無い。

　冒険者大学へ行きたいというわけでもないし、絶対にＡクラスに入りたいわけでもない。部活動に所属する者だけが参加できる大会はあるが、参加できなくても多少不利になる程度。無理して部活に入る必要なんてないのだ。そんな時間があるならダンジョンに潜って１つでもレベルを上げていたほうがいい。

　それに今日からやっと高効率な狩場に行けそうなのだ。上手くいけばレベルを大きく上げることができる。楽しみだなぁ。

　そんなことを考えていたせいか、新田さんがじーっと俺の顔を見ていることに気が付かなかった。

　部活動勧誘式のせいで重苦しくなった教室を後にし、今日も今日とてダンジョンに潜る予定だ。

　レンタル武器やら道具を確認し、やることの準備に取り掛かる。家に戻りカッコいい――と思っている――新防具を着ればテンションも鰻登りだ。

　ルンルン気分で再び学校まで戻り、差し足忍び足で校舎地下一階にある空き教室、もといゲート部屋に来てみた。

「さて、こちらからもゲートは使えるかな？」

　先日５階のゲート部屋で魔力を登録したから、ここで魔法陣を動作させれば５階へのワープゲートが開くはずだ。果たしていけるのか……

　掌からゆっくりと魔力を練るように壁に放出すると、描かれた魔法陣が青く光り、低い音を奏でながらゲートが開く。

「発動したな。ゲートがちゃんと機能するなら次から毎回ここを使うか」

　ダンジョン内に入る一般的な方法、つまりギルド前広間からの入場は、とにかく多くの冒険者で混雑している。日曜などで混んでいる時間帯はダンジョンに入るだけで３０分掛かることもざらだという。できるならここのゲート部屋を使いたかったので一安心。

　早速、開いているゲートを潜る。ぐにゃりと視界が歪んだと思ったら一瞬で再構築される。端末で現在地を確認するとちゃんと５階と表示されており、部屋の様子からもダンジョン内へワープが成功したのが分かる。

　このゲート部屋は６階へ行くためのメインストリートから逆方向に位置する。そのせいなのか周辺に冒険者がいないのも好都合だ。

　さて５階での狩りだが。

　平面に展開していた４階までのＭＡＰと違って５階はＭＡＰが立体構造になっており、至るところに渓谷があったり吊り橋で繋がれてたりと、かなり入り組んでいる。

　端末上では真上視点の平面ＭＡＰしか表示できないため、立体に入り組んだ５階は端末の地図頼みにしていると迷ってしまうことがあり、要所で情報を付け足す必要が出てくる。

　これから向かう狩場もそんな入り組んだ場所の先にある吊り橋だ。そこではモンスターを呼び寄せてその橋ごと切り落とせば戦わずに経験値を手に入れられる、という戦術ができる。

　当然モンスターは落下するため、ドロップアイテムを回収するには落下地点まで行かなければならず、橋を切り落とす場所によっては回収を諦めないといけないこともある。

　そしてこの５階には、隠しボスキャラ的な存在であるオークロードが出現する。このオークロードは５階にポップするにも関わらず、この辺りにポップするモンスターと比べ、モンスターレベル１０と頭２つ３つ抜けてレベルが高い。戦闘力も今の俺では太刀打ちするのも難しいほど強く、ウェポンスキルも使ってくる。その上厄介なのは《雄叫び》をすることでモンスターレベル６のオークソルジャーを複数呼び寄せ、さらに周辺にいるオーク全員の戦闘力を強化するという凶悪なスキルも持っている。

　この５階ではオークロードを知らない冒険者パーティーが手を出し死傷者が多発しているため、冒険者ギルドでは注意喚起しているほどのモンスターなのだ。

　――だが。

　オークロードの足はそれほど速くはなく、《雄叫び》で次々とオークソルジャーを呼び寄せることを利用すれば、広域を走り回らなくても大量モンスタートレイン作成が可能。そのトレイン対し橋落としを使えば、大きな経験値ボーナスがあるオークロードに加え、大量のオーク共を一気に殲滅できて美味しいことこの上ない相手なのである。

　オークメイジやオークアーチャーなど、遠距離攻撃ができるオークは呼び寄せないのもポイントが高い。

　オークロードはこのＭＡＰでは１体のみ出現し、倒しても１時間でリポップする。吊り橋を切り落としてもトラップと同様に橋も１時間で自動修復するので、橋の修復具合を見ればオークロードのリポップした時間が分かる。まるでここは橋落としを実行してくださいと言わんばかりの好環境が揃っているのだ。

　しかし橋落としをやるにもいくつか確認しなけばならないことがある。

　これが一番の問題だが、まず誰かが橋落としをやっていたら俺が出来ないので目的地の橋が落とされていないかどうかの確認。なにせゲームではプレイヤーが多すぎてまともに橋落としなんて出来なかったのだから。

　ただこの世界でのオークロードが注意喚起されているモンスターだというのなら、橋落としはされていない可能性が高い。橋落としをやっているならオークロードは常に狩られ続け、オークロード部屋は常にもぬけの殻となっているからだ。

　次に吊り橋からオークロード部屋までのトラップの確認だ。トレイン中に落とし穴になんて引っかかったら洒落では済まない。狭い穴の中でオークロードとインファイトなんて悪夢そのもの。それとＭＡＰを覚えているとはいえ、迷わず確実に橋まで辿り着けるよう、端末で経路を見ておいたほうがいいだろう。

　最後に、冒険者がオークロード部屋周辺に多数彷徨いていたらトレインに巻き込んでしまう可能性があるので周囲を確認しなくてはいけない。

　まぁ、どれも確認するだけなので然程難しいことではない。さっさと実行に移すとしよう。

　途中何体かゴブリンソルジャーがいたが、角待ちしたり背後からバクスタを狙って掃除つつ、橋が落とされていないことを確認。マップの西の果てにあるオークロード部屋まで辿り着く。

（周辺に冒険者は誰もいなかったな。オークロードは……いたいた。ゲームでみたオークロードより格段に強そうだが……）

　２０ｍ四方程の部屋の中にいるのはオークロードただ１体のみ。そこらのオークとは違い２ｍを優に超える身長で、腕なんかもはち切れそうなほど太く、巨大な棍棒――というか最早丸太――を握っている。動かないので立ちながら寝ているようにも見える。たまにブモッと独り言ちるので何か夢を見ているのかもしれない。

　しめしめ。予想はしていたがオークロードの橋落としを誰もやっていないのはラッキーだ。これができるのは５階で１つのグループだけ。橋落としができないとなるとレベル上げが少し面倒なことになるところだった。

（それじゃま、いくとするか）

　用意してきた爆竹にライターで火をつけ放り込む。

　ババン！バババンッ！　と大きな破裂音を立てる爆竹。何事かと周囲を見渡すオークロードは部屋の入り口にいた俺と視線が合うと、ニヤリと悪そうに笑う。そして初手からいきなり《雄叫び》を発動。

《ブモォオォオオォオオォオオォ》

　オークロードの周辺に５つの黒い靄が一斉に現れ、大鉈のような波打った鉄剣と皮鎧を装備したオークソルジャーが次々に生まれ落ちる。

　さぁトレインスタートだ！

　\*・・\*・・\*・・\*・・\*・・\*

　大量のモンスターを引き連れ、目的の吊り橋に向けて全速力で走る。

　追いかけてくるオークロードは再び《雄叫び》を使用し、オークソルジャーを次々に呼び寄せる。さらに道中にポップしたゴブリンソルジャーも合流し、トレインの乗客が膨れ上がる。

　オークロードはそこらの一般的なオークと走力は同じという設定になっているので確実に逃げ切れると考えていたが――

「うおぉ！　命掛かってるトレインとか正直怖すぎるわっ！」

　走りながら後ろを横目で振り返ってみれば……俺を殺すためにオーク達が土煙を上げ、血眼になって追いかけてくるのが見える。アレらに捕まったら流石に死ぬだろう。恐ろしさから冷や汗が止まらず、縮こまりそうになる。

　再度歯を食いしばり、足に一層力を込め、ダンジョン内を必死に駆け抜けること１分少々。前方にようやく目的の橋が見えてきた。

　橋は２本のワイヤーにぶら下がっている吊り橋方式なので、そのワイヤーを切るだけで簡単に落ちる仕組みになっている。５階には他にも落とせる吊り橋は数多くあるが、オークロード部屋に近く、ドロップアイテムの回収が容易な橋といったらこのポイントがベストなのだ。他では遠かったり高度が足りなかったり、回収のためには大きくＭＡＰを迂回する必要がある。

「こっ、この橋かなり揺れるぞっ」

　急いで吊り橋を渡ろうとすると思ったより揺れて滑りそうになる。もしかして俺の体重が重すぎるせいなのか。なるべく慎重に、かつ揺れないように急いで渡ろうと橋上を走っているとオーク集団も次々に橋に到着。全長５０ｍ、幅１．５ｍほどの橋に数十体のオークとゴブリンがなだれ込み、先ほどよりもさらに揺れはじめる。

　先頭を走るのは一際デカいあのオークロードだ。

　揺れと大量のモンスターに恐怖ですくみ上りそうになるが、すぐ後ろまでオークロードが迫っているためモタモタしている時間は無い。「うぉぉぉ」と叫ぶ俺と「ブモォォ」と追いかけるオーク共の声が交じり合いダンジョン渓谷に汚い音色が木霊する。

　心臓が張り裂けそうになる中、体にムチ打ち、頭から向こう岸へ滑り込んでなんとか渡り切る。急いで腰に引っ掛けていたレンタルの鉈を手に持ち、橋を支えているワイヤー２本に向けて力一杯振り下ろす。

「へへっ……死にやがれ！！」

「ブモォ？　ブモォオォオォォォォォ……ォォ……」

　橋を切り落とすとは微塵も思わなかったのか、目を見開きながら落ちていくオーク達。落下地点は８０ｍほど下。この高さからの位置エネルギーは相当なもので、まず助かるまい。

　１０秒ほどすると体から熱がこみ上げレベルアップの症状がでる。

「はぁはぁ……こりゃ凄い経験値だ、一気にレベル６か」

　最終的には３０～４０体ほどいたであろうオーク集団。格上のため経験値ボーナスがついたオークロードとオークソルジャーに加え、ゴブリンソルジャーも数多く混ざっていたため、たった１回の橋落としでレベルが上がるほど大量の経験値を手に入れることができた。

　一息ついた後、少しよたつきながらも立ち上がり、ドロップアイテム回収のためオークが落ちた谷底に降りる。落下地点には数十個の魔石の他に、いくつか光るものが散らばっていた。

「はぁ……これは……ダンジョン硬貨だな」

　ダンジョン内には様々な種族の住人がやっている店がある。どの店も隠しマップにあるため見つけにくいが、珍しいマジックアイテムや鑑定アイテムが売っていたり、ジョブチェンジも行えるため、ゲームではプレイヤー達の憩いの場となっていた。

　それらの特殊な店を利用するにあたって注意しなければならないのは、日本円は使うことはできず、ダンジョン通貨、もしくは魔石トレードでしか商品を買うことができないという点だ。魔石では交換レートが低く買い叩かれてしまうため、ダンジョン通貨を揃えてから買うのがベストである。

　ちなみにオークロードが落としたダンジョン通貨は銅貨３枚。１枚で１リルだ。この銅貨が最小単位で銀貨だと１０リル、金貨だと１００リルの価値となる。１リルは１０階層のモンスターの魔石と同等の価値があり、１０階の隠しストアを利用するならば是非持っておきたい。

　次の橋落としまで１時間近くある。魔石と硬貨を拾い終えた後は持ってきたスポーツドリンクをちびちびと飲みながら休憩タイムだ。持ってきた茣蓙を敷き、こてりと横になりながら息を整えつつ追われているときの事を思い返す。

　肥満、かつＡＧＩ半減というデバフ効果を持っている俺は走力に不安があったので、そこらのオークで実験し、大丈夫だと確信して橋落としに臨んだのだが……思ったよりギリギリのトレインになってしまった。

　地響きが鳴るようなオークロードの追走は予想以上の恐怖を感じ身が竦んでしまいそうだった……ＢＥＴしてるのが自分の命であることもやるまで忘れていた。というか実感が湧いていなかった。この辺りがゲーム時のダンジョン攻略と比べ、格段に難易度が上がってる大きな要因になるのだと改めて感じる。

　今日はほとんど時間を掛けずに狩場に来ることができたので後５回程は橋落としをやるつもりだったが、たった１回やっただけでかなり精神力を消耗してしまいヘトヘトだ。そも肥満でデバフスキル持ちのブタオは、通常のレベル５と同じと考えてはいけないのかもしれない。しっかり休憩していかないと体が持ちそうにないな。

　一方でゲームと同じように橋落としが成功したのは嬉しい限りだ。これでパワーレベリングができることがほぼ確定した。

「俺のレベルが十分上がったら家族を連れてくるか」

　この橋落とし。橋を落とした人にほぼ全ての経験値がいくため、俺がオークロードを釣って、レベルを上げたい人が橋を切り落とせば簡単にパワーレベリングができる。ただ先程のようにギリギリのトレインでは事故が起こる可能性があるので、ここでしっかりレベルを上げておこう。

　地形やトラップを利用したパワーレベリングスポットはここの他にもいくつかあるが、妹は待ちきれない様子だったし今度連れてきてやろう。親父も長年４階の攻略で手古摺っているなら、ここで一緒にレベルを上げてしまったほうがいいだろう。お袋は……ダンジョンダイブに興味あるのか今度聞いてみよう。

「さて途中の経路のゴブリン共を掃除して次のトレインも頑張りますか」

　道中のゴブリンソルジャーを数体倒してみる。ゴブリンの仕掛けてくる攻撃は良く見えるし、体の動きも快調で被弾する気がしない。もう奇襲せずとも楽に倒せるようだ。

　結局その日は３回のトレインで体力の限界が訪れたため切り上げ、レベルは７になった。

　夜８時過ぎに家に到着。レベルアップをすると何故だかいつも以上に腹が減る気がする。何か食おうと茶の間に行くと、家族みんなでテレビに噛り付いていた。

『はい、現在３２階のボスフロア前に到着したところです。ただ今の温度が――』

　映っているのはダンジョン内のようだが何の番組かと聞いてみたところ、この階を攻略できれば日本ダンジョンの攻略記録更新となる日本国民が大注目の番組らしい。

　３２階の攻略中ということは現在の日本ダンジョン攻略記録は３１層になるのか。

　３１階からは氷雪地帯。本来なら金属製の鎧は低温のため皮膚が引っ付いてしまい使いものにならないのだが、耐冷装備とプリーストの耐冷バフにより前衛の多くが金属重装備を着ることができている、とリポーターの人が白い息を吐きながら解説している。

「おにぃ、”カラーズ”のクランだよっ！　コタロー様が映ってるよっ！」

　どうやら妹が贔屓にしてるクランらしい。白、赤、青、黄、緑の縦縞５色のクラン旗がトレードマークで、日本屈指のダンジョン攻略クランの１つなのだと妹が目を輝かせて早口で言い立てる。

　攻略クランとはダンジョン最前線攻略を主目的としているクランのこと。多方面で優秀な人材を数多く揃える必要があるため、必然的に百人以上の大規模クランとなる。大企業や官僚とも結びつきが強く、スポンサーも多数持っているようだ。日本には有名なものだと１０個ほどの攻略クランがあり、共に鎬を削りあっているという。

『あと３０分ほどでボス攻略を開始するようです。それまでカラーズの構成と経歴をおさらいしましょう』

　分厚いコートを着たレポーターが情報を纏めたホワイトボードを指さしながら説明する。

　クランリーダー田里虎太郎（たさとこたろう）は大層なイケメンで、ファッション雑誌やテレビ番組にもよく出ている。最近は男爵位を叙爵したとか。若い女性層から絶対の支持があるよう。

　また日本で十数人程度しかいない上級ジョブである【侍】に就いていて、大太刀と呼ばれる約１５０ｃｍほどの長大な太刀がメインウェポン。その刀は炎の魔法が付与されているのか刃が赤黒く光っている。

　カラーズは５人で始めたクランで、創設者でありリーダーの田里は冒険者学校２９期卒業生。……優秀な生徒は冒険者大学へ行くのかと思ったが、そうせず卒業後すぐに冒険者となりクランを立ち上げたらしい。破竹の勢いで攻略し続け、現在は１２８名がカラーズに在籍。攻略クランの中では今一番勢いがあるそうな。

　今回も構成を厳選して７０人でダンジョンダイブしている。その上、カラーズには５つの下部組織もあり、それぞれの色をクランの旗色にしてカラーズへの昇格を競い合ってるらしい。それらを含めると千人以上の大所帯というから驚きだ。

　それにしてもこちらの世界のメディアではダンジョン関連が本当に多い。毎日どこかのテレビ局がダンジョン特集をやっており、有名冒険者がジャンルを問わず様々な番組に出演している。

　また本屋にいけば冒険者やクランの専門誌がいくつも置いてあり、かなり面積をダンジョンコーナーが占めているほど。クラン特集や格付けランキングなどは人気のカテゴリーで、今テレビに映っているカラーズは表紙を飾ることも多い。

「ママは真田さんがいいわぁ」

　カラーズの副リーダー、真田幸景（さなだゆきかげ）。ジョブは【プリースト】で後衛全体の指揮と撤退判断を任されている眼鏡の……イケメンだ。ＨＰ回復、状態回復を同時に数十人を管理できる知的キャラで、いつも青いローブを着ている。こちらはマダムに熱狂的な支持があるようでウチのお袋も大ファンらしい。何でもバイト先の冒険者ギルドで真田とその一派の対応をしたことがあるとかなんとか。

「真田さんもカッコいいよね～。でもやっぱ男はワイルドさが肝心というか……」

「あら、ママはクールさが一番だと思うわぁ」

　アイドル談義みたいな感じになっとる。まぁこれだけ強くてイケメンならファンも大勢できるわな。ダンジョン攻略最前線にいるなら収入だって凄そうだし。うっ……羨ましくなんてないもんっ！

「パパはくノ一レッドが一番好きかなぁ」

　くノ一レッド。女性の【シーフ】だけで構成されいるお色気満載のクランだ。赤色で露出度が高い忍者スーツをクランの指定制服にしている。リーダーの御神遥（みかみはるか）は結構なボインちゃん。実はどこぞの貴族のお嬢様だの、伝説のジョブ【忍者】だの噂されていて、謎多き女性のようだ。

　【忍者】は上級職である【アサシン】と【シャドウウォーカー】のジョブレベルを最大まで上げて、とある試練をクリアすれば就くことができる最上級ジョブだ。まぁ、くノ一レッドで可愛がってくれるなら【忍者】になってやらんこともない。ウフフ。

「そんなのカラーズと比べたらゴミよっ、ゴミ」

「ママはそんなはしたないクランは認めないわぁ」

　どうやらウチの女性陣にはくノ一レッドは不評のよう。そんなくだらない会話をしていると。

『フロアボスはアンデッドの最強の一角、リッチ。前回は攻略に失敗し４人が犠牲になりましたが、今回は上手くいくでしょうか。日本中が、いや、世界中が見守っています……』

　リッチか。数種の属性魔法を使いこなし、オークロードのようにアンデッドの配下を召喚する厄介なモンスターだ。魔法耐性が高く、またＨＰ再生力も高いため、高火力の物理攻撃で一気に押し切るのが最善の倒し方だったが……カラーズとやらのお手並みを拝見しますか。

　リッチのいる広間は１００ｍ四方程で天井の高さも５０ｍ以上。７０人の討伐隊も余裕で入れる広さがある。

　カメラマンはテレビ局が雇っているようで、数人のガードが常時付いて守っているのが伺える。

　カラーズの構成はやはり【ウォーリア】と【アーチャー】の物理アタッカーが主体。魔法が効きにくい相手だからか【ウィザード】は少なめだ。装備も耐火、耐冷、耐雷と３種の耐性リングを完備し、リッチ対策には万全を期している。

　複数人の【プリースト】が魔法抵抗を上げる《アンチマジックＩ》と、ＳＴＲが上がる《ストレングスＩ》を突撃予定のアタッカーに唱え、カラーズ全体が慌ただしく動き始める。

　バフは効果時間があるため、戦闘の直前に掛けるのが常識。そろそろか。

『最初に【アーチャー】が突撃を仕掛けます。いきますよ』

『【アーチャー】班、行くぞっ！』

　なんとファーストアタックは【アーチャー】のようだ。リッチのいる部屋に入るや否や、貫通力を高めた弓矢を同時に３本撃つ《トリプルショット》を十数人で一斉に放つ。ドドンッという弓矢を発射したとは思えない衝撃音がリッチ周辺に響く。

　数秒後、大剣持ちの【ウォーリア】２０人が突撃陣を組んで駆け寄り、高速連続斬り《ディレイスラッシュ》を次々に放つ。リッチは巨大な杖で身を守ろうとするが、全方位から撃たれる大剣スキルになすすべもなく喰らい続ける。

　開幕はかなり有利に運べているといってもいいだろう。最初が近接攻撃の場合だと駆け寄るまでにリッチが反応してしまい、ここまでのダメージを与えることはできなかったかもしれない。

　副リーダーの真田が鑑定アイテムを使用しリッチの現在状況をつぶさに報告する。今のでリッチのＨＰは３割ほど削れたようだ。

　ここでリッチは『シャワシャワ』と声にならないような詠唱魔法を唱えた。六芒星と二重円を合わせた魔法陣紋様からして、召喚魔法なのが分かる。配下アンデッドである”カオスソルジャー”を召喚しただろう。

　４つの黒い靄が同時に現れ、重装備に覆われたスケルトンの影が生まれ落ちる。即座に【アーチャー】が無防備状態のうちに弓矢を打ち込みファーストアタックでダメージを稼ぐ。

　カオスソルジャーは魔法耐性のあるタワーシールドを持っていて、リッチと同様に魔法が効きづらい。また射程が２０ｍほどの飛ぶ剣技《ソニックスラッシュ》を使ってくるため、後衛集団に近づけさせないよう４体のカオスソルジャーをそれぞれ数人の【ウォーリア】が囲い込み、【プリースト】１人がサポートに付いて対応する。

　ここからは持久戦だ。

　クールタイムがあるスキルは連発できないため、開幕のスキル連打の後は通常攻撃が主体となる。カラーズの前衛は流れるようにメンバーを入れ替えて攻撃しながらリッチに狙いを絞らせない戦術を取る。

　リッチは一度仕切りなおしたいのか雷魔法を周囲に放ち、まとわりつくカラーズから距離を開けようと動く。が、そうはさせじとカイトシールドを持った【ウォーリア】を前に出し、距離を詰めることを繰り返す。

　ここで最大のアタッカーはクールタイムが少なめのスキルを多く持つ【侍】の田里だ。

　《ディレイスラッシュ》や《トリプルショット》は高火力だが数分から１０分ほどのクールタイムが発生する大技。一方【侍】の攻撃スキルである《居合い》や《対神の太刀》は１分ほどで再使用可能だ。また敵の攻撃を見切って躱す《見切り》というスキルがあるため、一時的に避けタンク（※１）としても機能する。

　【侍】というジョブ自体が【ウォーリア】の上位ジョブでもあるため《ディレイスラッシュ》も使用可能。その攻撃力はカラーズの他を圧倒する。

『いくぜぇ！　我、敵を斬る刃を齎さん！　《対神の太刀》』

『プリースト１班！　田里のＨＰをケアだ！　急げ！』

　刀の中でも特に大きい大太刀に、渾身の力を乗せて放つ田里の【侍】スキル、《対神の太刀》。刹那の一振りに途方もない《オーラ》と膂力が乗っているのが分かる。

　リッチも紫電を纏った杖で田里に反撃するも、味方の【プリースト】達が即座に回復魔法を唱え、田里のバックアップに動く。

「こりゃいけたんじゃないのか？　颯太はどう思うよ」

「ＨＰが残り２０％切ってからが勝負だな、アイツは発狂する」

　余りにも順調なボス攻略戦に親父が勝負あったと述べる。が、このリッチは一筋縄ではいかない。

　ボスによっては残りＨＰが少なくなると強力なスキルを使ってくる「発狂」と呼ばれる状態になる。リッチの場合はＨＰが残り２０％を切ると強力な広域闇魔法《ダークベイパー》を放ってくる。これを喰らうとＨＰダメージはもちろん、盲目や痺れも発症し、前衛が一気に崩壊する危険性があるのだ。

　発狂状態になったらむやみに攻撃せず味方の回復と強化を優先し、体制を整えてから一気にＨＰを削りにいくのが最善だが、言うは易く行うは難し。

『ＨＰ残り２３％だ！　アタッカー共！　そろそろ闇耐性防具にチェンジして備えろ！』

　前回はこの発狂をうまく対処できずに前衛が崩れて【ウォーリア】数人が死んでしまい、撤退を余儀なくされたという。今回はその辺りも万全で挑んでいるようだ。

『来るぞ！　プリースト全班、ケアに動け！』

『状態異常が治らない方は合図してくださいっ』

『防御陣構築、早くっ！』

　ＨＰが残り２割を切った瞬間、リッチの足元に突如巨大な魔法陣が描かれ、数秒もせずに黒い波動が四方へ一気に拡散する。《ダークベイパー》だ。

　対するカラーズは盾持ちを前面に防御陣を構築。さらにプリースト１班が状態異常回復を、２班が範囲回復を即座に唱える。真田が残りのプリースト班を動かして全員のＨＰをコントロールし、回復が足りないアタッカーをケアするため声を荒げる。

『クールタイム終わったやつからスキルぶち込めっ！』

　田里が雄叫びを上げてリッチの元へ突撃し、ウェポンスキルを発動。その田里に続いて【ウォーリア】部隊が再び攻撃陣を組み上げ、一斉に《ディレイスラッシュ》の構えを取る。

　この日、日本のダンジョン攻略記録は３２階となった。

（※１）避けタンク

通常、タンクは防御力が高い盾持ちが相手の攻撃を受け持つが、避けタンクは盾でなく攻撃を避けてタンクをこなす。

　リッチ攻略が成功したことで、どの番組も緊急速報でカラーズの偉業を伝え、特番をやっていたテレビ局に至っては放送時間を４時間も延長。３２階攻略リプレイ動画を流しながら元冒険者が解説をやっていた。

　カラーズの大ファンであるお袋と妹も深夜までテレビの前に噛り付き、攻略成功を喜んでいた。ちなみに親父は朝が早いのでとっくに寝ている。

「もう１２時過ぎてるし寝たほうがいいんじゃないか？」

　新階層攻略により日本各地で国民挙げてのお祭り状態になっていることに驚くものの、番組はいつまでもやっているのできりがない。

「明日から休みだし大丈夫！」

「あら、明日お仕事だったわ」

　そういえば聞いておきたいことがあったんだ。

「お袋は冒険者になるチャンスがあったとしたらどう思う？」

「もうオバさんだし……モンスターと戦うなんて無理そうじゃない？」

　年齢的に体力は下り坂。これから冒険者になるといっても普通は厳しいと考えるだろう。そこでダンジョンで肉体強化をするとアンチエイジング効果がある、と言うと……ダボハゼのように食いついてきた。

「なんでそれを早く言わないのっ！　明日仕事帰りにスライム狩りにでも行こうかしら」

「えぇー私も行きたいっ！」

　アンチエイジングがあるってのはギルド図書館で冒険者専門誌を見てたら書いてあったのだ。この国の【聖女】様が言うに「若い秘訣？　そりゃダンジョンさ」ってね。嘘だと思うなら【聖女】様に言ってくれ。というか戦前からダンジョン潜っていて今でも現役らしいが一体何歳なんだろう。顔出しはＮＧなのか年齢は不詳だ。まぁそれは置いておくとして。

　やんわりとぼかしながら「普通に戦うのは厳しかろう、５階でいいパワーレベリングスポットがあるんだ」といった感じで話してみる。最前線のダンジョン攻略を目指すなら戦い慣れる必要はあるが、強くなるだけならパワーレベリングでレベルを上げたほうが手っ取り早い。戦術や知識はレベルを上げながら追々覚えて行くのでも十分間に合うだろう。

「おにぃってもう５階いけるの？　早すぎない？」

「パパはまだ４階なのに、冒険者学校ってすごいのねぇ」

　カレンダーを見つつ「おにぃのダンジョン歴って２週間しかないよね？」と指を数えながら首を傾げる妹。親父にしても週末にパーティー募集して１０人近い人数でちんたら巡回なんてやってたらレベルなんて上がらないわな。

　高レベルになればパーティーのほうが圧倒的に効率は良いのだが、浅層では良い狩場を押さえてソロ、もしくはペアでレベル上げしたほうが効率は良い。ゲーム知識は必要だけども。

「お袋は仕事だから、時間あるときにやるとして。華乃と行けるとしたら明後日の日曜日だな。明日は安全にパワーレベリングするためもうちょいレベル上げたい」

「やったー！　でもどうやってダンジョンに入るの？　冒険者証なんてないよ」

「そうよ、まだ華乃は１４歳でしょ。冒険者ギルドだって許可しないわ」

　ダンジョンは入場も国が厳格に管理している。ゲートは一般的に知られていないようだし普通は入れないと思うだろう。そもダンジョン攻略にゲートを使わないというのもどうかと思うが。

「いい方法があるんだよ。そこは大丈夫だから安心してくれ」

「やったー！」

「そう？　でも危ないなら無理しないようにね」

　と言い残してお袋は寝た。テレビではまだ階層攻略成功を称える番組が続いている。

「そういえばカラーズって帰りはまたボスを倒しながら戻るのかな」

「フロアボスは一度倒したらもう出ないか別の場所にポップするから、階を移動するだけなら倒す必要はないよ」

「そっかぁ」

　５階にいるオークロードも最初期はフロアボスだった。あんなのをレベル５前後の【ニュービー】でまともに倒そうとするなら相当な人数が必要になるはずだ。まぁ橋落としやっちゃえば楽なんだが。

「じゃ日曜日を楽しみにしてるね。おにぃおやすみ」

「あぁ、おやすみ」

　さて俺も歯を磨いて寝るか。といってもやはりあのダンジョン攻略を見た後から血がたぎり眠気が来そうにない……

　\*・・\*・・\*・・\*・・\*・・\*

　ベッドに横になり思い出す――あれは紛れもなく命を掛けたギリギリの戦いだった。

　誰も倒したことが無いフロアボスの攻略、そして未到達の階層攻略は、ゲームのときも一大イベントだった。強大なモンスターを相手に戦う姿はダンエクプレイヤーの花形であり、最もよく話題とされていた。

　フロアボスはその階で出る一般的なモンスターより遥かに強く、数人のパーティーだけで倒すのは至難の業。ただし倒さねば先の階へは進めない。

　そのためゲームではいくつものクランが合同でフロアボスに挑んでは散り、トライ＆デスの繰り返しで攻略を進めていた。俺がこちらの世界にくる直前には１００階攻略メンバーを募集するクランで大賑わいだったっけ。

　だが先程のテレビでやっていたあの戦いは、ゲームとは一線を画す。自分と仲間達の命を懸けて挑み、そして踠く冒険者達の姿があった。

　傍から見れば華やかに見えるカラーズだが、数多の失敗を経験し想像以上のプレッシャーと恐怖に抗い続けていることが容易に想像できる。この世界ではトライ＆デスなんて決して許されるものではないからだ。

　俺もオークロードのトレインで痛感したが、ゲームと同じ感覚でダンジョン攻略プランを考えるのは早々に修正する必要がある。

　それにしても。あのリッチ戦を見ていていくつか分かったことがある。

　まずスキルのマニュアル発動について。

　映像を見る限り彼らはオート発動ばかりで、魔法陣を描いたりスキルモーションを交えたマニュアル発動は一度も使っていなかった。テレビに映るから見せなかった、というのは考えづらい。マニュアル発動があればクールタイムをより短縮でき、スキルの威力も増す。あれだけギリギリの戦いをしているのに普通なら出し惜しみなんてしない。

　ならばマニュアル発動はこの世界には知られていない、もしくは何らかの誓約が課され、厳重に隠匿、管理されていると考えられる。どちらかといえば前者の可能性のほうが大きいか。

　ジョブについても分かったことがある。

　援護回復職は中級職の【プリースト】止まり。カラーズにはあれだけ【プリースト】がいたのにも関わらず、上級ジョブの【クレリック】は誰一人いなかった。真田という青年も【クレリック】に到達していなかった。必要ジョブ経験値はリッチと戦えるレベルなら十分稼げているはずなのに。

　タンクの役割もアタッカーであるはずの【ウォーリア】に盾を持たせてやらせていた。あの戦いでは同じ中級ジョブでも【ナイト】のほうが物理、魔法どちらも耐性が高く、スキルの面でもあえて外す理由がない。

　では【クレリック】や【ナイト】のジョブチェンジ方法は知られていないのか。

　【クレリック】については情報がないので分からないが、検索したところ、【ナイト】は欧州の一部の国で確認されているという。ダンジョン情報は悪用される危険性があるため、世界では民間には十分に共有されておらず、高度な機密となっている場合が多々あるのだろう。

　例えば【侍】は日本にしか確認されていない上級ジョブだ。これは日本政府が【侍】のジョブチェンジ方法を国家機密にしているからで、国が忠誠と引き換えに有望な若手に与える方式を取っている。【ナイト】もおそらく特定の国が日本と同じように”特権”という形で与えて増やしている可能性が高い。ある意味、高レベル冒険者は国家戦力的な扱いなのだろう。

　分からなかったこともある。何故リッチ戦に【聖女】を投入しなかったのか、だ。

　【聖女】のスキルである《ターンアンデッド》は、魔法抵抗が高いリッチに対しても絶大なダメージを叩き出せたはずで、下手をすれば【侍】の田里を超えるダメージを出せたであろう。また、広域エリアを回復すると同時にアンデッドにはダメージを与える《サンクチュアリ》があれば、４体いたカオスソルジャーにもあれほど苦戦をしなかった。

　そして何より重要なスキルが死者蘇生魔法《リヴァイブ》だ。フロアボスなど強敵との戦いにおいて、例え使う機会が無かったとしても、この蘇生魔法があるというだけで【聖女】は必須の存在と言える。

　この国にも【聖女】はいるはずなのに、何故カラーズは協力を仰がなかったのか。仰げなかった？　……もしくは【聖女】の存在自体がブラフの線もあるか。

　本当にいるのかいないのか今は確かめようがないので置いておくとして、【聖女】はピンクちゃんがイベントをこなせばなれるジョブというのも問題だ。

　もし彼女が簡単に【聖女】になった場合、日本や世界はどうでるのか。ゲーム通りだとしても変数が多すぎて予想が付かない。主人公の【勇者】を含め、知られていないジョブが世界にどう影響を与えるのか探っていくべきなんだろうか……

　この辺りは一度日本の【聖女】……とまではいかなくても、高位冒険者に会って色々話を聞いて判断したい。だがまずはレベルを上げて堂々と会いに行けるようにしたほうがいいだろう。今の俺はレベル７の【ニュービー】に過ぎず、門前払いされるだけだ。

　難しいことを考えると、眠気がすぐ来るな……

　昨日もオークロードトレインを頑張り、レベル８まで上がった。【ニュービー】のジョブレベルもカンストの１０となり無事に《スキル枠＋３》をゲット。

　現在のスキル枠は以下の通り。

《大食漢》

《簡易鑑定》

《空》

《空》

《空》

　《スキル枠＋３》はその名の通りスキル枠を３つ拡張するスキルだ。ダンエクではスキル枠の少なさで十分にスキルを覚えることができず、スキルの取捨選択に苦しめられていた。なのでこれだけは絶対に入手しておきたかった。

　そして本当ならここで【ニュービー】からさくっとジョブチェンジして新ジョブでヒャッハーしたいところだが、冒険者ギルドでジョブチェンジを行うと端末情報まで書き換えられ、現在のレベルがクラスメイトに確実にバレる。１０階のオババの店に行けるまでは我慢しなければならない。

　一方で肉体強化のほうは順調だ。最初にトレインをやったレベル５の時と比べて、レベル８になった現在では大分走力が上がり、このデバフ付きの太った体でも余裕を持って走行できた。今１００ｍ走を計ったらどれほどのタイムがでるのか。マジックフィールド内ならそろそろオリンピックで優勝できるくらいの速度が出るかもしれない。

　走力が上がっているのはダイエットのほうもかなりのペースで成功しているせいでもある。最近気づいたのだが、この体は食欲と同様に基礎代謝も異常に高く、必要摂取カロリーも相当なものになっている。食事を制限し空腹の苦痛を我慢できさえすれば、かなりの速度で脂肪を減らすことが可能。体重の方も全体的に筋肉が付いてきているのにもかかわらず１００ｋｇをもうすぐ切るところまできている。このままダイエットを続行していきたい。

　肉体強化とダイエットを同時進行させ走力を劇的に上げることができたが、逆に考えればレベル１でオークロードトレインは非常にまずいことに気づく。こちらに来た当初はいきなり５階まで行ってトレインで楽にレベルを上げようかとも考えたのだが、あの弛んだ体ではまともに動けなかったし恐怖心から走力が不足し追いつかれる可能性もあったのでやめておいて正解だ。

　あとは《大食漢》についての考察は１０階にいけるまでは後回しにする。どれくらいＨＰとＶＩＴに補正が入っているか、”？？？”という項目が何なのか計測すれば分かるので、それを見てからでも消すかどうかの判断は遅くないだろう。それまでは空腹との戦いである。

「水筒とお弁当と～、剪定ばさみと～、あとお菓子……準備できたよ～。どうこの格好、変じゃない？」

「まぁいいんじゃないか。んじゃいくぞ」

「もうっ適当な返事だしっ！　で、どうやっていくの？」

　薄茶色のアノラックパーカーにデニムパンツというカジュアルな服を着た妹がくるりと回る。服装なんて動きやすければジャージでもいいと思ってるがそんなことは言わない。妹の機嫌が急降下することが分かっているからだ。

　そしてダンジョンに入る方法はもちろん学校のゲート部屋から。冒険者学校の正門には警備員が目を光らせているが、抜け道なぞいくらでもある。通学に使う大通りから逸れて小山に入る細道を歩く。

　今日は妹にパワーレベリングをしてやる予定なのだ。レベルアップ効率や速度を考えればもっと後でパワーレベリングしたほうがいいのだが、そろそろイベントアイテム回収や特定モンスターの攻略をするのにソロではキツい箇所が出てくるため、この際に家族諸共パワーレベリングしてパーティー組んでしまえ作戦でいくことにした。主人公の行動選択次第では早々に厄介なシナリオに突入するかもしれないので家族も今のうちに、という考えもある。

「えぇ……こっからいくの～？」

「すぐ通り抜けられる。ちょびっとの辛抱だ」

　学校の裏側の山道……という名の獣道を抜けていく。この辺りは国有地になっており建物は無い。

　元々は小山の麓にダンジョン入り口が出現し、その後に山の大部分を削って建てた学校。山は全部取り除いたわけではなく裏側はまだ斜面になっていて、そこから学校に入ろうという段取りだ。春になり草も伸びてきて多少歩きにくいが、通れないこともない。数分で抜けてようやく学校の敷地内に入ることが出来た。

「ちっちゃい虫にたかられたっ！　こんな所通るなら虫よけスプレー持ってきたら良かった！」

「よし、誰もいないな……校舎の裏側から入るぞ」

　ぺっぺと唾を吐きながら悶える妹をよそに校内の人目を確認しながら校舎へと入る。非常用の扉をこっそり開けておいたので、そこから地下一階の空き教室へ向かうのだ。

「へぇ～ほぉ～、さっすが天下の冒険者学校。うちの中学とはお金の掛け具合が全く違うよ。あ、このトロフィー凄い！」

「おい落ち着け。というか急げってば」

「きゃうっ」

　キョロキョロする妹の首根っこを捕まえて階段を降り、薄暗いゲート部屋に誰もいないことを確認して中に入る。

「ここどこ～？　この模様は何～？」

「この紋様に今からにーちゃんが魔力を流すからよく見ておけよ」

　手に魔力を集めてゆっくりと流し込みゲートを起動させると、目を見開いて驚く妹。軽く説明をしてすぐに移動しよう。

「この中に入ると５階に到着だ。付いてこい」

「そんなすぐ行けるの？　あ、待ってよ」

　サァーという音がすると瞬時に景色が変わり５階のゲート部屋に出る。間もなく妹も後ろのゲートから恐る恐る出てくる。

「ここダンジョンの中なの？　もう５階なの？」

「そうだ。ここから先はモンスターが出るかもしれないから俺の後ろからはぐれるなよ」

「わかった～」

　道中にゴブリンソルジャーがいたため、正面から真っ二つにする。レベルが上がったことで剣の重量を上げてみたが問題ないようだ。

「その倒し方グロいぃ……もうちょっとレディーに配慮してよっ！」

「バカモン。これからダンジョン潜るならこういうのに慣れていかなきゃダメだぞ」

　その後にも３体ほど掃除して目的の橋落としポイントへ到着。しばらくブツブツ言っていた妹はダンジョン内が物珍しいのか壁をぺたぺた触ったり、魔石を手で転がしたりとせわしない。

「ここまでモンスターを大量に連れてくるから、俺が渡り切ったらそこと、この２本のワイヤーを切って橋を落としてほしいんだ」

「それで剪定ばさみがいるんだね。でも切れるかな～あの紐、太いし」

　そういえばこのワイヤー結構太いな。レベル１の非力な中三女子でも切れるのかオラ不安になってきたぞ？

「……試しに切れるか他の橋で試してみるか」

「うん」

　今いる場所から３０ｍほど下に降りた先にも別の橋があるのでそこで実験だ。道は完全に舗装されておらず、所々に大きな段差や岩がある。妹は降りるのに時間がかかるようだ。俺も肉体強化がなければあんなものかもしれない。

「よし、ここ切ってみ」

「は～い。えいっ！　えいっ！　かったぁ～い」

　５秒ほど剪定ばさみをにぎにぎして、ようやく１本切れた。この速度ではトレイン中にこれを２本切ってる余裕なんて無い。俺と同じように鉈でやらせてみるか。しかし鉈なんて扱えるのか……

「ジャンプ～斬りっ！　あ、切れた。今のコタロー様の必殺技の１つで」

「鉈ならいけそうだな。それじゃ戻るか」

「ちょっと！　ちゃんと聞いてよっ！」

　安全のため俺が最初の１本を切って、妹が２本目を切る作戦で行くとするか。俺も試しに剪定ばさみで切ってみたが確かに力が必要だ。鉈のほうが切りやすいのかもしれない。

　橋の付近はモンスターがポップしないため他の場所から連れてこない限り安全。妹にはそこで隠れて待機してもらう。心配なのは妹がどこかフラフラと行ってしまうかもしれないこと。そうならないよう何度も念を押しておく。

「それじゃ行ってくるが……、そうそう、大量にオーク連れてくるからびびるなよ？」

「大丈夫。そこの紐切るだけでしょ？」

「数分で戻るからな、動くなよ。それじゃ行ってくる」

「は～い、いってらっしゃ～い」

　経路にいるモンスターの掃除とトラップの有無を確認しながらオークロード部屋に急いで向かう。目的地まで１００ｍほどに迫ったところ、オークソルジャーが徘徊していた。

（おかしいぞ？）

　この階でのオークソルジャーはオークロードが呼び寄せたものしか存在しない。自然にはポップしないのだ。つまり誰かがオークロードに召喚させたことになる。

　誰かが戦っているのか……いや待て。誰かが倒れてる！

　徘徊しているオークソルジャーから隠れるように、女性冒険者が壁の窪みに背を預けて蹲っていた。息を殺してじっとしている。どうやら腕を怪我しているみたいだ。

　声を掛けようにもオークソルジャーが邪魔なのでまずは倒すことにする。奇襲攻撃を狙いに死角へ回り込み、足音は控えめに、だが出来得る限りの速力で駆け出す。

　オークまであと５歩といったところで俺の足音がようやく聞こえたのか慌てて振り返る……が、もう遅い。片手突きの構えで剣の切先を防具で守られていない喉元に差し込むと、オークソルジャーは声にならない悲鳴を上げ、ガクッと崩れ落ちる。剣に乗る重みがリアルだぜ。

「大丈夫ですか」

「ぐっ……うぅ、向こうに見たこともないオークが……まだ仲間が中に……」

　女性は腕が痛むのか蹲ったままで顔だけ上げて話している。痛む箇所をよく見れば青黒く腫れあがっている……骨折はしていても命には別条はなさそうか。

　そして”向こう”というのはやはりオークロード部屋のことだろう。冒険者ギルドでも注意喚起されてるはずなのにオークロードに手を出したのは何故なのか。まぁ今はそれを問い詰めても仕方がない。

「今から様子を見に行きます。安全な場所まで一人で歩けますか」

「……あぁ……すまない。私は大丈夫だ。どうか、どうか仲間をよろしく頼む」

　彼女は冷や汗を掻きながらも懇願するように「仲間を助けて」と俺に乞う。まだ生きている可能性があるのか分からないが急いだほうが良さそうだ。

　なるべく足音を立てずに走り、そろりそろりとオークロード部屋入り口まで移動。少しだけ顔を出して部屋の中を覗くと、血が散乱していた。死体は見えるだけで２人。生き残りは……まだいる。中に３人立っているのが確認できた。

　すでにオークソルジャーは１０体以上召喚されていて、オークロードを含めた集団に囲まれている。生き残っている冒険者３人のうちタンクっぽい人はもう左腕が折れ、強い衝撃を受けたであろうボコボコの盾を右手でただ構えてるだけ。後ろの２人は恐怖のあまりふさぎ込んでいる。どうやらオーク達は一思いに殺さず、楽しんでいるようだ。

（ふーむ。どうしたもんか）

　レベル８になったとはいえ、あのオーク集団に飛び込むのはリスクが高い。だが見捨てるのも目覚めが悪すぎる。どうするか悩んでいる時間もない。ちんたらしていたら待たせている妹も危険だ。

（倒せるだけ倒し、釣れるなら釣る。無理そうなら逃げる。これでいこう）

　オークソルジャー達は冒険者をいたぶるのに夢中なのか、こちらに注意を向けていない。見た感じ生き残っている冒険者達は……オークソルジャーにも勝てないだろうな。とりあえず２、３体減らしてみるか。

　こっそり足音を消しながら近づき、一番手前のオークソルジャーの後頸部目掛けて一突き。まずは１体。振り返った隣のオークの左脇腹から右からに向けて逆袈裟を噛ます。痛みの悲鳴を上げて倒れるが、まだ死んでいない。

　そこでオークロード達が一斉に俺に気づく。左隣にいたオークソルジャーの振り下ろしを避けてから刃先を首に当てて引く。大量の血が噴き出し、これで２体目。すぐに先ほど倒れたオークにトドメを差し３体目。

《ブモォオォオオォオオォオオォ》

　オークロードの《雄叫び》により、黒い靄から出現し、新たなオークソルジャーが４体生まれ落ちる。さらに《雄叫び》の効果により周囲のオークソルジャー達は赤いエフェクトを帯び、攻撃力が２レベル分強化された。

　楽しみを邪魔されたせいかオークロードが激昂し、俺に目掛けて手に持った丸太を振り回そうとするが、近くのオークソルジャーにぶち当ててしまい壁までぶっ飛ばしている。すんげぇパワーだ。

　闖入者許すまじと２体のオークソルジャーがこちらに突進し、錆びた鉄剣を渾身の力で振り下ろそうとしてくるが――俺は逃げる。これ以上は無理だ。

「俺が引き付けます！　隙を見て逃げてください！」

　尻尾を巻いて逃げる俺にオーク達は一瞬唖然とするが、火をつけた爆竹を３つほどオーク達に投げつけると、我に返って次々に俺へ向けて猛ダッシュを開始する。

「「「「ブモォオォオ！！」」」」

「まだあの数には勝てないな、だが上手いこと釣れた」

　オークロードは俺を追走しながら何度も《雄叫び》を発動させ、オークソルジャーが嘗てないほど量産される。吊り橋までの経路の逃走はもう慣れたもので、トレインの乗客がバラバラにならないように逃走速度を調整し、追加で適度に爆竹を投げ込む。よし、橋落としポイントまでもうすぐだ。

「こっちだよーおにぃ！　……ひぃぃ」

「ロープを切る準備をしとけっ！」

　そりゃびびるよな、これ５０体は軽く超えてるのではなかろうか。過去最高記録だぜ。

　橋は揺れるが重心を下げ、下半身で出来るだけ揺れを消して移動するのが一番安定することが分かっている。最初にやった時と比べたら橋渡り技術は雲泥の差だ。

「俺が切った直後に切るんだ。まだだぞ！」

「わ、わかったー！」

　ようやく渡り切って剪定ばさみを取り出す。だがワイヤーを切るのはもう少し後だ。

　２０ｍほど手前までオーク集団が迫っている。オークロードの血走った目が見え、息遣いも聞こえ始める距離。吊り橋が大きく揺れ、何体か落ちるがオーク集団は誰も気にせず俺に対する殺意だけを高めて突進してくる。

　集団の後ろを見れば……ようやく後列も橋に乗ったようだ。

「華乃、今だ！」

「じゃーんぷ……斬り！！」

　必殺技かなんなのか知らないが一発でワイヤーを切ることに成功し、断末魔と共に落ちていくオーク達。妹は「お～大漁だ～」と谷底を楽しそうに見つめている。

「想像以上に多かったんだけど……あぁっ、何？　苦しい……」

「レベルアップの症状だな」

「うぅっ……ん？　なんか……力が……漲ってきたぁぁ！」

　急激なレベルアップで肉体強化が始まり、それが終わると全能感に満たされたのか腕をぶんぶんと振るう妹。レベル１なのにオークロードとその集団をこんなに倒したら一気にレベル３か４くらい行きそうだな。

「まだスキル……《簡易鑑定》は覚えてないよな」

「《簡易鑑定》？　あ、なんかほわほわした感じがする。これセットしていいんだよね？」

「いいぞ。ジョブチェンジはせず、そのまま【ニュービー】のジョブレベル１０まで上げるんだ」

「はぁーい」

　ということは今の一回きりのトレインでレベル５に、ジョブレベルは７に達したのか。

「そういえばおにぃ。返り血浴びてるけどなんかあったの？」

「他所の冒険者がさっきのオーク達に絡まれて襲われてたんだよ」

　本来はオークロードを刺激して逃げるだけの簡単なトレインだが、今回はすでに交戦中で数体のオークソルジャーを倒しつつ纏めて釣ってきたと話す。

「多分逃げられたと思うが、もう一度行ってどうなったか見てこないとな」

「ほぇ～私はどうするの？」

「放っておくとアイテムが消えちゃうから一緒に行くにしても回収だけはしておこう」

　見た限りオークロード部屋にいたオーク達は全て釣れたはず。レスキュー部隊を呼んであるならこれ以上俺達に出来ることはないと思うが、念のために見に行こう。

　その前に谷底まで８０ｍほど降りなければならない。そろりそろりと降りていた妹は自分の肉体強化に驚いている。

「なんかすっごい体が軽いよっ」

「あんまり調子に乗ってると転げ落ちる」

　よっこらよっこらと谷底の魔石が散乱している場所まで降りる。上空を見れば切れた橋が崖にぶら下がっている。

「すっごーい！　これいくら？　あ、このキラキラしたコイン何？　あそこアイテム落ちてる！」

「落ち着け。魔石とかは売ってお前の装備代にするから徴収するぞ」

「はぁーい」

　これは……ユニークアイテムか。《簡易鑑定》で見てみると[オークロードの紋章]と出ている。亜人に対し攻撃ダメージ１０％増加、被ダメージ１０％低下の効果がついた豚のマークのバッチだ。亜人は種類が多く深層でも出るため、対亜人特効アイテムは長く使えるのだ。ゲームでもオークロード狩りが取り合いになるほど人気だったのはこのバッチのせいでもある。

　ちなみにユニークアイテムは特定のフロアボスのドロップか宝箱でしか手に入らない珍しいアイテム。ゲームでは争奪戦になることも多く高値で売れていたものだ。

「このアイテムはお前にやるよ。《簡易鑑定》で見てみ」

「やってみる……えいっ！　おぉ……え、これ強い？」

「護身用に付けておけ。それ結構貴重なもんだから無くさないようにな」

　おっ金ーおっ金ーと何かの替え歌を歌いながら小躍りする妹。これは売っちゃダメだと念を押しておいたほうが良いな。

　バッチの他には魔石数十と、ダンジョン通貨が３枚。１回のトレインで数万程度稼げた計算だ。これだけでも食っていけるんじゃね？　とか小物的な考えに取りつかれそうになる。

「それじゃオークロード部屋見に行ってくるけど、華乃はどうする？」

「待ってるのも暇だし、一緒に行くっ！」

　オークロード部屋に行くには来た道を戻るのが一番近いが橋を落としてしまったため、やや遠回りの別ルートを通らなければならない。アイテムを全部回収し終えて水分補給した後に移動開始する。

　途中ゴブリンソルジャーがいたため、持っていた金属武器を叩き落としてから妹に戦いを経験させてみる。持たせた鉈をエイッエイッと振り回すものの、なかなか致命的なダメージを与えられず血だらけになるだけで、かえってグロくなる。攻撃している妹は涙目だ。

「首のような急所を狙うか、戦闘能力を封じられる腕や足を狙うのがいいぞ」

　仕方が無いので俺が一撃でゴブリンの首を落とす。ゴブリンソルジャーは皮鎧を着ているため、無闇矢鱈に攻撃しても効果が薄い。時間を掛ければそれでも倒せないこともないが、他のモンスターがリンク（※１）し、多対一になる危険性もある。いつ何時モンスターが現れるかもしれないダンジョンでの戦闘はなるべく短時間で終わらせるに限るのだ。グロいのに耐性が無いのは慣れるしかない。

　そんなことしつつ１０分程度でオークロード部屋の前に到着。部屋の中を覗いてみても誰もおらず、生き残っていた冒険者らは無事に逃げ切れたようだ。しかし彼らの仲間の遺体も無くなっているが一緒に運んだのだろうか。５階にはレスキュー隊の他に死体を運ぶギルド職員もいる。連絡して応援を呼んだのかもしれない。

「ここにオークロードがでるんだね。吊り橋まで呼び寄せてから落とせばいいの～？」

　１時間でオークロードがポップし、橋も１時間きっかりに自動修復される。橋落としで倒した場合、どちらかを見れば次の橋落としが出来るのかが分かる。

　トラップや経路のモンスター掃除、冒険者の有無などの注意事項も教えておくが、それ以上にレベル７までは走力が厳しい可能性があるためやらないほうがいいとも言っておく。

「あと基本的にダンジョン情報は極秘で行くぞ。知られるとせっかくの美味しい狩場が取られたり、悪い奴に悪用される可能性もある。情報を狙って怖い奴らが危害を加えてくるかもしれないしな」

「わかった～」

「んじゃ今日はあと何回かやってみよう。そういえば、初期スキルって何か覚えてる？」

　俺の場合は《大食漢》というスキルを初期から覚えていた。一般的には初期スキルを覚えているほうが珍しいので妹が覚えていない可能性のほうが高かったが、試しに聞いてみたら――

「んっと、《簡易鑑定》以外のだと《二刀流》っていうスキルがあるよ」

「……まじで？」

　《二刀流》とは【侍】が覚えるエクストラスキルで、両手にそれぞれ武器を持ったときに攻撃力、命中が大きくアップし、ウェポンスキル発動時には攻撃回数も増える上級スキルだ。２回攻撃のスキルを《二刀流》で使うと４回攻撃となり、隙が少なくなる特性もある。

　エクストラスキルとは上級以上のジョブをカンストさせ、特殊クエストを完了させることで取得が可能となるスキル。この世界では初期からこれを覚えているのは大きなアドバンテージになりうる。

　何故ならエクストラスキルの特殊クエストを完了させるには４０階に行かなくてはならないからだ。ゲームのときは高レベルプレイヤーに連れていってもらうという手段を取れたが、攻略記録が３２階のこの世界ではそれも不可能。自分で取りに行くしかない。

　カラーズのリーダー田里も【侍】ではあるものの、特殊クエストの関係上《二刀流》はまだ覚えてられていないはず。現に攻略番組で映っていた田里のメインウェポンは太刀の１つのみだった。逆に言えば田里は【侍】としてはまだ不完全な状態と言える。

　《二刀流》についてもいくつかスタイルがある。

　ダンエクプレイヤーの間ではＳＴＲを集中的に上げて両手にそれぞれ両手武器を装備した高火力スタイルと、ＡＧＩを特化させ攻撃回数の多いスキルを連発する多段攻撃スタイルの２つが主流だったが、妹はどちらがいいかそれとなく聞いてみた。

「うーん、いい武器が入ったらそれでやってみたいかな～」

「試しにその鉈と……この剪定ばさみでゴブリンを攻撃してみるか」

「《二刀流》をやれってこと？　できるかなぁ～。というかこの鉈、結構重いから片手だと振り回せるか……あ、できるっぽい」

　線の細い中三女子でもレベル５まで上がればそこらの成人男性並みかそれ以上の腕力が身につくので問題はないだろう。試しに先ほどと同じようにゴブリンソルジャーと戦わせてみたら「元々両利きだったしね。右でも左でも字を書けるよ」とか言いながら見違えるような動きで攻撃を繰り出していた。

　驚異的な戦闘センスを誇る妹を前に、やや立場をなくしつつある兄であった。

　\*・・\*・・\*・・\*・・\*・・\*

　パワーレベリングの途中でランチタイムを挟み、３回程のトレインで終わりにした。今日がダンジョン初日の妹は楽しそうにはしゃいでいたが、実感を伴っていなくても緊張はするし疲弊もするわけで、無理は極力避けたい。

　帰りもゲート部屋からすぐに出られたため往復ではほとんど時間は掛かっていない。元の世界での会社の通勤時間もそうだったが、移動時間を削れるというのはその分時間を有効活用できるので非常に大きなアドバンテージとなる。

　時刻を確認すればまだ午後２時。終わりにするには早かったので、冒険者ギルドの防具店へ寄って妹の防具を見に行くことにする。

「らっしゃーい！　……ん？　魔狼の防具買ってくれたにーちゃんじゃないか」

「あっ、どうも」

　前に訪れたときに魔狼ジャケットを売ってくれたヒゲモジャエプロンのオッサンだ。今日はどうしたと言ってきたで、妹のための軽い防具がないか聞いてみる。まだ魔狼の皮の在庫があるのなら魔狼の胸当てでも頼んでみようかしらん。

「ちょっと待って！　かわいいのがいいっ！」

「かわいいのって……ヒラヒラするやつは革だから重くなるぞ？」

　物理攻撃から守ることを想定した革防具はどうしても分厚い皮を使用するため重くなる。どう説得したらいいかと考えていると、ヒラヒラ部分は布でやるからフレアスカートで何か良いのがないかと我が妹ながらアホなことを宣う。

　ヒラヒラなんてあったところで邪魔になるだし、戦闘でスカートとか何を考えてるんだと止めに入る。どうやらアニメキャラを参考にした可愛いドレスのような防具が欲しかったらしい。

　そも、可愛いとかヒラヒラとか以前におにーちゃんの財布も心配して欲しいものだ。

「まぁ、革防具ってのはどっちかっていうとピッチリした感じのになるな。だがまだレベル１なら重量もかなり減らさないと……」

「私もうレベル６だよっ！」

「なにぃ！？」

　妹は身長１５０ｃｍ足らずで中三としても小さいほう。加えてかなりの童顔。そんなのがレベル６というのに。エプロンおじさんは目を見開き仰け反りながら驚いている。

「そ、そんならァ５ｋｇほどの防具なら何の問題もなさそうだな」

「華乃よ……今日は胸当てと小手くらいで我慢しておきなさい」

「えぇーブーツ！　ブーツも欲しいっ！　かわいいやつ！」

　なんだかんだで魔狼の胸当てと小手の他に、魔狼ニーハイブーツも買わされ、今日の稼ぎどころか昨日稼いだ稼ぎもすってんてん。妹のほうはホックホクの笑顔で鼻歌を歌いながら歩いている。

　まぁこれは初期投資。これから沢山稼いでいただきましょうかね。武器のほうは学校で小さめの剣を２本レンタルすればいいか。俺名義でも問題になるまい。

　さて。刈谷と赤城君の決闘の日が近づいている。ちゃんとレベルは上げられただろうか。結果次第ではＥクラスの雰囲気が更に落ち込むことになるので頑張って貰いたいものだが……どうなることやら。

（※１）リンク

近隣のモンスターが戦闘に参加したり、増援を呼んだりすること。この場合プレイヤーは多数のモンスターの相手をしなくれはならない状況に陥る。

　――　早瀬カヲル視点　――

　いつもなら朝のホームルーム５分前に到着するように登校するのだが、今日は特別な日。早めに登校しようと思っている。

　ユウマがＥクラスの代表として因縁のＤクラスと戦う日を迎えたのだ。

　先日の部活動勧誘式でＥクラスの立ち位置を知り、冒険者学校生活に夢や希望を抱いていたクラスメイト達が絶望的な状況に追い込まれたのは記憶に新しい。すぐに立ち直れたのは稀。未だに落ち込んでいるクラスメイトも多く、Ｅクラスには重苦しい悲愴感と先が見通せない閉塞感が漂っている。

　だからこそ負けるわけにはいかない。これ以上、他のクラスから侮られ見くびられるわけにもいかない。Ｅクラスだってやるときはやるんだと知らしめるためにも、そして私達が胸を張って前に進むためにも。

　ここ１ヶ月、遅くまでダンジョンに潜りモンスターを狩り続けてきた。学校にいる時間は対人戦のトレーニング。合間に作戦会議など、やれることは全てやってきたつもりだ。それでも不安は拭えず、ついネガティブな思考に陥ってしまう。そんなときは厳しい特訓を思い出しシミュレートする――

　刈谷という男は相当な《オーラ》を放っていたことから只者ではないというのは知っている。レベルも今のユウマより高いことも。また１年生の中では有名な大剣使いという情報もナオトが仕入れてきてくれた。Ｅクラスの生徒が経験したこともない程のハイレベルな戦いを仕掛けてくることは間違いない。

　そんな相手に戦いを挑むというのなら当然無策というわけにもいかない。自身のレベルを上げるのはもちろん、相手のスタイルや戦術を徹底的に研究し、打ち勝つための道を切り開かなくてはならない。

　私は幼少より剣道をやっていたものの、大剣使いとまともに実戦を行ったことは無い。とはいえ冒険者が一世風靡するこのご時世。大剣使いの戦闘シーンを映した動画は探せばネットに転がっている。それらを皆で見て研究を重ねるわけだ。

　大剣は一般的な片手剣と比べて重量も間合いも大きく異なる。剣道は竹刀を相手の体の正中線にぴたりとつけて、そのまま打ち込める間合いまで距離をつめる戦術を取ったりするが、大質量で高い攻撃力を誇る大剣相手に至近距離でまともに打ち合うわけにもいかない。

　だが大剣は大きく重いという武器特性ゆえに振りかぶる攻撃が多く、隙を狙われやすいという弱点もある。そのため対刈谷戦でユウマが取るべきスタイルは必然的にカウンタースタイルとなる。

　まずは刈谷の動きを見てどのような攻めのパターンや癖があるか知ること。そのためには位置や間合いを掴ませないよう、絶えず動き回らなければならない。

　それである程度パターンが分かったら攻撃の隙を徹底的に狙いに行く。また隙を狙うだけでなく隙を作る動きを見せて誘うこと。カウンタースタイルは立ち回りと打突の攻撃スピードを上げることが重要になる。

　Ｅクラスにはユウマの実力に見合う大剣使いに心当たりが無いため、私が大剣を用いて練習相手になったのだけれど……正直上手くいけた自信はない。レベルが上がり私の体も大きく強化されたとはいえ、１０ｋｇ近い金属の武器を振り回すというのは相応の技術力が求められると分かったからだ。

　肉体強化により膂力がアップしたとしても私の体重が増えているわけではないので、重い武器を振り回せば重心もフラフラと動き回る。動きの速い相手との戦いの中で大剣を振るいながら重心を安定させることは非常に難易度が高い。

　仮に、片手でひょいと１００ｋｇの武器を持てる膂力があったとして、そんなものを振り回そうとすれば自分の方が振り回されてしまう、といったら伝わるだろうか。

　なので重い武器を振るうということは、その慣性に抗う力と技術力、経験が必要となってくる。重心を安定させようと武器を振るう速度を遅くすれば簡単にカウンターを入れられてしまうし、速くすれば慣性が大きくなり自身も振り回されてしまう。ユウマと戦いながら私も勉強の連続だった。

　そんな感じで毎日手探りで練習を続け、動きを撮影した動画で確認しながら対策を立て、なんとか形になったと思う。ユウマも大剣を相手する感覚は掴めたと言っていたので、多少なりとも役に立てたのなら幸いだ。

　だが全てを完璧に出来たわけではない。

　まずユウマが大剣の衝撃をまともに経験していないこと。地稽古とはいえユウマに怪我をさせるわけにはいかなかったからだ。決闘で使う武器は刃を潰してあるとはいえ当たりどころが悪ければ徒では済まない。ましてや格上相手では尚更。

　またレベルも思ったより上がらなかった。刈谷のレベルは端末のデータベースでは何故か参照できなかったが、入学式のときのオーラ量からいってレベル１０前後。しかも【ファイター】のスキルも所持しているはずだ。私達もギリギリジョブチェンジまではいけたが、基本ジョブのスキル獲得まではできなかった。

　ウェポンスキルの対処も問題だ。恐らく使ってくるのは《スラッシュ》というソードスキル。私では放つことができないので動画を繰り返し見てイメージするだけだった。

　このようにネガティブ要素はあるものの、それを上回るほどのポジティブな要素もある。ユウマには剣術の才能が底上げされる《剣術マスタリー》という凄まじい性能の初期スキルを持っている。対人戦におけるセンスや勘も抜群に良い。

　そして刈谷に対しては秘策もある。それが決まれば確実に勝てるはず。ユウマも何とかなると自信を見せていたので大丈夫のはずだ。それを仲間の私が信じないでどうする。

　――といった感じで大剣使いとの戦闘を何度も何度もシミュレートし、不安に駆られ自分に大丈夫だと言い聞かせ続けたせいで、睡眠不足を実感している。私が何を考えたところで今更変わることはないというのに。できることはユウマが自信を持って決闘に臨めるよう、笑顔で送り出してあげることだけだ。

　長い髪を高い位置で結び、身だしなみをチェックし、今日も今日とて颯太を迎えに行く。迎えに行くと言っても私の家の向かいなので歩いて１０秒の距離だけれど。

　黄色い下地に黒い文字で『雑貨ショップ　ナルミ』と書かれているやや古びた看板。その下のほうにある成海家のチャイムを押すと軽快なリズムの音が鳴る。

「おはようございます。颯太を迎えに来ました」

「あらカヲルちゃん。ちょっと待っててね～」

　階段下からいつものように「颯太～カヲルちゃん来たわよ～」と声を上げる陽気な成海のおばさん。迎えに来る時間が少し早かったせいか、颯太の妹である華乃ちゃんとすれ違う。にこやかに微笑んで声を掛けてみる。

「華乃ちゃん、おはよう」

「あ、ども……」

　立ち話をしてみたかったけど、華乃ちゃんは短い言葉と軽い目礼だけしてすぐに出かけてしまった。急いでいた……というより、やはり嫌われているのだろうか。目も一瞬しか合わせてくれなかった。

　少し憂鬱な気分になっていると颯太が欠伸をしながら、のっしのっしと階段を下りてくる。今日が何の日だか覚えていないのだろう、実に緊張感のない顔だ。別に期待などしていないのでどうということはないが。

「それでは行くとしよう」

「おうよ」

　いつものように私が先行し、やや後ろに颯太が付いてくる形の登校。特に話す事は無いので普段なら無言。しかし今日は聞きたいことがある。

「そういえば……見たのだけれど」

「なにを」

　昨日の夕方のことだ。今日の決闘のことを考えながらぼんやりと窓の外をみていると、颯太と華乃ちゃんが歩いていたのを見つけた。そのとき――

「黒い色の防具を着ていたの……」

「黒い？　あぁ魔狼の胸当てな」

　そう、魔狼の。６階にいる黒い狼のドロップ品から作られる革防具。中級冒険者にとってはメジャーなものだ。実は私もダンジョン攻略のために各部位の魔狼防具を揃えていた。それをスライム相手に四苦八苦している颯太が着ていたのは目を瞑るとして……

「その防具をなんで……華乃ちゃんも着ていたの？」

「……」

　華乃ちゃんは現在中学三年生で、来年冒険者学校を受験すると聞いている。ダンジョンにはまだ入ることが出来ないはずなのに、何故かダンジョンで戦闘するための防具を着ていた。魔狼の小手や胸当てなんて重いものを普段着として着るわけが無い。これは一体どういうことなのか。

　問いただそうとすると颯太は視線を泳がせ誤魔化すように明後日の方向に顔を向ける。おまけにカスカスの口笛を吹き始めた。

「……その下手糞な口笛で誤魔化すのはやめて」

「ぶひっ」

「何か隠してるの？」

「あぁ、実は……」

　相変わらず要領を得ない説明をしようとする。「来年受験するから今のうちに持っておいてもいい」だとか「俺が着ているのを見て欲しがった」とか。無くはないかもしれないが苦しい言い訳だ。

「じゃあ、なんで華乃ちゃんの腰に武器なんて下げていたの……？」

「…………ぶひっ」

　颯太は汗っかきだが、この汗は冷や汗なのを知っている。そしてこの顔は何かを隠そうとしている顔だ。昔から変わっていない。何かあればすぐに感情が顔に出るというのにポーカーフェイスで隠し事が成功すると思っているだなんて、烏滸がましい。

「あぁ！　大宮さんだ！　おはよおぉおお～」

「えっ、あ、成海君？　あの、おはよ……」

　たまたま前を歩いていた大宮さんを見つけ、急いで走っていく颯太。……逃げたな。

　大宮さんは誰にでも優しく知性もあり、ユウマとは違う意味でクラスを引っ張っていけるほどの優秀な生徒だ。それなのにどうして颯太と一緒にいることが多いのか気になっていた。最初は颯太がクラスメイトから忌避されているのを見て、同情心から声を掛けただけだと思っていたけど、そうではなかった。

（私の忠告を跳ねのけたのは何故……？）

　大宮さん達には一度「颯太が良くない人物なので近づくべきではない」と忠告したことがある。それなのに未だに教室で話しているのを見かける。

　彼女らの颯太を見る目が節穴だったのか。それとも実は入学してから颯太は変わったのだろうか――

（変わった気もする……）

　入学前の颯太より明らかに痩せてきている。あれだけ無茶な暴飲暴食を繰り返し、怠惰で動こうとしなかったというのに。その頃を考えれば撼天動地というべき出来事だ。

　でも誤魔化し方や逃げ方は、やはりいつもの颯太だった。

　今日はいつもより少し早めの登校となったのだが、その理由は教室に入れば一目瞭然だ。クラスメイトが赤城君の席の周りに集まって「頑張って」と激励している。

　赤城君のほうはというと、クラスメイト一人一人に「ありがとう」と笑顔で応えている。大事な決闘の日でもナーバスにならず、しっかりと受け答えが出来ているのは大物の器というやつだろうか。

　カヲルも教室に入るなり人の輪の中に入り激励していた。この１ヶ月、赤城君のダンジョンダイブや練習にずっと付き添い、遅くまで頑張っていたのを知っている。今日という日が心配でならなかったのだろうが、それでも笑顔で応援しているのは流石ヒロインと言うべきか。

　カヲルが赤城君に接近することに対しブタオマインドも以前ほどシクシクと痛むことは無くなってきたが、それでもまだかなりきつい。人を好きになるということはそう簡単に割り切れるものではないのだと、ブタオが教えてくれている気がする。

　赤城君の武器立てには布に入った細身の武器が立て掛けられていた。中は見えないがアレで戦うのだろうか……まさかゲームと同じ攻略法で行くとかしないよな。とはいえ、あの攻略法がこの世界の刈谷に通用しないということもなさそうだが。

（中の武器がアレだとしたら……ゲーム攻略法を知っていることになるのか？）

　しばし思考の渦にいると教室の引き戸が勢いよく開けられた。

「おう、Ｅクラスのボンクラ共。えーっと誰だったが、俺に盾突いたゴミは……」

　刈谷とその取り巻きたちが教室に突然入り込んできた。負けるわけがないという、こちらを完全に見下した目をしている。驕れる者久しからずって言葉を叩きつけてやりたい。一方の赤城君のほうも臆せずやる気のようだ。

「それで。どこでやるんだい？」

「んぁ？　あぁ、お前だったか。放課後に闘技場の４番部屋の予約を取っといた。逃げんじゃねーぞ」

「そうそう、赤城とかいう名前だった。刈谷さん、見せしめにボコボコにしちゃいましょう」

　同じ学年でこれから同じ学校で頑張っていこうというときになのに。強いとはいえ、ここまで人間、低俗になるもんかねぇ。Ｅクラスはまだ１ヶ月しかダンジョンに潜ってないんだし、レベルが低くて弱いのも当たり前だろう。入社数年目が新入社員と張り合っているようなもんだ。

「Ｅクラスの劣等生共！　お前らも絶対に来い。そしてお前らの立場がどういうものか教えてやる」

　刈谷が《オーラ》を発する。ビリビリとした空気がＥクラスの教室を満たす。

　やはりレベル１１くらいかね。何でかデータベースからは刈谷の情報が見えないので登録されているレベルは不明だが、ゲームと同じなら１１のはずだ。《簡易鑑定》はしない。使うと相手に使われたと分かってしまうから、使い時は注意しなければならない。

　クラスメイト達は強者の《オーラ》に怯んでしまい何人か俯いてしまっている。レベル８になった俺からすれば威圧感は以前と比べ然程でしかなかった。しかし、こうも頻繁に《オーラ》を使われちゃたまらんね。

（刈谷と戦うとなるとレベル７、８くらいがボーダーラインだと思うが……）

　端末をみても赤城君のレベルは５と表示されている。俺のようにレベルを隠匿している可能性はあるが、仮にレベル５だとすると相当な熟練プレイヤーレベルでなければ勝つことは難しいだろう。

　刈谷が勝ったらＤクラスの雑用とかさせられそうだし、赤城君には頑張ってほしいものだ。

　\*・・\*・・\*・・\*・・\*・・\*

　昼食の間もＤクラスからの煽りは続いた。

「Ｅクラスのくせに、私たちのクラスに歯向かってるってマジ～？」

「身の程知らずだよね～刈谷君に勝てるわけないのに」

「あたしらもＥクラス討伐参加しちゃおうか」

「キャッハハ、それいいかも～」

　学食にてＥクラスを馬鹿にした発言を近くから大声で宣うＤクラス。【ファイター】志望のクラスメイトの女の子が肩をプルプルさせなんとか耐えている。大宮さんと新田さんも別の話を振って気をそらしながら宥めている。

　朝の刈谷訪問の後にクラスメイトで話し合い、煽りが続いてもみんなで我慢しようという結論になったが……もちろんＥクラス全員の気が長いわけがなく。

「うぜーんだよ、お前らだって中学組の最下位クラスじゃねーか」

　士族の磨島君だ。彼は頑張り屋だがプライドも高く、理不尽な見下しに我慢ならなかったのだろう。確かにＤクラスは内部生では最下位クラスだが、外部生であるＥクラスの実力と比べればその差は大きい。

「あぁーん？　なにコイツ。今すぐボコっちゃおうか」

「やっちゃう～？　Ｅクラスのくせに同じ場所で食事とか不味くなるのよね～」

「【ニュービー】のくせに生意気すぎ」

　焦ったクラスメイト達が間に入り、Ｄクラスの連中に謝罪しつつ磨島君を宥めに入る。今やりあっても勝てるわけないのだから耐えるしかない。

「ちっきしょう！」

「一刻も早く俺らも強くならねーと挑発止まりそうもないな」

　磨島君は率先してＥクラスの強化のために動いてきた一人なので少し不憫だ。こちらにも強者がいるにはいるが、今の段階では表舞台に出てくることはない。俺だってしょうもない煽り如きで目立ちたくないし、ダンジョン知識を持っていると知られるわけにはいかない。

　だが、何故こうもＥクラスを煽るのか。

　刈谷だけでなくＤクラス全体が仕掛けに来ているように感じる。上位を目指すなら下位なんて気にしている場合じゃないだろうに。何か狙いでもあるのだろうか。

　ゲームだったときの刈谷イベントはどうだったか。

　メインストーリーは基本的に主人公の赤城君かピンクちゃん視点でしか語られておらず、ストーリーに関与しないキャラやその背景については省かれていることが多い。刈谷についても序盤の中ボス的な扱いで、倒した後はもう登場しなかった……気がする。

　というか、アドベンチャーモードにおける序盤の会話なんてほとんどを読み飛ばしていたし、すぐに倒される中ボスの裏設定などいちいち覚えておくようなことでもなかった。こうなると分かっていれば隅々までちゃんと読んだのだが……後の祭りだ。

　いずれにせよ、これだけＥクラスを煽る理由は必ずあるはずなので、刈谷イベントが終わって余裕があるときにでも探ってみるとしようかね。

　\*・・\*・・\*・・\*・・\*・・\*

　そして放課後。

　クラスにピリピリとした雰囲気が漂う。

「おい赤城！　そしてＥクラスの雑魚共ォ！　闘技場の４番に集まれぃ！」

　担任の村井先生がホームルームの終わりを告げた瞬間になだれ込んでくる刈谷の取り巻き共。先生はこの場にいるのに何にも言わず、何の関与もしないと宣言するかのように教室を後にする。もしかしてこれも教育の一環とでも考えているのだろうか。

　赤城君は黙って武器が入った布袋を持ち、胸を張り足取り確かに教室を出る。こういった場面でも堂々とした態度を取れるというのはＥクラスの生徒としても頼もしいものだね。

「がんばって赤城君」

「見に行くからなっ！」

「Ｄクラスなんてやっつけちゃって！」

　ぞろぞろとクラスメイト達も闘技場へ移動を開始する。大丈夫、大丈夫と互いに声を掛け合っている。期待したい気持ちは分かるが、正直かなり分が悪いように思える。

　それでは俺も闘技場４番部屋とやらに見学しに行きますか。

　闘技場は当然の如く全域がマジックフィールド内にあり、施設自体も肉体強化前提の耐久性を持つ。内部は１番から４番までの区域に分かれており、１番部屋が１番大きく、小さめ４番部屋でも数十人が練習できるほどの広さがある。魔石を使えば魔法防御のシールドを張ることもできる本格的な訓練闘技場となっている。

　この闘技場は普段多くの部活が練習場として使っており、４番部屋とはいえ下位クラスの決闘ごときで放課後に予約を取れるのも妙な話だ。ゲームでは背後にＢクラスの頭がいるんだったか……もう忘れた。

「逃げずによく来たなぁ、赤城ぃ」

「逃げるつもりなんてないさ」

　闘技場の中央で向き合う二人。体の大きな刈谷が赤城君を見下ろし睨みつける。赤城君も背が小さいというわけでもないが、１９０ｃｍを超える刈谷と比べると体格差は歴然だ。

「刈谷君、Ｅクラスなんてやっちゃえ～」

「身の程を思い知らせてやってくれ刈谷さん！」

　外野のヤジが煩い。というか刈谷は人相悪く、いつも居丈高な態度をとって周りを怖がらせてばかりいるものと思っていたのにＤクラスの生徒には存外人気がある。実はジャ○アンのように面倒見がいいとかいう設定あったりするのか。

　一方の赤城君はＤクラスからのヤジや挑発がまるで効いてないようで、涼しい顔で刈谷を見ている。随分と余裕そうだけどレベルは大丈夫なのかね。

　ダンジョンに潜ってみて分かったことだが、この１ヶ月で刈谷のレベルに迫るのは厳しく、それ故に正攻法で倒すことも難しいということが実感できた。ダンエクプレイヤーなら刈谷の戦闘スタイルはよく知っているし対策もあるのだが、そうではない赤城君には何か作戦があるのだろうか。

　両者の睨み合いが終わり、防具を装着しに互いの陣地へ戻る。

　防具に着替えるため学生服を脱ぐ刈谷。長身だけではなく、高校生になったばかりとは思えない体つき。首から肩にかけての筋肉の盛り上がりから、肉体強化以外にも相当なトレーニングをしているのが見て取れる。

　装備しようとしているのは随所に金属製のプレートが張られたレザーアーマーだ。重量は２０ｋｇを超えるかもしれないがレベル１０を超えている、かつ、狭い闘技場のような場所限定なら立ち回りは問題ないだろう。

　取り出した武器はツーハンデッドソードと呼ばれる両手持ちの大剣。重量は１０ｋｇ以上、長さも１．５ｍほど。踏み込みと腕の長さを合わせれば剣の最大リーチは３ｍを超えてくる。攻撃範囲の見極めは気を付けなければならない。

　対する赤城君は黒色の魔狼の軽鎧だ。丈夫で軽くダンジョン産の素材の割には安価なので人気が高い。腹の部分は金属の補強が入っていて、内臓を守るようにも出来ている。そして布袋から取り出す武器は……

（やはりあれは[スタティックソード]……ゲームと同じ戦法を使う気か）

　赤城君が取り出したのは細く鋭い刀剣。バックソードとも呼ばれる片刃の直刀で、レイピアの剣身をやや幅広にしたような形状をしている。刃は潰してあるとのことだが切先は鋭く、肉体強化された力で振るえば少なくないダメージを与えるだろう。

　問題はアレがただの剣ではなくマジックウェポンだということ。

　[スタティックソード]は攻撃力は高くはないが、当てた相手にＡＧＩ低下、一定確率で麻痺の追加付与という効果がある。もちろん序盤の武器なので相手のレベルが高いと入らないが、レベル１１の刈谷相手なら十分入る。主人公のサブイベントをクリアすることで手に入る武器だ。

　ゲームでの刈谷は大振りモーションのソードスキル【スラッシュ】を多用してくるため、それに合わせたカウンターが攻略のカギとなる。だがレベル差があるとその隙を突くことすら難しいため、ＡＧＩ低下＋麻痺が付与された武器を使った攻略が定石となったわけだ。

　ＡＧＩは移動速度だけでなく通常攻撃モーションやスキル発動速度も関係してくる重要なパラメータ。あの剣を当てて刈谷のＡＧＩを下げることが出来れば、もしくは麻痺が成功すれば《スラッシュ》のカウンターが入れやすくなり、刈谷攻略の難易度が激減するだろう。

　しかし――

（あの剣の入手イベントを発生させるには結構面倒な回り道をしなければならないはず……誰かの入れ知恵か？）

　最初からあの剣の存在を知っているなら刈谷打倒のために狙って入手イベントを起こすことも容易だが、知らないというならそう簡単に手に入れられるようなものでは無い。そも、あの剣で刈谷を倒すというのは元々裏技的なものだ。

　ゲームでは実際に何度か戦ってみて、開始１ヶ月で刈谷を倒す難しさと自身のレベルの低さを痛感し、その上で効率的なレベル上げをしつつ試行錯誤を繰り返して、正面から撃破するというのが通常の倒し方だ。

　それに対し、レベルを大して上げなくても刈谷を倒す方法として編み出されたのが[スタティックソード]を使った戦術。刈谷戦がどういうものかを知っていなければ思いつくのは難しいはず。

　もちろん偶然イベントを起こして手に入れたということも考えられる。そして刈谷が大剣使いという分析から、カウンターの成功率を上げるためにＡＧＩ低下させる[スタティックソード]戦術が有効だと判断した可能性もゼロではない。

　だが入手が必然ならば。それは赤城君の背後に”ダンエクプレイヤー”の影がちらつくことになる……考え過ぎか？

　互いに防具を装着し終えて武器を持ち、闘技場の中央で向かい合う二人。ルールはセーフティで殺しは無し。降伏はあり。気絶したら負け。

　公式な決闘ということで生徒会の一人と、怪我をしたときのために【プリースト】の先生が同伴している。またＤ、Ｅクラス以外からも何人か見学に来ているようだ。

　クラスメイトのみんなも固唾を呑んで見守る。

「……ほう、それでは準備はいいか？」

「こちらはいつでもいいよ」

　さぁ、刈谷イベント開始だ。

「……ほう、それでは準備はいいか？」

「こちらはいつでもいいよ」

　ツーハンデッドソードと呼ばれる大剣を構える刈谷。最初からウェポンスキル《スラッシュ》を使うつもりなのか、大剣を横なぎに振るおうと重心を下げている。

　対する赤城君は比較的細くて軽い刀剣のため、大剣を持った刈谷と対比するとギャップが凄まじいことになっている。いくらあれがマジックウェポンとはいえ、まともに打ち合うのは避けたほうがいいだろう。《スラッシュ》の隙を突くというよりＡＧＩを低下させるべく、どこでもいいのでまずは当てるということが重要な作戦となってくる。

「それでは……いくぞ」

　初手《スラッシュ》と思いきや、普通の横なぎから入る刈谷。あれだけ赤城君を見下してたのに警戒しているのだろうか。最初だけやや大ぶりの攻撃を見せたが、そこからは間合いを保ちつつ隙の小さな小攻撃でけん制している。こうしてみると刈谷の戦闘技術もなかなかのものだ。

（まずいな、レベル差も結構あるぞ。赤城君はどうみてもレベル１０には到達していない……レベル５か６くらいか）

　けん制目的の攻撃とはいえレベル１１の大剣をまともに受けるわけにはいかず、苦戦しているのが目に見えて分かる。とにかく攻撃を当てたい赤城君は刈谷の攻撃を大きく迂回して避けつつ大技に合わせてカウンターを狙う動きに専念している。

　だが先ほどから刈谷に有利な間合いを強いられて、中に入っていけてない。ならば一度仕切りなおそうと一時引いて距離を離そうとするが、踏み込みを合わせたリーチの長い突攻撃を交え、再び最適な距離に詰め寄り間合いを管理する刈谷。

　ゲームでの刈谷は終始相手を舐めきっていて隙の大きい攻撃を繰り出すことが多かった。長引けば《スラッシュ》頼みになったはずなのに……おかしいぞ。あの動きは[スタティックソード]を知っている！？

「はぁ……どうした刈谷君。小出しの攻撃ばかりじゃないか、怖気づいたか？」

「ふん、お前のほうこそどうした。このままだとじり貧だぞ？」

「はぁはぁ……それじゃご希望通り……」

　刈谷に《スラッシュ》を撃たせようと挑発するが不発に終わる。埒が明かないと見た赤城君は取っておきの手段として刺突スキル《ダブルスティング》を使用。オート発動だ。

《ダブルスティング》とは【シーフ】で覚える二回攻撃の刺突スキルだ。端末上での赤城君は【シーフ】になり立てでジョブレベルが１の表示。まさかここでジョブレベル５で覚えるウェポンスキルが来るとは思わなかっただろう。

　突然のスキルに驚き瞬時に数歩後退した刈谷だが、赤城君はその一瞬でなんとか武器を掠めることに成功した。

「ハァハァ……これで君の動きを見切ることが……ぐっ」

「フンッ！　……俺の動きがなんだって？」

　刈谷にやっと攻撃が当たり気が緩んだ瞬間。逆にカウンターを当てられ、赤城君を吹っ飛ばす刈谷。

　刈谷の様子からは麻痺にかかるどころか、ＡＧＩが少しも下がっているようにも見えない。赤城は驚きと絶望を綯い交ぜたような顔をしている。それはそうだろう。ＡＧＩが下がらないということは赤城君の作戦が根本から崩れることを意味しているのだから。やはり対策をしていたか。

　だが、対策をしていたということは。つまり――

　\*・・\*・・\*・・\*・・\*・・\*

　闘技場の４番部屋に歓声と悲鳴が混じる。

　刈谷は容赦なく、そして執拗に攻撃する。赤城君はすでに腕は折れ、立ち上がることはできなくなっている。もはやこれは試合じゃない、ただのなぶり殺しだ。

「刈谷君、さっすがー」

「いけー刈谷さん！」

「強気だったから何かあると思ったがハッタリだったのか」

「当たり前だろ、所詮Ｅクラスの雑魚だぜ」

　野球観戦のように歓声を上げるＤクラスに対し、Ｅクラスは悲痛そのもの。女子の中には顔を覆い、泣いている子もいる。

　大宮さんが止めに入ろうと立ち上がるが、新田さんに止められているのが見えた。カヲルは歯を食いしばり瞑目している……動くのだろうか。

「も”……もう、勘弁してぐれ……」

「誰に向かって言ってんだ！　”ください”だろ？　あぁ！？」

「ぐああぁあああ」

　刈谷が赤城君の横腹に大剣を振り下ろす。その個所は金属補強されているとはいえ今ので脇腹の何本か折れただろう。俺もそろそろ胸糞になってきた。止めるべきか。僅かに腰を浮かせた辺りで。

「もうやめて！　これ以上、彼を傷つけないで！」

　止めに入ったのはピンクちゃん、こと三条桜子さんだ。

　彼女はカヲルと共に赤城君と長く頑張ってきた一人。この惨状を見ていることなんて出来るわけがなかった。

　だが今の刈谷の前にでるのは危険だ。

「あぁん？　テメェも俺に指図するのか？　……殺すぞ」

　三条さんとはいえ、殺気を放つ刈谷は怖いようだ。だが震えながらも必死に赤城君を庇おうと両手を広げる。刈谷が武器を向けると、流石に危ないと思ったのかカヲルと立木君、他に何人かのクラスメイトも立ち上がり駆け出そうとする。

「Ｅクラスのゴミ共ォォ！　まだ分からねーのか？」

　刈谷が一喝。三条さんの元へ駆け出そうとしたＥクラスの動きが止まる。

「お前らはこの学校じゃ弱者なんだよ。卒業までに何人かＤクラスに上がれるかもしれねーが、その程度だ」

　再びクラスメイト達に殺気を乗せた《オーラ》を放つ刈谷。レベル差がある格上に睨まれれば怯む他ない。

「誰が強く、誰が上で、誰に従うべきか。……これで分かっただろぉ？」

　誰も一言も発することが出来ない。

　赤城君だってそれなりにレベルは上がっていた。おそらくこの１ヶ月でＥクラスのほとんどの人よりレベルを上げたはず。それだけではなく、刀剣を扱う技術に刈谷の大剣を躱す戦闘センスは目を見張るものがあった。

　それなのにレベル１１という大きな壁の前には歯が立たず、完膚なきまでボロボロにされた。これを見て立ち向かえというのも無理がある話だ。

　刈谷は続ける。

「つーことでテメェらに指示を出す。雑用係が欲しいからと上のクラスから頼まれてるんだわ。Ｅクラスの作った部活に入るのは止めろ。入ったやつは俺が直々にぶち殺す。いいな」

　そう言い残すと用は済んだとばかりに闘技場を後にする刈谷。

「やっぱＥクラスは大したことねーわ」

「ほんとほんと。威勢だけは良かったけどやっぱりって感じ」

「お前ら雑用係としてこき使ってやるから覚悟しておけよ」

　散々な言われようだ。だが誰も何も言い返せない。

　ここまでの実力差をまざまざと見せつけられ、同級生として、ライバルとしてやっていけるわけもないと無理やり理解させられたクラスメイト達。Ｅクラスという存在そのものが否定されたわけだ。

　しかし……そういうことね。この闘技場４番部屋は上位クラスの先輩方の部活が絡んでたから簡単に予約が取れたってわけか。

　上位クラスが入る部活も都合のいい雑用係は欲しい。Ｅクラスの先輩方が作った部活に入られると困る。だから刈谷や一年Ｄクラスを動かしてＥクラスにぶつけ、実力差を知らしめ脅す。そして反抗の芽を折る。

　背後には刈谷に指示した別の黒幕がいるのは確定か。Ｂクラスの頭以外にも上級生が色々と暗躍していそうだな。

　まったく、めんどくせぇことしやがる。生徒会や学校の先生方もこれを承知してる可能性もあるな。ゲームのときもそんな感じはあったが、いざやられると非常に遣る瀬無い。こうなってくるとわざわざ１クラス分の外部生を取るという意味すら疑いたくなる。

　入学初日のＥクラスのみんなの目は希望に満ちて輝いてたというのに、今は絶望の色に染まっているじゃないか。とはいえ。

　俺は別に見返したいとは思わない。上位クラスに上がりたいとも思わなければ、この学校を変えたいとも思わない。クラスメイトにもそれほど親近感があるわけでもない。理不尽な理由だけでやられたというならともかく、赤城君だって刈谷の挑発に乗ったのだ。あそこまでやられる理由はないが、自業自得と言えるものもある。激情に駆られることは無い。雑用係が欲しいなら１つ２つ別にやってやってもいい。

　今考えることはそこではない。問題は――

　”誰が刈谷に[スタティックソード]戦術の対策を助言をしたか”だ。

　最初に[スタティックソード]を使用した戦術を赤城君に授けたのが誰なのかも気になる。これはもしかしたら赤城君のグループが考案したもので、プレイヤーではないかもしれないし、プレイヤーであっても悪意を感じられないので今のところは後回しだ。

　赤城君の攻撃が当たっても刈谷に何の変化もなかったのは、何かしらの耐雷、麻痺耐性アイテムを装備していたからだろう。そうでなければ[スタティックソード]が掠った時点で刈谷の攻撃速度は落ち、あるいは麻痺することにより赤城君が勝っていた可能性だってあった。

　それに刈谷の戦い方もおかしかった。本来ならけん制して赤城君の様子を見るなんてことはしなかったはず。《スラッシュ》だって結局１回も撃たなかった。これらを教えたのは……高確率でプレイヤーだろう。

　このプレイヤーは危険だ。赤城君に対する悪意すら感じられる。ゲーム情報を独占するためなのか、はたまた三条さんやカヲルと絡んだことが原因なのか、もしくは単なる愉快犯かもしれない。だが下手すると殺意を滲ませて他プレイヤーの排除だってしてくる可能性もある。

　刈谷に助言したプレイヤーはＥクラスの生徒だと思うが断定はできない。その辺りを刈谷に聞いてみたいけど、今の俺など相手になんてしないだろう。

（……しまったな、そこまでプレイヤーの存在を危険視してこなかったからプレイヤー対策はあまり考えてこなかった）

　結果から考えれば赤城君に助言した人物と、刈谷に助言した人物は同一ではない可能性が高い。

　そもプレイヤーって何人いるんだ。俺と、赤城君に助言したプレイヤー、それに刈谷に助言したプレイヤー。三人いる可能性がある。俺のように既存のキャラクターなのか。もしくはダンエクでは名前も出てこなかった生徒だろうか。赤城君や三条さんが実はプレイヤーだったという線だって捨てきれない。身を守るためにもレベル上げは急いだほうがいいな。

　すでに【プリースト】の先生が赤城君を触診しており、その先生が言うには骨折した箇所がいくつかあるが後遺症になるものは無く、魔法の施術で十分回復できるという。念のためレントゲンを撮るようで担架で医務室へ運ばれていった。学内で起きた怪我は【プリースト】の先生に無料で診てもらえるのは心強い。

　怪我の方もそれで済んだということは刈谷も一応手加減してくれてたのかね。

　そうして俺は席を立ち、赤城君の周りに集まるクラスメイト達を遠見する。

　結局、Ｅクラスは見返すために成り上がるか、弱者の立場を受け入れて強者に従うかしかないのだろう。どちらを選ぶかはクラスメイト達の判断に任せることにしよう。

　俺にはそこに関心を持つほどの熱量は無いし、関与する余裕もないのだから。

　闘技場での一悶着が終わり、教室にカバンを取りに戻って家路に就く。クラスメイトのほとんどはまだ闘技場で悲嘆に暮れているが、何とか諦めずに頑張ってほしいものだ。本当の妨害はこれからなのだから。

　何とも言えない暗鬱な学校生活に思いを馳せながら校門付近を歩いていると。

「あぁ、君は！」

　誰だろう、カジュアルな格好をした若い男の人が俺に話しかけてきた。腕にしているギプスが痛々しい。

「前に助けてくれてた冒険者だよね。お礼を言いたくて」

　彼は菊口さんといって妹とパワーレベリングに行ったときにオークロード部屋で襲われていた冒険者だという。怪我をしているようだが何とか脱出できて何より。

　話を聞くに、脱出後に俺に感謝を伝えたかったのに名前も分からなくて困っていたという。だが思い返してみると高校生のような若さであれほど強いなら冒険者学校の生徒である可能性が高いと考え、この正門でそれらしき人はいないか探していたようだ。

「ありがとう！　不甲斐ないことに仲間は二人亡くなってしまったが、それでも僕を含めて四人の命が助かった。君のおかげだ。本当にありがとう！」

　涙を滲ませながら頭を下げて感謝を伝えてくる。それでも二人亡くなったのは堪えただろう。

「いやそんな。お怪我はどうですか？」

　彼はボロボロの盾を持っていたタンクの人か。多数のオークからかなりの攻撃を受けて腕は骨折し、今もギプスを嵌めている。学校の生徒ではないので【プリースト】の施術をしてもらうには多額の費用が掛かってしまう。普通の人は骨折程度なら自然治癒を選ぶのだ。

「こんなの大したことないよ。仲間も後遺症は無く、しばらくすれば元に戻る怪我さ」

　痛々しい笑顔で元気なところをアピールする菊口さん。空元気でも出してなければ塞ぎ込んでしまうのかもしれないな。そして俺の方も疑問がある。なんで危険なオークロード部屋に行ったのかそれとなく聞いてみると、騙されたということだ。

「……どういうことですか？」

「向こうに宝箱があるって言われて……まさかあそこがオークロードの部屋だと知らなかったんだ」

　５階で待ち合わせをしていた菊口さんの仲間に執拗くナンパをするパーティーがいて断るのに苦労していた。そこで菊口さんが間に入って仲裁し、なんとか事を収めたところ、向こうの一人からせめてもの罪滅ぼしに、と宝箱がある場所を教えてもらったそうだ。そういうことならと厚意に甘え、よく地図を確認しないで見に行ってしまったのだという。

　そこがオークロードの部屋だと知らずに。

　オークロードは冒険者ギルドから注意喚起されているが、実際に見た人は多くなく、あれがオークロードだと分からなかったらしい。一撃で仲間が吹き飛ばされ、応援を頼むべく仲間の一人だけなんとか脱出させられたが、オークソルジャーの集団に前を塞がれ追い詰められていた、というのがあの時の顛末だ。

　そも５階に宝箱は出現しない。厚意かのようにオークロード部屋を指定するあたり、ナンパしてきたパーティーの悪意を感じる。

「……あっ、あいつら！」

　菊口さんの視線の先にはＤクラスの生徒がこっちに向かってくるのが見えた。あの中の一人は刈谷の取り巻きをやっていた生徒だ。顔は覚えている。

「お、おい！　昨日はよくも騙してくれたな！　仲間が二人も亡くなったんだぞ！」

「あぁん？　……あぁ、何時ぞやの雑魚パーティーか。オークロードの味はどうだった？」

「き、貴様ぁぁ！」

　あまりの言いように殴りかかるが簡単に躱され、逆にぶっ飛ばされ返り討ちになってしまう。この一帯もマジックフィールド内のため、肉体強化の差はもろに出る。Ｄクラスの生徒は「雑魚のくせに俺たちの誘いを断るからだ」と言っている。

　……おいおい、そんな下らない理由でオークロード部屋に案内したのか。人の命を何だと思ってやがる。

「バカだなぁ、５階に宝箱なんてあるわけねーのに」

「所詮一般人だしな、無知ってのは命取りになるんだぜ」

「Ｅクラスと知り合いらしいけど、雑魚繋がりかぁ？」

　何が楽しいのか笑いながら離れていくＤクラスの奴ら。菊口さんはあまりの悲しみと遣る瀬無さに脱力して蹲り、その場で嗚咽をもらす。

　この学校の生徒は人間辞めちゃったのかな。Ｅクラスを見下すだけならまだいい。だが外部である一般人すら見下し、さらにムカついたからとＭＰＫ（※１）紛いなことを躊躇なくやるというのはあんまりだ。

　二人も命を落としたというのに、あいつらには何の反省も見られず今も愉快に話しながら歩いている。明らかに度を越えてる。あんな奴らをのさばらせるんじゃこの学校どころか、この国の未来も暗い。

「……菊口さん。汚れてしまいますよ」

「ぐっ……うぅ……すまない……」

　泣き崩れる菊口さんを立ち上がらせ、汚れをはたき落とす。赤城君がやられたときはそれほどＤクラスに対して対抗しようなんて熱量は無かった。それがこの学校のやり方なら仕方がないという思いもあった。

　だが菊口さんの件で”余裕があればお仕置きしてやろうか”程度には温まってきたかな。

「まぁ、約束はできませんが……いつかあいつらをとっちめておきますので、今日のところはお引き取りください」

「うぅ……き、君がかい？　でもあいつら強すぎるし……君にだって危害が及ぶんじゃ……」

　確かに今やったらただでは済まないかもしれない。体型も超肥満だし強そうに見えないから心配したくなるのも分かる。ならばシェイプアップして鍛えればいい。レベルを上げてジョブチェンジし、いくつものスキルを覚えて強くなればいい。

「本気で鍛えてきます。それに俺、実は凄いんですよ？」

「うぅ……すまない……うぅ、ありがとう……」

　顔をクシャクシャにして俺に感謝を述べる菊口さん。名前も知らない年下の俺をわざわざ探して礼を言いに来たくらいだ。礼儀正しく仲間思いの良い人なのだろう。

　Ｄクラスの奴らは相変わらず楽しそうに会話を弾ませ笑い声を響かせている。人が死んでいるというのにヘラヘラとニヤけた顔をしやがって。

　弱いから何が悪いのか。強いからって何が偉いのか。強ければ弱いものに何をしてもいいというのか。

　冒険者としてではない。人として何が正しくて何が間違っているのかを、奴らには教えてやりたくなってきたぜ。

　\*・・\*・・\*・・\*・・\*・・\*

　刈谷含むＤクラスの連中にお仕置きするにも最低条件としてレベル１０以上、かつ１０階のオババの店に行ってジョブチェンジを行う必要がある。背後にいる黒幕を考えればもっとレベルが欲しいところ。

　さくっとレベルを上げて行きたいところだが、レベル８ともなれば１時間に１回の橋落としでは効率が悪くなってくる。最近はダイエットしながら体幹を鍛えることにも時間を使っていてダンジョンに潜らない日があった。それもレベルアップ速度が鈍化している原因だ。

　それならばどうすればいいのかというと――

「それで、おにぃ。今日はどこにいくの？」

　早速買った魔狼装備を着こなし見事なリズムでシャドーボクシングをしている我が妹。白のブラウスの上から黒い魔狼ジャケットと小手を装備し、下はキュロットに魔狼ニーハイブーツ。「ベテラン冒険者みたいでしょ」と感想を聞いてくる。

　ベテラン冒険者ね。９０階をウロウロしていた攻略クランのメンバーは魔神シリーズとか龍王シリーズなどのアーティファクト防具で全身を固めた者ばかりだった。あの装備が１つでもあったならと妄想してしまうが、あんなものは今のレベルでは扱えないし、そもそも重くて着れない。それはまぁいい。

「まず５階で華乃のレベルを７にしよう。それから７階へ降りてレベル９まで上げる。そこから一気に１０階攻略を目指すぞ」

「１０階！？　そんな深いところいけるの？」

　１０階といえば一般的な冒険者では辿り着くのが難しくなる階層らしい。必要レベルも２桁に突入し、戦闘力も肉体強化により常人の域を超え始める。ここに至れるならそこらのクランの１つや２つからお声が掛かるほどだ。

「いける。その前に武器だ。小太刀を２本用意しといた。最初から長い得物を２本扱うのは難しいだろうと思ってな」

「わぁ～ありがと～」

　目を輝かせながら小太刀を受け取ると、シュッシュと器用に持って振るう。

「それじゃゲート部屋に向かうぞ」

「はーい」

　俺の足元に縋って蹲る菊口さんを思い出す――

　きっと彼は自分の不甲斐なさをいつまでも責め続けるだろう。だがそれは明日の俺かもしれない。

　学校でもダンジョンでもＤクラスの奴らのように自分の力に酔っているアホ共は沢山いる。そいつらに正しさとか善良だとかをいくら説いても関係なく悪意で塗りつぶしてくるだろう。俺がそれらに対抗すためにも、また大事な人たちを守るためにも、もっといえばこの世界では何をするにも力が必要なのだ。

　メインストーリーだけを考えてちんたらマイペースにやっていたら、予期せぬ理不尽や悪意に巻き込まれたときに対処できないかもしれない。正体不明のプレイヤー達だっていつ敵に回るか分からない。力を付けるまでの速度も求められる。

（気合を入れて頑張るとしようか）

　後ろで下手糞な鼻唄を歌いながら付いてくる可愛い妹のためにも。

（※１）ＭＰＫ

モンスターを利用して誘い込んだりぶつけたりして故意にプレイヤーを殺す行為。

「やったー上がったよっ！　これでレベル７になったのかな～？」

　レベルアップ後の全能感をクルクル回って表現している。３回の橋落としにより妹の目標レベルである７に達したので、とりあえず５階は終了だ。レベル８までここでやってもいいのだが、二人なら次の狩場に移動したほうが効率が良いだろう。谷底に降りてドロップアイテムを拾いながらこれからの予定を説明する。

「まず６階からはワーグという魔狼がでる。俺と華乃が着ている革防具は魔狼製だが、その魔狼だ」

「狼でしょ？　オークより戦いやすい気がする」

「それなりにデカいし、素早いからオークより厄介だぞ」

　魔狼は素早く持久力があり鼻も良く、遠くから嗅覚で感知してくる。対魔狼戦では囲まれる状況に持ち込まれるのを如何に防ぐかが重要となる。囲まれてしまったら逃げることは困難だ。とはいえ６階のＭＡＰは開けた場所がほぼ無く、そうそう囲まれることは無い。

　また魔狼は魔石と共に低確率で皮を落とすが、この魔狼の皮は頑丈で耐火性能もあり、店やギルドに売れば結構な収入源になる。冒険者にとって魔狼は人気のモンスターなのだ。ここら辺りが専業で食べていける最低ラインと言われている。

　だが俺達はこの６階はスルーして７階を目指す。

　７階の出現モンスターは変わらず魔狼が出るが、６階の魔狼よりモンスターレベルが１高く、７であること。さらにモンスターレベル８の魔狼リーダーがレアポップする。コイツは近くにいる魔狼を呼び寄せるスキル《遠吠え》を持つため、戦闘になったら最優先に止めを刺したほうがいいモンスターだ。

　そしてこの魔狼達を従え、騎獣にしているオークテイマーも７階にポップする。魔狼の噛みつきに加え、オークが騎乗し、剣を振り回し攻撃してくるため魔狼単体より手ごわい。オークテイマーがいると魔狼の集団戦闘力が増すため、複数の魔狼を従えている場合は魔狼リーダーよりも倒す優先度は高い。

　さらに７階の大部分は森林ＭＡＰで見通しが悪く囲まれやすいというリスクがあるので、魔狼の皮集めが目的なら素直に６階で狩るほうがいいだろう。

　だが７階にいく理由もちゃんとある。

「とりあえず７階に行って試しに魔狼と戦ってみるか」

「魔狼狩るなら皮を集めて下半身防具も作りたいな～」

　無理に皮集めをしなくても７階で狩りができるなら魔石とドロップアイテムで買える収入は十分得られるはずだ。それに。

「魔狼は試すだけにしよう。７階は調べたい場所があるんだよ。隠しＭＡＰだ」

「そんなとこあるの？」

「あぁ。もしかしたら誰も行ったことがないエリアかもしれないぞ」

　目を輝かせ「お宝あるかなっ！？」と、いつぞやの成金ソングを口ずさむ。その歌は恥ずかしいからやめなさい。

　そんな他愛もない事を話しながらアイテムを拾い集め、いくつか吊り橋を渡って５階のメインストリートへ合流。

　まずは６階を目指して移動しよう。

　\*・・\*・・\*・・\*・・\*・・\*

　相変わらず次の階へ続くメインストリートは人が多い。６階以上を目指す多くの冒険者が魔狼狩りを目的としていて黒系統の防具が目立つ。

「みんな魔狼防具してるね～。なんか実力者の仲間入りって感じがするよっ。まだダンジョン２回目なんだけども……」

「トレインで一気に上げたからな」

　オークロードを独占できたのはかなり美味しかった。そうでなければもっと多くの時間を５階で過ごしていただろう。

　他のプレイヤー達がいたとして、橋落としは利用しないのだろうか。すでにさらなる深層へ行っているのか、はたまた到達していないだけなのかは分からないが、結局一度もそれらしき人物とは出会わなかった。

　３０分ほど歩き、６階入り口の広場に到着。５階同様、屋台や売店、魔石やドロップ品の買取所があり、冒険者で賑わっている。違うのはベテランパーティーの割合くらいか。５階層までなら全員が前衛というパーティーもありふれていたが、この階くらいから弓や魔法など遠距離攻撃ができる後衛や回復要員が入ったパーティー構成をよく見る。いかにも初心者って感じの冒険者はもういない。

「あぁ！　たこ焼き売ってる！　あっちにはカフェテリアがあるっ！」

「６階は通過するぞ。でもまぁ……その前に軽く食っておくか。何が食いたい？」

　そういえば妹は前回も今回もゲートを使用したから階層の入り口広間はここが初めてか。ダンジョン入り口から入ったことが無いというのも珍しいのかもしれない。たこ焼きが食べたいらしいので屋台でたこ焼きを摘まみ、トイレを済ませて７階を目指す。

「トイレって……汲み上げたのどうしてるのかな……」

「ダンジョンは半日も置いておくと吸収するからな。汲み上げる必要なんてないぞ。お前も緊急時はそこらでしてもＯＫだ」

「レディーがそんなことできるわけないでしょっ！」

　プンスカと自分の口で言いながら頬を膨らませて抗議の構えを取る。本来なら通信機器や休憩施設などもダンジョンに吸収されてしまうが、低級ゴーレムの核を使った魔道具の発明により吸収に抵抗することもできるようになった。これが発見されるまでダンジョン内には簡易的な施設しか作れなかったらしい。

　冒険者ギルド図書室のダンジョン図鑑にそんなことが書いてあったと薀蓄を垂れながら７階を目指す。

　魔狼の皮目当てのパーティーのほとんどはこの６階を狩場にするため、この階のメインストリートからは歩いている冒険者の数が少なくなる。走っても大丈夫だろう。

「時間が勿体ないから小走りで行くぞ」

「えぇ？　食べたばっかなのに～」

　しぶしぶの了承を得て、えっちらおっちらと小走りで走りはじめる。他のパーティーも何組か走っているので特に目立つことは無い。肉体強化により軽く流す程度でもかなりの速度で走ることができるので爽快だ。

　\*・・\*・・\*・・\*・・\*・・\*

「ふぅ、７階についたー！　……あれ？　６階と比べてお店が少ないね」

「魔狼狩りパーティーはみんな６階で狩りするから、この階は冒険者が少ないんだ」

　少なくなったとはいえ、いくつかの屋台や休憩所はある。ただ値段はどこも通常の倍程度の値段となっている。缶ジュースなんて１本３００円前後になっているが、ゴミ箱にある空き缶を見る限りそこそこ売れているのは驚きだ。

　さすがに高いだろ……いや、これ利用できないか？　などと考えながら先に進もうとすると。

「ちょっと休憩しようよ～。あ！　あっちのお店見たいっ！」

「隠しマップにはお宝があるかもしれんぞ」

「えっ！？　……そ、それじゃしょうがないにゃ～」

　現金な妹は宝で釣れ。そう心の妹マニュアルに書き足しながら隠しマップのポイントへ向かう。

　この一帯には巨大な針葉樹林が無数に生えていて非常に見通しが悪い。この木を切り落としても消えてしまうので、木材としては使えない。天井は見上げるほど高く、ぼんやりと青白く光っている。あんな光で光合成できるのだろうか……いやこれは植物ではなくオブジェ扱いだし関係ないのか。

　８階へ向かうメインストリートから逸れて数分も経たないうちに魔狼を発見。体長は尻尾を含め２ｍほどだろうか、濃灰色の長い体毛に覆われており骨格もガッチリしている。こちらを睨む目には知性を感じる。

「コイツにバクスタは取れそうにないな、足音と臭いで先に気づかれてしまう」

「くるよっ！」

　相手は魔狼１匹のみ。警戒して向かってこないと思いきや、数秒ほど唸った後、突如こちらへ駆けてきた。最初の攻撃の狙いを妹に定めたようで、首元に牙を突き立てようと数メートル手前から飛びかかる。それを難なく躱し、すれ違いざまに魔狼の横腹に小太刀を突き刺して切り裂く。魔狼は「キャウン！」と一声鳴いて逃げようとするが上手く立つことが出来ないようで、すぐさま俺が詰め寄って止めを刺し魔石となった。

「魔狼１匹だけならなんとかなりそうかな。動きがすっごく良く見えたっ」

「一気にレベル上げたが、問題はなさそうか」

　中学生の女の子だろうとレベルアップによる肉体強化は平等で、すでに妹の筋力や瞬発力、動体視力は一般男性のそれを余裕で上回っている。

　あとは戦闘センスの問題だが、それもどうやら心配することもなさそうか。急激な肉体強化に慣れないということもなく、おどおどとしたり戦闘を怖がる様子も見られない。今も２本の小太刀を両手に持ちながらシャドーを切り裂いている。

　もしかして戦闘狂なのかしらん。あとそのシャドー、おにぃちゃんじゃないよね？　なんてどぎまぎしながら魔狼の魔石を拾い、ＭＡＰの南東方向へ移動を続ける。

　向かう先は「ダンジョンエクスプローラークロニクル　ゴーレムの鼓動」という最新ＤＬＣで追加されたエリアだ。それが存在していたのなら、ダンジョン攻略における新たな指針となりうる。

　敵と遭遇しない時間は妹にゲーム知識とダンジョン情報を増やそうと、少しずつ説明することにしている。

「ゴーレム？」

「そう、【機甲士】ってジョブになればゴーレムを作って運用したりできるんだ」

「ええぇ！？」

　ＤＬＣ「ゴーレムの鼓動」の実装前にも情報が小出しにされ、話題を集めていた【機甲士】。派手なゴーレムに搭乗できることから、多くのプレイヤーが実装日を待ち望んでいた……が、いざ実装されてみると弱くて使い物にならないと酷評された不遇の上級ジョブである。

　その理由としてまず、ゴーレムの戦闘力が微妙すぎる点。

　ダンエクでは物理攻撃半減や無効なんてモンスターも数多くいるため、基本的に物理攻撃しか使えないゴーレムは使用用途が限られるのだ。

　そして動きが遅い。搭乗すれば乗り物として使えるが、移動速度はそれほど速くはなく、むしろ自分で走ったほうが速い。そもゲームだったときは走っても疲れないのだから乗り物なんて要らないのだ。

　最後に【機甲士】は《ゴーレムキャッスル》というスキルを使えば危険地帯にゴーレムの建築物を作ることができる。効果はＨＰ、ＭＰ回復速度３倍。全状態異常回復。城内で１時間以上滞在すれば一時的にＳＴＲとＩＮＴに５％ボーナスが付くというおまけ付きだ。

　ゲームの時は正直そんなスキルは必要なかった。ポーションをガブ飲みしていたため、拠点を作ってまでＨＰ、ＭＰ回復なんてしようと思わなかったし、危険地帯にわざわざ寝泊まりする必要もなかった。電気、水道、冷蔵庫、風呂、トイレ、ふかふかのベッド完備というが、そんなものゲーム内では単なる自己満足の領域で、飾り以外の何物でもなかった……

　しかぁし！　しかしである！！

　これが現実世界となれば価値は逆転し、天空へ昇龍するほどの鰻登りである。「ぶっちゃけこれあれば家帰らずダンジョンダイブできるよね」である。いやむしろ住んでもいい。最低でも《ゴーレムキャッスル》は欲しい……欲しすぎる！

　ということで妹に【機甲士】の概要と、それをこれから調べに行くのだと言うと。

「なっ……絶対いるよねっ、そのスキル！」

「だろ？　だからそのジョブになれるかどうか、これから調べに行くんだ。もし隠しマップがあるなら、そこは優良なレベル上げポイントにもなるしな」

　ＤＬＣ「ゴーレムの鼓動」では新ジョブとＭＡＰだけではなく、いくつものゴーレムがモンスターとして追加された。

　ゴーレムは１０ｃｍほどの人形の形をした水晶の核からエネルギーを受けて起動している。深層のゴーレムの核は魔鋼で守られていたりするが、ここ７階のゴーレムは核がむき出しのため、そこを攻撃すれば簡単に倒すことも可能。弱点が明確なためレベル上げとしてはかなり美味しいモンスターなのだ。倒すと核を落とし、その核は【機甲士】がゴーレムを呼び出す際の触媒になるし、ダンジョンストアで売ることもできる。

　ＤＬＣで追加されたＭＡＰはいくつもあるが、その中で一番浅層にあるのがここ７階。つまりＤＬＣが実装されているかはここまでこないと調べようが無かったわけだ。

「この先に落とし穴があるんだが、底に横穴があったらその先が隠しエリアになってるはずだ」

「ほぉ～」

　森の中にやや小高い丘になっている場所がある。その頂上付近を調べると……落とし穴はあった。底まで５ｍ以上はありそうで横穴があるかは降りて調べる必要がある。

「ロープを持ってきた。そこの木に結ぶか」

　クライミングロープをリュックから取り出し、近くの木に結び付ける。ちゃんと固定されているか引っ張って確認する。大丈夫そうだ。

「見に行っていい？」

「いいぞ。横穴が奥まで続いてたら教えてくれ」

「は～い」

　躊躇することなく自衛隊がするような懸垂下降でスルスルと底まで降り、横穴の有無を調べる華乃。まぁ無かったら無かったでこの辺りを回ろうかね。

「ん～？　あったっ！　おにぃ、横穴あったよ～！」

「よし、俺も降りる！」

　続いて俺も降りようとすると遠くで遠吠えが聞こえた。この吠え方は魔狼リーダーっぽいな。普通の魔狼はこんな吠え方はしなかったはずだ。近く誰かが戦ってるのだろうか。まぁ今は無視しよう。

　俺も同じように懸垂下降で落とし穴を降りるが、重い体重のせいなのか残り２ｍほどで足を滑らしケツから落下してしまう。妹は横穴に夢中で見ていなかったようなので、兄の威厳は保たれたとホッとしたのも束の間。

「もうっ。おにぃはドジなんだから気を付けてよねっ」

　しっかり見られていた。

　落とし穴の底にあった横穴を奥へと行く。少し進むとボコボコした岩肌から石壁の通路に変わっていることから、ここが単なる横穴ではないと分かる。

　真っ暗のため持ってきた懐中電灯を点ける。ひんやりとした風が奥からゆっくりと吹きつけてくるのでどこかと繋がっているのだろう。

　そこからさらに数分も進まないうちに通路は高さ５ｍほどの回廊となった。壁にはいくつも棺桶が収っている。カタコンベのような地下墓所といえばいいか。少し進む度に回廊が何度も折れ曲がっている形状になっているため、気を付けていないと方角が分からなくなる。こういう時には腕端末のオートマップ機能が便利だ。

　空気もより冷たくなってきた。パーカーを羽織り足音を響かせないよう慎重に歩いていると、数十ｍ前方からカタカタという音が聞こえた。妹が息を潜め、物陰からこっそり顔を出して何がいるのかを確認する。

「（骨が動いてるよ）」

「（あぁ、スケルトンだ。俺に任せろ）」

　スケルトンはその名の通り、骨だけの人型アンデッドモンスター。１１層からはアンデッドが多いＭＡＰになるので珍しくもないモンスターなのだが、ＤＬＣ「ゴーレムの鼓動」により弱体バージョンのスケルトンがここ、７階にもでるようになった。

　ヤツは骨だけなので小太刀の刺突攻撃は効果が薄く、大きめの剣を持っている俺がやったほうがいいだろう。まだこちらに気づいていない。反撃すら許さず一撃でスケルトンを沈めようと距離を詰める。

　しかしスケルトンも広域の感知能力を持っているのか、真後ろにもかかわらず瞬時にこちらに気づき、予想以上の反応と初速でこちらに疾駆してくる。

　互いの距離が急速に縮まり相打ちになりかけたため、一度スケルトンの袈裟懸けを剣で受けて切り返すように狙い変える……が思ったより攻撃は重く、手に衝撃が走る。

「ぐっ……おらぁっ！」

　トゥキックであばらを何本か蹴り飛ばす。バランスを崩したところで頭蓋へ向けて力任せに剣を振り下ろすと頭蓋骨はバラバラとなる。一部の骨はカタカタと音を立てて振動していたものの、やがて動かなくなり魔石と化した。

　安全靴の手加減無しトゥキックは結構な威力が出るな。

「ふぅ……思ったより速度とパワーがあったな……たしかモンスターレベル８だったか」

「スケルトンってあんな素早いんだ。骨だけなのにっ」

　骨だけで身軽なせいかスケルトンの初動は早く、そのくせパワーもあるため、武器を受け止めたときの運動エネルギーは想像以上のものがあった。関節可動域を超えて攻撃を仕掛けてくるため人を相手取るのと違い、攻撃パターンも非常に読みにくい。魔力を使った感知能力も広く、魔力遮断スキルがない序盤では先手を取るのは難しいか。

　ダンエクでもスケルトンは単なる雑魚モンスターとは見られていなかったが、実際に相手にするとモンスターレベル８とは思えないほどの強さを感じる。ゴーレム狩りのついでにスケルトンも狩ろうかと思っていたが、こんなのを複数を相手取るのは骨が折れそうなのでゴーレムだけに狙いを絞ったほうが良さそうだ。

　魔力感知能力があるアンデッド相手と連戦するなら、魔力遮断スキルかアンデッド特効の武器を手に入れてからにしよう。

　懐中電灯の灯りを頼りにゆっくりと確かめるように尚も進む。暗闇の中の移動には指向性のある懐中電灯は便利だが、戦闘時には広域を照らせるランプ型の照明も持っておいたほうが良いな。

　スケルトン数体と交戦しつつ、カタコンベの回廊を道なりジグザグと歩き、ようやく上へと昇る階段を発見。モンスターがいないか音を立てず注意しながら上ると、礼拝堂のような場所に出る。

　中の状態はかなり悪い。天井の一部が崩れ、支柱は何本か折れていて瓦礫が散乱。壁は内側も蔦が生い茂っている。祭壇のようなものの上には神を祀ったものはなく、ショーケースのような入れ物だけがある。聖遺物信仰だろうか。

　その他には小部屋が２つほどあったがモンスターはいないようだ。

「それじゃ休憩タイムにするか。茣蓙を出してくれ」

「は～い」

　ここまで長く歩いてきたので、物音には警戒はしながらも休憩にすることにした。華乃が茣蓙を敷いている間に、俺はリュックから水筒とお菓子を取り出す。ポテチの袋を開けると半分ほど砕けていた。スケルトンとの戦闘のせいか。次持ってくるときは砕けないお菓子にするとしよう。

　スポーツドリンクをごくりと一飲みし、ほっと一息。

　ここはすでにＤＬＣ「ゴーレムの鼓動」で追加されたエリア。つまりこの世界は、少なくとも転移前の状態と同じ最新ＤＬＣまで内包している世界だということが確定した。

　カンストレベルは９０。育成方針は物理か魔法かの特化型で育てるのではなく、万能型で強くなったほうが良いということか。

（実装されているであろうクエストアイテム、ユニークアイテム（※１）も早めに回収しておいたほうがいいか）

　赤城君が手に入れた[スタティックソード]もそうだが、クエストアイテムは強力な効果が付いたものが多い。試しに俺も[スタティックソード]を入手できるかクエストを発生させようとしたものの失敗に終わった。こういったユニークアイテムは早い者勝ちとなるため他プレイヤーとの争奪戦になってしまうことも判明した。

（情報が手に入ったら入ったで考えることは多いな……）

　妹のほうは礼拝堂に興味津々なようで、棒菓子を齧りながら祭壇や壁をフラフラと見て回っている。その様子をぼ～っと見ていたら、蔦が生い茂っていたほうの壁に何かを発見したのか、こっちに来いと手を振ってきた。

「ねぇねぇ。このウネウネした変な模様ってゲートだよね」

「……確かに、これはゲートだな」

　蔦を刈り取って全体を見てみる。紛れもなくゲートの魔法陣だ。

　通常、ゲート部屋は５の倍数の階に設置されているが、クエストやイベントがある階にも設置されていることもある。ここもそういった場所の１つなのだろう。

　ＤＬＣ「ゴーレムの鼓動」が実装されたときの俺はすでに上級者で、追加ＭＡＰ探索も６０階以上の深層の部分しか潜っていなかった。そのため７階の追加ＭＡＰはそれほど詳しくないのだ。ここに来るまで２時間近く掛かるので、見つけられたのはラッキーといえる。

「それじゃ一応魔力の登録をしておくか。華乃まで登録すると５階にいけなくなるし、俺だけのほうがいいかもな」

「うん、ママのパワーレベリングもしたいしね～」

　荷物をリュックにしまいゲートの登録を終えてから外に出ると、朽ちた石造りの建物が周囲にいくつもある寂れた場所に出る。どれも緑の蔦や樹木に覆われていて、しばらくすれば崩れ落ちそうだ。

　空は薄暗く、しかし歩く分には全く問題ないほどの光量はある。

「ここにゴーレムがでるの？」

「目的のゴーレムはもう少し先の建物の中に出るはずだ。それより付近のモンスターには注意しろよ」

　ここは廃墟ＭＡＰで、ポップするモンスターはスケルトンのみだったと思うが、何せ記憶が曖昧。物理無効のゴーストやレイスはでないはずだが……見かけた場合は魔法攻撃手段が無いため即逃げる決断をしなくてはならない。

「魔法って私も使えるようになるのかな」

「ジョブチェンジすればな。それ以外だと魔法が付与された武器を手に入れればダメージは通るぞ……って早速スケルトンのお出ましだ。一緒にやるか」

「挟み撃ちしよっ」

　今度のスケルトンは剣と盾持ちだ。こちらを発見すると脇目も振らず猛ダッシュで迫ってくる。俺が最初の一撃を受け止めると同時に妹は背後に回り込み、盾を持ったほうの肘の関節に逆手で攻撃を加える。

「簡単に関節が外れるねっ」

「いいぞっ」

　外れた関節の先が盾ごと地面に落ちる。バランスを崩したスケルトンは脅威と感じた妹の方へくるりと振り向き、剣を振り下ろそうとする――が、ガラ空きとなった背後に横薙ぎを入れて上半身を吹き飛ばす。

「まだカタカタと動いてるな」

「はいよっと」

　間を詰めた妹がサッカーボールのように頭を蹴り飛ばすと動かなくなり魔石となった。

「華乃ちゃん……？　なんだか凄い戦闘慣れしてるけど……どったの」

「そう？　時代劇を結構みてたからかな～」

　時代劇の殺陣を見てれば戦闘技術が上がる……なんてある訳がない。いや、上がるかもしれないが、それは日ごろから鍛錬し研究している武術研究家の人だけだろう。まさか陰でこっそり研究していたのだろうか。そういえば最近、武術スクールに通ったとか言ってたっけ。

　ちょこまかと動くのが好きなヤツだなとは思ってたが、お兄ちゃんビックリだよ。というかこの運動神経で見た目も可愛い女の子が、運動もダメで見た目もアレなブタオと実の兄妹だというのがビックリだ。

　スケルトンと交戦しながら寂れた荒野を尚も南へ移動し続けると、なだらかな丘の上に一際大きな壁が見えてきた。高さが１０ｍ以上もある壁が、横方向にも１００ｍ以上続いている。丘の下からでは壁の中にある建物は一部しか見えない。あれが目的地の城塞だ。

　設定としてはゴーレム研究をしていた城主に何かがあってこの一帯が滅んでしまい、そのままになっているという背景があったような無かったような。【機甲士】になるならこの城塞関連のクエストアイテムを集めなくてはならないが、生憎ゲームのときは【機甲士】に興味なかったので一度もやったことはない。

　さて、中はどうなっているのか。

「でっかーい。砦？　お城かな」

「城塞だな。あの中にゴーレムがポップするんだが、作戦を言うぞ」

　この城塞にポップするゴーレムはウッドゴーレム。モンスターレベル９の中ボス的な存在だ。倒しても５分でポップするので独占できるならレベル上げにはもってこいのモンスターである。

　普通に攻撃を与え続ければいずれ動かなるが、柔らかめの木でできているとはいえ驚異的な耐久力を誇る。そんなことをやっていたら倒すのに時間が掛かってしまうし体力も持たない。火属性攻撃があれば正面からでもいけるのだが今は除外だ。

「ゴーレムの核？」

「そこを攻撃して破壊すれば簡単に倒せる美味しいモンスターなんだよ」

　ゴーレムには背中に水晶でできた核が埋まっている。核を壊さずに抜き取ると【機甲士】になるためのクエストアイテム、[ウッドゴーレムの核]が手に入る訳だが、当然難易度は高い。今のレベルでは無理することもないので壊す方向で行くと伝える。

　ゴーレムの移動速度自体は遅いが旋回能力は高い。ソロではゴーレムの背後を取るのは難しいため無類の強敵になるが、二人ならどちらかが引き付ければもう一人はバックアタックができるため、カモともいえるモンスターに成り下がるのだ。

「取れたら売れるんだっけ？」

「１０階の店でな。でも無理はするなよ、レベルが上がってからでも取りに来れる」

　どうにも金目のモノに気を取られる悪い癖があるな……しかし俺も今は金欠。宝探しから始めるか。

「ゴーレムは後にして、先に宝箱を探し行くとするか。誰も来ていないなら城館内のどこかに１つあるはず」

「おぉ～！　ど、どんなのが入ってるの？」

「それは開けてからのお楽しみ」

　いつぞやのお宝ソングを口ずさみながら坂道を上り城館前へたどり着く。正面には巨大な扉が付いた玄関があり、すでに開いているので問題なく入る。中庭のような開けた場所の中央付近にゴーレムがいるので、そこには近づかず、まずは城館内へ。

　平たい石を積み上げて作られた城館内の状態は一部の壁が崩れていたり木製の床が所々腐っていて穴が開いているものの、それほど悪い状態ではない。風通しがいいせいか空気も淀んではいない。何も嵌っていない窓は小さいため薄暗く、足元に気を付けながら廊下を奥へと進む。

「罠とかないの？」

「トラップは無い。罠付き宝箱がでるのも１１階以降だから安心して開けていいぞ。ただ大きな音は立てないように注意しろよ」

「はぁ～い」

　城館の中にもスケルトンがいたと思うので、できれば奇襲で倒していきたい。小部屋を探索しながら通路を進むと。

「（あっ、いたいた。スケルトン……２体）」

「（１体は奇襲で倒して、２体目は普通に倒すぞ）」

　一定の巡回ルートを徘徊するタイプのようだ。スケルトンの魔力探知は壁越しにはできないため、１体目に角待ち奇襲を仕掛ける作戦でいく。

　巡回ルートを見極めて角で待っているとカタカタと足跡の音が近づく。

「オラァッ！」

「もう１体も来たよっ！」

　剣と盾をもったスケルトンの頭頂から一撃で叩き潰す。その音に気付いたもう１体のスケルトンが手斧を振り上げ猛ダッシュで走ってくる。

　こちらも二人で攻撃を仕掛けようと角から飛び出すが、スケルトンは妹へ攻撃を仕掛けたため俺は背後へ回り込み切り返しを狙う……が斧で受け止めやがった。読まれてた？

　攻撃ターゲットが俺に移ったのを見た妹がすかさず攻撃を仕掛ける。

「Ｖ字スラーッシュ！」

　特撮番組の主人公が使うスキル名を叫びながら、両手に持った小太刀でＶの字に振り下ろす。コココンッと小気味のいい音で何本かのアバラを吹き飛ばされたスケルトン。バランスが崩れたところを二人でタコ殴りにし、魔石となった。

　通路の最奥には城主の部屋であろう豪奢な――朽ちかけてはいるが――扉がある。

「この先は城主の部屋だな……何かいるかもしれん」

「でもお宝ありそうじゃない？」

　一応行ってみるか。

　音を立てず扉をほんの少しだけ開き、中を覗く。今までの寂れた部屋とは違い、高そうな赤い絨毯に家具が見える。その奥に豪奢な肘掛け椅子に座ったスケルトンがいた。

「(あれは……レアモンスターだな……人間種のスケルトンではない？)」

　今までのスケルトンは普通の人間種のスケルトンで、防具は装備しておらず剥き出しの骨のみ。モンスターレベルも８だった。ところがこいつは金属製のアーマーを着こんでいて、額から真っ直ぐの角が１本生えている。ダンエクではお馴染みの魔人や悪魔系ではない。何の種族だろうか。

　モンスターレベルも８より上だろう。戦うのはまずいな。

「（おにぃ！　あのスケルトンの足元っ！）」

　足元にはレリーフ模様が描かれた金属製の宝箱があった。

（※１）ユニークアイテム

ゲームのワールドで１個しかないアイテム。クエストで手に入れる場合、そのクエストは１回しか発生しないため早い者勝ちとなる。

　ダンエクのダンジョンには宝箱がでることがある。

　宝箱の中身には装備品や素材、マジックアイテム、ダンジョン通貨、確率は低いが宝箱でしか得られないレアアイテムが入っていることもあり、プレイヤー達は競って宝箱を探し求めていた。

　その宝箱にはいくつか規則性がある。

・一度開けると一定時間後に消滅し、別の場所に再ポップする。

・宝箱にはレアリティー（※１）があり、階層が深いほどレアリティーが高くなる。

・鍵や罠が掛かっていることがある。

　この階にある[木の宝箱]ならカギも掛かっていないため、対応する鍵やスキルは必要ない。だが中層以降の宝箱には爆発トラップが付いていたり、下手なフロアボスよりも強いミミックが偽装していたりするため開けるだけでも結構なスリルだ。

　深層に至ってはトラップが即死級なんてざら。酷いものになると巨大爆発が起きて一帯全てが吹き飛ぶようなものもある。解除も難しく、宝箱に対応する鍵やスキルが求められるため、開けられるプレイヤーは一部しかいなかった。

　――そして話は通路前に戻る。

　本来、７層に宝箱はポップしない仕様であったのだが、ＤＬＣにより追加ＭＡＰ内に配置されるようになったのは知っている。そして目の前には宝箱に座るように腰を掛けて俯いているスケルトン。しかし――

　（おかしいぞ……）

　このエリアにポップする宝箱は[木の宝箱]のはずなのに、あそこにあるのはどう見ても光沢のある金属製の箱だ。しかもレリーフで模様まで描かれている。それにあのスケルトンも妙だ。

　今まで戦ったスケルトンは防具を着ておらず武器と盾のみだったが、コイツは細かい装飾が施されたチェインメイルや兜を着こみ、骨の色もなんだか黒っぽく、おまけに角まで生えている。一目でそこらのスケルトンとは違うというのが分かる。恐らくネームドモンスター（※２）だろう。見た目的に角を除けば何時ぞやのダンジョン攻略中継で見たカオスソルジャーに近い。

　休止状態なのかピクリとも動かず、強さまでは断定できない。名前だけでも見たかったが《簡易鑑定》を使えばこちらに気づいてしまい、戦闘になってしまうだろう。

　ウェポンスキルを使ってくる可能性もあり、ゲーム知識の無い妹に使われたら危険だ。

「（アイツはモンスターレベル９以上ありそうだ。ここは引いてゴーレムでレベルを上げてからのほうがいい）」

「も……もしかしたら宝箱消えちゃうかもしれないでしょっ！」

　鼻先に人参をぶら下げられた馬のようになっている妹に、宝箱は開けない限り消えることはないと何とか説得する。問題はここに誰か来た場合だが、わざわざ落とし穴に降りて横穴を調べる冒険者なんているだろうか。いや、ここまで来たとしても宝箱はリポップするのだ。命が懸かってる状況で無理することはない。

　ゲーム知識に無い、未知なるモンスターと戦う場合は出来得る限り慎重にいかなければならない。特にネームドモンスターなどは最悪”フロアボス級”という可能性もあるのだから。

「（うぅ……じゃぁまたアレ取りに来てくれる？）」

「（レベル上がったらな。だから今は我慢しろ）」

　しぶしぶだが撤退の了承を得たので中庭のゴーレムを倒しに行くとする。妹は名残惜しそうに何度も振り返るが、命あっての物種なので今は諦めてほしい。

　途中、通路の脇にある小さな窓から中庭を覗いてみると……いたいた。ウッドゴーレムだ。

　中庭は草が所々生えているが綺麗なものだ。誰かが草刈りしてるとかではなく、そういう地形なんだろう。そんな中にゴーレムが足を引きずるように佇んでいる。大きさは２．５ｍほどだろうか。しかし手足は太く、重さは１トン近くあるだろう。

　持ってきた双眼鏡でゴーレムを観察する。

「背中に石が刺さってるけど……あれが核だよね」

　非常にゆっくりにしか動いていないので強さを過小評価しそうになるが、あいつの怖い所はパワーだ。

「そうだ。あいつの攻撃は重いから受けるなよ。全て躱すんだ」

「大丈夫、心配性だな～。ちゃっちゃとレベルあげちゃお～」

　ゴーレムは全方位の生命感知タイプ（※３）のため一定距離に近づけば例え背後を取ろうと感知されてしまう。奇襲攻撃は不可能だ。

「最初は俺が引き付け役やるから、核は頼む」

「背中の核を取ればいいんだよね」

「取るのは強くなってからいつでもできる。ゴーレムの動きを見ながら壊すことを優先しろ」

　いまいちわかって無さそうな気がするが……そんじゃやるとしますか。

　武器を手に取りゴーレムに３０ｍほどまで近づくとくるりとこちらの方を向いて、何かの大きなモーターが動いたような低い音が響き始める。車輪でも出てきそうな音だ。

「かかってこいデカブツ！」

　ウッドゴーレムはモンスターレベルは９だが、初速が遅いせいで移動速度はスケルトンのほうが余程速く感じる。が、それも近づくまで。思ったよりもパンチのリーチ長く、しかも速い。

「うおぉっ。パンチ速えぇ！」

「これは貰ったぁぁ!　ふんぬぉー！」

　ウッドゴーレムのパンチを避けるにも一発ごとに大迫力の風切り音があるため肝が冷える。そんなパンチを連発してくることがあるため、一瞬たりとも気を抜けない。

　片や妹のほうはカブを引き抜くようにゴーレムの背中に両足を付けて核を引っこ抜こうとするが、ガッチリ固定されているため引き抜けず、振り回されてしまう。

「武器をっ叩きつけてっ……うぉあぶねぇ……根元から折るんだよ！　というか、壊せよっ！」

「だってぇ～もったいないでしょ～」

　ウッドゴーレムの轟音パンチを避ける度に玉ヒュンのような嫌な感覚を味わう。汗も噴き出るがこれは冷や汗だ。お兄ちゃんとしては早くしてほしいよ。

　それから１分ほどの時間を汗だくになりながらパンチを躱す時間が続く。ゴンッゴンッとゴーレムの核に小太刀の峰を何度も叩きつけやっと折ることに成功。ゴーレムはその場で崩れ落ちるように地面に倒れ、そのまま魔石になった。

　ここのゴーレムはポップ間隔が短いためすぐに出現する。休憩するにも一度離れておいたほうがいい。

「はぁはぁ……おいっ、無理に取ろうとしてそんな時間掛けてたら……にーちゃんが死んじゃうだろうがっ！」

「でもこれみて～♪　いくらで売れるかな～♪」

　手に持ったゴーレムの核を傾け眺めている、ご機嫌な様子の妹。いくら壊せと言ってもお宝を諦められないよう。仕方なく３０秒だけ時間猶予を与え、それでも無理なら壊す方向で話を纏める。

「ぶ～ぶ～」

「ぶーぶーじゃない。お前にもレベル８になったら引き付け役やってもらうからな」

「え～しょうがないなぁ」

　妹の能天気な頭に無性にチョップしたくなるが、ここで拗ねられても効率が悪くなるだけだ。そんなことを話していると、地面からにゅっと黒い霧が生えるように出現。クエストモンスターだからか、そこらのモンスターとは霧の出現の仕方が違うようだ。

　初戦の高速パンチを躱すのに疲弊したためすぐには戦わず１０分ほど休憩。２体目のゴーレムからはゴーレムの核を折るコツを掴んだのか３０秒以内で核を引っこ抜き倒すことができた。とはいえ全力疾走レベルには堪えるんだぞ。

「鉈か手斧持ってきたら良かったな～。小太刀は斬るのはいいんだけど、折る方向に上手く力を乗せにくいんだよね」

　スケルトン戦を考えても小太刀はダメだったか。今では妹もそれなりに力があるし手斧二刀流でも試させるか。

　その後もたっぷり休憩を挟みつつウッドゴーレムを５体ほど倒したところで華乃のレベルが８になる。元々クエストモンスターなので経験値量は多く、その上、格上相手による経験値ボーナスも入るためレベルが上がるのも早い。

「やった～！　じゃ次からは交互でやる？」

「はぁ……はぁ……にーちゃんはもう疲れちゃったよ……今日は帰ろう」

「えぇ～。じゃぁ明日またやろっか」

　ゴーレムは二人で戦うなら確実に急所を狙えるため実に美味しい敵だった。ゲームの時もゴーレムは浅層でのレベル上げにおいて美味しい敵という情報が出回っていたが、その辺りのゲーム知識はこちらでも使えそうだ。

　しかし妹のダンジョン順応力も思ったより高い。この分ならあと２カ月くらいでレベル１５くらいまでいけそうか。普通に食事制限しながらレベル上げしていればダイエットにもなるし、気を引き締めて頑張ろう。

　\*・・\*・・\*・・\*・・\*・・\*

　本日の授業が終わり、ホームルームで連絡事項を淡々と説明している村井先生。どう考えてもこのＥクラスには問題があるだろうと思うのだが、その事には全く触れず、気付く様子もないような態度で教室を後にする。

　ホームルームが終わると同時にＤクラスの何人かが教室に入ってきて部活の手伝いにクラスメイトの何人か連れて行こうとする。どうやら俺は雑魚認定されているようで、雑用目的にすら使えないと判断されて連れて行こうとはしない。それはラッキーなのか悲しむべきなのか。

　まぁ今日も妹とゴーレム退治の予定だし、変に目を付けられて引っ張りまわされるよりはいいか。

「おい赤城よぉ、ぼーっとしてないで今日も手伝えや」

「……あ、あぁ……」

　首根っこを掴まれて教室の外へ連れていかれる赤城君。どうみてもイジメだろうに、先生は見て見ぬふり。クラスメイト達もＤクラスに反抗する気力を折られているためか、目を合わせようとする人すら少ない惨状だ。

　Ｅクラス随一の実力者――と思われている――の赤城君を、一方的な蹂躙とも呼べる暴力でもって黙らせた刈谷。３年早くダンジョンに潜れたというアドバンテージは想像を超えるほどの差があるのだと理解させられ、Ｅクラス全体がどうしようもない暗鬱とした雰囲気に飲まれている。

　現時点では俺が何言っても状況を変えられないだろう。もし何かをやるとしても刈谷の背後にいる輩をあぶり出すなりして、とっちめる他ない。刈谷はあくまで操り人形なのだから。直接的に指示しているのはＢクラスを支配下に置いている”アイツ”なんだろうけど。

　しかし連れていかれるときの赤城君の目は死んではいなかった。ダンジョンダイブで頑張って見返すつもりなのだろう。三条さんやカヲル、立木君もフォローに付いているしそこまで心配する必要もないのかもしれない。

　Ｄクラスの何人かの生徒は赤城君を連れ去った後も我が物顔でＥクラスに居座る。

「そういや俺の兄貴がカラーズの下部組織のパーティーに呼ばれてさ」

「カラーズの！？　すっげぇ！」

「間仲君のお兄さん、”ソレル”のメンバーだったよね」

「すごーい！」

　アイツは……確か校門で菊口さんを吹っ飛ばしたヤツだ。後々調べるつもりだったが、間仲というのか。覚えておこう。

　その間仲が大声て雑談を始めたので耳をそばだててみると、カラーズ傘下のクランパーティーに参加できるとか。そして何人も大物冒険者も来るとか言っている。

　カラーズといえば先日リッチを攻略しテレビ効果もあって人気上昇中のダンジョン攻略クランだが”ソレル”というクランはカラーズの二次団体のさらに下部、いわゆる三次団体の組織らしい。

　例え三次団体でも有名クランの下部組織なら冒険者学校ＯＢやそれなりに成功した冒険者が在籍しているようで、クランレベルはそこらの一般的なクランより余程高いと、間仲が身振り手振り話している。

　カラーズのような最前線攻略クランはいきなり入れる訳ではなく、下部組織で強くなって活躍し名を上げていけば、より上位のクランへ移籍できるシステムを取っている。最上位クランに入りたければ、まずその下部組織に入ることが必要。例外として他の最上位クランから最上位クランへの移籍もあるようだが、ダンジョン攻略情報の流出が懸念されるため、攻略クラン同士の移籍は滅多にあることではないそうだ。

「田里さんもカラーズのメンバーもマジ凄かった～」

「俺も何度も録画見直してるわ。さっすが最強ジョブ【侍】だな」

「国から叙勲されるくらいのクラン作って活躍しないと【侍】にはなれないらしいぜ」

　確かにカラーズのあの戦いでの気迫は凄かった。自分の全てを賭して挑んでいる姿は画面越しだというのに未だに強烈な印象を残している。一流の冒険者というものに憧れるのも分かるな。

　冒険者学校の大部分の生徒は、第一志望が冒険者大学に行って官僚なることだ。冒険者大学に行けないなら次点として普通の大学に進学するというのが一般的だが、有名クランに行けるならそちらを望むという生徒も多い。下部組織であれど有名クラン関連の話は注目を集める話題なのだ。ＤクラスどころかＥクラスの生徒達もそば耳を立てていることからも関心の高さが窺える。

　俺は……大学は前の世界で行ったし、冒険者大学進学は考えていない。進学せず冒険者志望かな。そして強くなったら信頼できる仲間とクラン作ってみるのもいいかもしれない。ゲームと違ってこちらの世界ではどれくらい攻略していけるのかは分からないが、例えフロアボス相手でも俺ならやりようはあるはずだ。

　クランをどう作ろうかとかそんな青写真を考えつつ、Ｄクラスの教室へ行って簡単な掃除とゴミ捨てという名の雑用をそそくさと済ませて教室を後にする。向かう先は工房だ。ゴーレム対策に手斧をいくつかレンタルしたい。

　レンタルできる武器はほとんどが鋼製だ。より硬いステンレスや軽いチタン製も一応レンタルは可能ではあるものの、学校の工房では加工が難しいせいか、そういった金属の武器は数も種類も少ない。工房側だってそんな加工のし難いモノを作るくらいならキレ味や耐久性を高めたダンジョン素材の武器を作ったほうがマシだろう。

　とはいえ強いモンスターの爪や牙、魔法金属などダンジョン素材製の武器は、ネット通販やオークション、冒険者ギルドの売買所を見ても１００万円以上するわけで、高価すぎてレンタルはできない。結局、工房に並ぶのは鋼製の武器ばかりになる。

　１０階前後のモンスターまでなら鋼製のレンタル武器でもいいが、その１０階の到達がもう目の前に見えている。それ以上の武器が欲しいなら自分で買うなり材料を揃えるしかない。命が懸かっている以上は武器や防具に惜しまない方がいいのは分かっているが……高校生に金なんてある訳が無く、金策に迫られているというのが現状だ。

　それでもいくつか金策手段は考えてある。その時なるまでじっくりと準備を整えておこう。

（※１）宝箱のレアリティー

宝箱の材質によりレアリティーがあり、木→銅→銀→金→ミスリル→オリハルコン→アダマンタイトの順で高くなる。通常、２０階前後までの宝箱の材質は木製。

（※２）ネームドモンスター

ゲームワールドで一体しか出ないような特殊なモンスター。こういったモンスターはボス級の強さであることが多く、固有の名前が付いている。

（※３）生命感知タイプ

生命力を感知するタイプ。視覚には左右されないが、アンデッドのように生命力が無いものは感知できない。通常のモンスターは目でみえる範囲を感知する視覚感知タイプである。

　――　立木直人視点　――

　先日の４番闘技場での決闘騒ぎ。

　刈谷に酷く痛めつけられ何本か肋骨骨折をしたユウマは、幸いにも【プリースト】の先生の施術によりその日のうちに完治。今は何ともないようで元気に動くことができている。

　だがあの日からＥクラスは暗闇の中にいるような重い空気に包まれ、そこから抜け出せないでいる。

　少し前の部活動勧誘式でもＥクラスの尊厳を酷く傷つけられていたが、それでも頑張ればいつかは認めてくれるのではないかと前向きに考え、立ち直ろうとしたクラスメイトも多かった。しかし……今回は違う。

　このクラスでは一際優秀で才能もカリスマもあり戦闘能力でも抜けて高かったユウマが敗北してしまったことは、そして他クラスから悪意のこもった罵詈雑言を浴びせられことは、ユウマの後に続こうとしていた者たちの前向きな心を圧し折るに十分だった。

　共に頑張ってきたサクラコとカヲル、僕ですら意気消沈している。

　とはいえ負けたユウマが悪いわけではない。下卑た態度でサクラコに近づき、それを庇ったユウマに難癖を付けて挑発。しかも一度もダンジョンに入ったことも無い相手に決闘を吹っ掛けるというのは理不尽すぎるではないか。実に卑劣な輩たちだ。

　その時はユウマの勇気ある行動にクラス一同称賛したものだが……冷静に考えてみれば、この決闘は仕組まれたものだということに気づく。

　闘技場の予約表を調べてみて分かったことがある。４番闘技場は対魔法シールドを張れるため、第一魔術部が練習のためによく使用していた場所だ。第一魔術部以外にも第二、第三魔術部も予約を入れており、この先もずっと予約は一杯。それなのに一時的とはいえ一年Ｅクラスの決闘ごときに明け渡すだろうか。

　刈谷にもおかしいことがある。Ｄクラスでは頭一つ抜けて有能であるにもかかわらず、なぜＤクラスに在籍しているのか。

　戦闘技術に関してユウマとの戦闘を直に見て分かったことだが、刈谷は一朝一夕では身に付かない高度な技術と戦術を駆使していた。冒険者学校のクラス分けはＡクラスから成績順で振り分けられる。その基準で考えれば戦闘技術もレベルも高くＤクラスを指揮できる刈谷は、Ｃクラス、もしかしたらＢクラスに届くほどの能力があるのではないかと睨んでいる。

　それなのに内部生の中では一番の下位であるＤクラスに留まっている理由は何か。試験を受けられなくて降格したとかだろうか。それとも……

　学校の対応もおかしい。先程Ｄクラスの阿呆共がイジメともとれる行動を取ったのにもかかわらず担任は見て見ぬふり。それを分かっているのかＤクラスも益々増長した態度を取ってくる。

　このような上位クラスからの圧力は一年Ｅクラスだけではない、二年や三年Ｅクラスにも似たようなことが蔓延っている。退学に追い込まれたという話も聞くくらいだ。

（まるでこの状況を学校自体が黙認しているかのようだ）

　江戸時代の身分制度「士農工商」の下に作為的に作られた穢多非人のように、Ｅクラスという外部生に対し差別的な意味合いを持たせたいという意思を感じる。

　もしそうならこれはＥクラスとＤクラスだけの問題ではない。Ｄクラスだけでそのようなことができるわけがないのだから。……ではそんなことが可能な存在とは何者か。

　刈谷とＤクラスを動かし、４番闘技場の使用許可を自由に決められ、担任をも黙認させられる存在。Ａクラス……生徒会……いや、もっと大きいような気がする。

（仮に、背後にいる敵というのが学校そのものだったなら。僕は抗えるのか……？）

　冒険者学校そのものに抗うということは、上位クラス、生徒会、延いては八つの大派閥である「八龍」全てに喧嘩を売ることに等しい。さらに八龍の背後には企業や冒険者クラン、冒険者大学生や官僚まで付いているのだ。果てしなく巨大。一介の高校生如きがそれらを相手取って何が出来るというのか。

　再び目の前が暗くなるような錯覚に襲われる。今まで描いていた輝かしい夢や希望が、大切な家族からの期待が、追い求めていたものが罅割れ、零れ落ちそうになる。

　脱力感から頭を抱えそうになり俯いていると、Ｅクラスに入り浸っているＤクラスの生徒の話し声が聞こえてくる。大声で喧しく騒いでいるので僕の初期スキル《聴覚強化》を使う必要もない。

「そういや俺の兄貴がカラーズの下部組織のパーティーに呼ばれてさ」

「カラーズの！？　すっげぇ！」

「間仲君のお兄さん、”ソレル”のメンバーだったよね」

「すごーい！」

（カラーズか……）

　強大な不死の王リッチに立ち向かい、討伐するという偉業を成し遂げた日本が誇る英雄達。冒険者学校の生徒でなくても先日のカラーズの偉業をテレビに噛り付いて見ていた人は多かろう。かくいう僕も深夜遅くまで見ていたし、録画を何度も見返したほどだ。あれぞ冒険者の頂点という戦いだった。

　あの討伐によりカラーズは日本のメディアを席巻する話題となり続けている。先日話題となっていたのはクラン参加志望者も急激に増え、数万人が面接に応募するというニュース。カラーズは５つの旗下クランを持っており、その下にも多くのクランを従えている超巨大組織。”ソレル”というのもそのようなクランの１つなのだろう。

　僕自身は冒険者大学志望だが、カラーズの映像を見ていたときは一流の冒険者を目指すのもいいかもしれない、なんて思った。しかし蓋を開けてみれば……このザマだ。一流冒険者、冒険者大学どころかＡクラス……いやＢクラスやＣクラスへの昇格すら不可能に思えてくる。

　最後に送り出してくれた両親の姿を思い出す――

　士族嫡男として子爵様に仕える家に生まれた僕は、小さな頃から体が弱く、少し動けば熱が出て家に閉じこもることが多かった。そんな時、子爵様の嫡女であるお嬢様が、選ばれし者のみ入ることが許される冒険者学校中等部に入学するという知らせを耳にした。

　当時の僕はその知らせに驚愕し、寝付くことができなかったほど動揺した。同年代の女子と比べても明らかに背が小さく線の細い、しかも僕と同じ虚弱体質だったというのに。どうやったら全国から化け物達が集う学校に合格出来たのか。入学してもそんな中でやっていけるのか。

　ついていけず、すぐに帰ってくるはず。

　そう思っていたが入学してから１年程で頭角を現し、僅か１３歳で魔術雑誌に特集を組まれるほどの人物となっていた。大きなオークを魔法でやっつける写真には度肝を抜かれたものだ。あれほどお淑やかなお嬢様が、こうも変われるものなのだと。

　僕もこっそり冒険者学校中等部に入学願書を送ってみたが……当然の如く落ちた。やっぱり僕には才能がない。あばらが浮くようなひ弱な体だし。どうせ冒険者学校なんて無理だ。そう思って自分を慰める言い訳をしていたものだ。

　そんな弱音を両親に言ってみたことがある。すると、お嬢様の秘密をこっそり教えてくれた。お嬢様は一人で血の滲むような努力をしていた。食事を変えてトレーニングメニューを組み、毎日遅くまで勉強し、それをただ人に見せていなかっただけだという。

　人は変わるようにしか変われない。本当に変えたいのなら変えたいと強く強く思わないとダメなのだ。

　僕は本当に冒険者学校に入りたかったのか。あの時は虚弱体質を克服できず中等部には入学が出来なかったが、本当に頑張って克服しようとしていたのか。

　赤く艶やかな髪を靡かせ笑顔で腕を組み胸張るお嬢様の写真を見てみれば、彼女の変わろうとした思いの強さがどれ程のものだったのか、そこに目指すべき道が見えたような気がした。

　その日から死ぬ思いで体を鍛え続けた。どうしたら体を強く出来るのか。強靭な体を作るための食事作りを母に手伝ってもらい、毎日走り、難関校の問題集で分からないところを父に教えてもらった。献身的に応援してくれた家族のためにも。お嬢様のいる冒険者学校へ必ず合格するんだ――

（だというのに。何なんだこのザマは！）

　Ｅクラスの状況に対して悲観して嘆いているのではない。この程度で折れそうになっている軟弱で無様な己の精神に対して憤慨しているのだ。決死の思いで何年も頑張って入学してきたというのに何も成し得ていないどころか、まだ何もやろうとすらしていないのに。たった１ヶ月ちょっとで、もう折れるとか我ながら呆れ返る。お嬢様が聞いたら失笑されてしまうではないか。

（どうやってここまで来たのか。何のためにここへ来たのかを思い出せ）

　冒険者学校に合格したときだって目に涙を浮かべ、あれだけ喜んでくれた母。家を出るときにそっと背中を押してくれた父。両親の期待に応え、あの背中に追いつくために僕はここに来たというのに。こんな所で負けてしまいそうだった。

（まだ終わっていない。ダメならしょうがない。だがやってみてから諦めろ）

　相手が八龍だろうと何だろうと。やる前から諦めてどうする、立木直人！　情報を一つでも多く集めて状況を見極め、勝つための算段を立てるんだ。例え勝算が低くても勝率を１％でも上げるために。

　気づかないうちに強く目を閉じていたのだろうか。真っ暗だった視界が開けるような気がした。先程と変わらない教室なのに、諦めないと決めた後は少しだけ眩しくみえた。

　Ｄクラスの生徒はまだ残って話している。カラーズの傘下のクランに関する話題は盛り上がっているようで、Ｅクラスの生徒も耳を澄まして聞いている。

　そう、クラスメイトの彼らだって夢や希望を抱いていたからこそカラーズ傘下クランの話に耳を傾けているのだ。だがこのままの状況が続けば彼らの心も完全に折れてしまい、上位クラスや大きな派閥に従属する以外の道は無くなる。そうさせないためにもＥクラスでも十分に追いつけるのだと、まだ戦えるのだと、希望を見せて気づかせなければならない。

　劣っているのは学力ではない。この学校に受かった時点で相応の学力は持っているはずだ。日頃の勉強をしっかりして少しのサポートがあれば学力面ではこれからも他クラスに差は広げられないだろう。

　問題はダンジョンダイブ経験だ。

　ダンジョンに入れるようになったのも高校入学後から。たった１ヶ月少しの期間でしかない。今の時点では内部生に劣っていて当たり前で、差を意識するときではない。敵はこの段階を狙ってＥクラスを圧し折るために圧力を掛けてきたわけだから、作為的な悪意とそれを作り出した存在をもっと早く疑うべきだった。

　現時点では劣っているＥクラスのダンジョンダイブ能力も、１年後、２年後ならやり方次第で十分逆転可能。僕たちもＡクラスに行けるということを敵にもクラスメイトにも見せつけてやりたい。

　この先ますます上位クラスや上級生からの妨害も激しくなるだろう。Ｅクラスを完全に従属させるためにあの手この手で嫌がらせをしてくるはず。それら全てに対抗するのは厳しいし、Ａクラスに行くにも僕の努力だけでは無理だろう。

　悪意と対しても折れず立ち向かえる仲間が欲しいのだが……見ればカヲルとサクラコも心が折れかけているのが分かる。以前のような明るく前向きな雰囲気は無く、目にも光が灯っていない。そんな彼女達だが能力は素晴らしく、強さを求める姿勢も驚くほどストイックだ。この逆境もめげずに乗り越えられたとしたら必ず糧となる。協力者としてまず彼女らを説得すべきだろう。

　もちろんユウマも欠かせない。今は負けてから間も空いてなく肩身が狭いかもしれないがクラスを引っ張る上で彼のカリスマは無くてはならないモノ。しかし妨害を仕掛けるなら恐らく彼に対してなので、僕が目を光らせてサポートとケアをしなければならない。

　そして６月にクラス対抗戦がある。試験内容は１週間かけてダンジョン内部を探索し、指定されたことをクリアしていくというもの。成績はクラスごとに付与されるためクラス全員の総合力が試される。先頭を走っている僕達が頑張ることはもちろん、足を引っ張りそうな者達の救済も急務だ。

　出来れば早いうちにレベルアップで苦戦しているクラスメイトを集めて補修のようなものをしたいところ。ダンジョン攻略情報や戦闘技術を共有し手助け出来れば、皆のレベルも上げやすくなるだろう。

　Ｅクラスの能力面で問題になりそうといえば数人思い当たるが、その中でも最下位で入学してきたあの太ってる彼が一番の問題か。付きっ切りで指導したほうがいいのだろうがそんな時間も余裕もない。僕らのパーティーに入れてダイブを経験させてみるのもいいかもしれないな。他の生徒に対してもどうサポートするかカヲルに相談して決めよう。

　剣術ならカヲルとユウマが、魔術なら僕とサクラコが教えられるだろう。参加希望者を集めて立ち回りなどの勉強会などもやってもいい。

　何をするにもまずはサクラコとカヲルを立ち直らせる。そしてＥクラスのために何ができるか、今のうちからしっかり考えておきたい。

　僕は立ち止まる訳にはいかない。あの背中に追いつくまでは。

　家に戻るとすでに妹は準備万端で待ち構えており、遅い遅いとドシドシ足を踏み鳴らしていた。興奮して夜もすぐに寝付けないほどダンジョンダイブが楽しみとのことで、俺の帰りを待ちきれなかったらしい。

　すぐに防具に着替えるよう急かされ再び学校へ。裏手の通路に誰もいないことを確認し、地下一階の空き教室にあるゲートから登録したダンジョン７階の礼拝堂へワープする。

「……あれ～？　誰かいたのかな？」

　華乃がボロボロの礼拝堂の片隅を指し示す。その先をみると薪が燃え尽きた跡があった。昨日まではこんな跡は無かったので、誰かが来たのは確実。ここで焚火をして一晩明かしたのだろう。

　この追加エリアに来るためには、誰も寄り付きそうにない７階の果てにある落とし穴に入り、その底にある横穴からカタコンベを通ってくる必要がある。普通の冒険者は落とし穴に横穴があるなんて気づくわけがないのに。

　ならばゲートから来た？

　ゲートが使えるならこんなところで一夜明かす必要なんてない。来るときにゲートを使ったのなら同じくゲートを使って帰ればいい。

　俺と同じようにプレイヤーの線も考えたが、それも同じことだ。俺達が初めてここに来たときはゲートが蔦に隠されて見えない状態だったが、今は刈り取られ目立つ位置にある。驚くほど蔦の伸びる速度が早いようだが、プレイヤーなら半分でもゲートの魔法陣が見えていれば見逃すことはないだろう。

　消去法でいくと探索好きが偶然見つけたとか、もしくは落とし穴に逃げ込むトラブルがあったとかそんな理由ではなかろうか。そういえば７階の落とし穴に入るときに魔狼の遠吠えがいくつか聞こえたが、ここに来た冒険者が原因だろうか。

　あとは可能性は低いが、この場所が元々一部の冒険者のみに知られている場所だったのかもしれない。

　いずれにしても俺達が気にすることは無いだろう。ゴーレムは中庭のいくつもの場所でポップするし少数の冒険者となら取り合いにはならないはず。気を取り直してゴーレム狩りに行きますか。

　えっちらおっちらと要塞まで寂れた荒野を歩いていると道端で男三人のパーティーが座り込んで屯していた。恐らく礼拝堂の中で焚火をしていた冒険者だろう。その中の一人が俺達に気づくと「お～い」と声を上げてこちらに近寄ってくる。妹も連れているため男たちに気づかれないように身構える。

「おう、君たち。何か食糧持ってないか？　腹ペコでマジ困ってるんだワ」

　駆け寄ってきた冒険者は胸当ての上からミリタリージャケットを羽織った身軽な装備をしている。【シーフ】だろうか。もう二人はインナーの上から肩、胸当て、小手、グリーブと、全身に黒い魔狼の革製防具を着こみ片手剣を腰にぶら下げている。こちらは【ファイター】か。三人の胸に太陽のようなマークのバッチをしているので同じクランと推測できる。

　その三人の話を聞いてみると……７階で不意に魔狼の大量リンクを引き起こしてしまい近くにあった穴に逃げ込んで立て直そうとしたところ、横穴を見つけてこんな場所に来てしまったそうだ。やはり昨日の魔狼の遠吠えはこの人らが原因か。

　この場所からゲートを使わず戻るにしても半日近く掛かるはず。その間、空腹のままは辛かろうと持ってきたオヤツを半分分けてあげる。しかし「ケチケチすんな。それも出せよ」ともう半分も遠慮なく持っていく。図々しいことこの上ない。

　三人はムシャムシャと競うようにお菓子を平らげ、もう無いと言うとあっさり解放してくれた。ここはどこかとか俺達は何者かなど色々聞かれるかと思ったが杞憂だったようだ。まぁ聞かれても知らない、こちらも迷ってここまで来た、というつもりだが。

　狐につままれたような出来事だったけれども、こういうこともあると割り切り要塞中庭へと向かう。そろそろジョブチェンジが見えてきたので気合を入れなおそう。

「も～。せっかく楽しみにしてたオヤツなのに！　それに……なんというか、あの人たち臭かった……」

「何日も潜っていたんだろうな」

　先程の三人は髭がかなり伸びていたし、服を何日も変えていなそうだった。ゲートの存在を知らない一般冒険者のダンジョンダイブは１週間潜ることなんてザラ。攻略組に至っては数か月潜りっぱなしもあるという。当然その間は入浴なんてできず、せいぜいが体を拭く程度。こちらの世界での冒険者とはまさに冒険をする者のことだ。厳しいダンジョン生活にも適応していく必要がでてくる。

　俺達もゲートが使えるとはいえ、深層まで潜れば強敵や複雑な地形を攻略するのに時間を取られ日帰りが難しくなることはあるはず。早いところ【機甲士】になって《ゴーレムキャッスル》のスキルだけは取っておきたい。

　ということで中庭に到着。ゴーレムの感知領域外に茣蓙を敷いて陣取り、ゆっくりと準備に取り掛かる。

　妹はレンタルしてきた２挺の手斧を振り回して早くも感触を掴んだようだ。《二刀流》というスキルは両手にそれぞれ武器を持ったときの威力を強化させるスキルだが、初めて使った武器ですら、こうも短時間で使いこなしてくるというのはチートすぎる。もしかして戦闘センスすら上昇させているのだろうか。

　兄としての威厳をどう守るべきか、なんてことを考えつつ、荷物を置いていざゴーレム狩りを始めようかというとき――

「おーい。この城の奥に変わったスケルトンがいるの知ってるかー？」

　お菓子を強請ってきた三人組が再びやってきた。これからってときに面倒事か。

「そうそう、あのスケルトンってそこらのと違って強そうだったからよ。俺達は三人で、お前ら二人だろ。パーティー組んで倒そうぜ」

「レオ君よ、その前に俺等の自己紹介から始めたほうがいいんじゃネ？」

　この人たちが言う”スケルトン”とは城主の間にいた宝箱を守っているスケルトンのことだろう。《簡易鑑定》していないので強さ分からないが、確かに休止状態でも強敵の臭いはした。

　三人の装備品を見た感じレベル１０前後。今の俺よりレベルは高いかもしれないが、命を掛ける戦いに、会ったばかりの――しかもお菓子を強請られた――冒険者と組むとかあり得ない。そも、あのモンスターに関しては俺のゲーム知識に無く、どの程度の強さなのか分からない。もう少しレベルを上げて装備を揃えてから戦いたかった相手なのに。

　横を見れば華乃もイヤそうに眉をひそめている。

　こちらが乗り気でないと見るや「俺達はカラーズ傘下のソレルっていうクランのものだ」と髭とモミアゲがくっついた男が自信満々に自己紹介をし始める。あぁ……”ソレル”ねぇ。今日聞いたばっかだぞそれ。

　シーフの格好をした男は間仲良（まなかまさる）と言うらしい。間仲って。Ｅクラスの間仲がソレルがどうのと自慢してたけど、その兄貴っぽいな……もう組む気が完全に失せたのだが。

「あの～すみませんが、俺たちは遠慮しときます」

「あ”ぁ？」

　一気に態度を硬化させこちらを威圧してくる間仲。後ろにいる二人もこちらを露骨に睨んでくる。面倒臭ぇ奴らだ。

　とりあえずここでバトルするしないは置いておくとして《簡易鑑定》しとくか。

＜名前＞　間仲良（まなかまさる）

＜ジョブ＞　シーフ

＜強さ＞　ややつよい

＜所持スキル数＞　３

＜名前＞　秋久怜央（あきひされお）

＜ジョブ＞　ファイター

＜強さ＞　同じ強さ

＜所持スキル数＞　２

＜名前＞　市渡一也（いちわたりかずや）

＜ジョブ＞　ファイター

＜強さ＞　同じ強さ

＜所持スキル数＞　２

　初めて人に対して《簡易鑑定》やってみたが……脳内に文字列がイメージされるような感じで分かるのか。意識していないとイメージが薄れていくので使いこなすには慣れが必要かもしれない。

　全員が初期ジョブ【ニュービー】から基本ジョブにジョブチェンジ済み。《簡易鑑定》では主観的な強さ（※１）しか分からないので、「同じ強さ」とか「やや強い」とかのスキル使用者から見た強さ表記になる。

　俺がレベル８なので、恐らく間仲兄がレベル１０、秋久と市渡がともにレベル８～９って感じか。スキルも所持スキル数からして《簡易鑑定》もしくは基本ジョブで覚えたスキルを所持しているのだろう。《スキル枠＋３》は覚えないまま、すぐにジョブチェンジしていそうだ。

　さてどうするか。”奥の手”を使えばこいつら三人くらいやってやれないこともなさそうだが……後々が面倒くさいな。

「テメェ、いま《簡易鑑定》を使ったろ。俺等カラーズとやる気なの？　死にたいの？」

　三次団体の下っ端ごときがトップクランを名乗るなよ……と苛立ちながらも「俺たちまだレベル８なんて足手まといにしかなりません」と丁寧に断る。が、全く聞く耳を持たない間仲達。しばらく押し問答になり、脳内で三人組をぶっ飛ばすシミュレーションをしながら心を落ち着けていると――

「おにぃ。時間がもったいないし付き合うだけ付き合ってみたらどうかな」

「お、話が分かるね、嬢ちゃん」

　はぁ……なんかしつこいし。ダメなら逃げる方向でさくっと終わらせたほうがいいのかね。しかし食料が無いのに呑気に宝箱漁りか。これから帰るのにも時間が掛かるはずだが、そちらさんのダンジョン計画は大丈夫なのかね。

　こちらがイライラしている一方で、三人組は気を良くしたのかベラベラと自慢話を始める。

「でよぉ、カラーズ二次団体の”金蘭会”に呼ばれてよぉ」

「そうそう。ソレルには世話ぁなったが、本家カラーズ入り目指してる身としては目をつむって欲しいっつーか」

「俺等もついに金襴会かぁ、へへっ」

　移籍要請に呼ばれたのではなく、単なる立食パーティーに呼ばれただけだろ。つーかお前らなんかをカラーズ入れたら品格が落ちる。

「（おにぃ、顔がピキピキしてるよっ。押さえてね）」

「（あぁ。気を付ける）」

　眉間に寄ったシワを揉みながらゾロゾロと城館の中に入る。通路の途中にいたスケルトンはすでに倒されており、城主の部屋の手前で作戦会議となった。

「んじゃ作戦は……タコ殴りでいいんじゃネ」

「それな」

（どれだよっ）

　まぁ後衛もタンクもいないし、討伐対象である城主の情報も無いため取れる作戦も分からない。ターゲットを絞らせないよう囲みながら叩くのも悪くないのかもしれない。

「とりあえず《簡易鑑定》で見てみる」

　市渡がドアの隙間から《簡易鑑定》でレアスケルトンを調べてみて、問題ないようなら作戦”タコ殴り”でいくこととなった。問題あったらどうするんだと思ったが、五人もいるなら城主のレベルが９か１０でも難なく倒せるはず。気に病むことはなさそうだ。

　フロアボスのようなレベルが大幅に高いモンスターという可能性もゼロではないが、フロアボスが追加エリアで出たという記憶はないし、出たとしてもここは７階なのでせいぜいがモンスターレベル１２。逃げ切るだけなら十分可能だろう。

　鑑定結果はどうなのか気になるのですぐにでも聞きたいのだが、隙間から中を覗いている市渡は固まったまま動かない。

　《簡易鑑定》はモンスター相手に使うと微量のヘイトを与えてしまうため、疑似的な挑発にも使えるスキルだ。使った瞬間モンスターによっては即交戦となるので、ちんたらしている暇はないと思うが。

「おい、カズヤ……どうした？」

　反応が無いのを不思議に思った間仲が問いかけると、市渡は激しく過呼吸し慌てだした。

「や、やべぇ逃げ――」

「グオォオォオオォオオオオッ！！！」」

　城主の間の扉が市渡諸共はじけ飛び、中から徒ならぬ気配を放つスケルトンが出てきた。

（※１）《簡易鑑定》の主観的強さ表示

－５レベル以下　相手にならないほど弱い

－４レベル　とてもとても弱い

－３レベル　とても弱い

－２レベル　弱い

－１レベル　やや弱い

＋０～１レベル　同じ強さ

＋２レベル　やや強い

＋３レベル　強い

＋４レベル　とても強い

＋５レベル　とてもとても強い

＋６レベル以上　計り知れない強さ

「グオォオォオオォオオオオッ！！！」」

　城主の間にいるスケルトンを扉の隙間から《簡易鑑定》していた市渡が扉諸共はじけ飛び、中から徒ならぬ気配を放つスケルトンが出てきた。

　何事かと瞬時に《簡易鑑定》を行う。

＜名前＞　ヴォルゲムート　（ユニークボス）

＜種族＞　スケルトンノーブル　【シャドウウォーカー】

＜強さ＞　計り知れない強さ

＜所持スキル数＞　４

　ヴォルゲムート。ユニークボスか……って、おいおいおいおい！　強さが計り知れないということは最低でも俺のレベルより＋６以上、つまりレベル１４以上ってことじゃないか！

　……それよりも、種族の後ろにあるジョブが【シャドウウォーカー】というのは非常に不味い。一部の強力なモンスターは冒険者と同じようにジョブに就いている場合がある。そこは目を瞑るとして、問題はそのジョブが上級ジョブだということ。上級ジョブは最低でもレベル２０からしかなれず、それはモンスターでも同じ。

　つまり。コイツは最低でもレベル２０以上という事実が発覚する――

「【シャドウウォーカー】ってなんだ！？」

「なんでこんなヤツが７階にいる！　やべーぞ！」

　ヴォルゲムートが低く唸るような咆哮を上げると、黒くて重く、そして爛れたような《オーラ》が吹き上がる。眩暈がするほどの凄まじい圧だ。

　最悪でもフロアボス程度の強さと想定していたが、そんなのが比ではないほどのヤバい奴だ。これはすぐにでも撤退しなければならない。

　吹き飛ばされた市渡の状況をちらりと目視する。鎌形の刀剣――ファルシオンだろうか――に貫かれ、口から赤黒い血を流しピクリとも動かない。即死だ。

「華乃っ！　退散するぞっ」

「う……うん……キャアッ！」

　逃げようようとしたそのとき。なんと間仲が華乃の足を切りやがった。

「ワリぃな、アイツ相手じゃ逃げ切れないかもしれないからさ」

「全員がここで死ぬのはな。必要な犠牲だと思ってくれ。あばヨ」

　脱兎のごとく通路を駆け去る間仲と秋久に、目の奥を赤黒く明滅させながらこちらを振り向く金属製の重装備をしたスケルトン。

「おにぃ……逃げてっ！」

　足を切られ、じんわりと血を流す妹が懇願するように俺に言う。

　華乃よ……そんな顔をするな。長年ずっと一人だった俺に、家族という温かさを教えてくれたお前には感謝しているんだ。置いていくつもりなんて死んでもない。

　そしてブタオも安心しろ。お前の大事な妹は必ず守ってやる。お前は俺で、俺はお前なのだから。少しは俺を信じろ。

　こちらが逃げないと分かったのか、ゆっくりと歩いてくる……いや、あの歩みは絶対に逃がさないという自信の現れだろう。既に【シャドウウォーカー】の移動系スキル《シャドウステップ》が発動しており、足元に残像が揺らめいている。

　俺も妹をかばうように前に出る。華乃の足を切りやがったアイツらは後できっちりブチ殺すとして……

「……おい、骨くず。その余裕じみた態度をすぐに圧し折ってやるよ」

　\*・・\*・・\*・・\*・・\*・・\*

　ダンエクではモンスターを倒すと経験値が手に入り、その経験値が一定量に達するとレベルが上がる”レベル制システム”を取っている。

　レベルが上がればステータスが上昇する。レベルを１上げたところでステータス上昇幅は１や２程度でしかなく、数値上は然程強くなったようには思えない。が、ＨＰ、ＭＰ、ＳＴＲ、ＩＮＴ、反応速度、動体視力など、あらゆる方面でステータスが上昇するため、少しの上昇値だったとしても戦闘能力において大きなアドバンテージを得られる。

　プレイヤースキルを磨けば強くなるのは間違いないが、それよりもレベルを上げたほうが強くなると言われるのはこのためだ。

　では、自分よりもレベルが高い相手と戦うにはどうすればいいのか。

　通常、レベルが１～３程度高い相手ならば、装備やスキルが同条件でも運や戦闘知識、プレイヤースキルがあれば十分勝てる範囲内だ。ジョブ特性やスキルの初動を知っているか。攻撃モーションの隙を突けるか。スキルチェインやフェイクスキルを使いこなしているか。これらが出来るなら勝率は大きく高まるだろう。

　レベル差が５もあるとステータス差も大きくなり、まともに攻撃を打ち合うのは難しくなる。刈谷イベントでの刈谷と赤城君のレベル差も丁度このくらいだったのでかなり厳しい差というのが分かるだろう。それでも良装備を揃えていたり、プレイヤースキル次第ではまだ勝てる可能性はある。

　だがレベル差が１０ともなれば絶望的とも言える戦闘能力の差がでてくる。

　ゲーム時代に装備やスキルを統一し、レベル差による戦闘能力の差がどれくらいあるか実験をしてみたクランがあった。そのとき自分よりレベル１０上の相手と互角に戦うには、自分と同じ強さを十人揃えなければならないということが分かった。逆に言えばレベル１０差とは、十人揃えないと勝てないくらいの能力差があるということだ。

　実際にはレベル１０も上だと扱える装備やスキルにも差がでてくるため、戦闘能力の差はより大きくなる他ない。そんな相手と一対一で勝つことは至難の業であるが、出来得る限りの準備とあらゆる手段を用いて対策すれば勝つ可能性が無いわけではない。奇跡的な低確率になるが。

　レベル２０差ならどうか。

　上記の実験結果から百人揃えれば互角になるように思えるが、実際には何人揃えても勝つことはできなかった。百人いても、千人いてもレベル２０上の相手には攻撃が全く通らず、反対に攻撃されれば一撃の下で複数人が蒸発するという一方的な戦いになってしまう。要約すれば、一人でレベル２０上の相手に勝つ可能性は”ゼロ”ということになる。

　――以上の事を踏まえ、目の前の敵を倒すにはどうすればいいか。

　俺のレベルは８。未だ【ニュービー】のためジョブ特性（※１）はなく、所持スキルも《大食漢》と《簡易鑑定》のみ。どちらも戦闘力を上げるようなスキルではない。それどころか《大食漢》に至ってはＳＴＲ－３０％、ＡＧＩ半減というデバフ効果まである。

　対するヴォルゲムート。モンスターレベルは少なく見積もっても２０以上。【シャドウウォーカー】のジョブ特性で移動速度と反応速度も上昇している。あのファルシオンと鎧も何らかのバフが掛かっているのか、怪しい光を放っている。

　さらに、ヴォルゲムートは【シャドウウォーカー】のスキル《シャドウステップ》を発動させている。スキル効果は５分間、加速力とＡＧＩに＋５０％ボーナス、残像効果で視認されにくくなり回避率も３０％アップという神スキル。コイツが使えば１００ｍを楽々５秒切るくらいの速度は出るだろう。

　俺の装備といえば学校からレンタルしてきた何の付与もされていない鋼の手斧。果たしてこれでダメージが通るのか。そも、こちらの攻撃がまともに当たるのか。

　逆にまともに攻撃を受けてしまえば魔狼の防具を着ているとはいえ、一撃の下に胴体を真っ二つにされかねない。相手の攻撃力とこちらの防御力に差がありすぎる。

　背後には妹が足を切られ動けないでいる。すぐに止血処置と《小回復》をしたので大丈夫とは思うが、妹を抱えてゲートまで逃げきるのはまず無理だろう。

　ならば、腹を括って戦うしか道は無い。

　こちらにも奥の手はある。それを使えばこの身も徒では済まないかもしれないが、何もしなければ俺も妹も死ぬだけだ。

　何かあった時のためにリュックに入れてあった[ＭＰ回復ポーション（小）]を３本取り出し、腰のポーチにセットする。

「グォォォ……」

　しかし、なんだか妙な奴だ。

　俺が知っている大抵のスケルトンは獲物を見つければ何も考えず速攻してくる奴らばっかだった。しかしコイツはすぐには襲ってこず、ゆっくりとこちらに歩み、１０ｍほど手前で足を止めてこちらを見定めている。いや、品定めしているのか。

　骨の上に薄っぺらい乾いた皮が張り付いているだけなのに笑っているのがよく分かる。そこらあたりもユニークボスたる所以なのか。知性と――嗜虐性が垣間見える。

　四方へ振りまく醜悪な《オーラ》もここに来るまでのモンスターとは別格。ビリビリと内臓を掴み締め上げるような圧迫を与えてくる。こいつに比べればオークロードすら赤子のようだ。

「逃げて。無理よ……おにぃ……」

　愛い奴だ。自分の怪我のせいで俺を巻き込んでいると感じるのは心苦しかろう。だが心配するな。

「準備時間をくれるってのなら素直に頂くぜぇ」

“元プレイヤーにだけ与えられたチート”ってやつを見せてやろうじゃないか。

（※１）ジョブ特性

就いているジョブによりステータスなどに恩恵を受けられることがある。ただし【ニュービー】には無い。

　俺はこの世界においてチートと呼べるものをいくつか知っている。

　まずゲーム知識だ。

　ダンエクを一通りプレイしているなら、ダンジョン情報やアイテム、武器、スキル、学校や生徒たちの情報もある程度知ることが出来る。それどころかこれから起こりうるイベントという名の”未来”すら知っているのだ。ゲーム知識はこの世界において最大級のチートとも言えるだろう。

　それだけではない。こちらにくる直前のゲームキャラのスキルを使うことができるチートもあることが分かっている。いつぞやの実験で【ウェポンマスター】のスキル《真空裂衝撃》が使えたことが何よりの証拠だ。

　俺はあれからスキルの実験を何度も行っていた。最初は【ウェポンマスター】のスキルだけを使えるのかと思っていたが、そうではなく”ゲーム時代に使っていたキャラのスキル”が使えるということが実験結果で分かった。

　使っていたキャラのジョブは最上級ジョブである【ウェポンマスター】だったが、スキル枠には【ウェポンマスター】以外で覚える優秀なスキルをいくつも覚えていて、それらも使用可能だったのだ。

　現状は【ニュービー】でスキル欄にも２つしかないにも拘わらず、ゲーム時代に使っていた強力なスキルが数多く使えるわけだが……当然、制約もある。

　例えばＳＴＲが低すぎて最弱のスライムですら殺せなかった《真空裂衝撃》のようなパターンだ。現在のような低いレベルのステータス、もしくは弱い武器では使い物にならないスキルがあり、特に攻撃スキルはこのパターンが多い。

　他には覚えてしまえば常時発動するパッシブスキルと呼ばれるスキルがあるが、これも制約だらけで使うことができないものばかりだ。

　覚えていたパッシブスキルには、動体視力が常時極限まで上がる《観の目》というスキルや、ものの本質、相手の強さ、一部所持スキルが分かる《裁審者の目》というスキルがあった。これらは今現在のスキル欄に無いため常時発動せず、またマニュアルでの発動法もない――少なくともゲーム時代に聞いたことは無い――ため、使うことはできない。

　だが、今のステータスでも有効なスキルもある。

「それじゃあ、いくぜ……」

　複雑な魔法陣を両手を使って素早く描き切り、スキルのマニュアル発動を試みる。最初は純白の色だった魔法陣はすぐに赤黒く変色し、ドクンッ、ドクンッと鼓動し始める。

「冥府の悪王よ……俺に力を貸しやがれ！　《サタナキアの幹細胞》！！」

　最上級ジョブ【魔王】で覚えるスキル《サタナキアの幹細胞》を発動。最大ＭＰの９９％と引き換えに一定時間、強烈なＨＰリジェネ（※１）効果をもたらす、いわゆる”再生”スキルだ。

　リジェネとはいえ、最上級ジョブのスキルだけあって、腕を切り落とされたくらいなら１分も経たず生えてくるほどの凄まじい回復量を誇るが、即死の場合は回復しない。ＭＰ消費と被ダメージの兼ね合いからタンクには必須のスキルと言われている。

　スキルが発動すると最初に体中の皮膚に焼けるような痛みが走り、次に脳内の何かが作り替えられていく感覚に陥る。

　すぐに持っていた[ＭＰ回復ポーション（小）]を１本飲み干し、新たな魔法陣を描く準備をする。

「まだまだいくぜ……闇を駆ける疾風となれ！　《シャドウステップ》！！」

　闇色の幾何学模様でできた魔法陣が発動と同時に付近の光を吸収し、周囲もいくらか薄暗くなっていく。俺の足元にも残像が揺らめき始めた。

　《シャドウステップ》はヴォルゲムートが使っているスキルと同じもの。上級ジョブのスキルとはいえＡＧＩと移動力アップに加え、回避率も大きく上がるため廃プレイヤーも好んで使っていた。もちろん俺も対人戦用に覚えていた。ＡＧＩについては％上昇なので元のステータスが低い俺では上昇ボーナスも低くなってしまうが、そこは目を瞑るしかない。

　そしてもう１つ。これはリスクがデカそうなため実験すらしたことが無いが……出し惜しみはしない。[ＭＰ回復ポーション（小）]をもう１本飲み干す。

　複雑な幾何学模様が幾重にも重なり、複数の武器がごちゃ混ぜになったような魔法陣を高速で描く。

「覇王の……冥王だか何だか知らねぇが、俺に力を貸せやっ！　《オーバードライブ》！！！」

　最上級ジョブ【ウェポンマスター】が覚えるエクストラスキル。スキル効果は、５分間あらゆる近接武器や体術の攻撃力、命中力が上昇し、熟練度、反応速度、動体視力が大幅上昇する神スキル。【ウェポンマスター】の肝とも言えるバフスキルだ。これはステータス％上昇ボーナスだけでなく、加算式でもボーナスが貰えるので元のステータスが低い俺でも恩恵はデカい。

　発動した瞬間に複数個所の骨肉が軋み切断され、同時に《サタナキアの幹細胞》の効果により修復されていく。斬られ捩られるような痛みに気が狂いそうに何ながらも目の前の敵を睨み、耐える。額の所々から血が滲み、目の前の視界も赤い靄が掛かかったようになる。

（ぐぁっ……はぁぁ……思ったよりヤバいな……）

　《サタナキアの幹細胞》や《シャドウステップ》は別個で試したことはあるが、それらと比べても《オーバードライブ》の負荷は想像以上にデカい。リジェネが掛かっていなかったらこのレベルの体では発動した瞬間に血を噴き出して死にかねない。

（まだ戦ってすらいないのにすでに死に体とは笑えるぜ……）

　俺の姿を見た妹は開いた口がふさがらないような、そして悲しそうに顔を歪めている。

「お、おにぃ。そのスキルは、大丈夫なの……？」

「……はぁ……心配するな。お兄ちゃんの勇姿をとくと見ておけ」

　細かい血管から多少出血はしたようが、最強クラスのバフを重ね掛けしたことにより元の何倍もの”暴力”を手に入れることはできた。後遺症が残るかもしれないがそれが何だ。目の前のコイツを倒さなければその先が無いのなら、迷うことなんて何も無い。

　武器を振るって状態を確かめると、強く握りすぎた手斧のグリップが少し変形していた。握り具合を加減しないと壊してしまいそうだ。

　そして一歩を踏み出す。石畳にひびが割れ、一部は粉々になりはじけ飛ぶ。

　ヴォルゲムートはアンデッドのくせに驚いたように距離を取ろうとする。俺のスキルに警戒しているようだ。コイツ本当にアンデッドか？

「おいおい、俺がここまで準備してやったんだ。楽しくやろうぜぇ？」

「グォ……ォ……ォォォオオォオオ！！」

　間を置き、睨み合うこと数秒。

　互いに一歩を踏み出し、そこから《シャドウステップ》により間合いが刹那に潰れる。

　雄叫びを上げながらヴォルゲムートのファルシオンと俺の手斧がぶつかり、溢れ出るような運動エネルギーが音へと変換される。通常、運動エネルギーはぶつけた質量と速度の二乗に比例するが、マジックフィールド内では魔力と《オーラ》の力も加わっているため、見た目以上の力が込められている。

（武器を合わせてみて分かった。力は負けていない。だが……）

　たった一発、武器を合わせただけなのに四肢に受けた衝撃は未だかつてなく、例えるなら１００ｋｍ以上の速度が出ている重い鉄球を全力で撃ち返したかのように響く。《サタナキアの幹細胞》によりダメージを受けた骨や筋組織は高速再生されるとはいえ精神を削られる。それにこのバフスキルは長く持たず、そうなれば俺の体も自壊するだろう。

　一気に決着をつけるしかない。

「んぬぉおおおオラアアァァ！！！」

「グオォオオオォオオ！！」

　超至近距離の乱打の応酬だ。

　互いの武器が互いを食いちぎろうと暴風を生み出しながら振るわれ、ぶつかり合い、耳を覆いたくなるような金属音が響き渡る。攻撃の全てが無慈悲な死に直結する致死の一撃。余りに過剰なまでの力比べは人間の持つ限界を遥かに超えている。

　掠るだけで皮膚が抉れ、受け止めるたびに俺のＨＰが削れ、高速再生を繰り返し、周囲が崩れ……持っている鋼の手斧も徐々に変形していく。

　武器の寿命が思ったより早い。これだけの力を受け続ければ単なる鋼ごときでは耐えられないか。

「華乃！　手斧を投げてくれ！」

「おにぃ！　受け止めて！」

　武器が壊れるのを予測していたのか、妹はすぐさま手斧を滑らせて投げ込む。だが受け取ろうとした隙を逃すはずもなくヴォルゲムートがスキルを発動する。

「《スライスエッジ》」

　短剣、片手剣でのみ発動可能な剣技《スライスエッジ》。振り下ろされた斬撃が突如Ｌ字に曲がる軌道を描く。が、その軌道は必ず右に折れるため、ゲーム時代に何度も見てきた俺にとって避けるのは容易い。

　半身をひねり剣の軌道から体を外して躱し、投げ渡された手斧を拾いながら距離を開ける。

　最後の[ＭＰ回復ポーション（小）]を飲み干す。これでもうＭＰ回復手段は無くなった。

　戦いが始まってまだ十数秒ほどだが、すでに足場となった通路の床は《シャドウステップ》による高速移動でズタズタに破壊され、壁に深い斬撃の跡がいくつも残されている。

　目の前がさらに赤く染まる。

　これはどうやら強化によって耐えきれなくなった毛細血管が破裂し、滴り落ちた血が膨大な《オーラ》により吹き上がり空中分解したもののようだ。命を削って力を得るとはまさにこの状況のこと。

　対して。死を体現したようなドス黒い《オーラ》をまき散らし、俺と妹の命そのものを簒奪しにきた目の前の”化け物”を観察する。

　――そういえば。こんな戦いがしたいと日々願っていたんだっけか。

　別に元居た世界が悪かったというわけではない。まだ拙なかったが仕事にやりがいを感じていた。初めての部下もできてやる気だってあった。それでも、いつかこんな身を焦がすような世界で、凶悪な化け物共と命がけの戦いをしたいと夢見ていた。

（それが今、叶っているじゃないか）

　この絶望的な状況の中、思わず口の端を吊り上げてしまう。俺はとっくにダンジョンエクスプローラークロニクルというゲームに罹患していたようだ――

　だがこんな時間も長くは続くまい。生きるか死ぬか、この先の数分が分かれ道になる。

　俺の血でできた赤黒い《オーラ》が吹き上がる。ヴォルゲムートも呼応するかのように漆黒の《オーラ》を放ちながら互いにゆっくりと間を詰める。

　さぁ。決着を付けようじゃねぇか。

（※１）リジェネ

一定のタイミングで持続的に少量回復する回復魔法のこと。リジェネレイトとも言う。

　骨だけのはずの腕から振り下ろされる、特異の力が乗った斬撃を紙一重で躱し、すれ違いざまに回転しながら加速し渾身の力を乗せて手斧を叩きこむ。それに対しヴォルゲムートは明らかに関節の可動域を無視した動きで上体をずらして回避すると、死角からカウンターを仕掛けてくる。

　目の前で轟音を立て、大岩を砕こうかというような攻撃を何度も躱し、持てる全てを振り絞って致死を狙う。腕を振るうたびに血が流れ蒸発し、骨と臓腑が軋みを上げる。すでに全身の筋組織は断裂と再生を繰り返し、歪に再結合している。

　レベル８でしかないこの体にバフで無理やり身体能力を底上げし、踏み込みだけで石材の床が罅割れるほどのスピードと、振った斧が壁に当たれば砕け散るほどのパワーを出せば無理が出てくるのも当然だ。肉体の強度が強化スキルに全く追いついていない。

　それも全てはコイツと戦い、生き残るための対価。だが、このままではじり貧になるのは確実。

　今は拮抗しているように見えてもあちらはアンデッドのため疲労は無く、逆にこちらは息が上がり無茶な強化ですでにズタボロ。その上、バフスキルのタイムリミットも迫っている。

　しかも……ヴォルゲムートは想像以上に戦い慣れしているようだ。バフのおかげでスピードとパワーは互角まで持っていけたが、俺のフェイントを織り交ぜた斬撃軌道をほぼ全て読みきり、さらには《シャドウステップ》の高速移動を活かして死角からカウンター攻撃を狙ってくる始末。短時間で倒すには困難を極める。

　――ならば。体への負担はデカくなるがカードをもう１枚切ろう。

　今の間合いから半歩引いての乱打戦へ移行。この間合いでは手斧よりリーチの長いファルシオンのほうが有利になるが、回避重視の立ち回りに徹底する。

　両手でなければ受けきれない強い攻撃に注意しながら、左手で魔法陣を先行入力し、死角に逃げつつ再び乱打戦へ。ゲームの時は魔法陣の入力判定が途切れても１秒以内なら継続できる判定だったが、こちらの世界でも同様なのは確認済みだ。

　魔力の流れが少しずつ魔法陣の形になり始めるとさすがに気づいたか、ヴォルゲムートが俺のスキル入力完成を阻止すべく片手剣スキル《サベージストライプ》を発動してくる。

　発動直前に重心を低くして武器を突如水平に構え、横に凪ぐモーションを取る。武器の間合いさえ分かっていれば《サベージストライプ》の軌道と攻撃範囲を読むことは可能。そも、ジョブが【シャドウウォーカー】でスキル所持数が４つなら、このスキルを持っていることも予測済み。

（此方人等そのスキル何千回も見てきてんだよ！）

　ファルシオンの剣先はスキル補正により音速を超え、目視は不可能となるが軌道は分かっている。間合いを再び詰めてスキルの発動直後を両手で受ける。火花が散るがそこで潰すことに成功。《サベージストライプ》を躱すには「飛ぶ」か「しゃがむ」が定石だが、現状の能力ではどちらも不利になり兼ねないので受けにまわった。

　尚も続く斬撃の暴風の中、目まぐるしく立ち位置を入れ替わりながらも魔法陣を少しずつ描きり完成と共に淡い緑色に光輝く。

「いくぜぇ！　……暴れ狂う暴風となれ《エアリアル》！！」

　上級ジョブ【ソードダンサー】のスキル《エアリアル》。空中の、思うところに足場を作るだけの魔法だが、これがあればあらゆる場所で立体的な戦い方を取れるようになり戦術そのものを大幅に変えることができる。だだ単位時間当たりのＭＰ使用量が激しく、今の俺のＭＰ量では持って３０秒が限界だろう。

　平面的な乱打戦から上下左右前後シフトする立体戦術へ。ダンエクの対人戦において《エアリアル》を使った近接戦闘は俺の十八番だ。フェイントを織り交ぜ、全方位から荒々しく手斧を叩きつける。

　視点が目まぐるしく変わるため、どこが上なのか下なのか分からなくなり通常なら混乱してしまうだろうが、足場が自在のためそこは問題では無い。重要なのは狙いを常に見定め死角を取り続け、いかに翻弄するかだ。

　しかし空中でベクトルを切り返すこの戦い方は足に異常な負荷が掛かってしまう。ＭＰの枯渇以前に足がもげそうだ。

（ぐぉ……きつい…が、ついに攻撃が当たったぞ！）

　背後から一撃与えたのを皮切りに、次々に攻撃を喰らいよろめくヴォルゲムート。金属が擦れぶつかり合う不協和音が鳴り響き火花があちこちに飛び散る。防具で守られた骨の部分ですら鉄に近い強度を誇るため、攻撃している鋼の手斧も徐々に変形していく。

（一気に終わらせてやる！！）

　力を振り絞り乱打しながらも斬撃は一定の描線となり、１つ１つマニュアルでモーションをなぞり紡いでいく。すでに元が手斧なのか何なのか分からない歪な鉄の塊となっているが構わない。

「おにぃ…勝ってぇぇ！！」

「これで終いだぁあああああ！　《アガレスブレード》！！！」

「……《エア・ブレイク》」

　\*・・\*・・\*・・\*・・\*・・\*

　――　成海華乃視点　――

　私は小さな頃からおにぃに守られてばっかだった。

　学校で急に倒れた時も、近所の男の子にいじめられたときも、山で遭難したときも。

　守られてばかりの存在では前へ進むおにぃと一緒にいられなくなる。今のままの私では何もできなくなる。

　だから強くなろうと努力した。いつか強くなっておにぃと一緒に歩くことが出来る強い存在になりたかった。

　食べ物の好き嫌いを直して牛乳いっぱい飲んで勉強も頑張るようにした。

　そんな中。おにぃは冒険者学校を受験すると言い出した。恐らく”あの女”の影響だろう。

　何でも冒険者学校というのは偏差値がべらぼうに高く、受験倍率も優に百倍を超え、有名冒険者を多数輩出している超難関校だとか。なのに見事に合格した……してしまった。誇らしくお祝いをしたい気持ちと、どこか遠くにいってしまったという焦りが綯い交ぜになった。

　それなら。私も冒険者学校を受ける。絶対合格して追いかけてみせる。

　その日から自身を追い込んでの猛勉強と猛特訓を始めた。ダンジョンやカラーズっていうトップクランについても沢山調べ勉強した。武術スクールにも通うことにした。

　調べるほどに、勉強するほどに、パパから聞いていた冒険者という概念が果てしなく広がる。私の今までの世界観が如何に小さかったのかが分かった。

　私は冒険者にますます憧れ、勉強とトレーニングに打ち込んだ。

　おにぃは当然のように冒険者学校に合格。入学早々にダンジョンに行くらしい。ダメ元で連れて行ってと言ったらまさかのＯＫ。

　楽しみ！　沢山食べてランニングも増やし、体もすっかり強くなった……と思う。足手まといにはならないはず。

　そして初めてのダンジョン。怖くて危ないところと聞いていたが拍子抜けするほど楽だった。パワーレベリングというのであっという間にレベル７に。レベルが上がると有名冒険者のように驚くほどの力が沸き上がってきた。これならおにぃより強くなれるかも……なんて。

　家に帰っても学校に行ってる時もダンジョンのことばかり考えてしまう。新しい防具も買ってもらえたし、ダンジョンダイブが待ちきれない！　次はゴーレム狩りだ！

　でも突然、絶望をまき散らす魔王が現れた。

　見ただけで心臓を鷲掴みされ握りつぶされるような圧迫感を放つ、恐怖が形となった”敵”。吹き上がる真っ黒の《オーラ》がまるで魔王。これには絶対に勝てないと感覚的に理解させられる。

　初めて死を覚悟した。

　でも死ぬより恐ろしいのは、私のせいでおにぃまでも死んでしまうこと。

　足を斬られなければ。その前にあの三人と組もうなんて言わなければ。津波のように後悔が押し寄せる。

　怖かったけど、声が震えてしまったけど、”逃げて”とちゃんと言えた。

　でもこれで私は死ぬんだなと。……生きるのを諦めることがとても、とても悲しかった。

　そう、思っていたのに。今見ているものは何なのか――

　おにぃが不思議な魔法を唱えると、突如”おどろおどろしい勇者”になった。

　膨張し浮き出た筋肉と血管。血を流し赤黒い《オーラ》を纏う姿から、明らかに無理な力を身に宿しているのが分かってしまう。あんな魔法はどんな映像や本でも見たことが無い。

　心配するなというけれど、どうみても大丈夫なように見えない。

　数秒ほど睨み合った後、すぐに戦闘は始まった。

　血と闇の暴風が縦横無尽に入り乱れ、お城の通路一帯が壊され瓦礫となっていく。

　あの敵は今までのモンスターと次元が違う強さなのは間違いない。テレビでみた”究極の化け物”リッチとどちらが強いのか、というくらいの異質な存在。

　それに対応して戦っているおにぃも異次元。

　目まぐるしく立ち位置を入れ替える高度な超近接戦闘。あまりにも動きが早く、全てを目で追うのは難しい。それでもただ単に斬り合っているのではなく、視線や体の傾き、間合いの詰め方や離し方、武器の動きに無数の虚実を織り交ぜて戦っているのが何となく分かる。

　私も強くなるために武術スクールに通い基礎を学んだ。そして沢山のテレビや本を見て、最前線の冒険者が使っている魔法や戦闘技術を収集して研究し、勉強していたけど……目の前で行われている、互いの消滅を懸けて貪り合う獰猛さと、合理的かつ理知的な近接戦闘技術が綯い交ぜになった超ハイレベルの戦いには驚きを隠せない。こんなのトップクランの映像でも見たことが無い。今まで私が思い描いていた最高の戦闘シーンをあらゆる意味で幾重にも凌駕している戦いが行われていた。

　戦闘が開始されてから未だ１分経つかどうかなのに、すでに通路や天井にはいくつもの大穴が空いている。粉塵が飛び散っていて視界が悪く、不安定な足場の中でも動き回り、地響きを響かせながら戦闘を続けている。

　連撃の最中に空間を切り裂くようなとてつもない威力を秘めたウェポンスキルが飛び交う。ジリジリとおにぃが押されかけたと思った途端、新たな魔法で加速し、爆発的な音を立ててゴム鞠のように上下左右に飛び回る。

　ようやく初めての一撃が重い金属音と共に入ると、次々にクリーンヒットが成功する。さらに追い打ちで何らかのスキルを発動するのだろうか、おにぃは一度空中を蹴って上昇した後に反転し、独特な構えから血の《オーラ》を爆発させ敵に目掛けて下降する。

　敵は火花を散らし被弾しながらも、漆黒の《オーラ》を増幅させ上空を睨む。おにぃの攻撃にウェポンスキルを合わせてようとしている！？

「おにぃ！　勝ってぇぇ！！」

　これで決着がつく。思わず声が出てしまう。

「これで終いだぁあああああ！　《アガレスブレード》！！！」

「《エアブレイク》」

　２つのスキルがぶつかり閃光と轟音が走る。蒸発現象と爆風で舞い上がった土煙により、どうなったのか良く見えない……

　徐々に光りが収まると……元は石造りの床だった地面が縦に抉れて深い溝が出来ている。あれはおにぃが放ったウェポンスキルの斬撃軌道だ。

　抉れた地面の奥底を見ると、バラバラに砕けた敵が丁度魔石となっているところだった。見たことのないような大きさの綺麗な魔石だ。

　おにぃはどこかと探そうとすると、突然酷い眩暈に襲われ胸が苦しくなる。

「ぐっ……うぁ……私……何にもしてないのにレベルアップするんだ」

　感覚からしてレベル上昇幅は１や２程度ではない。５階でのパワーレベリングで一気にレベルが上がったときよりも遥かに強いレベルアップ酔いと全能感を感じた。ついでに《スキル枠＋３》も手に入った。

　おにぃは”変わり果てた姿”で地面にうつ伏せで倒れていた。

　右腕の上腕から先が無くなっていたものの回復スキルが発動しているようで、シューシューと音を立てながらゆっくりと骨が伸び、その周りに筋組織が紡がれていく。このスキルは一体何だろうか。私の知っているスキルはこんな異常な回復の仕方はしないはずだけど。

　おにぃも大きくレベルアップしたのか、再生スキルの効果も一段と加速して働いている。

「……おにぃ、大丈夫？」

「はぁっはぁ……大丈夫だ。……はぁ……ちと足がヤバいが……一度帰るよりは、１０階に行ったほうがいいかもな……はぁ……ＭＰ切れたからちょい……」

　そう言いながらおにぃはゆっくりと体をひっくり返して仰向けになり、目を瞑って呼吸を整えている。

　いっぱい聞きたいことがあるけど、今はそっとしておいたほうがいいみたい。

「……ありがと……おにぃ」

　――　早瀬カヲル視点　――

　ユウマをも上回る刈谷のハイレベルな戦闘技術に狼狽し、Ｄクラスからの悪意あるヤジが私の心を痛めつける。

　そしてついに大剣の一撃がユウマの脇腹に決まり、思わず目を塞いだ。

　信じていたものが徐々に罅割れ砕け散る。必死にかき集めて再構築しようとしても端から次々に零れ落ちていくような感覚。私達が自信をもって送り出した友が、無惨にも敗れてしまった。

　やはり私達Ｅクラスは彼らの言うように劣等生なのか。あれ程、血の滲むような努力をしても尚、勝てないというのはそういうことだったのか。この学校で得られる夢なんてものは最初から無く、全て幻だったのか――

　あの日から授業も上の空だ。昨夜もよく寝付けなかった。日課となっていたダンジョンダイブも朝の訓練も今は休止している。

　今日の授業も終わり、重い息を吐きながらゆっくりと帰りの支度をしているとナオトが静かに話しかけてきた。

「……少し、話がある」

　いつもの柔和な雰囲気ではないことから何か重要な話なのだろう。ここではＤクラスの輩がいるので廊下に出ることにする。窓から見える空は私の心を反映したのか鉛色で今にも泣きだしそうだ。

「カヲル。僕達が諦めてどうする」

　諦めるとは何をだろうか……などと分かっているのに無意識に逃げの考えが思い浮かぶ。けれど優しくも力強いナオトの視線が私の目の奥を捉えて逃げることを許さない。

「僕達は歩みを止めてはならない。このクラスのためにも。何よりも僕達自身ためにも」

　私達自身のため。そうはいっても３年間というアドバンテージを覆すことなんて出来るのだろうか。思い浮かぶのはあのハイレベルな戦闘。ユウマなら追いつけるかもしれない。でも私はいつあのレベルに辿り着けるのか。そんな自信などもう……

「そう思わせることが奴らの狙いんだ」

　悪意を向けられていることは知っている。部活動勧誘式でも肌で感じた。外部生なんて勧誘も歓迎もする訳がないということも。

「僕達が入学した初日に、ピンポイントでユウマを攻撃してきたことに疑問を持つべきだったんだ」

　その悪意の攻撃は周到に計画されたものだという。

　ユウマは外部生として最優秀成績で入学したＥクラスの顔とも呼べる生徒。同時にクラスそのものを引っ張っていくカリスマ的存在でもある。その彼に対し訳の分からぬ言い掛かりを付けてきた刈谷とＤクラス一派。

　Ｄクラスの彼らも中学時代の３年間遊んでいたわけではない。国が認めるほどの能力を持ち、必死でレベルを上げてきたはず。そんな彼らがダンジョン経験皆無のユウマにピンポイントで攻撃してきた……か。確かに最初から仕組まれていたと考えるのが妥当だ。

「敵は予想以上に大きいかもしれない。だからといって悪意に負けてはいけない。僕らが前に進むために歩みを止めてはいけないんだ」

　これを企んだ敵とその背後は想像以上に巨大かもしれない。だけど無条件に夢を諦めるなど真っ平御免だと身振り手振りで力説する。

　私も入学前から毎日竹刀を振り、走り、寝る前に学業に勤しみ、入学後は毎日ダンジョンに潜っていた。その歩みを数日間とはいえ止めてしまっていた。やる気が無かった、というよりも逃げていた。

「カヲル。君の夢は何だい？　追いかけているものはないのか？」

　夢……そう、幼少の時に父から聞いた御伽噺に出てくる伝説の冒険者に憧れていた。常識を超えた剣術を使いこなし、深淵なる魔術を極め、凶悪なモンスターを相手に縦横無尽に戦い、誰も辿り着いたことのない未知の階層を攻略する勇敢なる――勇者の物語。

　寝る前には何度もその話をしてくれと強請ったものだ。

　そんな存在は御伽噺の中だけしかないかもしれないけれど、今も夢を叶えようとダンジョンの最前線で頑張っている攻略クランもある。私もそんな冒険者達と背中を預け、共に最前線を攻略したいと夢見て竹刀を振るってきたのだ。そのために冒険者学校に入学したのだけど……

「入学してたかが１ヶ月と少し。不条理で悪意のある攻撃をされたからといって、そんなことで夢を諦め、折れていいのかい？　僕は嫌だね。絶対に諦めない」

　私だって嫌だ。でも。

「だから……力を貸してくれないか。前へ進むために」

　ナオトが頭を下げて力を貸してくれと頼みこんでくる。

　私はユウマの役に立てなかった。友をあんな目に会わせて逃げるような女だ。もう横に並び立つ資格はないのかもしれない。それでも――

「……私でも……こんな非力な私でも力になれるのだろうか……？」

　鉛色の空から雨が零れはじめた。

　\*・・\*・・\*・・\*・・\*・・\*

「なるほど。クラス対抗戦か」

「時間はそれほどない。あと１ヶ月で僕たちがどこまで出来るかが勝負だ」

　六月にあるというクラス対抗戦。１年生の全クラスが参加し、クラスの順位ごとに成績が加算される最初の試金石ともいうべき試験だ。

「去年の対抗戦の詳細は調べてきた」

　プリントアウトしてきた紙を渡される。すでに情報をある程度集め、纏め上げているとはナオトの手際の良さには舌を巻く。

「ふむ、これは……グループ作りも重要になってくるのか」

　クラス対抗戦は１週間かけてダンジョン内で行う。去年に今の２年生がやった種目は「指定ポイント到達」「指定モンスター討伐」「到達深度」「指定クエスト」「トータル魔石量」の５つ。これらは恐らく今年も同じだろう。

　一見したところ、やはり高レベルが有利になりそうな種目ばかり。無駄な戦闘を避けられる隠密系スキル持ちも活躍することだろう。そしてレベルが低く、ジョブチェンジ済みも少ないＥクラスはやはり厳しい戦いになりそうだ。

　これら５つの種目にクラスメイトをどう振り分けるのか。Ｅクラスのダンジョンダイブにおいて先頭を走っている私達は集めたほうがいいのか、分けたほうがいいのか。

「どう振り分けるにしても、Ｅクラスの戦力底上げは必ずしておきたい」

　一人足手まといがいればそのグループ全体の動きが鈍くなるというのもあるが、レベルが低いほどレベルも上げやすく練習の効果も出やすい。ここは積極的に戦力の底上げを狙うべきだと端末のデータベースを見ながらナオトが言う。

　私もクラスメイトの現在レベルを見てみる……この１ヶ月でＥクラスのほとんどがレベル３に到達。レベル４が１０人程度、レベル５以上は私とナオト、ユウマ、サクラコ。そして磨島君の合わせて５人、つまりジョブチェンジ済みも未だ５人しかいないことになる。

　レベル５になれば【ニュービー】のジョブレベルも７となり《簡易鑑定》を覚えるので気兼ねなく基本ジョブに移行できる。つまりレベル５になったかどうかはジョブチェンジしているかどうかのラインになるのだ。

　なんとか試験までにジョブチェンジ済みを増やしたいところではあるが……

「一番レベルの低いのは……レベル２の久我さんね」

　登録されているクラス全員のレベル一覧を見る。一人だけレベル２の生徒がいたので詳細項目をタップする。久我琴音（くがことね）、短剣と弓使いで【アーチャー】志望と表示されている。

　クラスの後ろの方に座っているショートボブの女生徒を思い出す。いつも一人でいて誰かと話しているところをほとんどみたことがない。口数も少なく影の薄い生徒だ。未だレベル２ということは、もしかしたら誰とも組めていないのかもしれない。

　一応、颯太も見てみたがレベル３になっているのでダイブ自体はそれなりに頑張っている模様。いや……もしかしたら大宮さん達に手伝ってもらったのかもしれない。

（久我さんと颯太は要注意か）

　この二人はクラスの足を引っ張る可能性がある。どう手を打つべきだろうか。

「戦力底上げの手段としてダイブ能力の低いクラスメイトを集めてパワーレベリングをするのもいいが、それに依存してしまうのも怖い。最初は練習会を開いてクラスメイトの長所を伸ばす方向で考えている」

　パワーレベリング。キャリーされる側は楽にレベルアップ出来るが、それに依存すればその先が伸びない。きちんと工夫して攻略できるよう手助け程度に留めるのがベストだろう。私達が知っているダンジョン情報を共有しつつ、剣術、魔術、戦術を教え合って、各自パーティーが攻略しやすいようにすることを目指して行くようだ。

　けれど、魔術や剣術などは本来私達が指導するより知識が豊富で施設もある部活に入って伸ばすほうが良いに決まっている。それなのにＤクラスとの悶着により現在は入れないままとなっている。ナオトは何か考えがあるのだろうか。

「部活についてはどうするの？」

「それも難しい問題だ」

　ナオトは眉間を揉みながら次から次に湧いて出てくる難題に頭を悩ませる。

「現状のまま打開策が無いならＥクラスの先輩方のいる部活に入るのがいいと思っている」

「でもＤクラスからの嫌がらせは激しさを増すわ……」

　刈谷が例の決闘騒ぎ以降、Ｅクラスの先輩方が作った部活には入るなと強い圧力をかけている。それでも入るとすればＤクラスが乗り込んでくる可能性がある。

「そうだ。それについては大宮が生徒会に立会いを求めている。駄目かもしれないが結果を待ってから彼女たちの意見を加え、再考してみよう」

　ひょこひょこと動く小柄で元気な大宮さん。彼女も何か動いているらしいが、Ｅクラスの現状を放置しておくような生徒会が果たして話を聞いてくれるのか……とはいえ、打つ手もそれ程ない状況では僅かな可能性だとしても待ってみる価値はあるかもしれない。

「あとクラス対抗戦で考えることは……」

「妨害対策とか……魔石を恐喝してきたり」

　対抗戦の間は魔石で食事や生活・生理用品と交換するルールを採用している。ダンジョン内では文字通り生命線となるだろう。実際の魔石交換レートがどれくらいなのかは分からないが、魔石を奪われれば棄権に追い込まれる可能性が出てくる。

　一応ルールとしてそういった強奪は禁止されているものの、ダンジョン内にいる全ての生徒を監視することは不可能。所持している魔石は分散したり隠したりするなど対策を講じておいたほうがいいだろう。

「ふむ。しかし対策するにも去年の情報をもう少し精査してからのほうがいいかもしれん。勉強会のほうは参加して欲しい人は僕の方でリストアップしておこう」

「サクラコとユウマにはもう？」

　あの決闘以降、ユウマとサクラコも精神的に参っているはず。これからも彼らとは背中を預け合える仲でありたいのだけれど……

「いや、まだだ。一緒に説得して欲しい」

「……もちろんだ。それとナオト」

　私が、私達が前に進むため何が出来るのか。それはゆっくり考えていくとして。とにかく彼らを救いに行こう。自信を折られ、冷たい沼に沈み込んでいた私を救ってくれたように。

　でもその前に。

「なんだ？」

「……ありがとう」

　数日ぶりに、笑えたような気がした。

「それじゃあ、最後にあのスケルトンが撃ったスキルは対空スキルなんだ」

「空中にいる対象に当てれば高確率でクリティカルダメージになる対空カウンタースキルだな」

　あの戦いの後、体力とＭＰが枯渇し２時間ほど気絶したように寝てしまった。そして今現在は妹の背に負ぶさりながら会話をしている。足に上手く力が入らないので背負ってもらっているのだ。

　そう。下手すると小学生にも見えなくもない妹に。豊満ボディのはずの俺を。

　ダイエットに励んでから１ヶ月と少し。最近では入学式に着ていたズボンに余裕が出てきていた。このままいけば半年後くらいには８０ｋｇくらいまで体重が減らせられるのではと期待を抱いて頑張っていたのだが――あの骨との戦いの後、疲れて寝て起きたら若干細くなっていたのだ。

　今まで極度に太っていたので標準の細さというものを忘れていたけど、腕や腰回りを確認してみた感じではデブというよりぽっちゃりレベルまで体重が落ちているのではなかろうか。おかげで着ている服や防具が伸び切っているようにダボダボになっていた。今はベルトなど要所で締め直している。

　もちろん背負っていられるのは俺が痩せたという理由だけでなく、妹が大幅にレベルアップしたというのもある。何と片手で数十ｋｇの岩をヒョイと持ち上げられるほど肉体強化されていたのだ。レベル上昇幅は１や２ではないことが分かる。

　とはいえ太った男子高校生が、小柄な女の子に背負われているのはシュールに見えるだろう。オラ少しだけ恥ずかしい……

　しかしこの足の不調……試しに自分を《簡易鑑定》してみたら、移動速度低下とＨＰ上限低下の状態異常が掛かっていた。強化魔法による無理な負荷と再生スキルの繰り返しにより、足の筋肉がおかしな方向に回復してしまったのが原因だろう。所々麻痺していて思うように動かない。

　ちゃんと治そうと冒険者ギルドでの治療も考えたが、多額の費用が掛かってしまう。学校にも【プリースト】の先生はいるが、こちらで治すなら確実に鑑定されてしまうだろう。大幅にレベルアップしている現状を知られるのはまずい。

　そういった理由から家に帰らず、そのまま１０階の隠しストア「オババの店」に行って治そうというわけだ。

　腰にはファルシオンがぶら下がっている。あの骨を倒したときに魔石と共にドロップしたので有難く頂戴した。また城主の間にあった宝箱はひとりでに開いており、中には銀のチェーンで繋がれた淡い水色の宝石のペンダントが１個だけ入っていた。

　ファルシオンもペンダントも何らかのマジックアイテムなのは確かだが《簡易鑑定》では判別できなかった。恐らく中層レベルのアイテムなのだろう。ただどちらもアンデッドが持って守っていただけに呪い装備の可能性がある。剣は鞘から抜かず、ペンダントも装備せずカバンに入れたままだ。こうすれば剣も装飾品も装備したという判定では無くなるため呪いは発動しない。

　あれやこれやと背負われながら考えていると、妹はヴォルゲムートとの戦闘が気になるようで矢継ぎ早に質問を浴びせてくる。

「最後に使ったスキルはなに？　すんごい威力だったんだけど……」

「あぁ、《アガレスブレード》か」

　最上級ジョブ【剣聖】が覚える片手武器、素手スキル。マニュアル発動でも簡単なモーションで発動することができ、発動までの前兆が読みにくく発動後の隙も少ないという優秀なウェポンスキルなのだ。

　特筆すべきなのは素手でも発動可能という点。片手武器で発動したときより威力は下がるが、剣と格闘を織り交ぜた戦い方ができるので対人戦用のスキルとしても人気が高い。

　俺はゲーム時代に覚えていた幾つものウェポンスキルを使うことができるという“チート”を持っているのだが、ＳＴＲが低く武器も弱い状態で、まともにダメージを与えることができるスキルはほとんど無かった。

　そんな中《アガレスブレード》はＳＴＲ比例ダメージに加えて固定ダメージも乗るため、低レベルの俺でも相応のダメージが与えられる唯一の攻撃スキルだったわけだ。

　……とはいえ、最上級ジョブの高威力スキルを低レベルの俺がまともに発動するとなれば肉体が耐えられるわけもなく、代償として右腕が根元から吹っ飛んでしまった。まぁそうなるなとは何となく分かっていたが。

「そもそもだけど。何であんないっぱいスキル使えたの？　最初の強化魔法も何だかおかしな発動方法だったよね。というかあの強化魔法も一体何なの？」

　そりゃ色々と気になるよなぁ。さて、なんて説明したらいいのか。

「……今のお前にはまだ早い」

「ちょっと！　師匠みたいな言い方しないでよっ！」

　妹は半年ほど前から武術スクールに通い始めたのだが、そこの先生――師匠と呼べと言われてるらしい――がまだ若い癖に師匠ムーブを強要してきてウザいとのこと。伸びた顎鬚と肩の部分を破いて取ったような胴着もダサいと何度か愚痴をこぼしていた。結構上位の冒険者らしいが、果たして。

「まぁ全てを話してもいいが、ダンジョン知識は下手に知れば危険が伴う。そこらの冒険者から自分の身を守れる程度に強くなったら教えてやる」

「うーん……わかった……」

　なんだ、やけに聞き分けがいいな。

　危険なゲーム知識はともかく、マニュアル発動については早めに教えておくべきか。今後もイレギュラーなトラブルが起こらないとも限らないし、ダンジョン外でもダンエクのシナリオにあるような危険なイベントに遭遇するかもしれない。身を守る術は多く持たせておきたい。

　そんな雑談をしながら７階の追加ＭＡＰから魔狼の遠吠えが聞こえる通常エリアのＭＡＰへ戻り、そこからメインストリートを辿って８階に到着。

　８階は７階までと打って変わって、再び洞窟ＭＡＰとなっている。ただ天井も横幅も２０～３０ｍほどあり今までの洞窟ＭＡＰより広く、そこまでの閉塞感はない。入り口広間の冒険者は７階と比べてさらに少なくなっている。施設も無人の販売機とベンチが何台かある程度で、まるで寂れた田舎のパーキングエリアのようだ。

「トイレいってくるから待っててね」

　俺をベンチに下ろすとトイレを指差して言う。別に歩けないわけではないからそこまで過保護にする必要はないのだけども。

「んじゃそこの自販で何か買ってくるわ」

　自販までの２０ｍほどの距離を確かめるように歩いてみる。普通に歩くことはできるし痛みもないが、足の感覚が所々麻痺して薄れているのが分かる。ふくらはぎを見てみれば、筋肉と血管がボコボコに浮き出ていた。

　これでも戦えないこともないが、走力とか瞬発力とか相当落ちているはず。戦闘は極力避けていったほうがいいだろう。

「まったく……無理するもんじゃないな。仕方がなかったとはいえ」

　吹き飛んだ右腕はしっかり正常に――ちょっぴり痩せた状態で――生えているが、左腕はなんだか皮膚と筋組織が歪に修復されている。そして無性に腹が減る。これは《大食漢》のせいなのか強力な再生スキルを行使した副作用なのか、あるいは両方か。

　目の前には何処かで見たような古めかしい自動販売機がいくつかあった。何を売っているのか近寄ってみると。

（うどんか。腹減ったし食っていくか……って。高すぎだろうが！）

　狸うどんごときが９８０円だと？　常識を遥かに超える驚きの値段にじっくり２０秒ほど悩んだが、この猛烈な空腹感には抗い難い。コインを入れボタンを押すと中身の入った熱々の容器が勢いよく飛び出してくる。

「おい、こぼれてるじゃねーか……熱っ」

　愚痴をこぼしながら息を吹きかけ食べようとすると、トイレから出てきた妹が同じものが欲しいと強請ってきたので渋々了承する。こんなのが２つで１９６０円とか世も末だぜ……と思ったが、空腹は最高のスパイスというのは本当のようで、安っぽい狸うどんでも最高に美味かった。汁まで飲みきり、発泡スチロールの器を専用のゴミ箱に投げ込む。

「１０階まで行くのに、おにぃを背負ってて大丈夫かな。モンスターいっぱいいるんでしょ？」

「大丈夫だとは思うが、一度８階のモンスターと戦ってみて今の実力を調べたほうが良いか」

　１０階にある隠しストアにいくには中ボスがいる部屋を通らないといけないので最悪戦闘になる可能性がある。その前にこの階でどれくらい強くなったか試したほうが良いだろう。ヴォルゲムートを倒して実際どれくらいレベルアップしたのかも分からないからだ。

　８階にでるモンスターはオークジェネラル、ジャイアントバット、オークアーチャー、オークソルジャーの４種。

　オークジェネラルはモンスターレベル９。モンスターレベル８のオークソルジャーやオークアーチャーを複数体連れていることがあるため戦う際は背後の数を確認する必要がある。

　ジャイアントバットも厄介な敵だ。攻撃力は大したことはないが空中を飛んでいるため、遠隔攻撃の手段が無いなら非常に面倒。無視しようとしても執拗にこちらを追いかけてくるので倒さないでいるのも難しい。この階で狩りをするなら遠距離攻撃持ちが欲しい所だが――

「倒すなら攻撃してきた瞬間をカウンターで迎撃するやり方が一般的だな」

「ふーん……あ。上のアレ、ジャイアントバットじゃない？」

　９階へ続くメインストリートを背負われながら移動していると体長５０ｃｍほどの何かが天井に張り付いているのが見える。あれくらいの蝙蝠なら翼を広げれば１．５ｍほどになるだろうか。

「こっちに気づいてないな。寝てるのか」

「じゃぁ、そこの石でも投げてみるね」

　ジャイアントバットがいる真下付近まで近づく。天井までは２０ｍくらいか。華乃が落ちている小石を勢いよく投げる。

　ピシャンッ！！　と投げた小石が風切り音を立てながらジャイアントバットの１ｍ横にぶち当たり、粉々に砕ける。あの感じからして時速２００ｋｍ近くは出ていたのではなかろうか。

　突然の音に驚いたジャイアントバットは一度ふわりと飛びながら周囲を見まわし、こちらを見つけると翼を畳み、防具で守られていない妹の首元を狙って滑降してきた。

「よーし、ばっちこーい！」

　迎え撃とうと小太刀を構えるが……うーむ。

　ジャイアントバットの滑空速度は時速１００ｋｍほどで、こちらに向かってきているのがよく見える。それは妹も同様のようで、噛みついてくる瞬間に斬りこむのではなく襟首をつかんで見せた。キィキィと鳴きながらジタバタするジャイアントバット。可愛いのかもと期待して顔を観察してみれば、思ったより獰猛な顔つきをしていたので躊躇なく小太刀でトドメを刺し魔石化させる。華乃ちゃん……

「こっちにくるのがすっごくよく見えたんだけど。これってレベル上がったせいなのかな」

「レベルがあがると力や魔力だけじゃなく、反応速度や動体視力も上がるからな」

　今ので動体視力が相当上がっているのは分かった。ジャイアントバットくらいなら数匹絡まれても何の問題も無く勝てそうだ。

　しかし今のだけでは俺達の戦闘能力がどの程度なのかよく分からない。もう１回くらい戦っておくとしよう。

　ジャイアントバットとの戦闘から更に２ｋｍほど進んだところ、前方に黒い靄が産まれた。オークアーチャーだ。

「普通に倒してみ」

「わかったー」

　俺を背中から降ろし小太刀を構える妹。先程のジャイアントバットよりは参考になることを期待しよう。

　オークアーチャーは無防備状態から回復するとすぐにこちらに気づき、弓を構える。最初に機動力を削ろうと判断したのだろう、小走りで近寄ってくる妹の足を狙って矢を放つ。

　オークアーチャーの弓は木の枝をそのまま利用したような原始的な丸木弓だが、弓の長さは２ｍを超えるほど巨大。ミシミシと弦の撓る音から、弓矢を放つだけでもかなりのパワーが必要なことが分かる。放たれた弓矢の音もまるでバリスタで撃ったような衝撃音。モンスターレベル８は伊達ではないのだ。

　だが――

　華乃は難なく矢じり部分を小太刀で叩き落とすと勢いを殺さず距離を詰め、オークアーチャーの首から肩口までを一振り。オークアーチャーは地面に倒れ伏す間もなく魔石となった。その際、小太刀に過剰な力が掛かったようで少し歪んでしまったようだ。

「あぁっ、私の小太刀！　ちょっと曲がっちゃったんだけどっ」

「……この感じだとレベル１５くらいまで上がっているのか？」

　あの小太刀は元々細長い形状なので曲がりやすいといえ、鋼一枚モノの頑丈な作りだ。レベル８だったときの頃を考えれば多少雑に扱ったところで曲がるような強度ではなかったはず。膂力や握力が随分と上がっていることが窺える。あとソレ、お前のじゃなくて学校のレンタル品なんだけど……はぁ、弁償どうすっかな……

「武器は新調しないといけないな。現金はあまり持ってないからオババの店で良いものが売っていればいいんだが」

「魔石かダンジョン通貨で買えるんだっけ」

　ゲームだったときはプレイヤーが売ったアイテムが店に並ぶことがあったので、市場で過剰に余ったマジックアイテムやレア素材製の武器が安く売っていた。こちらの世界ではプレイヤーがいないから、そういったモノは売っていないだろう。だが逆に買いやすくなるアイテムもあるはず。

「戦闘能力は十分なようだし、気兼ねなく１０階へ向かうとするか」

「それじゃ走るからしっかり捕まっててねっ」

　再び妹の背中に乗せてもらい、人もまばらな道を再び走って次の階を目指す。

　揺れを少なくするためか小走りのように走ってるものの、結構な速度……時速４０ｋｍくらいは出ている。速いだけではなく俺を負ぶさりながら走っているので驚いて二度見する冒険者もいた。目立ちすぎるのもアレなので、もう少し速度落としてもいいんじゃないかな、華乃ちゃんや。

「うわぁ、結構速度でるんだねっ。なんか面白い！」

「ちゃんと前見て走れよ」

　少なくなったとはいえメインストリートには通行人がまばらにいる。ぶつかったら相手が大怪我してしまうじゃないか。

　\*・・\*・・\*・・\*・・\*・・\*

　さらに数ｋｍ走ったところで９階に到着。

　２０分近く走り続けたのでさぞ疲れただろうと休憩を提案しかけたが、妹の息がそれほど上がっていなかったので休憩は挟まず、そのまま１０階を目指すことにする。

　１０階のモンスターと戦える冒険者は統計によれば全体の一割もおらず、ここ９階の入り口広間に目を向けてみても冒険者はちらほらとしか見えない。そしてどの冒険者も基本ジョブにジョブチェンジ済みなのだろう、装備が【ファイター】【キャスター】【シーフ】用になっていて誰がどのジョブだか分かりやすい。ざっと見た感じでは軽鎧に片手剣や両手剣を装備した【ファイター】が多いようだ。

　ここまで来るためには、それなりの装備品を揃える”資金”と、モンスターを狩り続けレベルを上げるための”時間”、そしてパーティーが組めるだけの”仲間”が必要となる。

　一般人にとってその３つを全て揃えるのは厳しい条件。大抵は背後にスポンサーや冒険者クランなどの組織がいたり、冒険者学校関係者だったり、金持ちであったりする。元プレイヤーならゲーム知識だけで来られるので関係ないが。

「それで、９階には何がでるの～？」

「９階も８階と同様にオークと蝙蝠がメインだが、トロールも出るぞ」

　トロール。３ｍに迫る身長に毛むくじゃらの巨人でモンスターレベルは９。武器は持っておらず素手攻撃のみだが、怪力なので攻撃はできるだけ回避して戦うほうがいいだろう。掴まれでもしたら非常に危険だ。また再生スキル持ちのため長期戦になりやすい。そうなると他のモンスターとリンクしやすくなるので逃げたほうがいいだろう。

「ふーん。でも今なら普通に勝てちゃいそう」

「エンカウントしたならともかく、こちらから仕掛けて戦うのは後だ。武器も今の俺達の全力には耐えられないほど貧弱だし、俺も万全じゃない」

「……うん」

　遠くのほうでパーティーが戦っているのを横目に、ぼちぼちと１０階へ移動を開始する。

「ねぇ、あそこ。地面が不自然に盛り上がってるよ？」

「未発動のトラップだな。落ちたら上まで登るのが面倒だからあんな感じのは避けていってくれ」

　これまでメインストリートにあるトラップは発動済みばかりだったが、この階くらいから冒険者も少ないため、こういった未発動のトラップがちょくちょくでてくる。

　１０階くらいまでのトラップは見ただけで何かあると分かるので注意していれば回避が十分可能だ。これが２０階を超えてくるとぱっと見では分からないものが出てくるため、パーティーに一人はトラップ検知のスキル持ちが必要となってくる。

　いくつかのパーティーを抜き去りさらに走り続ける。途中、オークジェネラルがいたものの、周りに冒険者がいなかったためそのまま駆け抜けた。

　そしてようやく目標の階に到達する。

　\*・・\*・・\*・・\*・・\*・・\*

　――１０階。

　この階の到達は一つの目標だったため感無量……とかは全くない。そもそもこんなに急いで１０階に向かう予定は無かった。それもこれも全てあの骨とソレルのアホ共のせい。特にソレルには華乃を攻撃した分も含め、後できっちり報復せねばなるまい。

　思い出したことで少しイラつきながら周囲を眺める。

　１０階入り口広場。ここからはしばらく迷路状の人工的なＭＡＰが続くことになる。

　壁は一面石材で出来ており、床も全て石畳が敷かれている。天井は薄青色で青空のようにも見えるため洞窟ＭＡＰと比べると大分明るく、開放感があってよろしい。城下町の裏路地を歩いているかのような気分だ。

「店があるんだねぇ。あ、宿泊施設もあるよ！」

　広場の片隅にはいくつかの店が出店しており、冒険者ギルドの職員が詰めている施設などもある。反対側には老舗旅館のような和風の宿が建っている。簡単な食事も出来るようで、フロントでは何パーティーかが寛いで談笑していた。

　ダンジョン４階にもレジャー目的の宿泊施設があったが、１０階の宿は４階の宿と違って本格的なダンジョンダイブ目的で止まる客が多いようだ。

　ゲートを使わなければ、地上へ帰るにも、逆に外から来るとしても半日以上時間が掛かる。この先を狩場とする冒険者にとっては１０階で一泊するのが丁度いい距離なのだ。

　普通の冒険者は宿泊代を節約するために簡易テントを持ち込んで広間で野宿するが、高位冒険者や貴族、士族などの上流階級はプライドもあるのか野宿をできるだけ回避したがる。そういった理由でもこの階の宿泊施設は需要が出ているのだろう。

（まぁ、ゲートを使える俺たちは泊まる必要はないけどな）

　ここからオババの店に行くには１１階へのメインストリートとは真逆に進むことになる。そちらの方向に冒険者が行くことは少なく、モンスターも普通に徘徊していることだろう。戦闘に備えて少し休憩していったほうがいいかもしれない。

「そんじゃちょっと休憩するか。トイレ行ってくるわ」

「私も行ってくる～。あ、お腹も空くかもしれないし持ち帰りできるもの何か頼もうよっ」

　ちらっと露店を見れば”焼きそば１０８０円”という驚異の値札が見えた。ここまでの輸送中に戦闘になる可能性は十分にあり、輸送する人も限られてるから仕方が無いのかもしれないが……流石に焼きそばで１０００円超えはなぁ。もしかしてこの先はもっと高くなるのか？

　暗鬱になりながらトイレを済ませて出てくると、案の定、あの焼きそばを頼もうとする我が妹。え～と、金そんな持って来たかな。

「おっちゃ～ん、焼きそば２つ頂戴♪」

「あいよ～。嬢ちゃん可愛いから少し多めにしておくぜ」

「ありがとぉ～♪」

　手渡された焼きそばを見ると確かに他のより多めなのかもしれないが、具がほとんど入っていない。ケチケチすんなよおっちゃん……

　焼きそばが入ったパックを紙で包んでリュックにしまい、広場をひとしきり見た後、西の方角にある隠しストアを目指す。隠しストアというだけあって、通常では入れないエリアにある。

「ダンジョン通貨を壁にはめるだけでいいの？」

「そう、銅貨な。ダンジョン通貨はこの階にでる中ボスを倒せば一定確率で落とす。俺たちはオークロード倒してすでに何枚か持ってるから倒す必要はないぞ」

「えぇ～じゃあ後で戦いに来よう」

　華乃はここまで俺を背負って１時間以上走り続けているのに、ほとんど疲れているようには見えない。むしろモンスターを倒したくてうずうずしている様子。肉体強化が予想以上に効いているせいだろう。

　俺も大幅なレベルアップにより力が溢れている感覚はあるけれど、これは疲れを通り越してハイテンションになっているだけな気がする。

　だが目的地はすぐそこ。状態異常回復だけは先に済ませておきたいので家に帰って休むのは後回しだ。気を抜かずもう少しだけ頑張ろう。

　石畳を踏みしめ、隠しエリアに向けて足を進める。

　通路が真っすぐのため遠くまで見えるのはいいが、見渡しの悪い十字路も多く、角待ちしているモンスターには気を付けないといけない。狩りをしている冒険者がほぼいないためエンカウントが多くなるのを見越して俺も歩いての移動だ。

「１０階はどんなのがでるの～？」

　足の調子を確かめながら歩いていると、妹が隣で小太刀をクルクルと回転させながらモンスター情報を聞いてくる。

「トロールやオークロードみたいな大型亜人モンスターがメインだな。中ボスはミノタウロスだ」

「ミノタウロス～？　オークロードはもう普通に倒せるのかな……」

　オークロードについては５階でのトレインで見たときの凶悪な姿が記憶に新しいが、今の俺たちはそれ以上の力を持っているはず。ただ急激にレベルを上げたため強くなった実感が湧かないのだ。

　この階は亜人が多いので５階で拾った亜人特効アイテム[オークロードの紋章]を妹の胸に装着させている。見た目は豚のマークの可愛いバッチだが、亜人に対して攻撃ダメージ１０％上昇、被ダメージ１０％減少とそれなりに強力な効果がある。５階でポップするオークロードしか落とさないため、橋落としを独占できるならもう何個か欲しいところだ。

　そんなことを考えつつ何番目かの十字路に差し掛かったとき左方向からベタンベタンという音が、微かな振動と共に聞こえた。トロールかな。

　音がする方の角からこっそり覗くと、のっそのっそと歩くトロールが見える。３ｍ弱ほどの巨体で襤褸切れを纏い、髪はボッサボサ、毛むくじゃらの筋肉質。アクティブモンスターだが五感は鈍いため、目の前に出でもしない限り襲われることは無い。

「（どうするのっ。戦う？）」

「（いや、通り過ぎるのを待つぞ）」

　トロール相手に短剣や小太刀のような刃渡りの小さい武器で攻撃しても、急所以外では分厚い筋肉や脂肪に阻まれることがある。短い時間で倒すなら攻撃力または貫通力の高いスキルを持つか、それなりの大きさの武器が欲しいところ。現状では無理に戦う必要はない。

　ということで少し後退してトロールが通り過ぎるのを待ち、再び隠しエリアを目指して足を進める。

　途中何度かトラップを避けてトロールを数体やり過ごし西へ１ｋｍほど進むと、目の前の一本道をオークロードが塞いでいた。動く様子は見られない。

　オーク系は足が遅いという弱点はあるものの、この麻痺した足では上手く走ることはできないので俺では振り切れるか微妙だ。華乃に釣ってもらって撒いてくるにしても、この辺りのＭＡＰを全く知らない上、下手に走り回れば他のモンスターがリンクしてトレイン状態になってしまう危険性もある。素直に倒したほうがよさそうだ。

「（アイツはやるぞ。武器は強く振り過ぎるなよ、壊れるから）」

「（うん。私が先に出るね、おにぃは背後からよろしく）」

「（わかった）」

　５階のオークロードと同じように、丸太のような棍棒を持っている。妹が駆け寄る姿を見るや否や、その巨大棍棒をぶち当てようと振りかぶる。が、予想以上に加速した妹はするりと脇腹から横へ回り一閃。

　痛みによろめきながら「グアアァアアッ！！」と響く声で叫ぶ。そんなことはお構いなしに華乃は次々に容赦なく斬りつける。俺が背後から挟みこんで攻撃するまでもなくオークロードは倒れこみ、魔石となった。

「華乃の動きについていけてなかったな。恐らく見えてもいなかったか」

「でも、もう少し速く出来そう」

　あのデカい棍棒に当たればただでは済まないだろうが、今の華乃に当たるようには思えない。オークロードの動きが良く見えた……というのもあったが、肉体強化により移動速度と加速度が思ったよりも向上しており、見てから余裕でした状態。これならミノタウロスも問題なく倒せそうだ。

　その後も確かめるように何度か戦闘をしながら、ようやく中ボスがいるドーム状の部屋まで辿り着く。この部屋の先に隠しエリアへ入る仕掛けがあるので部屋の中を通っていかなくてはならない。

　部屋の大きさは５０ｍ四方ほど。部屋の入り口付近からこっそり中を窺えば、身長２ｍほどのミノタウロスが部屋の中央付近にポツンと立っているのが見える。部屋自体が大きいためミノタウロスは相対的に小さく見えるが、筋肉が異様に盛り上がっており、牛頭人身の獣人の姿も相まって圧迫感すらある。

　モンスターレベルは１２。手には[ラブリュス]という攻撃力が高められた対称形の両刃斧を持っている。あの斧を受けきるには相応の武具とＳＴＲが必要だ。また、初めてウェポンスキルを使ってくる敵――俺たちの場合は７階のユニークボスが初めてだったが――である。

　感知能力はそれほど高くはないため、物音を立てないで部屋の外側の壁に沿って行けば通り抜けることは可能だ。さてどうするか……

「（戦いたいんだけどっ）」

「（……まぁいいか。だがウェポンスキルだけは注意しておけ。あれは受けるな）」

「（うん。撃たせる前に倒すつもりだけどねっ）」

　ミノタウロスのウェポンスキル《フルスイング》はＳＴＲに比例し攻撃力が上昇する両手斧スキル。どういったモーションで発動するのかを道中に教えておいたが、今の動体視力と肉体能力があれば発動後でも見てから躱せるだろう。

　華乃は部屋に入ると同時に前傾姿勢のまま加速し、あっという間に時速５０ｋｍに達するほどの速力でミノタウロスへ接近する。

　近寄る音に気づいたミノタウロスは、高速で向かってくる姿を見て取ると、後手に回るのを覚悟で華乃の攻撃を見極めて受ける構えを取る。それだけでミノタウロスがパワーにものを言わせただけのモンスターではないのが分かる。

　俺も後を追って駆け出すが、レベル８だった頃の走力にも達していない。それでもマジックフィールド外での一般人以上に走力はあるだろう。

（相手が待ちなら無理に攻撃を仕掛けなくていいんだぞ……何か作戦があるのか？）

　ミノタウロスの構えが受けと分かると、左右どちらかから攻撃するか読ませないよう、ジグザグに動いてフェイントを仕掛けながら近づいていく。

　ミノタウロスとしては、華乃の攻撃を受けてから力押しに持ち込み、武器を弾き飛ばしてカウンターを狙いたかったようだが、それも難しいと判断すると受けを諦め、重心を低くしウェポンスキルの発動モーションに入る。前方の広範囲を薙ぐ《フルスイング》だ。

　しかし、その判断は“遅い”。

　華乃はまだ余力があったのか、さらに加速し《フルスイング》の発動前に間近まで到達。そこから右脇を搔い潜って腹を斬りつけつつ背後に回り込むと、《二刀流》により右手と左手が独立して動いているような器用な斬り方で次々に斬りつける。亜人特効がある[オークロードの紋章]も効いているのか、えぐい攻撃力を出している。

　それだけ斬られている状態でも《フルスイング》は発動する。ただその方向にはすでに華乃はいない。ミノタウロスは背中を滅多切りされながら「モ”ォオォオォ」という牛の断末魔のような叫びを上げ、地面に伏して魔石となった。

　ダンエクの攻撃スキルには発動モーションの状態に一度入ると“スキルキャンセル”を行わなければ発動完了するまで止まらないという制約がある。

　そして現状、スキルキャンセルをしてくるモンスターはいない。少なくともゲームでは記憶に無い。ミノタウロスもゲームと同じならスキルキャンセルはしてこない敵だ。

　《フルスイング》は、前方に大きな範囲を薙ぐため、躱しにくいスキルではある。だが発動前の溜めモーションがしっかり見えているなら躱すことは難しい話ではない。

　引くのか、しゃがむのか、飛ぶのか、前に出るか。その４択の中で《フルスイング》に対しカウンターを狙うなら、しゃがむか前に出るかの２択。そこで華乃は加速しながら前に出て回り込みつつ背後を切り裂いた、という流れである。

　しかしその流れはレベル差があればこそ。仮に華乃のレベルがミノタウロスのモンスターレベルと同等か、それ以下なら、ミノタウロスは開幕に《フルスイング》を放つのではなく、そも最初に受けを狙わず、全く違った戦いになっただろう。

「大丈夫。今のはレベル差があったからでしょ」

「そうだ。まぁそうでなきゃ戦闘にゴーサインは出さなかったしな」

　ちゃんと分かっているようで何より。慢心が一番怖いからな。ゲームのようにやり直しが効くなら失敗して痛い目をみるのもありだろうが。

　ミノタウロスの魔石とダンジョン通貨を拾い、奥にある石壁に向かう。

　石壁を注意深く見れば数ｃｍほどの丸い窪みがあることが分かる。そこに持っているダンジョン銅貨をはめ込むと……

「あっ、壁が割れた！　すっご～いっ！」

　重いものが擦れ合うような音と共に石壁が石の形に沿って左右に開く。ただ窪みにコインをはめ込むだけで開くとか、無駄に凝った作りだなぁと感嘆しつつ中へと入る。この先はモンスターはポップせず、完全な安全地帯のはずだ。

　閑散としている広い広場をゆっくりと歩いていると、ダンエク初心者だった頃の記憶が蘇ってくる。ここでアイテム交換しながらわらしべ長者をしたっけか。

　ダンエクのサービスが開始したころは隠しエリアとして扱われていたが、それなりの広さがあるこの広場は、プレイヤー達には公然の攻略拠点として扱われていた。自分が売りたいものを持ち寄って露店を開いたりパーティーを募集したりと賑わっていた。しかし今は俺たち以外に誰もいない。

　広場を横切りしばし歩くと粗い石を積み上げて作った四角い箱のような建物が見えてくる。目的地である通称“オババの店”にようやく辿り着くことができ、安堵感から深いため息をつく。本来ならここに来るのはもう１ヶ月くらい後の予定だったのだが……

　店先には黒い薄手の服を着崩している女性が簡素な椅子に座り、プカプカと煙管を吸いながら煙を楽しんでいる。俺達が近づくとゆっくりと立ち上がり。

「あらぁ、いらっしゃい。何か買っていくかい？」

　こめかみから大きく重そうな角を生やした“魔人”がにっこりと微笑んで俺達を歓迎してくれた。

「角！？　人間じゃないのっ？」

「アタシは魔人と呼ばれているねぇ」

　にこやかに質問に答える、胸の主張が激しいお姉さん。頭の両サイドには黒く大きな巻き角が付いている。名前は「フルフル」。深層のとあるクエストをクリアすると親密になり名前を教えてくれる、ゲームでもお馴染みのＮＰＣである。

　妖艶で嫋やかな見た目とは裏腹に年齢は千歳を超えていて、このダンジョンについて色々な質問に答えてくれるおばあちゃんの知恵袋的な存在。プレイヤー達の間では「オババ」というあだ名が付いているが、それを本人の目の前でいうとギリギリ死なない程度のワンパンでぶっ飛ばされるので絶対に言ってはならない。めちゃくちゃ強いのだ。

　ダンエクでは魔人が店を経営していたり、いくつかの種族が冒険者を助けたりしてくれていた。こちらの世界において彼らの記述は見受けられないが、フルフルのように存在はしているはず。今後を考えて親交を深めておきたいものだね。

「あの～、品物見せてもらっていいですか～？」

「いいわよぉ、自由に見て行って」

　店内や店前の広場はもちろん、隠しエリアに入ってから冒険者の姿は誰一人と無く、一帯は閑散としている。にもかかわらず商品棚には武器、防具、装飾品、薬品など各種幅広く商品が置いてある。冒険者ギルドでもこれほどの品ぞろえがある店は少ない。儲けなんて考えていないのかもしれないが、値引きには応じてくれないことも知っている。

「すっごーい！　ミスリル？」

「これはミスリル合金製だな」

　華乃が鈍く銀色に光る短刀を手に取り見せてくる。

　ミスリルは魔法銀とも呼ばれ、マジックフィールド内では非常に硬度が高い。逆にマジックフィールドの外に出すと普通の銀と性質が変わらなくなる。その場合、柔らかく重いだけの金属になってしまうので扱いには注意がいる。

　そしてミスリル合金というのは、柔らかい銀にミスリルをほんの少し混ぜるだけで、そこらの鋼よりも硬度が高くなる特性がある。レベル１０から３０くらいの冒険者はよくお世話になる武具なのだ。

　妹が見せてきた短刀はミスリル合金製だが、ミスリル含有量は１％も無く、９９％以上は銀。とはいえ銀も安い金属ではないので冒険者ギルドで買うならこのサイズでも１００万以上の値はつくだろう。

　一方、１００％ミスリルでできた純ミスリル製武具というのもある。非常に硬いうえに水に浮くほど軽く、魔法耐性もあるので、魔法剣や耐性防具の素材として優秀だ。デメリットとしては入手性が悪く、高額になりやすいこと。オークションなら一体いくらになるのか考えるだけでも恐ろしい。

　華乃が感嘆しながら武具を眺めている横で、俺は状態異常回復サービスを頼む。状態異常回復の薬品も売っているが、フルフルに回復魔法を頼んだ方が安上がりなのだ。

「状態異常回復ね、３リル頂くけどいいかしら？」

「これで。よろしくお願いします」

　“リル”とはダンジョン通貨の単位のこと。１リル＝ダンジョン銅貨１枚だ。現在銅貨は３８枚、そして７階の城主が落とした金貨も１枚を所持しているので合計１３８リル所持していることになる。

　フルフルが目の前でパンッと手を叩く。それだけで全身にあったボコボコとした膨らみが取れ、足に広がっていた痺れも引いていった。

　治ったかどうか症状を確かめようとフルフルは金色の目を細め、俺の全身を確認し、すぐに後に首をかしげる。どうやらまだ状態異常があったらしく今度は眉間に人差し指を当てて魔力を流してきた。

　すると徐々に視界もクリアになっていく。目……視神経にも異常があったようだ。

「随分と……無理をしたのねぇ。２回目のはサービスしておくわぁ」

「ありがとうございます。イレギュラーな敵がいたものでね」

　あの骨は一体何だったんだと悪態をつきたくなるのを抑えながら、肩を回して体の調子を確認する。ふむ、完全に治ったようだ。驚くほど体が軽い。

「あとジョブチェンジもお願いしていいですかね」

「奥に水晶があるから使っていいわよぉ」

「あっ、私もジョブチェンジした～い！」

　陳列している装備品を手に取って見ていた妹がダッシュで駆け寄ってくる。ジョブチェンジすれば様々なスキルを会得でき、通常戦闘でもスキルを使った幅広い戦略を取ることが可能となる。この世界ではジョブチェンジできれば冒険者として一人前という風潮があり、妹もそれを楽しみにしていたようだ。

「これがジョブチェンジの水晶？　見た目は普通だね」

　幾重にも重ねられた布の上に直径１５ｃｍほどの丸く透明な水晶が置かれている。ゲームでは手を当てれば自動的にインターフェースが開いて誘導してくれたが……

　そっと手を当ててみる。すると感覚的なインターフェースが頭に浮かぶ。計算中に数字が頭の中に浮かぶ感じのやつだ。

（これ、分かりにくいなぁ）

　数値を見比べて判断できないため、どうにもやりにくい。パソコンの画面のようにじっくりと文字や表を見ながら考えたいのだけど、イメージされた数値を紙か端末に写しながらやったほうがいいのだろうか。

「レベルは……１９！？　結構上がったな。ということはあの骨、レベル２５くらいはあったということか」

「えぇ！？　じゃあレベル１１も上がったんだね。なんであんなのが７階にいたんだろう」

「さぁな。俺も分からん」

　操作を進めていくとジョブチェンジの項目を発見する。

　現在ジョブチェンジできるジョブは基本ジョブと呼ばれる【ファイター】、【キャスター】、【シーフ】の３つ。それらに就くための条件は【ニュービー】のジョブレベルが５以上。そしてステータスも一定以上要求される。

　【ファイター】ならＳＴＲが、【キャスター】ならＩＮＴが、【シーフ】ならＡＧＩが２０以上で就くことができる。俺も妹もレベルが１９まで上がったことで必要ステータスはどれもクリアしているはずだ。

「おにぃはどれに就くつもりなの？」

「そうだなぁ。早い所【シーフ】の《フェイク》は取っておきたかったが……予定より早く来られたし多少の猶予もある。先に【キャスター】で魔法攻撃手段を覚えておいたほうがいいかもな」

　これから先では物理攻撃耐性、または物理無効の特性を持ったモンスターを相手にする必要がでてくる。物理以外の攻撃手段は是非とも欲しいところだ。魔法を宿した属性武器でも対応できるとはいえ、今現在、判明している属性武器は億超えの国宝クラスのみで、一部の冒険者が独占している。金があったところで揃えられるものではない。

「属性武器って、コタロー様のメインウエポンだよね」

「多分な。あの赤いエフェクトは炎のエンチャントだろう」

　カラーズのクランリーダーである田里虎太郎も属性魔法が付与された太刀を使っていたが、あれも日本では数少ない最高峰の国宝武器に指定されている。属性武器は３０階前後では手に入れる手段が限られているため、どうしても希少なものになってしまうのだ。

「物理攻撃が効きづらいモンスターが出るというのが、銃火器が廃れた理由なんだっけ」

「レイス系やスライム系モンスターだな」

　ダンジョンがこの世界に現れた昭和の初め頃、つまりダンジョンダイブ黎明期では、主要武器は銃剣であった。元の世界でも白兵戦において最強なのは銃であったし、剣技なんてマシンガンの前では手も足も出ないのは自明だ。この世界にももちろん銃はある。オークを狩るにしても、離れた場所から銃を使えば、剣よりも早く安全に倒すことができるはずだ。

　ならば何故、この世界の冒険者は銃を使わないのか。

　それは１０階以降では物理無効、または物理耐性持ち、中には飛び道具耐性なんてものを持った厄介なモンスターもでてくるからだ。そういったモンスターを無視して攻略できないこともないが、フロアボスのような攻略上無視できないモンスターもいるため、物理攻撃のみでは攻略が詰む。実際、ダンジョンダイブ黎明期では１５階前後で攻略が頓挫した経緯がある。

　そも、銃には対応スキルが無く、レベルアップやジョブ補正による肉体強化の恩恵も受けにくい。逆にダンジョンのモンスターは深く潜るほどにどんどん能力が強く、素早く、様々な耐性を持ち、強力な攻撃手段を取ってくるようになる。７階で戦ったヴォルゲムートクラスにおいては、銃弾を打ち込んだところで大したダメージを与えられないだろう。

　攻略する階層が浅い場所限定というならともかく、より深く攻略するのを念頭に置いているなら、対応するウェポンスキルがある武器、もしくは魔法を使って鍛えていくのがセオリーだ。そのほうが後々強くなることが目に見えている。

（まぁそれに。１０階以下でもあれだけ冒険者がいたら、銃なんて危なくて使えないだろうな）

　ということでこの先のモンスターを考えれば俺か妹のどちらか、あるいは両方とも魔法を取得しておいたほうがいいだろう。

　魔法攻撃手段以外でいえば、【シーフ】の《フェイク》と《トラップ検知Ｉ》や、【ファイター】の《バックステップ》と《スキル枠＋３》あたりは是非とも取得しておきたい。

「ジョブって何度でも変更可能なんでしょ？」

「できるぞ。ジョブレベルはリセットされるがな」

　ジョブは何回でも変更可能だが、ジョブレベルはリセットされて１からとなり、ジョブによるステータスボーナス（※１）も減ってしまう。また上げればいいだけなのでそこまでのデメリットにはならない。一度ジョブレベルを上げたジョブへの再転職はスキルの再取得やジョブ補正目的で行うのが一般的だ。

　一応、取得できるスキルとジョブ特性（※２）を妹に説明しておく。

「え～と、魔法撃ちたいから先に【キャスター】やってみたいかも。魔法を使いながらでも《二刀流》ってできるんだよね？」

「普通にできるぞ。ただ魔法を撃つときに武器が邪魔になるかもしれないから、そこは考えて武器を使うんだな」

　【キャスター】は魔法攻撃を覚える以外にも、簡単な状態異常を回復するスキルも覚える。パーティーに一人は欲しいジョブだ。スキル枠に余裕があるなら覚えておいて損は無い。

「じゃあ俺は【ファイター】か【シーフ】にしてみるか」

　【ファイター】はいくつか近接戦闘スキルをいくつか覚えるが、最重要なのはなんといっても《スキル枠＋３》。これは無条件に習得しておきたい。

　それ以外には後方に回避する《バックステップ》も使えるスキルだ。これは通常攻撃や一部のスキルモーション中に割り込んで発動することができ、動作をキャンセルして後ろに緊急回避するスキル。こういったスキルキャンセル系スキルは対人戦や一部の強力なモンスター戦において重宝され、上位互換である《スウェー》を覚えるまではスキル枠に入れる価値はあるだろう。

　戦闘面でのスキルでいえば【ファイター】のほうが優秀だが、情報漏洩に備えて【シーフ】の《フェイク》スキルだけは先に覚えておいたほうがいいか。

　それ以外の【シーフ】のスキルでは《トラップ検知Ｉ》も役立つスキルだ。面倒なトラップを見つけやすくなるのでスキル枠に余裕があれば覚えておきたい。ただこれもパーティーの誰かが持っていれば十分なのだが。

「ま、先に【シーフ】になっとくか」

　おもむろに水晶に手を当て、目を閉じる。すると頭の中にぬるりと数字の羅列が投影された。

（※１）　ステータスボーナスはジョブレベルＭＡＸの１０で１００％貰え、ジョブレベル１では１０％しか入らない。例えば【ファイター】ジョブレベル１０でＳＴＲとＨＰが共に１０％アップするが、ジョブレベル１では１％ずつしかアップしない。

（※２）基本ジョブ３種データ。

【ファイター】　ＳＴＲとＨＰに１０％ボーナス

・《スラッシュ》　ジョブレベル（以下ＪＬ）２で習得　片手剣、両手剣スキル

・《ＨＰ上限アップＩ》　ＪＬ４

・《フルスイング》　ＪＬ５　片手斧、両手斧スキル

・《バックステップ》　ＪＬ７

・《スキル枠＋３》　ＪＬ９

・《ソードマスタリーＩ》　ＪＬ１０　片手武器装備時に攻撃力、熟練度がアップ

【シーフ】　ＡＧＩのみ１５％ボーナス

・《フェイク》　ＪＬ２　ステータス偽装

・《隠密》　ＪＬ３　モンスターに気づかれにくくなる

・《ダブルスティング》　ＪＬ５　短剣スキル２回攻撃

・《パワーショット》　ＪＬ７　弓スキル（弓矢は消費）

・《開錠Ｉ》　レベル９　簡単な鍵を開ける

・《トラップ検知Ｉ》　ＪＬ１０　簡単なトラップ検知

【キャスター】　ＭＰとＩＮＴに１０％ボーナス

・《ファイアーアロー》　ＪＬ２　数ｃｍ大の炎の矢　炎属性

・《回復》　ＪＬ３

・《アイスランス》ＪＬ４氷の槍　水属性

・《キュア》　ＪＬ６　状態異常回復

・《ウィンドガード》　遠距離攻撃から守る防御魔法　風属性

・《メディテーション》　ＪＬ１０　スキル使用中にＭＰリジェネ

　水晶に手で触れながら目を閉じると、頭の中に文字や数字が投影される。

　意識を特定の項目に傾ければ投影されているものがぬるぬる動くため、苦労しながらも【シーフ】を選択。すると間を置かず現在ステータスが表示された。急いで端末にメモする。

＜名前＞　成海颯太

＜レベル＞　１　→　１９

＜ジョブ＆ジョブレベル＞　シーフ　レベル１

＜冒険者階級＞：―９級―

＜ステータス＞

最大ＨＰ：７　→　１０３

最大ＭＰ：９　→　５３

ＳＴＲ：３　→　３５

ＩＮＴ：９　→　５１

ＶＩＴ：４　→　８８

ＡＧＩ：５　→　３１

ＭＮＤ：１１　→　６０

＜スキル　１／２＞　→＜スキル　２／６＞

・《大食漢》

・《簡易鑑定》

・＜空＞

・＜空＞

・＜空＞

・＜空＞

　これが現時点でのステータスとその変移。

　マジックフィールド外での成人の能力は、各項目３～８程度が一般的な数値と言われている。俺もレベル１のときは大体がその値を取っていた。それがレベル１９となったことで各能力値が大きく成長したわけだ。

　ステータス的にこのくらいまでなれば百キロ超の物を持ち上げながらでも、オリンピック選手を超える速度で走ることが可能。レベルアップを経験していないどんな格闘家に対しても負ける可能性はほぼなく、超人と呼べる領域に達している。

　さて、肝心のステータス値だが、能力値の格差も大きくなってきているのが分かる。明らかにＨＰとＶＩＴが高く、ＳＴＲとＡＧＩが低い。これは初期スキル《大食漢》による影響だろう。

　確か《簡易鑑定》で見た時、《大食漢》の効果は「レベルアップ時にＨＰとＶＩＴ上昇値にプラス補正、食欲増大、ＳＴＲ－３０％、ＡＧＩ－５０％」だったはずだ。鑑定不能だった項目はおいておく。

　補正を外して考えればレベル１から１９になったことで、ステータス上昇値は大凡４０～５０くらいを取っていて、ＨＰとＶＩＴの上昇値はその倍くらいと考えられる。

　てっきりレベルアップ時のプラス補正なんて１０％程度のボーナスかと思っていたので、予想以上の補正値に正直驚いている。《大食漢》はもうしばらく消さずに残しておくべきか、いやでも空腹は厳しいものが……

「私もやる～！」

　空腹かステータスかの究極の二択に思い悩んでいると、逸る妹が終わったなら場所を譲れと肩を揺すってきた。まぁ考察は後でじっくり考えればいいことなので場所を代わってやるとしよう。

　そわそわしながら水晶の前に座り、目で説明しろと訴えてくる妹にジョブチェンジのやり方を丁寧に指導する。うむうむと唸りながらも無事【キャスター】を選べたようだ。

「これでもうお終いなんだ。特に変わった感じはしないけど」

「そんなもんだ。ジョブチェンジしたら一応ステータスを教えてくれ」

「えーとね……」

　俺の端末に忘れないよう入力する。

＜名前＞　成海華乃

＜レベル＞　Ｌｖ１　→Ｌｖ１９

＜ジョブ＆ジョブレベル＞　キャスター　レベル１

＜冒険者階級＞：―未登録―

＜ステータス＞

最大ＨＰ：７０

最大ＭＰ：５９

ＳＴＲ：６１

ＩＮＴ：５４

ＶＩＴ：４７

ＡＧＩ：７３

ＭＮＤ：４６

＜スキル　３／６＞

・《二刀流》

・《簡易鑑定》

・＜空＞

・＜空＞

・＜空＞

・＜空＞

「こんな感じ」

「あれ？　華乃ちゃんや……だいぶ強くね？」

　ステータス補正スキルがあるわけでもないのに全体的にステータスが高い。上昇値も平均５０を超えている。俺に《大食漢》のブーストが無ければ大敗北していただろう。ダンエクでもキャラメイクのときにステータス上昇幅が少しだけ高い”当たりキャラ”なるものの噂があったが、それだろうか。

　まぁ気にしすぎてもアレなので、気のせいということで話を進める。

「あとは装備だな。武器でいいのがあったら買ってやるぞ。予算は５０リルまで」

「やった～♪　この小太刀も使いやすかったけど、すぐ曲がりそうだし力入れるのが怖かったんだよね～」

　勢いよく立ち上がり武器が置かれているコーナーへ喜び勇んで飛び入る妹。それでは俺も物色を始めるとしようか。

　最初に値段をチェックしたいのは、なんといってもマジックバッグ。２０階以降に出現する巨大ミミズの消化器――胃袋のようなもの――から作られていて、見た目の２０倍くらいまで入るバッグだ。

　沢山の物を入れられるが重量は軽くならず、破れでもすると中身をその場でぶち撒いてしまうので扱いに注意しなくてはならない。だがこれからのダンジョンダイブでは嵩張る物を入れる必要も出てくるので是非見ておきたいと思っていた。

「ええと、２５０リル……やっぱ今の所持金じゃ無理だったか」

　プレイヤーが多くいたゲーム時代ではマジックバックの素材が多く店売りされていたため、完成品のマジックバッグも値下がって５０リルもあれば買うことができた。この世界ではそれよりも高いと覚悟はしていたものの、もしかしたらという淡い期待は無残に打ち砕かれたというわけだ。

　これからは隠しストアを利用する機会も増えるだろうし、ダンジョン通貨も稼がないといけないな。入手する機会も増えるはずなので、家に帰ったらダンジョンダイブ計画を練り直すとしよう。

　ということで次は鑑定アイテム。今持っているのは《鑑定》のスキルが使えるマジックワンドだ。《簡易鑑定》では鑑定できないアイテムやスキル、またはステータス偽装した人にも鑑定できるため、必ず持っておきたい一品だ。ただしワンドには使用回数があるので、しっかりチェックしておきたい。

「１０回チャージのワンドが１０リルか、これはゲームと同じだな。これ１つお願いします」

「ええ、たしかに１０リル」

　家に帰ったらこのワンドで《大食漢》とヴォルゲムートからドロップしたアイテムを鑑定するとしよう。実験もしたいし、残金に余裕があれば後でまた買いに来たい。

　次に状態異常回復ポーションを２つ買う。１個５リルだ。もしものときにこれがないと最悪死ぬ可能性があるので保険のために俺と、華乃にも１つずつは持っておきたい。それと回復ポーションの値段も確認する。

（２リルか。これは安いな）

　効果は体に振りかければ【プリースト】が唱える《中回復》と同等の効果があり、簡単な骨折や指の先の欠損程度なら即座に治すという凄いポーション。需要が恐ろしく高く、冒険者ギルドでは最低でも１つ数十万円で取引される高価なアイテムなのだが、ここではダンジョン銅貨たった２枚で買うことができる。

　ゲーム時代ではすぐに売り切れ、再入荷したとしても値段が上がり、１０リル以下ではなかなか買うことはできなかったが、プレイヤーがいないことでマジックバッグと逆の現象が起きている。

（しめしめ。これは転売するしかないな）

　そしてもう１つの人気アイテム。

「ミスリルって鉱石で売っています？」

「えぇ、あるわ。あっちの台に置いてあるのが鉱石よ」

　２畳ほどの台の上に様々な色の鉱石が並べられている。鉄鉱石や銀鉱石、ミスリル鉱石と鉱石ごとに名札が張られているが、同じ種類の鉱石でも大きさはかなり違うようだ。大きいほうを買おうとしたら、中に含まれている鉱石の量はどれもほぼ同じらしく悩む必要はないという。ならば運びやすい小さいのを買っておこう。

　ミスリル鉱石を精錬できるなら、ミスリルインゴットを買うよりもかなり安く手に入れることができる。これらもゲーム時代では鍛冶に手を出しているプレイヤー達に買い占められ、すぐ売り切れる人気アイテムだった。

（ここで鉱石を買って外で精錬依頼し作ってもらったら、安く武器を揃えられるな）

　含まれているミスリルの量は大したことないが、少量でも外で買おうとすれば目が飛び出るほどの金額になってしまう。これも上手くすれば転売で大きな利益がでるだろう。俺の転売計画が捗るぜ。

「おにぃ～！　片手剣を２本買いたいな～って思ってたけど……２本なら予算５０リルって無理かも……」

　とか言いながら２本とも手から離さないので諦める気が無いのが丸わかりだ。何とかならないかと上目遣いで聞いてくる。

「じゃあ鉱石だけ買って工房で一緒に作ってもらうか」

「作ってもらえるの！？　やったっ」

　帰りにでも学校の工房に寄って見積もりをお願いしてみよう。

「あらぁ、もう帰るの？」

「えぇ。また買いに来ると思いますが、そのときはまたよろしくお願いします」

　武器に必要な量の銀鉱石とミスリル鉱石を買い、残ったリルで転売目的のＨＰポーションを買う。しばらくは値段を上げ過ぎない程度に、オババの店と冒険者ギルドでＨＰポーション転売マラソンでもするとしよう。

「そう、久しぶりの客だったから寂しいわぁ……あら？　そういえばつい最近も人間が来たんだったわ」

「……え？」

　それって、かなりの爆弾発言では。

「あら？　そういえばつい最近も人間が来たんだったわ」

「……え？」

　オババの店は通常では行けない隠しエリアにある。そして店前の広場にも冒険者の姿が見えなかったから、てっきり誰も来たことが無いのだと思っていた。

「どんな人でしたか？」

「うーん、ごめんなさいね。よく覚えていないわぁ」

　フルフルが首をかしげながら「人間は覚えにくいのよねぇ」と呟いている。魔人とはいえ人間と同じような外見をしているのに、人間の姿が覚えにくいというのもある意味面白いが――

（来たというのはプレイヤーか？）

　こちらの世界に飛ばされてから今日まで１ヶ月ちょっと。俺と同じようにＥクラススタートなら、この期間でオババの店まで到達する難易度はそれなりに高いはずだ。それでも俺以上に時間とリスクを掛けて効率的なレベル上げをしたのなら来られないこともない。もしくは、俺の知らない知識や方法でここまで来たということも考えられる。

（プレイヤーではなく、普通の冒険者の線もあるか）

　図書室で調べた限りでは、この場所についての記事は見られなかった。しかし、このダンジョンが発見されてからもう何十年と経っている。その間に誰か一人くらい興味本位でダンジョン通貨を窪みにはめ込んで、偶然この場に辿り着いたとしてもおかしくはない。情報が出ていないのはこの場所を独占したいがために隠匿したとも考えられる。

　プレイヤーにせよプレイヤーではない冒険者にせよ、この店を知っているのなら何かしら買い占められているはずだ。俺ならそうする。しかし、在庫を見た限りではそんな感じがしないので聞いてみることにした。

　来訪者がプレイヤーなら俺と同じポーションや鉱石を買うし、冒険者ならマジックアイテムも買うだろう。何を買うかでどちらかに絞り込めるかもしれない。

「何も買わなかったわよ？　ただ……私の店に誰が来たか聞いてきたわね」

（……何も買わなかった？）

　この店のラインナップは外と比べても非常に魅力的なものばかり。手持ちのダンジョン通貨が無かったのだろうか。それならフルフルに通貨の存在と必要性を聞いて、貯めてから買いに来ればいいだけの話だ。それに買おうと思えば魔石でも買うことはできる。

　にもかかわらず、何も買わなかったというのは純粋に誰が来たのか聞きにきただけなのだろう。このタイミングでこんな質問をするとなると冒険者というよりプレイヤーの可能性が高そうだ。

（クラスメイトでダンジョンにこもっていそうなプレイヤーはいただろうか）

　俺はクラスメイトとの親交はほぼスルーしていた……というよりスライムに負けた悪評のせいで誰からも声を掛けられずスルーされていた。放課後は部活探しもせず、ダイエットかダンジョンダイブに全力だった。誰がどれくらい潜っているのか全く見当がつかない。

（元々学校なんて何時辞めてもいいという考えだったからなぁ。情報収集のためにも少しは交流を増やしたほうが良いか？）

　クラスメイトとの交流は余計な時間を取られるというデメリットはあるが、情報収集や有益なイベントを熟す上でもアドバンテージとなり得る。ダンエクのイベントが起こる場所も主要人物も、大半が冒険者学校関連だからだ。

　また中には危険なシナリオやイベントもあり、それらを回避するためにも赤城君やヒロイン達がどれくらいイベントを進めているか、交流を踏まえて把握しておくのも良いかもしれない。

「……なるほど。その方がまた来たときは、俺がここへ来たことを内密にお願いできませんか。知られるとちょっとまずいので」

　こんなに早くここに来れたのだってヴォルゲムートというイレギュラーがあってこそ。その俺よりも早く到達するというのは、かなりのやり手と考えられる。敵になる可能性もあるので、こちらの情報はできれば隠しておきたい。

　生憎とレベルアップ競争なら負けていないはず。このままぶっちぎる予定だ。

「ええ。でもあなたのことも覚えられそうにないし、心配しなくていいのよ」

「ありがとうございます。また来ると思いますが、そのときはよろしくお願いします」

「またくるね～お姉さんっ」

　華乃が手を振ると、フルフルもにこやかに手を振り返す。こんな客が来ない閑散とした店を何でやっているのか分からないが、こちらとしては色々と助かる。

　誰もいない広場に戻って一休み。ダンジョンの中とは思えないほど広大で長閑な広場だ。鳥の鳴き声や風のせせらぎは無いが天井は高く、やや明るい薄水色なので開放感もある。こんな場所を妹と独占しているのは気分がいいものだ。

　１０階入り口で買った焼きそばを取り出して食べる。予想はしていたが値段が高いくせに大した味では無い。というか何の肉だよコレ。

「んじゃ帰るか」

「うんっ」

　帰りはこの広場の片隅にあるゲートを使う。ここで魔力登録をしておけばダンジョン外からもすぐにオババの店に来られるようになる。

　１つ十数ｋｇほどの鉱石を４つ持っての移動ではあるが、レベルアップにより力が上がったせいか重さはそれほど苦にならない。重さよりも鉱石が大きく嵩張って運びにくいので、早い所マジックバッグが欲しい所だ。そのためにもダンジョン通貨を沢山稼がないといけない。

　次のダイブはミノタウロス狩りにするか、さらに潜るか。その辺りは家に帰ってからゆっくり考えるとしよう。とにかく今日は色々ありすぎてオラは疲れたよ。さきほどから欠伸が止まらない。

　見たことがある壁の紋様に魔力を通してゲートを開く。くぐり抜けると一瞬で学校地下一階の空き教室に移動完了だ。ダンジョン内より数度温度が低くひんやりしてて心地よい。

「先に帰ってていいぞ。俺は工房でこの鉱石を預けに行ってくる。一人で帰れるか？」

「大丈夫だよ～。後はよろしくねっ」

　機嫌がいいのかスキップしながらルンルン気分で歩き去っていく。というか部外者なんだから校内では目立たないようにしろと言いたい。あの防具では目立つので偽装用の制服でも作っておくか。

　鉱石を担ぎながらでは現在のレベルがバレそうなので、工房まで台車を借りてきて運ぶことにする。ガラガラと押しながら外へ出ると、闘技場のある方角から訓練している声が聞こえてきた。高校の時を思い出して懐かしい……というか今、俺も高校生だった。

　そういえば赤城君の部活はどうなったのか。やっぱりＥクラス向けの部活に入ったのだろうか。すでに闇落ちしたのかも気になるが……その場合、面倒なドタバタが起こるので巻き込まれないよう回避に動いたほうが良いか、など思案しながら工房エリアへと足を進める。

　\*・・\*・・\*・・\*・・\*・・\*

　真新しい外壁に、よく掃除された荷物置き場。白く四角い形をした工房の中からは大きな機械が動作している音や金属を叩く音が聞こえてくる。

　この学校には民間企業からの指導で彫金や装飾品を作って学ぶ部活動もあり、活動の場は主に学校敷地内の工房エリアだ。ミスリルもそうだがダンジョン産の金属は大量の魔力を通しながら加工する。レベルアップを多く経験した魔力量の多い冒険者学校の生徒は彫金師や鍛冶師の適正も高く、目指す人も多いのだ。

（さて。先輩方はいるかな）

　広く開いた工房の入り口から中を覗いていると、大柄な生徒がこちらに気づき出てきた。

「なんだぁ？　……依頼か？」

　訝し気に俺を見た後、荷台にある鉱石をみて依頼だと分かった模様。ええ、その通りです。

「この鉱石の精錬と、できれば武器作成の見積もりをお願いしたいのですが、大丈夫ですか」

　ジロジロと無遠慮に俺を見てくる。２年生だろうか。次に鉱石を見てミスリル鉱石があるのが分かって驚いている。

「おうおう、今俺達はミスリル合金の勉強していてよ。依頼なら安くするぜ？」

「そうですか、依頼料はどれくらいになりますか？」

　急にご機嫌になる先輩。なんか調子いいなと思いながらも、安くなるなら頼んでみようかしらん。もう少しすればＨＰポーションの転売でも儲けが出るようになる予定だが、今はとにかくお財布事情が厳しいのだ。

「ミスリルと銀の精錬を俺に任せてくれるなら……これくらいだな。武器作るならまず、ミスリルの量がどれくらいできるかによる。精錬後に決めたほうがいいだろう」

　提示された金額は思ったよりも安い。精錬さえ出来てしまえば作成依頼は他所でしてもいいので、今度にでも冒険者ギルドに下見しに行こうかね。

「それでお願いします、俺は１年Ｅクラスの成海といいます」

「１年Ｅクラスだぁ？　そんでミスリル合金の武器とか使うのか……まぁいい。じゃまた後で来いよ」

「書面とか書かないんですか？」

「……ちょっと待ってろ」

　奥から精錬依頼契約証の用紙を持ってきたのでサインする。精錬はすぐできるようなので、数日したら取りに来ると言っておいた。

　さてと。さっさと家に帰ろう。

　\*・・\*・・\*・・\*・・\*・・\*

「ただいま～っと、……おぉっ？」

「颯太っ！　華乃の言ってることってホントなの……って。どうしたのそんなに痩せ細っちゃって……」

　家に帰るや否や、お袋が小走りで玄関まで駆けつけてきた。華乃が【キャスター】になったと聞いて真実はどうなのか問いただしに来たようだが、俺の変わりようにも驚いている様子。そりゃそうだろう、朝は１００ｋｇ超くらいだったのに今見たら一回りくらい痩せていたとか普通はあり得ない。

　色々と驚きや聞きたいことがあるようで腕をぶんぶん振るいながら口をもごつかせている。

「飯食いながらでいい？　腹減った」

「……ご飯はもうできてるから並べておくわね」

　自分の部屋に入りほっと一息。今日一日はマジで疲れた。

　すっかりボロボロになった魔狼の防具を部屋に置く……買ったばっかりだがこれももう買い替えないといけない。とはいえレベル１９に見合う防具を揃えるとしたら一体いくらになるのか。

　頭を悩ませながらラフな部屋着に着替えて居間に行くと、下手糞な作り笑いをしている親父も座っていた。まぁ丁度いい。

「そんじゃ、何から話す……」

「【キャスター】になったことからお願いっ」

　お袋が隣に滑り込むように座ってきて急き立てて言う。

　この世界では基本ジョブへのジョブチェンジができるなら専業でも食っていける一人前の冒険者という認識がある。未だ冒険者の未練を捨てきれずにいる親父も長いことレベル４の壁を超えられずにいたわけで、何をどうやったらそんなにレベルが上がるのか、興味がない振りをしながら新聞を読みつつ、こちらに耳を澄ませている。

「俺がこれから話すことは家族だけの秘密にして欲しいんだけど」

「……それって凄い情報なの？」

「まぁ一部はそうかな」

　ダンジョンの新情報はモノによっては凄まじい値段で取引されている。それこそ一生遊んで暮らせるほどの額。そんなものを知っていると分かれば、無理にでも聞き出そうとするヤバい奴らも現れる。

　事の深刻さを感じ取り、親父もお袋もごくりと固唾を呑んで話の続きを待つ。

「私が【キャスター】になってぇ、おにぃが【シーフ】になったんだよねっ」

「あぁ。ついでに俺も華乃もレベル１９になった」

「「じゅっ……１９！？」」

　親父が目を見開き、お袋は前のめりになりながら聞き返してくる。レベル１９といえばそれなりの有名なクランからお誘いが来るレベルらしく、「ウチの子達は天才なのかっ！」と手を取り合って喜んでいる。天才なのかは知らんけどね。

　さて、どこまで説明するのがいいか。

　信頼できるのは分かっているし、無類の協力者になり得る成海家の面々。こちらの世界に来てからのことは、家族には秘密にしないようにしようと考えている。ダンジョン知識については危険性を伝えた上で遠慮なく言うつもりだ。

　かといって、ここはゲームの世界だったとか元の世界の出来事を言ってもオツムの心配をされるだけなので話すつもりはない。それは言っても意味がないものだろうし。

　とりあえずこれまでの数日間の経緯から丁寧に説明するとしよう。

　茶の間の成海家会議。冬場はコタツとして使っていたローテーブルに一家４人で向き合って座る。

　とりあえずゲーム知識云々よりもこれまでの経緯から入ったほうが良いだろう。妹である華乃のパワーレベリングから始まり１０階までの道のりを説明する。

「じゃぁジョブチェンジしたのは本当なのねぇ……」

「もうっ、そう言ってるでしょっ！」

　どうして信じてくれないのと種を詰め込んだハムスターのように頬を膨らませ抗議する妹。

「でも、どうやってそんな早く上げられたんだ？」

　新聞を机に置き、驚きながらも何をやっていたのか聞いてくる親父。

　お袋は冒険者ギルドで臨時の社員として働いていて、統計やデータを扱っているから分かることだが、レベル１９まで上げるのに一流の冒険者でも相当な時間、少なくとも３年程度は掛かるらしい。

　ゲーム知識が無く、ゲートも使えない。大勢とパーティーを組む。絶対に勝てる相手としか戦わない。そんな条件なら、最短でもそれくらい掛かることは想像がつく。もちろんそれらを行うための時間と資金、信頼できる仲間の確保は最低必要条件だ。

　ゲーム知識があるなら数ヶ月もあれば上げられるだろうが、妹はわずか数日でレベル１９まで上げた。この成長速度はこの世界どころか、ゲーム世界であっても厳しいくらいだ。そういった常識外なことを含めて今までの経緯を説明する。

　俺が妹にしてやったパワーレベリングの方法でレベル７にし、その後７階にてゴーレム狩りでレベル９か１０まで上げようとしたが、クソ共に絡まれて華乃が攻撃されてしまったこと。凶悪な敵と戦う必要に迫られたこと。そして激闘の結果、レベル１９になって痩せてしまったと説明した。

「よくも華乃を！　パパがとっちめてやるっ！」

「それでそんなに痩せてしまったのねぇ」

　親父が興奮して憤っているが、妹を攻撃した奴らが所属しているクランは一応攻略クランを名乗っている。レベル４では乗り込んでいっても返り討ちに合うだけなので少し落ち着いて欲しい。

　そして痩せた――といってもまだ十分にぽっちゃりしている――理由が激闘の結果と言われても普通は納得しないだろうが、目の前に痩せた成海颯太がいるのだから信じざるを得ない。無事で帰ってきてくれたということでそこは納得してくれたようだ。あと無駄に高カロリーな飯でまた太らせてようとしてくるのは止めて頂きたい。

「でも、ソレルね……聞いたことはあるわ」

　ソレルについて。冒険者ギルドで働いているお袋が言うには、結成してからまだ１年ほどしか経っていない新しいクランで、クランリーダーが相当な野心家、かつ問題児。ソレル自体も他の攻略クランと諍いが絶えない要注意クランとのことらしい。

　クラン同士で揉める理由はいくつかある。優秀な人員の確保。人員の移動による情報機密、保守の問題。美味しい狩場やモンスター、希少アイテムの独占や争奪、競争。どちらのクランが上なのかというプライドの問題もあるが、とにかく巨大な金が動くので利害の対立が激しいのだ。

　クラン同士の抗争も昔はダンジョン内でドンパチやる程度で平和だったのだが、今では人為的に作られたマジックフィールド――ＡＭＦ（Ａｒｔｉｆｉｃｉａｌ　Ｍａｇｉｃ　Ｆｉｅｌｄ）と呼ばれている――の使用前提であることが多く、ダンジョン外でも大規模な被害を引き起こすことがある。

　レベルを上げていない普通の警察が攻略クランの抗争に割って入るには荷が重く、専ら冒険者ギルドが仲裁に動くのが慣例だ。その関係でギルド職員のお袋にもそういった情報が入り、ソレルの名を知っていたらしい。

「冒険者防犯課の方たちも頭を抱えていたのよ。最近はクラン同士の抗争が多くてとてもじゃないけど人が足らないって」

　そこらのクランの抗争ならともかく、攻略クランの仲裁には冒険者ギルド内でも相応のレベルを要求される。冒険者ギルドとはいえそのレベルの人材の確保は難しく、抗争が多いときにはどうしても人手不足になってしまう問題を抱えているという。

（ソレルにお仕置きしたいが、問題は“背後”がどれくらいまで出張ってくるか……）

　ソレルの背後には二次団体“金蘭会”が控えていて、ひいてはトップクランの“カラーズ”もいる。ソレルをとっちめたいのは山々だが、一刻も早くというわけではない。じっくりレベルを上げて強くなってから安全に確実に、そして秘密裏にやることが重要。カラーズと事を構えるつもりなどないからだ。

　そも優先順位的にはＤクラスのアホ共をどうにかするのが先だし、学校内で何かやるにしても《フェイク》は必須。後数か月ほどは装備やスキルを充実させ環境を整えたほうがいいだろう。レベル上げも重要だが、ここまでは急ぎ過ぎた。

「ソレルへの復讐は親父とお袋にも危害が加えられる可能性もあるから後回しで。家族みんなのレベルをしっかり上げてからまた考えよう」

「……危険なことは極力避けたほうがいいわぁ」

　頬に手を当て憂慮するお袋は復讐に消極的のようだ。それもそうだろう。すべては家族の命あっての物種。無事でいてくれたならそれでいいという考えも間違ってはいない。足を斬られた妹もポーションを使って足は完治し、後遺症どころか傷跡も残っていない。ここで無理をする意味なんてないのだ。

「それじゃ、私がパワーレベリングするよっ。アンチエイジング効果もあるっておにぃが言ってたし。」

「そ、そうねぇ。それじゃお願いしようかしら」

「パ……パパも参加していいかい？」

　橋落としならまかせてっ！　と無い胸を張る妹だが、対象モンスターが冒険者ギルドで注意喚起されているオークロードと聞いてギョッとする両親達。しかし今となってはオークソルジャーを複数体引き連れたオークロード相手であっても真正面から無傷で勝てるはずなので心配はない。

　ゲームなら出来得る限りの深層でパワーレベリングするほうが効率はいいのだが、こちらの世界では急激なレベルアップを実際やってみたところ体への負担が予想以上にあった。それに命もかかっているわけで、より確実で安全にレベルアップできるよう華乃のときと同様に最初はオークロードの橋落としからやったほうが無難だろう。

　また１０階の隠しストアを利用しＨＰポーションや鉱石の転売を企んでいることも説明しておく。隠しストアの存在はこれからの金策として使いたいので家族以外には秘密にしたい事項の上位だ。

「他所に売るにも中抜きが大きいぞ。少量なら俺の店に売るのはどうだ？」

「ギルドでは売値の半値以下でしか買い取らないし、パパのお店のほうがお得ね」

　親父は脱サラして冒険者関連のアイテムやグッズを取り扱っている小さな店『雑貨ショップ　ナルミ』を開いていて、最近では全国に向けてネット通販販売も行っている。

　その親父によると、ＨＰポーションはギルドによる鑑定認証があれば個人店でもすぐに売れる人気商品らしい。だがギルドから仕入れると単価が高い上にほとんど利益が出ず、かといって冒険者から鑑定認証の無いＨＰポーションを仕入れるのはリスクが高くて今までは扱ってなかったそうな。

　俺の利益が増えて、さらにうちの飯が豪華になるなら是非とも親父の店を利用したいところ。ＨＰポーションは全部そっちで売ってしまおう。

　\*・・\*・・\*・・\*・・\*・・\*

「きたわっ！　パパ、切る準備して」

「おっ……おう。ありゃ凄い数だな…」

　華乃が視界に見えるや否や、その後ろにオークロードと無数のオークソルジャーが地響きと土煙を上げて現れる。数にして優に５０体は超えているだろう。吊り橋へなだれ込もうと突進する姿は、まるでバッファローの大群が全速力で向かってくるような光景だ。

　――ここはダンジョン５階。

　昨夜の成海家会議で現在置かれている状況を事つぶさに話し合った結果、家族の安全が最優先という方針に決まった。

　俺と華乃の顔はソレルのメンバー二人に知られている。こちらが生きていると分かれば、ろくでもないことが起きるかもしれない。さらに《簡易鑑定》によりレベルが異様に上がったと分かれば、背後にいる組織も動いて暴力も辞さず聞き出してくることも考えられる。

　そういった連中に対し俺と妹だけなら撃退できるかもしれないが、親父とお袋のレベルでは対冒険者には対抗できず無防備だ。ならば先手を打ってこちらから単騎で突撃しソレルを壊滅させるという強硬手段を考えたものの、相手がどこまで出てくるか分からない以上、現在のレベルでは危険も伴う。

　以上のことから安全を考えた上で喫緊の課題としてやるべき事は、《フェイク》取得と家族のレベル上げという結論に至ったというわけだ。まぁ考え過ぎかもしれないが、冒険者が跳梁跋扈し治安も悪いこちらの常識で考えれば、それくらい慎重に行ったほうがいい。

　まず《フェイク》の取得。

　レベルやジョブの情報を隠し偽装することは、ゲーム知識が露見するリスクを大きく減らすことに直結する。仮に今、俺や妹に対し《簡易鑑定》を使われたら大騒ぎになるだけでは済まないだろう。この状況を放っておくことは家族の危機的状況を作り出すことに等しく、一刻も早く《フェイク》取得に動くべき。

　家族全員のレベルについても早急に上げておきたい。何かしらトラブルがあってゲーム知識が露見し情報目当てに襲われたとしても、家族が皆レベル３０とかになってしまえばそこらの冒険者程度返り討ちにすることができる。力には力理論である。当然、無理なレベル上げはしない。確実に安全により早くレベル上げができるプランニングを組むよう心がける。

　そのため今日は学校を休んで、親父も午前中だけ店を閉めて《フェイク》取得とパワーレベリングをしにきている。華乃は【キャスター】だったので、オババの店で【シーフ】にジョブチェンジ済みだ。

　この５階とオババの店は魔力登録してあるので、ゲートで簡単に階層移動が可能になっている。両親にもゲートの使い方を説明すると酷く驚いていたが、これからダンジョンダイブを続けていけばもっと驚くことが増えていくので早めに慣れてほしい。

　――おっと。今はそんなことを考えている余裕はなかった。

「連れてきたよおおおお！」

「二人ともっ。華乃が橋を渡りきっても、先頭にいるオークロードが橋の中央越えてるまで切らないように」

「分かったわ！」「まかせとけっ」

　揺れるはずの橋の上をカモシカのようにぴょんぴょん跳ねながら駆け込んでくる我が妹。脚力も順調に上がったことで、あのような走り方ができるようになった。ゲームではどんなにレベルが上がっても速さこそ変われど通常と同じ走り方だったが、これもゲームが現実となって変わった１つと言える。

　そうこうしているうちに先頭のオークロードが橋の中央を越えてきた。目が血走っていつもより怒気が強いが何かしたのだろうか。吊り橋のワイヤーを切るよう合図をすると、お袋と親父が左右で分かれて同時に切り落とす。落ちる時の悲鳴までブモォブモォと騒がしいオーク達は、１０秒ほど経ってようやく経験値になった。

「おぉ！？　レベルアップきたぞ！　……凄いなこれは」

「あら……胸の奥が苦しくなったけど、その後はスッキリした感じね。どう、若くなった？」

　レベル一桁程度のレベルアップではそう大して若返らないと思うが、親父は綺麗になったと一生懸命お袋を煽てている。

　順調にパワーレベリングができそうだということで、アイテムを回収したら次のオークロードがポップする時間まで通常の狩りを行うことにする。ちなみにオークロードが随分と興奮していたのは「釣ってくる際にどれくらい攻撃が見えて躱せるか試していたから」らしい。オークは嗜虐性が強いが、逆に言えば挑発に弱い種族なのだろう。

　通路を歩き見かけたモンスターを狩りながら俺の知っているダンジョン知識を親父とお袋に垂れ流す。トラップやＭＡＰ、モンスターの特徴や倒し方。１１階以下の攻略に挑むため魔法攻撃手段が欲しいことや、機甲士になりたいことなど、これからの予定も話す。

「……その知識は……いや、そうだな。とりあえずここでレベル７までは上げたほうがいいのか」

「あぁ。それから体がどれくらい動くか試しながらゴーレム狩りまでに実戦練習をしたほうがいいよ」

　急激にレベルを上げれば今までと体の使い方が変わる。ＳＴＲが上がれば今まで両手でしか扱えなかった剣を片手で扱うことができたり、身体能力が上がったことで体の慣性をある程度無視したりもできる。そういったことに気づき、慣れるためにはやはり戦闘に時間をかけなければならない。

　肉体強化に慣れながらレベル８まで上げれば【ニュービー】のジョブレベルも１０に達し《スキル枠＋３》も覚えるはず。そうしたら１０階のオババの店へ行き【シーフ】にジョブチェンジし《フェイク》の取得する、というこれからの流れも説明する。

　親父は神妙にうなずいているが、分かっているのかどうか。まぁ、そこは俺と妹がサポートするので少しずつ覚えて貰えばいい。

「やった～！　《フェイク》覚えたよっ！」

　丁寧に説明していると、そこらを走り回ってゴブリンソルジャーを倒しまくっていた妹が駆け寄って報告してくる。試しに《簡易鑑定》を使ってみると……

＜名前＞　成海華乃

＜ジョブ＞　ファイター

＜強さ＞　相手にならないほど弱い

＜所持スキル数＞　０

「【ファイター】に、相手にならないほど弱い……か。スキル数が“０”というのは不自然だな」

「じゃ、３つくらいにしておこうかな～」

　《フェイク》は《簡易鑑定》からステータス漏洩を隠す、または欺くことができる認識阻害系のパッシブスキルだ。ジョブや強さなど、各項目のパラメータは自分で任意に設定できるが、華乃の“所持スキル数０”ように不自然に思われると《簡易鑑定》でも阻害が解けてバレる可能性がある。あくまで鑑定側の認識を誤魔化すあやふやなものに過ぎない。

　他に欠点としては《簡易鑑定》より上位の鑑定系スキルを使われたら見抜かれてしまうというのはあるが、そのレベルの相手は学校でもほとんどいないし、いたとしても戦うことがなければ使ってくることもないと思うので、今は考えなくてもいいだろう。

　ゲームのときは強さを隠すなんてスキルは使い道が無く、はっきりいって死にスキルだった。この世界のスキル評価でも工作員や諜報員でもなければ《フェイク》を貴重なスキル枠に入れるような物好きはおらず、大抵の人は持っていないようだが。

「もう一度橋落としやったら俺もソロ狩りして覚えてくるよ」

「わかったー。あ、そろそろオークロードがポップする時間だねっ、行ってくる」

「華乃ちゃん。気を付けてね」

　その後も何回かオークロードを狩り、親父はレベル６、お袋はレベル５まで上昇。俺も無事に《フェイク》を覚えられた。パラメータは【ニュービー】にレベル５くらいにしておこう。

　明日から学校に行こうと思ったが念のためもう数日は準備期間にするのもいいか。ソレルやこの世界のことをもう少し調べておきたいし、痩せたことで制服も直さないといけない。やることは多そうだ。

「そちらの資料閲覧は“冒険者階級”が７級以上からとなっております」

（冒険者階級制限があったか……）

　ここは冒険者ギルド１８Ｆにある図書室の、さらに奥にある資料室。

　資料室といっても本や本棚は無く、インターネットカフェのように壁で仕切られた半個室の場所にＰＣが置かれているだけ。このＰＣから冒険者ギルドのデータベースサーバーにアクセスできるのだが、その際には端末で認証する必要がある。

　調べようとしたのは冒険者ギルドに登録されているクラン情報、主にカラーズの二次団体“金襴会”とその傘下のクランについて。ソレルの背後に金襴会がいるのは知っているけど、実際の構成員や傘下である三次団体がどれだけいるのかなど分からない。それを知るためにここに来て調べようとしたのだが、どうにもアクセスできない。資料室にいる司書さんに聞いてみたところ、冒険者階級が足らないとのこと。クラン名すら閲覧不可とは思ってもみなかった。

　冒険者ギルド情報には重要度やリスク評価があり、冒険者階級による閲覧制限が掛けられているようだ。

　今の俺の冒険者階級は９級。冒険者学校の生徒なら自動的に９級からのスタートとなる。階級は上げるメリットを特に感じていなかったので冒険者登録をして以来、一切上げてこなかった。しかし今後はクエストや冒険者ギルド情報も収集していきたいので、この際に上げておくべきか。このＰＣでアクセスした感じでは７級もあれば今欲しい情報の大半は閲覧できるようなので、まずは７級を目指すことにしよう。

　昇級試験の日程を見てみると「毎週水曜日の午前９時と午後３時に８級昇格試験」とある。現在、水曜の午前８時。急いで受付に駆けつけ聞いてみたところまだ間に合うとのことで、受験費９８００円を払って指定された試験会場にやってきた――わけだが。

（見事にガラの悪いメンツばかりだな）

　来ている受験者はざっと１００人くらい。そのほとんどが若い……目つきも態度も悪いゴロツキって感じの冒険者ばかりだった。刺さりそうなほどツンツン頭に、某世紀末漫画にでてきそうな人相の三下悪党モドキ、他にも人相の悪い輩が沢山いる。髪型に個性を付けすぎだろ。

　もしかしてコスプレ会場に来てしまったのかと思い、入り口をもう一度確認しに行くが“８級昇格試験会場”という看板が立て掛けられたのでここで間違いはないようだ。

　午前の部だからなのか偶々なのか。ゲームでも赤城君達はよく絡まれていたけど、いくら何でも治安が悪すぎる。こういった威圧的な格好をするのが流行っているのだろうか。一部まともそうな人もいるが、隅っこで存在感を消すように縮こまっている。

　気にしても仕方がないので空いてる席に向かえば「へっへっへ」とか薄ら笑いをしながら俺に足を引っかけようとしてきたり、高価そうな武器を見せつけ、いかに自分が強いかを誇示したり、レベルや攻略階層を自慢したり、中には俺に絡もうとガンを飛ばしてくる輩までいる。

　《簡易鑑定》を仕掛けられた様子はない。

　先日に超肥満を脱して少々気の弱そうなぽっちゃり童顔男子になったとはいえ、見た目だけで判断して喧嘩を売ってるのだろうか。

　この場所がマジックフィールド内かどうかは分からないが、そんなものはどうとでもなる。うちの妹なんて見た目はロリ少女だが今や数百ｋｇの重さを持ち上げられる怪力少女と化しているし、うちの学校の猛者も皆が刈谷みたいな厳つい野郎というわけではなく、華奢な女の子が派閥を仕切っていたりする。見た目なんぞで強さを測っていてはいつか死ぬことになるだけだ。

　まぁ勝手に死んでくれればいいだけなので、そんなことを指摘するつもりはない。何人かのガラの悪い受験者に睨まれつつも華麗にスルーして１０分ほど待っていると、ようやく試験官が到着する。ビシッとスーツを着こなしており真面目そうな試験官で少しほっとした。

「それでは時間になりましたので説明を始めます」

　腕時計を見ながら大きな封筒から用紙を取り出し、全員に配り始める。用紙には試験内容と注意事項が書かれていた。

「試験内容はそこに書かれている通り簡単です。ダンジョン内に各自指定されたポイントへ行き、そこに置かれているモノを取ってきてください」

　試験内容は要約するとこうだ。

　・指定場所はダンジョン３階のどこか。

　・時間制限がある。ダンジョンに入ってから１２時間以内まで。

　・モンスターは別に倒さなくてよいが、場所的に戦闘となる可能性は高い。

　・他の受験者と何人とでも組んでも良い。ただし指定アイテムがある場所は受験者それぞれ違うため、人数分のアイテムを取りに行く必要が出てくる。

　・取ってきたアイテムは受験票と共に時間内に冒険者ギルドクエスト係に提出すること。

　特定の場所で指定アイテムやドロップアイテムを取ってこいなんていうクエストは多く、それほど珍しい試験内容ではない。ただ試験予定のダンジョン３階を往復するとなると相当な時間がかかることになる。１２時間という時間制限には気を配らねばならない。

　試験会場を見渡せば、２～３人のパーティーか、ソロで潜る人が多い模様。大勢で組んでいくと全員のアイテム収集に時間を消費しすぎるので少人数というのは妥当だろう。まぁ俺は最初からソロだが。

「ダンジョン内に入ったら端末のタイマーが自動で動作するので各自準備ができ次第、開始してください」

　端末画面の受注クエストという欄で確認したところ、俺の指定アイテムは何かが書かれた“文書”で、場所は３階のかなり奥に置かれている。

　早速荷物を取りまとめて部屋を出ようとすると――

「キミさぁ、俺らの荷物持ってよ～」

「おい、待てよっ」

　俺に絡む気満々だった輩がいることを前もって察知していたため、ダッシュでダンジョンに向かうことにする。アイツ等も流石に人が多いダンジョン前まで来て絡むようなことはしないだろう。

　全く面倒なことだ。

　いつもならダンジョンには学校地下１階にあるゲートから入るが今日は１階入り口から普通に並んで入る。早めに行きたいというのに相変わらず冒険者でごった返していて追い抜くわけにもいかず、３階に辿り着くまでに２時間もかかってしまった。

　３階からはメインストリートを外れて目的地までダッシュだ。レベルも１９まで上がったことで時速５０ｋｍくらいは苦もなく出せるようになった。ただし狩りをしているパーティーもちらほらといるので、見渡しの良い開けた場所以外はゆっくり走る様心掛ける。

「道中のモンスターも結構多いな……」

　モンスターは無視して走り去っているので倒していないが、３階付近が適正レベルならずっと逃げ回ることは不可能だろう。倒して行くにもそれなりに時間が取られるはず。複数人なら間に合わない受験者もでてきそうだ。それに目的地までに多くの分岐があり、どのルートでいけば一番近いのかを考えながら進まないと時間が足りなくなってしまう。思ったより難易度は高いのかもしれない。

　端末で現在地を確認しながら１０分ほど走り続け、ようやく指定のポイントへ着く。

　そこは普段なら数体のモンスターが動かず陣取っている“モンスター部屋”のはずで、戦闘は避けられないと思っていたのだが……中を覗くと眼鏡を掛けた中肉中背の男がポツンと立っていた。胸にギルドマークが入った制服を着ている。試験官だろうか。

　てっきり、指定された場所いるモンスターをどうにかして指定アイテムを持ってくるというのを試しているのかと思っていたのに、いいのだろうか。

「おや、もう来ましたか。待っていましたよ、冒険者学校高等部、一年Ｅクラスの成海颯太君」

　はて……知り合いだったろうか。ブタオの記憶を探ってみても思い当たらない。お袋が冒険者ギルドで働いているのでその関係者なのか、もしくは単に試験官だから俺のことを知っていただけか。

「ども。えっとどこかで会いましたっけ？」

「いえ、初めましてですね」

　それにしては……嫌な目付きをしているな。何かこう、恨まれているというか復讐者のそれだ。オラ嫌な予感がしてきたぞ。ここは早めに離れたほうがいいと俺の勘が囁いている。

「え～と、そこの書類を持っていけばいいんですよね」

「試験内容は変更にします。今から私と戦闘して勝ったら合格にして差し上げましょう」

　そういうと試験官は部屋の中央に置いてあった昇級試験の書類を拾い、勝手にビリビリと引き裂く。念入りに細かく千切ってやがる。

　ちょっと待てよと言おうとした矢先に《簡易鑑定》が飛んできた。一応《フェイク》により、レベルは５、【ニュービー】、所持スキルは１に見えるように偽装してある。俺もお返しに《簡易鑑定》したいところだが、今使ってしまうと不自然に思われるのでやめておこう。

「たしか……昇級試験申し込み時の君のレベルは確か５だったかな」

　こちらを無遠慮にジロジロと見てくるクソ試験官。俺はジャージにバットだから強さの指標になるものは何も無いと思うけどね。

「それでもこんなに早くここに辿り着くとは。流石は冒険者学校の生徒さんということかな？」

　言ってることから判断すると俺のレベルは上手く誤魔化せているようだ。しかしコイツは一体何者なのだろう。目の前の青年をよく観察してみる。

　装備品はしっかりとしたものを揃えているのが分かる。ミスリル合金の軽鎧に、牛魔の皮製とみられる小手とブーツ。武器はミスリル合金製の細剣だが付与魔法などは掛かっていない。見た目だけで判断すればレベルは１０から１５くらいだろうか。

　というかコイツは俺がレベル５だと分かった上で戦おうとしてるのか。

「いきなり試験変更って、そんな権限あなたに無いでしょ」

「権限？　あぁ、そんなことはどうでもいい。君が冒険者学校の生徒なのが悪い」

　冒険者学校の生徒だから悪い？　冒険者学校の生徒だと特別試験が課せられるルールでもあるのか。

「どういう意味ですか」

「まず罪その１、入学志願者を見る目が全くない事。罪その２、それにより優秀なこの私を入学試験で落としたこと。罪その３、君らは大した実力が無いのに冒険者界隈で持て囃されてウザいこと。罪その４、君らはいつも一般冒険者を見下していること。罪その５、君らは……」

　憎悪の表情を見せながら吐き出すように一気にしゃべり始める。罪とやらを言い終えると両手を広げて急に微笑みながら――

「――だからこうやって悪の芽は適度に叩いて掃除しないとね」

　ごちゃごちゃ言ってるが、要するに“冒険者学校に落ちた”から逆恨みをしてるのか。それで昇格試験を利用して冒険者学校の生徒が受験していたら先回りし、待ち構えていたというわけね。

「でも俺、防具というかジャージ姿だし、武器もバットしか持ってきてないんだけど」

「君が何の装備をしていたとしても結果は変わりません」

　ヴォルゲムートとの戦いによりレンタル武器も魔狼防具も大破したので、今はジャージにバットという、初めてダンジョンに入ったときと同じ格好をしている。レベル１９ならこんな格好でも３階くらいなら余裕なのだ。

　それにしても酷く楽しげで嗜虐的な顔をしていらっしゃる。

　冒険者学校の受験倍率は１００倍を超えるというし難易度が高いのは分かるが……落ちたからといってどうしてそんな性格が捻くれる。冒険者というのはエリート意識を刺激する職業なのか、どうにもプライドが高い奴が多くなりがちな気がする。

「それでは、じっくりたっぷり甚振って差し上げましょう」

　一歩前に踏み出すと同時に《オーラ》を全開で叩きつけてくる。この感じからしてもレベル１０～１５くらいというのが妥当だろう。俺よりもレベルがいくつか低いので逃げ切れるとは思うが、こちらも今朝から色々あってストレスが溜まっている。誰も見てないなら……ヤッチマウカ。

「どうしました？　私のこの強大な《オーラ》の前に竦んでしまいましたか？　逃げてもいいですよ？　無駄ですが。ここには誰も来ません」

　憎しみで歪みながらも笑いが止まらないといった何とも言えない表情。人間こうも屈折してしまってはお終いだね。

　目の前の男がレベル１５、基本ジョブは全てマスターしていると仮定すると、このバットで攻撃してもダメージは期待するほど出せないだろう。ならば拳で直接殴ってギルド関係者にコイツを叩きつけるとしよう。そうすれば昇級試験を合格にしてくれないかな。

　首の骨を鳴らしながらどう料理するか考えていると、後方から何者かがとてつもない速度で向かってくる気配を感じる……これは俺よりも速いか？　レベル２０を超えているかもしれん。

　逃げようか隠れようか判断している間も無く、到着してしまったようだ。

「こらこら、おいたしちゃダメでしょ～？」

　振り返って見てみれば、セクシーかつダイナマイトボディーの“くノ一”が仁王立ちしていた。

「こらこら、おいたしちゃダメでしょ～？」

「だっ誰だ、お前はっ」

　仁王立ちで腰に手を当て、静かに微笑むくノ一の格好をした女性。

　サイドスリット入りのミニスカートにピチピチの黒い網タイツ。胸元が開いていて大きなお胸とその谷間を強調する黒い着物。さらには花模様入りの半幅帯で縛られくびれた腰は実にセクシー。顔はマスクをして分かりづらいが、それでも相当な美人だと分かる。

　それにしてもかなりの速度で走ってきたというのに息一つ切らしていない。もしかしたらレベル２０よりもう少しレベルが高いのかもしれない。

　そんな闖入者とは対照的に激しく狼狽しているクソ試験官。この様子からこのくノ一さんが試験官の共犯ではないということが推測できる。仮に共犯なら“奥の手”を解禁しなければならないところだった。

「貴方、ここ何年かの間に冒険者学校の生徒を狙って強盗、傷害、強姦等、冒険者公務員法違反を繰り返しているわね？　それで調査依頼のクエストが出ていたのだけれど」

　ターゲットは冒険者学校のＥクラスのばかり。昇級試験の受験時を狙って犯罪行為を行っていると分かれば、あとは受験者の名簿を見ながら待っていれば現れると判断したようだ。

　というか、コイツは強姦までしてるのか。俺、男だからそんなことはしないよね？

「良かったわねぇ、この男は大の男好きみたいだから……貴方みたいな可愛い顔してる坊やは危ないところだったわ」

　……とんでもない奴だ。こんな凶悪犯はさっさと牢屋にぶち込み、永遠に閉じ込めておかねばならない。

「ふぅん、【ファイター】なのにぃ、【ニュービー】の弱い子を狙ってイジメてたわけね」

「なぁんだ、君も【ニュービー】か。焦らせやがって」

　互いに《簡易鑑定》を使った模様。しかしあのムチムチしたくノ一さんが【ニュービー】のわけが無い。恐らく俺と同じで《フェイク》による偽装を施しているはず。

　レベル２０を超えているとスキル枠に余裕が無くなってくるので、プレイヤーでもなければ《簡易鑑定》や《フェイク》なんて消してしまうのが普通だと思っていたが……もしかして彼女も対人を想定したキャラビルドなのだろうか。それとも見たまんまで諜報活動のためか。

「冒険者学校という諸悪の根源。そこに属するクズ共は全てこの手で浄化します。それを妨害するというのなら……君にも容赦はしない」

「それで強姦までやるんだぁ。とんだヘンタイ野郎じゃない。ふふっ」

　面白おかしくコロコロと笑うくノ一さんに、胸糞悪い顔をしたクソ試験官が勝ち誇ったように《オーラ》を放つ。だがレベルが１０近く上の相手に効くわけがなく、くノ一さんは微風を受けているかのように微笑みを絶やさない。

　互いに向き合い、今まさに戦闘が始まろうとしている。

　……が、ちょっと待って欲しい。

　コイツが倒され連行されてしまったら俺の昇級試験の失敗が確定し、受験料が無駄となってしまう。その前にどうにかならないか交渉してみよう。

「あの～ちょっとすみません、俺の試験のことなんですが……」

　このクソ試験官が昇級試験で指定された書類をビリビリに引き裂き、試験内容を勝手にＰｖＰに切り替えたことを伝える。俺としては強制でもないのにタイマンなんぞやりたくもない。なのでコイツを倒したら身柄をちょっと貸してくれないかと頼んでみたのだが――

「いやよ～面倒くさい。一応、貴方が先に見つけた獲物だし優先権はあげるわよ？」

「えっ、俺が倒すんですか」

「それができないならそこで指を咥えて大人しく眺めてなさい」

　はぁ……面倒なことになったな。くノ一さんは得体が知れないのであまり戦っているところを見せたくはないのだがどうしたものか。ここは一人でやったほうがいいのかね。

「……分かりました。それじゃ俺の方で処理しておくので、もう行ってもらって結構ですよ」

「えぇ？　何かヒミツでもあるのかなぁ～？　お姉さん興味出てきちゃったかも♪」

　くノ一さんには出て行ってもらおうとしたものの却って興味を持ってしまわれた模様。くねくねしながらも目を光らせている。どうしたら良かったんだ。

「もしかして君はこの私に勝てるとでも思っているのかい？　二人まとめて掛かってきなよ」

　クソ試験官も無駄に《オーラ》をぶつけてくるのでイライラゲージが鰻登りだ。昇級試験を受けに来ただけなのにどうしてこうなった。オラ爆発しちゃいそうだゾ。

　マニュアル発動をやらなければ大丈夫かな。今の俺はくノ一さんよりはレベル低いし、口止めすれば問題なかろう。

「それじゃそういうことなので……」

「君一人でいいのかい？　どちらかというと君はメインディッシュにしたいと思っていたのだけどね。まぁ先に半殺しで済ませておきますか」

　犯罪者っぽく唇をペロリと舐め上げ、ゆっくりと歩み寄り、５ｍほどの距離で俺と向き合う。全てはコイツが元凶なんだし遠慮はいらないよな。

　まずは《簡易鑑定》で調べる。

　ジョブは【ファイター】で、強さ表記が「相手にならないほど弱い」……ならば俺よりレベルが５つ下。レベル１４以下か。所持スキル数は「３」で、そのうち一つが《簡易鑑定》となれば大したスキルは持っていなそうだ。

　ただこれらの情報も絶対ではない。俺やくノ一さんのように《フェイク》でステータスを偽装していればこれらのデータも全てフェイク表示となり真実を見抜くことも難しい。対人戦を考えている冒険者は自分のステータスを隠したほうが油断を誘えるので偽装は常識なのだ。そういう意味では《簡易鑑定》など当てにならないと思っておいたほうがいい。

　そのため偽装を突破する鑑定ワンドをリュックに中に携帯してあるわけだが……コイツは単純そうだし偽装というパターンは考えなくて大丈夫だろう。

「特別にハンデをあげることにしようか。１０秒間、僕は攻撃しない。君はレベルが低いから分からないだろうが、今の君と僕にはそれくらいの実力差があるということを教えてあげよう」

　しかし先程からコイツは《簡易鑑定》の結果を妄信しすぎなのではないか？　《フェイク》なんて【シーフ】で最初に習得できる何の変哲もないスキルだ。その【シーフ】だってレアジョブでもなく、広く周知されている。ステータス偽装を全く考慮に入れていないのもおかしな話だ。

　ゆっくりと“手ぶらで”俺の２ｍ手前まで来てふんぞり返る。いつでも余裕で避けられると言わんばかりだ。にやけた面が気に障る。

「大丈夫なの～？　もしかして貴方も偽装しているのかしら」

　確かにレベル５だとしたら目の前の男にパンチを当てるのも難しいだろう。くノ一さんも頬に手を当て心配そうに見ている。だが今の俺はレベル１９。この距離で俺の攻撃を躱すのは容易いことではないはず。油断して無防備な状態なら尚更だ。

「フンッ」

　クソ試験官はミスリル合金製の軽鎧を着ているものの、腹の側面は金属ではなく薄い革なので斬撃には強くても打撃には弱い。２ｍという距離を一瞬で詰めて金属で守られていない脇腹を抉るように拳をお見舞いする。めり込んだときにポキポキとした小気味良い感触があったのでアバラの２～３本は持っていけたか。

「かっ……はっ……」

　数ｍほど横に吹っ飛び、何が起こったのか分からないような顔で折れた箇所を抑えて蹲るクソ試験官。呼吸が上手くいっていないみたいだが大量の余罪を抱えた犯罪者に慈悲なんてかけるわけもなく。当然追撃を行う。

　無防備の顔面を蹴り上げ、仰向けにしてから勢いよく右足首を踏みつけて折る。これで俺から逃げることはまず不可能となった。念には念のためスキルを撃たせないよう右肩も折り、首根っこを捕まえる。

「ひぁ……あぁ……」

「今から言うことを聞け。抵抗したら後何箇所か骨を折る」

「ひっ……」

　これから冒険者ギルド員を呼ぶ。あそこで散らばっている指定アイテムをビリビリに引き裂いた犯人だと証言しろ。その時に余罪も全て報告しろ。

　そう言ったものの汚い悲鳴を上げながら呻くだけで返事が無い。なので追撃するぞと脅すと聞き分けが良くなった。

「返事は？」

「はひっ……わ、わかった！　これ以上殴らないでくれぇ！」

　というか性犯罪者如きにこんな良い防具いらないだろ、俺が貰っておくか。

　ギャーギャーと泣き叫ぶので殴って気絶させてから防具を剥ぎ取りにかかる。レベル１５前後の冒険者が着る防具だが、買うとなれば数百万円クラス。牛魔の小手とブーツはクリーニングに出しておくとして、この細剣も使えるな。いい仕事したぜ。

「容赦ないのねぇ。でもあなたも《フェイク》を覚えていたなんて……」

　ごぞごぞと防具を外し着こんでいると後ろからくノ一さんが何か考え込むように話しかけてくる。《フェイク》はそちらも使っているというのに、俺が《フェイク》を覚えていたとして何かあるのかな。

「ギルド員に報告して言質を取った後はコイツの身柄を預けますので好きに使ってください」

「でも私が倒したわけじゃないし……そうね、クエストの半額をあなたに上げるわ」

　端末の連絡先を教えてくれればクエスト完了時の報酬を半額くれるという。金額を聞くと優に１００万を超えてきた。こりゃ貰うしかねぇ！　しかしレベル１４以下の雑魚を倒してもそれ程の額なのか。冒険者階級を上げる動機が増えたぜ。

　冒険者ギルド員が来るまで暇なのでそこらに座って世間話をしてみた。くノ一さんは冒険者ギルドや公表できない事件の捜査に協力する国家寄りのクランに所属しているらしく、クラン名も名前も公表できないとのこと。よって名前も教えてもらえなかった。

　そういった組織があるのだろうとは予想していたものの、こんなお色気くノ一だとは思わなかった。一応、冒険者階級は４級で、【シーフ】のみで構成されたクランに所属しているというのは教えてもらえた。４級か。

　冒険者階級については、１級と２級は称号のようなものなので事実上の最上位は３級となる。４級はそれに次ぐ上位の冒険者階級となり、冒険者ギルド内にも相応の影響力を持っているとかなんとか。くノ一さんもレベルも２５前後のようだし、そんな人が所属しているクランも普通ではなさそうだ。

　その後も他愛のない話をしていると、連絡した冒険者ギルド員がようやく到着する。気絶しているクソ試験官を運んでもらいつつ事情聴取の流れとなり、くノ一さんが証言してくれたので事はスムーズに運んだ。

　そして、別れ際にウインクをしながら気になる事を言ってきた。

「そういえば……冒険者学校の生徒にうちのクランの新人研修員がいたわ。会ったらよろしくね♪」

　新人研修員か。可愛い子だというが、くノ一さんのクランに入ろうとするくらいだからＥクラスではないのだろう。俺とは縁が無さそうかな。

　クソ試験官には指定アイテムである書類を勝手に引き裂いたという証言を吐かせ録音してあるので、その音声を渡しに冒険者ギルドにも行くことにする。面倒だが昇級がかかっているので仕方がない。

　――が昇級試験の結果は保留となった。

　なんと合格判定はクソ試験官の裁判の結果次第となり、最低でも１年はかかるとのこと。そんなに待つくらいならもう一度受けたほうがいいじゃないか……はぁ。

　気を取り直して明日は数日ぶりの学校に行くとしようかね。

「颯太～カヲルちゃんが迎え来たわよ～」

　数日ぶりの登校。カヲルには今日から復帰すると伝えてあり律義に迎えに来てくれたようだ。少し痩せたので今の体型に合うようにサイズ調整した新しい制服を着こなし、軋む階段を降りる。玄関にはいつものようにカヲルが待っていた。が、何か様子が変だ。

「そ、颯太なのか？」

「あぁ。ちょっとダイエットが成功したんだけど……大丈夫か？」

　何やら胸を押さえ苦しんでいるように見えるけど風邪でも引いているのだろうか。一応大丈夫とのことだが……あ、もしかしてシェイプアップしイケメンになった颯太君に惚れちゃったかな？　いやぁモテる男はつらいぜ。

　などと妄想しながら、いつものように無言でカヲルの後ろに付いて歩いて通学する。痩せたとはいえ、十分にぽっちゃりしてるからイケメンになるまではもう少し時間が必要なのだ。もう少しだけ。

　初夏でよく晴れているということもあり、朝のこの時間でも２０度を超えるほど暖く、時折吹く南風が気持ちいい。入学式のときは肌寒い温度にもかかわらず歩くだけで汗が噴き出し、分厚い脂肪のせいでずっしりとした重力を感じていた。それと比べれば今は別人のような軽さではある。

　現在、身長は１７０ｃｍそこそこなのに体重はまだ８０ｋｇほどある。未だ全身に結構な脂肪があるとはいえ、筋トレも欠かさずしているので筋肉量も増しており体のバランスは大きく改善している。一方、《大食漢》の効果も相変わらずなので未だ食欲は凄まじく、隙あらば太らせようとしてくるお袋もいる。油断しないよう体脂肪には気を付けていきたい。

　その《大食漢》の鑑定結果も食欲や金策と並んで大きな悩み事になっている。急を要するというわけでもないのでこのスキルを今後どうするか追々考えていこうかね。

　いくつもの施設が乱立している広い校内をカヲルの後ろに付いて歩き、１年Ｅクラスの教室へ。ゆっくりと自分の席に着くが……クラスメイト達がまるで珍獣を観察するかのように俺を遠目からジロジロとみてくる。

「あれ？　ブタオ、ちょっぴり痩せたか？」

「ブタから子ブタになった感じかも～」

「それ若返ってるじゃん、アハハ」

「……ちょっと風邪を拗らせてね」

　いつもはスルーされていたのだが、急にクラスメイトからの生暖かい声に戸惑い、非常に居心地が悪い。オラ小心者なんだからもうちょっと優しい視線で眺めて欲しいのっ！　確かに短期間で２０ｋｇも体重を落としたのはやりすぎだと思ってたけどさ。

　そんな感じで自分の席で縮こまって教科書を読んでいるフリをしていると、スイートなハニィ達が目の前に降臨し、元気のいい声を掛けてくれる。

「な～る～み～君っ！」

「もう体調は大丈夫なの～？　なんか随分と細くなってるけど、壮絶な風邪だったのかな～」

　頭の両サイドからおさげを垂らした大宮さんと、落ち着いた雰囲気でゆるふわ眼鏡っ子新田さんの仲良しペアだ。今日も二人ともお美しくていらっしゃる。体調を心配してくれるのは有難いが、痩せた原因が「壮絶な風邪」ではなく「壮絶な死闘」だなんて言えるわけがないので「もう大丈夫だよ」と誤魔化しておく。

　軽く挨拶をして話しかけてくれた理由を聞いてみると、何やら午後の授業では闘技場で剣戟を学ぶ授業があるらしい。

「それでねっ、二人で組んで練習するんだって。成海君は休んで来てなかったから、まだパートナーいないでしょ？」

　二人組を作れだと……ボッチはこのワードを聞くだけでダメージを受けてしまうというのに。

　しかし剣戟の授業で二人組とは、いきなり地稽古でもするのだろうか。この学校の体育とは部活と同じでダンジョンダイブに関するものが多く、剣戟以外にも様々な武術を学ぶカリキュラムが組まれている。色んな武術からある程度の型を学んでダンジョンダイブに繋げるのは確かに良いかもしれない。

「あの子の相方が今日学校休みでねっ。それで私があの子と組んで～」

「そうそう、私が成海君と組めば上手くペアができるでしょ～？　どうかな～って」

　大宮さんの視線の先には存在感を消して陰に潜むように久我さんが席に座っていた。日頃から無口で何を考えているのか分かりづらいタイプの女の子だけど、ルームメイトの相方とはそれなりに喋っているという。

　余り者の俺と相方のいない久我さんが組めば二人組というのは簡単に解決する話なのだが、彼女は鑑定スキル持ちで工作・諜報員という背景があるので余り近づきたくはない。大宮さんと新田さんが上手くバラけてフォローしてくれるというのなら渡りに船だ。

　とはいえ、野郎が女の子の中に混じるのには少々気が引ける。俺の答えは……

「ヨロシクオナシャース！」

　地にひれ伏さんばかりのイエスである。もしかしたら「可哀想なボッチに一応声を掛けてあげただけ」という憐れみと社交辞令を足して２で割ったものに過ぎなかったかもしれないが、いや恐らくそうだが、図々しくもここは参加希望表明していく所存だ。

　ダンジョンに潜ってばかりでクラスメイトと積極的に関わる機会が無かった。それ以前にスライムに負けた最弱という悪評もあるため相手にされずボッチ状態が続いていた。そんな俺に、わざわざ声を掛けて誘ってくれる大宮さんと新田さんには是非お近づきになりたいのだ。やましい意味ではないよ。

「武器は授業で配るみたいだから大丈夫だけど、体に合うプロテクターのサイズだけ申告してねっ。それにしても……凄く雰囲気が変わった気がする」

「痩せたのは勿論だけど～。頼もしい感じがするね～」

「そ、そう？」

　今の見た目は童顔の妹に結構似て、目が大きく柔和にみえる童顔のぽっちゃり少年。この１ヶ月ちょっとの期間、頑張って筋トレしまくったので服の下は結構ムキムキだ。元が超肥満で糸目になっていたブタオなので確かに雰囲気も変わっていることだろう。

「それじゃまた後でね成海君っ」

「剣戟ではお手柔らかにね～」

　軽くこちらに手を振り、二人は他の女子グループに入っていく。

　大宮さんは部活勧誘式におけるＥクラスの扱い方に一時期落ち込んでいたのだが、どうやら持ち直し、持ち前の明るさを取り戻しつつあるようだ。一方の新田さんは学校生活を楽しんでいるのか相変わらずニコニコとして周りの雰囲気を和ませてくれる。復帰早々、そんな彼女らと話せたことで晴れやかな気分になれたのは有難い。

　さぁて、今日も一日頑張るゾイ！

　\*・・\*・・\*・・\*・・\*・・\*

　昼食の時間。

　クラスメイトの大部分は学食へ移動していて、教室に残っているのは１０人もいない。俺はと言えばいつも学食ばかりだったので今日は気分転換のため購買でジャムパンと牛乳を購入し、教室でゆっくりと食べている。ここ数日休んでいたので授業の遅れを少しでも取り戻そうと、大宮さんから借りた数学のノートを斜め読みしているところだ。

　まだ高校生活が始まったばかりだというのに授業内容も入試問題レベルを解かされる始末。俺の通っていた高校と同じと考えていては学力でも一瞬で落ちこぼれになり得る。一応、元居た世界で２流といえ理系の大学を卒業した身として、理科系で高校１年生如きに負けるつもりはない。問題を書き写しながらあんぐりと口を開け、パンに齧り付いていると……遠くで少しの騒めきと俺の名を呼ぶ声が聞こえた。

「ちょっとそこの貴方。成海颯太というものはいるかしら」

　やや小柄ながらもピンと伸ばした背筋に、ウェーブのかかった碧色の長い髪。凛として気が強そうな目と小ぶりな鼻。口元を黒い羽扇子で隠しても良く通るはっきりとした口調。次期生徒会長とは別方向の”ＴＨＥお嬢様”な女生徒がそこにいた。

　制服のスカーフの色が青なので２年生。特に服装などは弄ってはいないが、その佇まいから上品な雰囲気を醸し出し、上流階級、またはその関係者だと分かる。

（あの人は確か……）

　上位クラスであろう人からの呼び出しに、クラスメイト達があれが成海だとまるで犯人かのようにこちらを指差し息をひそめた。俺とてあまり関わりたくないが、教室の空気が冷たくなってきたので仕方がなく名乗り出ることにする。

「俺が成海ですが何か御用で？」

「貴方が。ふぅん」

　頭のてっぺんから爪先まで何往復もギロギロと睨みつけて見分してくる。なんというか実にいたたまれない気持ちになる。

「ここでは何なので。ついてらっしゃい」

　有無を言わさず何処かへ歩き出すお嬢様。飯を食っている最中なので後にしてください、なんて言えるわけもなく、トボトボと彼女の後ろをついていくことにする。

　何度か廊下を曲がり階段を上がって誰もいない空き教室に入ると、ハガキサイズの白い封筒を差し出してきた。こんな誰もいないところで二人っきり。もしかしてラブレター的なものですか？

　見た感じは普通の封筒に見えるが、封は何かの植物のマークが入った蜜蝋で閉じられている。表には「成海颯太殿へ」と書かれているだけで裏を見ても送り主の名前はどこにも見当たらない。

　目の前のお嬢様からはミジンコを観察するような目で見てくるし、ラブレターのような好意からこの手紙を渡したのではないとは気づいていた。むしろ俺に対し負の感情が垣間見える。

　彼女が苛立って見えるのはこの手紙の主と何か関係があるのか。封を開けようとすると――

「その手紙を開ける前に質問に答えなさい」

　今までの声と違って低く警告するような声色で言ってくる。状況が掴めていない今は大人しく聞いておくほうがいいだろう。

「なんでしょうか」

「先日。わたくしの所属するクランメンバーとお会いしたでしょう……」

　クランメンバー？　どこのクランだろう。ソレルじゃないよな。

「その際に、クランネームと名前は言っていまして？」

　その質問が来るということは、あのくノ一さんのことを指しているのか。機密行動をすることが多いクランだそうで、結局名前もクランネームも機密だとか言って教えてもらえなかった。そういえば、くノ一さんは別れ際に「冒険者学校にクランの新人研修員がいる」とも言っていたけど、この人のことか。早速会いに来てくれて嬉しいやら困惑するやら。

「クランネームどころか名前も教えて貰えませんでしたね」

「そう。それなら次の質問。あなたのレベルはおいくつ？」

　レベルを聞かれると同時に《簡易鑑定》が俺に向けられる。

　今現在は学校のデータベースと同じ【ニュービー】でレベル３に見えるようにしている。だがそれは嘘であると確信している模様。くノ一さんからクソ試験官を倒した時のことを聞かされているのかもしれない。

　目の前の女生徒と事を荒立てたくはないが、教えるつもりも全くない。できるだけやんわりと答えることに努める。

「レベル等は秘密にしています。これは俺なりのプランニングなので、どうかご理解ください」

「……そう。では最後の質問。あなたは……何者？」

　これまたえらく抽象的な質問だな。《フェイク》で偽装しているからってそこまで警戒されるものかね。赤城君やカヲルもジョブチェンジしたというし、１年Ｅクラスの生徒とはいえ【シーフ】に就いていることが、そこまで珍しいものではないだろうに。

　もしかして《フェイク》というスキルは一般的なものではないのだろうか。それなら先日の《簡易鑑定》を妄信していたクソ試験官や、《フェイク》に対して妙な反応してきたくノ一さんの態度に頷けるものがでてくる。とはいえ現時点では断定できないので惚けておくしかない。

「何者と言われましても。１年Ｅクラスの成海としか言いようがないですね」

「……」

　そう答えると目の前の女生徒から一瞬、殺気と《オーラ》が溢れ出る……が直ぐに引っ込める。俺と明確に敵対しようとしないのも、この手紙の主が関係してくるのだろうか。そも、くノ一さんとは友好的に別れたし、その関係者と敵対的になる要素なんてないはずだ。

　ちなみにこの女生徒は楠雲母というゲームでもそれなりに人気があるサブヒロインだ。キララちゃん、もしくは身近な人からはキィちゃんと呼ばれていた。子爵位を持つ家の嫡女で、この学校でもそれなりの立場を築いている。

　ＢＬモードのピンクちゃん使用時以外ではほとんど登場しないので、赤城君かカスタムキャラでしかプレイしたことない俺には残念ながら詳細は分からない。それでも「冒険者学校の実力者」「ピンクちゃんのライバルで保護者」「大の男嫌い」「背後に大物が多数」というくらいの情報は知っている。

　彼女は校内に多くの生徒を従えていて色々な意味で非常に目立つ。下手に関われば面倒くさいイベントがわんさか降りかかってくるので、できれば距離を開けておきたい人物の一人だった。そう考えればこの封筒も面倒事でしかないように思えてきたゾ。

「……それでは、今からその中の手紙をお読みなさい」

「はぁ。それじゃ開けますよ」

　気は進まないが読まざるを得ないので丁寧に封を開けることにする。中から出てきたのは綺麗な模様で縁取られたクランパーティーの招待状。細い筆のようなもので丁寧に書かれている。送り主は……おいおい。

「”くノ一レッド”のクランリーダー、御神遥さんからですか」

「ええ。ちなみに先日、貴方と会ったのは副リーダーです」

　再び羽扇子を取り出し上品に口元を隠すキララちゃん。

　くノ一レッドと言えば女性の【シーフ】だけで構成されているクランとか以前聞いたことがある。そのクランリーダーである御神はメディアにもよく登場し、グラマラス美人としても有名人だ。ということは先日会ったくノ一さんも、目の前のキララちゃんもくノ一レッドの一員ということか。

　それにしても。くノ一さんとちょっと会っただけの俺なんかをどうしてクランパーティーに誘うのか。理由を聞いてみたいがキララちゃんの先程の質問から推測するに、何も教えられてはいないのだろう。

「クランパーティーといっても身内でのお茶会のようなものですわ。ただそちらに書かれている通り、御神様直々のご招待。くれぐれも失礼のないように」

　ふむ。身内の女性だけのクランパーティーに、正体が良く分からない野郎が来るかもしれないと聞いて警戒していた。だがクランリーダー自らが招待した客なので無下にはできない。そんなところか。

「では、その日にお待ちしていますわ」

　そう言い終えると、足音を立てずにそそくさとこの場を去って行ってしまわれた。本当は断りたかったのだけど後が怖いので出席するしかなさそうだ。

（日時はクラス対抗戦が終わった頃くらいか）

　重いため息を吐きながらどうしたものかと思案していると、午後の授業開始５分前の鐘の音が聞こえてくる。そういえば飯も食いかけだった。急いで戻らねば。

　食べかけだったパンを牛乳で急いで流し込み、急いで体操着に着替え、剣戟の授業の集合場所である闘技場３番へ早歩きで向かう。

　まったく。これから体を使う授業があるというのに、突然の呼び出しのせいでどっと疲れてしまったではないか。

　……しかしながら、今日の剣戟の授業は初回ということもありそれほど激しい内容ではないだろうし、ゆるふわな新田さんとペアを組むというなら間違っても疲れ果てるなんてこともないはず。むしろキャッキャウフフしながらの練習になることは間違いなく、待ち遠しいまである。

　無意識にスキップになっていた足を諫めながら、分厚い外壁で作られた闘技場３番に到着。中は強烈な照明が炊かれており眩しいほど白い。

　ここは４つある闘技場の中では３番目の大きさ施設というけれど、天上は高く、俺が元の世界で通っていた高校の体育館くらいの広さはある。当然全域がマジックフィールド内。床や壁も衝撃に強いタイルが貼られており肉体強化前提の訓練をすることが可能だ。

「まだペアを組んでいない生徒はいないか？」

　担任の村井先生が入ってくるなり名簿を見ながら確認してくる。ペアの相手がいなければ村井先生自らが組んでくれるそうだ。それは罰ゲームにしか思えない。

　そして何故クラスの担任が体育の授業を主導しているのかというと、この人は冒険者大学卒。つまりこの冒険者学校高等部のＡクラス卒なのだ。そこらの冒険者以上にレベルが高く経験も積んでおり指導も可能とのこと。それがどの程度の強さなのか《簡易鑑定》してみたい気はするが今は止めておこう。

　先生の背後には幾人かのインストラクターと【プリースト】のイケメン先生も控えている。応急処置だけでなく再生魔法という手段を無料で受けられるので、もしものときも安心だ。

　クラスメイトには全身に装着する黒いプロテクターと硬いゴム製の剣が手渡され、各自装着しながら担任の説明を聞いている。これから行うのは剣で打ち合う剣戟の地稽古だ。

　剣戟というのはその名の通り剣を使った武術だが、剣道と違うのは対人というより対モンスターを重視している点だという。モンスターは弱点や体の大きさ、攻撃手段がバラバラなので、どう立ち回っていくかが対人とは大きく異なる。

　剣戟で使う武器も本来は片手剣、大剣、刀、短刀など様々な武器がごちゃ混ぜで統一性なんてない。間合いの取り方も武器や相手によって変わるため、基本的にはヒット＆アウェーのスタイルが好まれる。

　しかし今日の剣戟の授業ではヒット＆アウェーなんてせず、武器も軽いゴムでできた剣のみ。ペアを組んで正面から相手と打ち合う地稽古がメインなので、やることは剣道に近い。お互いが打ち合って改善すべき点があれば、インストラクターの指導が入るといった感じで進めていくらしい。

　ペアの相手はレベルが同じくらいの相手で組むのが一般的であるものの、このＥクラスはダンジョン歴が２カ月もないためレベル差も然程なく、誰と組んでも問題にならない……と思われている。

　今回、俺とペアを組むことになった新田さんは【アーチャー】志望で、メインウエポンは弓。近接武器はほとんど使ったことがなさそうなので、気づかれないように手を抜いて戦った方がいいだろうか。視線を向ければ小声で「よろしくね♪」と言って小さく手を振ってくれた。いやいやこちらこそ♪

　一方、大宮さんは久我さんとペア。小柄で【ウィザード】志望の大宮さんと、スラッとした体形の久我さん。志望ジョブや体格の違いも経験の差も勉強になるのでそこは頑張ってもらいたいが、肝心の久我さんはやる気があまりなさそう。気だるい目をしていらっしゃる。

「それでは始め」

　探り探り打ち合うクラスメイト達。冒険者志望とあってほとんどのクラスメイトが真面目に取り組もうとしている。中にはカヲルのように剣道経験者もいて、見事な構えをしている人もちらほら。

　俺はといえば。新田さんとのレベル差は鑑定して調べていないが大きいはずだ。それにほわほわな女の子相手にどこまでやっていのか分からない。最初は受けてみようかしらん。

「私、剣術ちょっと自信あるんだよね～」

　腰に軽く手を当て自信を誇示するかのように大きめの胸を張る新田さん。剣術に自信があるというからには以前に剣道でもやっていたのだろうか。しかし、どんなに剣の腕があろうとマジックフィールド内ではレベル差がモノをいう。俺に通用する事はない。

（自信があるようだが、その自信を折らないように気を付けないとな）

　可愛らしく髪をかきあげ、ゆっくりと腰から木剣を引き抜く姿が微笑ましく映る。そう警戒せず新田さんの構えをよく見てみると――

　重心を下げ、右手に持った剣を前に、左手は魔法を使うかのような引いた位置。魔法剣士がよくやる構えだ。ダンジョン経験が浅いＥクラスの生徒がやるような構えではない。

（――いや、そこではない）

　それよりも頭の中で警鐘音を鳴り響かせるものがある。

　呼吸に合わせてゆらゆらと剣先を揺らし、細かにフェイントを掛けて初動を見切らせない、この剣術スタイルは確か。

　突如、強烈な既視感を感じ、ゲーム時代に俺を殺すべく追いかけまわしに来た”アイツ”の姿が稲妻のように脳裏を過ぎった。

「ねぇ。成海颯太君って――」

　正面から俺の目の奥を覗くように反応を窺う新田さん。さっきまでと全く同じはずの柔らかい微笑みが、まるで悪魔の形相に見えてきた。

「――もしかして。災悪クン……だよね？」

（マ……マジですか……）

　目の前の少女の周りが大きく揺らぎ、得体のしれない空気が流れ出てくる錯覚に陥る。いつの間にか俺の鼓動も大きくなり、緊張により思わず生唾を飲み込む。

「その反応はやっぱり！　そうだと思ったのよね～」

　剣戟の最中だというのに可愛く飛び跳ねて喜びを表す新田さん。俺はといえば、げんなりして鬱でどうにかなりそうだ。何人かのプレイヤーがこちらに来ているかもしれないと想定はしていたが、よりにもよってコレなのか。

「最後に向かい合ったのは悪魔城の時ぶりかな～。あのときはウチの団員いっぱいやられちゃったけど」

「そう……だったな。そのときは俺もやられたけど」

　こちらの世界に来るまで俺と新田さんは“競い戦い合ったライバル同士”だった。正確には――

　俺はＰＫ（※１）、新田さんはＰＫＫ（※２）というロールプレイをしていたのだ。

　「ダンエク」ではプレイヤーを攻撃して殺すことができるＰＫシステムというのを採用しており、スリルを求めてゲームを始めた俺はＰＫになることを決意。色んなプレイヤーに喧嘩を吹っ掛けては殺し、または返り討ちにされていたものだ。

　ＰＫになれば倒したプレイヤーから手っ取り早く武具やアイテムを強奪できるという美味しい特典があるわけだが、プレイヤーを殺害してしまうと指名手配され、１０階にあるオババの店のようなプレイヤー達が使う拠点に一定期間入れなくなるデメリットもある。

　指名手配された状態でさらにＰＫをし続けると冒険者ギルドから高額な賞金が懸けられ、“永続的なＰＫ”という判定になってしまう。そうなるといくら善行を積んだところで元には戻れず、賞金目当てにＰＫを狩るＰＫＫが動き出し、延々と戦いを強いられ続けることになる。

　またＰＫの状態で死んだ際、もしくは殺された際には大幅なレベルダウンと所持装備、アイテムの全ロスト、さらには不名誉な称号を付けられてしまうデメリットもある。俺の場合は【災厄の悪党】、略して“災悪”と呼ばれていた。

　このようにＰＫは、活動の制限や殺されたときのリスクが余りに大きいためメリット、デメリットを考えてなる者はいない。ＰＫをやり続けていられるものは総じて俺のようにスリルを味わいたい快楽者か奇人だらけとなる。

　かくして、俺というＰＫと、そんなＰＫを追って倒そうとクランを作ったＰＫＫクランリーダーの新田さんに接点が出来上がるのは必然。何度も追いかけ追いかけられ、奪い合い、襲い襲われ、殺し合った。

　俺と彼女がこちらの世界に来るまでの直近のゲーム状況とは、そんな感じだったわけだが――

　目の前の少女を観察する。

　漆黒のフルプレートと膨大なオーラを纏い、自在の剣術で魔剣を振り回し、狂気じみた行動力で俺を追いかけまわした【暗黒騎士】のイメージからはかけ離れた……可愛らしいスポーツ眼鏡を掛けたお姉さん系女子がいる。

「え～と、カスタムキャラなの？」

「うん、リアルの私だよ～。でも成海君はそうじゃないよね」

　そう。俺は「おまかせキャラ」を選んだらゲームでも出てくるブタオに転生してしまったのだ。あの時の選択を何度後悔したことか。今となってはダイエットも成功できそうだし、家族との仲も良好なので何の問題もないが。

　一方の新田さんは「カスタムキャラ」を選んだらキャラメイクするどころか問答無用でリアルの自分になってしまったそうだ。新田さんのリアルはてっきり凶悪な顔をした巨体プロレスラー系女子かと思っていたけど、こんなに可愛かったのか。

「……で。なんで俺の正体が分かったの？」

今は《フェイク》を所持しているが、それは最近に入れたもの。もしかして俺に気づかれないよう《簡易鑑定》をしたのだろうか。そんな方法は知らないが。

「なんとなくね～。決め手は“ペンデュラム”を見たときの反応だけど」

　向かい合ったときに剣先を細やかに動かし攻撃タイミングを取りながらフェイントも掛けるペンデュラムとかいう剣術スタイル。新田さんのＰＫＫクランは、ゲームなのに本格的な剣術を導入し、軍隊のような規律と戦術で対人戦を仕掛ける、まさに悪魔のような対人特化の剣使い集団だった。

　噂によれば自らが団員に剣術を指南し、クランメンバー全員の戦力を底上げをしていたというが本当だろうか。

　今の新田さんにはゲームの時のように膨大なオーラや数多の剣術スキルがあるわけではない。しかしＰＫだったときに至る場所で数えきれないほど剣を交え、何度も殺されている身としては警戒感を抱かざるを得ない。

　軽く微笑み、怪しげな火を灯したかのような目で再び俺の顔を覗き込んでくる新田さん。暗黒騎士だったときの仕草を思い出してしまう。

　おい、まさか俺を殺す気じゃないだろうな……

（※１）ＰＫ

Ｐｌａｙｅｒ　Ｋｉｌｌｅｒの略。所持金やアイテムを奪うなどの目的で、一般的なプレイヤーを意図的に攻撃するプレイヤーのこと。通常は悪とされており、プレイヤーからは恐れられ忌み嫌われている。

（※２）ＰＫＫ

Ｐｌａｙｅｒ　Ｋｉｌｌｅｒ　Ｋｉｌｌｅｒの略。ＰＫを専門に攻撃し倒すプレイヤー、または組織。プレイヤーを倒す行為そのものはＰＫと何ら変わらないが、忌み嫌われているＰＫを倒すＰＫＫは歓迎されている場合が多い。

　僅か２ｍほどの距離で剣を向け合う俺と新田さん。ゲームの時ならば密着といっていい程の距離。刹那の間に無数の斬撃とウェポンスキルが飛び交っていたことだろう。

　そのような緊張感は欠片もなく、風になびくような声でえげつない質問をしてくる。

「こちらではＰＫをやるつもりはないの？」

「……やるわけないだろう。現実となった世界でそんなことできると思うのか？」

「じゃあ～私がこちらの世界の“災悪”になろうかしら……」

　目の前の少女は何を言っているんだ。つい呆然としてしまうが今は授業中。話してばかりいるのもまずいので適当に剣を合わせながら小声で会話することにする。向かい合っている新田さんが本気で打ち込んでこないのは分かっているが、どうしても身構えてしまう。

「もう冗談だってば～。こちらの世界ってダンエクと色々違うでしょ？　常識だとか、人の命の重みだとか。だから成海君と意見交換したいなって」

　確かに普通にこの学校に通い生活していると元の世界のような感覚に陥ってしまうことがある。しかし、この世界ではＰＫやＭＰＫ紛いの事が頻繁に起きるし、攻略クランは平気で殺し合う。爵位持ちが平民に酷い仕打ちをしても法では裁かれないことなど珍しくもない。

　そんな理不尽を見て「平等にしろ、差別を無くせ！」「人権を、秩序を守らない奴を懲らしめろ！」なんて思ってしまうのは仕方のないことではある。こちらの世界に来たからといって元の世界の倫理感や常識を脱ぎ捨てるのは簡単ではないのだから。

　それでも俺達がトラブルを避けて生き抜いていくにはこちらの情報を集めて上手く適応していかなくてはならない。命の価値だとか法や秩序の差異に注意を払うことを忘れてはならないのだ。

　新田さんはそれを相談したいと言っているのだろうが――

「と、言われてもな。そもそも俺とお前はダンエクでもほとんど話したことが無い。それどころか敵同士だった。意見交換するにも信頼関係の構築が先じゃないのか」

「えっ。もしかして口説いてるの？」

「……」

　両頬に手を当てて恥ずかしそうな“フリ”をしているけど、ゲームでは目が合ったら即殺し合いになっていただけに違和感が凄まじい。

　新田さんは外を歩いていたら目を引くほどの美人だし、正体を知らなければ柔和な笑顔にコロッといっていた可能性は……残念ながら非常に高い。だが正体が分かってしまった今、特にときめくものはない。むしろ引くまである。

　とはいえ俺も確認したい事は多々ある。そも、数えきれないほどのＰＫ活動により殺戮と略奪を繰り返し悪行を積み重ねてきた俺が、正義の執行者である新田さんの人格をどうこう言うのもおかしな話かもしれない。忌避されるとするなら俺の方なのだから。

「今分かっているプレイヤーは俺とお前だけか」

「“お前”なんて言うのやめてよ～。リ・サって呼んで♪」

　妙にくねくねしながら違和感をまき散らす。どうしてそんな親し気に俺に話しかけられるのか気になるがまぁいい。

「とりあえず《簡易鑑定》するがいいか？」

「いいけど～。無視しないでほしいかな～」

＜名前＞　新田利沙

＜ジョブ＞　ニュービー

＜強さ＞　相手にならないほど弱い

＜所持スキル数＞　２

　これが《簡易鑑定》の結果なのだけれど《フェイク》により改変されているのか判別がつかない。そこらの冒険者ならともかく、偽装を行っている可能性が高いプレイヤーや諜報員に使うには信頼性が著しく低くなってしまう。

「ちなみに《フェイク》は使ってる？」

「ソロでこっそり潜っているんだけどね～。まだレベル５よ」

「……レベル５？」

　ならばオババの店には未到達か。レベル５でも行くことは可能だろうが、命を掛けてまで行くほどでもない。一応１０階まで行ったかどうか聞いてみても、やはり一度も行ってないとのこと。自らプレイヤーだとバラしているのに嘘をつく理由もなく、信用してもいいだろう。

　だが、レベル５というのはゲーム知識があるプレイヤーとして些かスローペースな気がする。他にプレイヤーがいる可能性が高い状況下というのにだ。何か理由があるのだろうか……例えば俺のようなデバフ付き初期スキルを持っていたり――

　そんなことを考えていると、中段の構えから急にフェイントを交えて居合いを放ってきた。彼女が使っているのは刀を想定した剣道由来の剣術ではなく、ロングソードを想定した西洋剣術。間合いが広い癖に打ち合いから体術も使ってくるため、格闘戦に持ち込まれないよう距離を離しておく。

「おっと。急に仕掛けてくるなよ」

「ふふっ。やっぱりこれくらいは躱してくるのね。でも真面目にやっていないと思われると指導が飛んでくるわ」

　周りを見てみれば、やる気のないと判断されたペアがインストラクターに怒られていた。少し打ち合いをしておくか。

　数発打ち合いながら、俺の方からも情報を流しておく。オババの店はこの世界では知られていないこと。それなのに最近訪れた人物がいて「誰が来たか」と店主のフルフルに聞いてきたことなど。

「フルフルがそう言ってたの～？　でも私ではないわよ」

　１０階にいた人物が新田さんでないならば、そいつは三人目のプレイヤーということになる。そしてプレイヤーならばＥクラスに所属し、今もこの剣戟の授業を受けていると思うが……

　クラスメイトが戦っている姿を横目でこっそり見渡し、プレイヤーに該当する者がいるかどうか探してみる。こんな剣戟の授業ごときで本気は出さないだろうけども。

　見たことがあるような人物がいないか打ち合いながらちらちらと見ていると、闘技場の端っこの方ではダンエクの主人公、赤城君がパートナーの剣を吹き飛ばしていた。無事、闇落ちしたようだ……目が据わっている。

　ゲームでの赤城君はＡクラスばかりの第一剣術部に入部しようとし、Ｅクラスだからと門前払い喰らう。何度も入部しようとするが殴り飛ばされその後に闇落ち。サブヒロインでもあるギュー先輩、もとい松坂柚奈先輩の作った第四剣術部に拾われ入部することになるという流れのイベントがあったのだが、この世界の赤城君も順調にそれをなぞっているようだ。

　威圧にも似た気迫を放つ赤城君に、打ち込まれた男子生徒が震え怖がっている。ああなってしまっては暫く放っておく他ないだろう。名前も知らん君、すまんな。

　同じく端っこ付近にいるカヲルは三条さんとペアを組んでいる。見た感じレベル５くらいの速度で動いているが、まだまだ二人とも余裕がありそうだ。三条さんもＢＬモードの主人公なだけあって潜在能力は凄まじく、これからが面白く……そしてゲーム通りに進むなら面倒が事が起きるだろう。彼女にも厄介なイベントが多数用意されているからだ。

　国や組織に目を付けられ、周りを巻き込んだ戦闘イベントなんて起こされては堪らないので、赤城君か他のプレイヤーがその辺りの情報・イベントをコントロールしてくれることを願いたい。最悪、俺か新田さんが何とかしなければならなくなるだろうが。

　その他に気になると言えば、アメリカの情報収集部隊の諜報員としてこの学校に入り込んでいる久我さん。既にレベル２０を超えていて、いくつもの隠密・諜報スキルを持っている。基本的に彼女の正体を暴かなければ無害だが、《フェイク》による偽装も彼女の持つ鑑定スキルに突破されてしまうため、できるだけ距離を置いたほうが良いだろう。

　そんな久我さんにせっせと打ち込みをしている大宮さん。おさげが可愛く揺れ動いている。久我さんの本来のパートナーは髪の長い大人しそうな女子らしいが。

「久我さんは元々、相部屋の子とペアを組んでいたんだけどね。まだレベル３だったかな～。私もちょっと探り入れてみたけどプレイヤーではなさそうよ」

　戦っているところを見て、ダンエクをやり込んでいる動きには思えなかったとのこと。剣にせよ棍にせよ、膨大なＳＴＲを頼りに武器を長時間扱っているプレイヤーは武器捌きに特徴が出てくる、というのが新田さんの持論。俺には見分けがつかないが、そういうものなのだろう。

　その他のクラスメイトは学校のデータベースに記載されている通り、ほとんどがレベル３、わずかにレベル４が混じっている程度か。この中からプレイヤーを探すとするなら俺よりも新田さんのほうが見つけられそうだ。

　……それにしても。こちらの世界に来る切っ掛けとなったゲームイベントに一体何人のプレイヤーがクリアできたのだろうか。

　広範囲即死攻撃の絨毯爆撃。逃げる先にも即死トラップてんこ盛りという、ぶっ壊れバランスのイベントに何十人もクリアできたとは到底思えない。どんなに多く見積もっても数人。それくらいの鬼畜難易度だった。

　現在判明しているプレイヤーは俺と新田さん。オババの店に到達したプレイヤーを含め三人。最初は俺だけがクリアできたのだと思っていたので、三人もクリアしていて正直驚いている。

「しかしよくあの糞イベントをクリアできたな。俺はほぼ運だったが」

　偶々俺のいるところに即死攻撃が来なかった。偶々俺が進む道に即死トラップが無かった、もしくは前の人がトラップを踏んだおかげで生き残れた等々。イベントクリアできたのはそんな偶然の連続が起きただけで、実力どうこうの問題ではない。

　とはいえ、全てが運だったわけではない。防げる攻撃は防がなければならなかったし、ダンエクを長くやっていたからこその“勘”で生き残れた場面もあった。それらを鑑みて、実力が不足していては運があろうとクリアもまず不可能。

「団員に協力してもらってね～。いい人たちだったわ……」

　遠い目をしながら胸に手を当て自らの団員に弔辞を捧げている。何のことか聞いてみれば、団員が命を賭して即死攻撃や即死トラップから新田さんの身を守ったらしい。確かに多くの団員が命を顧みず協力すればクリアできるかもしれない。もしかして他にクリアした奴も集団でクリアしたのだろうか。

「大手攻略クランもいくつか参加してたかな～？　でも誰かをクリアさせようと協力して動いているようには見えなかったわ」

　新田さんのクランは新田さんを中心に狂信的な組織を作り上げていたので、身を挺して守るように動くのは何となく理解ができる。一方で、最前線の攻略をしたりボス狩りで名を馳せた攻略クランは高い実力があることは間違いないが、我も欲も強いメンバーだらけ。誰かをクリアさせようと献身的に動くことはないだろう。

　……まぁクリア基準に新田さんを参考にはしないほうがいいか。

「話したいことは色々あるけど、授業中では多くを語ることができないな」

「また後にでも話そっか～」

　剣戟の授業は新田さんと示し合わしてレベル３程度に見えるよう、無難にやることにした。

　でも、ちょいちょいフェイントをかましてくるのは止めてくれませんかね。

「どうして認められないのっ！？」

　端末画面を見ながら大宮さんが怒りを表す声を上げる。

　事の発端は、赤城君がＤクラスとの決闘で負け、Ｅクラスの先輩方の作った部活に入るなと半ば脅されたことが始まりだ。ならばと大宮さんがクラスメイト皆で参加できる部活を作ろうと生徒会へ申請したのだが――

　画面には『却下する』の一言が掛かれた通知のみ。

　部活を作るには１０人以上の構成員と、責任者となる専任の教職員が必要。構成員となる人数は入りたいというＥクラスの生徒が１０人以上いることは確認済みだし、教職員は担任の村井先生に頼んで許可も貰っており、最低限の条件は満たしている。

　あとは生徒会の承認さえあればすぐに部活設立と運営に移れると考えていたところに、生徒会から無慈悲な却下の通知。そのせいで大宮さんは何が理由でダメだったのかと憤慨しておられるのだ。

「生徒会に文句いってくるっ！」

「サツキ、ちょっと待って」

　勢いよく教室から飛び出そうとした大宮さんの腕を捕まえて、なんとか落ち着かせようとする新田さん。少々熱くなっているので時間を置いて冷ましたほうがいいのは賛成だ。生徒会は伏魔殿そのもの。Ｅクラスの生徒が不用意に近づくのは止めておいたほうが賢明だろう。

　ここは実力主義の冒険者学校。個人でも注目されている生徒はいるものの、実質的にこの学校を支配し発言力を有しているのは派閥だ。発言力や立場を求めるなら力のある派閥に属する必要がある。

　力のある派閥は３年Ａクラスの生徒を中心に、いくつか存在している。

　剣術部主将や魔術部主将を筆頭とした部活系列の派閥が幅を利かしているのは当然として、最大派閥は何と言っても生徒会だ。各学年の首席と次席、高位の爵位持ちが生徒会メンバーに揃い踏み、普通の学校では考えられないほどの莫大な予算を管理する権限を持ち、全ての部活動や学校イベント、教職員やＯＢにまで大きな発言力を有する。

　生徒会とはいわば冒険者学校の中枢。勉強もダンジョンダイブもできるエリートの、さらに上澄みのみが在籍できる名誉ある組織なのだ。それ故に爵位と金をちらつかせて不正に入ろうとする不届き者も後を絶たない。

　では生徒会に在籍している生徒は“まとも”かというとそうでもない。当然のように頭でっかちで自己顕示欲が高く、プライドの塊のような生徒が多く占める。そんなところにＥクラスの生徒が陳情に行ったところで相手にしてくれるとは思えない。ゲームでも主人公である赤城君やピンクちゃんと度々衝突し、決闘へ発展していたほどだ。

「理由くらい聞かないと納得できないよっ」

「生徒会室に行くにしてもサツキ一人だけじゃ心配だよ～。私も行くね」

　感情的になっている状態で突撃するのは良い結果には繋がらない。ここは冷静な新田さんを連れていったほうが賢明だ。そんなことを思っていると「成海君も一緒に来てくれると心強いな～♪」と、にっこりウインクしてきた。

　言われなくても二人にはボッチから救ってくれた大きな借りがある。行ってやろうじゃないの。ここは漢を見せる時だゼ！

「一緒に行ってくれるんだ……何かあったら私の後ろに隠れてね」

「えっ？　……あ、うん……」

　俺が最弱というイメージが大宮さんの中で定着してしまっている模様。スライムに負けたことを知られたのはまずかったか。思わず項垂れそうになる。

　でもめげないゾっ！

　\*・・\*・・\*・・\*・・\*・・\*

　隅々まで丁寧に磨かれている廊下を女子二人の後ろからソロリソロリとついていき、６階にある生徒会会議室の前までやって来た。

　入り口の扉は大きく重厚な木製の両開き。何やら鳥獣の彫刻が細やかに入っている。この扉だけでサラリーマンの月給数か月分が飛ぶだろうな……

　そんな扉の前で大宮さんは緊張を振り払うかのように一呼吸し、コンコンとノックする。数秒ほど後に中から「入れ」との声が響く。

　重いかと思われた扉は予想以上にスムーズに動き、中に入るとクラシックなデザインの部屋が広がっていた。

　テーブルや棚は材質を一目見ただけで高そうだと分かる一級品。全て輸入品だろう。床もピカピカに磨かれた大理石でできており、その上に臙脂色の絨毯が敷かれている。壁には大きな風景画が一枚飾られていて、アンティーク調のシャンデリアで上品に照らされている。

　それらに負けず劣らずの高そうな革張りの肘掛け椅子の上に、眼鏡を掛けた男子生徒が一人で座っていた。高校生のくせにこんな部屋でそんな物を使ってやがるのかと、イッパンピーポーの俺はついつい憤慨してしまいそうになる。

　その男子生徒の胸には金色の何かがキラリと光っていた。これは公家に列する伯爵位持ちの家系を示すバッチだ。それがなくても雰囲気や佇まいから上流階級だと分かる。品格というものは立場がそうさせるものなのだろうか。

「何用だ」

　眉をひそめこちらの素性を伺っている。アポなしで突然来た訳だし訝るのも仕方がないとも言えるが。

「大宮と申します。部活創設に関して話を聞きに来ました」

「……お前たちは１年の……Ｅクラスか」

　男子生徒は胸の記章、女子生徒はスカーフに色が付いているので、学年がすぐに分かるようになっている。俺達は赤の記章とスカーフなので１年生、目の前の生徒会員は色が緑の記章を付けているので３年生。ちなみに今日の昼間に俺を呼び出したキララちゃんは青のスカーフをしていたので２年生だ。

　そして俺達がＥクラスかどうかすぐに分かったのは胸に冒険者階級バッチを付けていないからだ。

　何年もダンジョンダイブをしていれば、冒険者ギルドが発注するクエストを何度も遂行したり昇級試験を受けて冒険者ランクを上げる機会がある。７級以上に上げれば対応する色のバッチが貰えるわけだが、Ｅクラスはダンジョンに潜れるようになってからまだ間もないため、一部を除き９級のまま。それに対し、Ｄクラス以上の生徒はほとんどが７級になっているため、胸元に冒険者階級バッチを付けている。

　冒険者階級バッチを付けろなんて校則はないので付けなくてもいいのだが、校内のヒエラルキーにも関わってくるため生徒は全員付けるようにしている。なのでこの時期なら一年Ｅクラスの生徒はバッチの有無を見ればすぐに分かるのだ。

　俺はといえば昇級試験を受けたが合格ならず現在も９級のまま。あのクソ試験官許すまじ。

「帰れ」

「帰りませんっ。どうして申請を却下されたのか理由を聞かせてくださいっ」

「立場を弁えないゴミ共が毎年毎年現れるものだな……」

　何か薄汚れたモノを見るような目つきで俺達に吐き捨てる。こちらとて文句の１つくらい言いたいところではあるものの、相手は爵位持ちなので何が起こるか分からない。物言いにも注意を払っておくべきだろう。

「お前たち。ここがどこか分かっているのか？」

　入り口にデカデカと「生徒会」と書かれたルームプレートが掲げられていたので間違うわけがない。そんなことを聞いているのではないことは分かっているが、見下された目つきをされちゃうとついつい反骨精神が湧き出てしまうじゃないか。

「私は忙しい。もう来るな」

　大宮さんが何か言いかけるも取り付く島がなく、こちらに興味を失ったかのように男子生徒は目の前の書類に目を落とし作業に没頭してしまった。こちらを振り向かせたとして今の時点では会話が成立するとは思えないので、ひとまず外に出て状況確認をしておこう。

「もうっ、どうして生徒会なのに話を聞いてくれないのっ」

「出直したほうがいいのかしら～」

「今はあの３年の先輩に何を言っても無駄っぽいね……」

　生徒会に話を通すにしても誰かの紹介が必要だろう。だが出来損ないのレッテルを張られたＥクラスが生徒会に伝手のありそうな人物と接触し、橋渡しを頼むことは困難を極める。前途多難だ。

　途方に暮れながら言葉少なにとぼとぼと教室へ引き返す。

　窓の外から部活をやっている生徒達の掛け声が聞こえてくる。訓練に励んでいるのは主にＤクラス以上の内部生ばかり。たとえＥクラスの生徒があの場にいたとしても裏仕事や雑用に駆り出され、まともに練習に参加させてもらっていないだろう。

　Ｅクラスの先輩方が作った部活も今頃どこかで練習しているとは思うが、マジックフィールド内の立地の良い場所は使わせて貰えないはず。冒険者大学を目指し希望に満ち溢れて入学してきたＥクラスの生徒は厳しい現実と向き合わなくてはならない。

　１年Ｅクラスの教室へ戻って腹減ったなとか考えながら帰る準備をしていると、二人はダンジョンダイブの話をしているようだ。

「私達ね、明日ダンジョンに潜ろうと思うんだけど……成海君もどうかなっ」

「ふふっ。女の子から誘ってるんだから断らないよね～？」

　こういう時は憂さ晴らしにダンジョンで暴れようと言ってくる大宮さん。多少の事でへこたれてはいられないと元気に笑う。

　明日はオババの店を物色して金策しようかと考えていたのだけど、彼女達と交流を深めるのも悪くない。ダンジョンでなら大宮さんの力になれるかもしれないし、新田さんとも色々と話をしてみたいしね。

　参加の意思を示すと今から工房にレンタル武器を見に行こうと誘われる。そういえば工房に預けていた鉱石がどうなったか見に行かなくては。そう伝えると、大宮さんは興味があるようで一緒に行っていいかと訊ねてきた。

　預けてあるのはミスリル鉱石なのでできれば見せたくはなかったが……まぁ言い訳はつくし、いいか。

　楽し気に揺れるおさげ髪とその隣でコロコロと笑う笑顔を見ながら俺も荷物をまとめ、後ろからついていくことにした。

　校内の桜の花はすでに全部散り終えており、青々とした葉桜状態の桜並木を三人で歩く。午後４時を過ぎてもまだ日は高く、日陰となっている歩道に木漏れ日がキラキラと降り注いでいる。

　もうこの辺りは工房エリアだ。先ほどからひっきりなしに運搬業者や民間業者が出入りして、何処彼処から金属を加工する音や話し声が聞こえてくる。今が一番活気に溢れている時間帯なのだろう。

　さらに１００ｍほど歩くとミスリル鉱石の精錬を依頼した工房にたどり着く。早速、入り口から声を掛けてみたものの反応はなく、中を覗いても誰もいない。仕方がないので近くに誰かいないかと周辺を探してみることにした。

　向こうのほうから声が聞こえたと大宮さんが教えてくれたので、工房の横にある荷物などが積まれた資材置き場に行ってみると、見覚えのある大柄な男子生徒が満面の笑みを浮かべながら話をしていた。

「どうよ、俺のニューウェポンはよぉ」

「それ凄いっすね」「いくらしました？」

　何やら後輩の１年生に武器を振り回し自慢しているではないか……あの光り具合からしてミスリル合金製のようだが。

「すみませーん、先日頼んだミスリル合金の精錬、どうなりました？」

「あぁん？」

　ようやく俺に気づき、自慢を中断されたことから急激に不機嫌顔になる。まぁお金を取る仕事なんだからそこは切り替えてほしい。カバンから精錬依頼契約証を取り出して渡すと、受け取った先輩はその契約証を中指で弾き鼻で笑い始めた。

「おい、これは偽物だな。生徒会に突き出すぞコラァ」

　嫌な予感はしていたが、やはり先ほどコイツが自慢してた武器は俺の鉱石から作ったものらしいな。だが落ち着け……最終手段に訴えるにもまだ早い。「つい出来心でやってしまい反省しています」とかいう態度を取って土下座をしてくれるなら許してやらんでもないので一応、念のために指摘してみる。

「え～と、昨日ここで書いたものですよ。筆跡に見覚えありますよね」

「工房の印が押してねぇ。第一、お前１年のＥクラスだろぉ？　どうやってそんな雑魚がミスリル鉱石なんて持ってこれるんだ。どうせ盗んだんだろうが、あぁ？」

　反論は許さないと言うように捲し立て威圧してくる盗人野党。その剣幕に、後ろにいる新人らし１年生と大宮さん新田さんも何事かと驚いている。

　ミスリル鉱石は高額とはいえ、買えないわけではない。それに学校の工房ではミスリル鉱石を持ち込んだ作成依頼なんて普通に行われているし珍しい鉱石というわけでもない。しかしコイツにそんな理屈を言ったところで聞く耳を持たず盗品設定をゴリ押ししてくるのは明らかだ。

「（ど、どうなってるのっ？　もしかして鉱石取られちゃったとかっ？）」

　心配そうに小声で聞いてくる大宮さん。せっかく付いてきてくれたのに申し訳ないね。俺も依頼手続きの手順をしっかりと知っておけば良かったのだろうが、あの時は疲れてたし気が抜けていた。この世界にはこういった糞野郎が多いってことをすっかり忘れていた。いやぁ参った参った。

　さて、どうするか。この場で暴れてやるのは簡単だが……

　というかコイツは俺を生徒会に突き出すとか言っているが、何にも知らない生徒会がどうやって判断するのか。まさかＥクラスだからという理由でこちらを非難してくるつもりだろうか。

　しかし、このまま指をくわえていても俺のミスリル鉱石は取られたままだ。暴れるというのは最後の手段にして、この盗人よりは話が通じるであろう生徒会に託してみるのもいいかもしれない。

「それでは生徒会でも呼んでもらいましょうか」

「Ｅクラスのガキが……身の程を分かってねぇようだな」

　ミスリル合金の曲剣――本当は妹も使える刀にして欲しかったんだが――で試し切りをするぞと凄んでくる。そんなものを使って脅してくるとかどんな育ちをしてきたんだ。この国には銃刀法違反なんて無いのだろうが、明らかに度を超えている。

　暴力沙汰が避けられないのなら仕方がない。目の前の盗人を《簡易鑑定》してみるとしよう。

＜名前＞　熊澤讓

＜ジョブ＞　ファイター

＜強さ＞　相手にならないほど弱い

＜所持スキル数＞　３

　《フェイク》は持ってなさそうだし素手でも十分勝てるだろうが、やるにしても外野が邪魔だな。１年生の……Ｅクラスでないからクラスや名前は知らないが、俺を非難するような目つきで熊澤の背後から睨みつけてくる。

「テメェ！　俺に向けて鑑定しやがったなぁ！」

「ちょっ、ちょっとっ！　暴力はダメでしょ！　さっきの契約証をもう一度……」

「うるせぇ！」

　前に出た大宮さんの顔を叩こうと拳を振り上げるが、振り下ろす前に腕を掴んで制止させる。このまま握りつぶしてやろうか。

「どうした、揉め事か？　……またお前らか」

　誰かと思ったら生徒会室で話した３年生の生徒会員が割り込んできた。戸締りを終えて丁度帰るところ、大声が聞こえたので様子を見に来たらしい。熊澤はあれだけ威勢の良かった態度だったのに、生徒会員が現れるや否や遜った態度で都合のいい理由を並べはじめる。ケツを蹴り飛ばしてやりたくなる。

　言われるばかりでは不利になるのでこちらも契約書を出し「俺の鉱石を勝手に私物化している」と主張すると、鉱石自体盗品だろうと理由を変えてきた。

「で、此奴が鉱石をどこかから盗んできたかもしれない、と」

　気難しい目で俺を見ながら盗人野郎の言い分を聞く生徒会員。

「そうなんですよ。だからオレァちょいと痛い目に合わせてやろうとですね」

「……ふむ。それでお前――」

　ミスリル鉱石をどこから買ってきたのか、または採ってきたのか。証拠があるなら出せと手に入れた経緯を聞いてきたが「１０階のオババの店で買ってきた」なんて言っても通用するとは思えないし、それ以前に店の存在そのものを機密にしているので言うつもりもない。

「どうした、言ってみろ……まさか、本当に盗品じゃないだろうな」

　答えないなら実力行使してでも聞き出すぞ、と《オーラ》を発動し威圧してくる生徒会員。

　……まったく。この世界の住人はどいつもこいつも何かにつけて威圧すれば手っ取り早く解決できるとか思っていそうだな。目の前の男に至っては爵位持ちだろうに、素性の知らない相手を威圧して何かあったらどうするんだ。

　薄々こうなると分かっていたので大宮さんを後ろに下げて、俺が前に出て壁となる。

（レベル２０くらいか、学校の生徒の中では高い方なのか？）

　《簡易鑑定》はしていないが、《オーラ》量から俺と同等のレベルなのが分かる。腰には紫紺の宝石がはめ込まれた短杖をぶら下げていて、今のところ抜く様子はない。正面を向き重心が偏っていないことから杖術使いの魔法闘士タイプではなく、純粋な魔法職か。【キャスター】……いや、レベル的に【ウィザード】かもしれない。

　もちろん見た目だけで断定できるわけも無く。《簡易鑑定》の出番だ。

＜名前＞　相良明実

＜ジョブ＞　ウィザード

＜強さ＞　やや強い

＜所持スキル数＞　４

　――レベル２１、スキル数は４、上級ジョブの【ウィザード】で《フェイク》は無所持。スキル数から戦士、シーフ系のスキルも持っていない純粋な魔法特化タイプか。

　対人戦闘経験が極度に少ないのが丸分かりだ。自分の強さに絶対的な自信があるのだろうが……コイツは俺を舐めている以前に、目の前の戦う相手がどれほどの強さなのかを何も推察出来ていない。故に俺が僅かに重心を動かしても、注意を払わず至近距離でメンチを切っていられる。

　ＰｖＰ（※１）において魔術士はフットワークと魔法の短打を駆使した戦い方が必須となるのだが、相良はそういったＰｖＰを十分に経験していないことが窺える。今まで圧倒的弱者としか向き合ったことがないのだろうか。もしくは強者と向き合ったことがあったとしても、味方の壁の後ろから大出力遠距離魔法攻撃を撃ちまくる戦術がメインなのだろう。

　密着とも言えるこの至近距離で格闘経験のない【ウィザード】が俺とメンチを切るというのがどれほど愚かな行為なのか教えてやりたい気もする……が、相手は爵位持ち。自衛は良くても手を出すのはまずい。

　相良からも俺に《簡易鑑定》が入ったのが分かる。中距離から猛禽類にじっと見つめられているような不快感に襲われるが、俺は《フェイク》で偽装してあるため《簡易鑑定》では本当のステータスを覗くことは不可能。鑑定結果には【ニュービー】、「相手にならないほど弱い」と見えていることだろう。

「……妙な奴だな」

「んで、実力行使するんですか？」

　さらに威圧を強め、持っているだけの《オーラ》をこちらに叩きつけてくる相良。元々《オーラ》はダンジョンのレベルの低い雑魚モンスターに当てて、戦闘を回避する手段として使われたもの。ほぼ同レベル相手に《オーラ》による威圧は通用しない。

　しかし、この場には同レベルではないものがほとんどだ。

　俺が壁となっているとはいえ相良から発せられる《オーラ》を全て防ぐことなんてできるわけがなく、大宮さんは高レベルの《オーラ》に当てられ委縮してしまっている。新田さんはレベル５のくせに涼しい顔をしているのがちょっと面白い。

　いずれにせよこの状況が続けば体の毒になってしまうので、さっさと決着をつけてしまわないとまずい――と思った矢先、急に威圧を止めてきた。

「ふん……そういうことか。成海颯太、覚えておくぞ」

　何か分からないが勝手に納得し《オーラ》を引っ込めてくれたのは助かる。しかし《簡易鑑定》で名前を憶えられたのは……面倒なことにならないよう祈る他ない。

「おい。此奴なら自分でミスリル鉱石を採ってくることは可能だろう。あったものは全て返す、もしくは補償するよう命ずる。いいな」

「えっ、でももう鉱石は……」

　今度は熊澤が相良の《オーラ》による威圧を受け、ひっくり返っている。プライドが高く鼻持ちならない生徒会員だが、こうやって解決してくれるなら今日のところは歓迎しておこう。

（※１）　ＰｖＰ

「Ｐｌａｙｅｒ　ｖｓ　Ｐｌａｙｅｒ」の略。ＮＰＣではなくプレイヤー同士の、１対１、または、多対多の対人戦のこと。ＰＫも対人戦であるが、双方合意ある戦いがＰｖＰ、合意が無く一方的に攻撃を仕掛けるのがＰＫと区別される。

　――　早瀬カヲル視点　――

「来たぞッ！」

「回復準備ＯＫ！　行けます！」

　私が前に出て、その後ろにナオトとサクラコが杖を構える。

　ここはダンジョン６階。ワーグという名の魔狼を狩るためのキャンプ地だ。

　遠くから魔狼を連れたユウマが全速力でこちらに向かって走り込んでくる。魔狼の走る速度は予想以上に速く、遠くから弓で遠隔攻撃して釣る（※１）ようにしないとすぐに追いつかれてしまう。

　魔狼は《ハウリング》で近くにいる魔狼を呼び寄せるスキルを持っているため、連れてくる最中も周りに他の魔狼がいないか細心の注意を払う必要がある。今の私達では２匹の魔狼と戦うのはリスクがあるからだ。

　そんな危険が伴う魔狼の釣りもユウマだから安心して任せられる。現時点での彼は背中に弓を背負って片手剣、盾を持ち、釣りにタンク、アタッカーまで幅広いロールをしてもらっている。それら全てをハイレベルで熟せていることから、ユウマの才能が如何に凄まじいかを物語っている。

「グルルゥゥ！　グァウッ！」

　本能のまま牙をむき出しにして追いかけてくる魔狼。体長２ｍ、体重も優に１００ｋｇを超えるほどの巨体にもかかわらず、足音をほとんど立てずに飛びかかってくるのが恐ろしい。

　安全なキャンプ地に到達したユウマは、背後から迫ってくる魔狼の攻撃を一度盾で受けて時間を稼ぐ。時速５０ｋｍは超えているであろう巨体を受け流すだけでも相当な技術と膂力が必要となるが、ユウマならば問題ない。それと同時に私が挟み込むように魔狼の背後を、少し離れたところでナオトが魔法を撃つようなフォーメーションを取る。サクラコは基本的には戦闘に介入せずサポートがメイン。彼女には回復という一番重要なロールがあるため、万が一を考えてやや距離を取っている。

　あれだけ興奮して周りが見えていなかった魔狼だが、狩場に誘い込まれたと分かると私達全員の動きを横目で見ながら低く唸り、隙を見せないようにしている。そんな膠着しがちな状況にナオトが《ファイアーアロー》を撃ち込み、均衡を崩す。

「陽動を頼む、私も“スキル”を発動する」

　基本ジョブである【ファイター】に就いたことで基礎能力も大きく向上し、私もやっとウェポンスキルも放つことができるようになったのだ。

　後衛にターゲットが行かないようユウマが盾で身を守りながら細かい攻撃で上手く魔狼のヘイトを稼ぐ。そして私への注意が減った瞬間を狙って《スラッシュ》を発動させる。

　全身の筋肉にスイッチが入り、体が自動的にスキルモーションへ移行。常人の動きを超えて達人の域まで達するその斬撃には恐るべき力が秘められている。魔狼の分厚い毛皮もこのスキルならば易々と斬り裂くことが可能だ。

　背後から、しかも隙を突いて《スラッシュ》を放ったにもかかわらず、既の所で身を捻って致命傷を回避する魔狼。これだから６階のモンスターは侮れない。それでも脇腹から後ろ足にかけて一閃が決まった。傷を負った魔狼は上手く動けず距離を離そうと後ろへ引こうとするが、すぐに距離を詰めたユウマが剣を、ナオトが後方から短剣を突き刺し、これがトドメなったのか魔狼は一度甲高い声で鳴くと魔石と化した。

「これで１０匹目。いいペースだけど、ここらで休憩したほうがいいだろう」

「“オレ”はまだいけるよ」

「いやここは一度休んだほうがいい。この階からは万全を持って臨むべきだ」

　今日は土曜日なので朝早くから四人でダンジョンに入り、既に１０匹もの魔狼を狩っている。私が休憩を提案すると、ギラついた目をしたユウマがまだいけると続行を申し出る。しかしそれは気負い過ぎだ、流石に休んだほうがいいとナオトが止めに入る。

　先程の魔狼戦も戦闘時間は１分少々でしかないが、そんな短い時間と言えど命を賭けた死闘というのは大きく精神力を削るもの。それに１つの戦闘に１回しかスキルを発動していないとはいえ、再使用のためのクールタイムや減ったＭＰの回復を考えれば余裕を持たせた方がいいだろう。

「少し早いですがお昼ごはんにしませんか？　今日は美味しいお肉とお野菜をたっぷり挟んだサンドイッチを作ってきました」

「私もお腹が減った。サクラコのお弁当は本当に美味しいからな。楽しみだ」

「では僕とユウマがセッティングしよう。ユウマ、皿を並べてくれ」

「こちらの魔法容器に入ったスープもありますので。取り分けて頂けますか」

　四人で座ってランチタイム。このキャンプ地はモンスターがポップしない安全な場所なので、誰かがモンスターを連れ込まない限りゆっくりと腰を落ち着けていられる。他の冒険者もくることはあるが、１つのパーティーが狩るだけの広さしかないので基本的に先に陣取ったほうに優先権が得られる。つまりは私達がここを独占しているのだ。

　サクラコが持ってきた大きなバスケットの中には色とりどりの具材が挟まったサンドイッチが所狭しと並んでいた。またもう１つのバッグには保温魔法が掛かった容器があり、中に入っていたのは野菜スープのようだ。ずっと煮込まれている状態になるので、さぞ柔らかく味が染みていることだろう。いい香りもしてくる。

「ふぅ。この味は落ち着く」

「沢山あるので遠慮しないでおかわりしてくださいね」

　素朴だけど多くの野菜が混ざり合い、味わい深いものになっている。サンドイッチの塩梅も疲れた体には心地良い。ついパクパクと食べてしまいそうになるが、できるだけゆっくりと食べることに注意を払わねばなるまい。私とて年頃の乙女なのだから。

　ふと周りの視線が気になり隣を見てみれば、何やら難しい顔をしたユウマがいた。刈谷に負けた後は空元気で取り繕っていたが、今はそれすらできないほど精神状態が悪化している。先日、第一剣術部へ行ったことが原因だろうか。

　昨日の剣戟の授業でも、ペアの男子生徒を怖がらせてしまっていた。あれではまともに練習にならなくなるというのに。

　ナオトもユウマの表情を見て思うことがあったようだ。

「僕達は共に苦難を乗り越える仲間だ。だからユウマ、この場ではそんなに気負うことはない」

「……」

　何があったのか。悩んでいることがあるなら相談してくれ。このＥクラスの窮境を打開したいというのは僕やカヲル、サクラコも同じ。一人で抱えることはないのだとナオトが優しく語り掛ける。もちろん私だって力になりたいし、サクラコも大きく頷いて賛同している。

　観念したのか一度大きく息を吐き、トボトボと伏し目がちで今までのことを話し始める。刈谷に負けてからの心境。そして第一剣術部で起こったことだ。

　話を聞くと刈谷に負けたこと自体はそこまでダメージはなかったそうだ。派手にやられたとはいえ上には上がいることは知っていたし、自分が未熟であることも分かっていた。ただＥクラスの皆を窮地に陥れてしまったのは心苦しかったという。

　第一剣術部の出来事については……ショッキングなことだった。

　どうしても入りたいというなら一番弱い部員と１：１で戦って勝ってみろと見世物にさせられ、一方的に負けて叩き出されたそうな。しかも相手は一歩も動かず右腕しか使わないという屈辱的なハンデを背負ってもらった上で。

　その際に部員全員から自分を、そしてＥクラスについても罵倒されたという。最強になるという彼のプライドは踏みにじられ、それ以降すっかり余裕が無くなってしまったと目尻に涙を浮かべて落ち込むユウマ。

　項垂れながら帰る途中、第四剣術部の人達に声を掛けられ勧誘を受けた。答えは保留している。そこに入るにも負けた気分になってしまっていて、どうしたらいいか分からないとのことだ。

　悲痛な報告に私達は何も言えなくなる。

　同情したい気持ちはあるものの、それは私にも起こりえたこと。同じ立場の者が憐れむ資格などないし、そんな状況でもない。私達ができることは共に立ち向かっていくことだけなのだから。

「第四剣術部……部活動勧誘式の壇上で話していた袴姿の方が部長だったか」

「あぁ。声を掛けてくれたときは副部長もいた」

　Ｅクラスにとって忌まわしき部活動勧誘式。その壇上にいた袴の先輩も上位クラスと戦っている一人だ。彼女の言葉には覚悟というか気迫のようなものを感じた。

「第四剣術部の人達ともう一度会ってみないか？」

「お話を聞いてみるのもいいかもしれませんね」

「ふむ。その部に入るかはともかく、第四剣術部には参考になるものがあるかもしれないな」

　第四剣術部がどういった活動をして鍛錬を行っているのか、私が会ってみたいと提案すると、サクラコもすぐに同意してくれた。ナオトはＥクラスの今後の活動方針を決める上で参考になるかもと考え込む。確かに私達と同じように、いや、それ以上に苦労し足掻いてきた先人達の経験が参考にならないはずがない。

「今年は恐らく上位クラスに行くことは無理だろう。だがやれることは全てやっていく。着実に地力をつけて強くなるための何に対しても努力は惜しまないつもりだ」

「はい。まずはクラス対抗戦ですよねっ」

「来月にある試験か……」

　クラス対抗戦。Ｅクラスが初めて他のクラスと競う試験だ。さりとて冒険者学校に入ってすぐの私達が上位クラスとまともに戦うことができるのかといえば、無理だと言える。

　本格的なダンジョンダイブをやった今だからこそ分かることだが、５階以降は一筋縄でいかないモンスターばかりで、毎戦闘が綱渡りをしているかのように命がけ。怪我も増えてくる上に次のレベルまでの必要経験値量も相まって、ここから先の成長は牛歩のようになることが予測できる。

　それにもかかわらず、上位クラス――Ｄクラスですら、全員がこの６階よりも下の階層で狩りができている。私達Ｅクラスがそのレベルに達するにはとにかく時間が必要だ。

　果たして後１年にＤクラス、またその上のＣクラスと互角に渡り合っていけるのか。自信はないけどもやるしかない。

「Ｅクラスの戦力を上げる方法として部活を作ることも考えたが、大宮と生徒会の話を聞いてから考えようと思う。……まぁ仮にその話し合いが上手くいって設立許可を貰えたとしても、手続きで１ヶ月くらいはかかるだろうが」

　大宮さんは今、生徒会と掛け合って部活設立の交渉をしているらしい。貴族様が多く在籍する生徒会が私達Ｅクラスの話を聞いてくれるのかどうか、正直なところ望みは薄い。

　それに許可が貰えたとしても予算や顧問の予定の関係上、１ヶ月ほどかかるという。クラス対抗戦はもう半月後に迫っている。部活の活用は間に合わない。

「そこでだ……独自にレベル上げに苦しんでいるクラスメイト達を集めて、剣術、魔術の手助けをする練習会を開くつもりだ」

　レベルを思うように上げられていないレベル３以下のクラスメイトに、休日や放課後を使って練習をやろうと昨晩に誘いのメールを投げたそうだ。今後、参加希望者が増えたらその都度拡大していくとのこと。そしてもしよければ手伝ってくれないかと頭を下げてきた。

「剣道経験はあるので剣術は私が指導できるだろう。魔術は逆に教えて貰いたいが」

「弓術ならオレも少しは勉強した。まぁ教えられるほどではないかもだけど」

「回復魔法ならっ、あの、お手伝いできると思います」

　ナオトのクラスメイトを思う気持ちについ嬉しくなってしまう。私も、そしてユウマとサクラコも力になりたいと即答する。

　クラス昇格は個別の生徒ごとに判定されるが、クラス対抗戦のように集団で成績を付与される試験も多数ある。少しでも上位クラスに食らいつくためには共に協力していくことは当然のことだし、クラスメイトの戦力の底上げにも力を入れたいところだ。

「戦力の底上げといえば、磨島君も独自に動いていましたね。何人かのクラスメイトと一緒にダンジョンダイブの指導をやっているみたいでした」

「磨島大翔か。彼の剣術も相当にハイレベルだったな。カヲルと同じく剣道経験者なのかもしれない」

　自己紹介のときに士族の家系で【侍】になると豪語していた男子生徒だったのを覚えている。サクラコも磨島君に誘われたけど、私達と行くことになっていたので断ったそうだ。彼も部活動勧誘式で相当堪えたと思うが、早々に立ち直り頑張ろうとしている姿には好感が持てる。

「そういえば……あの噂は聞きましたか」

「どんなのだ？」

「あの成海君が２年の楠さんから呼び出しを受けたとか」

「楠？　……まさか八龍の楠雲母か？」

　八龍とは、この学校を実質的に動かしている８つの大きな派閥のことを指す。先ほど話題に上がった第一剣術部や、生徒会もその八龍の１つ。楠という人物は八龍の１つである“シーフ研究部”の次期部長に内定している冒険者学校の超大物だとか。

　いつもは多くの取り巻きを連れ立って歩いているような人物だというのに、一人でＥクラスまで来て颯太を呼び出したらしい。

「ちなみに成海と楠雲母は以前から付き合いが？」

「いや知らない。私も颯太も普通の平民だ。その先輩は貴族様なのだろう？　この学校に入る以前に接点があったとは思えない」

　平民と貴族様は生きる世界がまるで違う。にもかかわらず接点があるこの冒険者学校は非常に特異な場所とも言える。

「何かあるなら取り巻きを使って呼び出せばいいのに、直接本人が来たというのが気になる。もしよければ……成海から聞き出せないか？　これは使えるかもしれない」

「それはいいけど期待しないで待っていてくれ」

　颯太と楠雲母に繋がりがあるのなら部活創設や生徒会とのやり取りに使えるかもしれないとのことだが、あの颯太がそんな大物と関係があるとは考えにくい。Ｅクラスまで来たのは偶々で、用事とやらも些事に過ぎないだろう。

　――ところで颯太と言えば。

　昨日初めてみたときは驚いた。ちょっと前まで節操なく食べ続けブクブクと太っていたというのに、昔の面影を思い出すほど減量に成功していた。颯太に“初恋した”という封印されし記憶を思い出し、心臓が締め付けられるような思いをしてしまった。

　だが今はそんな感情は全くない……はずだ。余りのことで驚いてしまっただけ。

　それでもあれほどのダイエットは尋常ではない。颯太を横目で観察してみたが単に痩せただけではなく、上半身にも驚くくらい筋肉が付いていた。外から見える前腕や首回りが盛り上がっていたほどに。何か特別な訓練をしているのだろうか。

　ここのところ私に対する厭らしい目つきは鳴りを潜め、所かまわず寄ってくることもなくなった。この短期間に颯太は大きく変わっていることは間違いない。しかし端末のデータベースを見てもレベル３のままだ。

　楠雲母との関係を含め、それとなく通学の時に聞いてみるとしよう。

（※１）釣る

モンスターに対し、遠隔攻撃またはスキルを使ってヘイトを与え、おびき寄せること。パーティーでの狩りは基本的に他のモンスターに割り込まれない安全地帯で戦うので遠くからモンスターを”釣る”という行為は必須となってくる。

　今日は大宮さん達と一緒にダンジョンダイブの約束をしている。３階を周回してオーク狩りをしようと計画しているが、余裕があれば４階の入り口周辺までいこうとのことだ。

　《簡易鑑定》の評価で“相手にならないほど弱い”の表示が出るモンスターを倒しても俺には一切経験値は入らないけれど、大宮さん達には今まで何度も助けられてきた。ここで少しでも力となり、恩を返していきたい。

　もちろん狙いはそれだけではない。

　ボッチの俺は学校やクラスメイトの動向に疎く、リアルタイムで何が起きているのが掴みにくいという欠点がある。その一方で大宮さんと新田さんは何事もクラスの中心にいることが多く、彼女らの近くにいればクラス情報が入手しやすくなるのではないかという打算もある。

　それに。何だかんだ言っても大宮さんも、あと中身はアレだけど新田さんもそこらを歩いていれば目を引くほどにカワイイ女の子。その二人に「頼りにしてるね♪」と笑顔で言われれば健全な男子たるもの奮起する他ない。

　おかげで朝早くからハイテンション。家の前で念入りにストレッチをしてほぐしながら気持ちを静めているところだ。

　待ち合わせの時刻まで３０分ほど余裕があるので気晴らしに我が家の生命線『雑貨ショップ　ナルミ』の商品ラインナップを見てみよう。

　『雑貨ショップ　ナルミ』は初心者から中級冒険者向けにグッズを販売している小売店だ。多くの売り物は冒険者組合の卸業者から仕入れるのだが、親父がいつも一緒に潜っている冒険者仲間や知り合いからも商品を回してもらっている。我が家の飯のグレードがどうなるかはこのラインナップの出入りにかかっているといっても過言ではない。

　まず目につくのは革防具のリサイクル品。魔狼製ではなく普通の牛や豚の革製だ。防具だけではなくバッグや衣類まである。親父が他所から安く買い取った中古品を暇なとき手入れ、修復して売っている。あまり売れ行きは良くはないがそこそこ利益率が良いので置いているそうだ。

　防具といえば。俺の魔狼の防具はヴォルゲムートとの戦闘により使い物にならないほど大破しゴミと化したわけだが、今はクソ試験官から頂戴したミスリル合金製の軽鎧を着ている。ミスリル合金製武具はレベル１９が着る防具としては少々頼りなく、より強い防具に乗り換えてもいい頃合い。しかしそんな金は無いのでしばらくはこの防具を使おうかと思っている。ちなみにクソ試験官は今頃臭い飯を食っているはずだ。

　次にリサイクルコーナーの隣に目を移せば“ナルミおススメ！特価品！”と書かれた棚がある。そこには赤や緑色などちょっと毒々しい色をしたポーションが置かれていた。

　これらは俺が１０階で買ったような即時性の回復ポーションではなく、溶媒で希釈された劣化回復ポーションとでもいうべきもの。それでも擦り傷やちょっとした疲労の回復効果が望めるので１０階未満で狩りをしている冒険者には人気の商品らしい。ギルド認証がいらず中抜きも少ない代わりに利益率も低い。とにかく多く売って稼ぐタイプの商品だ。

　そして以前にオババの店で転売用に買った３本の回復ポーションだが、既に全部完売済み。指１本程度の欠損ならたちまち回復してしまう即時性回復ポーションは、冒険者だけでなく医療目的でも高額で取引されているため詐欺商品も横行している。売るには本物と認定されたギルド認証を必要とし、その鑑定認証代も１本あたり１０万円近くとかなりの高額。それでも７０万円という値で即売したのは強い需要があると推察できる。そのおかげで昨夜の我が家の夕食がブランド牛のしゃぶしゃぶとなったわけだ。

　回復ポーションはアンデッドに使えばかなりのダメージを与えられるのでゲームの時は投げまくっていたけれど、７０万円で売れる商品を投げる馬鹿はいない。すでに追加で６本仕入れてあるので、親父に冒険者ギルドで鑑定してもらっているところだ。これからもオババの店のポーションを転売しまくって日本中のブランド牛を制覇するゾ！　……いや違った。武具を揃える予定だ。ということで今のところ金策は順調と言っていいだろう。

　レジの近くには携帯食やキャンプ用品も置いてある。これらはスーパーやホームセンターが強力なライバルとなるのでそれほど数は置いていない。気が向いたら他の商品とセットで買っていってくれる程度だ。

　これからは俺がダンジョンから持ってきたアイテムもここに並べようと考えている。それなりに上手く商品を捌けるようになったら、よりセキュリティの高い冒険者ギルドビルで場所を借りて店を開くのもいいかもしれない。親父には頑張ってもらいたいね。

　さて。少し早いが店内探索はこれくらいにして行く準備をするとしよう。

　\*・・\*・・\*・・\*・・\*・・\*

　待ち合わせ場所である冒険者ギルド前広場に到着。少々早かったせいかまだ二人は来ていないようだ。何して暇を潰そうか考えていると妹から電話が掛かってきた。

『おにぃ～やっぱりもう１本剣貸して～。二刀流じゃないとしっくりこないっぽい』

　妹もこれからお袋のパワーレベリングをしにダンジョンに行くとのこと。今日は試しに１本で戦うと言っていたがダイブ直前で不安になったのだろう、手ごろな武器がないかと聞いてきた。

「今は冒険者広場にいるんだけど、どこにいる？」

『ママとそっちに行くから待ってて～』

　俺の腰には２本のミスリル合金製の曲剣があるので、その内の１本を渡すことにした。これらは昨日のミスリル鉱石横領事件で生徒会員である相良の差配により、タダで貰うことになった物だ。本当は刀が欲しかったのだけど工賃無しで貰えるなら悪くない。涙目になった熊澤が震えながら曲剣を差し出すのを見て留飲は下がったから良しとしよう。

　電話を切り広場にある街路灯に背を預けながら、ぼーっと周りを眺めてみる。土曜日ということもあり、いつも以上に多くの冒険者で混み合っている。

　ほとんどが専業冒険者や親父のように趣味で潜る兼業冒険者だが、学校名が掛かれた防具を着た学生らしき男女もチラホラと目につく。

　このダンジョン周辺には冒険者学校以外にも冒険者の育成を目的とした特別クラスや、ダンジョンダイブのための部活を開設している学校があり、うちの学校ほどではないにせよ有名冒険者を何人も輩出していて全国から志望者が来るほど人気が高いとか。和気藹々と頑張っている姿は微笑ましいものだ。

　対して我が冒険者学校の連中はというと――第一剣術部と第一魔術部の合同パーティーだろうか――ミスリル合金や魔結晶がはめ込まれた高価な武具を装備した集団が声を荒らげて悪目立ちしているではないか。ゲームでもこの学校はトラブルメーカーだらけだったが、それらを忠実に再現しないでもらいたい。

　げんなりしながらも遠目から観察してみる。

　白熱した作戦会議を行っているようで剣士集団と魔術士集団がバチバチとにらみ合い、周囲に険悪な雰囲気を振りまいている。かなりの大声なので話している内容も丸聞こえ。互いの主張はこうだ。

　剣士集団としては、フレンドリーファイア（※１）が怖いため、魔法を撃つタイミングや布陣を含め剣士側が判断しダンジョンダイブを主導したいとのこと。魔術士集団としては剣士には壁さえやってもらえばいい。魔術士の最大火力を有効活用するには魔法というものをよく理解した魔術士側が決めたほうがいい。当然、戦術指示も魔術士側がやるとのこと。

(一緒に潜るならまとめ役くらい用意しておけよ……)

　合同で潜ろうとした時点でそういった作戦は予め決めておくべきじゃないのか、と呆れてしまう。怒鳴り合いに近いほど大声でいがみ合っていて、何名かは《オーラ》を開放。周辺はちょっとした騒動となってしまっている。脳筋だらけじゃないか。迷惑極まりない。

　まずいかなと思っていると、一際豪奢な花柄のローブを着た女生徒が颯爽と現れ、到着するなり全体に指示をし始める。あれほど騒いでいた一団が一斉に沈黙。剣士集団も魔術士集団もあの女生徒に頭が上がらないようで、素直に話を聞いている。

　ローブを深くかぶっているので顔は分からないが、長く赤い髪が見えている。小柄で細身の割に大きな杖を背負っていて、そのアンバランスさがちょっと面白い。

（魔術士派閥のリーダーは赤髪の女生徒だと聞いていたが、彼女のことだろうか）

　ゲームでも何度か登場するキャラなのだが、メインストーリーなんてゲーム開始時に一度流してやっただけなので序盤だけしか登場せず、主要キャラでもないなら詳細は覚えていない。

　やがて補給要員も到着。荷車の引っ張る部分に魔石動力エンジンと操縦席を取り付けたような運搬車が３台、それぞれに山ほど荷物を載せてやってきた。あの人数でも１０日ほどなら楽に潜れる量だ。

　冒険者学校はダンジョンダイブのための期間を設けていて、その期間に学業を休止することも許可している。代わりにダンジョン内でやる課題を出され、それらをクリアしていけば成績にも反映される仕組みだ。

　またボーナスも用意されていて、課題が難しいほど、深い階層を潜るほど成績に加算される。高得点を目指すには優秀なメンバーを確保し、より強いモンスターと戦える強力なパーティーを組む必要ある。そのため仲が悪くても実力を優先して第一剣術部と第一魔術部が組んで潜るのだろう。今回は魔術士側のリーダーが指揮するようだが。

　どれほどの強さなのか鑑定したい気持ちを抑えつつ集団の様子を見ていると。

「いたーっ。ママーこっち！」

　俺を見つけた妹が大声でお袋を呼ぶ。妹にはヴォルゲムートからドロップしたファルシオンタイプの剣、[ソードオブヴォルゲムート]と、宝箱に入っていた[祝福されしペンダント]を渡してあったが、ちゃんと装備していたようだ。

　家に帰ってワンドで鑑定した結果、[ソードオブヴォルゲムート]にはＨＰ吸収、片手剣攻撃力上昇、耐久大幅上昇、軽量化と効果が４つも付与されており、期待以上の性能だった。１１階からは被弾することも出てくると予想しているので、アンデッド相手にもＨＰ吸収が使える武器は嬉しいところ。鞘の装飾がゴテゴテして目立つので今は布で覆って隠している。

　また[祝福されしペンダント]も同様に７階の拡張エリアの宝箱でしか入手できないであろうユニークアイテムだ。効果はＭＰリジェネ、ＭＰ最大値上昇、ＩＮＴ＋２０と、こちらもかなりの性能。ＭＰリジェネはどれくらい回復量なのかは分からないが、長期戦をやる場合には重宝することになるだろう。水色の宝石は少々派手な見た目だが胸元に隠している分には目立つことはない。

　どちらも序盤で手に入るアイテムとしては破格の性能ではあるものの、落とした敵の強さも序盤とは思えないほど強かった。そう考えれば相応の性能と言えるかもしれない。

「この曲剣はヴォルゲムートの剣と違って重心がちょっと変わっているのと、何の付与もされていないから扱いに気を付けろよ」

　曲剣を壊してしまったら、ただの鋼製のレンタル品に戻るしかないので大事に扱えと忠告しておく。現在のレベルなら武器もミスリル合金製よりもう１つグレードの高い武器を変えてもいい頃合いだが、そんなのを買うとしたらとんでもない額になってしまうので地道にダンジョンに潜って素材を集めるしかない。

　あれこれと妹にアドバイスをしていると――

「おまたせ～って、あれ？」

　時刻通りに大宮さん達も到着。ダンジョン内では長めの髪が邪魔になるのか、いつもはサイドに垂らしているツインテールを結いあげ、ポニーテールになっている。新田さんはいつもしているメガネをかけていない。コンタクトだろうか。だがどちらも新鮮で可愛らしい。

　また二人ともお揃いの真新しい魔狼の軽鎧を着ている。この先を見据えればちょっと背伸びするくらいの防具を買っておいたほうが却ってコスパは良くなるので、そのチョイスは正解だろう。

「成海君のお母さまと……妹さんかなっ？」

「あぁ、ちょっとね。渡し物があって話をしていたんだ」

　妹は中学生なのでダンジョンに行くとは言えず、この場は誤魔化しておくのがいいだろう……って、おい。

「あら～、可愛いお嬢さん達じゃない。颯太も隅に置けないわね」

「こんにちは～妹でーっす！　おにぃがお世話になってまーっす」

　なにやらハイテンションになっている妹とお袋。気恥ずかしいので早く行ってくれと催促するも、大宮さん達と話したそうに図々しく粘り留まろうとする。なので背中を押して無理やり退場してもらった。

「その、ごめん。気が利かなくてさ……」

「え、でもいいの？」

　気を使ってくれたようだが何の問題もない。あのまま放置していたらある事ない事話されそうだったし。

　それでは気を取り直して。両手に花の楽しいダンジョンダイブへ行こうではないか。

（※１）フレンドリーファイア

戦場などで後方に位置する味方の攻撃を食らうこと。過失か故意は問わない。

　今日は土曜日とあって、ダンジョン入口の改札の前にはいつも以上に多くの冒険者で長い行列ができていた。某遊園地のアトラクションかと普通なら毒づきたくもなる――しかし。

　一人ならうんざりする待ち時間だけど今の俺は二人のカワイイ女の子と一緒なので何の苦にもならない。３階でオークをどう狩ろうかなどの作戦会議から、クラスメイトや授業の話題など、普段学校で話すような他愛もない世間話をしていればあっという間に時間が過ぎていき、気づけばダンジョン突入となっていた。

　ダンジョン内部に入っても沢山の冒険者が往来しており、下の階へ行くためのメインストリートはすし詰め状態。三人で横に並んで歩けないほどだ。そこで大宮さんがやや前に出て先導するように歩き、俺と新田さんはその後ろを逸れないよう付いていく形となった。

「（それで。成海君は～どれくらいまでレベル上がったの～？）」

　こっそりと耳打ちして聞いてくる新田さん。そういえば彼女のレベルは教えてもらっていたけど、こちらは教えていなかった。これから協力関係を築いていくなら俺の情報も開示したほうがいいだろう。

「（えぇ！？　もうレベル１９なのっ？）」

「（こちらにも色々と事情があったんだよ）」

　口に手を当て上品に驚いている。ゲームではトレードマークだった漆黒のフルプレートアーマーから【黒の執行者】という異名を持ち、彼女の姿を見ればＰＫ共が震えあがったものだけれど……中身がこんな女の子と分かりどうにも戸惑ってしまう。まぁそれはさておき。

　この短期間でレベル１９というのはゲームでも結構なペースなのだから驚くのも無理はない。ゲームが現実化したことにより難易度も大きく跳ね上がっているし、新田さんも自身で潜ってそのことに気づいているなら尚更だろう。

　本来、計画通りにいっていれば今頃レベル８～９で、オババの店に行くための計画を練って準備しているはずだった。それがユニークボスとの強制戦闘により大幅なレベルアップとなったわけだが――疑問に思うこともある。

　俺のゲーム知識にない“ヴォルゲムート”というモンスターだ。

　倒した後のレベルの上がり方からしてモンスターレベル２５前後。そんなモンスターが最序盤に配置されるなどおかしすぎる。

　５階にポップするオークロードのように、通常モンスターより明らかに強いフロアボスもいるが、それもその階にポップするモンスターより５レベル高い程度。その階の適正レベル冒険者が１０～２０人もいれば、工夫次第で倒すことは可能だった。

　しかしヴォルゲムートに至っては７階の適正レベル冒険者が束になったところで攻撃なんてまともに通らず、一撃の下で叩き切られてしまうだろう。倒すことは……まぁ普通なら無理だ。初見殺しというなら一度逃げて再度挑めばいいが、あれからは逃げるのも不可能。ゲームバランス的にぶっ壊れすぎている。まぁこの世界はゲームではないのだろうが。

　そのことを含めて伝えてみると。

「（拡張エリアに７階にそんなのいたかしら……記憶に無いわ）」

　新田さんはゲームのときの７階拡張エリアに一度行ったことがあるという。たった一度とはいえ城主の間という目立つ場所にそれほどの存在がいるとしたら気づかないわけがない、とのこと。確かにあのエリアにいけば城塞には行くだろうし、その中に入るなら最奥の城主の間にも行くだろう。

　やはりあのモンスターはこの世界特有の仕様なのだろうか。拡張エリアの城塞以外にゲームの仕様と乖離している場所は今のところ発見できていないが、あんな規格外のモンスターがこの先も待ち構えていたら命がいくらあっても持たないぞ。

「（それにしても、いきなりレベル１９まで上がるような強敵によく勝てたわね～）」

「（軽く死にかけたけどな）」

　十分な肉体強化の恩恵を受けていない体にオーバースペックなスキルを多用したことで、腕や足、体中がめちゃくちゃになったし神経も部分的に焼き切れていた。大量の経験値とユニークアイテムを手に入れることができたとはいえ、リスクとリターンが全く釣り合っていない。あんな無茶はもう懲り懲りだ。

　ゲーム時代のスキルを使ったのかと聞いてきたので正直に「使った」と答えた。彼女もゲーム時のキャラが覚えていたスキルが使えることに気づいていた模様。

　新田さんのゲーム時代のジョブといえば、攻撃と同時に様々なデバフ効果を与えるウェポンスキルが特徴の【暗黒騎士】だ。高いＳＴＲがないと使い物にならないスキルばかりの【ウェポンマスター】と違って【暗黒騎士】はステータスに依存しないデバフスキルがいくつもある。低レベルでも防御力の高い相手に驚異的なダメージを叩き出すことが可能なのだ。敵対しないことを祈っておこう。

　そんな話をしながらえっちらおっちらと２階入り口広場に到着。帰りの時間も考えなくてはならないのでトイレ休憩を済ませ、すぐに出発だ。

　たかが２階へ行くだけでも土日ではこれほど時間がかかるのかと用を足しながら辟易してしまう。トイレ前も順番待ちという有様だった。次入るときはもう少し早く出るなりして時間をずらしたほうがいいだろうか。

　トイレから出ると再び大宮さん達と合流し、すぐに３階へ向けて出発する。ここからは少しだけ混雑が緩和され空間に余裕ができたので三人で横になりながら歩く。

　数分ほど世間話をした後に大宮さんが「聞いて欲しいことがあるの」と決意に満ちた顔で話を切り出してきた。

「ねぇ……私ね、部活がダメならサークルを作ろうと思うのっ」

　生徒会での一件からずっと考えていたらしい。しかし、サークルか。

　部活を作るにも生徒会を説得しなければならず、生徒会員である相良の態度を見ても何の実績も伝手もない現状では意見を通すのは現実的ではない。その実績や伝手を用意するにも多くの時間がかかるし、このまま手をこまねいていては闇雲に時間が過ぎ、Ｅクラスのまともな成長の機会が見込めなくなってしまう。

　なので部活の創設にこだわらず認可がすぐに降りるであろうサークルを先に創設し、クラスメイトが強くなれる環境を一刻も早く用意したいとのこと。サークルなら三人いれば作れるし生徒会からの認可も格段に得られやすい。元々Ｅクラスの救済が目的なので部活の創設にこだわる必要はないのだ。

　またサークル加入そのものはクラスメイトにとってその場しのぎでも良く、いずれ部活に入るにしてもサークルという鍛錬の場を作り、実力を付けた上でその後を決めればいい。少しでも這い上がろうとする皆の助けになれれば、というのが大宮さんが考えだ。

　デメリットとしては、部活と違ってサークル活動費はほとんと降りないし、闘技場などの施設も部活が優先されるため、まず借りることはできない。また部活動対抗戦のような成績ボーナスがある競技や大会にも出られない。クリアすべき課題は多いという。

（しっかり考えている。しかし――）

　ここまでの流れはゲームと同じ。問題はこの後だ。

　メインストーリーでの大宮さんはこの後にサークル創設の申請は無事に許可され、Ｅクラスのために奔走することになるのだが、そのような動きは上級生や他クラスの連中に疎ましく思われ攻撃のターゲットにされてしまう。

　心無い罵倒、暴力もまじえた度重なる嫌がらせを受けるが、彼女は一人歯を食いしばり必死に抵抗を続ける。それでも次第に精神が擦り切れ……ついには退学に追い込まれてしまう、そんなストーリーがあったのを覚えている。

「それでね、ここにいる三人でどうかなって」

　こちらのほうに手を差し伸べ、あどけない笑顔でほほ笑んでいる大宮さん。どうやら俺も誘ってくれているらしい。ルームメイトの新田さんにはサークルの話はしてあるのだろう、ニコニコとこちらを見ている。

　ダンエク経験者からみれば、大宮さんは“悲劇のヒロイン”だ。このまま何も対策を講じなければゲームと同じ結末を辿るかもしれない。いや、俺が見て経験してきた冒険者学校の状況を鑑みれば間違いなくそうなる。

　仮に大宮さんを助けるとして、サークル設立後に起こるであろう厄介なイベントをいくつも対処しなくてはならなくなる。攻撃を仕掛けてくる生徒どころか、動き出す派閥も多数あるので下手をすれば暴力沙汰にも巻き込まれる。そこで余計な情報が洩れたり思わぬ危険な状況に陥るかもしれない。身の安全のことだけを考えれば、ここはやんわりと断るべきだろう。

　――だが。

　誰かのためにこんなにも直向きに頑張る子を、分け隔てなく思いやってくれる優しい心の持ち主をあんな酷い目に会わせちゃいけないだろ。オリエンテーションのときにハブられボッチだった俺に声を掛け、助けてくれた恩は忘れちゃいない。この恩には、より大きな恩で返すべきだ。そうだろう、成海颯太よ。

「私は入るわ～。だってサチは大切な親友だし。成海君も、モ・チ・ロ・ン、入ってくれるよね～？」

　ニンマリとほほ笑みながら俺に問いかけてくる新田さん。何を考えているのかその胸の内を知りたいが、どうやらやる気らしい。ゲームでは最強の敵でありライバルでもあった彼女が味方になるというのならなんとも心強いものだ。

「――当然、俺も入るさ」

　僅かに首を傾げウィンクしながらサムズアップで答えたのだが、何か空気が気まずくなった気がした。

「いい狩場があるのよね～」

　ようやく目的地であるダンジョン３階に到着し、どこで狩ろうか話し合っていたところ。新田さんが提案してきた狩場とは、なんと５階。その“いい狩場”というのはオークロードの橋落としのことだろうか。

　それ以前に今から５階へ行って帰る時間を考えれば、狩りをする時間は僅かしか取れないという問題もある――ゲートを使わないという前提ならば。

　もしかして話す気なのだろうか。話すにしてもゲーム知識とその危険性についてどう考えているのか、少し聞いてみたほうが良さそうだな。

「（ちょっといいかな）」

　チョイチョイと新田さんを呼び寄せる。

「（え～と……新田さんはどこら辺りまで話そうとしてるの？）」

「（サツキは信頼できるし～色々と話そうと思ってるよ～。……あと私のことは～リ・サって呼んでって言ったでしょ？）」

　俺の頬をツンツンとつつきながら訂正を要求してくる。先程、共にサークルを作る同志として、また親友として、下の名前で呼び合い親睦を深めようという流れになったのだ。幼馴染であるカヲルならともかく、クラスの女の子を下の名前で呼び捨てにするのは少々気恥ずかしいものが……いや、それはまぁいい。

　ダンジョンの知識や情報は発信元を辿られれば、まだ見知らぬプレイヤーから特定されることにも繋がってしまう。俺達が特定できていない状況でそのプレイヤーから悪意を向けられれば危うい状況に陥りかねない。

　それが杞憂に終わればいいのだが、ゲーム情報の拡散がクラス内で留まるだけならまだいい。プレイヤーとて元は常識ある向こうの世界の人間だ。話せば分かり合える可能性は十分にある。また敵対したとしても俺とリサが組むなら、やりようはある。

　しかし外部に洩れれば事態は深刻だ。ダンジョンの新情報のためには人の命なんてどうでもいいと考えている組織や国が腐るほどあるこの世界で、情報を持っていると臭わせた、もしくは疑いをかけられただけでも何が起こるか分からない。

　まだ試すことはできていないが、上級ジョブや最上級ジョブで覚えるスキルの中には精神を操作、改ざん、破壊する非常に危険な魔法だってある。もしくは精神操作スキルが封じられたマジックアイテムもすでに存在しているかもしれない。それらを防ぐ方法もあるにはあるが、今使われたら為す術がない。

　さらに最悪を考えれば。

　精神操作魔法なり脅迫や拷問なり、何らかの手段でプレイヤーのゲーム知識が抜き取られ、それらの情報が世界に拡散した場合。世界中の倫理が失われ無法地帯に、もっといえば世界秩序が一変し、地獄の釜の蓋が開く可能性すらある。

　ダンエクというゲームの世界観をそのまま適用させたこの世界の有様は、まさに綱渡り状態と言えるのではないだろうか。

「（それでもサツキとゲーム知識を共有して早く駆け上がることは、この先を考えれば絶対に必要に思えるの。メインストーリーの修羅場を乗り越えるためにもね）」

　新田さん……リサの言うメインストーリーの修羅場とは、ダンジョン周辺一帯が焦土化したり、多くの人命が失われるような暗鬱なイベントのことだ。ストーリーを盛り上げる要素としていくつも用意されているのが恐ろしい。

　攻略キャラごとの個別シナリオならそのキャラを攻略しなければいいだけだし、クエストなら受けなければいい。だがメインストーリーはどのシナリオでも、そしてプレイヤーが誰であろうと共通して発生する。

　仮にこの世界がダンエクのそれをなぞるのなら、主人公がどのルートを選択したところで惨劇が起こりえるということを意味する。

　もちろんそんな事が起きないよう阻止に動くつもりだが、惨劇シナリオというタイムリミットがある中で情報の拡散を防ぎながらレベルを上げ、対処できる強さを獲得していくことは容易ではない。そこで信頼できる仲間とパーティーを組むという考えに辿り着くわけだ。

　俺の場合は絶対の信頼を置いている成海家と共にダンジョン攻略しつつ、守る対象も強化して乗り切ろうと考えていたが、家族と共にいないリサはそうはいかない。大宮さん……サツキを巻き込んでダンジョン攻略する計画だったようだ。

　本当はダンジョン攻略も、この世界の対外的なものにも、ゲーム知識を所有するプレイヤー同士が結束して当たるのが一番なのだが、それは言っても詮無き事。誰かがプレイヤーだと名乗ったところで俺ならば警戒して名乗らないし、他のプレイヤーも同様に出方を窺うはずだ。

「（ソウタは私たちを信用できない？）」

「（……信じていないわけじゃないさ。ただ、共有する情報はよく吟味したほうがいい）」

「（そうね～ストーリー、イベント系は止めておくとして。今日のところはゲート、モンスター情報、橋落としってところかしら）」

　渡す情報も必要最低限にしたほうがいいだろう。俺は家族へほぼ無制限の知識の垂れ流しをしていても、それは命を預けられるほどに、そして命を賭けてもいいほどに信頼しあっている。一方で親友になったとはいえ、まだ出会って２ヶ月も経っていない相手に特大級の情報を共有するのは俺達にも彼女にもリスクがでてきてしまう。

「（情報を流すにしてもその危険性を重々認識してもらってからのほうがいいだろうな）」

「（もちろん。口約束以外でも縛るものは必要だと思うわ。それでコレの出番）」

　背中に背負っていたリュックから、細かい文字のようなものが沢山描かれた紙をおもむろに取り出す。これは……契約魔法書か。

　ゲームのメインストーリーでも度々登場する魔法書。使った対象者の行動や発言を縛るという魔法が封じられている。

　ダンエクでは【サマナー】や【エレメンタラー】というジョブもあり、強力かつ個性派揃いの召喚獣、精霊達と契約をすることができる。悪く言えば召喚獣や精霊は我が儘で制御しづらく危険極まりない存在なので、俺はそれらのジョブに就くつもりはない。

　そして契約魔法とは召喚獣、精霊が契約時に、してほしいことや守ってほしいことを契約者の身に刻み込む呪いの一種。契約内容を違えれば、契約者は漆黒の炎により身を焼かれ死ぬことになる、らしい。

　その契約魔法紋様を書面に劣化コピーしたものがこの契約魔法書。契約目的や義務を言いながら魔力を流すと発動し、契約内容が破られた際には契約書が黒く焦げる仕組みとなっている。

　契約を違えた者が焼かれることはないため、契約魔法のような拘束力があるわけではない。あくまで契約魔法書は契約を破ったか否かを判別するためのもの。人体に直接契約魔法を書き込む実験もどこぞの国でされているが、人道的見地の批判からその技術は表に出てきていない。

　契約内容も漠然としたものでは効果がなく、条件を狭く細かく明確にして契約者に認識させる必要がある。例えば「俺からもたらされたダンジョン情報を他言してはいけない」というのは、俺からの戦闘指示や、地形、攻略に関する通常会話すら話していいのかどうか、契約した本人にとって明確なライン引きが難しい。

　そこで「この日、この場所で俺とリサからもたらされたゲートの知識を他言してはならない」とかなら契約者は契約内容を破ったことも認識しやすい。おそらくリサも似たようなやり方で事細かく指定して何枚か契約魔法書を使うのだろう。

　ゲーム世界のメインストーリーでも契約内容が重要な場面では契約魔法書がポピュラーに使われていた。こういったダンジョン由来のマジックアイテムがこの世界にはいくつか浸透しているのは興味深いところだ。

　余談だが、俺とカヲルが交わしていた“結婚契約魔法書”なるものはブタオが小さいときに契約魔法書の話を聞き齧って作ったもので、何の効力もないただの紙切れ。破ったからと言って何が起こるわけでもない。

　話がまとまったので再び合流し、契約の話をするために人気の少ない場所へ移動する。

「何を話していたのかなっ？　リサとソウタって仲がいいけど、もしかして……もしかするのかな～？」

　何か変な勘違いをしているようだけど、そんな下心丸出しでリサに近づいたら綺麗に真っ二つにされてしまうじゃないか。やめていただきたい。

「秘密の狩場のことを相談してたの。だからね～絶対に他言しないと誓ってくれるなら教えようと思うんだけど」

「そんな所があるのっ？　知りたいなっ」

　本当にそんな場所があるのか懐疑的になりつつも期待と興味を捨てきれず知りたいと即答するサツキ。だが「その前に～」と前置きして、これから言う情報は流さないと遵守させるために契約魔法書に署名してもらうことを伝える。

「こっ……これ、本物の契約魔法書だよね……そんな凄い情報なの？」

　目を丸くし、ごくりと生唾を飲み込むサツキ。それもそのはず契約魔法書はかなり高額なのだ。リサはこれを用意するのに時間がかかったと言っていたが、どうやって揃えたのかは教えてくれなかった。

「それだけではないわ。これで交わした約束を破った場合は～……命で償ってもらうわ」

「！？」

「というのは、半分冗談で～」

　しっかりとサツキを見つめ「でも半分は本当」と告げたことで再び緊張感が生まれる。俺達がダンジョンに関するいくつかの機密情報を持っていて、それらの情報を何があっても絶対に流してはいけないということを分かってくれたようだ。

「これから教える情報を流したら俺達だけじゃなく周りにいるみんなの命を狙われる可能性があるからね」

「……どうしてそんな凄い事を知っているのっ？」

　それは当然のように疑問に思うだろう。その答えは元プレイヤーだから。そんなことを言うつもりはないので答えられないと伝える。

　重要なのは、契約魔法書を使うような危険な情報を知ってまで強くなりたいかということ。もし拒否するというならそれはそれでいい。ゲーム知識を使ったレベル上げは俺とリサで行えばいいし、サツキのレベル上げは別件で時間を取って協力するつもりだ。

　そのサツキは逡巡する様子を見せたものの、すぐに覚悟を決める。

「ほ、本当に強くなれるのなら……私は契約したいっ」

　サツキの家は貴族に仕える士族の、さらに分家の出。本家である士族を支えるため地元の高校に行く予定だったが、家族に無理を言ってこの冒険者学校に入学してきたらしい。絶対に良い成績を取って家族の期待に応えないといけないと握りこぶしを作りながら言う。Ｅクラスの待遇に落ち込んでいたのも憧れていた学校の実情を知り、大事にしている家族の期待を裏切ってしまうかもしれないと嘆いたからだ。

　それと同時に自分と同じような境遇のクラスメイトが多くいたことに気づく。自分が救われたいのと同じように救ってあげたい、学校を変えたいという思いが日々強くなっていったとのこと。

　メインストーリーでも彼女はＥクラスのため、精神を擦り減らしながらも奔走していた。それを知っている俺達ならその思いが真実なのだと理解できる。

「それじゃ～契約しよっか」

「うんっ！」

　契約魔法書は橋落とし関連情報に使わず、ゲート関連情報だけに使うことにした。橋落としは例えバレても１時間に１回しかできないため、多くの冒険者が橋に殺到したところで場所の取り合いになるだけだ。その恩恵を受けられるのはごく一部のみ。悪用されたとしても影響はほぼないだろう。それに俺達のレベルを上げて用済みとなれば橋落としが使えなくなっても支障はない。

　一方、ゲート関連情報はバレた際の影響が極大のため最上位レベルの機密扱いで契約魔法書を使用する。

「それじゃ魔力を通してみて」

　地面に置いた契約魔法書にリサとサツキが向き合って手を乗せる。

　リサも使うのは初めてのことだが、ネットにいくらでも使い方が載っていたので問題なく発動できていた。ゲートの仕組みやゲート部屋の存在など、ゲート関連の全ての情報を流出させることを禁止するとの文言を入れて、紙にコピーされている紋様に二人が魔力を通す。

　ゲートとは何なのか分かっていないままの契約だが、黒い紋様が淡い緑色に発光したことで、紙面の契約魔法がちゃんと動作したことが分かった。

　無事行使されたようなので、改めてゲートの存在と仕様について教える。学校の地下１階に飛ぶということにリサは予想外だったようで、小さく驚きの声を上げていた。

「そんな便利なものが本当に……でも、あったら凄いよねっ！　狩場の往復時間が短縮できるしっ」

「信じるのは実際使ってみてからでも大丈夫。それでは５階へ向かいましょうか」

　５階のゲートが使えるということなら狩場も橋落としに変更だ。今頃は俺のお袋と妹がやっていることだろう。午前中だけらしいので俺達が着くころには終わっていると思うけど、まだ続けていたら混ぜて貰えばいい。

「でもオークロードって、注意喚起されてる有名なモンスターだよね……」

「ソウタが守ってくれるよね～？」

「あぁ、大丈夫だぞ」

　現状、５階程度のモンスターならワンパンで倒せる力はあるし、オークロードにだって後れを取ることはない。けれど、俺を守る対象として見ていたサツキは意外そうに、そして疑いの眼でこちらを見ている。

　互いに信頼し合ってダンジョンダイブを続けていけば後々分かることなので今はレベルを言うつもりはない。

　各々考えることがあるのか、言葉少なに５階を目指すことになった。

　昼の１時をちょっと過ぎたところで５階に到着。

　眩い照明に照らされた入り口広場は茣蓙が所狭しと敷かれており、冒険者達が一斉に昼食を取っていた。ここ５階は入り組んだ地形が多いため見渡しが悪く、安全地帯も少ないので、モンスターがポップしない入り口広場まで戻ってきて昼食を取るのが慣例のようだ。

　売り子はこの機会を逃すまいと弁当や飲み物を売り歩き、屋台の店主が客を捕まえようと大声で売り物をアピールする。冒険者のほうも美味しそうな臭いに釣られて屋台の前へ出向き、あれやこれやと雑談しながら食い歩きしている。

　俺達もそろそろ飯にしたいところではあるが、橋落としポイントに着けばいくらでも休憩できるので、そこで外で買った弁当をゆっくり食べるつもりだ。

　とはいうものの、先ほどまで気丈に振舞っていた女子二人の顔には疲労が色濃く見えている。

「サツキ大丈夫？」

「うん、なんとか。でもこの先は付いていくだけで精一杯かも……」

「もう少しだから頑張ろう～」

　二人のレベルはまだ５以下。肉体強化の恩恵を受けてはいても、ここに来るまで人ごみの中を朝から５時間ぶっ続けで歩いてきたわけで疲れるのは仕方がないともいえる。

　一方の俺はといえば、どうやらレベル１９ともなるとこれくらいではほとんど疲れがでない体になっている模様。この異常なスタミナがどの程度まで持続できるのか、まだ測りかねている。

「でももうお昼をとっくに過ぎてるし、５階は帰りの時間を考えると学校がある日は通える距離じゃないねっ」

「私達のようにゲートが使えなければね～」

「……うん」

　ダンジョン入場手段が入り口からしかないクラスメイト達は、狩場に到達するまで時間がかかりすぎてしまう問題がある。特にＤクラス以上の生徒は学業がある中の日帰りダンジョンダイブを行うのはまず不可能だろう。朝に見た第一剣術部と魔術部も狩場に到達するだけで数日掛かりになるはずだ。

　ならば学業がある日はどうしているかというと、部活で鍛錬して経験値を稼ぐ方針を取っている。ダンエクだったときもマジックフィールド内で同格の相手と剣戟鍛錬を行えば、微々たる量ではあるが経験値を稼ぐことができたし、おそらくこの世界もその手段は有効なのだろう。だからこそ上位クラスの生徒は部活に入って練習を頑張るし、逆に部活に入れないＥクラスは死活問題になってしまうわけだ。

「サークル作るにも、まずは私達が強くならないとねっ」

「そうそう。私達が強くなければクラスメイトも付いてこないしね～。それじゃ休憩もしたし、向かいましょうか～」

　伸ばしていた足のストレッチを終えてこちらに向き直る。

「ここからは俺が案内するからしっかり付いてきてくれ」

「うん、ありがと……あの、荷物まで持ってもらって助かるよっ」

「ふふっ。頼もしいよね～」

　この程度お安い御用だ。出発する前に気休めだが《小回復》をかけてあげよう。

　\*・・\*・・\*・・\*・・\*・・\*

　道中にいるオークに警戒しながらいくつか坂を上り下りし、深い谷に架けられた大きな橋を渡るとオークロードがポップする部屋が見えてくる。

「もうここって……ギルドで注意喚起されているエリアだよね」

　緊張のためか両手で胸を押さえ若干縮こまりながら話すサツキ。レベル４でオークロードと出会ってしまったら死を覚悟しなければならないほどの強敵なのだから、大丈夫といわれても安心できないのだろう。

　俺も初めて見たときは冷や汗が出てちびりそうだったのを覚えている。今見ても何とも思わないことを考えれば《オーラ》で威圧されていたのかもしれない。

　一応、いるかどうか部屋の中をこっそり確認してみると……すでに釣って倒した後なのか、モンスターは１匹もおらず蛻の殻だった。

「やっぱり中にいなかったよ。橋落としは今、妹がやってるはずだからね」

「へぇ……妹ちゃんって凄いんだ」

　釣り自体はある程度の走力があれば難しいことはない。道さえ覚えればトラップに引っかからないように気を付けながら走るだけだ。ただ走力がギリギリなら俺が初めてやったときのように死ぬ思いをすることになるけども。

「ここまで来たら目的地までもうすぐだね～」

「あぁ。だけど今は橋が落とされているだろうし、向こう岸に行くなら迂回しないと」

　橋が落とされていないならこのまま真っ直ぐ進んで目的地まで最短距離でいけるが、現在その橋は落とされているはずなので通れず、少し迂回したルートで行く必要がある。それでも目的地まで間近なことに変わりはく、リサが「頑張るぞ～」と空元気を出してサツキを励ましている。

　そこから更に１ｋｍほど歩き、ようやく目的の谷が見えてきた。どこに陣取ろうかと辺りを見ていると、少し下がった場所に茣蓙を敷いて呑気にお菓子を食べているお袋と妹がいた。

「あっ、おにぃ～！　……と、お姉さん達も？」

「あらあら、こっち空いてるから座って座って」

　茣蓙の空いている場所に座るよう手招きしながら茶を勧めるお袋。元気そうで何よりだ。聞けばお袋のレベルも順調に上がっているようで、身軽になったのを見てくれと借りてきた剣をぶんぶん振り回している。親父と出会うまでは冒険者をやっていて４階まで潜った経験はあると言っていたので、剣の扱いはそれなりに様になっていた。

　橋落としの合間に妹は携帯ゲーム機、お袋は小説を持ち込みながら狩りしていたという。非常にマイペース……だが、リポップするまではやることないし、そんなものか。

　そしてリサとサツキはここまでほとんど休憩せず空腹のまま移動し続け、さらにはオークロード部屋からここまではかなりの高低差がある道を通ってきたため、すでに取り繕う余裕も無いほどクタクタ。のっそりとした動きで「ありがとうございます」と遠慮なく座り込み、背中を丸めてお茶を啜っている。

「次はいつ？」

「ん～と、あと２０分後くらい？　私とママはこれ食べたら帰るところだったんだけど」

　今日はお袋がレベル７になるまでパワーレベリングをするのが目標で、すでにレベル７まで到達済み。今は持って来たお菓子を食べながらのティータイムらしく、もう帰るところだったらしい。

「それじゃ俺達が飯食ったら引き継ごうかね」

「えぇ～。おにぃがやるなら私ももう少しここでやろっかなっ」

「お前はお袋を家まで無事に届けろ。ここはレベル７でも安全圏ではないからな」

　レベル７にもなればそこらを徘徊しているゴブリンソルジャーやオークアサルトに負けるとは思えないが、他の冒険者のトレインなどがきっかけで集団に出くわすこともある。道も良く分かっていないお袋を一人で帰すのも心配だ。

　そう説得すると何をトチ狂ったのか「おにぃが仲間外れにしようとする」とサツキとリサの足元に泣きつき転げまわりはじめた。我が家の恥さらしになるからやめなさいと引きはがそうとするものの、しがみついたまま離れようとしない。

「妹ちゃんが一緒にやってくれるなら、私も嬉しいかなっ」

「ソウタったら意地悪なんだから～」

　ウソ泣きが功を奏したのか一瞬にして二人を味方に付けた妹。その結果、何故か俺が悪者となってしまった。……まぁいても困ることはないし、二人も妹を歓迎しているならいいか。妥協して「お袋を無事に送ったらまた来い」と条件を変えることにした。

「じゃぁママを送ったらすぐ来るね～」

「頑張るのよ、颯太」

　元気に手を振る妹と、サツキとリサの方を見ながら意味深なことを言うお袋がそそくさと去っていく。それを見届けて、茣蓙に座りながら弁当をもそもそと食べている二人にオークロードと橋落としのやり方を一通り説明する。

　今回のパワーレベリングは二人なので二人とも経験値を貰うためには呼吸を合わせて同時に吊り橋を落とさなくてはならない。

「モンスターレベル１０を相手にするって、やっぱりちょっと怖いね」

「どれくらい経験値が入るのかしら」

　ついに来たかと若干顔を青ざめさせ弱気になるサツキに対し、リサはゲームでもお馴染みの橋落としをリアルで体験できるとあってワクワクしているようにみえる。実際やる事はゲームと全く同じだし、違うと言えば落ちるときのオークの叫びくらいか。

「失敗してもいざとなったら俺が倒すから安心してくれ」

「ソウタの強さが今ひとつ分からないから不安なのもあるんだけど……」

　本当は路上にいるオークを倒して強さを見せるつもりだったのだけど、全く戦闘せずにたどり着いてしまった。暇つぶしに妹がこの辺りを走り回って倒していたらしいがそのせいだろうか。

「ワイヤーを切るタイミングは俺が言うから、渡り切る前に焦って切らないように」

「ここを切るだけでいいんだよねっ」

「懐かしいな～」

　さっきまでへたって元気のなかったサツキもこれからやることを説明すると緊張感が出てきたのかやる気を出してくれたようだ。まぁワイヤーを切り落とすだけの簡単な作業なので特に体力を使うわけではない。多少疲れていてもできるだろう。

　そんな話をしていると突如時間が巻き戻されたかのように切り落とされていた橋が浮き上がり大きな音を立てて修復されていく。背後では何事かと驚いたように小さな悲鳴が上がる。

　ダンジョンには強烈な修復・復元作用があり、建造物や壁などに穴をあけたり破壊しても一定時間経つと元通りになる性質がある。ゲームの時はそういうものだと気にも留めていなかったが、目の前で物理現象を無視したような光景を初めて見たときは俺も驚いたものだ。

　そしてこの橋が修復されたということはオークロードもリポップしたサインでもある。

「それじゃ釣ってくるけど、沢山くるから驚かないようにね」

「うん。その……気を付けてね？」

「頑張ってね～」

　小さく手を振り笑顔で見送ってくれる二人を見たらやる気も漲ってきた。それではいっちょやりますか。

　――　大宮皐視点　――

　こちらに背を向け、颯爽と走り去るソウタ。ダンジョンに入ってからここまでの長い距離、私とリサの荷物を全部背負ってもらったというのに息一つ上がっていない。

　これから多くの冒険者に被害をもたらした悪名高いオークロードと対面するというのに、微風が靡くような平常心を保っている。一体何者なのだろうか。

　初めて成海颯太という人物を意識したのは確か――

　\*・・\*・・\*・・\*・・\*・・\*

　休憩時間になるとＥクラスのクラスメイト達は、寮のルームメイトや中学時代からの知己を中心に親睦を広げるべく、コミュニケーションに精を出す。

　それは単に友達が欲しいからというだけではない。人脈を駆使し少しでも良い仲間を集め、強いパーティーに身を置くことは自分の成績を左右するのだと誰もが知っているからだ。

　ホームルームが終わっても、学校の出来事や生徒の情報収集に余念がない。誰々が強くて誰と組んでいるのか、誰がどのスキルを持っているか、試験や大会にはどういったものがあり、どう臨むのか。そういった情報を集めて虎視眈々と少しでも良い条件の居場所探していく。

　するとどうなるかというと、赤城君や磨島君のように強い人がいるグループに近づこうと画策するようになる。かく言う私もリサと一緒に赤城君のグループに接触したことがあったのだけれど、固定パーティーを組んでいるようで思うように入り込めなかった。磨島君には一度声を掛けられたけど未だ関係は進んでいない。

　そんな感じでクラスメイトは必死になってコネクション作りのために鎬を削り、奔走しているというのに、一番後ろの席でぼーっと窓の外を見ているだけの太った男子生徒がいた。それがソウタだった。

　いつも物静かで誰かと話していることもほとんどないけれど、影が薄いとか目立っていないとかではない。逆にクラス内ではちょっとした有名人になっていた――悪い意味で。

　只でさえ最下位での入学なのに誰とも仲良くなろうとはせず、放課後になればすぐに帰ってしまう。その上ダンジョンに入ったかと思えば小学生でも勝てると言われているスライムに負け、Ｅクラスどころか学校中から“冒険者学校史上最弱”と悪評を付けられてしまった曰く付きの生徒。

　そんな彼を見て、口さがないクラスメイト達は下卑たあだ名で呼び、眉をひそめて悪口を隠さない。優秀なスキルを持っているわけでもなく、肥満のためまともにダンジョンダイブができていないと判断された彼は、誰からも声を掛けられることはなく、ますますクラスから孤立していく。仲間とのコネクションが重視される冒険者学校生活において、それは致命的なことだ。

　誰とも組んでもらえなければソロでダンジョンに入らざるを得ず、そんなことができるのは精々が３階くらいまで。彼の学校生活は半ば詰んでいる、足手まといには関わりたくない、とクラスメイトの間では専らの噂だ。

　だけどみんなの考え方は浅い。これからクラス対抗戦や闘技大会に向けて上位クラスと厳しい戦いをしていくというのに、仲間外れなんてしている余裕などないというのに。分かっているのだろうか。

　強さだってこれから十分挽回できる機会はあるし、まだ入学して間もない時期に評価を決めてどうするのか。それに、彼は授業態度も真面目で学力も高いことを踏まえれば悪評されるような人ではないと思う。

　それらを確かめたくて私は勇気を出し、オリエンテーションの時にパーティーに誘ってみたことがある。周りからは「手を差し伸べてあげた」とか「優しいね」とか言われたけど、そうではないのに。

　ルームメイトのリサも彼のパーティー加入にそれほど反対せず、むしろ受け入れていることには少し驚いた。彼女はのんびりした性格に見えるけど妙に鋭く、冷静な一面があることも知っている。何か考えがあったりするのかもしれない。

　それで彼と話してみて分かったのは、思っていた以上に理知的で思慮深い人だということ。それなのにコミュニケーションを取らないのはその能力がないからではなく、クラスメイトや自分の悪評に興味がないだけなのだということ。他人がどうとかは関係なく、確たる自信を持って動いているかのようだった。

　だとしてもソロでのダンジョンダイブに限界があるという事実は変わらない。その限界が早々に来てしまうことも。だから私が誘ったことを機に、クラスに溶け込める導線になれば良いな、と思っていた。

　オリエンテーションで仲良くなったのだから次の日から私達の中に割って入って話しかけてくれるかなと期待していたけど、彼はそんな素振りは見せず学校が終わるといつものようにすぐに帰ってしまう。

　本当に一人でも問題ないのか。端末で彼のレベルを見てみてもレベル３からちっとも上がっていない。そのことからも３階付近で苦戦していることが読み取れる。

　もしかして私を仲間にするほどの魅力を感じて貰えなかったのだろうか。それとも他に組む相手がいるのだろうか。

　――だけど、もう彼を心配するどころではなくなってしまった。Ｅクラスに対する悲惨な実態が露になってきたからだ。

　まずは部活動勧誘式での出来事。上位クラス全ての生徒から罵倒を受け、私達Ｅクラスが実は見下されていたことを理解させられた。憧れていた部活に入っても下働きしかさせてもらえないという。そのことにクラスメイトは絶望し、暗闇が教室を支配した。

　その後にあったＤクラスとの決闘騒ぎはさらに深刻だ。クラスメイトの赤城君は無慈悲な暴力を受け、私達はＥクラスの先輩方が作った部活に入ることを禁止された。それから遠慮がなくなったのか、Eクラスの教室内に入ってきてはクラスメイトをからかい貶めるようなことも増えてきた。

　同じ学校の生徒なのにどうしてこんな酷いことができるの。冒険者学校は強さこそが絶対だっていうのは知っていたけど、強くなろうと努力する人の芽を摘んで何になるというのか。学校も見て見ぬふりをしている。もう何が何だか分からない。一寸先も見えないような暗い日々が続いていく。

　全てを投げ出してしまいたい気持ちになることもある。だけど、冒険者学校に入れてくれた両親の期待は絶対に裏切りたくない。クラスメイトの思いも頑張りも未来も無駄にしたくない。

　同じ思いをする仲間と深夜遅くまで話し合い、泣いて議論して葛藤して、また泣いて。それでたどり着いた結論が私たちのための部活を作るってことだった。早速申請してみたものの、Ｅクラスに対する根深い差別意識がある生徒会がそう簡単に話を聞くはずもなかった。

　その対策を練る過程で、また“彼”と一緒になったのだけど。

　入学式のときと比べて随分とスリムに、そしてなんだか頼もしく見えるようになっていた。葛藤し苦しむクラスメイト達の姿とは違い、飄々としていて捉えどころのない雰囲気はそのまま。リサもそんな感じだけど、ソウタは超が付くほどのポジティブ思考なのかもしれない。

　そこからストレス解消に一緒にダンジョンに潜ることになり――そう。ここまではおかしいことはない。

　それがいつからか美味しい狩場の話になって。契約魔法書の話になって。遂にはゲートとかいう眉唾物の話。リサとソウタ、二人して私をからかっているのかと疑ってしまったけど、どうやら話は本当かもしれない。

　　\*・・\*・・\*・・\*・・\*・・\*

　遠くには土煙を上げながら走るオークロード。さらにその後ろにもしかしたら三桁に届くのではないかという数のオーク達。先頭には小走りのフォームなのに異常なまでの速度がでているソウタがいた。そんな速度で橋を渡れば大きく揺れるはずなのに、ほとんど揺らさず滑るように渡っているのは何かの魔法だろうか。

「俺が合図するのでタイミング合わせて！」

　程なくして全長５０ｍほどの大きな吊り橋にオーク集団が騒がしい鳴き声と共に我先にと乱暴になだれ込む。橋が横にも縦にも大きく揺れたせいで数体が弾き出されて落ちていくが、それでも橋の上には数十体は乗っている。

　先頭には何としてもソウタに一撃を喰らわさんと、凶悪な顔のオークロードが目を血走らせ走っている。上級冒険者のみが相対することを許されていると言われるのも納得の風格。それがもう目の前に迫っている。息遣いが聞こえ始めるその時――

「今だっ！　切って！」

　恐怖で身が竦みそうになりながらワイヤーを切り落とす。ロープの張力が崩れ、断末魔と共に橋ごと落下していくオーク達。１０秒ほどすると強烈なレベルアップ症候が現れ、胸の奥が燃えるように熱くなり息が詰まりそうになる。

「うぅ……今のでレベル上がったの……？」

「私もレベルあがったみたい～」

　一度に膨大な量の経験値が流れ込んできて苦しくなり、思わず前かがみになる。リサを見れば、ガッツポーズをしてニンマリと喜んでいた。

「ふむ。レベル５になったようだね」

　ソウタが《簡易鑑定》を使ったためか、心の奥底を覗き込んでくるような感覚に襲われる。私もその《簡易鑑定》を覚えたということは、少なくともレベル５以上になったということだ。

　ロープを切り落とすだけで、レベルが上がるなんて凄すぎる！　あれだけの数のオークを倒せば上がるのは分かるのだけど……オークロードの性質を利用して橋ごと落とすなんて一体誰が考えたのだろう。

　ソウタは私達にしっかりと経験値が入ったのを確認すると一度伸びをして「うるさいので掃除してくる」と勢いよくどこかへ走り去る。谷の向こう側には橋の上に乗りきれなかった数十体のオークがブモォとこちらを威嚇し、鳴き声を木霊させている。

　あの数のオークを「掃除する」って何かまた特別な方法でも使うのかなと見ていると、遠くから回り込んできたソウタはそのまま真っ直ぐオーク集団の中へ突っ込んでいってしまった！

　そこでソウタの強さが垣間見えることになったのだけど。はっきりいって私では何が起こっているのかよく分からない。

　というのも、四方八方から振り下ろされるオークの斬撃を躱す動きが速すぎて、どう避けているのか見えないし、武器を振るう攻撃速度もあまりに速く、二の腕から先がブレてよく分からない。

　戦い方も剣戟の授業で教わった「基本的な戦術」からかけ離れている。

　普通の多対一における戦術は、如何に囲まれないよう、そして死角を見せないよう常に動き回りながら戦うのが重要だと言われているのに。ソウタはオーク集団の中心に陣取り、四方から攻撃を浴びせられるポジションでほぼ動かず戦っている。

　だというのにオーク達の攻撃は一発も当たらず、逆にソウタの振るう剣の軌跡に吸い込まれていくように次々と斬られている。オークの動きを誘導している？　何らかの固有武術だろうか。いずれにしても何の躊躇なくあの戦術を実行できているのは大きなレベル差があるからだろう。

　その証拠に、太ったオークの巨体を然程力が入っているようには見えない一振りで斬り捨てている。相当量のＳＴＲがなければできない芸当だ。あの剣も決して軽くないはずなのに、まるで棒切れを扱うが如く振るっている。

　決闘騒ぎのときに見た赤城君と比べても、さらにはそのときの相手である刈谷君と比べても、谷の向こうで戦っているソウタの強さは一線を画している。あれほどの実力なら無理して公表する必要がないのも納得がいく。

　その後はソウタの妹ちゃん――華乃ちゃんといってソウタに負けず劣らずの強さだった！――が合流し、橋落としというやり方で何度も大量のオークを倒した。ロープを切るだけで数十体のオーク達が雄叫びを上げながら一斉に落ちていく様は何度見ても心臓に悪い。

　いつしか華乃ちゃんとソウタのどちらが沢山のオークを連れてこられるかという勝負に。ソウタが１５０体ほど連れてくることに成功すると、次の華乃ちゃんが負けじとオーク２００体ほどを召喚させた辺りでオークロードのＭＰが尽き、途中で倒れてしまうというハプニングも起きた。

　そのおかげもあって、たった数時間で私のレベルは６まで上昇。このレベル６というのは私が夏休みを使い頑張って潜ってやっと届くかどうかの目標レベルだったのだけど、こうもあっさり……それもほとんどの時間を談笑しながら到達するなんて考えもしなかったことだ。

　今日のダイブはあまりにも驚くことがありすぎて、あと可笑しくて、学校での暗鬱とした気持ちが何処かへ吹き飛んでしまった。久々に心から笑えた気がする。ソウタもこんなに面白い人だったなんて。

　これからしばらく一緒に潜る約束をしてもらったけど、彼らに付いていけばもっと面白いものが見られる気がする。

　そうしたらいつか私の願いも叶うのかな。

　次のオークロードがポップするまでは談笑の時間だ。持ってきたお菓子を食べながら他愛もない話をしていると――

「私もサークル入りたいっ！」

　華乃が学校の話が聞きたいというのでサークルを作った話をしたら、自分も入れろと駄々をこねはじめた。やんわりと拒否するとひっくり返って「もっとダンジョンに行きたいのに」だの「おにぃは私をほったらかしにする気だ」とみっともなく転げまわる始末。

　冒険者学校のサークルに部外者、しかもダンジョンに入れない中学生をサークルに入れてどうするんだと説得するも馬耳東風。終いには１時間ほど前に見た、サツキとリサの足元に泣きつき味方に付けるという芸を再び披露し、またもや俺が悪者になってしまった……

「練習するだけだし、良いんじゃないかなっ」

「華乃ちゃんにはこれからもダンジョンでお世話になるからね。私も賛成かな～？」

「やったー！」

　華乃は俺と同じレベルを持ち、ダンジョンに関する機密情報も多く共有している。この先もダンジョンに潜って深層を目指すならパーティーを組むことにもなるだろう。ならばサークルの練習を通じ、親交を深めておいたほうが安全面も効率も良いと逆に理詰めで説得されてしまった。

　目を潤ませ二人に抱き着いて喜ぶ我が妹。甘やかすとまた泣きつきゴリ押しカードを使いそうで、ろくなことにならないのだが。しかしやけに仲がいいな……買ってあげた腕端末の連絡番号を交換しているではないか。オレモオレモー！

　妹には目立たず校内に入れるようダミーの制服とジャージも買ってあるので、サークルに参加する程度ならバレることもないだろう。まぁ、家族がサークルの練習に参加したところで別にどうということはないか。

「サークル名はなんていうの？」

「そんなのは無いぞ。クラスメイトの練習の場として一時的に作るだけだしな」

「え～じゃぁ、名前付けてあげるっ。シャイニング・カラーズとかどう？」

　妹が早速パクリっぽい名前を提案してきた。既存のクラン名をもじるのはちょっと。というか俺はカラーズに良いイメージがないんだよなぁ。

「百花繚乱とかいいかも～？」

「にゃんにゃんファミリーとかっ」

　男の俺が参加するのに百花繚乱ってどうなの……参加していいんだよね？　あと、にゃんにゃんファミリーって。そんな如何わしい名前を付けようとするサツキに流れを持っていかれるのは宜しくないので俺も提案しておこう。

「Ｅクラスのためにあるサークルだから、Ｅから始まる単語……Ｅｖｏｌｖｅとかどうよ」

「Ｅ？　うーん……Ｅｎｄとか？」

「Ｅクラスを脱出するという意味で、Ｅｘｏｄｕｓとかっ」

「謎の集団を意味するＥｎｉｇｍａはどうかな～」

　その後もＥの付く単語を並べるものの、しっくりとしたものが出てこない。とりあえず仮付けで“ＥＥＥ”ということになった。何かの秘密結社みたいだが、サークルを申請するにも名前がいるので仮の名前があるだけでも良しとしよう。

「あれ？　そういえば……華乃ちゃんって何歳なの？」

　小柄なＪＣの童顔をまじまじと見ながらサツキが当然の疑問を口にする。冒険者中学校の生徒を除けば、本来なら高校生以上でしかダンジョンに入る許可を貰えないからだ。

　このメンバーに秘密にしていても良い事はないので、実はゲートを使ってこっそり入っていると正直に伝える。俺のダンジョンダイブ計画はクラスメイトではなく家族と共にレベルを上げて行くことが主柱となっている。それを聞いたサツキは思うところがあったのか、妙に素直に納得してくれた。

「じゃあ、しばらくは私達だけで頑張っていくことになるのかなっ」

「この四人なら放課後に学校で訓練するよりもダンジョンに潜ったほうが手っ取り早いだろうな」

「そうそう。学校関連のトラブルに対応していくためにも～早めにレベル２０くらいまでにはなっておきたいわね～」

「に……２０！？」

　後々にクラスメイトを誘ってメンバーを増やす予定ではあるものの、サークルの申請が受領されても、実際に動けるようになるまで一ヶ月くらいはかかる。その間は今いるメンバーだけでゲートを使ったレベル上げに専念したほうがいいだろう。

　またゲームではサークルを作ってしばらくすると上位クラスや上級生が様々な妨害工作を仕掛けてくるようになる。こちらの世界でも同じような妨害が来るかどうかは分からないが、対処できるよう早めにレベルを上げておくことに越したことはない。

　端末のデータベースを見る限りでは生徒会や他の大派閥の連中もレベル２５には達していないので、レベル２０くらいあれば一先ず対抗できるはずだ。一方でサツキはレベル２０と聞いてあたふたと驚いている。目の前のちんちくりんな妹もすでに１９になっているのでサツキも頑張ればすぐに追いつけると思う。

　ただ現時点では四人のレベル差が激しいので、サツキとリサをパワーレベリングしてレベル１５くらいまで上げつつ、俺と華乃は別個で動き、装備を整える時間にしたほうがいいだろう。華乃も早く新層攻略したいようなので近いうちにダンジョン通貨稼ぎができる狩場に連れて行こうかしらん。

「訓練といえば。立木君からのメールは見たかなっ？」

「見たよ～。まだ返事はだしていないけど」

　お菓子を齧りながら端末のメールを見せてくる。立木君の提案で、クラス対抗戦に向けて何回か練習会を開くという旨が書かれていた。

　レベルが思うように上がっていないクラスメイトを優先的に誘っているらしく、データベースではレベル３表示のままの俺とリサに出席要請のメールが来ていたのだ。サツキはレベル４表示なので対象者ではないが、連絡事項としてメールが届いていたという。

　立木君もクラスのために動いていると知って喜ぶサツキ。ゲームのメインストーリーでもサツキが退学に追い込まれたときに一番悲しんでいたのが彼だったわけで、こちらの世界でも互いに信頼し手を取り合う未来はあるのだろう。

「え～とソウタは……どうみてもレベル３じゃないよねっ」

「私も本当はレベル５だったけど～更新してないだけなんだ～」

　通常、冒険者学校の生徒はレベルが上がったら鑑定を受けて学校のデータベースを更新するものだが、俺のレベルでは厄介事を呼び込む可能性があるので更新はしていない。同様に、これからサツキにも当てはまることになる。

「これからはしばらくは鑑定はやめておいたほうがいいよ。レベルの上がり方がおかしいと問い詰められるし」

「で、でもずっとしないのはまずいよねっ？」

　データベースを更新しないということはずっとレベル４表示のまま。それだけならともかく定期試験では計測を必要とする科目もあり、いずれバレるはずだとサツキが危惧する。

「【シーフ】にジョブチェンジすれば《フェイク》というステータス偽装スキルを覚えられるからとりあえずは大丈夫だよ」

「ふぇ……いく？　そんなスキル【シーフ】にあったっけ」

　サツキは首を傾げながら端末のデータベースを見つめている。《フェイク》は【シーフ】のジョブレベルを１つ上げただけで取れるので、【キャスター】になるにしても先に取っておくことを勧めておこう。

（しかし練習会か。面倒だな）

　早速明日からやるとのことだけど、レベルは十分に足りているし出席したくはない。サボろうとも考えたがそれを予想したカヲルから追加で「迎えに行くので絶対に来るように」と念押しのメールがさっき届いた。逃げられそうにもない。

「俺は明日は行かないとまずそうだ。カヲルが家まで迎えに来るみたいだしな」

「ふ～ん。ソウタが行くなら～私も行こうかな～？」

「私も行きたいっ」

　２時間くらいで練習は切り上げるらしいし、さくっと終わらせて帰ってこよう。こちらのためを思って誘ってくれたのなら、とりあえず顔出しくらいはしておこう。

　あと華乃、お前はダメだ。

　その後も何度か妹の我が儘を宥めつつ橋落としを続け、夕食の時間になったので終わりにすることに。次からはゲートを使うからもっと長くやれることだろう。

　荷物を纏めて５階のゲート部屋がある場所へ案内する。やはりいつ来ても誰もいない。気にせずゲートに関する説明を一通りして魔力登録を促すと、しきりに端末を見ていたサツキが不思議なことを言い出した。

「この辺りってＭＡＰに書かれていないけど、どうしてかなっ」

「あれ～？　ほんとだね～」

　俺も腕端末からＭＡＰを開いて確認してみる。確かにゲート部屋の一帯がマッピングされていない。この端末に搭載されている地図は冒険者ギルドの計測スタッフが作成し配布しているものだ。５階入り口から然程離れていないこんな場所を見落とすことなんであるだろうか。

「何か理由が……人が来ないように何かが仕掛けられているとか？」

「まぁまぁ。今日は疲れているし～難しいことは後日にでもね」

　ふと思考の海に沈みそうになったものの、リサの一言でその場を後にすることとなった。確かにこの場で考えることでもないか。

　\*・・\*・・\*・・\*・・\*・・\*

「サツキねぇ。リサねぇ。また遊んでねっ！」

「こちらこそだよっ！」

「またね～華乃ちゃん」

　互いに抱き合い、その後長いこと手を振りながら別れを惜しみ合う女性陣。サツキとリサは共に寮住まいなのですぐに行ける距離にある。時間が合うなら存分に遊んでもらえばいい。

　夕日に照らされ赤く染まった校内の並木道を、謎に元気いっぱいの妹を引き連れて歩く。

（それにしても。今日は大きな進展だったな）

　彼女達と組めるなら学校のイベントも、ダンジョン攻略においても大いにやりやすくなる。妹とも気が合うみたいだし、ここらでレベル上げを加速する計画でも練っておこうかね。

　意義深いダンジョンダイブから帰ってきて飯と風呂を済ませ、これからのことを考えつつ微睡みながらゴロゴロしていると端末に電話が掛かってきた。リサからだ。

　華乃が電話番号の交換をしているときにどさくさに紛れて交換を持ち掛け、無事に女子二人の番号をゲットという快挙を成し遂げたのだ。いやぁ、出来た妹を持つ兄は鼻が高い。グッジョブ。

　こうして俺の寂しい電話帳に家族以外の名前が初めて加わったのだが、いつまでも感慨に浸っている場合でもないので早速電話に出てみる。何用だろうか。

『起きてたかな～？　ごめんね～夜分遅くに。時間大丈夫～？』

「起きてたよ。ゴロゴロとしてただけだし問題ない」

　時刻は夜の１０時過ぎ。それにもかかわらず電話の向こうからは車が走る音が聞こえてくる。どこかで歩きながらの通話のようだ。

『色々考えてたら気になっちゃって。この世界の仕組みとか、ダンエクとの関連性とか、そういうのって誰とも相談したことなかったでしょ～？』

「……そうだな。こちらに来て色々と気づいたことはあったけど、誰かと考察したことを擦り合わせてみたいとは思っていた」

　リサはゆっくり間延びした話し方するので一見おっとり天然系女子のように思えるが、周りをよく見ていて鋭い観察眼を持つ屈指のダンエクプレイヤーでもある。俺では気づかなかったことが彼女にはあるかもしれない。

『せっかく電話番号交換したんだし～。こうやって話すのもいいかなって』

「あぁ。話す内容もアレだし、そっちにいったほうがいいか？」

　今の俺達がすでに誰かによって監視されてるとは思わないが、電話で話す事でもない。

『そうだね～それじゃ……学校の裏山にある公園で待ち合わせよっか』

「分かった。準備してすぐ行く」

　電話を切り、ゆっくりと起き上がる。

（裏山の公園か。今の時間のあの場所は……）

　学校の裏山は風致公園となっていて、夜は冒険者学校やその周辺の街を一望できるデートスポットとしても有名だ。そんな場所で可愛い女の子――中身はアレだけど――と二人きり。オラちょっとドキドキしてきたぞっ。

　妙なテンションになりつつ急いで服を着替える。リサと会うなら念のためにアレも持っていこうかね。

　軋む階段を下りて玄関へ向かうと、パジャマ服のお袋がフェイスパックをしながら歩いていた。

「あら、出かけるの？」

「ちょっとそこまで。鍵は持ってくよ」

　手をひらひらと振って「気を付けてね～」と言うと冷蔵庫を漁り出す。今日も我が家は平和である。

　さて。こんな時間だしリサをあまり待たせたくない。早歩きで行くとしよう。

　\*・・\*・・\*・・\*・・\*・・\*

　元は高さ２００ｍ近くあった山も、麓にダンジョンが出現した都合により８０ｍほどまで削られ小さくなってしまった。それでも山頂はそれなりに見晴らしは良く、展望台やレストランもあり、昼は家族連れ、夜はカップル達の憩いの場として愛され続けている。

　その山頂まではハイキングコースのような坂道が整備されており、夜の帳の中えっちらおっちらと昇っていく。途中、いちゃつくように手を繋ぎながら歩くカップルとすれ違うが、今夜は気分が良いので爆発なんて願わないでいてやろう。

　そんなこんなで登り始めて１０分ほど。すでに夜は更けており深夜といっていい時間。いつもは多くの人が訪れるこの公園もさすがに人影は疎らで、話をするにはいい静けさだ。

「公園のベンチにいるって言ってたけど……あ、いたいた」

　お洒落なポールライトにほんのり照らされた夜の公園を見渡してみると、早速俺を見つけたリサが控えめに手を振っていた。シャーリングが可愛い茶色のブラウスにカジュアルでベージュ色のワイドパンツ。元々見た目が大人っぽいというのもあってか、落ち着いた雰囲気を醸し出している。普段私服を見ないので多少ドキマギしてしまうのは致し方ない。

「早かったね～。もう少しかかると思ってたけど」

「運動がてらに早歩きで来たからな」

　機嫌が良いのかリサはニコニコとしながらベンチに座る様に促してくる。ここはマジックフィールド範囲外のため肉体強化は適応されず、自分の筋肉だけで登ってきたので程よい疲労感がある。座りたいと思っていたので遠慮なく腰を掛けることにした。

「ごめんね～こんな時間に。ちょっと気になることがあって眠れなくて」

「気になることなら俺もあったからな。それに話すとなると場所やタイミングが難しいし丁度いい」

　俺もリサも“異世界”から来た数少ないプレイヤーという立ち位置。元の世界やダンエクの話は信頼できる家族とさえ相談できないが、リサとならできる。もし同じ立場の人がいるなら色々と話し合ってみたいと思っていたのだ。

「ふふっ。学校では他愛のない話はしてたけど～お互いの正体が分かってからは、ちゃんと話したことってなかったしね。ゲームの中ではあんな関係だったのに……不思議」

　星空を見ながらリサがゲームでの関係性を思い返し、しみじみと言う。“目が合ったら即殺し合い”という極度の敵対関係だった二人がこのような特異な状況に巻き込まれ、ベンチに座りながら相談し合っているのも確かに不思議な状況であり、何だか可笑しい話でもある。

　俺も夜空を見上げてみたものの、街灯りのせいで一等星すらほとんど見えない。ここは夜景ならともかく星空を見るにはあまりいい場所ではないようだ。

　一呼吸置いたのをみたリサは何か話したいことはあるかと聞いてきた。まぁここはレディーファーストということで出だしの話はリサに譲ろう。

「ありがと。それじゃまずは～……やっぱり今日のゲートの出来事でも話そっか」

「ゲート部屋が地図に書かれていなかったというやつだな」

　冒険者ギルドが多くの人員を投入して制作し配布しているダンジョンの地図。そこにはゲート部屋の在処が書かれていなかった。一見そこまで気にするものではないように思えるが、やはりリサも気になっていた様だ。

　５階のゲート部屋は冒険者が沢山いる入り口から程近く、狩りをしていてもおかしくない場所にある。それなのにいつ行っても人影は見当たらず、それどころか配布されている地図にも描かれていなかった。となると――

「ゲート部屋一帯に人除けのような何かがかけられているとか？」

「私もそう考えたけど～。それならどうして私達プレイヤーとゲートの秘密を知ったサツキや華乃ちゃんには効かなかったのかな」

「……ゲートを認識したかどうかが関係しているのかもな」

　ゲートという事象を認識していることが人除けを突破するキーになっている可能性。その場合、かけられている魔法は認識阻害系になるのだろうか。

「ゲートだけなら人除けの類を考えるよね～。でも認識についておかしな事がまだあるの」

　それは何かと聞いてみると、サツキが《フェイク》の存在を知らなかったというのだ。《フェイク》は【シーフ】に転職して最初に覚えるスキルなのに冒険者学校の生徒、しかも好学のサツキが知らないなんてあり得ないとのこと。

　もしかして《フェイク》は普遍的なスキルではないのかと思い、冒険者ギルドの図書室で調べたところ、やっぱりどこにも記載は見つからなかったそうな。そして一般的な【シーフ】のジョブに就いている冒険者も《フェイク》を獲得できていないという。

　もしかしたらスキル習得の際に、そのスキルが存在するという認識が必要なのではないか。あると思わなければ無いことになる、そんなシステムがこの世界には備わっているのではないかとリサが推測する。

「なるほどな、逆に認識さえしてしまえば華乃のように《スキル枠＋３》を習得できたり、一人でゲート部屋に行けるようになるというのもそれなら説明できる」

「《フェイク》に《スキル枠＋３》、ゲート。認識が必要なものは他にも色々ありそうね～」

　普遍的に知られているモノと知られていないモノ。一体どんな違いがあるのか。だがこれは大体予想は付く。

「サービス開始時にあったものは認識が必要ではなく、アップデートされたものは認識が必要なパターンか」

「うん。その可能性は高いかな～」

　この世界の人々のダンジョンに関する常識や知識は、ダンエクサービス開始時点で実装されていたものに近い。最初期からあったジョブやスキルは、この世界でも広く知られているものと大体が一致している。

　一方で《フェイク》、《スキル枠＋３》、ゲート部屋やスライム部屋などはサービス開始からしばらく経って追加されたコンテンツだ。この世界の住人達はそれらを知らない、もしくは認識できていても一部の者のみに情報が制限または独占され、一般社会には隠匿されている。

　サービス開始時のダンエクも、俺達がこちらの世界に来る直前のアップデートされまくったダンエクも、こちらでは同じ１つの世界。どちらを内包しても辻褄が合うように、このような認識という手段で差別化されているのかもしれない。

「ふふっ。どの情報を見せていいのか、いけないのか。これで少しは判断しやすくなったかな～」

「元プレイヤーの武器が何なのかというのも判別しやすくなるな」

　俺達ダンエクプレイヤーにはマニュアル発動や、ゲーム時のキャラのスキルが使えるなど様々なチートがあるのは知っていた。だが、アップデートされたもの全てがプレイヤーの武器になりえるというのは今後の行動において新たな指針となりえる。しかし――

「……《フェイク》に関してはちょっと困った問題がある」

「どうしたの～？」

　先日の冒険者ランク昇級試験のときに出会った“くノ一レッド”のオッパイさん……もとい、くノ一さんのことである。名前はまだ知らない。彼女はほぼ間違いなく《フェイク》を使用していた。同時に俺が《フェイク》を使用していることに大きな関心を示していた。

　恐らく《フェイク》は先ほど話した予測の通り一般的には知られておらず、くノ一レッドのような特殊な立場の者のみが情報を独占しているスキルなのだろう。それは非常に美味しい特権となっているはずだ。

　強さや能力を偽装できれば、そして偽装を疑う者がいない状況ならば、相手の油断を誘いたい放題できる。戦闘や工作活動を行うにも大きなアドバンテージとなるだろう。

　そんな特別なスキルを何の変哲もない男子高校生が所持していたとなれば、どう思うのか。

　翌日にはクランパーティーの招待状が楠雲母――以下キララちゃん――によって届けられたわけだが、その理由が少しは分かった気がする。

「そのクランパーティーっていつあるの？」

「クラス対抗戦が終わったあたりだ。参加する予定だったんだが、やっぱり不味そうか」

　自分達だけが知っているはずの極秘情報が知られていた。もしかしたら俺を脅威と考えているかもしれない。くノ一レッドの動きには警戒をしておくべきか。

「もうソウタや家族について調べ上げているはずよ」

「その上で直に俺と面談したいということか」

「そもそもの話、ソウタはくノ一レッドというクランをどの程度まで知っているの？」

　表向きの顔は華やかでお色気満載の【シーフ】クランということ。クランリーダーの御神遥は芸能界でも度々話題となっている有名人。だが裏では冒険者ギルドや政府による依頼を受けるほどの上級クラン。あのくノ一さんもそう言っていた。

「ダンエクでは三条さんのメインストーリーにも登場するわ。敵としてね」

「……敵か。ＢＬモードでやったことないから分からなかったな」

　キララちゃんが三条さんの味方となり背中を押すキャラだというのは知っていたので、その彼女が所属するくノ一レッドも何となく良いイメージを持っていた。招待状の中身やキララちゃんの対応を見てもそう危険な感じがしなかったという理由もある。

　しかしリサによるとくノ一レッドは、国家と伝統を重んじる非常に保守的なクランで、それらを脅かすと判断すれば容赦なく攻撃を仕掛けてくるという。そんなクランの本拠地に本当に一人で行くのか、と言われても。

「正式な招待状を無視していつまでも逃げ回るというのもな。どうしたもんか……」

「いきなり危害を加えることはなさそうかな～。それならもう襲ってるはずだし」

　ゲームでのくノ一レッドを考えれば、俺から無理にでも情報を引き出したい、もしくは封殺したいなら躊躇なく迅速に行動を起こしているはず。呑気に招待状を送って歓迎するやり方を取ったからには攻撃なんて考えていない、とのことだ。

　恐らくだが最初に俺の背後にどんな組織がいるか調べでもしたのだろう。だがそんなものは無いのだから出てくるわけがない。そこでくノ一レッドは慎重に話し合いの機会を設けて、探りを入れたいと考えたのかもしれない。

「一応顔は出すが、相応の準備はしていくか」

　戦闘が起こる可能性は……少ないだろうが否定もできない。念のためクランパーティーの日は家族にダンジョンにでも行ってもらったほうがいいのかね。

「それなら～。私をパワーレベリングをしてくれたお礼にいい事を教えてあげよっか。もしかしたら力になれるかも？」

　ふふっと小さく笑うと腕を前面に出し何かを描き始める。何をするのかと思いきや、マジックフィールド外であるにもかかわらず、突然スキルを解放し始めた。

　日を跨ぎ静まり返った公園で、リサがマジックフィールド外であるにもかかわらず《オーラ》を発動した。

「その反応からすると、もう知っていたようね～」

「ゲームでもできたならこちらの世界でもまず試すからな」

　通常、肉体強化とスキルは、ダンジョン内かその入り口１５０ｍ以内のマジックフィールドでしか効果が現れず発動もしない。人為的に作られたマジックフィールド――ＡＭＦ（Ａｒｔｉｆｉｃｉａｌ　Ｍａｇｉｃ　Ｆｉｅｌｄ）――の魔道具を使用すればどこでもマジックフィールドを作り出せるが、ＡＭＦ魔道具の所持は政府により厳しく制限されており、俺達もそう簡単には使えない。

　だが《オーラ》だけはマニュアル発動限定で、マジックフィールド外でも使用可能なのだ。さらに《オーラ》を発動し続けると自分の周囲に魔素が満ち、短時間だが肉体強化やスキル行使が可能な疑似マジックフィールドとなる。このＡＭＦはダンエクの裏技のようなものだが、プレイヤーなら大抵は知っているものだ。

「じゃあ……これは知ってるかな～？」

　リサがゆっくりと目を瞑ると、周囲に溶けて不意にいなくなる――ような錯覚に陥る。すぐ目の前に少女が確かにいるにもかかわらず、集中してよく見ようとしなければ気づかなくなってしまう異様な事態。これは気配を低下させる《ハイド》ではなく、周囲から存在感も視認性も大きく低下させる《インビジブル》か。

　スクロールやマジックアイテムを使った形跡はない。にもかかわらず上級職のスキルを発動できているということは、ゲーム時のキャラが覚えていたということだろうか。

「このスキルはゲームのときは覚えてなかったよ～？」

「じゃあ、どうやって覚えたんだ」

　ゲーム時に覚えていなかったとなると、この世界で新たに習得したということになる。上級職に就くにもレベル２０以上という条件があるというのにだ。

「ゲームのときは《オーラ》の量なんて調節できなかったけど～、この世界なら可能だって気づいたの。《インビジブル》は体全体から溢れ出る《オーラ》を周囲と完全に同調させれば……」

　再び目の前の少女の存在が気薄になる。ちなみにゲームと同じで話したり動いたりすると解けるようだ。

　リサによると《オーラ》は叩きつけるように一気に放出すれば威圧になるし、放出量を一定にして周囲の魔素となじませれば《インビジブル》に。完全に閉じて魔力漏れをゼロにすれば《ハイド》になるという。新方式のマニュアル発動スキルなんだろうか。だが――

「その程度ならこちらの世界の冒険者も試したことくらいあるだろうに……あぁ、そうか。これもスキルとして発動させるには認識が必要なのか」

「《インビジブル》というものを知っていなければ《オーラ》の量や流れをどう調節したところで存在感を消すという効力は出ないみたいね～。スキルとして習得もできないはずよ？」

　スキルの動きや魔力の流れを単に真似るだけでは効力はでない。例えば単なる横なぎと【侍】の《居合い》が仮に同じモーションだとしても、スキルであるか否かで攻撃力補正と切断力が段違いになる。《インビジブル》も真似ただけではスキルの効力がでない、というのがリサの予測だ。

　ちなみにこのスキル発動方はかなりの集中が必要で、戦闘時にはおススメしないとのこと。やるなら安全地帯でやるか一度スキル枠にいれてオート発動したほうがいいようだ。

　それでもこの方式で《オーラ》系スキルが発動し、会得までできるというのは大きな情報といえる。俺も試しにやってみるか。

　まず《オーラ》だが、マニュアル発動はモーションスキルではなく魔法陣入力だ。最初に前面を掌でなぞりその後に魔力を少量放出しつつゆっくり円を描く。すると《オーラ》が体中から湧き出てくる。このまま放出を続ければ俺の周りが一定時間、マジックフィールドとなる。すでにリサがこの場を疑似マジックフィールドにしているので俺が発動する意味は無いが。

　次に放出量を調節してみる。《インビジブル》は周囲の魔素に《オーラ》を馴染ませるとのことだが……体から溢れ出る《オーラ》を均一に放出するどころか、調節することすら上手くいかない。どうやるんだ。

「何かコツがあるのか？」

「放出量の調節って結構難しいでしょ～。何度も練習しないとね～」

　ちょっとやっただけでは放出量を自在に操るなんて芸当が簡単でないと気づく。かといって長く練習しようとしたらＭＰ切れを起こしてしまいそうだ。

「先に《メディテーション》から練習したほうがいいかな～」

「確かにそれができれば続けられるかもしれないけど……」

　《メディテーション》はスキル使用中にＭＰリジェネして回復する優秀なスキル。高レベルのプレイヤーがわざわざスキル枠に入れるほどのものではないが、ＭＰ量が少なく枯渇しやすい低レベルでは重宝する。【キャスター】のジョブレベルを最大まで上げれば覚えられるものの、それがすぐに覚えられるというのは朗報だ。

　目を閉じて丹田の周りで《オーラ》をぐるぐると循環させれば《メディテーション》になる……と簡単にいうがやはり難しい。《オーラ》という今までに無かったモノを、この短期間で自在に操り、いくつものスキルを会得したリサには驚くばかりだ。もしかして才能の差とかあるのだろうか。

　そんな彼女はゆっくりと息を吐き、自嘲気味に笑みをこぼす。

「私がオーラ系のスキルを頑張って練習したのは理由があってね～。もしかしたらソウタも同じじゃないかな～って」

「同じ、とは？」

「不都合な初期スキルを持っていたの」

　不都合な……やはりリサも持っていたか。

「鑑定アイテムで見てもいいか？」

「うん。今ならいいよ」

　もしかしたら俺の《大食漢》のようにリサも特殊なスキルがあるかもしれないと思い、鑑定アイテムを用意してきたのだ。早速スキル欄を見てみると――

「《簡易鑑定》に……《発情期》か。如何にもヤバそうなスキル名だな」

　俺の《大食漢》にリサの《発情期》。これらはプレイヤーに対する呪いなのではないかと疑ってしまう。俺の場合はＳＴＲとＡＧＩが大幅に下がることによる運動能力低下と、常時食欲増大というデバフが掛かっていた。リサの場合は……とにかくスキルの中身を見てみよう。

「レベルアップ時にＭＰとＡＧＩの上昇値にプラス補正、性欲増大、ＨＰ－３０％、ＶＩＴ－５０％　《色欲》へアップグレード可能……これはきついな」

　レベルアップ時の補正はいい。しかし最重要項目のＨＰとＶＩＴの低下に加えて「性欲増大」……どの程度の性欲増大なのかは分からないが、仮に俺の食欲増大並みに強烈に作用してるとなると非常にマズい気がする。

「性欲増大ってひとえにいうけど、２４時間ず～っと発情してるようなものだったの。このスキルで入学当初の私はまともに生活できそうにないくらい精神的に追い込まれてたのよ～？」

　今だから言えるのだとにこやかに言う。確かにこんなものが常時発動していたら頭がおかしくなりそうだ。特に女子が性欲増大に苦しむというのは色々な意味で危険も伴うかもしれない。

　俺もそうだがこの初期スキルはマジックフィールド外でも問答無用で作用してくる。どこにも逃げ場が無いのだ。

　一刻も早く《発情期》を消したい。その手段として最初に思いついたのはジョブチェンジして新しいスキルを覚え、上書きすること。だけど精神的に追い詰められている状況で何週間も悠長にダンジョンダイブしている余裕などない。手詰まり感に打ちひしがれていたという。

「それでね～少しでも精神を落ち着けようと時間があるときはダンジョンに入って瞑想してたの～」

　元の世界でも、そしてこちらの世界でも何か考え事や悩み事があるときは瞑想をしていたという。その最中に《オーラ》を弄っていたらお腹付近に何か引っ掛かりを覚え、偶然《メディテーション》を習得。それから《オーラ》の流れで何かをするスキルなら他にも覚えられるのではと色々試したそうだ。

「それで覚えたのが《インビジブル》や《ハイド》、《メディテーション》なんだけど～」

　練習しても駄目だったスキルがほとんどで、オーラ系スキルなら《ドラゴンオーラ》、《セイクリッドオーラ》、《魔闘術》なども全て失敗に終わったそうだ。これらのスキルはただ単に《オーラ》の流れや放出量を変えればいいというわけではないようで、詳しい習得条件は未だ謎が多いとのこと。

「それだけ覚えられたのに初期スキルは上書きはできなかったのか？」

「うん、上書き不可みたい。ソウタも多分上書きができないはずよ」

　まぁ何となくだがそんな気はしていた。ゲーム知識に該当せず、しかも元プレイヤーだけにあるデメリットの大きな初期スキル。色々と秘密がありそうだ。

「でも～最後の頼みの綱だった《フレキシブルオーラ》は覚えられたわ」

　《フレキシブルオーラ》とは状態異常を軽減、または掛かりにくくする対デバフスキル。これで発情というデバフ効果を薄めて、ようやく平穏な日常を送れるようになったのだと深い息を吐きながら言う。

　しかし発情は存外に強力なデバフなようで一日に数回掛けなければ抑えられないとのこと。それでも多少なりとも抑制できたなら、俺の《大食漢》の食欲増大にも効果があるかもしれない。

　そして気になる問題はまだある。この初期スキルは上位スキルへ昇格が可能ということだ。

「俺達が持ってる初期スキルは“資格者”というのを倒すことで上位スキルに昇格できるんだが……どう思う？」

「鑑定したときに昇格条件が見えたわね。その資格者というのはよく分からないのだけど、上位スキルに昇格させたらデメリットも更に大きくなるかもしれないわ」

　鑑定ワンドでも昇格した後のスキル効果までは分からなかった。今の状態でもヤバイほどのデバフ効果が付いているというのに、これ以上となれば手に負えないだろう。より上位の鑑定魔法でスキル効果を見極めるか、強力な対デバフ装備を手に入るまでは昇格を止めておくほうが賢明だ。

　そして資格者とは何なのかだが――

「俺はどうやら昇格条件を満たしているようなんだけど」

「えっ？　資格者というのを倒したの？」

「多分だがアイツを倒した時だ。それ以外に考えられない」

　漆黒の《オーラ》と尋常ではない殺意を放ってきたユニークボス、ヴォルゲムート。今でもアイツとの死闘は鮮明に覚えている。

「すっごく強かったみたいね～。でも資格者って私達のような元プレイヤーのことかと思っていたのだけど違うのかしら」

「そこなんだが、アイツと戦っていた時を今思い返せば……」

　アンデッドモンスターらしからぬ感情の起伏。間合いやスキル特性を熟知し、様々な方法でフェイント仕掛け、おまけに俺の攻撃を誘ってカウンターまで狙ってきやがった。まるでダンエク世界の実戦経験が豊富なＰＫＫ、もしくは闘技場のランカーと戦ったかのような感覚。あれほど怜悧狡猾なモンスターというのも冷静に考えてみればおかしなことだと分かる。

「ソウタにそこまで言わせるほどなんだ～。でもそんなモンスターがいるとしたら」

「あの戦い方だけをみれば、まるでダンエクプレイヤーのようだった」

　ヴォルゲムートはプレイヤーだったのか。

　断定できる材料はないけれど、勘がそう囁いている。しかしそうなるとプレイヤーの転移先が学校の生徒だけでなく、モンスター側にも適応されるという恐ろしい可能性が浮かび上がる。

　ゲームだった世界に俺達が存在しているくらいだ。何が起こっても不思議ではない。しかし仮に「気が付いたらアンデッドでした」なんて状況になったら、果たして俺は正気を保っていられるだろうか。

「そんなのとダンジョンで出会って戦闘になってしまったら厄介ね～。奥の手を出すにしても死闘は避けられないわ」

「ゲーム知識にないモンスターに出会ったら要注意だな。新種モンスターよりも資格者の可能性を疑ったほうがいい」

　ヴォルゲムートは目覚めたばかりだったからか、動きに緩慢な部分がありプレイヤー時代のスキルも使ってこなかった。それでも十分に対人戦慣れしており、突発的に戦闘にでもなってしまったら厄介この上ない。

「初期スキルの昇格狙いでプレイヤー同士が争わなければいいんだが……」

「それは憂慮すべきことね」

　資格者というのが特定のモンスターのことならばいい。だが元プレイヤーを意味するのなら、スキル昇格を巡って互いに殺し合う理由が生まれてしまう。それを阻止する何かしらの対策をしておきたいところ。

　例えば拘束力がある契約魔法で争いを封じるとか、レベルアップを急いで他プレイヤーより強くなり俺達が抑止力となるとか、あるいは互いに攻撃しないよう見張るルールを構築するとか。いずれにしても時間がかかるし、そもプレイヤーが誰でどの程度の強さなのか分からないと意味がない。

「しかし何人のプレイヤーがこちらに来ているんだろうな。思っていたよりも多いのか？」

「テスター募集イベントの難易度からしてクリアできた人はそう多くないと思うけど……でも」

　唇に人差し指を当て、ニヤリといたずらっぽく笑うリサ。

「……一人だけなら知ってるよ～？」

「遅刻～遅刻～」

　遅刻といっても今日は休日。休日といっても立木君が主導する練習会に呼ばれている日だ。

　鏡を見ながら寝ぐせだらけの髪を押さえつけ、急いで学校指定のジャージに着替える。昨晩は色々と考えをしていたらいつの間にか明け方となり案の定、寝坊してしまったわけだ。

「それにしてもこのジャージ……」

　これも買いなおさないと駄目かもしれない。痩せてきたことで腰回りがゆるゆるになっており、腰ひもをきつく縛ることで一時しのぎしている。世の中のダイエット成功者達は今まで着ていた服をどうしてるのだろうか。

「颯太～カヲルちゃんに悪いから中に入ってもらうわね～」

　階段下にはすでにカヲルが迎えに来ており、待たせている状態だ。急いで着替えて一階へ降りると、カヲルは静かにお茶を飲んで寛いでいた。

「来たか……このお茶は美味しい。飲み終わるまで少し待っててくれ」

　背筋をピンと伸ばし、両手で行儀よく湯呑みを持ちながら茶を啜る幼馴染。ダンエクのヒロインに相応しく洗練された日本刀のように美しい。内なるブタオマインドも大喜びだ。

　俺も一息つくために同じテーブルの反対側に座り、茶を注いで飲むことにする。ふむ、今年の新茶か。確かに美味い。

「……」

「……」

　向き合って顔を合わせたところで会話はない。それでも、入学当初の嫌悪感溢れる目付きは少しだけ和らいだ気がする。俺がこの体に入ってからはセクハラをしたり、無理に近寄って機嫌を悪くさせていないせいだろう。

　これまでのことを完全に許されてはいないのだろうが、少しでも安心してもらえたら嬉しい限り。いつしかカヲルとは心から笑い合い、色んな話をして通学をしてみたいものだ。この心の浮き上がり方からしてブタオもそれを望んでいるはず。

　そんなことを考えているといつの間にか飲み終わったようで、早々に家を出て練習場所へと移動することになった。

　いつものように数歩前にカヲルが歩き、俺がその後ろを付いていく――かと思いきや。

「そういえば。今日は聞きたいことがあるのだけど」

　珍しく俺の横まで下がってきて並んで話すカヲル。女子としては身長が高いせいか、ふと見れば幼馴染の美しい顔が俺のすぐ真横にあった。ちょっとドキマギしてしまうぢゃないか。

「ごほんっ。何を聞きたいのかね？」

「その話し方は何……この前、楠先輩と話していたと耳にしたのだけど……本当なの」

　キララちゃんか。招待状を渡しに来たときのことをクラスで噂にでもなっていたのかもしれない。

「少し、話をしただけだ」

「……話？　彼女は貴族様で、学校でも大派閥を率いる立場。どういう接点があったというの」

　カヲルでも知っているほどの有名人。しかも派手で可愛い女の子がスクールカースト最下位の俺に会いにくるなんて普通はありえない。知らぬ存ぜぬで通すのも無理があるな。

　クランパーティーに呼ばれた、という説明はすべきではないだろう。ダンジョンでキララちゃんの知り合いとちょっとした縁があり、その後の報告のために来たと言っておこう。

「それでは別に知人というわけではないのね」

「あぁ。何でそんな気になるんだ？」

　しばし考え込むカヲル。話そうか迷っているのだろうか。

「……今、私達のクラスが窮地に立たされているのは知っているだろう。もし楠先輩と親しいのなら、お力になってもらえないかと考えていた」

「それは恐らく無理だろうな、一回話しただけだし。もう俺の事なんて忘れてるだろうよ」

　Ｅクラスの立場は非常によろしくないのは分かっている。だが、これでもまだ序の口。ゲームのストーリー通りに進むなら今後はより深刻な状況に追い込まれていくことになる。挑発やイジメとも取れる行為、また暴力を交えた嫌がらせを仕掛けてきたり、クラスメイト達が何人も挫折して学校から去っていくかもしれない。そうなれば目の前にいる幼馴染も涙を流し、葛藤する日々が続いていくことになるだろう。

　そんな胸糞イベントなんて正直リアルで経験したくはないし見たくもない。ならば全て阻止してしまうか……なんて考えが頭をよぎるが、そんなイベントでも主人公の心身を強くし成長させるもの。その機会を俺が勝手に奪ってしまっていいのだろうか。

　主人公には主人公でしか解決できないイベントがあるし、俺がＥクラスや主人公達を絶えず監視して守っていくなんてできるわけがない。今後を見据えれば彼ら自身で強くなってもらわなくては困るのだ。ある程度は屈辱を受けてもそれをバネにし、成長を促す契機にしてもらいたい。

　もちろんサツキやカヲルに危機が迫っているなら動くつもりだし、壊滅的な失敗や被害を引き起こすものには事前介入しようとは思っている。そのためにもカヲルに接近し、赤城君達の動向を掴んでおくべきか。

「……その代わりといっては何だが、俺が協力できることなら手伝うけども」

「じゃあ、今日の特訓は期待してるわ」

　そういうとカヲルは再び歩みを早め、いつもの定位置での通学となってしまった。まぁ今の俺はカヲルに信用されていないので仕方がないか。

　ここでゲーム知識をひけらかし信用を得ようとしても、カヲルはまともに取り合わないだろう。今は適切な距離感を保ちつつ時間をおいて少しずつ信頼を取り戻すことを優先しよう。いつか仲間として見てもらえることを夢見て。

　それに今はそこに頭を使っている場合ではないのだ。これから行く目的地に悩ましい問題が待っているのだから。

　事の発端は昨晩の密会のことだ――

　\*・・\*・・\*・・\*・・\*・・\*

　街灯りで星が全く見えない真夜中の公園。ポールライトの仄かな光に照らされたリサは唇に人差し指を当て、いらずらっぽく笑うと――

「一人だけなら知ってるよ～？」

　突然、とんでもないことを暴露し始めた。すでに俺以外のプレイヤーと接触してたとは。

「明日の練習会に来ると思うよ？　うちのクラスの月嶋君なんだけどね」

「月嶋……あの少しチャラい感じの」

　エリートの学校には似つかわしくない金髪ロン毛。制服を着崩してズボンのポケットに手を突っ込みながらダルそうに話すチャラ男こと、月嶋拓弥君を脳裏に思い浮かべる。なんと向こうからリサを元プレイヤーだと特定し、組まないかと誘ってきたらしい。

「なんかね～？　ゲームで登場するＥクラスの生徒全員を憶えていたらしいの。すごいよね～」

　それによると“正体不明”のクラスメイトは月嶋君自身の他に、リサしかいないとのことだ。正体不明とは「カスタムキャラ」のことを言っているのだろうか。

　ダンエクでは通常、「主人公」――つまり赤城君、ピンクちゃん――と、自分でカスタマイズしてキャラメイクする「カスタムキャラ」でスタートできる。

　主人公を選べばキャラ特性は固定だがメインストーリーを体験でき、カスタムキャラを選べば自分好みの見た目とキャラ特性を作れるというメリットはあるが、ストーリーはサブストーリーと攻略キャラの個別シナリオのみとなる。

　だがこのゲーム世界にくるきっかけとなったテスターモードは性質が異なる。「おまかせキャラ」と「カスタムキャラ」の二択のみ。

　「おまかせキャラ」を選べば俺――つまりブタオ――のようなダンエクに登場する既存のキャラのどれかに入り込むことになり、一方の「カスタムキャラ」を選べば、リサのように元の世界の自分自身がアバターとなってしまう。

　つまり、月嶋君がゲームに登場しない正体不明とやらを突き止めたところで「カスタムキャラ」ならともかく、「おまかせキャラ」を選んだ俺のようなプレイヤーは特定できないはずなのだ。

「もしかして月嶋君はおまかせキャラの仕様に気づいていないのか？」

「多分ね。彼には勘違いしたままでいてもらおうかしら～」

　その方が都合がいいと静かに笑いながら言う。

　月嶋君は最初、主人公である赤城君とピンクちゃん、そして正体不明のリサの３人をプレイヤーだと疑っていたらしい。だがどうも主人公は違うと分かり、この世界にいるプレイヤーは自分以外ではリサだけだと断定した模様。

　自分がアダムで、リサはイブ。彼はそう言って誘ってきたのだと言う。それはそれでどうなのだとも思わなくもない。

　　\*・・\*・・\*・・\*・・\*・・\*

　――といった感じで昨晩はリサと別れたわけだが、最後に話題となった月嶋君もこれから向かう練習会に参加予定という。

　彼とは一度も話した事はないのでどういった人物なのかは分からない。教室での記憶にある限りでは多少チャラチャラとしていはいるものの、別段悪人と思えるような言動は無かったはず。普通の陽気な男子高校生としか思っていなかった。

　しかし元プレイヤーであるならば世界に大きな影響を与える知識を有しているわけで、彼のこれからの行動次第では俺達も巻き込まれる可能性はある。なので、どういった考えの持ち主なのか近づいて見極めるためにも、リサが言ったように勘違いしたままでいてもらったほうが都合がいいのは確かだ。

（良い人であればいいんだが……）

　そんなことを憂いながら、トボトボとカヲルの後を付いて歩いていくのだった。

　学校の運動場と体育館の間には、やや狭いがマジックフィールドのフリースペースがある。今日はそこで練習をするとのこと。もう何人かのクラスメイトが到着し談笑していた。

　今日の練習会の指南役は赤城君、ピンクちゃん、立木君。そこにカヲルも混じり打ち合わせが始まった。あの四人はダンジョンダイブも上手くやっているようでＥクラスの中ではレベルが高く、大いに期待されている。このまま他クラスからの妨害にも屈せず頑張ってほしいものだ。

　よっこらせと適当な場所でカバンを降ろし欠伸をかきながら赤城君達を眺めていると、後ろから軽やかな女性の声がかけられた。

「やっほ～」

　振り返ればジャージ姿のリサが小さく手を振ってほほ笑んでいた。緩く留めた髪型が大人びていてとても似合っている。ゆっくりとした動きで荷物を置くと「よいしょ」と言いながら隣に座ってきた。

　こっちも一人だと心細いので話し相手になってくれるのなら助かるね。

「剣戟の授業みたいなことをやるのかな～？」

「カヲルから聞いた限りだと、細かく指導するようだぞ」

「それは面倒ね～あんまりやる気はないんだけど」

　今日は情報収集が主な目的だし、練習のほうは形だけちゃんとやっておけばいい。そういえば昨日はちゃんと眠れたのか、などと話していると他の参加メンバーもちらほらとやってくる。

　その中に、ひっそりと目立たないように歩く久我琴音の姿が見えた。ショートボブの髪の片側をやや跳ねさせ、むにゃむにゃと眠そうに歩いている。彼女はアメリカの情報収集部隊の出身で、この学校に潜入している工作員。実際にはレベルは２０を超えているものの、端末上ではレベル２なので彼女も半強制的に練習会に呼ばれた模様。練習なんてしたくないのか欠伸をしながら不機嫌そうな表情を隠していない。

　その後ろには大きめのジャージに手を突っ込みながら歩いている金髪ロン毛が見えた。リサがプレイヤーだと言っていた月嶋君だ。そのままこちらのほうへ歩いてくる。

「よう、リサも来たのか。こんな練習会じゃ何も学ぶことなんてないだろうに」

　リサの隣に「どっこいしょ」と腰を下ろす月嶋君。いつも教室でつるんでいるメンバーはいないようだ。今日は一人で参加なのだろうか。

「おはよ～。そちらこそよく参加する気になったね～」

「立木が参加しろとうるさくてさぁ。あ～だりぃ……」

　彼のレベルも端末上では３だったが実際はどれほどなのか。まぁプレイヤーならいくらでもレベルの上げようはあるので、参加に意味を見出せないというのも理解はできる。

「……ところで。最近ブタオとよく話してるようだけど、どういった関係なんだ？」

「ど、どうも～」

　こちらを怪訝な表情でジロジロと見てくる月嶋君。こういう無遠慮な感じが陽キャというものなのか。俺としても不和を起こしたくないので愛想笑いをしながら挨拶しておく。

　だが同じプレイヤーであるリサの近くにいれば何かあるのかと勘繰りたくもなるだろう。適当な理由でも言って警戒を緩めてもらったほうがいいだろうか。

「一緒にダンジョンダイブしているの。ダンジョン仲間といった感じかしら」

　どういうべきか考えていると、リサが気を利かせてそれっぽい理由を述べてくれる。一応、俺がプレイヤーだということは黙っていてもらうことになっている。

「マジでコイツと？　後々アレになるのに？　でもまぁダンエクでもそこそこのレベルには達してたから一応使い物にはなるのか……？」

　ゲームでのブタオを知っているなら距離を取るべき人物と思われても不思議ではない。カヲルルートでシナリオを進めると後に様々な不祥事を起こし、最後には退学となる悪役キャラなのだし。俺も最初は悲嘆に暮れたものだが今は温かい家族のおかげで満更でもないと思っている。

「話してみれば案外良い人なんだよ～。ね～ソウタ♪」

「え？　おっ、おう」

「なんでコイツは呼び捨てなんだよ。オレには「月嶋君」って言ってるのに」

　この感じからするとリサに気でもあるのだろうか。見た目が可愛いのは間違いないが、中身は名を馳せた凶悪なＰＫＫクランのリーダー。これはゲームでのリサの正体に気づいていない可能性があるな。

「そういや聞きたかったんだけどよぉ、赤城に剣の入れ知恵したのってリサなのか？」

「……それをここで話すの～？」

「構いやしないだろ。ブタオだって意味わかんねーさ。で、どうなんだ？」

　赤城君に剣の入れ知恵……刈谷イベントのとき、赤城君は対刈谷の切り札として[スタティックソード]を使った戦術を取ったのだが、その戦術を授けたのがリサなのではないかと考えているのだろう。

「逆に聞きたいのだけど～。あの戦術の対策を刈谷君に入れ知恵したのは月嶋君なのかな～？」

「おうよ。赤城の負けっぷりはそこそこ笑えただろ」

「……でも、彼が頑張ってくれることは私達のメリットにもなるのよ～？」

　くっくっくっと静かに笑う月嶋君。赤城君が負けてＥクラスの空気と立場が悪くなった元凶はコイツか。刈谷は何故か[スタティックソード]戦術を知っていて、対策も講じていた。そのせいで赤城君が負けたのだと言っても過言ではない。

　しかし何故だ。赤城君が成長し強くなれば多くの厄介イベントをクリアしてくれて心配事が減るというのに。逆に成長が頓挫してストーリーが上手く進めなくなれば様々なイベントの行く末も予測不可能となる。それで不利益を被るのは俺達だ。

「まぁイベントを頑張ってもらいたいのは山々だけど、赤城はハーレム形成しそうだったから。ちょいと邪魔したくなっちまってさ」

　ゲーム時代ではカヲルが大好きだったようで、カヲルと仲良く話しているのを見ていると邪魔をしたくなってしまったそうな。刈谷イベントの攻略に失敗すればヒロインの好感度が下がるということを利用したのだろう。

　しかし、まさかのカヲル推しかよ！　というか、目の前に幼馴染かつ婚約者である俺がいるというのに本当に遠慮がないな。でもこれはブタオにとっては手強いライバルになるのか？

　ゲームヒロインは総じてチョロインが多い。カヲルもその例に漏れず、意外と押しに弱い上に、プレイヤーなら必然的に手に入れられる“強さ”に憧れ、焦がれている面がある。それを知っている月嶋君なら、ぐいぐいとカヲルを押しまくり、強さを示せばあっさりと攻略に成功する可能性も無いわけではない。

　俺の場合はすでにセクハラしまくって盛大に嫌われているので、強さを見せても押しても無駄だろう……っておい、イライラ感が満ち溢れてきたぞ。落ち着けブタオマインド！

「じゃあ、今後は赤城君に協力的になってくれるのかな～？」

　平静を保とうと心の中で必死に格闘していると、リサが自然な流れで月嶋君の動向を窺う。彼の考えを知る上では重要な質問だ。

「気が向いたらな。それに……どんなイベントが来たところでオレならどうとでもなる」

　仮に主人公パーティーがイベントに失敗し壊滅的な被害をだしても、自分なら乗り越えられると豪語する月嶋君。

　理由としては、メインストーリーで起こるイベントはどれもレベル３０強あればクリアできる難度でしかないこと。そのレベルは月嶋君ならそれほど時間がかからず到達可能らしい。それほどまでにレベル上げが順調なのか。

「だから赤城がどうとかじゃねぇ。要はテメェに生き残る力があればいいだけの話だ」

「……それはこの街、いえ、この世界に住む人々を軽視する発言ね～」

　ダンエクには恐ろしいイベントが数多く待ち構えている。それらに俺達が乗り越えられたとしても、この世界に生きている人達は免れることはできず、甚大な被害がでるはずだ。

　もしかしてこの世界を、ダンエクの設定を受け継いだゲーム世界に過ぎないという見方をしているのだろうか。俺の家族やカヲルはゲームキャラではない。皆がちゃんと地に足を付けて悩み、笑い、涙し、生きている。

「そういう世界に来たんだよ。オレ達は選ばれし者だ。その気になれば世界を作り替える力だって得られる。今後も好き勝手するつもりだ」

「……選ばれし者ね～。本当にそうなのかしら」

「こんな面白れぇところにＡＫＫの“閃光”や、ラウンズの“鬼”、あの“災悪”ですら辿り着けなかったんだ。天がオレ達を選んだ以外に何と言えばいい？」

　俺はここにいるけどな。まぁ天に選ばれたかどうかはともかく、中々に夢見がちな少年のようだ。

　この世界に対する考えは少し思うところはあれど、月嶋君が別段悪人だとは思わない。自分から悪意を振りまいたり明確に破滅を呼び込もうなんて考えていないだろうし、特別な力を持っているなら使って何が悪いという考えも嫌いではない。

　俺だって成海家に対する温かな愛情や、カヲルに恋い焦がれるような純情が無ければ同じように考えていたかもしれない。だが、今の俺にはそれらの尊い情が確かに宿っている。月嶋君が考えを改めない限り、相容れない関係になりそうだ。

「でも、そこまでレベル上げに自信があるのは～何か秘密があるのかな～？」

「オレと組むなら教えてやってもいいぜ。魔法契約書は必須だがな」

　悪そうに口元を歪めてニッと笑う月嶋君。やはり隠し玉はあるようだがそれが何なのか、リサには探ってもらいたいところではある。

「おっと悪ぃな、ブタオ。さっきの話は忘れてくれよな」

「……あぁ」

　パンパンと乱暴に肩を叩きながら言ってくる月嶋君。というか仮に俺がブタオだったとしても先ほどの内容を忘れろというのは難しいと思うが如何なものか。

　月嶋君との関係に思い悩んでいると、立木君がこちらに歩いてきて用紙を見ながら説明をし始める。

「それでは練習会を始めよう。まずはこちらで指定したペアで組んで欲しい」

　剣戟の授業と同じように、まずはペアを組んでゴム製の剣で練習するそうだ。誰と組むかはすでに決めてある模様。それによると俺の相手は……よりにもよって彼女とか。

　目の前には眠そうに欠伸を繰り返し、微塵もやる気を感じさせない久我さんがいる。

　彼女は《簡易鑑定》の上位互換である《鑑定》を持っているため、俺の《フェイク》を突破し真のステータスを見破ることが可能だ。ここは面倒事を避けるためにも大人しくやられ役に徹するべきだろう。

「ど、どうも～よろしく～……」

「……」

　向き合って剣を構えるも、久我さんは剣を持った手をだらりと垂らしたまま欠伸を繰り返すだけ。こちらを見ようともしない。

（どうすりゃいいんだよ！）

　――　早瀬カヲル視点　――

「ナオトく～ん、こんな感じかな？　もう少しだけ教えて欲しいのだけど」

「流石、ユウマ君だよね～。剣の扱いならもう上位クラスと張り合えるんじゃないかな」

　レベル３以下のクラスメイトを対象とした初めての練習会。参加者の女子達は猫なで声でナオトとユウマに甘えならべったりとまとわり付いている。その一方で、私とサクラコには冷めた視線を送ってくる。

　てっきり私達と固定パーティーを組みたいがために近づいているのかと思っていたけど、それだけではなく、あの二人と組んだおかげで私とサクラコのレベルが６になったと思われていることに気づく。

　確かにナオトとユウマは優秀で素質も才能もあるし、ダンジョンダイブにおける貢献は計り知れない。それでも私とサクラコのやってきた努力に何の敬意も払わないというのは遣る瀬無い気持ちになってしまうではないか。

　とはいえ、そんなことを言っても仕方がないので彼女らの対応は任せ、私は他の参加者の指導へいくとしよう。

　まず目についたのは新田さんと月嶋君のペア。

　新田さんの太刀筋は少ない時間ではあるが、剣戟の授業で見たことがある。そのときは変わった型だなと思ったものの、特に悪くはなかったはず。にもかかわらず未だにレベル３ということは、ダンジョンダイブにあまり時間をかけられていないのだろう。下手に指導するよりも、スケジュール調整や狩場情報の提供などを行っていくべきか。

　そして最近、色々とアプローチしてくるようになった月嶋君。前もデートにいこうと頻りに誘ってきたことがあった。男っぽいと陰口を言われるこんな私に好意を寄せてくれるのは悪い気がしないが、練習会に呼ばれるレベルしかないのはいただけない。しっかりとレベルを上げて冒険者らしい強さというものを見せてから誘ってほしいものだ。

　そんな二人は先ほどから話し込んでなかなか練習を始めない。楽しそうに……というよりは真剣な面持ちで何かを話している。月嶋君に至ってはすごい剣幕で身振り手振り新田さんに何かを説いているではないか。ダンジョンについての単語が聞こえるので、単に世間話をしているわけではなさそうだけど、せっかくの練習会なので長くかかるようなら注意しておこう。

　そんな風に心にメモして、次の参加者を見る。

　視界の片隅には颯太と久我さんがやる気の無さそうに向き合っていた。

　久我さんはいつもの眠そうな顔をしたまま棒立ちしているだけだし、颯太は剣を一応構えてはいるものの何か落ち着きがない。この二人はナオトとの“Ｅクラス強化計画”の議題に何度も上がった要注意人物達だ。

　久我さんはクラスの中でも最下位のレベル２で、ダンジョンダイブが上手くいっていないのは明らか。基本的に一人でいることが多く、パーティーを組めていないのかもしれない。

　颯太はレベル３だとしてもパワーレベリングで上げてもらった疑惑があり、技術的な問題を抱えている可能性が高い。入学前の颯太を見ていればそのような考えを抱いてもしかたあるまい。今日は二人の剣のレベルをしっか見極め、適切な指導を行っていきたい。

　そう思ってしばらく見ていたものの、お互いが向き合っているだけでちっとも開始せず、微塵もやる気を感じられない。たまらず声をかけてみる。

「せっかくの練習会なのだし、遠慮せず打ち込んでほしいのだけど」

「……」

「……」

　颯太も久我さんも黙っている。もう一言くらい何か言おうと思っていると。

「どうしてアタシが参加しないといけないの」

　などと不満を言い始めた。それは久我さんがレベル２だから。近くにクラス対抗戦もある。私達はあなたが上手くレベルを上げられるよう手伝いたいの。というと、とんでもないことを言い出した。

「なら、次までに貴方と同じくらいまでレベルを上げておく。今日は帰る」

「帰るにしても私を納得させるまでは駄目」

　私達が上位クラスと戦ってくためには落ちこぼれを出すわけにはいかない。それにこの練習会は久我さんのためでもあるのだと諭すように言うと、事もあろうにレベル６まで上げておくからもう構うなと暴論で言い返してきた。ここまで上げるのにどれほど大変だったと……

　でも私だって言われたままでは終われない。そんなにすぐに上げられるならどうして未だにレベル２なのかと透かさず切り返す。

「じゃあ、目の前のコイツを叩きのめして帰る」

「ぶひっ」

　ますます不機嫌になる久我さんに、ぴくりと震える颯太。

　武器はゴム製の剣だし、プロテクターも付けてもらっている。むしろ遠慮なく思いっきりやってほしい。そうと考えていると久我さんは重心をわずかに下げ、持っていた練習用の剣をくるりと回して逆手に持ち、ボクシングのようなリズムを取り始めた。

（なんだろう。剣術とは程遠いスタイルにみえるけど。どちらかというと格闘技のような――）

　短剣やナイフならともかく、練習用の剣は１ｍ近い長さがある。そんなものを逆手で持ったら武器に力が入らず攻撃力が大幅に低下してしまう。

　颯太との距離は４ｍほど。どうするのか見ていると、その距離をたった一歩で縮め、剣を持った手で颯太の側頭部に巻き込むようなパンチを繰り出した。ボクシングでいえばフックといえばいいか。

（速い！　斬るのではなく殴りにいった！）

　予想以上の初速で目の前まで近づかれた上に、視覚外からの高速フック。颯太に対応できるわけもなく、前をみたまま唖然として動けずにいる。こめかみに完全に決まる――と思いきや、久我さんは寸止めしてくれたようだ。

「さ、流石だね、久我さん。全然反応できなかったよ」

「……」

　冷や汗を流しながら驚く颯太。それはそうだろう、今の攻撃はレベル６の私でも避けられなかったかもしれない。それくらい速く鋭い攻撃だった。半円を描くように遠心力を利用して体重も乗せていたので、相当なパワーも込められていたはず。

　颯太はヘッドギアを付けていたとはいえ、あれほどのフックが決まったならそれなりのダメージはあったのではないだろうか。

　仮にあれを後ろに躱したとしても逆手に持っていた剣で斬られてしまう。しゃがんで躱すとしても久我さんは次の手として左手を引き絞り、ボディーブローを狙いに移行していた。懐に入られた時点で詰んでいたのだ。

　格闘経験がない素人では絶対に真似のできない一連の動き。寸止めとはいえ、たった一発のパンチで戦闘技術の高さを示してしまった。

　それなのに――

「ねぇ、今の。もしかして見えてた？」

「……いや、まったく見えてなかったよ！　俺ごときじゃ相手にならないからパートナーを変えてもらったほうがいいと思うんだけど。どうだねカヲル君」

　久我さんは何故か今の高速フックが見切られていたと言い、慌てる颯太の顔を覗き込もうとする。そんなわけないのに。それとカヲル“君”って。せめて“ちゃん”と言ってほしいのだけど。

「そう。なら仕切りなおしてもう一度」

「ちょ、ちょっと待って。もう少し穏やかにいこうよ。あ、お腹痛くなってきたから向こうで休んでいいかな」

　後方を指差しながら胃が痛いと仮病を使おうとする颯太に「今度は寸止めしない」と小声で言う久我さん。今までのやる気の無さが嘘のように再びボクシングのような構えでリズムを取る。

　技術不足でも颯太のほうがレベル１つ高いから大丈夫かと思っていたけど、先ほどの攻撃を見た限り彼女の相手するのは荷が重いのかもしれない。ペアの相手を変えたほうがいいのか、他の参加者を見渡すと――校舎側から白銀の金属光沢を放つ全身鎧が複数の黒服を従えて歩いているのが見えた。

（あの人は……変わった噂をよく聞くけど、本当にいつもフルプレートメイルを着ているのね）

　この冒険者高校１年Ａクラスの次席であり、近接戦闘能力で言えば首席をも凌ぐと言われるほどの傑物、天摩晶。何故かどんなときも鎧を着ていて、誰も彼女の素顔を見た者はいないという。

　後ろに続く黒いスーツを着た男達の胸には、〇の中に“天”と書かれたマークが見える。全員が天摩さんの専属執事で、学内にもかかわらず常に彼女に付き添い世話をしている。彼らは単なる執事ではなく、ダンジョン内まで付いていき戦闘のサポートまで行う武闘派の執事達。一人ひとりが攻略クラン並みの戦闘力を持つとの噂だ。

　そんな異色尽くめの一行が、こちらに急ぎ足で向かってきている。重そうなフルプレートメイルからは何らかの魔法が働いているのか金属の音が全く聞こえない。

　息を殺してそのまま通り過ぎるのを待っていると、天摩さんは目の前で急に足を止め、颯太の顔をまじまじと見始めた。

『ちょっと。そこのキミ。びっくりするくらい痩せてるけど、どうしたの？』

　顔を全て覆っているヘルムのせいでくぐもった声かと思いきや、とても聞きやすい電話のような声だった。発声の魔道具を使って話しているようだ。

「はへっ？　俺っすか？」

『そう、成海颯太。キミのことだよ』

　天摩さんは颯太をみてフルネームで名前を呼び「痩せた」という。何故、颯太のことを知っているのだろうか。それは颯太も同じく思ったようで、呆けた顔をしながら聞き返している。

「あのぉ、どうして俺の名を？」

『キミくらいだったからねー、この学校ですんごい太ってるの。ウチも太ってるからシンパシーを感じてちゃって。で、どうやってこんな短期間で痩せることができたの？』

　しどろもどろになる颯太。天摩家は商家の出身とはいえ、ダンジョン関連技術の貢献が認められ、日本政府より男爵位を叙爵している立派な貴族様。そんな人物に話しかけられれば緊張してしまうのも当然だろう。

　とはいえ、私も聞きたかったのだ。あれほどダイエットに消極的……それどころか絶えず暴飲暴食を繰り返し、怠惰で不健康な生活を送っていたというのに。今では極度の肥満からは脱し、筋肉すらついてきているようにみえる。今日も文句を言わず練習会に参加しているし、何か心変わりする出来事でもあったのだろうか。

『ここでは話しにくいの？　それなら向こうに行こうよ』

　天摩さんが黒塗りの大きな車を指差す。校門付近で度々見る異様に長いリムジンは、どうやら天摩さんの家の車らしい。

　けれど今は練習会の最中で、颯太を連れていかれるのはよろしくない。一体どうすれば……声をかけて説明したほうがいいのだろうか。

「……ちょっとまって。コイツとは私が先約なのだけど。貴方は邪魔」

『んー？　キミは誰かな？』

　久我さんが一歩前に出て、練習用の剣で天摩さんをぞんざいに追い払おうとする。そのあまりの仕草に後ろのいる男達の表情が険しくなり、一気に場が緊張する。一方の天摩さんは腕の端末を久我さんの方へ向けて画面を操作し始めた。

『データベースによるとぉ……キミは１年Ｅクラス、久我琴音。レベル２……たったの２？　それでウチに喧嘩を売ってきたの？』

「だから何」

　久我さんのレベルが２と分かり、大仰な身振りで驚きを示すポーズを取る。ヘルムをしているので本当に驚いているのかは分からないけれど、これが天摩さんなりのコミュニケーション法なのだろう。

　一方で彼女のレベルはデータベースに載っていないので不明だが、Ａクラスの次席というからには相当なレベルであることは間違いない。久我さんに多少の格闘経験があろうと大きなレベル差の前では意味をなさないだろう。

　それだけではない。相手は貴族様なので下手に口答えすればどうでてくるのか予測ができない。

　この冒険者学校は貴族、庶民にかかわらず入学できる学校なので、身分による差別や待遇の差をなくす校則も存在する。だけどそんなものは建前に過ぎないと誰もが知っている。現に天摩さんに対する物言いに対し、後ろにいる男達も首や手の関節を鳴らしながら怒気を放っているではないか。

　久我さんは何やら興奮しているし、颯太はあたふたとして頼りがない。やはりここは私が勇気を出して守るしかない。

「も、申し訳ない。只今、Ｅクラスで練習会をやっていて、その、こちらの久我さんも悪気はないのだ。どうか穏便に……」

「どけ」「きゃっ」

　天摩さんの男の一人に肩を押され、跳ねのけられてしまった。ここはマジックフィールド内。高レベルの肉体強化の前にはレベル６の私など、手の平で押されただけで簡単に弾き飛ばされてしまう。

　険悪な雰囲気にユウマやナオトも気づき、何事かと近寄ってきた。それでも久我さんは眉一つ動かさず、全身鎧の天摩さんを睨み続けている。

「お嬢、どうしやす？」

『んー……今日はその度胸に免じてこの場は許してあげようかな。本来なら叩き潰すんだけどっ。それじゃまったねー成海クン』

　そう言い残すとあっという間に去っていく天摩さん。怒気を放っていた男達もこちらに興味を失ったかのか、すぐにこの場から離れていった。私といえば危機が通り過ぎたことの脱力感から膝を突きそうになってしまう。

「おいおい、久我よ。こんなところでドンパチやられちゃ俺等も被害を受けるんだが」

「ふふっ。でもどうなるのか見てみたかったかも～」

　先ほどの諍いを見ていた月嶋君と新田さんが笑いながら懸念を伝えてくる。ドンパチも何も、レベル差がありすぎて戦いにすらならないというのにお気楽なものだ。

「ふんっ。とんだ邪魔が入った。それじゃ……あれ？」

　久我さんが練習の続きをしようと辺りを見渡すけど、肝心の颯太の姿は見当たらず。

　さては逃げたな。

『それじゃ早瀬さんには責任を持ってソウタのレベル上げを手伝っておくって伝えておけばいいかなっ』

「あぁ。相談に乗ってもらえて助かったよ。レベル上げの方も頑張ってくれ」

『ソウタもねっ。それじゃまたっ』

　練習会に参加したはいいが、俺を試そうとしてくる久我さんと後ろから睨むカヲルとの間で板挟みとなり、居た堪れず逃亡。その後の処理としてサツキと端末通信で泣きついて……もとい相談していたのだ。

　久我さんのレベルは２０を超えており、様々な諜報スキルも所持している。そんな彼女の高速パンチに思わず目で追って反応するという失態をおかしてしまった。しばらく距離を置いて練習会にも不参加でいきたいのだが、それを俺が言ったところでカヲルに首根っこを掴まれ、連れていかれることだろう。

　信用も発言力もないことは自覚している。そこでクラスに人気があり支持も得られているサツキとリサに協力を願い出たというわけだ。二人が言ってくれるならカヲルも一考せざるを得まい。

　しかし、頼ってばかりでは借りが大きくなるばかり。特にリサからは何を要求されるか分かったものではないので、可及的速やかに返していきたいところだ。

　その一方で、偶然通りかかり俺に話しかけてきた天摩さんにはびっくりした。現在は呪いのせいで常にフルプレートメイルを着ている彼女も、立派なダンエクヒロインの一人だ。シナリオ上では序盤にほとんど登場しないキャラなので警戒していなかったが、ブタオを知っていたとは想定外だった。天摩さんの背後で睨みを利かせていた手下共も相手にすると何かと面倒そうだし、彼女とも距離を開けておきたいところ。

　まったく、冒険者学校は問題ばかり起きる――

　そんなことを考えながら走っているここは、ダンジョンの１５階。妹を連れて狩りに来ている。

　１０階から１４階までの通路状ＭＡＰとは打って変わって、遮蔽物は無く非常に視界の開けたフィールドＭＡＰとなっている。とはいえ開放感があるとか、気分が良いとかいう場所では全くない。

　周囲には緩やかな丘と、所々に朽ちた墓地があり、その周辺にはアンデッドモンスターがゆっくりと蠢いているのが遠目から見て取れる。また道中の脇にある木には吊るされて処刑された罪人がいくつもぶら下がっており、赤黒く淀んだ夕焼けの空と相まって酷く不気味な雰囲気を作り出している。

「ちょっとっ。ここは一人で来たくないかもなんだけどっ」

「レベル的には余裕なんだけどな」

　妹が周囲を見渡し、重苦しい空気に眉をひそめる。確かにそこかしこにアンデッドが蔓延っていて心休まる光景とは程遠い。しかしながらこの階にはゲートと、美味しい狩場もある。今後も頻繁に来ることになるだろうし慣れていくしかない。

「おにぃ、レイスが近づいてきたよっ」

「あれはレイスの上位種、ゴーストだな。レイスより多少耐久力は高いけど今の俺達なら問題ない」

　白く半透明な人の形をしたナニカ。触れられると生命力を吸い取る《ドレインタッチ》という攻撃を仕掛けてくる。霊体なので物理攻撃は全く効かないが動き自体はそれほど速くなく、魔法攻撃の手段を持っているならさして怖い相手ではない。

「魔法で応戦するぞ」

「は～い」

　妹は《ファイアーアロー》を覚えて間もないので、魔法の基礎的なことを指導している。

　遠距離にいる相手に普通に《ファイアーアロー》を撃ち込んだとしてもそれほどの弾速があるわけではないので、あっさりと避けられてしまう。なので走ったりして自身の慣性を乗せたり、投げるようにスキルを発動して弾速を速める工夫が必要だ。

　だが魔法は速く撃ち込んだからといって威力が上がるわけではない。たとえ質量を伴う魔法だったとしても不思議なことに速度と衝突エネルギーに相関性がないのだ。物理法則とは分けて考えなくてはならない。

　その一方で、魔力を通常より多く込めれば威力も上がるという特性もある。魔力を込めれば込めるほど威力の伸びも小さくなるので、今のＩＮＴとＭＰ量ならどのくらい魔力を込めたら効率がいいのか、実際にやってみて感覚を掴むしかない。

　妹は石を投げるように、オート発動で《ファイアーアロー》を撃ち込む。速度は２００ｋｍを少し超える程度だろうか。キュルルという音をたてながらピンポン玉サイズの火の玉がゴーストの足元に撃ち込まれる。

「当たった！　でもまだ死んでない。あ、もう死んでるんだっけ？」

「よろめいているぞ。トドメを刺すんだ」

　７階のボス、ヴォルゲムートが落とした片手剣、[ソードオブヴォルゲムート]を右手に持ってゴーストに斬りかかる。ＨＰ吸収効果が付いていて完全物理耐性のある相手にもダメージを与えられる特殊な剣だ。ただ属性剣ほどの威力はないので、そこは斬撃回数で補うしかない。

　４回ほど斬ったあたりでゴーストは甲高い声と共に空気に溶け込むように消え、数ｃｍほどの魔石が地面にぽとりと転がった。

「これ大きいね。色も何だか綺麗。いくらくらい？」

「ギルドの買取だと１つ６０００円だったかな」

「これ一つで６０００円！？　今日の晩御飯は～ブランド牛の～しゃぶしゃぶ！」

　先ほどまで怖がっていたというのに魔石の値段を聞いた途端やる気に満ち溢れる現金な妹。１５階のモンスターの魔石ともなれば買取価格は跳ね上がる。ここらで狩りができるなら、それなりの大人数のパーティーだとしても黒字を叩き出せるだろう。

「それで。今日はどんなところで狩りをするの？」

「亡者の宴と言われる処刑場だ」

「しょ……そんなところに行くんだ……」

　昔、とある男爵が無実の罪により子飼いの騎士達と共に処刑され、死しても冷めやらぬ怨恨によりアンデッドと化した、とかそんな逸話があったところだ。

　その処刑場はＤＬＣで新しく追加されたエリアにあるので、こちらの世界では一般的に認知されていない可能性が高い。つまりは独占できる狩場かもしれないのだ。それ以外にも美味しい理由は他にいくつかある。

「モンスターがポップする場所が限られてるし、ゆっくりと土から這い出てくるから先手を取りやすい狩場なんだよ。通称“モグラ叩き”と言われてる」

「モグラ叩き？　そんなにポコポコ出てくるんだ」

　這い出てくるモンスターは大きな盾と片手剣を持つスケルトンナイトと、両手剣を持つコープスウォーリア。どちらもモンスターレベル１６。この１５階にポップする平均的なモンスターよりレベルが１つ高いが、レベル１９の俺達なら難なく倒せるはず。

　そしてそいつらが落とす特殊なアイテムを１２個揃えて中央に置くと“ブラッディ・バロン”という特殊モンスターを召喚できる面白狩場なのである。

「ブラッディ・バロンって……それが処刑された男爵様なんだよね」

「コイツはオババの店に持っていけば２０リルで買い取ってくれるアイテムを落とすんだ。あとは、同時にポップする騎士がミスリル合金製武具を落とす。ボロボロだけどな」

「ボロボロ？　そんなの集めてどうするの」

　ドロップするものは刃こぼれしていたり凹んで曲がっていたりと、そのまま使うことはできない代物ばかり。しかし、使われている材質はミスリルが多く含まれており、鋳潰して素材にすれば上質のミスリル合金となる。

　これから向かう処刑場でダンジョン通貨と素材を沢山集めて装備を揃え、２０階以降の攻略に備えたい、というのが今回のダイブの主目的だ。

　近寄ってくるゴーストを魔法でなぎ倒し、緩やかな丘をいくつか越えて移動していると、夕焼けだった空が急に陰りだす。黒くどんよりした雲が大きな渦を巻いている。ＤＬＣエリアに入ったのだろう。

　ここら辺りの植物は全て枯れ果て、か細い悲鳴のような音のする風が吹いており、より沈鬱とした空気に包まれている。遠くに目を向ければ一辺が５０ｍほどの柵で囲われた牧場のような場所が見える。あれが目的地、亡者の宴と言われる処刑場だ。

　少し近づいて場内の様子を窺う。中には障害物や建物は無く、なんとなしに地面が盛り上がっている箇所をいくつか確認できる。

「やはり誰もいないな。俺達だけで独占できそうだ」

「なんか……亡者の宴という割には数が少ないね」

　中には２体のアンデッドがゆっくりと徘徊しているのが見て取れる。妹はもっとわんさかいるのだと思っていたようだが、それは半分当たりで半分ハズレだ。

　この処刑場のモンスターは常時２体出るようにポップし続ける特徴がある。倒してもすぐにどこかの土山から出てくるわけだが、その際はゆっくりと這い出てくるので今歩いている２体を倒しさえすればその後は無防備状態を叩き潰す簡単な作業となる。

　ゲームでは土から出てくるポイントが１２ヶ所と決まっており、そのポイント全てにプレイヤーが陣取り、出てきた瞬間に目の前にいるプレイヤーが倒すという単純作業のような狩場となっていた。しかし今回は二人なので、這い出てきたらその場所まで急いで走っていかなくてはならない。まぁそこは体力を考慮して休憩を挟みながらやっていけばいいだろう。

「手前の盾を持った骨がスケルトンナイト、奥にいる若干肉が付いているのがコープスウォーリアだ」

「スケルトンナイトは確か【ナイト】のスキルを使ってくるんだっけ」

「《シールドバッシュ》な。スキル発動中に喰らうと短時間動けなくなるからそこだけ注意しておけばいい」

「うんっ」

　その場に荷物を置き、持って来た特殊な武器を背に抱え、戦闘の準備をする。今日は様子見を兼ねたお試しなので気楽にやろうと思う。

「俺はコープスウォーリアに仕掛ける、スケルトンは任せるぞ」

「りょうかーい」

　同時にモンスターに向かって駆け出す。俺よりも妹の方が初速が速いようで一足先にスケルトンナイトと交戦状態に入る。向こうも初撃を盾で対応してきたが、華乃はすでに死角に回り込み、斬撃のモーションに入っている。レベル差もあることだし問題なく倒せるだろう。

　俺の相手はコープスウォーリアだ。片手剣よりも幅広で長いロングソードを引きずるように持って歩いている。重量もかなりある武器だが、モンスターレベル１６ともなればあの程度の重量でも片手で振り回してくると想定して戦わねばならない。

　３０ｍほどの距離まで近づくと、低く唸りながら向こうからも突進してくる。

　一気に間合いが縮まる――と思いきや、５ｍ手前くらいで下から上へ斬り上げるように剣を振るってきた。その際に土砂も一緒に撒き上げてくる。飛んでくる射線は見えていたので外側へ回り込むように避け、空いていた左手を使いサイドスローで《ファイアーアロー》を投げ込む。

　少し無理な体勢からの魔法投擲であったものの、常人が投げる速度を遥かに超えてコープスウォーリアの横っ腹に着弾する。多少よろめかせる程度のダメージしか与えられなかったがそれで十分。今度はこちらのターンだ。

　体勢が整うまでの僅かな時間で接近しウェポンスキルを発動。コープスウォーリアは慌てて武器を盾にしようとするがもう遅い。

「真っ二つだぜェ！　《スラッシュ》」

　【ファイター】が最初に覚えるウェポンスキル《スラッシュ》。ゲームの刈谷イベントで刈谷が使ってくるスキルだが、あれは大剣の《スラッシュ》だったので威力やリーチがある代わりに溜めも必要という制約がある。俺が右手に持っているのは軽くて細い剣。発動までの時間は段違いに速いのだ。

　武器で庇いきれていない左わき腹から水平に斬撃が決まると、コープスウォーリアはへそを境に上半身と下半身が綺麗に分かれ、どちゃりと地面へ倒れて魔石となる。

　後ろを見ればすでにスケルトンナイトも魔石となっていたので妹も瞬殺できていたようだ。

「よし、３０秒くらいで次が出てくるから、そこを叩くぞ」

「モグラ叩きっ！　この大きな鈍器で思いっきり叩けばいいんだよねっ」

　妹が縦長のリュックから１ｍほどのメイスを取り出す。柄の先に棘の付いた重い頭部を有するスパイクメイスだ。２０ｋｇ超と一般人では扱えない重さだが、妹は多少ヨタヨタしながらも片手で器用に振り回している。鋼製でもあれほど太ければ多少乱暴に扱っても十分に耐えられるはずだ。

　処刑場は土から這い出ようとする無防備のモンスターを一方的に攻撃できる美味しい狩場。逆に言えば出てしまったら普通に戦闘となってしまうので、それまでに倒しきる必要がある。鎧や盾を装備したモンスターを短時間で倒すには、刀剣よりもこういった超重量の鈍器で一気に叩き潰すのが効率良いのだ。

　俺も持って来たスパイクメイスを取り出して片手で振ってみる。重さ自体は苦にならなくても、ある程度足で踏ん張らないと体を持っていかれてしまう。これも慣れだと思って練習してみるしかない。

　そんなことを考えていると、右前方から骨の手がニョキっと生えてきた。あの手はスケルトンナイトだろう。

「でたよーっ、そっち！」

「こうやるんだ。見とけよ」

　骨の手が土砂を掻いて、のっそりと土から這い出ようとする。やはり完全に出てくるまで１０秒ほどかかるようだ。その隙だらけのスケルトンナイト目掛けて振り上げたスパイクメイスを思いっきり振り落とす。

「あぁ～っどっこいしょおおぉおお！！」

　ズシャンという音と共に砂ぼこりが盛大に舞い上がる。振り落とした後に残るのはバラバラになり飛び散った骨。それもすぐに溶けるように消えて魔石となった。地面が柔らいせいか、もしくは肉体強度が上がったせいなのか、思ったよりも手にくる衝撃が少なかった。もう少し強く叩けたけど今の攻撃で倒せるなら十分だろう。

　魔石の他には低確率でブラッディ・バロンを呼び出すためのクエストアイテム、[怨毒の臓腑]を落とすが、そう都合よく落ちるものではないか。

「すごぉーい！　あ、向こうにも出たからいってくるっ」

「このまましばらくやってみるか」

　そうして寂れた処刑場で、ドッカンドッカンと地響きが鳴り続けることとなった。

　振りかぶったスパイクメイスでコープスウォーリアを叩き潰す。舞い上がった砂埃が落ち着き視界が晴れると、妹が慎重にドロップアイテムを摘まみ上げてゴミ袋へと入れる。

「これで１２個目！　なんちゃらパトロンを呼び出せるのかなっ」

「ブラッディ・バロンな。今日はお試しのつもりだったんだが……」

　ゴミ袋の中には何かの臓器のような肉塊が１２個入っている。スケルトンナイトとコープスウォーリアをドッカンドッカンと数百匹叩き潰し、ようやく召喚の儀式に必要な数を手に入れることができたのだ。ドロップ確率的にはまぁ良い方だろうか。

　そしてこの肉塊。ゲームと違ってリアルに実体化しているので予想以上にグロい。時折ぴくりと動くので気持ち悪さが天井知らずだ。華乃も道端で見知らぬ犬のフンを拾うが如く袋に入れていたし。

「やるにしても作戦会議を一度しておきたい……が」

「あっ、またでてきた」

　指差した方向を見れば土山から干からびた手がニョキっと生えていた。処刑場では倒してもすぐに次のモンスターがポップしてしまうため、おちおち話もしていられない。一度外へ出たほうがいいだろう。

　外枠を囲んでいる柵を飛び越えて適度に平らな場所を探し、安全確認をしてから茣蓙を敷く。持って来た水筒から茶を注いで、ほっと一息。

　辺りは相変わらず薄暗く荒涼としている。そんな景色でもしばらくいれば慣れるものなのだと静かに驚く。

「集めたアイテムを纏めてどこかに置けばいいんだよね」

「中央にある模様の上にだな」

　目の前で華乃がお気に入りの棒菓子を齧りながらご機嫌に聞いてくる。

　処刑場中央の地面には子供が書いた渦巻太陽のようなものがうっすらと描かれており、その上に集めた１２個の肉塊を置くだけでブラッディ・バロンの召喚儀式が発動する。

　ゲームではその様子がムービーシーンとして流れていた。クエストアイテムである１２個の臓腑が互いに脈動しながら繋がって徐々に膨れ上がり、一体のフレッシュゾンビが生まれ堕ちるという内容だ。その間３０秒。こちらの世界の召喚儀式も同じ時間をかけて同じように再現されるはず。

　では、ここで問題。俺達はそれをゲームと同じように指をくわえて眺めていなくてはならないのか。

「儀式が始まるとブラッディ・バロンは肉体を構築するため、しばらく動けない。そこで――」

「私達は攻撃できるの？」

「そうだ」

　ゲームではそのムービーシーンを強制的に見されられ、プレイヤーは動けないという制約があった。しかし、こちらの世界ではそんなものはない。俺達が動けるのなら召喚儀式の時間は攻撃したい放題、つまりはボーナスタイムとなるわけだ。

「ふ～ん……でも３０秒かぁ。どれくらいの強さなの」

「モンスターレベルは２０。フロアボス扱いだから、ＨＰとＶＩＴはかなり高いな。一般モンスターは出なくなるが、代わりに１２体の護衛騎士が同時にポップする」

「えぇっ！？　それって一緒に処刑された騎士のこと？　そんなにいっぱい相手できるかなぁ」

　護衛騎士はブラッディ・ナイツというモンスターレベル１６のアンデッド。大型の武器から飛び道具まで様々な武具を持っており、個々の攻略法は様々。

　そんなモンスターを１２体同時に相手にするのはレベル１９になったとはいえ難しいものがある――普通ならば。

「護衛騎士は俺が止める。召喚開始と同時に《シャドウステップ》を使うつもりだ」

「脚がふわふわして速く動けるようになるスキルだっけ。あれ私も覚えたい！」

「まず基本職のジョブレベルを全て上げ切ってからだな」

　《シャドウステップ》は移動速度に加えて回避も上がるため、トッププレイヤーでさえ重宝する神スキル。上級ジョブ【シャドウウォーカー】で覚えるのだが、このジョブに就くためには前提条件が多く、まだ時間がかかることだろう。

「とにかく、３０秒間ブラッディ・バロンを叩きまくってくれ。この前に教えたマニュアル発動も試してみるといいぞ」

「うーん。上手くできるかなぁ」

　うんうん唸りながらスキルモーションの練習をする。俺も初めはマニュアル発動に四苦八苦していたが、練習と研究を重ねたおかげで今では通常攻撃から流れるようにスキルを発動できるようになった。華乃も今後ダンジョンに潜っていくなら頭と体に覚えさせておくといい。

「時間内に倒しきれないときや想定外のことが起こったら無理せず処刑場外へ退避するんだぞ。まぁ……その場合は消滅しちゃうけどな」

「ええ！　あれだけ頑張って集めたのに無駄になっちゃうんだ」

　ブラッディ・バロンは耐久力が高いだけではなく、多数のスキルや魔法を使いこなす特殊ボス。負荷のデカいチートスキルを使えば倒せないこともないだろうけど、無理することはない。

「華乃が召喚中のブラッディ・バロンを叩き続ける役。俺が周りにポップする１２体の護衛騎士――ブラッディ・ナイツ達を引き付ける、または倒す役。３０秒で倒せそうなら倒す、無理そうなら即逃げるという作戦でいこう」

「わかったー」

　と言ったものの、先に持って来たお菓子を食べてしまおう。ところでその棒菓子、美味そうだから１個くれないかな。

　食後の休憩と称し、しばしゴロゴロとした後に再び処刑場内へ入る。ポップしていたアンデッド２体を掃除し、中央にある召喚魔法陣の上に妹と並び立つ。

　ブラッディ・バロンが今の俺達でも倒せるなら大きな収穫だ。すぐにでもリル稼ぎに移行でき、レベル２０クラスの武具やアイテムを揃えられるようになる。そんな期待を胸に抱きながら説明を続ける。

「１２個の[怨毒の臓腑]が集まって１つになって脈動が始まったら攻撃開始だぞ」

「うんっ。頑張るっ！」

　華乃が右手にスパイクメイス、左手に[ソードオブヴォルゲムート]を持って身構える。まぁ失敗しても逃げればいいだけ。あんまり気負うなと言っておく。

　では俺も最後の準備へ移るとしよう。

　もう体が覚えているほど使いまくった《シャドウステップ》の魔法陣。多少複雑でも難なく描ききることができる。レベル１９になってからも実験したが、それほど体への負担はなく行使できるのは確認済みだ。

　発動すると周囲がやや暗くなり、足元に残像が揺らめく。このスキルを使うとダンエク時代の対人戦の記憶が蘇ってきて気分が高揚し、自然と戦闘モードのスイッチが入る。

（うむ、調子がでてきた）

　華乃の方を見れば準備ＯＫだと頷いたので、ゴミ袋から[怨毒の臓腑]を取り出して地面に満遍なくベチャリベチャリと落としていく。程なくして地面描かれている太陽のマークのような紋様が朱色に輝き、肉塊も盛んに蠢きだす。

「あっ、動いた！ でもなんか気持ち悪い動きだね」

　尺取虫のような動きで肉塊が中央へ寄せ集まって融合し１つの巨大な肉塊になると、数秒ほどで大きく脈動が始まる。

　時を同じく周囲に１２個の土山が生まれ、そこから何かが這い出てこようとしている。１２体の護衛騎士――ブラッディ・ナイツだ。

「作戦開始だ！　叩きまくれ！」

「いっくよぉぉ！」

　声を上げながら華乃がスパイクメイスを振り下ろす。その風圧で砂塵が上がるほどの衝撃にもかかわらず、肉塊は潰れずに脈動が継続されている。予想通り俺達は攻撃ができるのに召喚儀式は中断されていない。

　一方で１２体のブラッディ・ナイツはアンデッドでは珍しく“ノンアクティブモンスター”だが、ブラッディ・バロンに攻撃を加えると襲ってくるため、この設定は意味を成さない。なので先手必勝だ。

　まずは一番近くの土山へ。

　《シャドウステップ》により残像でブレた足先を確かめるように踏み込み、そして一気に加速。ヴォルゲムート戦で使用したときよりもＡＧＩ上昇の伸びが大きく感じられる。今ならばこのスキルを粗方使いこなせそうだ。

　その勢いのまま減速せずに土山の根元へ細剣を深く突き刺し、強く捩じり込む。すると土の中から低く唸るような声が聞こえた。まずは１体。

　すぐ前方に目を向ければ土山からすでに大剣が突き出ており、それを利用して土を掻いて這い出ようとしている個体が見えた。再び加速して疾走し、出てきたところを突き刺す。トドメに丁度いい位置にある頭を蹴り飛ばして２体目。

　右方、２０ｍ先にはすでに上半身が出ている個体がいた。足元に落ちていたボロボロの大剣を思いっきり投げ込むと、土山と共に上半身を吹き飛ばすことに成功。３体目。

　更に右方には土山から手斧が突き出している。愚かにも向こう側を向いて出ようとしているようだ。当然そんな美味しい隙を見過ごすわけもなく、４体目も楽勝だぜと細剣を振り下ろす。が、半分土に埋もれながらも手斧で防ぎやがった！

「さすがは騎士。しかし――」

　上半身を捩じって攻撃を防いだことには驚いたものの、下半身が埋もれてまともに動けない奴が俺の動きについてこられるわけもなく。再び死角へ回り込んで細剣を振るい、首を跳ね飛ばす。４体目。

　すぐ後ろ。土山から抜け出したばかりの個体がこちらに来ているのが見えていたので、振り返って迎え撃つ。

　大きな両刃斧を振り上げながら向かってくるブラッディ・ナイツ。その構えと逆方向からフェイントを入れつつ近づき、至近距離戦へ。速度では倍以上速い俺の動きには対応できないようで、常に死角を取る動きで翻弄し数回ほど斬ったところで魔石となった。これで５体目。

「はぁ……残り７体か。もう少しいけると思ったんだけどな」

　土から出る前に１２体のうち半分くらいは倒せると踏んでいたのだが予想以上に早く出てきてしまった。とはいえ、本来なら全員同時に戦わなければならなかった相手。５体減らせただけでも良しとしよう。

　目の前にはショートソードにナイフ、弓、大きなメイス、鎌のようなモノまで持ったブラッディ・ナイツ達がいる。顔は崩れ、装備はボロボロ。それでも主であるブラッディ・バロンを守ろうとする意志が窪んだ目から垣間見える。持った武器の切っ先を向けているのも俺ではないようだし。

「ああああああああッ！」

　背後には吹き荒れる砂塵もお構いなしに、声を上げて全力で攻撃を叩き込む華乃がいる。それでもまだ召喚儀式は止まることなく、肉塊は人型へと紡がれ、今まさにフレッシュゾンビになろうとしている。残り時間は半分ほど残っているが、やはり耐久力のある特殊ボスを時間内で倒すのは厳しいものがありそうだ。

　それでも肉塊の表面からは血が噴き出ており、手足はあらぬ方向へ曲がり、一部は崩壊しかかっている。かなりのＨＰを削れている証拠だ。その様子をみてブラッディ・ナイツの中には雄叫びを上げたり忙しなく武器を振るい威嚇している個体もいる。

　敬愛する主が叩かれまくっているのだからその反応も頷けるものはある。

「悪いな、後ろには通せないんだ。だからお前たちは――」

　ここで俺の糧となってくれ。

　時折吹く突風により、砂嵐が巻き起こる処刑場。その中央付近で大小様々な武器を持つ７体のブラッディ・ナイツと対峙する。

　足元には先ほど倒した個体の両刃斧が落ちていたので拾い上げてみる。重さは２０ｋｇを少し超えるだろうか。所々凹んでいたり刃も欠けているが防具ごとぶった斬るには丁度いい。細剣とこの斧を使ってみようかね。

　俺はゲームでも《二刀流》はスキル欄に入れていなかったが、数多の武器を環境や状況、相手によって使いこなす【ウェポンマスター】というジョブを長くやっていれば、この程度の武器を同時に捌くくらい朝飯前だ。

　武器のグリップを強く握って確かめていると、早速２体向かってきた。だがヤツらが見ているのは俺ではなく華乃のようだ。

「通しはしないぜ」

　弓使いの射線と後ろにいる華乃の位置に気を付けながら、こちらからも《シャドウステップ》で加速して間を詰める。向かってきた２体のうち、手前にいるブラッディ・ナイツが咄嗟に盾を構えるが、そんなことはお構いなしに勢いそのまま斧を振り抜く。

「オラァアアァッ！！」

　ドコンッと、金属音とも衝突音とも取れないような大きな音をたて、盾ごと吹き飛ばす。そのすぐ隣にいる剣使いをもう片方の手で持っている細剣で薙ぐ――が浅かったようで倒しきれず。俺の攻撃を喰らいながらも短剣を振りかぶってきたので一度横に躱しながらオート発動の《スラッシュ》で斬り捨てる。

「うぉっと！？」

　一息つこうとすると風切り音をたてて弓矢が飛んできたので、首の動きだけで避ける。それを皮切りに、残りのブラッディ・ナイツが一斉に向かってきやがった。主を助けるにはまず俺が邪魔だと判断したわけだ。ならば俺は――

　逃げる！

「まともに正面からやってられるかってんだ、バカヤロー！」

　レベル差が大きい格下相手ならともかく、それほどレベルが離れていない相手と５体同時に戦うのはさすがに厳しい。

　されど重要なのは華乃の方へ奴らを行かせないということ。上手く俺にヘイトを集め、攻撃ターゲットを持ってこれた時点で目的は達成しているのだ。後は飛び道具に気を付けて時間稼ぎをすればいい。生憎と《シャドウステップ》で移動力は増しているので、鬼ごっこなら負ける気がしない。

　ジグザグに走りながら横目で華乃の様子を見てみると、丁度マニュアル発動で《スラッシュ》を叩き込んでいたところだった。ブラッディ・バロンのダメージの状態を見た感じでは、残り２割程度まで体力を削れている模様。しかし時間も残り少ない。それならば俺も攻撃に加勢してみるか。

　後ろから付いてくるブラッディ・ナイツとの距離感に注意しつつ、トレインの進行方向をいざ、ブラッディ・バロンへ。

「華乃！　俺もスキルを叩き込むから発動時には注意してくれ！」

「私も奥の手をだすよ！」

　奥の手って何だ……まぁいい。それじゃせっかく立派な両刃斧を持っていることだし《フルスイング》でもやってみよう。

　両刃斧を両手でしっかりと握り、走りながら魔力を練る。次にハンマー投げの投擲モーションのようにぐるり、ぐるりと２回スピンして斧を振り回す。これが《フルスイング》のスキルモーションだ。

　俺が近くまで迫ると、察した華乃が後ろへ飛び退いてくれた。それでは遠慮なく。

「全力全開でいくぜぇーっ！　《フルスイング》」

　人型の形が崩れつつある肉塊のど真ん中を、走力と遠心力の全てを両刃斧に乗せて叩きつける。その斬撃によりドンッと鈍い音がさく裂するも、まだ千切れず脈動が継続されている。驚くべき耐久力だ。それでも残り１割くらいまで削れただろうか。

　後ろから護衛騎士が迫ってきているのでそのまま滑るように通り過ぎる。スキル硬直は今日覚えたばかりの《バックステップ》で軽減、短縮させている。スキルをいくつか覚えたおかげでダンエクでの基本戦術がようやく様になってきた。

「いっくよー」

　入れ替わるように華乃が戻ってくるがもうほとんど時間がない。どんな攻撃をするのかと走りながら様子を見ていると……腰紐からキラキラ光る何かを取り出した。

「おい待て、それは――」

「ポポイっとなっ！」

　アンデッドに投げ込めば絶大なダメージを与えられる回復ポーション。その威力はポーション１つで基本ジョブのウェポンスキル並のダメージを叩き出すほどだ。それを一気に３つも投げ込みやがった。

　瓶に入っているはずの回復ポーションはブラッディ・バロンの近くで勝手に破裂し、中のピンク色の液体がばら撒かれる。それらが肉塊に降りかかると赤黒い煙が吹き上がり、地鳴りのような断末魔が放たれた。

「ォオ”ォオ”オ”ォオ”……ォ」

　その断末魔も止まると肉塊が黒く変色し、やがて罅割れ粉々になる。背後から追いかけてきたブラッディ・ナイツも主の消滅と共に崩れ落ち、同じように砕け散る。

「すっごーい！　回復ポーションってこんな凄い威力だったんだねっ」

「はぁはぁ……あのなぁ、今ので……いや。リスクを回避できたならそれもありか」

　もしものときのために３つ持たせてあった回復ポーションを惜しげもなく全て投げ込むとは。その威力に目を白黒させて驚く我が妹。

　仮に時間内で倒せなくても逃げながら倒すという戦略があったが、格上ボスと戦闘となれば少なからずリスクが生まれてしまう。安全かつ確実に倒せるならこの程度の出費は安いものかもしれない。

「おっきぃ魔石！　あ、これなぁに？　この黒いモニョモニョした気持ち悪いの」

　華乃が指差す場所を見れば、魔石の他に黒くて小さい靄のようなものが転がっていた。近くで見てみると顔のようなものが浮かんでは消え、微かだが悲鳴に似た声も聞こえてくる。これは[怨毒の霊魂]といってブラッディ・バロンの恨み辛みが籠った魂と呼べるもの。オババの店に持っていくと２０リルで買い取ってくれる換金用アイテムだ。

　触ると祟られそうなのでそのまま袋に被せるように入れて持っていく。あらゆるものが現実となるとグロかったり触れたくないモノまでリアルに実物化するのは困り物だ。

「疲れたし、これを換金したら帰るか」

「おにぃ。もう少し攻撃力が欲しいんだけど、ＳＴＲが足らないのかな」

「マニュアル発動をもう少し練習してみるといいぞ」

　うんうんと唸りながら教えたスキルモーションをなぞる妹。今後の戦闘を見据えるなら強力な武具やアイテムに頼るより、マニュアル発動など戦闘技術を磨いておくほうがいい。後で少し稽古をつけてやるか。

　\*・・\*・・\*・・\*・・\*・・\*

　ブラッディ・ナイツ達が落としたミスリル合金製武具をいくつも抱え、下手糞な鼻唄を口ずさむ妹と共にゲートへと入る。潜った先はもうオババの店のすぐ近くだ。

「これでどれくらいミスリルが取れるのかな。純ミスリル製の武具とか作れちゃう？」

「今日のを１０回くらいやらないと集まらないぞ」

　ミスリル含有率が０．１％でもあれば上等なミスリル合金製武具と言える。それらの武具を集めて精錬し１００％の純ミスリル武具を作るとなると、相当な量のミスリル合金が必要だ。こんなに嵩張るものを何回も運ぶのは大変だし、早めにマジックバッグを手に入れたいところだね。

　歩いて１分もしないうちに見慣れた四角い箱のような建物の前に着く。その前には古びた椅子に座り、いつものようにプカプカと煙管を吸って煙を楽しんでいる魔人がいた。

「あらぁ、いらっしゃい……この前に頼んだ“アレ”は持ってきてくれたかい？」

　ゆっくりと優雅に立ち上がり出迎えてくれるフルフル。人間の顔を覚えるのは苦手と言っていたけれど、どうやら俺と妹の顔は覚えてくれたようだ。

「持ってきましたよ」

　フルフルがいっている“アレ”とは、もちろんブラッディ・バロンが落とした[怨毒の霊魂]のこと。処刑場に行く前にお使いクエストを受けておいたのだ。

　ゲームのときはダンジョン通貨であるリルと換金するだけだったので、使い道は分からなかった。ただ多くの冒険者が持ち寄って換金していたので、何かしら大量に消費する理由があるのかもしれない。

　……しかし何だろう、持ってきたと言うとフルフルが急にソワソワしはじめたぞ。まぁ、とりあえず渡してみるか。

　袋に入れてあるブツを手に触れないように見せる。こんな不吉な物を一体何に使うのかと訝しんでいると、いつもは穏やかに細められているフルフルの目がクワッと見開かれ、目視できないほどの速さで奪い取ってきやがった。何事だっ。

「もうっ、久しぶり過ぎてどんな味だったか忘れてしまいそうだったわぁ」

「あ、味？」

　予期していなかった言葉に理解が追い付かず、首を大きく傾げてしまう。

　舌舐りをしながら[怨毒の霊魂]を口元に持ってくと、そのままカブリと噛みつく。その際に良くない悲鳴のような音が周囲に木霊する。

　幸せそうにゆっくりと味わいながら咀嚼するフルフルを、兄妹揃って唖然と眺める他なく……というか。

（それ食べ物だったのかよ！）

「よし。クラス対抗戦ミーティングを始めんぞ」

　ホームルームが終わって放課後の時間。普通なら解散となるが今日はクラス対抗戦に向けてミーティングをやるとのこと。

　教壇の前でクラスメイトを睨みながら話すのは、クラス投票によりクラス対抗戦のリーダーに任命された磨島大翔君。口調は砕けていても、短めに刈り揃えられた髪はワックスで丁寧にセットされていて姿勢も良く、上流階級の雰囲気を放っている。Ｅクラスでは彼と赤城君が二大リーダー格として持て囃されているのだ。

「知っての通り、クラス対抗戦は１週間かけてダンジョン内で行われるクラス同士の……死合いだ。上のクラスと実力差はあるだろうが、どうせ負けるなどと思ってやる気を出さない奴は俺が直々にぶっ潰す。覚悟しておけ」

　《オーラ》を使って威圧してくる磨島君。レベルは５か６くらいだろうか。それでもほとんどのクラスメイトよりレベルが高く、効果は覿面のようだ。放課後ということでだらけ気味だった皆の顔が一気に引き締まる。

「まずは今年の対抗戦の種目の説明をする。立木」

　磨島君が後ろに控えていたインテリメガネに目配せをする。副リーダーとなったのは勇者パーティーの参謀こと立木君だ。今回のクラス対抗戦は磨島君と立木君の二人が中心となり引っ張っていくことが決まっている。

「それでは資料を見て欲しい」

　立木君の指示の下、ミーティング前に配られた手元のプリントを一斉に見るクラスメイト達。そこにはクラス対抗戦で行う種目とその説明が書かれていた。

　・指定ポイント到達

　・指定モンスター討伐

　・到達深度

　・指定クエスト

　・トータル魔石量

　クラス対抗戦は上記の５つの種目にクラスメイトを振り分け、点数を競っていく。クラス単位で挑む最初の試験だ。

「ではこれらがどんな種目なのか、概要を説明していこう」

　最初の「指定ポイント到達」というはダンジョン内の指定された場所へ到達すれば点数が貰えるという種目だ。判定は試験専用のＧＰＳ端末にて計測。着順に１位から５点、２位が４点、ビリでも１点。棄権すれば０点というように点数付けがされている。

　指定ポイントは毎日指定され、日ごと階層が深く、難しくなっていく。Ｅクラスでは終盤での到達がほぼ不可能と予想されるため、指定階層が浅い初日から中盤に掛けての期間でどれだけポイントを稼げるかが勝負所となる。

「他のクラスはこの種目を隠密系スキル持ちの【シーフ】で組んでくるだろう。僕達も試験までにジョブチェンジ組を増やしたいところだが――」

　邪魔なモンスターといちいち戦ってたらキリがない。そのためモンスターに気づかれにくくなる《隠密》というスキルがこの種目では重要となってくる。ところがＥクラスのほとんどはジョブチェンジできておらず、大きなハンデを背負って臨まなければならない。

　次に「指定モンスター討伐」の項目の説明。

　その名の通り指定されたモンスターを倒せとのことだが、これも日が経つにつれ指定されるモンスターが強くなっていく。１体しか現れないモンスターが指定されることは無いため、どこのクラスが最初に倒したかは問題にならない。安全かつ確実に倒してけるグループを作る必要がある。

　討伐した指定モンスターの魔石を端末に当てれば自動でチェックしてくれる機能があるため、点数計算も自動で行われる。

「より強いモンスターを倒せるよう、戦術理解度が高いグループを作って臨みたい。したがってこの種目だけは僕と磨島のほうでメンバーを決めるかもしれない」

　一般的に人数を増やせば戦闘力も増えるものだが、難敵を相手する場合や安全、確実、迅速になどという条件を求めるならば少数精鋭のほうが良いときもある。そこら辺りを考慮するなら赤城君か、磨島君の固定パーティーでいくのがベターだろう。

　次の項目の「到達深度」は試験期間中にどこまで潜ることができるかという種目。とにかく奥の階層へ進むほど点数が入る。帰りの時間は考えなくてよいとのことだ。

　７階くらいまでならメインストリートを歩いていけば敵とほぼ遭遇せずに到達できるが、そんな階層では他のクラスと差は生まれない。おそらくメインストリートを歩いていても戦闘が起こる１０階以降の階層が最低ラインとなる。だからこそ――

「この種目は、たとえ僕らのクラスの最高レベルを送ったとしても勝てないだろう。点数配分は大きいが、ここは参加賞だけ狙っていく」

　到達深度は上位クラスの独壇場となるのは間違いない。Ａクラスには高レベルが揃い踏み、Ｄクラスでさえ刈谷のようにレベル１０を上回る生徒もいる。Ｅクラスとしては参加賞だけ狙って主力を他の種目に回す、という作戦は妥当だ。

　そしてこの種目には、１位の半分の階層以下しか到達できないクラスは失格となる厳しいルールもある。Ａクラスのレベルから考えても８階くらいまでは辿り着かないと参加賞すら厳しい。

　ならばいっその事、誰も登録しなければいいと考えてしまうが、参加者のいない種目を作ることは認められないため、誰かに貧乏くじを引いてもらう必要がある。その辺り立木君はどう考えているのか。

　４つ目の「指定クエスト」は指定されたモノを取ってこいという種目。

　冒険者ギルドでも似たようなクエストが出されている。あれと同じで「ダンジョン産鉱石を取ってこい」「特定モンスターのドロップ品を持ってこい」というような内容だ。この種目をクリアしていくには戦闘能力だけではなく、ダンジョン知識もそれなりに求められる。ただ、端末の使用も認められているので、そのときに調べたり教え合えばいいだろう。

　最後の「トータル魔石量」は、クラス対抗戦の期間中にクラスが獲得した総魔石量で勝負する種目だ。全種目の中で一番点数配分が大きく、最終的に１位を取れば他の種目の倍ほどの点数が入ることになる。Ｅクラスとしても最重要種目と言える。

　魔石は最終的に集めた量と質で順位が決められ、買い取り価格が高いほど、また多く集めれば集めるほど評価が高くなる。しかし、Ｅクラスは他クラスよりも弱いモンスターしか狩れないため必然的に質より量で勝負せざるを得ない。

「この種目は他の４つの種目で得た魔石もカウントされる。つまり、どの種目に配属されても余った時間で魔石を集めてもらうことになる。そして」

　これとは別に、一番格の高い魔石を持ってきたクラスにはボーナスが加算される特別ルールもある。だがＥクラスがそんな強いモンスターを倒せるわけもなく、このボーナスは最初から無いものとして扱うそうだ。

「立木、ご苦労。ではメンバーの振り分けだが、最初に希望を聞いておこう」

　磨島君の合図により小さな用紙が配られる。これに名前と５つの種目の中でやりたいものを書いて提出せよとのことだが……さて、どれにしよう。普通にトータル魔石量あたりでモブらしくしておくのが一番いい気がする。逆に着順を競う指定ポイントのような忙しい種目は遠慮したいものだ。

「でもさ、到達深度って捨て種目なんだろ。やりたいヤツなんているの？」

　クラスメイトが、当然の疑問を口にしてきた。到達深度は先ほど立木君も「捨てている」と言っていたように、Ｅクラスでは勝ち目が無い種目。参加賞の得点だけは取りにいくようだが、それが貰える階層に行くにもリスクが伴う。

「やっぱり、使えない人がやるべきだよねー。他のクラスについていけば参加賞くらい貰えるでしょ」

「使えないヤツって……久我かブタオのどっちかじゃん」

「でも、あれ？　久我のレベルが６になってるぞ」

　何やら不穏な空気になってきた。俺と久我さんが槍玉に挙げられているが、久我さんは《フェイク》の表示を変えて早速レベル６にしてきた模様。そんないきなりレベル６とかにして大丈夫なのだろうか。バレても知らないぞ。

「マジで？　計測してなかっただけかよ。ということはブタオに決定じゃん」

「クラスのためだと思って頼むぜ、ブタオ」

「ちょっと！　みんな待っ」

　サツキが何か声を上げようとしたもののリサがすぐに手を引っ張って制止させた。そしてこちらを見て頷く。もしかして俺に到達深度をやれということだろうか。

　ゲームのときもクラス対抗戦というイベントは用意されていて種目も選べたが、その中でも到達深度は最難関種目だった。勝てばヒロインの好感度が上がるなどの特典はあれど、この序盤で上位クラスの最高位戦力と競うなど、ほぼ無理ゲー。刈谷イベントと同じく２週目専用イベントと評されていたほどだ。

　もちろんリサは勝てと言ってるわけではないだろう。では何が狙いなのか。さっぱり分からん。

「成海ぃ、やってくれるか？　Ｅクラスの未来がかかっているんだ」

「えっ、未来？」

　どうしたもんかと考えていると磨島君が俺の肩をポンと叩いてきた。Ｅクラスの未来とか言ってるけど、どうみても厄介事を押し付けてるよね？　まるでヤバイところに出向させられる社畜の気分だぜ。

　でもまぁどうせ誰かがやるのだし、それならば引き受けてクラスメイトの好感度を稼いでおくのも悪くないかもしれない。

　それに一人でやれるなら気が楽というのもある。端末を階層入り口にあるロッカーにでも預けておいて、余った時間は自由に行動させてもらいましょうかね。あれ？　そう考えると美味しい気がしてきたぞ。

　みんなのためならば、といった感じに見せかけて了承すると、磨島君は「お前こそ期待の星だ」と機嫌良く肩を叩いてきた。到達深度はクラスのリーダーとしても悩みの種だったのだろう。それが解決して気分よく進行してくれるならこちらとしても引き受け甲斐があったってもんだ。

「成海以外はその用紙に希望種目を書いて俺か立木に渡してくれ。今日はこれにて解散する！」

　各種目のグループは各個人の希望と戦力バランスをみて決めていくのだろう。今後はグループごとに集まって作戦会議なりダンジョンダイブするとのこと。ボッチ種目に参加する俺には関係無さそうだけど。

「サンキュー、ブタオ」

「参加賞だけは死んでも取って来いよ！」

「これで足手まといの処理は片付いたな」

　ふぅ、クラスの役に立つというのも気分がいいもんだぜ。ふんふんと妹譲りの鼻唄を歌いながら帰りの支度をしていると――

「ちょっと」

　不機嫌そうでありながらも、聞き取りやすく透き通った声色。そしてこの呼び方は幼馴染のカヲルだな。何か用だろうか。

「あんな安請け合いして……大丈夫なの？」

　安請け合いとは到達深度に決めたこと言っているのか。参加賞くらいは余裕で取って来られるのでその点は心配無用だ。

「大丈夫だ。他のクラスについていって参加賞だけは必ず取ってくるさ」

「……もし戦闘にでもなったら、死ぬのよ？」

　それで何かあれば華乃が悲しむと柳眉を下げる。確かに俺のレベルがデータベースの表示上通りなら、参加賞を取ってくるだけでも危険が伴う、か。

　ブタオ視点でのカヲルはそっけないようにみえても、本来は面倒見の良い女の子。気苦労が絶えない性格とも言うが、心配させてしまったのは悪い気がするな。

「今度７階まで行くことになってるの。それで日曜日に――」

「カヲル。クラス対抗戦は俺と組もうぜ」

　何か言おうとしていたカヲルの言葉は、しっとりとした低めの声により遮られる。見れば金髪ロン毛が髪をかき上げながら近づいてきた。

「どの種目でもいいぞ……って、またセクハラでもされてたのか？　何かされたら俺を頼れよ。ワンパンでぶっ飛ばしてやるから」

「……そんなんじゃないわ」

　こちらを訝しむように睨んでくる月嶋君。というか“また”ってなんだよ。俺は高校入学以降、セクハラなんてしたことはないはずだぞ。たぶん。

　一方のカヲルは、表情からして機嫌が急降下しているようにみえる。この分だと月嶋君は全く攻略が進んでいないようだ。とはいえ、ダンエクのヒロインは大抵チョロイン属性が付与されているため、この後も同じとは限らない。しかし――

　とうとう俺の目の前でも隠すことなく口説くようになってきたな。ブタオマインドが酷くささくれ立ってしまうじゃないか。カヲルとは無理に近づかず距離を置いていたので、この強烈な恋心も少しは落ち着いてきたと思っていたが、そうでもなかったようだ。

　見ていてもモヤモヤとして気分が悪くなりそうなのでもう帰ってしまおうかと逡巡していると、背後からリサとサツキがとても親しげに話しかけてきた。

「お疲れ様～。でも期待の星って……ふふっ」

「もうっ、みんなソウタに押し付けて。酷いよねっ」

　最近協定を結んだことで、ダンジョン内外問わずとても仲良くしてもらっている。そんな彼女達に話しかけてもらえただけで気まずい空気が浄化され、活力が漲ってくる。ありがたいことだね。

「ねぇねぇ、日曜日は空いてるかな～。買い物に付き合ってほしいのだけど～」

「あれっ、早瀬さんと月嶋君？　何か話してたのかなっ」

　サツキが俺の近くに立っていたカヲルと月嶋君に気づき、顔を見比べる。

「……別に。私はもう帰るから」

「おいっ待てよ、カヲル」

　踵を返すカヲルと、後追う月嶋君。そんな二人の後ろ姿を見ていると再びモヤモヤとしてしまうのだった。

　――　立木直人視点　――

　クラス対抗戦の説明を終えて帰り支度をする一方で、クラスメイトは帰らず教室に残ってどの種目にしようかと話し合っていた。

　彼らには希望種目を書く紙を渡してあるものの、実際には誰がどの種目になるのか半数はすでに決まっている。

　僕は「指定クエスト」、ユウマは「指定ポイント」、サクラコとカヲルは「トータル魔石量」のリーダーをすることになっていて、そこに戦闘スタイルやレベルに応じてクラスメイトを分配し最適なグループを作っていく予定だ。なお、精鋭の磨島パーティーは「指定モンスター」に当たってもらうことになっている。

　その他の戦略的に重要でない者は、人数の足りないところへ適度に振り分ければ良いだろう。

　一方で足手まといと考えていた久我がレベル６になっていたのは嬉しい誤算だ。この短期間で上げたというのは考えづらく、恐らくレベル計測していなかっただけだろう。早々に種目配属先を修正しておかねばならない。

　もう一人の足手まといに目を向けてみれば、神妙な面持ちのカヲルと何やら話していた。

　磨島は彼を適当に煽てて捨て種目をやらせ、参加賞が取れれば儲けもの程度にしか考えていない。しかしレベル３程度では参加賞を取れる階層に行くこと自体、大きなリスクとなってしまう。成海もそれを理解しているなら無理することはないはずだが……カヲルはそれでも心配なのだろう。

　以前に幼少からの知り合いと聞いてはいたものの、教室で話すようなことはほとんどなく、てっきり疎遠な仲かと思っていた。しかし、そうでもないようだ。

　そんな二人に空気を読まず割り込む月嶋。授業態度も悪く、最近ではカヲルに付きまとっている姿をよく見かける。負担になっているようなら注意の１つくらいしておくか。

（さてと。これから向かうは戦場。気を引き締めて……む？）

　静かに気合を入れ、教科書が詰まったカバンを背負い立ち上がろうとすると、天上の使いが語り掛けてくるような心地良い声が耳を掠めた。思わずその方向へ僕の固有スキル《聴覚強化》を使う。

「お疲れ様～。でも期待の星って……ふふっ」

「もうっ。みんなソウタに押し付けて。酷いよねっ」

　知的で落ち着きがありながらも、どこかあどけなさを残している新田と、人一倍クラスのために動き、人情に厚い大宮。その二人が親しげな様子で成海に話しかけていた。先日の練習会でも成海と肩を寄せ合って談笑していたのを見かけたが……とても気になる。

「ねぇねぇ、日曜日は空いてるかな～。買い物に付き合ってほしいのだけど～」

　一体どういう関係なのか懸念していると衝撃の会話内容が聞こえ、思わずガタリと机を動かしてしまう。

　先週あった学力テストではクラス一番の成績を収めた聡明なる新田。にもかかわらず何故あの男に構うのか。理数系はともかく文科系は平凡。ダンジョンにおいては落ちこぼれで美男子というわけでもない。ただ単に孤立した彼に同情しているだけかと思って気にもしていなかったが……

　そして僕に次いでクラス３位の成績を収めた大宮も成海に盛んに話しかける。それも相当に距離が近い。数日前のサークルを作ると決意に満ちた表情からは程遠く、楽し気な笑みまで浮かべている。もしかして成海には隠された何かがあったりするのか？

（駄目だ。この後の事に集中しろ）

　心頭滅却すれば火もまた涼し。心を乱されれば正しき未来も切り開けない。断腸の思いでその場を後にし、未だ蒸し暑い教室の外へと足を踏み出すことにした。

　\*・・\*・・\*・・\*・・\*・・\*

　校内を南北に横断する並木道に沿って北エリアへと赴く。この付近には冒険者学校の部室棟や訓練施設が密集しており、其処彼処で防具やジャージ姿の生徒が汗を流し、部活動に勤しんでいる。

　そこからさらに東に数分ほど歩くと明らかに景観が変わってくる。ここは“第一”と名の付く部室があるエリアだ。部室といっても塀で囲われた広い敷地に迎賓館のような豪奢な屋敷を構えているので、初めて来た人は戸惑う他ない。

（これは……僕らが部活を作ったところで簡単に相手になるようなものではなさそうだ）

　維持するだけでも目の飛び出るような金が掛かるはずだが、著名な貴族や大企業から潤沢な資金提供を受けているので何の問題もないのだろう。そんな建物をいくつか通り過ぎ、目的の場所に辿り着く。

（ここか。第一魔術部の部室は）

　石造りの塀の隙間からみえるのはエメラルド色の屋根に白く輝く外壁の洋館。

　鉄製の門の前にはスーツを着た男が直立不動の姿勢で立っていた。僕が来るのを知っていたのだろう、こちらを一睨みしたかと思うと無言で門を開き、不愛想に「ついてこい」と宣う。それでは遠慮なく入るとしよう。

　敷地の中に入れば玄関までのアプローチは竹が植えられており、幾分薄暗く温度も低い。その竹は下から魔道具で照らされ幻想的な空間が作り出されていた。

（驚くほど静かだ）

　距離的には先ほどの生徒が沢山いた部室棟エリアと近いはずなのに、その喧騒が全く聞こえない。何らかの魔法処理がなされているのだろう。

　そのままスーツの男の後をついて建物内へ入り、色鮮やかな絨毯が敷かれた階段を上って２階にある応接間へと通される。中には赤く長い髪を編み込みサイドに垂らした小柄な女性が、ゆったりとソファに腰をかけて微笑んでいた。花柄の刺繍が入った黒いベルベットのマントには何らかの魔力が込められているのか、紫色に怪しく輝いている。

「いらっしゃい、ナオちゃん」

　囁くように優しく僕の名を呼ぶこの方は、一色乙葉様。我が家が代々仕えてきた子爵家の嫡女だ。

　現在は２年Ａクラス。第一魔術部の部長にして八龍が一人。つまりは冒険者学校における最高位の魔術士でもある。そんな人物に昔と同じように呼ばれたことに、気恥ずかしさと嬉しさがこみ上げる。

　黒いレースの手袋をした手で対面のソファに着席を促されたので一礼し、そのまま座ることにする。

「ご無沙汰しております、乙葉様」

「えぇ。４年ぶりですか」

　彼女が冒険者中学校に行って地元を離れてから今日まで約４年。長くもあり短くもあった。本来ならばもっときちんとした出会いを計画していたのだが。

　それにしても。学校に入る前までは病弱で色白だったというのに、今の乙葉様は見違えるように顔色が良くなっている。レベルアップによる肉体強化の恩恵だろうか。

「大分お元気になられたようで。御高名はどこにいても聞き及んでいました」

「そうですか。色々ありましたからね」

　この国どころか海外にも響き渡る、一色乙葉の名。彼女が家を継ぐことになれば伯爵位へ陞爵することも夢ではないと言われるほどの稀有な才能の持ち主。それだけに酷く忙しい身だと聞いている。

　今日も第一魔術部の仲間と深層のダンジョンにダイブしていたところ、無理を言って彼女の固有魔術により抜け出してもらい、この場を設けてもらっている。本来なら常に取り巻きが傍らにおり、Ｅクラスの僕ごときが近づけるようなお方ではない。前々から他の部活メンバーがいなくなるこの状況を狙って接触を試みていたのだ。

「ナオちゃんはどうですか？　何か相談したいとのことでしたが」

「はい。折り入っての話があり参った次第です……が」

　時間がないので単刀直入に本題に入りたいところではあるものの、彼女の後ろには先ほどのスーツの男と、もう一人スーツ姿の女が立ったまま控えている。年齢的にどちらも２０をとうに超えているので生徒ではなさそうだ。一体何者か。

「あぁ、こちらの者達はお構いなく。他言の心配もありません」

「……承知しました。それでは」

　話したいこととはもちろんＥクラスの窮状報告、並びに直訴。八龍である乙葉様にそんなことを話したと知られれば上位クラスや上級生に目を付けられ、より敵対的な行動を起こされる可能性がある。内密に会って話をしたかったのだ。

　だが他言しないと言われてしまえばもう何も言えない。気にしないで話すことにしよう。

　まずはＥクラスの冷遇について。部活動勧誘式であったように上位クラスから蔑視されていることは明白。近頃は段々と酷さを増しており、それらに対する学校の無関心な態度も目に余る。

　そう報告すると乙葉様は少し顔を伏せて考え込む仕草をする。慈愛に満ちたお気持ちを利用するようで心苦しいが、僕としても他に手段がない。包み隠さず伝えることにした。

「……そうですか。その他にはありますか？」

　もちろんある。次に部活創設の際に融通を利かせてもらえないか願い出てみる。Ｄクラスとの決闘に負けたことにより自分たちで部活を作ることを禁止されたからだ。

　大宮も生徒会に掛け合っているようだが、聞き入れてもらえるどころか門前払いになるだけだろう。しかし八龍が動くのなら話は別。いくら生徒会と言えど乙葉様を無下にはできないはずだ。

「決闘……そういえば、１年生の恒例行事となっていましたね」

　恒例行事。まさかそんなことを毎年やっていたのか。ならば背後にＤクラスより上の存在がいるのは確実。部活動の頂点にいる立場として何か知ってはいないだろうか。

「なるほど、なるほど。ところでナオちゃん。この学校は何を目的にして動いていると考えていますか」

　いきなり何の質問だろう。学校の目的……

「入学式のときに学長代理が仰っていました。国民の期待に応えるべく真の冒険者を育てる、と」

「ええ。ですが、別の目的もあるのです」

　ゆっくりと立ち上がり憂いを帯びた表情で窓の外を眺める乙葉様。“別の目的”とは、冒険者の育成以外に何があるというのだ。

「まずはそうですね。この国の現状から説明しましょう」

　今は激動の時代。

　かつての世界では経済力や軍事力、資源の多さがものを言っていた。しかし人工マジックフィールドが発明されて以降は、強力な冒険者の存在も重要項目となり、世界秩序やパワーバランスに大きく影響を及ぼすことになった。

　自ずと各国が冒険者育成に心血を注ぐわけだが、我が国も例に漏れず莫大な資金を投下し育成に励むことになる。そのおかげか強力な冒険者を何人も誕生させることができた。昨今では男爵位を叙爵したカラーズのクランリーダー、田里虎太郎などが有名だ。

　こういった非常に優秀かつ功績を残した者には貴族位という餌を与え、国に忠誠を誓わせ、国威とする。これが我が国の冒険者政策の根幹となっている。そういった経緯で新たに貴族となった者――新貴族と言われている――は、配下である攻略クランを背景に人と金を集め、急速に大きな力を付け始めている。政府はそれを容認している。

　片や、明治時代から続く従来の貴族――今は区別して古貴族という――にも強力な社会特権や既得権益があり、それらにぶら下がっていた企業や団体も多く、力も強大であった。

　だが最近ではそういった組織も羽振りの良い新貴族に次々寝返っている。それどころか身内であったはずの士族の裏切りまでもが絶えないという。これは血と伝統を重んじてきた古貴族にとって脅威であり恐怖そのものでもある。

　そこで取った手段は２つ。

　１つは新貴族に負けないよう、血族を強力な冒険者に育てること。多額の投資をして強力な装備を持たせ、屈強な冒険者を雇ってパワーレベリングを行うのだ。それこそ庶民では太刀打ちできないほどに。この学校で多くの従者を引き連れている貴族が多いのはそのためだという。

　もう１つは田里のような新貴族がこれ以上生まれないようにすること。全国から優秀な庶民が集まる場を利用して、芽が出る前に叩き潰す、もしくは隷属させる。そのために古貴族達はあらゆる手を使って冒険者学校の理事会を掌握したのだ。

「理不尽な。そんなことをしていては国が腐って駄目になってしまう」

「それほどまでに我々の危機感は大きなものなのです」

　何よりも家の存続を重視する古貴族。それが新貴族の台頭により、追いやられ途絶えてしまうかもしれない。既得権益に縋る古貴族の立場は狭く、脆いのだ。

　それを阻むためなら多少の理不尽なんて気にしない。闘技場での騒ぎも、部活動の参加制限も、全ては古貴族とその一派が作り出し慣習にしたもの。同時に学内で自分達の影響力を高めて強化を図る。八龍という概念もそこから生まれたのだという。

　ゆっくりと息を吐き「それがこの学校の、もう１つの目的です」と告白する。だが、当然のようにＥクラスへの追撃が終わったわけではない。

「そういえば、そろそろクラス対抗戦がありますね。裏ルールは知っていますか？」

「裏ルール……いえ、存じません」

　頷くように「そうでしょう、では特別に教えて差し上げます」と言う乙葉様。

「種目を遂行する上で、助っ人を頼んでもよいというルールです。貴族が多いＡクラスは沢山の従者を従えて挑むことでしょう。ナオちゃんのクラスに助けを求める当てはありますか？」

「なっ！？　それでは公平な試験に……いや。公平など端からどうでもいいのか……」

　考えてみれば、ダンジョン内で生徒を監視するものはこの腕の端末しかなく、誰かが暗躍したところで知る由もない。いくらでも不正を行える環境だ。もとより、勝負する気などないのかもしれない。

　絶望により項垂れそうになる。僕たちが決死の思いでしてきた努力とは何だったのか。どう足掻こうと這い上がる道などないのか――

「這い上がる方法ならありますよ？」

「そ、それは何ですか」

　縋りつくように聞き返してしまう。乙葉様は、さっと手を上げて後ろに控えていた二人に何かの指示を出す。すぐに二人は腕を捲り、入れ墨のような紋様を見せてきた。

「これを身に刻み、我々に忠誠を誓うという方法です。であれば、理事会もあなたを標的にしなくなるはずです」

　それは禁忌とされた、身に刻むタイプの契約魔法ではないか。契約者の人権を侵すため国際法により禁止されており、政府も厳しく取り締まっているはず。それを何故……

　目の前の少女が口の端を緩やかに上げるとやや前のめりになり、暗い瞳で覗き込んでくる。そして囁くように、諭すように語りかける。

「私が働きかければ、Ｄクラスへの編入も可能です。第一魔術部への入部も許可しましょう……いかがしますか？」

　あの美しく心優しいはずの乙葉様が、何か恐ろしい怪物に見えてきた。

☆成海家

・成海颯太

　あだ名はブタオ。この物語の主人公。

　１年Ｅクラスでレベル２０。データベース上ではレベル３の【ニュービー】

　身長１７０ｃｍ、第一話時では紺色の髪をオールバックにし、体重約１２０ｋｇと非常に太っていたが、現在は爽やかイケメンを目指して７０ｋｇほどまで減量に成功。ややぽっちゃり体型となっている。

　ゲームでは災厄の悪党、略して“災悪”と呼ばれていたＰＫだった。

　家族構成は父、母、妹の四人家族。

　幼馴染で婚約者の早瀬カヲルはお隣さん。

　妹が【シャドウウォーカー】寄りの育成ビルドなので、回復系のジョブになろうとしている。

　クラス対抗戦では到達深度にソロで参加。

・成海華乃

　髪は薄茶色でショート。童顔で目がくりくりしていて活発そうな女子中学生。

　レベル２０で【ローグ】。【シャドウウォーカー】になるべくレベル上げを頑張っている。

　来年に冒険者学校を受験する予定。

　見た目は背が低く童顔なので小学生と間違われることもしばしば。

　戦闘センスが高く、《二刀流》の使い手。

　兄を慕っているものの、表には出さない。

　下手糞な鼻唄をよく歌う。守銭奴。

　兄を冷遇する早瀬カヲルが好きではない。（昔は好きだった）

　こっそりとクラス対抗戦参加を企んでいる。

・成海大介、成海沙雪

　颯太と華乃の両親。

　大介は脱サラし「雑貨ショップ　ナルミ」という冒険者向けの店を経営している。

　沙雪は派遣社員として冒険者ギルドで働いている。

　二人とも元冒険者。長らくレベル４で止まっていたが現在はレベル１３まで上がり、すでに亡者の宴デビュー済み。

　肉体強化により若返りしたと喜んでいるが、微妙なところ。

　回復ポーションを仕入れたことにより売り上げが大きく上昇。冒険者ギルドのビル内に「雑貨ショップ　ナルミ」２号店を計画中。

☆１年Ｅクラス

・早瀬カヲル

　レベル６で【ファイター】

　ダンエクではヒロインとして攻略可能なキャラ。

　背が高くスラリとした体形。腰まで伸びた青く長い髪をサイドテールにしている。明るいエメラルドグリーンの瞳。

　才色兼備で、基本的に誰に対しても優しい子。ただし颯太以外。

　中学剣道にて全国大会で優勝したこともあり、剣術の腕前は中々のもの。

　成海颯太とは幼馴染で婚約者だが、常日頃から婚約破棄したいと願っている。

　赤城悠馬のパーティーに属している。

　父は早瀬辰。『早瀬金具店』のオーナー。母はいない。

　クラス対抗戦ではトータル魔石量のサブリーダーとして参加。

・赤城悠馬

　レベル６で【シーフ】

　燃えるような鮮やかな赤髪に金色の瞳。人好きのする笑顔。超イケメンでモテる。

　ダンエクの主人公キャラで潜在能力が非常に高く、活躍場所は前衛後衛を選ばない。

　上手くメインストーリーを進めていけば【勇者】になることができる。

　１年Ｅクラスを動かす二大リーダーの一人。

　少し前まで刈谷に負けて落ち込んでいたものの、７０話時点では仲間の支えにより復活。再びクラスメイトのために頑張ろうとしている。

　一人称は初期では「僕」、刈谷に負けた後は「オレ」

　クラス対抗戦では指定ポイント到達のリーダーとして参加。

・三条桜子

　レベル６で【キャスター】

　ダンエクでのヒロイン兼主人公。ダンエクプレイヤーからは「ピンクちゃん」と呼ばれている。

　淡いピンク色の軽いウェーブした長めの髪。瞳は濃いピンク。

　普段はおっとりしているものの、驚くと小動物のような反応をする。

　赤城と同様に潜在能力が非常に高いが、赤城達以外には能力を見せていない。

　ストーリークリア次第で【聖女】、【ソーサリー】になれるが……

　男子たちにはかなりモテている反面、女子達からは嫉妬され始めている。

　クラス対抗戦ではトータル魔石量のリーダー。

・立木直人

　レベル６で【キャスター】

　長く暗めの髪色をセンターパートにし、メガネをかけたインテリキャラ。

　赤城のルームメイトで、メインストーリーでは相棒として活躍。ＢＬモードでは攻略も可能。

　学業は優秀、家宝の魔法杖を所持し、【ウィザード】になるべく日々頑張っている。

　実家は一色家（子爵位）の士族。

　初期スキルに《聴覚強化》を持っており、耳ざとい。情報収集、分析が得意。

　最近は新田利沙のことが気になっている。

　クラス対抗戦では指定クエストのリーダー、かつ磨島の参謀として参加。

・大宮皐

　レベル１２で【シーフ】。データベース上ではレベル５の【ニュービー】

　肩くらいまである黒髪を両サイドで縛っている。三つ編みにしていることもある。

　くっきりとした紺色の瞳。元気が良い女の子。

　颯太にはサツキと呼ばれており、パーティーを組んでいる。

　正義感が強く、折れかけたＥクラスを立て直すべく奮闘している。

　ダンエクのストーリーではクラス委員長をやり、上位クラスから目を付けられ退学に追い込まれた。

　実家は貴族に仕える士族の、さらに分家。両親には無理を言って冒険者学校に入学。

　【ウィザード】志望であったが、颯太との出会いにより前衛職も興味がでて特訓中。

　クラス対抗戦ではトータル魔石量にてカヲルをサポートする。

・新田利沙

　レベル１２で【キャスター】、データベース上ではレベル４の【ニュービー】

　真っ直ぐの淡い金髪のセミロングで眼鏡ッ娘。やや垢抜けていてキュートというよりビューティーな雰囲気のお姉さん系女子。

　颯太からはリサと呼ばれていて、同じプレイヤーとして共闘関係。

　普段はほんわかして間延びした喋り方をするが、怜悧で観察眼が鋭い。

　ゲームにおいて一番頭が良いという設定の立木直人を超える成績。

　元ダンエクプレイヤー。有名ＰＫＫクランの騎士団長。トレードマークだった漆黒のフルプレートアーマーから“黒の執行者”という異名を持っていた。

　西洋剣術、主に大剣の使い手。

　クラス対抗戦では指定クエストにて立木をサポートする。

・久我琴音

　レベル６、【シーフ】。ただし《フェイク》にて偽装中。

　実は【ローグ】でレベルも２０を優に超えている。

　髪と瞳は暗い紫色。ショートボブ。無口で大人しく目立たない。

　いつも眠そうな目をしていて朝は機嫌の悪いときが多い。

　実はアメリカの特殊部隊出身。身分を隠して冒険者学校に入学してきた日系アメリカ人。

　ダンエクではメインクエスト「久我の叛乱」のキーとなるクエストキャラ。またヒロインキャラでもある。

　クラス対抗戦ではトータル魔石量グループだったが、抜け出してソロで動いている。

・磨島大翔

　レベル６で【ファイター】

　比較的ガッチリした大きい体格で、髪はワックスで丁寧にセットされている。

　赤城と並んでＥクラスの二大リーダの一人。

　新潟の準爵の士族で、上流階級の意識がある。姿勢はよく、プライドも高い。

　颯太を軽視する発言が度々ある。

　クラス対抗戦ではリーダーとしてＥクラスの精鋭を率いて指定モンスター討伐に参加。

・月嶋拓弥

　レベル？？？　ジョブ？？？

　エリートの学校には似つかわしくない金髪のロン毛、着崩してズボンのポケットに手を突っ込みながらダルそうに話す。チャラ男っぽい。

　元ダンエクプレイヤー。攻略クランやＰＫなどゲーム情報に詳しい。

　成海颯太のことはまだプレイヤーだと分かっていない。

　リサには共闘の呼びかけをしている。

　ゲーム時代からカヲルのファンで、口説こうと接近中。

・村井一

　１年Ｅクラス担任。

　冒険者大学卒で、冒険者高校のＯＢ。実力者。

　生徒には関心が薄く、淡々と指導している。

☆１年生上位クラス

・世良桔梗

　１年Ａクラス首席。ダンエクでは次期生徒会長。

　侯爵家の嫡女で【聖女】の分家。将来は【聖女】の後継者として育てられている。

　腰まで届く長い銀髪に、すみれ色の大きな瞳。

　颯太がゲーム時代から憧れていたヒロイン。

　《天眼通》や《天使の祝福》など他にも多数の強力なスキルを所持するチートキャラ。

　防具もチート級のものを持っているが、目立つため普段は着ていない。

　普段から“聖女機関”の巫女をお供として連れている。

　ダンエクでは女性プレイヤーでスタートするとラスボスとなるシナリオもある。

・天摩晶

　１年Ａクラス次席。

　特定の条件を満たせば仲間となりヒロインにもなる。

　天摩商会会長の一人娘。魔道具やＤＵＸというブランド武器を販売している。

　天摩家は数々の武器開発の功績により男爵家となった新興貴族。しかし旧貴族派。

　常にフルプレートメイルを着ていて誰も素顔を知らない。

　近接戦闘能力なら冒険者学校１年の中では随一。怪力スキルを所持。

　ダイエットの話に強い関心を持っており、ダイエットに成功した颯太に近づく。

　学校内でも黒ずくめの執事達を従えている。

・周防皇紀

　１年Ｂクラス。侯爵家の次男。Ｂクラスのクラスリーダー。

　腰まで届くほど長く真っ直ぐな黒髪。中性的な顔つき。胸には貴族のバッチや勲章をいくつも付けている。

　周防家は由緒ある家柄で、旧貴族の代表格。いくつもの大企業を経営し、多くの貴族とも付き合いがある。

　新貴族と激しく対立しており、裏では刈谷を使ってＥクラスに圧力を掛けている。

　ゲームでは中ボスとなり、主人公と幾度も戦うことになる。

・鷹村将門

　１年Ｃクラス。男爵家。

　攻略クラン「十羅刹」のクランリーダー、鷹村楓の嫡子。

　お供に物部芽衣子を連れている。

・物部芽衣子

　１年Ｃクラス。

　ショートヘアでおでこがチャームポイントの可愛い女の子。

　鷹村将門の士族の家系で、物部家は攻略クラン十羅刹の創設時から付き従っていた。

　兄は十羅刹の幹部の一人。

・刈谷勇

　１年Ｄクラス。レベル１１。

　髪はくすんだ金色、瞳は黒。

　身長１９０ｃｍほど。体格が良く、大剣使い。短慮に見えて計算高い。

　髪は短く刈り上げている。硬派で目つきも鋭い。

　闘技場の決闘にて赤城悠馬を打ち破った。

　Ｄクラスからは意外と慕われており、リーダー的存在。

・間仲善

　１年Ｄクラス。レベル８

　いつもＥクラスまできて攻略クラン“ソレル”に所属する兄の自慢をしている。

　最近はＤクラス内でも地位が高くなっている模様。

　トータル魔石量を指揮している。

☆冒険者学校の上級生

・相良明実

　３年Ａクラス首席。伯爵家。

　現生徒会長で八龍が一人。

・楠雲母

　２年Ａクラス。男爵家。御神遥の姪。

　ウェーブのかかった碧色の長い髪。凛として気が強そうな目と小ぶりな鼻。

　いつも口元を黒い羽扇子で隠している。

　シーフ部次期部長が内定しており、八龍が一人。

　攻略クラン“くノ一レッド”に所属。

　副リーダーから預かったクランパーティーの招待状を颯太に渡すために接触した。

　大の男嫌い。

　ゲームでは三条桜子と親密な関係を築いていた。

・一色乙葉

　赤く艶やかな長い髪。紫紺の瞳。

　２年Ａクラス首席。子爵家で旧貴族の派閥。

　第一魔術部の部長にして八龍が一人。

　立木が仕えている貴族家の嫡女。

　海外にも名が轟くほどの才能で、固有魔術《テレポート》を持っている。

☆世界設定

・成海颯太がいる日本、または世界

　日本はダンジョンの出現により第二次世界大戦の泥沼を回避。戦前の政治システムがそのまま残っており、財閥や貴族が権力を握っている。

　冒険者上がりの貴族と従来の貴族が抗争を繰り返しているため、治安は現代日本と比べると良くはない。世界では冒険者崩れがテロや犯罪に加担し、深刻な社会不安や混乱を引き起こしている。

　世界の国々は冒険者育成や冒険者関連情報の収集に心血を注いでいる。

・冒険者

　ダンジョンに入る者の総称。

　座学を受け、試験を合格することでダンジョン入場許可が得られる。１５歳以上かつ中学卒業した者が対象。例外として冒険者中学の生徒は入場が許可されている。

　ダンジョン内では腕に専用端末を付けることが義務付けられている。本人確認、チャットや電話、ＭＡＰ閲覧、ＧＰＳ機能が付いている。冒険者学校の腕端末には他にも様々な機能が追加されている。

　ダンジョンでモンスターを倒し、レベルアップをすることで常人の域を超えた力を得ることができる。しかし大半の冒険者はレベル４以下である。

・冒険者学校

　日本が誇る冒険者を育成するための教育機関。

　中等部は将来有望な児童を選抜して入学許可を与える完全推薦制を取っている。

　高等部からの入学生は１クラス分のみ募集。ただし受験倍率は優に１００倍以上の超難関。

　高等部はAクラスからEクラスまであり、成績によってクラス分けされている。外部生はEクラススタート。

　冒険者大学はＡクラスで卒業できた者のみ進学可能。官僚候補として育成される。

・冒険者ギルド

　日本に在籍する全ての冒険者とダンジョンの管理、冒険者やクラン同士のトラブルの対処、魔石やダンジョン産素材の売買などを行っている。

　本部がある巨大ビルは冒険者学校に隣接する形で建っている。

　中は冒険者ギルドの他に、民間の商店施設や宿泊、公共の図書館、医療施設なども入っており、複合ビルとなっている。

・ダンジョン

　２０世紀初頭の地球に酷似した世界に、突如現れた異界への入り口。ダンジョン中には地上にはいない生物が溢れている。

　日本にダンジョンは一つしか出現してないが、世界には確認できているだけでも十数個ほどある。

　モンスターを倒すと魔石を落とし、一定以上倒すとレベルが上がる。このときレベルを多く上げるほど肉体が強化され、超人じみた力や魔法、スキルが手に入る。

　魔石はエネルギー資源にもなり、日本のエネルギー事情も大きく変化させた。

　世界ではダンジョンの所有権を巡り、国家間紛争が幾度も起こっている。

・クラン

　冒険者が目的を持って作る集団、または組織。ダンジョン最前線の攻略を目的とする大規模な攻略クランから、同じ思想の下で集まるクラン、レジャーやサークル感覚で作られたクランまで広義に渡る。

　日本だけでなく世界にも様々なクランがある。

　　・カラーズ

　　　クランリーダーは田里虎太郎。

　　　日本で一番勢いのある攻略クラン。現在は１２８名がカラーズに在籍。

　　　五つの下部組織があり、それぞれの色をクランの旗色にしてカラーズへの昇格を競い合ってる。下部組織を全部含めると千人以上の大所帯。

　　・ソレル

　　　カラーズの三次団体。二次団体の“金襴会”の下部組織。

　　　成海兄妹とは因縁のあるクラン。

　　・くノ一レッド

　　　クランリーダーは御神遥。芸能界でも活躍中。

　　　女性の【シーフ】だけで構成されており、赤色で露出度が高い忍者スーツをクランの指定制服にしている。

　　　家と伝統を重んじ非常に保守的。

　　　諜報活動や冒険者ギルドの運営にも深く関わっている。

　　　楠雲母も所属している。

　　・十羅刹

　　　クランリーダーは鷹村楓。新貴族の旗頭的存在。

　　　貴族間の闘争が絶えない超武闘派クランでもある。

　　　十人の幹部と十の組織により構成されている。規模は日本最大。

・聖女機関

　この国に一人しかいない【聖女】を守るための機関。

　ヒーラーを保護し育成する機関でもある。

　様々な隠匿技術や情報を所有しており、冒険者界隈だけでなく政界、財界にも大きな影響力を持つ。

　世良桔梗も所属している。

・プレイヤー

　ダンジョン恋愛ＶＲＭＭＯ、ダンジョンエクスプローラークロニクル。通称「ダンエク」をやっていた者のこと。

　颯太のいる世界に行くためには超難度の“次期大規模アップデートのテスター参加権”を勝ち抜く必要がある。

　７０話時点で判明しているプレイヤーは、成海颯太、新田利沙、月嶋拓弥の３名のみ。

☆ジョブ

　特定のジョブに就き経験値を稼げばジョブレベルが上がり対応するスキルを習得することができる。基本的にレベル１の状態では【ニュービー】

・初期ジョブ

　何もジョブチェンジしていない場合のジョブ。基本的にレベル１の状態では【ニュービー】となる。

・基本ジョブ

　初期ジョブからレベル５以上でジョブチェンジできる。最初からこのジョブの場合もある。以下の三つしかない。

【ファイター】　【キャスター】　【シーフ】

・中級ジョブ

　基本ジョブのジョブレベルを一定以上上げると就くことができるジョブ。（）は未公開ジョブ。

【ウォーリア】　【プリースト】　【アーチャー】　【ウィザード】

（ナイト）（魔法戦士）（ローグ）

・上級ジョブ

　中位ジョブのジョブレベルをいくつか上げ、対応するジョブチェンジアイテムと一定のステータス適正が必要。

　【聖女】【侍】

　（アサシン）（狂戦士）（シャドウウォーカー）（機甲士）（ソードダンサー）（ソーサーラー）（エレメンタラー）（勇者）（魔王）

・最上級ジョブ

　最終的なジョブ。対応する上級ジョブをカンストさせ、特殊なクエストをクリアする必要がある。ウェポンマスターは颯太が、暗黒騎士はリサがゲームで使っていた。

　（ウェポンマスター）（暗黒騎士）（サマナー）

☆スキル

　ジョブに就きジョブレベルを上げていけばスキルを覚えることができる。

　特殊クエストの遂行やスクロールアイテムを使うことで覚えられるスキルもある。

・スキル発動法

　念じただけ発動する「オート発動」と、対応する魔法陣またはスキルモーションを行うことで発動する「マニュアル発動」がある。後者は再使用までのクールタイムが短く、威力も若干高くなるメリットがある。

　プレイヤーならば「マニュアル発動」でダンエク時代のキャラが覚えていたスキルの行使も可能。ただし低レベルでまともに使えるスキルは少ない。

　新田利沙が《オーラ》の流れを体内で操作し発動する新たなマニュアル発動を発見した。

・エクストラスキル

　上級ジョブ以上のジョブレベルをカンストさせ、４０階にある特殊クエストを完了させることで取得が可能となるスキル。強力なスキルが多い。

　颯太のいる世界では、存在自体知られていない。

「わぁー。こんな場所、本当にあったんだねっ」

「誰もいないのは静かでいいけど～。やっぱり寂しいものね～」

「何か掘り出し物はないかなぁ～ふんふん♪」

　１０階ゲート前広場。今日はサツキとリサがジョブチェンジしたいということで付き合いのため来ている。妹はこの店の物色が大好きらしく、当然のようについてきた。

「こんにちは！　また来たよ、お姉さんっ！」

「あらぁ、いらっしゃい。今日は“アレ”を持ってきてないのかい？」

　すっかりアレ中毒になっていらっしゃる。フルフルは何らかの理由で特定の階層にしか移動できないと言っていたので、欲しい物は冒険者に依頼するしかない。しかしゲームのときと違ってこの店には冒険者がほとんど来ない上、ブラッディ・バロンを倒しているのは恐らく俺達のみ。来る度に次のアレはどうなのかと催促されているのだ。

　とはいえ、ブラッディ・バロンを呼び出すためのアイテムを集めるだけでも大変なのだから毎回持ってこられるわけがない。そう伝えるとフルフルは人差し指を口元にあてて一瞬考える仕草をしたと思ったら「ちょっと待ってなさいな」と言って店の奥へすっ飛んでいく。そしてゴツくて巨大なハンマーを手に持ち戻ってきた。

　それは……ブーストハンマーか。魔力を込めてハンマーを振るうと後ろ側が爆発して衝撃を高めてくれるマジックウェポンの一種。しかも炎のエンチャントがかかっているのか、時折赤く揺らめいている。買うとなると１０００リルはくだらないだろう。

「これなら１５階のアンデッドなんてイチコロだよぉ」

「まぁそうですけど……え、くれるの？」

　そのかわりアレ、つまりは[怨毒の霊魂]を１０個以上持ってこいって、そうまでしてあの不気味な物体を食べたいようだ。報酬先払いの新たなクエストと考えていいのだろうか。しかし、これがあれば親父とお袋も処刑場の早期デビューができるかもしれない。

　もう１つ貸してくれないかとずぅずぅしいことを言ってみると、なんと倍の数を要求してきた。どんだけ食いたいんだ……

「そんなのってズルいよっ！」

　今後しばらく続くであろうモグラ叩き生活に戦々恐々としていると、商品棚のほうから悲痛な叫びが聞こえてきた。何事だろう。

「きっと沢山連れてくるよ～特にＡクラスは」

「あんなにみんなやる気をだして……練習も頑張ってたのに……」

　クラス対抗戦の裏ルールの話か。Ｅクラスには秘密にされているけど、実は対抗戦では助っ人の参加が暗黙の了解として認められている。高位冒険者の人脈を持っていることも実力の一部とか言っているけど、それはただの口実。従者を多く従える貴族が常に勝てるようなルール作りを強引に推し進めただけだ。ついでに人脈がなく従者もいないＥクラスを叩くためのものでもある。

「助っ人がありっていうことは、私も出られるのかな？」

　妹がこてりと頭を横に倒し、どさくさに紛れて出場できるのかと聞いてくる。

「面倒な奴らも出てくるからお前は駄目だ」

「サツキねぇリサねぇ！　おにぃがまた私を除け者にしてくるのっ！」

　そーら始まったぞ。泣きついて俺を悪者に仕立て上げようとする悪癖が。

「でも他のクラスが助っ人頼むなら～私達も呼んでいいのかな～？」

「華乃ちゃんが来てくれたら、それは助かるけど」

　肯定っぽいセリフを二人が言うと、言質は得たとばかりに抱き着き二人に見えないようにニヤリとする妹。だが今回だけは認めるわけにはいかない理由もある。

「うちのクラスにはカヲルだっているんだ。バレたら面倒なことになるんだぞ」

「ふんっ。あの女に人を見る目なんて無いし。絶対に参加するからね！」

　駄目だと言っても「これは将来を見据えた社会見学だっ」とごね始める。あぁ言えばこういう。このままだと黙ってこっそり参加してしまいそうだし、それなら条件を付けて短時間の見学くらいは許したほうがいいのかもしれない。正体を隠すアイテムでも買っていくか。

「でもＡクラスってどれくらいの実力なのかなっ。レベルが凄く高いって聞くけどっ」

「私達が相手にするのは～ＡクラスではなくＤクラスだよ～？」

「そ、そうだよね。一歩ずつ頑張らないとねっ」

　恐る恐るＡクラスの実力を聞いてくるサツキ。ＡクラスはＥクラスと比べてレベル差が激しく、助っ人の存在があろうとなかろうと勝てる要素はほぼ皆無。レベル２０の俺が暗躍したとしても無理だろう。そも、今の時点で彼らを相手にする必要もなく、まずは地力を付けてＤクラス打倒を優先すべきなのだ。

「Ｄクラスだと助っ人は誰を呼んできそうかなっ？」

「いつも話してるクランじゃないかな～。教室で自慢してた……“ソレル”だっけ」

「ソレル？　私の足を斬ったバカクランの！？」

　Ｄクラスの奴らは事あるごとにＥクラスの教室まで来て、ソレルという攻略クランに身内がいるのだと自慢していた。しかしそのソレルは以前、妹の足を斬りつけ囮にしたメンバーもいる因縁の敵でもある。

　向こうは俺達のことなんて覚えちゃいないかもしれないが……出会ってしまったらこっそりブチのめすくらい許してもらえないだろうか。Ｄクラスの何人かにもお仕置きしておきたいし、良い機会かもしれない。念のため鑑定阻害か認識阻害系あたりを買っておくか。

　奇怪なアイテムが陳列している商品棚から、目当てのアイテムを物色する。

　まず手に取ったのは素朴な見た目の[道化の仮面]。これは鑑定系の魔法から身を守る効果がついている、ありふれたマジックアイテムだ。ステータスを偽装する《フェイク》とは違い、鑑定を直接阻害し失敗させる効果がある。上位である《鑑定》にもある程度抵抗力を持っているが、何度も使われると突破されてしまうのでそこは注意したい。

　そしてダークホッパーという巨大なカエルの皮でできた焦げ茶色のローブ。これを着た者は存在感が希釈され、記憶しにくくさせたり気付かれにくくなる効果がある。ただしモンスターには効かない対人専用のアイテムだ。ダンエクでは初心者ＰＫ御用達ローブと言われていた。

　どちらも狩りをする上では必要がなく購入を後回しにしていたけど、今後起きるかもしれない対人戦を考えれば認識阻害系アイテムの一つ二つは持っておいたほうがいいだろう。ということで人前に出たいならこれを付けろと妹に言ってみる。

「どっちもダサいっ！　これ仮面っていうかただの古びた木のお面だよねっ。こっちのは茶色の皮に首を通す穴が開けてあるだけの貫頭衣だし。もっと可愛いのが良い！」

　確かにダサいかもしれない。が、正体を隠す目的で買うのに可愛くしてどうするだと多少の押し問答をしながら文句たらたらな妹をなんとか説得。今は手持ちのリルがそれほど多くないので妹の分だけ購入することにした。

　華乃はしばらくふて腐れていたものの、今はサツキとジョブチェンジの話に花を咲かせている。そんな姿を微笑ましく見ているとリサが話しかけてきた。

「ゲームだとあの仮面もローブもほぼ無価値だったのにね～。私もいざという時のために揃えておこうかな～」

「何をするにも命がかかっているからな……そういえば、聞きたいことがあったんだ」

「ん～何かな～？」

　リサは頭の回転が速すぎるせいか度々話が飛んだり、よく分からないジェスチャーをしてくることがある。なのでこれからも連携ができるようしっかりと意思疎通をしていきたい。

「種目決めのとき、どうして俺に到達深度をさせたかったんだ？」

「ふふっ。一番適任だというのもあるけど～……」

　クラスで俺が到達深度をやらされる流れになったとき、見かねたサツキが待ったを掛けようとした。それをリサが手で抑え、再び流れに任せたことがあったのだ。

「多分、Ａクラスの到達深度にはあの“首席”が参加してくるはずでしょ～？　彼女がどっちの方向に進むのか、ソウタに見極めて欲しいの」

「次期生徒会長となり赤城君の味方になるか……ピンクちゃんのライバルとなり敵になるか、か」

　冒険者学校１年の首席で次期生徒会長の世良桔梗。日本では数少ない【聖女】の血族であり、侯爵位を持つ名家の令嬢だ。余談だが俺の最推しのキャラでもある。

　ゲームでは赤城君、もしくは男性カスタムキャラで攻略可能で、ヒロインとして一、二を争うほど人気があるキャラであった。その反面、三条さんもしくは女性カスタムキャラでプレイすると厄介な敵として登場するシナリオもある。

　今の俺は世良さんに接近して攻略しようなんて考えていないし、遠目から愛でるだけで十分。赤城君か他の誰かが彼女を攻略するというのなら任せればいいと思っていた。だが、この世界の主人公が女性だった場合、世良さんは大災害を引き起こす可能性もある。そのことをすっかり失念していた。

「ソウタは男性キャラでしかプレイしたことないから、色々と情報が抜けているのよね～」

「まぁな……時すでに遅しだ」

　ＢＬモードや女性主人公に詳しいリサがいてくれて正直助かった。俺だけではこの世界を上手く乗り切れなかっただろう。

「あとは～首席に視てもらうのもいいかもしれないわね」

「そんなスキルもあったな」

　最強ヒロインとも言われている世良さんは強力な固有スキルをいくつも持っていて、そのスキルの一つに対象の未来が見える《天眼通》という魔眼スキルがある。初めて会うような人にでもその魔眼を気軽に使い、未来を言い当てる癖があるのだ。どうせなら視てもらったらいいと言う。

　もちろん興味はある。《天眼通》はかなり詳細に未来が視えるようで、ゲームでもキャラ育成やイベントの進行具合を占う点で重宝していた。本当はリサも視てもらいたかったようだが、自身が主人公の可能性も捨てきれないため次期生徒会長にはあまり近づきたくないとのこと。随分と慎重だな。

　しかし俺の未来か。何になってるのだろうか。大富豪になって豪邸のプールで美女とキャッキャウフフしてたりしないかしらん。

「でも到達深度にはＢクラスのあの人も参加してくるから気を付けてね～？　色々と気難しそうだし」

「あぁ。アイツを倒すのは赤城君達だ。俺はひっそりと見守っておくことにするよ」

　Ｅクラスいじめの主犯格の一人、１年Ｂクラス周防皇紀。強烈な貴族主義、かつ選民思想の持ち主だ。八龍のいくつかとも繋がっており、裏で刈谷に指示を出しＥクラスに仕向けたのもコイツ。本来はストーリーを進めることで黒幕が周防だと発覚するのだが、俺達はプレイヤーなので当然そのことを知っている。

　メインストーリーでは、いずれのシナリオでも主人公の前に立ちはだかり、何度も敵対し争うことになる。それらを無事乗り越えることができたなら主人公とそのパーティーは精神的にも肉体的にも大きく成長していけるので、失敗でもしない限り俺が介入すべき相手ではない。

　少なくとも現時点の周防は主人公ではなく次期生徒会長にご執心なので、Ｅクラスを本気で潰そうなんて思っていないはず。今回のクラス対抗戦は様子見で良いだろう。

「さくっと参加賞だけ頂いて後は好きに行動するさ」

「ふふっ。ソウタなら何の問題もないよね～」

　到達深度は首席が率いるＡクラスとトップ争いをするならともかく、参加賞だけを狙うなら俺にとって実にイージーな仕事だ。むしろ待ち遠しいまである。ゲームで推していた次期生徒会長に間近でご対面できるだなんて、何だかドキドキが止・ま・ら・な・い♪

「おにぃー【ローグ】になったよー！　……って。何でそんなくねくねしてるの」

「ほんとにそんなジョブあったんだねっ、凄いよ華乃ちゃんっ！」

　どうしても《シャドウステップ》を覚えたいということで、その前提ジョブとなった妹。【ローグ】はＤＬＣにより追加されたものなので世間一般では知られていないのだろう、サツキが目を輝かせて「凄い凄い」と連呼している。

「それじゃ俺もやってくるか」

「私もジョブチェンジしてこよっと～」

　もうすぐ始まるクラス対抗戦。赤城君やカヲル達は無事に上手くやれるだろうか。クラスメイト達も頑張っているようだし少しは報われて欲しいものだ。

「指定モンスター班、俺についてこいっ」

「みんな行こー！」「おうっ！」

　ホームルームが終わり放課後になるや否や磨島君が「ダンジョンに行くぞ」と声を上げ、クラスに号令をかける。後に続くは磨島君と一緒にダンジョンに潜っているＥクラスの精鋭達。常日頃からパーティーを組んでいればどう動けばいいか理解が進み、連携も取りやすくなる。強敵相手でも好成績が期待されているグループだ。

「あたしも磨島君と一緒のグループが良かったなぁ～」

「あんたレベル足りてるの？　指定モンスターって指定ポイントの次くらいに大変みたいだし」

「なら立木君がリーダーやってる指定クエストとか狙い目だったのかなぁ」

　近くで座っている女子が愚痴を零す。磨島君はレベルが高く、リーダーシップもあるためクラスではとても人気が高い。彼の所属するパーティーに入りたいという人が後を絶たないのもそのせいだ。

　もう一つの人気パーティーである赤城君達はどうしたかというとメンバー四人を各種目に分散させ、それぞれグループリーダーをやってもらうことになっている。責任感が強く、頭もよく回る彼らには適任だろう。そのグループリーダー達の席の周りにクラスメイト達が集まっている。

　指定クエストは立木君。指定ポイントは赤城君。トータル魔石量はピンクちゃんとカヲルのところにメンバーが輪になってミーティングだ。

　ちなみにリサは指定クエスト、サツキはトータル魔石量へ配属された模様。各種目の参加者の顔ぶれを見る限り、レベルや能力を上手く考慮して振り分けているように思える。事前に種目希望用紙を配っていたがそれは建前で、裏で立木君あたりが決めていたのかもしれない。

　その立木君はなんだか元気が無く上の空。ぼーっとしているところ、頬をリサにつつかれ慌てている。普段の彼は裏で色々と動き回ることが多いので、多少の気の緩みは温かい目で見守ってあげるべきだろう。

　と、いうような感じで放課後の教室はクラスメイト達が作戦や練習方法を積極的に提案し合い、活気に溢れている。勢い余ってこれからダンジョンに入ろうとするグループもあるようだ。

　一時期はどん底まで叩き落とされ一様に暗い目をしていたというのに、今の皆からは必死になって奮い立とうとする気概を感じる。そんな姿を見ていると陰ながら応援したくなるものだね。

　で。一方の俺はといえば。

　種目をこなす上で特にやることはなく、かといって期待されているわけでもなく。このまま帰っても誰にも気づかれることもなく。つまりは以前と同じくボッチ状態なのである。

　なーんてね。今日は色々とやることがあるので忙しいのだ。別に独り身が寂しいとかそんなのではない。ほんとだよ。

　\*・・\*・・\*・・\*・・\*・・\*

　学校から出ると真っ直ぐに冒険者ギルドへと向かう。１階ロビーの広間から何レーンもあるエスカレーターを上っていくと、以前に魔狼装備を買った防具店が見えてくる。

　その店の入り口では山賊のような髭モジャの大男が似合わない笑顔で客寄せをしていた。あの強面では客が逃げるだけなので誰か愛想のいいバイトでも雇えばいいのに……と思わなくもないが、とりあえず声をかけてみよう。

「こんにちはー、防具を頼んでいた者ですけど」

「おう、あんたか。オヤジィ！　客がきたぞー！」

「デケェ声だすんじゃねぇ！　聞こえてるよ！」

　店主が「オヤジ」と呼ぶと店の奥から出てきたのはつなぎを着た、如何にも気難しそうな白髪の爺さん。ダンジョン金属加工の界隈では結構有名な人らしい。

「どうも。できてますかね？」

「こっちだ、奥にある」

　店の奥にある部屋に通されると作業台の上に沢山のケーブルに繋がれた“小手”が二組あった。どちらも白銀色の光沢で眩しく輝いている。爺さんは付いているケーブルを手早く外すと片方を俺に手渡してきた。

「大量の魔石を消費した甲斐あって上手く加工できてるだろ。付けてみ」

　俺がこの爺さんに頼んでいたのは純度１００％のミスリルの小手。フルフルのクエストを熟すべく大量のアンデッドを狩り、山ほどミスリル合金を運び続けた。本来なら高純度のミスリル合金製武具を作ろうと考えていたのだが、想定以上の量が手に入ったため、どうせならと純ミスリルの武具を作ってみたというわけだ。

　ミスリルの加工には大量の魔力が必要であるものの、モンスターレベル１６の魔石なら腐るほどある。それらを湯水の如く使って魔道具から魔力を流し込み加工してもらった。ちなみにミスリルは融点が高すぎるため、溶かして加工する方法は使えない。

「では早速」

　手に取ってみると、とにかく軽い。まるでプラスティックのオモチャを持っているかのよう。水に浮くとまでいわれる軽さは本当だったようだ。

　次に手に付けてみる。サイズ調整が自由にできる機構となっており圧迫感もなく装着具合もいい感じだ。

「いいですね。これなら痩せても使い続けられそうです」

「久々に純ミスリルを扱ったよ。いい仕事させてもらったぜ」

　ミスリル鉱石の採掘ができるようになるのは通常２０階を越えてから。しかしその階層にいける冒険者は少なく、いたとしても鍛冶師を抱えてる大規模クラン所属の冒険者ばかり。しがない爺に任せてくれる冒険者は減ったと嘆いている。

「そんで、色付けもしていくとか言っていたが」

「この反射は目立つのでお願いできますか」

「魔道具でメッキ塗装でも施しておくか。もう１セットもやっとくから明日にでも取りにきな」

　純ミスリルの光沢は鏡のように反射するので見る人が見ればすぐに分かってしまう。この小手も買うとなれば軽く一千万円を超えるほど高価なので、余計なトラブルを回避するためにも塗装はしておくべきだろう。表面処理や金属光沢のパターンを変えることができる便利な魔道具があるらしいので、それを頼むことにした。ちなみにもう１セットのは妹の分だ。

「しかしこれだけのミスリル合金を取ってくるたぁ、この前まで魔狼防具を着ていた兄ちゃんとは思えないぜ」

　メッキ塗装の依頼書を作ってもらっている間に山賊――のような店主が話しかけてくる。男子三日会わざれば何とやらというし、お年頃の男の子は成長も早いのだ。このままモグラ叩きを続けていけば、成海家全員が純ミスリル防具に覆われる日も遠くはない。

「いい狩場を見つけたので。また取ってきたら精錬と加工お願いします」

「おう。オヤジも喜ぶだろうさ」

　ゲーム知識に該当する鍛冶職人は腕は良いけど面倒な立場だったり性格が破天荒だったりするので、あの爺さんを知れたのはよかった。余計な詮索をしてこないし。

　さて。時間もあることだし、この後はダンジョン内で実験でもするか。

　\*・・\*・・\*・・\*・・\*・・\*

　ダンジョン１階、入り口広場。

　３０分ほど並んでやっとこさダンジョンに入っても中の混雑具合は変わらず。さっさとこの人混みから逃れるためにも適当に歩くとしよう。

　今日やりたい事はリサから教えてもらった“新・マニュアル発動”の実験。自分の部屋でも何度か試していたのだけど、狭い部屋では体を動かす実験にも限度がある。そこでアクティブモンスターがおらず、思いっきり動けるダンジョン１階までやって来たわけだが……

　しばらく歩いてみたものの、ある程度の広さの場所はどこもすでに利用されており休日の公園状態。冒険者学校の生徒でもない一般冒険者は、日頃こうしてダンジョン１階の空きスペースを使って訓練しているため場所の取り合いになっているのだ。

　それでも１０分も歩けば空いている場所の一つくらいは見つかる。３０ｍ四方くらいの空間には誰もおらず、スライムがポヨンと数匹転がっているだけ。ここを使わせてもらうとしよう。

　早速《オーラ》を発動する。オート発動だと全身から気が不規則に放出され周囲に霧散してしまうが、マニュアル発動なら放出に指向性を持たせることも可能だ。見よ、俺のオリジナルスキルを！

「オーラミサイルッ！」

　通常、《オーラ》の有効効果範囲は２０ｍほどだが指向性を持たせれば倍くらいまで飛ばせるようになる。遠くにいたスライムに当てると慌てて飛び跳ねて逃げていくのが面白い。

「スライムごとき相手ではないわっ！　ふぁーっはっは……はぁ。真面目にやるか」

　次は《オーラ》の放出を右腕からのみにしてみる。すると濃密な《オーラ》が右腕だけに集まり、まるで青い炎で燃えているような見た目になる。これができるようになったのもつい昨日のこと。

　近くの岩壁にこの状態のまま手をゆっくりと当ててみる。すると触れた瞬間にピシリと音を立てながら罅が入り、数ｃｍほど押し込むことができた。

「さすが上級職のスキル。ＭＰ使用量はデカいが威力は凄そうだ」

　これは上級職【オーラマスター】が覚える《魔闘術》というスキル。俺のスキル枠には入っておらず、リサから教えてもらった《オーラ》の流れを操作する方法で発動している。貴重なスキル枠を占有しないのは嬉しい限りだ。

　この状態で殴れば無属性魔法がエンチャントされた攻撃となり、同時にこの青く覆われた部分は防御力が大きく増すのでガードにも使える。強敵との戦いでは大きな武器となるだろう。弱点としてはＭＰ消耗が大きいことと、体の一部分しか覆うことができないことだが、そこは用途で使い分けていけばいい。

「それじゃ次は《ハイド》でもやってみるか」

　部屋の中央辺りに座って目を閉じ、先ほどとは違った《オーラ》操作を試みる。通常、人であれモンスターであれ《オーラ》を使っていないときも微弱ながら気が漏れ出ているものだが、《ハイド》はそれを完全に閉じて気配を消す効果がある。モンスターから隠れるときなどには有用なスキルだ。

「無になる……無になる……むぅ……。しかしこれ、自分じゃできているのか分からん」

　完全に閉じれているはずだが一人ではスキルが成功しているのか判別できない。どうしたものかと考えていると向こうからプロテクター装備をした男女が１０人ほどやってきた。胸元には冒険者学校の生徒を示すバッチが付けられている。どこのクラスだろうか。

「ここを使うとしようか。メイ」

「かしこまりました、鷹村様。皆の者、ここを陣とするぞ」

　集団の中心にいる赤毛で長身の爽やかイケメンは、Ｃクラスのリーダーの鷹村将門君か。「十羅刹」というクランを作ったリーダーの嫡子だ。ちなみに十羅刹は貴族との争いも辞さない武闘派攻略クランとして有名で、ゲームのストーリーでも度々登場する。

　その鷹村君の隣にいるのは士族だろうか。ショートヘアでおでこがチャームポイントの可愛い女の子が声を張り上げ指示を飛ばしている。Cクラスはここを練習拠点とするようだ。

　しかし困ったぞ。

（もしかして《ハイド》している俺に気づいていない？）

　想定以上に隠密効果が高くて驚く反面、ここでスキルを解いていいものか悩んでいると、さらにもう一つの集団がやってきた。目立つ男が先頭を歩いているのでどこの集団か丸分かりだ。

　冒険者学校の制服の上に高位貴族を表す金色のバッチと、冒険者階級のバッチ、勲章などを見境なく付けて歩いている。さらに腰に届くほどの長く真っ直ぐな髪と中性的な顔つき。それでいて表情は邪悪に歪んでいる。

「おやぁ？　誰かと思えば“元”首席殿ではないですか」

「……周防」

　Ｃクラスのリーダー鷹村君とＢクラスのリーダー周防が睨み合う――

　――そう。俺の目の前で。

（誰か助けてぇー！）

　ダンジョン１階のとある場所で、周防と鷹村君が向き合う。

「おやぁ？　誰かと思えば“元”首席殿ではないですか」

「……周防」

　周防が仲間と共にずかずかと部屋の真ん中まで入ってきて、あざ笑うかのような顔で挑発する。

　鷹村君は冒険者中学入学試験でもトップの成績を取り、大物クランリーダーの嫡子ということもあって鳴り物入りで中学に入学してきた“元”首席だ。当時は世間的にも大きなニュースとなっていたようだが、今ではＣクラスまで落ちてしまっている。それも周防の謀略に乗せられ敗れ続けたせいだ。

　またＣクラスには鷹村君と共に落とされてきた生徒も多いようで、周防達に恨みのこもった厳しい眼差しを向け始める。

　それを予想していた周防の取り巻きたちも前に出て真っ向からＣクラスと睨み合う。ただしこちらは薄ら笑いを浮かべてだ。

「こんな良い場所はお前らごときには勿体ない。周防様と我らが使うとしよう」

「先に使っていたのは我々だぞっ。無礼にも程があるだろ！」

（……俺が先なんだけどね）

　Ｂクラスの生徒の物言いに鷹村君のお付きのおでこちゃんが激怒。続いてＣクラスの生徒も次々に敵意を露わにして声を荒げる。冷え込むような緊張感から一触即発の状態へ一瞬で移り変わる。

　いきなり入ってきて「どこかへ行け」と言われれば癪に障るだろう。だがこんな所で睨み合って無駄な時間を過ごすくらいなら、さっさと他所へ行って練習に移ったほうが生産的だ。見返すにしてもクラス対抗戦で結果を出せば十分だ。

　それに。中学入学時は鷹村一派のほうが実力は上であったかもしれないが、今ではすでに周防一派のほうが強いはずだ。周防自身も個の戦闘力で言えば次期生徒会長で首席の世良さんに勝るとも劣らない強さを持っていて、ダンエクでもボスとして登場していたのは伊達ではない。何の対策も無しにこの場で戦ったとしてもＣクラスに勝ち目はないだろう。

　Ｂクラスの余裕ある顔つきからして実力差を理解した上で挑発していることが窺える。むしろ、この挑発も周防の策略の可能性すらありえるな。

　それらのことがちゃんと見えているのか、鷹村君のリーダーとしての器量を示す場面だと思うのだけど……集団の後方で周防を睨んだまま動かない。中学時代の因縁についてはゲームでもほとんど語られていないので詳細は分からないが、貴族としての立場や矜持が邪魔をして簡単には引くことができないのかもしれない。思っているより根深いものがありそうだけども――

（さて、俺はどうすればいいんだ？）

　部屋の中央付近で《ハイド》をしたままの俺を尻目に、ＣクラスとＢクラスが罵声を浴びせ怒鳴り合い、それぞれのリーダーも仲間を止めるどころか殺気を放つ始末。ますます収拾がつかなくなってきている。このままでは乱闘になり兼ねない。巻き込まれないようにさっさと逃げだしたいところだけど、動けば隠密効果が解けてしまう。オラ困ったぞ。

「……ところで、そこのゴミは誰ですか？」

　誰にもバレていないと思っていたら、道端に落ちているゴミを見るような目をしながら周防が俺を指差してきた。最初は何を言っているのか分からずキョトンとしていたＣクラスとＢクラスも、目の前に突然見知らぬ人間が現れたかのようにギョッとしている。

（バレてたー！）

　探知系スキルを使われた様子はない。もしかしたら、たくさん付けている胸の飾りの一つに探知アイテムでも付けていたのかもしれない。よし逃げるぞ！

「し、失礼しまっしゅ！」

　後ろから待てだの何だの言ってくるが、素直に待つ馬鹿がいるわけない。全ての面倒事から抜け出すように脱兎のごとくその場から走り去った。

　\*・・\*・・\*・・\*・・\*・・\*

「はぁ……ひどい目に合った。しっかし、どのクラスも仲が悪いもんなんだなぁ」

　ＥクラスとＤクラスが対立しているように、Ｂクラスは首席率いるＡクラスだけでなく、鷹村君が率いるＣクラスとも対立していた。上位クラスを攻略するならそこが付け入る隙とも言えなくもないけど俺は主人公ではないので動くつもりなどない。

「赤城君かピンクちゃんの活躍に期待だな……って、あそこにいるのは」

　新たな練習場所を探しにどこへ行こうかと思案していると、見知った顔がやってきた。我らがクラスメイト達だ。

「あれ。同じ種目だったっけ？」

「ブタオはあの捨て種目だったろ」

「どうせ役に立たないなら私達の荷物くらい持ちなさいよー」

「……ちょっと。そういうのは駄目」

　わけも分からず荷物持ちをさせる流れになりかけたところ、カヲルが割って入り断ってくれる。そのカヲルがいるということはトータル魔石量のグループだろうか。

　確かサツキもこのグループだった気がするけど今はいない模様。代わりに目に入ったのは月嶋君。最近はいつもカヲルにべったりで、他の男子が近寄ろうとしてきても威嚇し追い返してしまう。彼なりに本気なのだろうが、その様子を見ているのはブタオマインド的によろしくないので目をそらしておくことにする。

「三条。南の方で空いている場所があるらしい。案内しよう」

「あ、はい。えーと……」

「三条さん、荷物重そうだし僕が持つよ？」

　もう一人のヒロイン兼主人公であるピンクちゃんも大変おモテになるようで、最近ではアタックする男子を何人も見かける。あのふんわりした可愛さに加え、小動物のような保護欲を誘う雰囲気が初心な男子諸君に刺さるのだろう。

　やはりカヲルとピンクちゃんの二人は、ダンエクヒロインなだけあって美男美女が多いこの学校でも一際目を引く。クラスの男子達も放っておくわけがないと最初から分かりきっていたけど、その反面で女子達のヘイトも順調に高まってきているようだ。

「ちょっと！　色目ばっかり使ってないでリーダーならちゃんと指示してよっ！」

「レベル高いのだって、ユウマ君とナオト君のおかげなのにね～」

　と、いった感じだ。ただでさえイケメン二人と固定パーティーを組んでいるのに、周りの目ぼしい男子生徒も総取り状態となれば女子から嫉妬されるのも無理はない。

　ゲームでのピンクちゃんも序盤は嫉妬イベントに苦しめられていた。上手く彼女らのヘイトを捌かなければクラスメイトの協力が得られず、中盤以降のストーリーに支障が出てしまう。俺ができることといえば……まぁ陰ながら応援するくらいしかない。

　そんな悩ましい問題を抱えているカヲル達トータル魔石量グループは、連携や作戦の確認を行うために手頃な広さの練習場所を探し歩いていたという。先ほど出会ったＢクラスやＣクラスと同じというわけだ。ならば彼女達の健闘を祈りつつ邪魔にならないようこっそり離れ――

「ちょっと。どこに行くの」

　と言いながらカヲルが首根っこを掴んできた。何用だろうか。

「どこって……修行をだな」

「何の修行なの。到達深度が終わったら私達のところに合流してほしいのだけど。時間があるのなら一緒にきて」

「おいおい。ブタオなんていてもいなくても同じだろ」

　やることがあると言っても聞く耳を持たないカヲルに、もっとオレを頼れと胸を張りアピールする月嶋君。何やら面倒なことになってきたぞ。カヲルを口説いているところにあまりいたくはないんだけど……まぁいいか。

　実験なんていつでもできるし、たまにはクラスメイトやカヲルと行動を共にし親睦を深めるのも悪くない。期待されているわけでも役目があるわけでもないのだし気楽にいけばいい。

　クラスメイト達に指示を飛ばし誘導する幼馴染の後ろ姿に頼もしさを覚えながら、背中を丸めてトボトボとついていくのだった。

　Ｅクラス一行は練習場所を求め、ダンジョン１階を練り歩く。先頭はピンクちゃんが歩き、その両隣には彼女の荷物を奪うように持った男子たち。真ん中をクラスメイト達が続き、最後尾にカヲルと月嶋君、そして俺が付いていく。

「オレがデカい魔石をたくさん持ってこれればいいんだけどよォ。目立つと色々と身動きができなくなるから今はまだ無理なんだよなァ」

「……そう。それなら今後に期待しているわ」

　前を歩く月嶋君がいつでも高レベルの魔石を取ってこれるとボヤくように言うと、カヲルはまるで何も期待していないかのように事務的に返答する。しかし実のところ本当のことを言っているかもしれない。

　月嶋君の動向はリサに調べてもらっているけど尻尾は掴めていない。分かっていることといえば普段は仲の良いクラスメイトと外で遊んでばかりいて、ダンジョンにほとんど潜っていないこと。にもかかわらずレベル上げは順調らしい。

　その報告を初めて聞いたときは意味が分からず困惑したものだが、今なら大方予想は付く。恐らく“何か”を召喚し、単独で狩りをさせているとかだろう。その方法ならダンジョン外にいてもレベルを上げることはできる。

　もちろん問題は山ほどある。高レベルプレイヤーが用いるような召喚獣、エレメンタルはマニュアル発動で呼び出しただけでも膨大なＭＰを使い、召喚が成功しても低レベルでは維持することすら不可能。またゲームにおいて召喚したものは基本的に細かく命令しないと動かないという性質がある。

　これらの制約を突破できたとして、監視もせずに強力な召喚獣を好き勝手暴れさせていたら一般冒険者から報告の一つくらい出てくるはず。だけどそんな情報は流れていない。

　ダンエクでの常識で考えれば普通は無理だと結論付けたいところだが、ゲームが現実化したことで問題点をクリアできる手段や抜け道が見つかった可能性もある。今のところ候補となる召喚魔法はいくつか思い浮かんでいるのでその辺りはリサと考えを擦り合わせておきたいところだ。

　そんなことをぼんやり考えて歩いていると前方で丁度いい広さの場所が見つかったと声が上がる。

「三条、これくらいの広さがあれば十分じゃないか」

「そうですね。ではここを練習場にしますか」

　十人程度が自由に走り回っても余裕あるほどの広い空間。入り口からそれほど離れていないのにこんな良い場所が見つかったのはラッキーだ。早速各々が適当な場所に荷物を降ろして準備を行う。

（といっても俺は何にも持ってきていないんだが。何をすればいいのやら）

　しばらくどうするのか見ているとカヲルとピンクちゃんを筆頭に二つのグループに別れ始めた。トータル魔石量は参加人数が一番多く、全員で動いて戦うのは効率が悪いと判断したのだろう。俺はカヲルの方にでも入っておくか。

　それで今話し合っているのは誰がどの役割をやるか、らしい。一番大変なのは敵の攻撃を一手に引き受ける盾役、つまり“タンク”といわれているロール。危険で負担も大きいため誰もやりたがらないのは当然といえる。

「でも～レベルが高い三条と早瀬がタンクをやるべきじゃない？」

「無駄に高いそのレベルが役に立つときだよねー」

　案の定、女子達が二人を槍玉に挙げる。それでも【ニュービー】と基本ジョブしかいない集団なら、一番レベルの高い者にタンクをやってもらったほうが安定するのは確かだ。

「分かったわ。その代わり、私とサクラコの指示には従ってほしいの」

　カヲルとピンクちゃんが互いの顔を見て頷き、タンクを買って出る。ここは大変なロールを請け負ってでも結束を高めていきたいという狙いなのだろう。女子達も二人を嫌うあまり無駄に反抗的な態度を取っていても自らの首を締めるだけ。一団となって挑まなければ上位クラスには善戦することすら難しいのだから。

（でもまぁ、サツキや月嶋君がどれくらい動くかにもよるのか）

　結果的に勝てないまでも善戦ができればＥクラスの重苦しい雰囲気が改善することは間違いない。それはサツキが願ってやまないことだ。またゲームではクラス対抗戦で結果を出せばヒロイン達の好感度を上げられるボーナスがあった。それを目的にカヲルを口説きたい月嶋君が暗躍することも十分考えられる。

　一方で上位クラスに行くことに興味なんてなく、本気で攻略したいヒロインがいるわけでもない俺は好きに行動させてもらうとしよう。

「それでは陣形と連携確認を……」

「落ちこぼれ共、どけよ！」

「ここは俺等Ｄクラスが使うことにする！」

　ピンクちゃんが練習の説明しようと声を上げようとするとＤクラスの連中がぞろぞろと広間にやってくる。こんな感じのさっきも見たぞ。もしかしてこの学校には下位クラスに喧嘩を売るときにこのようにしろという習わしでもあるのだろうか。

　先陣切って大声で罵倒してきたのは……間仲じゃないか。アイツとソレルにいる兄は俺の懲罰リスト最上位に位置しており、いつお仕置きしてやろうか虎視眈々と機会を窺っているところだ。

「Ｅクラスがこんな良い場所使うとか、少しは遠慮しろよ」

「むしろ誰に勝つ気で練習してるのか気になるよね」

「もしかして劣等クラスのくせに俺等に勝とうとかしちゃってるの？」

　入って来るや否や好き放題に罵ってくるＤクラス達。先ほどＣクラスとＢクラスが言い争っていたのと同じ状況だ。違うといえばＥクラスの皆が誰も文句を言わず黙って俯いていること。先の闘技場での出来事で実力差を思い知ったせいだろう。

　月嶋君も目の前で煽られているにもかかわらず何も言わずにいる。てっきり短慮な性格かと思いきや、実は冷静な人だったりするのかね。

　だが何も文句を言わないことをいい事にＤクラス連中はますます調子に乗って挑発を重ねてくる。

「なんなら俺達Ｄクラスと勝負でもするか？　そうだな……うちの第三剣術部に雑用係が欲しかったんだよなぁ。そこの青髪とピンクの髪。お前らは負けたら俺等の雑用でもしてもらおうか」

「なっ、そんな理不尽な要求を呑めるとおもっているのかっ」

「三条さん、僕の後ろにっ！」

　間仲が下卑た顔でカヲルとピンクちゃんの腕を掴んで引き寄せようとする。これにはさすがに我慢ならなかったのか取り巻き男子達が反発して割って入る。そのおかげでピンクちゃんは難を逃れたが、誰も守らなかったカヲルは腕を掴まれてしまった。

（……そういえば。カヲルの個別シナリオにもこんなシーンがあったな）

　あの手この手で色んな名目を作ってカヲルを都合の良い女にしようとする間仲に対し、ブタオがブチ切れて勝手に勝負を受けてしまうイベントがあったことを思い出す。

　ちなみにこの勝負に負けるとカヲルはいいように扱われ攻略不可能となり、バッドエンドに一直線。勝ったら“プレイヤー”はカヲルの好感度アップなど美味しいボーナスを獲得できるが、勝手に勝負を受けてしまったブタオはクラスから要注意人物に指定され、忌み嫌われる存在となる。

　つまり、この勝負は勝っても負けても俺にとって損しかないのだ。

　月嶋君がこちらを見てニヤニヤしている。ゲームのブタオと同じように行動するとでも思っているのだろうか。カヲルを口説きたいのなら、むしろこういうときこそ矢面に立って守ってあげるべきなんじゃないのかね。そら見ろ。間仲に腕を捕まれ少し震えているじゃないか。もしかしたら闘技場でのことがトラウマになっているのかもしれないな。大事な仲間がボロボロにされたのだから無理もない。

（分かっているさ。落ち着けって）

　俺の中のブタオが「カヲルを助けろ！」と騒ぎ出すので一呼吸置いて落ち着かせる。目の前で女の子が困っているというのに黙っていたら、男が廃るってもんだよな。多少都合が悪い未来が待ち受けていようとも俺ならばどうとでもなる。

　よーし、やってやるぞぉ！

「あぁ～その。この子も困ってるから……」

「豚がしゃしゃり出てくるんじゃねェ！」

　一歩前に出てやんわり止めようとすると、間仲は躊躇なく頬に目掛けて拳を繰り出してきやがった。今の俺からすればこの程度のパンチを躱すのは造作もないことだが避けると怪しまれてしまう。どうせ大したダメージもなさそうなので喰らっておくとしよう。

「ぶへらっ」

「颯太っ！」

　ＶＩＴが大きく上がったおかげで痛くも痒くもないものの、勢いに持っていかれて数ｍほどぶっ飛ばされてしまう。にしても、俺のレベルがデータベース通りの３ならば結構なダメージが入っていたパンチだったぞ。全く容赦を感じない。

　今まではＥクラスに対しては《オーラ》での威圧のみだったのに、とうとう暴力まで解禁してきたか。これはクラス対抗戦の結果次第では教室でも酷いことになりそうだ。

　どうしたもんかと考えながら砂ぼこりを払って起き上がろうとすると、驚いたことにカヲルが間仲の手を振り切って駆けつけてくれた。毛嫌いしている相手にでもこうして手を貸してくれるとは、やはり根は優しい子なのだろう。

「これくらい大丈夫だ。それより……」

「そ、そうね。みんな行きましょう。こんな勝負受ける必要はないわ」

「待てよ腰抜け共、話はまだ終わってねーぞっ！」

　カヲルが移動を促すと、間仲が《オーラ》を放って立ち塞がる。この様子だと単に絡みたいだけでなく勝負に持ち込むよう指示でも受けているのかもしれない。そんな見え見えの恫喝にもＥクラスのみんなは威圧され硬直したかのように尻込みし動けなくなってしまう。俺を殴って暴力を見せつけたのは効果的だったようだ。

　そんな中、一人だけ悠長にどこかへ行こうとしているクラスメイトがいた。月嶋君だ。

「お前！　何勝手に逃げようとしてんだっ」

　再度《オーラ》で威圧しても止まらない歩みに、業を煮やしたＤクラスの男子生徒が肩を掴みにかかる。月嶋君は捕まえに来た手をするりと躱し、代わりに顔を掴んでそのまま持ち上げてしまった。

「ぐああぁああ」

「おいおい、勘違いするな。逃してやんのはこっちなんだよ」

　結構な力で締め上げているのか苦痛の声を漏らし暴れるＤクラスの生徒。格下だと思って舐めていたＥクラスに逆に暴力で返されるとは思ってもみなかったのだろう。Ｄクラス全員が驚きのあまり言葉を失っている。

　あまり派手に喧嘩を売ったとなれば背後にいるＢクラスまで出てくる危険性もある。そうなれば何が起こるか予測できなくなる。

　Ｂクラスは現時点でこそＡクラスに劣る位置づけにいるものの、実力差はほぼ無いといっていい。特にＢクラスをまとめている周防の実力は本物だ。多数の強力なスキルを所持し、戦闘センスもそこらの生徒とは一線を画す。今の俺でもゲーム知識チートをフル稼働させなければ勝機はないだろう。当然、プレイヤーの月嶋君もそれを承知のはず。

　それにだ。仮にＢクラスや周防と戦える実力が月嶋君にあったとしても、赤城君やカヲル達がほとんど育っていない現状ではＥクラス全員を守り切ることなんて不可能。Ｂクラスには刈谷以上の猛者がゴロゴロいるわけで、その内の一人でも月嶋君のいないところに乗り込んで来られたら手に負えなくなる。それとも何か策があるのだろうか――って。そら来たぞ。

「おい、お前たち！　何をやっている！」

　たまたま通りかかったと言うＢクラスの生徒が険しい顔で割って入ってきた。それも恐らく言い訳で、Ｄクラスに指示を出したことが実行できているか近くで監視でもしていたのだろう。

　すぐに《オーラ》を放ち威圧するが、それも月嶋君には効いてないようだ。

（あのＢクラスの生徒はレベル１２から１５ってところか。月嶋君もそれくらいレベルを上げているのか、はたまた痩せ我慢なのか）

　月嶋君は興味を失ったかのように掴んでいた男子生徒から放し、何事も無かったかのように離れていく。Ｄクラスの生徒も何が起こっているのか唖然としている。今が逃げるチャンスだ。

「カヲル、月嶋君についていこう」

「……あっ。そうね、みんな行きましょう！」

　すぐに荷物を持ってそそくさと走り去るクラスメイト達。それじゃ俺もトンズラするとしよう。間仲は怒り心頭のようで顔を真っ赤にし、ぶるぶると震えている。

「Ｅクラスのくせに舐めやがって……ぶっ殺してやる！」

　逆上した間仲が追いかけてこようとするも、すぐにＢクラスの生徒に制止させられる。Ｄクラスが勝手に暴走して傷害事件となってしまえばＥクラスを追い込むための計画が狂い、支障が出るからだろう。

　追ってきたら一発くらいお見舞いしてやろうかと思っていたのに残念だ。

「クラス対抗戦を楽しみに待っていろ劣等クラス共！　地獄を見せてやるよ！」

　浴びせかけるように間仲が言う。あいつがいつも自慢しているソレルも助っ人として出張ってくるかもしれない。月嶋君は大丈夫だろうがカヲル達は心配だ。何か仕掛けてきたときのために防御策の一つくらい講じておこうかね。

　――　早瀬カヲル視点　――

「それではクラス対抗戦の概略を説明する」

　教壇で厳しい視線を送りながらも静かな口調で説明するＥクラス担任、村井先生。それを聞いているクラスメイト達はこれから始まる大一番を前にナーバスになっており、教室全体がピリピリとした空気に包まれている。

　冒険者学校に入学してから３カ月、冒険者学校の現実を前に何度も心が折れそうになりながら泥水を啜る思いで必死に鍛錬してきた。クラス対抗戦はそんな私達がどこまでやれるか試金石となる大事な試験。地を這ってでも何かしらの成果をつかみ取らねばならない。

「前にも説明していた通り、諸君らには今日から１週間ダンジョンで生活してもらう。持っていけるものは端末と衣類、武具のみ。食料やキャンプ用品、シャワー、ランドリーの利用は指定の階層にて魔石と交換。生理用品、医療品は無料で配布する」

　試験期間内では、魔石を使うことで学校側が用意したサービスを利用できる。また魔石から日本円の交換もやっているので民間サービスの利用も可能。つまり魔石さえあれば試験期間中でも豪華な食事を食べたり宿泊施設にも泊まることだってできる。

　上位クラスの貴族様はそういったことに躊躇なく魔石を消費するだろうけど、私達Ｅクラスは魔石量において全く余力がなく贅沢などできそうにない。私も寝るときは雑魚寝の予定だ。

「試験期間中にダンジョンから出たり体調不良や怪我などで試験の続行が不可能と判断された場合は即時失格となる。注意しろ」

　成績はあくまでクラス単位で貰うので個人が失格となっても点数自体は貰うことができる。とはいえ、何人も失格者を出していてはどの種目も不利になってしまう。体調管理には気を付けていきたい。

「それでは試験用のアプリをダウンロードした者から一時解散とする。１時間後の１０時に冒険者広場に集合。以上だ」

　取れた魔石、モンスターの討伐情報、位置情報などは全て腕端末のアプリで管理され、他クラスのものを含め閲覧できるようになっている。ただしデータの更新は毎朝９時の１回のみ。

　クラス対抗戦は１週間という長丁場なのでそれらの情報から学年全体の動きを読み取り、休むべきか無理をして推し進めるべきか適切な作戦を考えていくことも重要となる。作戦の立案、指揮は磨島君かナオトがやることになっている。彼らの勇気と知恵に期待したい。

「お前らァ行くぞ！　俺についてこいっ！」

「みんな行きましょ！」

「おう！」「はいっ！」

　自らを鼓舞するかのように磨島君が声を張り上げると、幾人かのクラスメイトも大きな声で呼応し立ち上がる。彼ら指定モンスター討伐のメンバーはギリギリまでダンジョンにこもり頑張っていたのを知っている。

　続いて他のクラスメイト達も次々に意気込み、覚悟を決めた顔で立ち上がる。ここで踏ん張れなければ望む未来など勝ち取れるわけがない。絶望の淵に立たされようとも歯を食いしばって前へ進むしかないのだ。

　ナオトは最近元気がないようだけど、暗い沼に沈んでいた情けない私を救ってくれたほどの気丈な人物。きっと立ち直ってくれることだろう。

（さぁ、行こう）

　私にはユウマがいてサクラコがいて、ナオトという心強い仲間がいる。初めはぎこちなかったトータル魔石量のグループも今では協力的になって厳しい練習も頑張って耐えてくれている。たとえ何が来ようとも、もう挫けてやるものか。

　そう意気込みながら私も立ち上ることにした――のだけど。

　教室の後方に、ちらりと颯太の姿が目に入る。何やらニヤニヤとしていて緊張感がまるで感じられない顔。朝迎えにいったときからこの調子だ。下手をすれば命を落としかねない危険な種目を任されているというのに……自分の状況を理解しているのだろうか。

　ここの所、何度か練習に呼んでみたのだけどダンジョンでやることがあると言い、全て断ってきた。成海のおば様によれば１９時の夕食には必ず帰ってきているらしく、大して深く潜っていないのは確実。学校が終わって夕食までの時間で往復できるのは精々２階入り口の近辺までだ。そんな浅い階層で本当に訓練しているのか疑わしい。

　それでも食事制限したり負荷の高いトレーニングをしていることは間違いない。首や肩回りは見てすぐ分かるほどの筋肉が付いていたし、あれだけ出ていたお腹も大きく引っ込み、今では昔の面影が見えるほどまでに減量が成功している。私に対する執着も嘘のように消え、入学当初と比べれば別人といっても過言ではない。

（――だから、もし）

　万が一、今回のクラス対抗戦で結果を出すようなことがあれば。そのときは私の見る目を変えるべきだろうか。颯太がこの学校に入学して何を考え、どんなふうに変わったのか。近づいて確かめてみるべきかもしれない。もしかして今ならアレの破棄に応じてもらえるかもしれないのだから。

　そんなことを考えていたせいか、思わず深いため息をついていることに気付く。これから大事な試験があるというのに余計な事に囚われていては良い結果も期待できない。前を向かねば。

「カヲル？」

　隣にいたサクラコが柔らかい声色で気遣ってくれる。そういえば彼女も入学式の頃から大きく変わった一人だ。今は見違えるように強く頼もしくなった。トータル魔石量も彼女の存在が鍵となるだろう。

「行きましょう、サクラコ」

「ええ」

　窓の外に目を向ければまだ朝９時だというのに日は高く上り、強く眩しい日差しが降り注いでいた。

　\*・・\*・・\*・・\*・・\*・・\*

　　――　成海颯太視点　――

　クラス対抗戦直前のホームルームが終わり、クラスメイト達が集合場所へ向かうべく意気揚々と教室を後にする。

　磨島君とそのグループは連日ギリギリまでダンジョンに潜って猛特訓の成果を見せると意気込んでいたけど、残念ながらクラスのデータベースを見た限りでは暗雲が立ち込めていると言わざるを得ない。

　ゲーム基準なら主人公である赤城君やピンクちゃんのレベルが８もあれば安全圏であったが、彼らも磨島君も未だレベル６までしか上げられていない。理由として魔狼に手こずっているというのもあるだろうけど、何といってもゲートを使用できないという制約が厳しすぎるのだ。

　だからといって上位クラスが手を抜いてくれるはずもなく、Ｄクラスも何かしら仕掛けてくるだろう。彼らの手に余るような厳しい状況もでてくるかもしれない。折れずに最終日まで戦い続けられるか心配ではある――とはいえ。

（サツキも動くようだしな）

　今回のクラス対抗戦については事前にどの程度まで介入するか話し合って決めている。サツキとリサはレベル１２となり、“モグラ叩き”も視野に入ってきた。本気で介入すれば刈谷すら蹴散らし、Ｄクラスを上回る成績を上げることも可能である。

　しかしそこまでしたら上級生や上位クラスに目を付けられ余計な闘争を招きかねず、これまでの必死に頑張ってきたクラスメイト達の気持ちも一気に緩んでしまうだろう。しばらくは今の悔しさをバネに必死で頑張ってもらい、Ｅクラス全体で立ち向かっていける体制作りを目指したほうがいい。今回の介入はＤクラスに勝てないまでも、クラスの雰囲気をやや改善させる程度に抑える、というのが俺達の出した考えだ。

　リサも立木君のサポートに動いている。指定クエストの内容もゲームと変わらないだろうし、ゲーム知識の中から今後起きるであろうクエストや特別情報をこっそり教えれば大きなアドバンテージとなるはず。どの程度の情報をどのくらい教えるか、その辺りのバランス取りは彼女ならば心配ない。

　一方の俺は参加賞だけもらって自分の役割を終えるつもりでいる。最終日にでもカヲルのいるトータル魔石量へ合流しておけばいいだろう。仮に間仲やソレルが何かを仕掛けてきても一応保険は打ってあるし、俺がどうこうする必要なんてこないはず。

　それよりもだ。

　ついに。ゲーム時代から推していたあのお方とお近づきになる機会が巡ってきた。立場や容姿にとらわれず誰にでも優しく対等に接してくれる彼女ならば、この俺にも話しかけてくれる――かもしれない。胸の内のブタオマインドも興味津々なようで、ダブルでワクワクがと・ま・ら・な・い。

「どうしたの～。そんなだらしない顔して」

「良い事でもあったのかなっ」

　この後のことを考えていたら「何をニヤニヤしているんだ」とリサとサツキが声をかけてきた。登校時にもカヲルに不審者扱いされてしまったことだし気を付けねばなるまい。

「ちょっとね。それじゃ俺も向かおうかな」

「お互い頑張ろうねっ！」

「ふふっ。それなら一緒に行きましょうか～」

　サツキが握りこぶしを作って意気込んでいるけど、すでにＥクラスの平均レベルから大きく乖離しているので程々に自重してほしいものだ。リサはいつもと同じく涼しい笑顔を向けてくれていて妙に頼もしい。

（それでは、いざ行かん！）

　こっそりと胸に入れてあった手鏡で寝癖と身だしなみをチェックし、逸る脚を窘めながら意気揚々と集合場所へ向かうのだった。

　朝１０時前の冒険者広場前はこれからダンジョンに突入する冒険者でごった返している。ダンジョン版通勤ラッシュといえばいいだろうか。

　どこぞのクランが煌びやかな装備を見せびらかすように歩き、食べ物や魔道具を売り歩く商人が声を張り上げ、荷物を山ほど積んだ小型運搬車が渋滞を起こすように並んでいる。眺めているだけでも面白い。

　そんな人ごみの中を数分歩けばクラスメイトが待つ集合場所へとたどり着く。リサとサツキはやる事があるといってその場で別れることとなり、一人暇な俺はぼ～っと周りを眺めているだけだ。

　すでに集まっていたクラスメイトも周囲を観察しながらひそひそと話に花を咲かせている。話題は上位クラス。

　Ｃクラス以上の生徒とは教室の場所が離れていて授業も別だし、ダンジョン内でも狩場が違うためほとんど接触がない。そんな彼らの初めてみる武具に興味が尽きない模様。

「（貴族様だと思うけど、防具一式でいくらするんだろう）」

「（凄いよねぇ。あの耳飾り、絶対マジックアイテムだよね）」

　彼女らの視線の先を追ってみればＢクラス一行が集まっていた。牛魔の革から作られたローブやミスリル合金製武具を着た生徒が多く目に付くので、平均レベルは１０から１５くらいと分かる。このクラスでも店で買うとなれば軽く１００万円以上の値はする。

　そして貴族らしき生徒は手首や耳に多数の宝飾品を付けている。あれらは全てマジックアイテムだろう。付与されている魔法によっては目が飛び出るほどの価値になるのは言うまでもない。あんなものを付けてのダイブなんて強盗被害に合わないか心配になるが、いつも多くのお供に囲まれているし、それ以前に法すら捻じ曲げる貴族を襲おうとする不届き者などこの日本に存在しない。

「（あの薙刀、ＤＵＸの最新シリーズじゃん）」

「（雑誌で見た。しばらく使っても切れ味が落ちないって本当かな）」

　武器もＥクラスのように剣やメイスだけでなく、大弓や薙刀、ワンドを持っていたりと多様だ。中には流行りのＤＵＸというブランド武器を持っている生徒もいて一種のステータスにもなっているようだ。

　片や、うちのクラスの武器はほとんどがレンタル品で、Ｂクラスが持つブランド武器と比べてしまえば大きな差はある。けれど彼らと戦うのは早くても来年度以降だし、今は気にせず地道にレベル上げを頑張っていけばいい。

　そのＢクラスの隣にはＤクラス一行が見える。全体的には魔狼の革でできた防具を着た生徒が多いものの、刈谷を筆頭に重量のあるミスリル合金製の武具もちらほらと見える。つまりレベル１０を超えている生徒もそれだけいるということだ。

　そんな格上が複数いるＤクラスと俺達Ｅクラスは敵対関係にあり、ダンジョン内でかち合えば混乱も予想される。クラスメイトに危機が迫ったときはサツキやリサが素早く秘密裏に対応してくれるよう願っておこう。

　そこから少し離れたところにはＣクラスが輪を作って円陣を組んでいた。中心にいるのは和風の鎧を着たＣクラスのリーダー鷹村君と、彼のお付きの可愛いおでこちゃん。

　ＣクラスはＢクラスと違って、ほとんどが平民出身。そういう意味で装備差が表れているといった感じだ。そんな平民にも気安く話しかける鷹村君は貴族の中でもイレギュラーな存在なのかもしれない。

　とはいえ彼らも身分や強さに重きを置くエリート指向の持ち主で、外部生であるＥクラスを受け入れているわけではない。接触する際には慎重にいかなくてはならないだろう。

　そんなことを考えると急に辺りがざわめき立つ。Ａクラス一行が来たようだ。

　先頭を歩くは１年首席で次期生徒会長、そして俺の最推しヒロインである世良桔梗。すみれ色のくっきりとした大きな瞳を輝かせ、腰の近くまで伸びた艶のある長い銀髪を揺らし、ゆっくりと優雅に歩いている。防具は着ておらず制服のままだ。アレはあまり人に見せるものではないのだろう。

（それにしても、お美しい……）

　容姿端麗な見た目でダンエクヒロインの中でも１位、２位を争うほど人気だったが、現実となった彼女の美しさはゲームのそれをはるかに上回る。その美貌に自然と男子達の目が奪われ、女子達も嫉妬を通り越して羨望の眼差しを送る。それどころか周囲の冒険者まで見惚れて足を止めるほどだ。

　そのすぐ後ろには貴族や士族が続く。世良さんの家は歴史ある高位貴族であり、また【聖女】に近しい立場なことから分家の貴族や士族がとにかく多い。装備レベルはＢクラスとそれほど変わらないが、巫女装束のようなものを着ている生徒も何人か目に付く。

　そんな世良さん率いるＡクラス一行の後方には、いつぞや俺に声を掛けてきた天摩さんが大きな両手斧を手に持ち、のっしのっしと歩いている。ピカピカに磨かれたフルプレートメイルが乱反射しているので物凄い目立つ。彼女の家はまだ貴族になってから間もなく配下の士族はいないとのことだけど、代わりに“ブラックバトラー”とかいう黒ずくめの執事達がダンジョン内に控えていることだろう。

　というわけで全てのクラスが冒険者広場に揃い踏みしたわけだ。一通り見た限りでは次期生徒会長率いるＡクラスがやや有利か。彼女の持つサポート能力もさることながら、装備を充実させた貴族や士族の数も多い。また次席である天摩さんの戦闘能力が飛びぬけて高いことも強みだ。

　Ｂクラスも周防の活躍次第ではワンチャンあるかもしれないが、Ｃクラスにも喧嘩を吹っ掛けているなど無駄に敵が多いのが難点。Ａクラスは他クラスを相手にしながら倒せるほど生易しい相手ではない。そういう意味で上手く漁夫の利を狙えればＣクラスにもチャンスがありといった感じか。

　まぁ、上位クラスの動向なんて俺が気にすることでもないけど、ついついプレイヤー目線で見てしまう。おっと、先生方が動き始めたぞ。

『これより、クラス対抗戦を開始する。“到達深度”の参加者は前に』

　拡声器を持った厳つい男がこちらに向けて声を上げる。あれは学長代理だっけか。そういえば学長のほうはゲーム時代も含めて一度も見たことないけどどんな人なんだろうか。

　それでは、俺の参加種目が呼ばれたので行くとしようかね。

「ブタオ！　死んでも参加賞とってこいよ！」

「誰かに付いていけば大丈夫だ心配するなー。後ろを振り返るなよー」

「私達に合流なんて考えなくてもいいからね、っていうか邪魔だし」

「ソウタ～頑張ってね～！」

　クラスメイトからの期待と声援を背に受けて胸を張り、ゆっくりと前に歩み出る。

（上位クラスは誰がでてくるかな？）

　到達深度は点数配分が一番多く、どこのクラスも最精鋭を送り込んでくると予想される種目。Ｅクラスは捨てているので俺一人だけだが。

　Ｄクラスからは、間仲とよくつるんでいる取り巻き三人が前に出てきた。てっきり間仲か刈谷がくるのと思っていたが違うのか。

「ちっ、Ｅクラスは豚だけかよ。張り合いねーな」

「アイツらの誰が来ようが勝てないし。仕方ないっしょ」

「お前、ダンジョンに入ったら荷物持ちな」

　目が会って秒で喧嘩を売ってくるとは。買っちゃおうかな～どうしようかな～などと脳内で叩きのめすシミュレーションをしていると、周りから歓声のような声が上がる。

「周防さん、頑張ってくださいっ！」

「キャー！　世良様ァ！」「世良様、お気をつけて！」

「メイちゃんファイトー！」

　上位クラスは順当に精鋭を送ってきたようだ。クラスリーダーである世良さんと周防、Ｃクラスは鷹村君のお付きのおでこちゃんがそれぞれ数人のお供を連れて前に出てくる。このメンツは大体予想通りなので驚きはない。

「おや、世良さん。同じ種目とは奇遇ですね」

「周防様。ご機嫌麗しゅうございます」

　クラスのリーダー同士が近寄ってにこやかな笑顔で挨拶する。だが奇遇というのは嘘くさい。ゲームでは世良さんに並々ならぬ、それも好意からではない執着を寄せていたし、Ａクラスの硬い表情からも周防を歓迎していないことが分かる。この到達深度に参加したのだって前もって情報を仕入れていたからだろう。

　中学の時に首席だった鷹村君を早々に蹴落とし新たな首席として君臨するはずだった周防皇紀。そこに才能、人望、血統と全てで上回る怪物、世良桔梗が立ちはだかった。当然追い落とそうと挑んだものの何度も跳ね返され、その結果が今のクラス分けへと繋がっている。プライドの塊が服を着て歩いているような男が現状に我慢できるわけがないのだ。

　一方の世良さんはそんな敵意を全く意に介していないご様子。笑顔のまま一礼し、そのまま通り過ぎてしまう。中学時代の周防との闘争も生易しいモノではなかったはずなのに一向に相手にしないのは、もしかしたら奴の未来を視たからなのかもしれない。

（一応、周防の動きは気に留めておくか。それと――）

『やぁやぁ成海クン、奇遇だね。ウチも参加するんだけどヨロシクねっ！』

「て、天摩さんもなんだ。どぉも……」

　１年次席、天摩晶が電話のような声色で話しかけてきた。首席である世良さんに加え、次席の彼女まで到達深度に参加するとなれば戦力過剰な気がするがＡクラスは何を考えているのだろう。

『いやねぇ。こないだダイエットの話、あれっきりだったでしょ？　でも聞きに行く機会がなくってさぁ。そこで成海クンが到達深度に参加するって聞いたもんだから』

「は、はぁ」

『道中は話していこうよ。どうせ何も起きないんだし』

「次席、我らから離れるな。こっちだ」

　早口でまくし立てるように絡んでくる天摩さん。普段はあまり喋らない人だった気がするけどゲームとは違うのだろうか。それでも協調性がないのは同じなようで早速同じクラスメイトから注意されている。

『ありゃいっけない。なら成海クンもおいでよ、一人なんでしょ？』

「えっ」

　腕を取りこっちに来いとＡクラスの到達深度グループがいる場所に連れていかれてしまう。気づけば長い銀髪を風になびかせている世良さんが目の前にいて鼓動が跳ね上がる。深呼吸せねば。

（すぅはぁ……あ、なんかいい香りがしてくる……って。落ち着け俺）

　突然のことでつい動揺してしまった。冷静になって観察してみよう。

　Ａクラスの到達深度は六人。全員の胸には爵位を示す金バッチが付けられていることから貴族だけで構成されていることが分かる。しかも天摩さん以外のバッチは世良さんと同じひし形の家紋、つまり世良一門というガッチガチの構成。ちょっと場違いすぎるところに来てしまったぞ。

　鎧は各自、和洋別々のデザインであったり色も統一性はないが、貴金属や宝石をふんだんに使って作り込まれており貴族の権威を見ただけで知らしめる、そんな意図を感じさせる。一般庶民の俺はついつい土下座してしまいたい気分に駆られてしまうじゃないか。

　そんな貴族達は眉をひそめて世良さんの周りに集まりヒソヒソと話している。

「世良様、お気を付けくださいまし。周防は何か企んでいます」

「共に行くのは危険です」

「やはりここは予定を変更し、我らだけで先行したほうが良いかと」

　到達深度は毎年浅い階層だけは他クラスと一緒に歩き、交流を深めるとかいう暗黙のルールがある。今年もその予定であったが周防は危険な奴なので何を仕掛けてくるか分からない。ここは安全のためにＡクラスだけで先行してしまおう、と言っているのだ。

　世良さんは少し驚いたものの微笑みは崩さず余裕のある表情。お美しや。

「そう邪険にするものではありませんわ。よい機会なのだしクラス交流を楽しんでいきましょう。貴方もそう思いません？」

　突如こちらに振り向き話しかけてくる世良さん。同時にすみれ色だった瞳が赤く輝きだす。これは《天眼通》という魔眼が発動した証拠だ。対象に起こる未来の出来事をかなりの精度で見通すことができる。

　真っ赤に怪しく光る魔眼で俺の瞳の奥に映る未来を射抜くように見つめてくる。いきなり使ってくるだなんて心の準備ができてないんですけど。

　でも――ついに明かされる。俺の華々しい未来がっ！　世界に轟く大冒険者となっているのか。はたまた美女に囲まれ豪遊生活を送っているのか。もしかして世良さんと結婚してたり？　全てを受け入れるつもりだぜハニィ。

「ん～セクハラ……退学……将来性は……あらあら、とても残念な方のようね。３点というところかしら」

「へっ？」

『あちゃ～どんまいっ！』

　何かまずいものを見てしまったかのように目を伏せる世良さん。そのまま俺に興味をなくしたかのように前を向いてしまわれた。唖然としていたら天摩さんがパシパシと背を叩いて能天気な声色で慰めてくる。少し痛い。というか――

（どういうことだよぉぉおぉお！！）

　ついにクラス対抗戦が開始された。最初にダンジョンに入るのは俺が参加する到達深度グループだ。五つの種目の中では点数配分が一番高く、出場してくる生徒も各クラスの精鋭。後方から大きな声援に後押される形で次々に突入を開始する。

　といっても、ここ１階は前も後ろも冒険者だらけなのでモンスターなんて一匹もいない。いたとしてもスライムが跳ねているだけなので、しばらくは流れに沿って進むのみである。

　先頭には世良さんが一門に囲まれながらゆっくりと優雅に歩く。余程喋りたいのか色んな人に声を掛けており、護衛の貴族が睨みを利かせ追い払うということを繰り返している。自重しろとの視線は彼女にまるで効いていないようだ。

　その後ろにはＢクラスの周防とその取り巻き達が煌びやかな防具を着て歩いている。こちらも全員が貴族なのだろう、装備にかけている金額は相当なもので宝石や貴金属が眩い。もしかしたらあれらもＡクラスに負けたくないという意地の現れなのかもしれないが、今のところは喧嘩を売ったり暴れたりする様子は見られず至って平穏。こんな混雑しているメインストリートで何かを仕掛けるはずもないか。

　続くＣクラスは鷹村君のお付きのおでこちゃん――物部芽衣子という名前らしい――が中心になって動いている。仲間からメイちゃんと呼ばれ親しまれており雰囲気はかなり良さそうだ。一方でクラス一番の実力者であろう鷹村君の姿は見えず、データベースを見る限りでも最高戦力を出してきているわけではない模様。学年屈指の世良さんや周防と無理に争うよりも、他の種目に回して点数を稼ぐ作戦なのだろうか。ある意味Ｅクラスと同じ戦略とも言える。

　最後方にいるのはＤクラスの四人グループ。よく間仲と一緒にＥクラスを馬鹿にしてくるので、うちのクラスからは評判がすこぶる悪い奴らだ。最近では間仲を煽てて取り入ろうとする姿をよく見かけるがソレルにでも入りたいのだろうか。

　そのＤクラスが先ほどから俺をチラチラと見てくる。恐らく背に持った荷物を持たせたいのだろうが今は絡めない理由もある。

『その糖質制限って、そんなに効くの？』

「えぇと。まぁ多分……」

　俺の隣にはウンウンと頷きメモを取る天摩さんがいるからだ。

　彼女は入学式の時に俺の太っていた姿を覚えていたようで、どうしてそんなに痩せることができたのか、一体何をやったのか秘訣を教えてくれと逐一聞いてくる。そのためにわざわざ到達深度のグループに割って入ったのだという。

『でもこんな短期間でそこまで痩せられるのかなー。初めて見た時は体幹が弱そうだったけど筋肉も凄くなったよねー。ウチ、二度見しちゃったもん。明らかに何かやってるよねー？』

　日頃どんなトレーニングをしているのか。何階で狩りをしているのか。全て吐き出せと言ってくる。

　確かに最近は亡者の宴で長時間ハンマーを振り回しているせいか、ますます筋肉が付いてきた。またリサから教えてもらった対デバフスキル《フレキシブルオーラ》のおかげで異常食欲もそれなりに抑えられ、最近はデブからぽっちゃり系男子に変貌を遂げている。細かった目も痩せたことでパッチリおめめとなっており、案外イケメンなのかもしれないと鏡を見る度に驚いているくらいだ。

『あ、もしかして秘密の狩場とかあったりして。ねぇねぇウチだけにこっそり教えてよー』

　重そうなフルプレートメイトで器用にくねくねとする天摩さん。もちろん秘密の狩場なんて言えるわけないので何とか誤魔化したいところであるが、彼女もダイエットというものを長らくやってきた身。適当な話ではごまかされず納得もしてくれない。

（さて、何と言えばいいか。というかまず天摩さんのダイエットはそう簡単な話ではないのだけども）

　今までに様々なダイエットを試したけど効果がでないというのも当然の話で、原因は精霊の祝福という名の“呪い”のせいだからだ。痩せるためには食事制限や運動などではなく、自身に宿っている精霊の考えを改めさせるか取り出して倒すかしかない。

　そのイベントは主人公である赤城君と天摩さんが仲良くなっていけば自ずと発生する。難度は高めだがクリアすれば天摩さんは無事に痩せて可愛らしい少女に戻り、ヒロインとして赤城君を支える強力な仲間となる。

　もしかしたら俺でも発生させることはできるかもしれないけど、赤城君の成長の機会を奪ってしまうことになるし、何より天摩さんが関与するメインストーリー全てが捻じ曲がり、プレイヤー最大の武器である“未来予測”が使えなくなってしまう可能性すらある。そうまでして彼女を助ける覚悟は……今のところ持ち合わせていない。

　しかし目の前ではこんなに明るく振る舞っていても呪いのせいで醜く太り、老化までしてしまった姿に毎日泣くほど苦しんでいることは知っている。その常時着用しているフルプレートメイルもその姿を覆い隠すためということも。早く救ってあげたい気持ちは当然ある。どうしたものか。

「皆様。まもなく２階に到着しますので、２０分の休憩をとりましょう」

　１階の終着広場が見えてきたところで世良さんが休憩の提案をしてくる。ダンジョンに入ってからすでに１時間以上経っているのでトイレ休憩も必要だろう。

『それじゃウチもトイレいってくる。２０分後にまたねー』

「あ、うん」

　その鎧はトイレでどうやって着脱するのだと密かに疑問に思ったが、後方には例の黒ずくめ達が控えていることだし問題はないのだろう。それでは俺も一応いっておくか。

「おい豚っ！　ツラ貸せや」

　天摩さんと別れるや否やＤクラスのグループの一人が襟首を引っ張ってきて、人気のいなそうな方向を親指で差し「付いてこい」と言ってくる。ダンジョンに入ってからずっと俺に絡みたかったようで後ろにいる奴らも頻りにガン垂れてくる。君たち、トイレは大丈夫なのかね。

（面倒事はさっさと終わらせるか）

　１階と違って２階は訓練場として利用する冒険者はほとんどおらず、数百ｍも歩けば人の気配はほとんどなくなる。どこまで行くのかなと思いながら歩いていると、後ろからパンチを繰り出してきやがったのでとりあえず躱しておく。素直に殴られてやるつもりはない。

「いきなり何ですかね」

「お前、なんで荷物持たなかったんだよ！」

「何発か殴らせろ！」

「ここから先は俺達が扱き使ってやるから覚悟しろよ？」

　あまりの理不尽にオラびっくりだ。今まではやってこなかった暴力も躊躇なく振るうようになってきたか。もしかしたらＢクラスから何か指令が出ているのかもしれないけど、そんな要求を受け入れるつもりは毛頭ない。そも、こいつらはＥクラスいじめの主犯格で、過去にＭＰＫをしたりもしていたりと俺の粛清対象リストの上位に位置している悪人共。俺の方こそ何発か殴らせてほしい。それにしても――

（やけに苛立っているな）

　汗をかき目を血走らせ興奮状態なのが見て取れる。俺に絡みたいというだけでここまで感情が高ぶるものだろうか。薬物使用、もしくは何らかの精神操作の影響が疑われる。対デバフスキル《フレキシブルオーラ》は簡単な状態異常なら広範囲に抑え込めるので試しに使ってみようかね。

　再び殴りかかってくるのを横に躱しながら相手の胸に手を当てスキルを発動。すると魔力が何かにぶつかる感触があった。やっぱり何かやっていたな。

「テッ、テメェ！」

「囲んでやるぞっ！」

　だがスキルを使った男子生徒の顔色に何ら変わった様子がない。手応えはあったはずなのにおかしいぞ。もしかしたら継続的な精神操作を受けているパターンが考えられるな。例えば呪いのアイテムを装備しているとか。

　四人で俺を取り囲んで一斉に攻撃を繰り出してくるが、全て認識できているし見えてもいる。データベースではレベル７前後だったしこんなものか。

　目の前の男が拳を振りかぶる直前に懐に入り込み鳩尾に一撃をお見舞い。斜め後ろから髪の毛を掴もうとした右隣の男の手を逸らして、側頭部に手刀。左から来る蹴りを半歩後ろに下がって空振りさせ、お返しにこちらも回し蹴り。顎へ滑らすように当てればあっさりと崩れ落ちる。残りは後一人だ。

「お、お前、一体なんなん……」

　会話するつもりなんてない。問答無用で後ろに回り込みチョークスリーパーで締め上げればあっという間に居眠り小僧の出来上がり。レベル差がこれだけあると四対一くらいでは負けようがないな。

「さてと。何を隠し持ってるのやら」

　目の前に並べて一通りポケットや荷物の中身を見たものの、怪しいアイテムは見当たらない。面倒なので防具を全部剥がすことにしよう。

「これは[狂い鼠の牙]か。この段階から使っているのかよ」

　小さな歯のようなものを数珠つなぎにした首飾り。《簡易鑑定》で見てみると「２０階以降の湿地帯でポップするネズミ型モンスターの牙」と出るので間違いない。知能や理性が落ちる代わりに力と動体視力を上げる、いわゆる“バーサーカー状態”になるマジックアイテムだ。

　ゲームでは周防が主人公らと戦うために配下の戦闘力を向上させる目的で使っていたが、長時間使用すると精神汚染が始まる危険なアイテムでもある。こんな序盤ですでに用意していたとは……実験目的で持たせたとしても一体誰と戦うことを想定していたのか。

　こいつらがどうなったところで別に構わないという気持ちはあるものの、周囲から悪しき思想や差別的な考え方を叩き込まれ、ここまで曲がってしまったという見方もある。ましてやこのような危険なアイテムを恐らく何も知らない状態で渡され実験台にされていたのだ。哀れというほかない。

　まだ使用してそれほど時間も経っていないので後遺症はでないだろうけど、そのまま復帰されては面倒なので君達にはここでリタイアしてもらおうか。

　背中に抱えていた“小さな”バッグから“巨大な”ブーストハンマーを取り出し、はぎ取った武具の上に「よっこらせ」と振り下ろして破壊する。後は適当に縛り上げて放置でいいだろう。そこらを歩いているゴブリンに殴られるかもしれないが。手頃な罰として丁度いい。

　そろそろ休憩時間が終わってしまう。世良さんの待つ集合場所へ戻るとしよう。

　２階の集合場所に戻れば天摩さんがこっちだぞと手を振っていた。

『どこいってたのかな。あ、もしかして秘密の特訓とかしてたり？』

　急いで戻ってきたつもりだけどレディーを待たせてしまったようだ。でもそんなことは気にしていないと快く出迎えてくれる。

「そろそろ時間ですけれど……Ｄクラスの方たちが見えませんわね」

「世良様を待たせるとは。Ｄクラスめ」

「共に行くというのも互いの同意あってのこと。来ないならば揃っている者のみで行きましょう」

　ＢクラスのほうでもＤクラスが来ていないと話をしている。だが苛立たしそうに顔を歪めている様子から心配しているわけではなさそうだ。

「我らの荷物を置き去りにして奴らはどこへいったのだ」

「荷物はどうする」

「来ている配下達は傭兵ではなく父上に仕える士族ばかり。荷物を持たせるというのも気が引ける」

　何やら貴族たるもの荷物なんて持たないというのが彼らの矜持らしく、ここまではＤクラスに荷物を運ばせていた模様。その任務を勝手に放棄しやがって。後でキツいお仕置きをしてやる、と憤慨しているのだ。ご愁傷様である。

　その荷物運びがいなくなったことで代わりに目を付けられたのが――そう、俺だ。

「そこな庶民。我らの荷物を託するとする。身命を賭して任を全うせよ」

　とかなんとか、公家らしき貴族がふんぞり返って言ってくる。指差す方にはリュックが五つ。ざっと見た感じ２０ｋｇから３０ｋｇくらいあるだろうか。その理不尽な物言いに隣で黙って話を聞いていたフルプレートメイルが割って入ってくれる。

『荷物くらい自分達で持ちなよー。それに君たちの後ろに助っ人たちがいるんだからわざわざ成海クンに持たせる必要ないでしょー？』

「お主の黒ずくめ共と同じにするな。あれらは給仕ではなく将来の家臣なるぞ」

『ブラックバトラーだって歴とした天摩家の家臣だぞー』

　金属製の腰に手を当てプンプンと口で言う天摩さん。後ろを振り返って見てみれば、少し離れたところには異様な集団がいくつもいるのが分かる。世良さんの聖女機関らしき巫女装束隊に、天摩さんの黒執事隊。どこかの士族のみで構成された重騎士隊など、貴族ごとにサポート部隊を連れてきている。２階にいるような冒険者とは装備も雰囲気もまるで違うのでとにかく目立つ。

　ゴブリンを狩りに来た初々しい男女の冒険者ペアが重騎士に睨まれ怯えているではないか。学校の試験なので少しは自重して欲しいものだけど。

　それはともかく、断りでもすれば難癖を付けられそうなので荷物運びくらいしておいたほうがいいだろうな。この程度の重さは今の俺にとって何の苦にもならないのだし。

「大丈夫。荷物運びくらいしますよ」

『成海クンがそういうならいいけどー。でも大変だったらそこらにポイっとしちゃっていいからね。ポイっと』

　ぞんざいに放り投げるモーションをしながら言ってくる天摩さん。気遣ってくれるのはありがたいけど、そんなことしたらその場で後ろに控えている助っ人達とも大戦争になるのでやめておきます。

　\*・・\*・・\*・・\*・・\*・・\*

　――４階入り口広場。「豚のしっぽ亭」前。

「皆様の予約は入れておきましたので、こちらでランチといたしましょう」

　小休憩をいくつか挟みながら歩き続け、昼過ぎを少し過ぎたところで４階に到着。世良さんが宿泊施設「豚のしっぽ亭」にあるレストランに前もって予約してくれてたようで、そこで皆で昼食をしようと誘ってくれたのだ。

　ダンジョンの天井と壁に埋まるように作られているこの宿泊施設は８階建て。一番上にある展望エリア兼レストランは上流階級が利用する特別な場所らしく、入るためには身分証明書が必要。でも俺達はフリーパスで給仕の人に連れられて通されることになった。

　中に入れば大理石を使った真っ白の内装に、キラキラと輝く巨大なシャンデリア。中央にはテーブルクロスがかけられたテーブルがあり、高そうな食器が綺麗に並べられていた。こんなところで食べたら成海家の一週間分の食費がたった一食で飛びそうだけど、今回は全て世良さんの奢りだそうだ。

「どうぞ、お座りください」

「ふむ、それでは遠慮なくいただくとしましょう」

　周防が適当な椅子に腰を下ろすと、周りの面々も次々に腰を下ろして寛ぎ始める。世良さんはＣクラスの物部さんに興味があるようで頻りに話しかけ、片や物部さんは若干戸惑いながらも笑顔で受け答えしている。可愛い女の子同士が会話をしていると絵になるもんだね。俺もそっちに――

『それじゃ一緒に食べようか』

　天摩さんに手を引かれて向かいの席へ連れていかれる。ところでそのヘルムをしながらどうやって食べるのだろうと見ていると、顎の下の方がパカリと開くらしく、そこから食べるので心配無用とのこと。

　全員が席に座ると軽やかな音楽が流れ始め、身なりの良い給仕が香り高いお茶を注いでくれる。近所のファミレスでも贅沢を謳歌した気分になれる庶民にとっては、かえって落ち着かない空間である。

『おや、指定ポイント到達は１回目の順位が決まったようだねー。ウチのクラスは……１位取れたみたい』

　料理が運ばれてくる間、端末で情報収集していた天摩さんによりＡクラスの動向が伝えられる。俺もＥクラスの掲示板を見てみると――５着、つまりビリだということが書かれていた。

　指定ポイント到達は目的地がランダムで決められ、着順を競う種目だ。今日はまだ初日なので目的地も１階か２階に設定されており、リーダーも赤城君。なのに最下位スタートとは随分と厳しい戦いになっているようだ。

　その一方でＡクラスは主力が到達深度に偏っているにもかかわらず、他の種目でも１位を取っている。層の厚みが違うということだろうか。

　しかしこの種目はスタート地点も自由なので運要素も強く関係する。また目的地もあと数日は浅い階層限定なのでレベル差は表れにくく、Ｅクラスにも十分チャンスはある。気を落とさず２回目も頑張ってほしいものだ。

『まぁ層の厚さや運もあるけど、他にも色々と理由があるんだよねー』

　その理由は機密なので言えないとのことだが、いくつか予想は付く。例えば世良さんにはバフ効果とバフ効果時間を大きく上昇させる《天使の祝福》というチートスキルを持っており、ダンジョンに入る前に移動速度アップをＡクラス全員にかけていた可能性がある。

　他には“聖女機関”の存在。この国に一人しかいない【聖女】を守る名目で作られた国家機関で、そこに属する巫女達は攻略クラン並のサポート能力を持つスペシャリストばかり。【聖女】の後継者である世良さんのクラスをサポートすべく、きっとあちこちに配置されているに違いない。

　しかし、まるで子供の運動会に親が徒党を組んで参加しているよう。数少ない実力試しをする機会なのだし手を貸すにもほどほどにして欲しいものだ。

『指定モンスター討伐はゴブリン２０体かゴブリンチーフを１体倒せという指示だったみたい。この程度なら差なんて生まれないよねー』

　指定モンスター討伐は名前の通り、指定されたモンスターを倒していく種目。Ｅクラスからは磨島君が率いる精鋭が参加するので期待されている。最初の指定モンスターであるゴブリンはどこのクラスも余裕で撃破しているとのこと。

（Ｄクラスを率いているのは……マズいな）

　掲示板によればＤクラスの指定モンスター討伐を率いるのはあの刈谷らしい。偶然なのか、それともこちらの作戦が漏れていてＥクラスの精鋭を叩き潰そうという狙いなのか。どちらにせよ今後厳しい戦いとなるのは必至だ。

『トータル魔石量はまだ情報はないね。ウチのクラスは１０階くらいまでほとんど倒さないで進むみたい』

　Ａクラスのトータル魔石量は低階層のモンスターの魔石など眼中になく、１０階を直接目指す作戦らしい。Ｅクラス――カヲル達は肩慣らしと昼食代の魔石稼ぎを兼ねて３階で狩りをしている頃か。今のところトラブルらしき報告は書かれておらず順調のようだ。

　クラスメイトの皆は頑張って上位クラスと鎬を削っていたり生活費という名の魔石集めをしているというのに、俺だけ高級レストランでランチにありつけているというのは背徳感があって大変よろしい。店から出て行くときはクラスメイトに絶対バレないよう注意せねば。

　ほどなくすると子豚くらいの大きさの、こんがり焼けた肉の塊が運ばれてくる。見た感じ鶏肉のようだが、それにしては随分と大きい。

『“マムゥ”の肉だね。よく手に入ったもんだ』

「マムゥ？　あの人食いトカゲの肉か」

　確か２１階以降の湿地帯にポップする巨大人食いトカゲがそんな名前だったな。聞けば金持ちの間で需要が高く、１００ｇあたり数万円から取引されているらしい。人食いモンスターなのに人に食されているというのはいかがなものか。

　給仕の人がその場で切り分けてくれたので早速食べてみると――確かに美味い。ほどよく柔らかく脂も上質。でもやっぱり鶏肉のような味がする。

『ＳＴＲとスタミナがアップするっていう効果があるんだって。今日はこの後１０階まで一気にいくみたいだから、成海クンもいっぱい食べておいたほうがいいよ』

「いや、俺は８階くらいでリタイアする予定なんだけど」

『じゃあダイエットの話をしてくれたお礼にウチがそこまで連れていって上げよっか』

　目の前で吸い込むようにトカゲステーキを食し、３回目のお代りまで頼む天摩さん。そんなに食べたらどんなダイエットをしても効果が出ないのでは。

「ところで天摩さん達は何階までいくつもりなの？」

『１５階くらいを予定してるけど他のクラス次第だねー。でも、もしかしたら２０階くらいまで行くかもしれないよ。Ｂクラスもお供をいっぱい連れてるみたいだし』

　Ａクラスの到達深度グループは平均レベルが１５から１８くらい。それから考えると２０階まで行くというのはリスクがあるように思えるけど、優秀な助っ人が後ろに控えているので行けないこともないとのこと。

　だがそこまで行かれると８階で引き返しては参加賞が取れなくなってしまう。一人で１０階まで行くというのも角が立つので、それなら天摩さんに連れていってもらったほうがいいかもしれない。

『じゃ決まりだね。デザートはどれにしようかなー』

　天摩さんはまだ食べ足りないのか、大きなメニュー表を見て食後のデザート選びに夢中になっている。

　後ろの大きな窓からは入り口広場が一望できて、同じ学年の生徒らしき集団もいくらか見える。その誰もがこの先一週間を見据えて倹約生活をしているというのに、この空間は別世界のようだ。

　そんな風に窓からぼ～っと広場を見下ろしていると、そこにいるはずのない彼女の姿が見えた気がした。

　豚のしっぽ亭で豪華なランチを食べ終えた到達深度一行は、すぐに次の階へ向けて出発することになった。

　夜は１０階にある宿泊施設に泊まる予定で、すでに予約までしているという。４階から普通に歩いていて向かっていては今日中に着かないので冒険者が少なくなる７階からは走って移動だ。

『成海クンほらこれ、一つ食べる？　あ～ん』

「お腹まだ減ってないから大丈夫ッス……」

『そう？』

　やや薄暗い森ＭＡＰを走りながら器用にたこ焼きを食べている天摩さん。他の人達は俺達を置いて先に移動してしまったので、今は彼女と二人きり――などでは決してない。前も後ろも左右も黒ずくめの執事達に囲まれながら走っている。

（別に手を出すつもりなんてないのに、そんな露骨に殺気を向けないで欲しいのだけど）

　天摩商会が保有する“ＤＵＸブランド”の最新武具をチラチラと見せつけ「うちの令嬢に指一本でも触れたらブッ殺す」というような態度で四方から睨んでくる。先ほど天摩さんが『あ～ん』とやってきたときなど殺気で空間が歪んだのかと思ったくらいだ。

　これまでは目立たないよう離れて付いてきてたというのに、二人きりになった途端にこれである。まぁ周囲のオークや蝙蝠を斬り捨ててくれているのは助かるけども。

『それにしても成海クンってレベルの割には凄いスタミナだよね。一体どういった訓練してたのかなー』

「……ちょっとだけスタミナには自信あるんだ」

　重い荷物をいくつも抱えて長時間走っていれば普通ではないことくらいは嫌でもバレる。苦しい言い訳だけど何とか誤魔化せないものだろうか。

　最初は俺ごと背負っていってあげると親切心で言ってくれたのだけど、後ろにいる黒ずくめ達の殺気が膨れ上がったので丁寧に辞退したという出来事があった。天摩さんにはもうちょっと彼らの溺愛っぷりを自覚してほしいものだね。

　そして、さらに別の問題もある。

　どうやら久我さんが後ろから追ってきているようなのだ。豚のしっぽ亭の窓からチラッと見えただけで姿をちゃんと確認したわけではないが、Ｅクラスの掲示板にも久我さんが行方不明だと書かれているので間違いない。隠密スキルを使って尾行しているせいか執事達もまだ気づいていない様子。こんなところまで追ってくるとは、いつぞやの練習会のことで怪しんでいるのかもしれない。

（どうすっかなぁ、どこかで撒ければいいけど）

　全く。気苦労の絶えない道中である。

　\*・・\*・・\*・・\*・・\*・・\*

　――１０階入り口広場。

　床や壁がゴツゴツした岩肌から人工的な石タイルに変わり、天井も薄青色に光っているので外に出たかのような開放感がある。こんなに明るくても時刻はすでに２０時を回っており、入り口広場には宿泊用のテントがいくつも張られている。ここを狩場にしている冒険者は時間感覚が狂って昼夜逆転したりしないのだろうか。それにしても――

（やっと着いた……長かった）

　道中は全方位からチクチクと殺気を放たれ、後ろからは久我さんに尾行され、予想以上に疲れてしまった。それでも無事に目的地まで到着できたので良しとしよう。

　ゴール地点は高級旅館・黒檀亭。名前の通り真っ黒い木材を組んで建築された和風の旅館で、４階にあるものよりも一目で高級な宿だと分かる。エントランス付近は宿泊客専用のテラス席になっており、先に着いていた到達深度一行はそこで遅めの夕食を食べていた。

　手前の方に座っていた浴衣姿の世良さんがこちらに気づき、にこやかな笑顔で出迎えてくれる。ゲームでも見たことがないその姿についドキマギしてしまう。お美しい。

「お疲れ様です、天摩様。宿泊の予約は取ってありますのでどうぞこちらへ」

『あーうん。成海クンとはここでお別れだね。帰りは多少の料金はかかるけどガイドの人に頼めば安全に帰れるよ』

「ここまでありがとう、今後の活躍を祈るよ」

『うん、頑張ってくるよ！　また学校でねー』

　大きく手を振って別れを惜しんでくれる天摩さん。短い間だったけど彼女の陽気な性格のおかげでそれなりに楽しかった気もする。世良さんとも間近で会話ができて浴衣姿も見られたし大成功じゃなかろうか。立ち去る前に背中に抱えていた荷物をＢクラスの座る席まで届ければ俺のクラス対抗戦はほぼ終了だ。

「おい。まさか任務を放棄する気ではなかろうな」

「へっ？　任務といわれましても……」

　ギロギロと無遠慮に睨みつけ、低い声で脅すように言ってくる貴族様方。というか君達、俺のレベルが３だということを分かっているのかね。仮に、本当にレベル３ならこの先のモンスターの攻撃が掠っただけでも致命傷になるくらいに危険なのだよ。

「なに。道中のお主の身は我らが守ってやるから安心しろ。明日の朝９時までにこの場所に来るように」

　足元を指差しながらそう言い終えると、こちらに興味を失ったかのように仲間の元へ戻ってカードゲームに熱中してしまう。Ｄクラスだってこの階層までは来られなかったはずなのに、元々の予定では一体誰に荷物を持たせる気だったのだろう。

　荷物を持つこと自体は別に苦にならないからまだいいけど、レベル３の俺がそんな階層までいったらどうみても危険だしおかしいだろ。クラスの皆にどう説明すればいいんだ。

（でもまぁ、貴族の頼みを断るというのも問題か）

　貴族と事を構えればどんな面倒事が転がり込んでくるか分からないし、最悪、クラスメイト達にも被害が出てしまう。ここはぐっと堪えるしかないのかもしれない。

　周防や世良さんなどストーリーの重要人物達がこの先をどう戦って進むのか、今後のために見ておくのも悪くない。とかいう言い訳で自分を納得させるのは無理なので今日は家に帰って不貞寝でもしよう。

　試験期間中は腕端末のダンジョン内ＧＰＳが強制的にオンになっているため、このまま外に出ると即失格になってしまう。だがこのルールは意外とザルで、荷物と一緒に端末をコインロッカーにでも入れておけば回避は可能なのだ。ということで、あと家に帰る前に片付けなければならない問題は――

（追ってきている久我さんをどうするかだな）

　視線は合わせず、いるであろう方向に意識を向ける。しかし意識を向けたところで隠密スキルを使われているせいか何も感じられない。実に厄介である。もういっそ声を掛けてしまおうかと逡巡するも、変に接触すると絡まれて根掘り葉掘り聞かれるかもしれないし下手すれば実力行使してくる可能性もある。素直に撒くことを考えたほうがいいだろう。

　俺よりレベルが高く尾行にも長けている現役諜報員を撒くのはそう簡単ではないが、良い方法はある。そう……男子トイレに逃げ込めばいい。久我さんといえど花も恥じらう乙女。そんなところに入られては追って来られるわけがないのだ。

　鼻唄を歌いながら男子トイレの個室に入り、マジックバッグから妹とセットで買った鑑定阻害の[道化の仮面]と認識力を低下させるダークホッパーのローブを取り出して装着する。

　ここのトイレは反対側にも通り抜けが可能なので、あとはそちらに出て行くだけの簡単なミッション。楽勝だぜと手鏡を使って後ろを観察すると――

（なにぃ！？　堂々と男子トイレに入ってきただとぉ！）

　帽子を深く被りダボダボのトレーナーのような服を着ているので一見少年のように見えるが、あれは間違いなく久我さんだ。少し見れば明らかに女性だと分かる程度の変装でしかないので周囲に違和感をまき散らしている。隣のオッサンなんて二度見しているではないか。

　その久我さんは俺のいる方向すら分かっていないようでキョロキョロしている。探知スキルは持っていないようだけど仮面とローブをしていてもこんな狭い所にいては捕まるのも時間の問題。ならばすぐにここから出て、次の手段にいこう。

（この辺りから近い場所となるとあそこか）

　今から向かうのはＤＬＣにより追加された「愚者の庭」という名のトロール部屋。リサ達もレベル上げに使っていた場所だ。１０階入り口広場から比較的近い場所にあるのでここから走ればすぐに着く。

　通路の角からこっそり後ろを見れば遠くに久我さんが歩いているのが確認できた。流石に追加エリアまでは追って来られない――いや。ウロウロしながらも俺のいる方角に進んできているぞ。

（あれは探知スキルを使っているな……《ディテクト》か）

　《ディテクト》は対象にマーキングを付けて追跡するタイプのスキルではなく、人やモンスターの気配を大雑把に読み取るタイプの探知スキル。なので人混みなど混雑した場所では使えなかったのだ。このままではＤＬＣエリアに逃げ込んだとしても追って来てしまう。仕方がない、最終手段を使うとしますか。

　胸元からペンダントを取り出し、付いている宝石を握って魔力を流し込む。このペンダントはクエストでもらった緊急脱出用のマジックアイテムで、発動させると魔力登録したゲート部屋までジャンプする効果がある。現時点では数を用意できないので普段使いなんてできないが、この場で久我さんに捕まるくらいなら使っておくべきだろう。

（ここで逃げても一時しのぎにしかならないけど）

　今後の対応に頭を悩ませていると淡い光に包まれ、浮遊感がやってくる――

　\*・・\*・・\*・・\*・・\*・・\*

　――１０階ゲート部屋。

　転移してみれば目の前にヘルムを被った軽鎧の男女が立っていた。こちらに気づくと顔を覆っていた金属の部分をくいっと上げて話しかけてきた。

「颯太か。もう学校の試験はいいのか？」

「あら、丁度私達もお買い物にきたところなのよー」

　親父とお袋だ。鎧を着ているということは店の仕入れのために来たのではなく、狩りをしていた帰りなのだろう。オババの店の前には妹の姿も見える。

「おにぃー！　パパもママもレベル１３になったよー！」

「レベル１０を超えたくらいからお腹も引っ込んできたし、お肌にツヤが戻ってきた感じがするのよね」

「ますますママは綺麗になってるな。そういえば俺も肩こりが無くなったし本当に若返ってきたのか？」

　さっきまで１５階の処刑場で“モグラ叩き”をしていたようでレベル上げも順調。肉体強化による若返り効果が実感するくらいまで表れてきたと喜んでいる。ゲームでもレベルアップすると肉体の最盛期に近づくとかいう設定があったけど、プレイヤーは誰もが高校生だったので意味のない死んだ設定であった。仮に親父たちがレベル５０くらいまで上げてしまったら一体どこまで若返るのか気にはなるな。

「明日もまた処刑場とやらに行くけど、颯太も来れるのか？」

「いや、明日もクラス対抗戦に行かないといけなくなっちまったんだ」

「えぇ～！　明日はブラッディーなんちゃらまとめて倒したかったのにぃ」

　兄ちゃんはな、大切な仕事を頼まれて忙しくなっちまったんだよ。本来はクラス対抗戦なんて初日でちゃっちゃと終わらせ家族でレベル上げの時間にしようとしていたのに。まぁ俺がいなくても３人で安定して回せてたと言うし大丈夫だろう。

「あ、サツキねぇからメールきたっ。明後日くらいから来ていいって。やったー！」

「行くときはちゃんと仮面とローブを付けていくんだぞ」

　どうしてもクラス対抗戦に参加したかったようで何度も催促のメールを送っていたところ、ついに来ていいと返事がきた模様。あまりはしゃぎ過ぎないよう上手く華乃をコントロールしてくれと俺からもお願いのメールをしておこう。

『絶対におかしい。少し探りを入れてみたほうがいいかもしれない』

「それは……いや、何か分かったら連絡をくれ。健闘を祈る」

『あぁ。ナオトも。それじゃ』

　クラス対抗戦３日目。朝の定時連絡と報告を終え、ユウマとの通話を切る。予想以上に芳しくない状況に思わずため息をつく。

　僕達の当初の作戦では、浅い階層が主戦場である前半戦――つまり今日までにできるだけ点数を稼いで逃げ切るというものであった。そのためには最低でもＤクラスを上回る点数を獲得しなければいけない。後半戦は主戦場が５階以降になってしまうため、平均レベルが低い僕らＥクラスでは不利な戦いとなってしまうからだ。

　しかしながら指定ポイント到達を率いるユウマから届いた報告によれば、今まで８回やって全て最下位。上位のクラスどころかＤクラスにすら一度も勝てていない。

　指定ポイント到達はランダムに決められたポイントへ着順を競う種目。スタート位置は自由なのでポイントが発表されたとき、近くにいるクラスが大きなアドバンテージを得ることになる――はずなのに。

　ユウマ達はＤクラスより大分近い位置にいたときでさえも先を越されてしまっている。道中にモンスターだってたくさんいたはずなのに、とても倒して進んでいるとは思えない早さだったという。

　当然、倒さずに引き連れていけば後ろにはモンスタートレインが出来上がる。そのような迷惑行為が発覚すれば一般冒険者や他のクラスに通報され、一発で試験失格というペナルティを負うことになる。Ｄクラスが未だ失格していないということは何かしらの手段でモンスターを処理しているのだろう。だが、その手段とは何か。

　最初に思いついたのはやはり助っ人の存在だ。出会ったモンスターを助っ人に押し付けてしまえば戦闘時間を大幅に削減でき、多少スタート位置が悪かったとしても挽回は可能。しかしこれは手元にある報告と相反してしまう。

　考えをまとめるためにも隣で聞いていた彼女と意見交換をしておいたほうがいいだろう。

「新田。先ほどの報告についてどう考える」

「ん～。Ｄクラスの助っ人って、全員がトータル魔石量のサポートに付いてたはずよね～？」

「あぁ。大宮の情報が確かならな」

　助っ人の存在が発覚したときはクラス内が動揺し大きく荒れた。ユウマや磨島たちの懸命な説得により今は何とか鎮静化できているが、これ以上Ｄクラスと点数差が広がることになれば自暴自棄になるクラスメイトが出てきてもおかしくない。そうなったらＥクラスの士気はドミノ倒しのように崩れていく。

　早急に対策を立てるためにもＤクラスの助っ人がどれくらいの強さで何人いるのか調べる必要があった。その調査を買って出たのが大宮だ。

　その後、数時間でどうやって調べたのかは分からないがリサのもとに詳細な報告が上がってきた。それによれば太陽のバッジを付けたレベル８前後と思われる冒険者６名が、Ｄクラスのトータル魔石量グループをサポートしているのを確認。それ以外の種目に助っ人の姿は見当たらなかったとのこと。

　大宮の情報を前提に戦略を練り直して何とか巻き返しを図りたいところだが、先ほどのユウマの報告によると、トータル魔石量だけでなく指定ポイント到達にも助っ人がいる可能性を示唆している。つまり大宮の上げてきた報告と矛盾しているのだ。

「う～ん。サツキの情報は信じていいと思うの。でも指定ポイント到達は何か秘密があるのは確かね～。例えば……」

　新田が人差し指を頬に当てながら思考を巡らす。これまでは大人しかったものの、昨晩当たりから積極的に意見を言ってくれるようになったのだ。彼女の知恵と才覚には大いに期待している。

「Ｄクラスはトータル魔石量を～、指定ポイントのサポートに付けている。とかかな～？」

「ふむ。確かにそれなら説明は付く。しかし……」

「点数配分の多いトータル魔石量を犠牲にしてまで、サポートに回すのはおかしいよね～」

　現在、指定ポイントは４階から５階が舞台。サポートしながら魔石集めだってできないことはないが、収集効率は確実に落ちる。おかげで魔石量勝負ではサクラコとカヲル達の奮闘もあり、僕らのクラスがＤクラスを上回ることができている。

　ただでさえＤクラスは到達深度グループが全員リタイアするというアクシデントに見舞われているわけで、このままトータル魔石量も落としたならＥクラスに逆転……まではいかなくても肉薄されることになる。それは散々僕らを馬鹿にしてきた彼らにとって屈辱的なことだろうし、この現状を放置するとは思えない。

「やっぱり妨害を仕掛けてくるのかな～。希望を持たせておいて最後に叩き落とすみたいな」

「もしものためにサクラコとカヲル達にはあまり離れず動くよう指示しておくべきか」

「でも～あっちにはサツキもいるし、大丈夫だとは思うんだけどね。それに特別な助っ人も頼んであるし～」

「特別な……助っ人だと？　それはどんな人物だ」

　僕らＥクラスが苦境に追い込まれているのは平均レベルの低さが一番の理由であるものの、他クラスに付いている助っ人の存在も大きな要因であった。だが、僕らにも助っ人が来てくれるなら話は別だ。逆転の目だって出てくるかもしれない。一体どれほどの者なのか、実力次第では戦略の幅も変わってこよう。食いつくように聞いてみると――

「ふふっ。内緒♪」

　新田は口に人差し指を当て、いたずらっぽく笑うだけで教えてはくれなかった。

　\*・・\*・・\*・・\*・・\*・・\*

　――　早瀬カヲル視点　――

「おかしいわ。ここもモンスターが見当たらない」

「これは狩られてるねっ。もっと奥に行ったほうがいいのかなっ？」

　二日目までダンジョン４階を狩場としていたものの、戦闘に慣れてきたこともあり今日からサクラコ達とは別行動で５階入り口付近に狩場を移すことにした。しかし周囲のモンスターは狩り尽くされているためかほとんど発見できず、奥に狩場を移したのだけど……ここも同じ。どこかの集団がこの辺り一帯で狩りを行っているのかもしれない。

　ただ立っていても時間の無駄なのでさらに奥へ行こうと大宮さんが提案してくる。

「５階に来てからまだちょっとしか戦闘をできていないし慎重にいくほうがいいと思うのだけど。ただでさえ一人少なくなってるのよ」

「でもっ、せっかくＤクラスを上回る成績を上げられている今、手を緩めるのは勿体ないと思うなっ」

　月嶋君が「でっかい魔石を取ってきてやる」と言って勝手にどこかへ行ってしまい、私達のグループは一人少なくなってしまったのだ。全く……心配する私達の身にもなって欲しい。

　それでも嬉しい誤算はあった。大宮さんが想像以上に戦闘慣れしていたのだ。メインタンクを私以上に上手く熟せたため、戦闘回数を飛躍的に伸ばすことができ、安定感も増した。

　磨島君やユウマのいる種目が苦戦を強いられ、さらには上位クラスの助っ人の存在が明るみとなりクラスメイト達が意気消沈していた中でも、私達トータル魔石量グループはそれなりの成果を上げて士気も保っていられた。それも全て彼女のおかげといっても過言ではない。

　ここで手を緩めず魔石量を稼ぐことができれば、後半に失速するであろうクラスの勢いに火を付けられるかもしれない。私と大宮さんがいれば多少の無理も効くしやってみる価値はありそうだ。

「それならもう一度だけ奥に行ってみましょうか。ここからだと……安全地帯が近くにある、あの地点がいいかしら」

「それじゃみんなっ、もう少しだけ移動しましょ」

「はーいっ」

　今のところ私達トータル魔石量グループは上手くいっているせいかメンバーも小気味好い返事で応えてくれる。最初はどうなるかと不安に思っていたけど、この調子でいけばクラス対抗戦をきっと乗り越えていける。たとえ勝てずとも今後に期待だって持てるはずだ。諦めてなるものか。

　でも、こんな奥までモンスターがいなくなるなんて、珍しいことがあるものね。

　南へ２ｋｍほど歩き、目的の狩場へと到着する。モンスターがポップしない安全地帯もここから近いので疲れたときに休憩することもできる。ここまで来ればモンスターがいないなんてことはないだろう。

「それじゃ早速釣って……ちょっと待って。何かが向こうからっ」

「どうしたの……えっ？」

　大宮さんがモンスターを釣ってこようと一歩踏みでたものの、異変に気付いて耳を澄ませる。振動というより小さな地響きのようなものが私にも感じ取れた。これは良くない音だ。

「誰かがモンスタートレインをやっているよ！　それも普通じゃない規模！」

　クラスメイトが双眼鏡を取り出し様子を伝えてくれる。２００ｍほどまで迫り、ようやく全体像が見えてきた。あれは……オークロードだ！

　頻りに鳴き声を上げながら走っている。あそこまでオークが興奮しているのは何か挑発するようなことを繰り返しやっていたはずだ。後ろに続くのはオークソルジャー、少なくとも５０体以上が召喚されている。あれほどの大規模トレインに巻き込まれてしまえば私達とて無事では済まない。一刻も早くここから離れるべきだ。

「見てっ、あそこ！　三条さん達がいるよ！」

「え？」

　オークロードが向かっている先に目を向ければサクラコ達のグループが散り散りになっている姿が見えた。統率なんてものはなく個々が別々の方向に走って逃げている。たとえトレインからの逃走が成功したとしてもサクラコ以外のレベルは５に満たず、単独行動中にモンスターと出会ってしまえば命取りになる。どうすればいいの。

「落ち着いてっ！　私が行くからみんなは一塊になって来た道を戻ってっ！」

　大宮さんは腰からナイフを取り出してあの中に一人で行ってくると言う。無茶だと叫ぼうとするものの、誰かがあのトレインの進行方向を変える以外に救う手立てがないのも事実。だけど――

「私は大丈夫。早瀬さんっ、みんなを頼んだよっ！」

　アタフタとしている私の目を見ながらそう言うと、恐るべき速度で走り去っていく。見ればトレインが今にもクラスメイトの前で解き放たれようとしている。ここは大宮さんを信じて動かなくてはならない。

「みんなっ、こっちよ！」

　ダンジョン１３階。枯れた草木しか生えていない荒れ果てた丘の上で、到達深度一行は夜を過ごしている。

　この丘は通称「風の丘」とも呼ばれている安全地帯で見渡しが良く、冒険者によく利用されているキャンプ地だ。しかし高所ＭＡＰのせいか気温が低く、冷たい風が吹き付けてくるので非常に肌寒い。

　持って来たパーカーを羽織り、すっかり冷たくなった手を焚火にかざして温める。こうして寒風に吹かれながら雑魚寝をする生徒は一般庶民の俺と、Ｃクラスの面々だけである。

　貴族のみで構成されているＡクラスとＢクラスは、丘のてっぺんにお付きが持ってきた簡易組み立てハウスを建て、そこに寝泊まりしている。空調や灯りの魔道具も完備されており非常に快適そうだ。元の世界ではあんな物は無かったので構造や内装がどうなっているのか興味をそそられる。

　そんな静まり返った夜の丘に、少女の声が木霊した。

「しかし兄上っ、私はまだいけます！」

　Ｃクラスの到達深度グループを指揮する物部芽衣子ちゃんだ。話しかけている相手はボロボロのマントに傷だらけの黒い鎧、真っ黒い牙の生えた般若の仮面という、夜道で出会ってしまったらチビってしまうこと間違いなしの不気味な男。芽衣子ちゃんのお兄さんだという。

　遠目からは粗末な装備に見えるが、よく見てみれば身に着けているもの全てに魔法が付与されており、そこらの冒険者と一線を画している。特にあの般若の仮面は複数アビリティが付いたユニークアイテムであろう。あんなモノを一体どこで手に入れたんだか。Ｃクラスの助っ人として来たようだけど、こんな化け物みたいな男を寄こしてくるとは、鷹村君に自重という単語を教えてやりたい。

　その化け物お兄さんは低い声で諭すように言い返す。

「……お前の仲間の状態はどうだ。人を率いる身ならよく見定めなければならない」

「くっ……」

　Ｃクラスの到達深度グループの平均レベルは１２から１３ほど。クラスでも実力者だけで構成されており、この１３階でも十分に戦えるレベルではある。しかし今は疲労のため早々に寝込んでしまっている。

　物理攻撃が通じないレイス対策をするために魔法系ジョブを何人も連れて来たようだが、不運にも連戦となり何度かＭＰを切らしてしまった。一度ＭＰ切れを起こすと疲労困憊となってしまうため、リーダーである芽衣子ちゃんが戦闘タイミングや引き際を見極め、後衛のＭＰを管理すべきだったと言っているのだ。

「でも、兄上が来てくれたのなら進めますっ」

「俺は手伝わない。お前らの成長を見守るために来ただけだ。進みたいならもっと強くなれ」

　確かにこの人が手助けしてくれるなら２０階にでも行けてしまうだろう。だけど手伝う気は全くないようで、妹の頼みをあっさりと拒否してしまう。大切なのはＡクラスに上がることではなく強さを手に入れること。手段と目的を履き違えるなと厳しい言葉を投げる。芽衣子ちゃんは涙目だ。

　とはいえお兄さんが言うことも一理ある。冒険者大学進学を目指しているならともかく、一流の冒険者を目指すなら強さこそが正義だろう。これ以上進めないと言うのならレベルを上げて経験を積み、強くなってから再挑戦すればいい。

　だが一切手伝わず、妹を見守るという理由だけでこんなところまで出向くとは……さてはシスコンだな。

　温かい茶を飲みつつそんな兄妹の会話に聞き耳を立てていると、芽衣子ちゃんは「もういいですっ！」と言って不貞寝してしまった。Ｃクラスの仲間の前では気丈な姿を見せていたものの、お兄さんの前では可愛い妹になるのは中々ポイントが高い。一体どういう教育をしてきたのか、参考にしたいところだ。

「……悪いな、変なところを見せてしまって」

「あ、いえ」

　見張りは般若のお兄さんがやってくれると言うので俺も遠慮なく寝ようかと考えていると突然ぼそりと話しかけてきた。この薄暗い中でもその仮面を外さないのは怖いんですけど。

「成海といったか。どうしてお前ほどの奴が荷物持ちなんてしてるんだ」

「お貴族様に頼まれまして……って。お前ほどとは？」

　どういう意味だろう。この人の前では一度も強さなんて見せていないし、《フェイク》だって見破られた形跡もない。装備だってうちの店でホコリをかぶっていたお古の豚革鎧だ。もしかしてこの俺の溢れ出るスター要素を見抜いてしまったとか。

「この階のモンスターを見てもお前の瞳にゃ恐れが全く見えなかった。それに俺の勘が……お前は只者ではないと言ってくるんだ」

「はぁ」

　モンスターは常時弱い《オーラ》を垂れ流している状態なので、普通であるならば格上モンスターを見ただけでも恐れおののくものだという。そういえば俺も初めて格上のオークロードを見たときはチビりかけた記憶がある。これからは怖がるフリくらいはしておくべきだろうか。

　クックックと喉を鳴らしながら「冒険者学校のＥクラスにゃたまに出るんだよ、真正の天才が」などと独り言ちる。なんでもＥクラスにはカラーズのリーダーである田里虎太郎のように定期的に天才が出てくるそうだ。でも俺は天才なんてものではなく、ゲーム知識チートを使ってズルしているだけである。

「今後も貴族からちょっかいを出されるだろうが、お前ならどうとでもなりそうだな。ということで俺んとこに来てみねーか？」

「……俺んとことは？」

「俺のいるクランだ。リーダーもお前を受け止める器は十分あると思うぜ。まぁ気が向いたら考えておいてくれ」

　何を言っているのだろうか。くノ一レッドのようにキャッキャウフフができそうなクランならば考えなくもないが、こんな不気味な男がいるクランなど正直行きたくはない。メンバーでこれならクランリーダーは間違いなく妖怪か何かの類であろう。

　さてと。明日も早いというし俺もさっさと寝袋に入るとしよう。

　\*・・\*・・\*・・\*・・\*・・\*

「――おい、起きろ」

　コツンと頭を叩かれたので目を開けてみると、何人もの黒服が俺を見下ろしていた。何事だろう。眠い目で時計を見てみれば……まだ真夜中の１時じゃないか。

「ボスがお呼びだ。今すぐに来い」

　ボスって誰だと思ったけど俺を見下ろしていた全員が黒服で、胸には“天”というマークが付けられていることから、天摩家の執事達だと分かる。執事長でも来ているのだろうか。

　こんな真夜中の呼び出し。しかも不愛想に睨みつけて起こしてくるとは嫌な予感がヒシヒシとするぞ。といっても断れそうな雰囲気でもないので仕方がなく付いていくことにした。

　冷たい夜風に吹かれつつ執事の後を数分ほど歩いてついていくと、十人ほどの黒ずくめ執事達が椅子を輪のように並べて座っているところに案内される。その中央には黒いワンピースに大きなフリル付きの白いエプロン、黒髪にカチューシャと、これぞメイドというような女の子が足を組んで座っていた。

　彼女以外は男女共に全員黒服のスーツを着ているというのに、一人だけメイド姿なのでこれまでの道中でも目立っていた。どうやらこの方がこの執事達を取り仕切るボスらしい。

「よくぬけぬけと顔を出せたな、小僧」

「え？　え～と……」

　仇敵をみるかのように憎々し気にこちらを睨みつけているメイドさん。俺の知っている彼女と違う人なのだろうか。

　ゲームでは天摩さんを攻略し恋人関係になると、セットで仲良くなれる天摩さん専属のメイドがいた。よく気が利き、いつも笑顔を絶やさず甲斐甲斐しく主人公の世話をしてくれるので、他のヒロイン達に並ぶほど人気のあるキャラだった。ダンエク運営にも攻略させてくれと多くの要望が寄せられたほどだ。

　だというのにこの態度と言葉遣い……そして狂暴な表情。さては双子のお姉さんとかいうパターンだな。顔の作りは似ていても同一人物とは思えない。

「目的は何だ。正直に答えろ」

「目的とは？」

「巧みな話を持ちだしてお嬢様に近づいただろう！」

　周りの黒ずくめ執事達も一緒になってギロギロと睨みつけてくる。巧みな話って、ダイエットのことだろうか。

　天摩さんは天摩財閥グループ総帥の一人娘でとても可愛がられており、執事達からの信頼も厚い。そこに得体のしれない男が近づいてきたら警戒くらいはするか。

「別に他意なんてないですよ。天摩さんとは友達として話していただけです」

「と、と……友達だとぉ？　き、貴様ぁ！」

　突如、般若のような形相になって怒り狂いだす。見ていた周りの執事達もさすがに危ないと思ったのかメイドさんの腕を掴んで止めに入ってくれた。あまり馴れ馴れしい事は言わないほうがいいかもしれない。

「分かっているとは思うがお嬢様に指一本でも触れてたら……お前は即あの世行きだからな」

「ええ、分かってますよ」

「お嬢様を泣かせたらただではすまさんからなっ！」

「誠心誠意努力しますとも」

　このメイドさんや執事達がどれほど天摩さんを愛しているのか、プレイヤーなら知っている。目の前にいる彼らは貴族やクランの対立、抗争などで追われたり行き場をなくしていた元冒険者達。それを天摩家直属のボディーガードとして黒服を与え囲ったのが天摩さんなのだ。窮地を救った上に保護までしてくれた天摩さんと天摩家に対する忠誠心は揺るぎないというのは分かるけど、ちょっと過保護すぎやしませんかね。

「それと……あの男と何を話していた」

　ガルルと牙をむくように威嚇したと思ったら、急に真剣な表情になるメイドさん。一人で焚火を眺めている般若のお面をした男を指差して言う。俺もあの人のことはよく知らないのだけど誰なんですかね。

「世間話というか。まぁ大した話ではないです。どういった方なんですか？」

「アイツが人と話すとは珍しい……いや、何もないならいい」

　メイドさんは一瞬酷く真剣な顔で思案したと思ったら、お前はもう用済みだと言わんばかりにシッシと手で払いのけてくる。思ったよりあっさりと開放してくれたのは助かったけど次回からはもう少しお手柔らかにお願いしますよ。

　うぅ、冷えてしまった。さっさと戻って寝袋に包まるとしよう。

　\*・・\*・・\*・・\*・・\*・・\*

　翌日。１４階へと続くメインストリートを歩いていると、隣にいた天摩さんがおどけながら言ってくる。

『あんな凄い人が助っ人に来たっていうのに帰っちゃったねー。ウチのクラスでもヤバいかもって声が出てたんだけど』

　そう。Ｃクラスがこの１３階でリタイアすると言って来たのだ。芽衣子ちゃんは不本意な顔をしていたものの、後ろにいるメンバーの顔を見るに疲れが抜けきっておらず、お兄さんの助力も得られないとなればリタイアせざるを得ないだろう。この悔しさをバネにした彼女がどう成長するのか、楽しみでもある。

　ということで俺も便乗してリタイアしたいと伝えにいったのだけど、予想通り荷物運びを続行しろと強要されてしまった。なんでもＡクラスとＢクラスの話し合いにより２０階まで行って同時優勝にしようと決まったそうで、恩着せがましく「荷物持ちをするならそこまでタダで連れてってやる」と言ってきたのだ。

　ＡクラスもＢクラスも１位を狙うために高レベルの助っ人を大勢連れてきたはいいけど、そのせいで危険な２１階以降まで勝負がもつれ込むことが確定的となってしまっていた。このままでは大事な家来である助っ人達に被害が出かねず、２０階で手打ちにしたというわけだ。

　問題はそれを言いだしたのが周防だということ。ライバルである世良さんや普段見下しているＥクラスと仲良く同時優勝しようだなんて、ゲームの周防を知ってる俺からしてみたら裏があるとしか思えない。謀略の可能性が疑われる。

　それでもＡクラスやその助っ人達には手練れも多く、これだけの人に囲まれていれば周防が策を弄したところで成功するとも思えない。天摩さんも執事達の危険を回避できるならと手打ちを支持したようだ。

　俺としてはこれ以上Ｂクラスの戯言に付き合う気など無かったのだけど、同率１位が取れるなら大きく出遅れているＥクラスに堂々と貢献できる言い訳も立つ。

（それに……天摩さんもいるしな）

　隣ではフルプレートメールを着た天摩さんが鼻唄を歌いながら軽やかなステップで歩いている。Ａクラスのお仲間とは打ち解けていないようだけど、俺とは気兼ねなく話してくれてとても楽しいのだ。そんな彼女が一緒に行こうと誘ってくれたから、行ってもいいかなという気持ちになったわけだ。

　それでもあまり近づくと後ろの離れたところから監視してるメイドさんや黒執事に睨まれるので、距離には注意しないといけない。

『でも成海クン。“黒歯”と色々と話してたようだけど、知り合いだったの？』

「こくし？」

『うん。称号……二つ名のようなものだね』

　なんでもあの般若のお兄さんは日本最大の攻略クラン“十羅刹”の大幹部だとか。芽衣子ちゃんは鷹村君のお付きだったしそのお兄さんも十羅刹の関係者とは思っていたが、まさか幹部だったとは。

　十羅刹は貴族やクランとも度々衝突するなど抗争の絶えない超武闘派クランだ。彼はそんな幾多の抗争の中で敵対する幹部や組織を次々と滅ぼして頭角を現し、二十歳そこそこで巨大組織の幹部に抜擢された超アブナイ奴なのだそうだ。

　話していてもＰＫと相対しているような感覚はあったし、かなりの数を殺めている気もしていた。ゲームでは十羅刹の名前だけはよく登場していたものの、実際にどこかと戦っていたり幹部が出てくるようなシーンはなく、俺も大した情報は持ち合わせていない。

『あそこはおかしなのが多いけど黒歯は特に危険な奴だねー。大貴族の豪邸に単身で乗り込んで百人いた護衛を皆殺しにしたって話も聞いたし。ウチの執事達も神経を使ってたよ』

　血祭りにあげた者は数知れず。あの般若の仮面を見ただけで震え上がる貴族も多い。そんな人物がこのクラス対抗戦に姿を現したときは、ＡクラスやＢクラスの助っ人達にも緊張が走ったほどだという。メイドさんもそれで気になって俺に聞いてきたのだろう。

（貴族と揉めるだなんて御免だし、できれば近づきたくはないものだな）

　相手が誰だろうと厭わず武力衝突を繰り返してきたせいで周りは敵だらけ。最近も大きな抗争があったばかりだという。どんな主義主張のために戦っているのかは知らないけど、そんな危険な組織とは距離を取っておくに越したことはない。ま、今後会うことも無いだろうしどうでもいいか。

　到達深度一行は緩やかな勾配の道をゆっくりと歩いてなおも移動する。時々アンデッドが出没するので長閑な場所とは言えないけど、大集団の中にいる限りは戦闘なんてする必要もなく、こうして話に花を咲かせながら進めている。気楽な道中である。

　問題があるとすれば、その大集団の中に久我さんが紛れ込んでいることくらいだ。

　荒れ果てた丘陵地帯を抜けた到達深度一行は、アンデッドの彷徨う真っ暗な森を一塊になって歩いている。

　不気味な木々が周囲を取り囲むように生い茂っているため視界は非常に悪く、奇襲を警戒しながらの移動。次の１９階へ行くのにこの道を真っ直ぐ進むだけなので迷うことは……ままあるのだ。

「構えぇ！　撃てェ！」

　誰かのお付きである弓部隊が横一列に並び、風属性が付与された矢を一斉に放つ。的は数十ｍ前方で道を塞いでいる樹木型のモンスター、トレント。近寄るとリーチのある枝を使って絞り上げる攻撃をしてくるので厄介だし、無視して行くにもこうやって道の真ん中を塞いでいるため暗く危険な森に入って迂回する必要がある。遭難する冒険者が後を絶たないのもそれが理由だ。

　それでもトレントの移動速度は遅く、こうして遠隔攻撃ができるならさして手ごわい相手ではない。

　一斉射撃により直径１ｍほどあったトレントの幹が抉られ、バキバキッと音を立てながら折れ曲がる。威力から察するにこの弓部隊はレベル２０を優に超えているだろう。普通は樹木に矢を撃ったところで刺さるだけだというのに、易々と大穴をあけている。

『周防家お抱えの弓部隊だねー。攻略クランでもあれほどの【アーチャー】を揃えるのは難しいんだよ。育てるのも大変みたいだし』

　隣で解説してくれる天摩さんによれば、【アーチャー】を育てるにはとにかく金がかかるという。先ほど使っていた矢もそこらで売っている普通ものではなく、大きな負荷にも耐えられるようミスリル合金を加工して作られている。あんなものを攻撃の度にポンポン撃っていたらどんな狩場でも出費に見合う収入なんて得られるわけがなく、散財は確実。なので【アーチャー】の背後には貴族やクランなどのパトロンがいる場合が多いのだそうな。

　逆に育ってしまえばこのレベル帯では最強ジョブの一角と言えるので大きな戦力を手に入れられることになるし、組織としても箔が付く。天摩さんもいつかは弓部隊を育てたいとしみじみ言う。

『音に釣られて近くのモンスターがやって来たみたい』

「魔狼よりは小さいけど格段に速いな」

『うん、しかも霊体だから草木を素通りしてくるよ』

　弓矢の衝撃音で近くにいた犬型の悪霊、バーゲストが集まりだす。一見ただの黒い犬のように見えるが、霊体なので物理耐性がある上、レイスなどと違って動きも素早く魔法も当てづらい。

　さて、どうするのかと見ていると、巫女服を着た女性が集団を割って前に出る。聖女機関に所属する世良さんのお付き達だ。軽やかなメロディーを奏でるような声で魔法の詠唱を開始する。

「慈愛に満ちたる光よ。汝に、安らぎを。《中回復》！」

　霊体やアンデッド相手には回復魔法が攻撃として作用するので、このアンデッド地帯においてヒーラーはアタッカーのような役割もできる。しかも回復魔法は大雑把な照準でも当たってしまう特性があるため、素早い動きのバーゲストにも問題なく当てられるのが強みだ。

　しかし回復魔法はＭＰ効率がとても悪く、また再使用のためのクールタイムも長いので乱発できないというデメリットもある。それを補うかのように後ろから別の巫女さんが出てきて次々に回復魔法を唱えていく。

『あれだけのヒーラーを集められる聖女機関ってどんなところなんだろうね』

「世良さんに聞けないの？」

『あんまり話をしたことないんだよね。今度聞いてみようかなー』

　先ほどの巫女さんが使った《中回復》にしても、損傷して時間がさほど経ってなければ歯の一本、指の一本くらい綺麗に再生させる効力はある。当然だが医療においても非常に需要が高く、びっくりするような大金だって動くときもある。そんなヒーラーを権力者や犯罪組織が放っておくわけがなく、過去には人間回復ポーションとして拉致監禁され社会問題となったほどだ。

　聖女機関は【聖女】を守るために作られた組織だが、そういった犯罪にあいやすく立場の弱いヒーラーを保護して育てる場所でもある。

　ダンエクでは聖女機関にまつわるエピソードは、世良桔梗ルートで名前や役割がちょろっと出てくる程度で、結局【聖女】がどういった人物なのかも分からず終い。それも世良さんに聞けば教えてくれそうな気もするけども、天摩さんはあまり話したことないという。苦手意識でもあるのだろうか。

　\*・・\*・・\*・・\*・・\*・・\*

　一行はその後も暗い森の中を歩き続け、ゴール一歩手前である１９階へとたどり着く。階と階を繋ぐ階段から２００ｍほどはモンスターがポップしない安全地帯なので今日はここで一泊だ。

　１９階ともなれば入り口広場であっても店などはなく、施設もコインロッカーや簡易トイレくらいのもの。この辺りでポップするモンスターは霊体のくせに素早いバーゲストや高火力の魔法攻撃を使ってくるスケルトンメイジなので、狩場としては非常に不味く、冒険者も通り過ぎるか手前の階層までしか行くことはない。おかげでこの入り口広場は到達深度一行の独占状態だ。

　遅い時間に到着したので各々はすぐに夕食の準備に取り掛かる。天摩さんとも食事のため別れることになった。

　貴族達はこのダンジョン内でもテーブルで食事をするということを徹底しているらしく、お付きがせっせとテーブルを組み立てて料理の準備をしている。また食事をするのも仲間内で談笑しながらではなく一人で食べることが多いようだ。未だ貴族の習性はよく分からない部分が多いけど、メンツというものを何よりも大事にしていることは何となく分かる。

（俺も飯の用意をするとしようかね）

　マジックバッグからコンロとそら豆型の飯盒を取り出し、米と水を注いでスイッチを捻る。米が炊きあがったら温めたインスタントカレーをぶっかければ夕食の完成だ。一般庶民はメンツなんてものを気にする必要がないので気楽でいいね。

　米が炊けるまで他の人らは何をしているのか、ぼーっと眺めてみる。戦闘をメインでやっていた助っ人達は防具を外し、武器の手入れを熱心にしていた。意外と女性が多いのは付き添う貴族の性別と合わせているからだろうか。

　他にはご飯を炊いたり大鍋をかき回している助っ人もいる。料理人もちゃんといるはずだけど貴族の分を作っているところしか見たことがない。

　そんな彼らに《浄化》の魔法をかけて回っている巫女さん達の姿も。

　《浄化》はデバフを解除する目的で使われる魔法だが、衣服や身の汚れを落とす効果もあり風呂に入れないときに大活躍する生活魔法でもある。助っ人達の中にもヒーラーはいるのに使えないのは聖女機関のみに伝わる隠匿された魔法だからだ。危険な魔法でもないのに公開しない理由は利権絡みなのか、巫女の価値を上げるためなのかは分からない。

　巫女さん達はＢクラスの助っ人まで順番に《浄化》をかけていたのだが、俺には待っていてもかけてくれずそのまま待機場所に戻っていってしまわれた。かける条件でもあるのだろうか。

（でもとっくに《浄化》は覚えているんだよね）

　こっそりと《浄化》を使って身の清潔を保つ。オババの店では普通にスクロールが売っているので、店に行けるならいつでも誰でも労せずに覚えることができる。ちなみにこの魔法は肌も綺麗になるらしく我が家の女性陣は風呂に入れるというのに毎日数回欠かさず使っている。

　その他に気になるといえば。

（まぁ……気が乗らないが一応声を掛けておくか）

　本当は最後まで気づかないフリして声をかけるつもりはなかったのだけど、ずっと跡をつけられ観察されるというのも落ち着かない。ここらで決着をつけておこう。

　\*・・\*・・\*・・\*・・\*・・\*

　離れたところにポツンと一人でカップラーメンを啜っている少女がいた。

　危険で薄暗い夜ＭＡＰなのにわざわざ帽子とサングラスをかけ、何かのキャラクターが描かれたトレーナにデニムのショートパンツという場違いな恰好。ひょっとして変装のつもりだろうか。

「やぁ、久我さんだよね。わざわざ俺を追ってきたの？」

　ゆっくりと顔を上げ、声をかけてきたのが俺だと分かると眉間にシワを寄せて不機嫌そうな顔をする……が、ラーメンを啜るのは止めない。性根がすわっているというか恐ろしくマイペースな子だ。

「……いつから分かってたの？」

「いつからって言われてもね」

　隠密スキルを使っていたとはいえ、そんなパリピのような怪しい格好でずっとつけてきたのなら気づくと思ったけど、ここ何日もの間ずっと助っ人集団に紛れ込んで同行していても誰も怪しむ人はいなかった。その変装にも効果があったということだろうか。もしくは助っ人同士、誰が参加しているのかお互いに把握していない可能性もある。

「尻尾をださないのは見事だけど、こんな階層で平然としている時点で十分怪しい」

「それは久我さんにも言えると思うんだけど」

　この期に及んでのんびりとラーメンを食べている人に言われたくない。そして何やら俺の背後を調べてたけど何もでてこないのは何故なのかと聞いてきた。妹や両親はそろそろ何か出てきそうなレベルになりかけてるけど背後に何かいるわけでもなく、正真正銘の一般人だ。

　それでも俺についてはどこかの国の諜報員だと断定してる模様。サングラス越しに俺の頭のテッペンから爪先までジロジロと見分してくる。いくら見たところで何かが出てくるわけでもないだろう。

「だから……もう手っ取り早く、その身に直接聞くことにする」

　つゆまで飲み干したカップを横に置くと、腰のホルダーから短剣を取り出して緩やかに立ち上がる。まさかここで戦う気なのだろうか。

「こんなところで戦って目立てば、久我さんも困るんじゃないの？」

「それは私と戦える実力があればの話。すぐに終わるから大丈夫」

　こちらに向き直りながら「尋問は長くなるかもしれないけど」と付け加える。どのような尋問なのかほんの少し興味はあるけれど、できれば優しく……いや遠慮しておきたい。

「もしかしたら俺のほうが強いかもしれないじゃないの」

「それはありえない。私が本気を出せば一捻り」

（確か、レベル２４で【ローグ】だったっけか）

　隠密や偽装スキルが豊富な【ローグ】は悪用されれば被害が計り知れず、国に忠誠を誓った者、あるいは特殊任務に就く者だけに制限されている隠匿ジョブだ。それは日本のみならず世界でも同じ。社会に危険を及ぼしかねない情報は国が徹底管理するというのがこの世界のルールのようである。

　そんな【ローグ】である久我さんももちろん普通の女子高生ではない。

　物心がついたときからダンジョンに入り、数多の戦闘訓練を施されたエリート中のエリート。現時点では世良さんや天摩さんでも勝てないし、上級生を含めても彼女より強い人は――まぁ、プレイヤーを除けばいないだろう。それだけの実力はあるのだ。

「私より速く動けたら……褒めてあげる。《アクセラレータ》」

　人差し指でサングラスを持ち上げながら呟くように発動させる久我さん。足元には移動力を高める風がまとわりついている。初手からそんなスキルを使ってくるだなんて多少なりとも俺を警戒していると見受けられる。

　お互いに身構えながらじりじりと間合いを詰め、一定の距離になると被っていた帽子を置き去りにして久我さんの体が横にブレる。死角からの攻撃で瞬時に決着を狙ってきたか。ならば、こちらも一撃必殺の構えで迎え撃つとしよう。

　体の重心を落とし手は若干前へ。これで――終わらしてやるっ！

「勘弁してくださいっ！！」

　高速土下座の構えだ。久我さんといえど年頃の女の子。目の前でプライドの全てを脱ぎ捨てて土下座している男がいたら堪らず躊躇してしまうだろう。もしかしたら動揺し怯えてしまうかもしれない。だが俺は心を鬼にしてでも心理戦で有利に立とう。さぁ、震えて手玉に取られるが――

「あいたっ、痛いですっ！」

「なんのつもり」

　無防備に下げている俺の頭を躊躇なく踏みつけてきたぞ。しかもぐりぐりとねじってきやがる。靴の裏がスパイクのようになっているせいかゴツゴツしてとても痛い。女王様気質でもあるんじゃなかろうか。

　とりあえず話し合いがしたい聞いてくださいと何度か懇願してみたものの、足をぐりぐりするのをやめてくれない。気がそがれたといって足をどけてくれたのは、それから１０分ほど経ってからのことだった。

「お見事ですぞっ！」

「さすが周防様！」

「秀逸な太刀筋でございました」

　空中でバーゲストが三分割にされて霧散し、カランと魔石が地面に落ちる。それに合わせたように周囲から拍手と歓声が沸き起こった。

　朝早くから周防が試し斬りに行くと言い出し、寝ていた助っ人はわけも分からず叩き起こされ太鼓持ちをさせられているというわけだ。ご愁傷様である。

　そんな周防達を、俺と天摩さん久我さんの三人がメイドさんに入れてもらったお茶を啜りながら見学している。

『偉そうなだけあって剣捌きだけは上手いよねー』

「……あんなの普通。だけど構えが何か変」

　ピカピカに磨かれたフルプレートメイルを着た天摩さんがトゲのある褒め方をすると、黒服を着た久我さんは何か違和感を感じると言う。

　確かに天摩さんの言うように剣の使い方は見事だった。飛びかかってこようとする動きを読んで一閃した後に、打ち込んだ刃先をすぐに反転させて斬る“燕返し”のような技は、見様見真似でできる芸当ではない。

　周防は刀を右手だけで扱い、左手は相手の攻撃を捌くために使うという肉体強化を前提とした剣術スタイルを取っている。剣も魔法も両用できるのでダンエクプレイヤーにも人気の構えだ。そも周防は“剣術を使う【ウィザード】”なのであの構えを取ったところで別におかしなところはなく、むしろ自然だといえる。

　ところが周りからは剣士だと思われており、先ほども魔法なんて使わず左手を遊ばせて右手で持った刀のみで戦っていた。そこに違和感があると久我さんは言っているのだ。剣と魔法両用というダンエクの戦術を知らなければ中途半端な構えと思うのも無理はない。

『あの刀もかなりのものだよねー。国宝クラスじゃないかな』

「……分不相応」

　刀身を見れば鈍く発光し、薄っすらと白い靄もかかっている。聖属性のエンチャントがかけられているのだろう。そうでなければ霊体のバーゲストを切り刻むなんてことはできやしない。

　エンチャントウェポンは３０階以降での入手が一般的なのだが、日本では３２階までしか攻略できておらず辿り着ける者もほんの一握り。入手できる数も非常に限られている。その結果、取引価格がとんでもないことになっているのだ。

　周防の親は大貴族というだけでなく、いくつもの企業を支配下に置く大資本家でもある。だからといって豪邸が建つほどの物をポンと高校生に買い与えるのはいかがなものか。それも庶民の嫉妬に過ぎないのだろうけど。

『まぁでも私なら勝てるね。付け入る隙なんていくらでも作れそうだし』

「……私でも勝てる」

『Ｅクラスのキミじゃ流石に厳しいと思うけどねー』

「……余裕。ついでに言えばあなたでも私に勝てない」

　天摩さんがヘルム越しに久我さんを睨む。今は天摩家直属の執事として匿ってくれているというのに、あまり失礼なことは言わないでほしいのだけども。ほら、後ろにいるメイドさんも殺気を放ち始めたじゃないか。

　どうしてこんな状況になったかというと、昨晩の――頭を踏まれたときまで遡る。

　\*・・\*・・\*・・\*・・\*・・\*

「同盟を組むって……何故」

「俺を調べたいのも、背後に何かいると思ったからでしょ」

　俺に後ろめたいモノなどない――こともないが、俺がプレイヤーでこの世界がゲームだったとか言っても頭が可哀想な子とみられるだけだし、仮に信じてもらえたとしても信頼関係が構築できていない現状では互いにリスクでしかない。

　それでも「何も言えない」と言ったら話が続かず終わってしまうので、興味を引くために「何かしらの秘密」は持っていると明かす。

「その秘密を今から体に聞こうと思っているのだけど」

「ひとまずこの足をどけてくれないかな。話しづらいんだけども……」

　地べたに頭を擦り付けて懇願するポーズで対抗したら、躊躇なく俺の頭を踏んできた久我さん。踏む力は手加減してくれているようだけど、ぐりぐりと捩じるように踏まれていると何とも言えない背徳感がやってきてしまう。

　ちゃんと話がしたいので足をどけてもらおうと土下座スタイルで１０分ほどかけて交渉し、ようやく頭を上げることができた。危うく後頭部がハゲてしまいそうだったぞ。

（さて。何の話から切り出すか）

　こちらをジト目で睨んでくる変な格好をした少女は、日本の冒険者関連情報を集めるために出身や経歴を偽って冒険者学校に入り込んだアメリカの諜報員――スパイだ。

　アメリカが日本の情報を集めているのは、この世界における日本とアメリカの仲が悪いという理由もあるが、スパイ行為なんて世界中がやっていることで別におかしいことではない。日本だって世界各国にスパイを送って情報を集めまくっているはずだ。何せ冒険者情報というのは国家安全保障における最重要のファクターなのだから。

　例えばカラーズのようなトップ冒険者集団が街中で本気で暴れたとしよう。もちろん人工マジックフィールド装置を使ってだ。そしたらどうなるか。

　片手で数百ｋｇを持ち上げ、１００ｍを数秒で走り、スキルを使えば家一軒くらい真っ二つ。そのくせ銃弾もまともに効かない超人達。こんな奴らを相手に戦うには同等の冒険者をぶつけるか、戦車砲やミサイルを雨あられのように撃ち込むしかない。人が多い中でそのような事態になれば大惨事である。そして問題は、このようなことが現実に世界で起こっていることだ。

　だからこそ各国は冒険者情報を血眼になって収集している。どこの国、または組織にどれほどの実力者がいて能力は、思想は何なのか。久我さんもそういった情報をつぶさに収集し本国に報告しているはずだ。

　もちろん課せられている役目はそれだけではないだろう。

　日本には固有ジョブの【侍】や、世界にたった数人しかない【聖女】の情報など超ド級の国家機密があるし、攻略クラン情勢や冒険者学校の育成法、生徒の個人情報など多岐にわたる情報収集の指令も下っているはず。朝に機嫌が悪いときは本国とのやり取りで忙しく睡眠不足になっていたというのがオチだ。

　そんな久我さんと同盟を組むというのは、リサやサツキのような共闘関係になるという意味ではない。学校生活においてソロでは動きにくい場面でも互いに手伝ったりアリバイ作りをしようじゃないか、という共犯の提案である。

「それはあなたが信用でき、使える人間かどうかが重要な判断要素となる」

「でもさ、今回だって勝手にクラス対抗戦から抜け出してきたわけでしょ？　カヲル達も怒ってるはずだよ。俺と口裏を合わせて「一緒に魔石を集めてた」というだけで大分楽になるんじゃないかな」

「……楽にはなるかも。でもあなたの狙いは何」

　俺の狙いか。もちろんある。それは「久我の叛乱」と呼ばれるイベントに対処するためだ。

　久我さんと親密になってメインストーリーを進めていけば、組織を裏切り主人公の仲間になるシナリオへと突入する。その際にアメリカからヤバイ奴らが粛清のために来日してくるのだが、こいつらを迎え撃つと冒険者学校含むこの一帯は戦場となり全壊してしまう。話し合いで解決なんてできるわけがないので、久我ルートに入ってしまえばこの破滅的な未来はほぼ不可避だ。

　逆に久我さんを攻略せず放置しておけば暗殺や諜報、破壊工作など何でも行う危険な敵キャラとなってしまう。こうなればもう後戻りはできず倒すしかないのだが、隠密スキル満載の彼女を探すのにも時間がかかり、その間にあちこち壊され、こちらのルートも被害甚大となる。

　このどちらの結果も阻止する手っ取り早い方法は“今すぐにでも久我さんを殺してしまうこと”なのだが……今の俺ではリスクが高いし、何よりそんな強硬手段は絶対に取りたくない。

　目の前の少女は悲劇のヒロインなのだ。孤児として生まれ、物心ついたときからダンジョンに入れられて戦闘を叩き込まれ、幸せというものを知らないマシーンのような人間になっている。そうでなければ生き残れないほどの過酷な幼少期を過ごしてきたからだ。

　しかしふとした切っ掛けで主人公と手を取り合うことになり、愛を知り、迫りくる過去と現実を乗り越えて、多くの人に希望を与えていける強い人間でもある。そのクライマックスシーンは涙無くして語れず、ダンエクでも名場面ランキング上位に入るほど。

　そんな彼女を排除するなんてもっての外。ダンエクを愛するプレイヤーならば彼女を救う以外の選択はありえない。そう、俺は救いたいのだ。

　だからその返答は――

「君の――笑顔さ」

「……キモッ」

　普段は物怖じしない豪胆な久我さんですら思わず一歩引いてしまうほどの笑顔で何とかごまかし、話題を変えることにする。

「とにかく。今後を考えて短期だけでもいいから手を組んでおいたほうがお得だと思うよ」

「何だか話をはぐらかされた気がするけど……戦う気がないのは分かった。でも調査は続けることにする」

　このまま手ぶらでは帰れない、俺のすぐそばで観察を続行すると仰る久我さん。だけどこの１９階からＥクラスの生徒をもう一人追加します、などと言えるわけがなく。

　どうしたもんかと一晩頭を悩ませた結果――

　\*・・\*・・\*・・\*・・\*・・\*

　翌朝。つまり今から１時間ほど前に黒服に囲まれた天摩さんと相談し、久我さんを直属の護衛として執事の仲間に混ぜてもらえないかお願いしたのだ。執事長であるメイドさんは俺を仇敵のように睨みながら反対してきたけど、主である天摩さんがＯＫしてくれたので無理やり丸め込むことができたのである。

　全ては計画通り。一件落着……と、そんな上手くいくことはなく。

『今のキミってウチ専属の執事なんだよね。その態度はどうかと思うんだけどー』

「私の方が強いと正直に言っているだけ」

　さも「当然のことを言っただけ」と気にも留めない久我さんに、ヤンノカコラと睨みつける天摩さん。遠くで観察している執事達もそわそわしている。もうちょっと空気を読んだ発言をして欲しいものだけど。

『まーウチより強いわけないし。面白い冗談だと思って許してあげようかなー』

　大目に見てあげようと胸を張り度量を示す天摩さん。Ｂクラスのみならず、Ａクラスの貴族ですら庶民に対しては見下すような態度を取りがちだけど、彼女はおおらかで我慢強く、誰に対しても目線を合わせて話してくれる。全くもって稀有な貴族だ。

　だけど――

「冗談なんて言った覚えはない」

　またもや空気を読まずに発言をしてしまい、ピリピリとした空気が場を包む。水と油のような二人を前に、この先待ち構える道中を想像した俺は静かに震えることしかできなかった。

　――　立木直人視点　――

　クラス対抗戦４日目。

　朝に発表されたばかりのクラス成績データを端末に取り込み、上位クラスとＥクラスの現状を一覧にして前半戦を総括する。結論から言えば現時点では大きく出遅れて最下位。

（しかも、Ｄクラスに引き離されている）

　クラス対抗戦の試験場所は日が経つにつれ深い階層へと移っていく。僕らの指定クエストもすでに５階がメインの戦場となっており、オークやゴブリン上位種との戦闘に時間を取られ自由に動けなくなりつつある。平均レベルが低いＥクラスは今後ますます不利になっていくことだろう。

　だからこそ、この４日目までにＤクラスと同等以上の点数が欲しかったのだが……手元のデータを見る限り目標に全く届いておらず、種目によっては目を背けたいほど悲惨な状況である。

「磨島の報告ではそれなりにモンスターを倒して点数も稼げていたはずだが、上位クラスと差が全く縮まっていない」

「Ｄクラスの指定モンスター討伐グループは刈谷君が率いているんだっけ。Ｃクラスを上回るとは凄いよね～」

　端末を高速でタップし状況確認していた参謀の新田が、微笑みながらいつもの柔らかい口調で答えてくれる。この厳しく絶望的ともいえる戦いの中で我を失わずにいられたのは冷静沈着な新田がいてくれたおかげ。感謝しかないが、それはさておきだ。

　Ｄクラスは刈谷含む精鋭を到達深度に集めるのかと思いきや、磨島の指定モンスター討伐にぶつけてくる作戦できた。ユウマを倒した刈谷の実力は並ではなく、Ｃクラス相手でも互角以上に渡り合えているというのも納得のいく話である。

　だが、Ｅクラスの精鋭を集めた種目が潰されてしまったのは非常に手痛い。この影響を最小限にするにはどうすべきか。

「磨島達の指定モンスター討伐は、明日から７階のモンスターも討伐対象になるが」

「Ｄクラスに追いつくことが望み薄なら～トータル魔石量のサポートに移ってもらったほうがいいかしら」

　６階においてもかなりのペースで倒し続けている磨島達なら、７階であっても狩りを続行できるかもしれない。しかし７階は見通しが悪い森ＭＡＰである上に魔狼がリンクしやすく、経験がなければリスクも跳ね上がる。６階と７階では狩りをする難度に雲泥の差があるのだ。

　そのリスクを承知で無理に狩りを推し進めたとしても刈谷率いるＤクラスに追いつく可能性は限りなく低い。ならば、新田の言う通り指定モンスターは捨てて他の種目に賭けたほうがベターだろう。磨島達にとってこの判断は屈辱だろうがクラスのために飲んでもらうしかない。

「では磨島には僕の方で伝えておこう……ふぅ。次にユウマたち指定ポイント到達だが、こちらも絶望的だ。負傷者まで出ている。おまけにＤクラスの助っ人がこの種目をサポートしていることが先ほど確定した」

「やっぱりモンスターを引き受けていたのかな～？」

　指定されたポイントまでの着順を競う種目で、Ｄクラスは経路のモンスターを倒しているとは思えない速度で何度も順位を上げてきた。

　必ず裏があるはずだとユウマが調査を行ったところ、同一クランと思わしき複数人の人物が手伝っている現場を確認したとのこと。その助っ人の写真もこちらに送られてきている。

「この胸に付いている太陽のマークだけど、ソレルに間違いないわね～」

「ソレルか……ふむ。それともう一つ、カヲルから送られてきたこの写真も見てくれ。この男だ」

　昨日、サクラコのグループがオークロードのトレインに襲われた事件があった。そのトレインを先導していたと思われる人物の写真がカヲルから送られてきている。

　先ほどユウマが送ってきた写真と見比べてみると、服装は違えど顔や髪型の特徴が一致している男がいることが分かる。走りながら撮影したせいか少しブレもあり断定はできないが、同一人物の可能性が非常に高い。

「やっぱり～昨日のトレインは作為的にぶつけられたってことなのかな？」

「あぁ。そう考えるのが自然だ」

　トレイン自体は別に珍しいことではない。逃げる際に不幸が重なりモンスターが連なってしまうことなんて日常茶飯事だからだ。しかしサクラコ達がいた場所はオークロードが出没するエリアから２ｋｍ以上も離れている。逃げるにしてもそんな長い距離を引き連れてくるものだろうか。

　それ以前にトレインを先導していたソレルの男はサポート対象であるＤクラスから離れて、あの場所で一体何をしていたのか。偶然オークロード部屋まで行き、トレインを作ってしまったとは考えにくい。どうみてもわざと連れてきてぶつけにきている。

　故意のトレインは悪質な殺人未遂事件として実刑が課せられる重罪でもある。これは冒険者資格を取るときに誰でも教わる一般常識だし、仮にも攻略クランに所属する者が知らないわけがない。昨日は数十のオークがサクラコ達の前で一斉に放たれたというし運が悪ければ、いや、普通に死者が出ていてもおかしくない状況だった。許しがたい行為である。

「でもこの段階でそこまでしてくるんだ～想定外だったかも。何かあったのかな」

「この写真を報告すべきか」

「うーん。被害はでなかったし追及は大変だと思うよ～？」

　確かに被害はでなかった。けれどそれはタイミングよく“助っ人”が来てくれたからだ。何とか懲らしめてやりたいという気持ちはあるものの、被害も無いなら立件できない可能性もある。無駄足は避けるべきか。

　そして、この助けてくれたという人物についてどうすべきかという問題もある。

　見た目は木製の仮面にボロボロの皮マントを着た小柄な女らしいが、オークの殲滅速度から見るに最低でもレベル１０。もしかしたらレベル１５に届くかもしれない実力者というのがカヲルの見立てだ。

　ただその人物は近くに立っていても存在感が極度に希薄で、目を離せばどこにいるか分からなくなってしまうという異常報告まで付いてきている。何らかのスキルかマジックアイテムを使っている可能性が高い。どこかの部隊、あるいは有名な攻略クランに所属している冒険者だろうか。どちらにせよそこらにいる普通の冒険者ではないことは確かなようだ。

「この仮面の人物について大宮から何か情報は入っていないか？　知り合いと聞いているが」

「身元の詮索はしないという条件で手伝いに来てくれたんだよ。だから、ひ・み・つ♪」

　新田は緩い雰囲気の割にガードは固く、どうにも情報を掴ませてくれない。あれほどの強者が僕らの味方についてくれるのなら今からでも様々な手段が取れるというのに。見守りに来てくれただけでも安全性が増したとはいえ、このまま遊ばせておくのは無駄がありすぎる。

「それにね～。助っ人の力でＤクラスに勝ったとしても、Ａクラスなんて夢のまた夢だよ」

（ぐっ……考えを読まれてたか）

　しかし新田の言う通りかもしれない。実際に戦ってみて分かったことだが刈谷率いるＤクラスとの実力差は嫌でも認識させられた。仮にソレルが助っ人に来なくても勝つことは困難だっただろう。実力も無いのに助っ人の助力で勝ったところで、その地位は砂上の楼閣に過ぎない。

　だからといって今回の試験を諦めてもいいというわけではない。勝てないまでも一矢報いることができれば次へと繋がる希望になるからだ。それは劣等と蔑まれた僕達に一番必要なものでもある。

「ふふっ。私達はまだやれるよね～？」

「もちろんだ。たとえユウマや磨島達が駄目だったとしても活路はまだある」

　当初の作戦の柱であったユウマと磨島グループの失敗は認めなければならない。僕らがどんな作戦の立案をしたところでこの二つの種目に逆転の目は無いだろう。だが予想外に上手くいったこともある。あのトレインの結果、レベル６の魔石が大量に手に入ったことだ。

　本来ならばあれだけの魔石を集めるのにトータル魔石量グループ総出でも丸一日はかかる。危険な目には遭ってしまったとはいえ、これを活かさない手はない。幸い怪我人もなく魔石集めも続行できると聞いているし、磨島達をサポートに付けて勝負する価値は大いにあるだろう。

　僕達の指定クエストも今のところＤクラスに食らいつけている。新田がクエスト内容を予測し先回りするという神業的なことをやってのけているからだ。学校の指定するクエストにどんな規則性があるのかは分からないが、このまま彼女の助言に従い効率よく点数を積み重ねていければ勝機もでてくるはず。

「あと何か忘れている気がするが、まぁいい。朝食を済ませたらすぐに次の準備に移ろう」

「ええ。でもソウタはどこまで行くつもりなのかしら……」

　残るは後三日。一種目だけでもいい。Ｄクラスに勝てるよう僕らにできることを精一杯やるまでだ。

　――　早瀬カヲル視点　――

「サクラコ、メンバーはどう？」

『少し落ち着いたところです。でもオークロードがいる階は怖いと言うので４階に戻ることにしました』

「……そう」

　サクラコのグループが巨大トレインに巻き込まれてしまった。メンバーは奇跡的に全員無事だったとはいえ恐怖は残る。自分よりも強いモンスターの殺意を一身に浴びてしまえば、その後も何事も無く狩りを続行するのは難しいだろう。

　死を覚悟しなければいけない状況に追い込まれるとタガが外れ、強くなる人もいる。でも大抵の人は恐怖で縮こまってしまうものだ。あのトレインはそれほどまでに絶望的な状況を作り出していた。

　４階に戻るとなると魔石収集効率が落ちてしまうけど仕方がないだろう。まずは時間をおいて少しでも自信をつけ、再起できるよう祈るほかない。

「わたしたちはしばらく５階で狩りを続けるわ。助っ人もきてくれたことだし」

『はい。でもその人……ううん、分かりました。何かあったらすぐに連絡くださいね。お互い頑張りましょう』

「ええ、サクラコも」

　朝の定時連絡を終えて通話を切る。一度折れてしまったグループを再びまとめ上げていくのは大変だろうけど、賢くも優しいサクラコならば対応を誤らず上手くやってくれるはずだ。それはそうと――

（あの人は何者なのか）

　大宮さんのすぐ隣に寄り添うように座っている小柄な冒険者。印象に残りにくい地味な恰好と華奢な見た目からは想像もできないほどの戦闘能力だった。大宮さんが呼んだと言っていたけど、あれほどの実力者とどう知り合ったのだろう。

　昨日のトレインがどう始まってどう収束したのか、今でも鮮明に覚えている。

　私達は誘われるようにあの場所に行き、オークロードが率いる数十体規模のモンスタートレインに遭遇した。遠くには散り散りになって逃げるサクラコ達が見えたときのことだ。

　\*・・\*・・\*・・\*・・\*・・\*

「早瀬さん、みんなを頼んだよっ！」

　そういうと大宮さんは短刀を抜いてあの中へ駆け出して行った。この緊急時に即断即決の行動力。私は動揺して身動きができなかったというのにリーダーとしての器の差を感じてしまう。しかし今はそんなことを気にしている場合ではない。

「みんな、こっちよ！」

　避難誘導を終えたら私もすぐに駆け付けねばならない。レベル５の彼女ではオークの一部をおびき寄せるだけで精一杯だろう。ここは私が決死の覚悟で飛び込んでオークロードを引きつける必要がある。そうでなければあれは止められない。

　急いでグループメンバーを集め、一塊になってまっすぐ入り口広場へ向かうよう指示する。またここで何が起きたのか、学校と冒険者ギルドの両方へ通報するようとも言っておく。これ以上被害を拡大させないためにだ。

　次にモンスタートレインが起きているという状況証拠をヘルプセンターへ送らなくてはならないので、走り出しながら腕端末のカメラを起動する。オークロードが目を血走らせて追いかけているあの男がトレインを作った張本人だろう。責任問題となる可能性が高く絶対に逃がしてはいけない。

　何枚か写真を撮っていると、物凄い速さでオークに突進している大宮さんが見えた。トレインの大部分を構成するあの“武具をまとったオーク”はオークロードが呼び出した特別な上位個体で、６階にでる魔狼よりも強いとされている。だというのに彼女は囲まれて殺意を向けられながらも恐れず、怯まず、次々と切り倒している。

（す、凄い！）

　オークの剣筋を鼻先で躱し、すれ違いざまに反転しながら短刀で一閃。周囲のオーク達も後ろからの襲撃に気づいたのか雄叫びと共に次々と剣を振り上げて殺到している。その数、十数体。その数多の剣戟を縫うように避けつつ有利な距離を保ち、一体ずつ冷静にカウンターを決めていく冷静かつ驚異的な動き。

　ダンジョンの戦いにおいて、多数の味方で一体のモンスターに挑むのが絶対的なセオリー。圧倒的多数相手の戦闘なんて慣れているわけがない。それなのに命の懸かったこの土壇場であれほどの戦いを繰り広げるとは。私とてあれは真似できるものではない。

　必要な写真を撮り終え、少しでもオークを減らそうと私も抜刀しトレイン後方につこうとする――が、前方に逃げ遅れたクラスメイトが恐怖のあまり蹲っているのが視界に入った。

　そのすぐ近くにまでオークロードが迫っている！

　邪悪な笑みを浮かべながら殺意に満ちた《オーラ》をまき散らすオークの王。一流の冒険者でなければ立ち向かうどころか相対することすらかなわない最凶のモンスター。これまでどれほどの冒険者があれに心を折られ、葬られてきたか。

　数十ｍも離れているというのに震えてしまう。果たしてあれと向き合えるだろうか。それでも行かなくてはならない。私が行かねばあの子はすぐにでも命を落としてしまう。震える足に活を入れ、歯を食いしばって走り出す。

　数体と交戦中の大宮さんもクラスメイトの危機に気づいたのか、無理やりモンスタートレインのど真ん中を突っ切ろうとする。

　しかしオークロードはもうその子の目の前まで迫り、巨大な棍棒を振り上げている。もう間に合わ――

（――えっ、なに？　一体何が起きたというの）

　突然、オークロードの巨体が鈍い音と共に真横に弾け飛んだ。そのまま空中で回転しながら１０ｍほどの距離にある岩壁まで吹き飛ばされ激突。そこで魔石と化した。

　間を置かず周囲にいたオーク達がオークロードと同様に次々に弾け飛び、または切り刻まれていく。よく見ればオーク集団のど真ん中を高速で動き回っている黒い影が確認できた。オーク達は間近で何が起こっているのか理解できていないようで激しく動揺し浮足立っている。

　そんなことはお構いなしに影はなおも容赦なく切り捨てていき、僅か１分足らずで数十体もいたオーク集団は一匹残らず駆逐されてしまった。後にはお面を被りボロマントをまとっている小柄な冒険者がポツンと立っているだけ。

　圧倒的な力を見せられ思わず竦んでしまったけど敵ではない……はず。それが証拠に。

「来てくれたんだっ！　ありがとー！」

　大宮さんが真っ直ぐ走っていって笑顔でお面の冒険者を出迎え、抱擁する。冒険者のほうも同じく抱きついているのできっと気心知れた関係なのだろう。

　足元には数十もの魔石が煌めいていて、先ほどまでの地獄が幻のように思えた。

　\*・・\*・・\*・・\*・・\*・・\*

　というのが昨日起きたことの一部始終。あわや大惨事というところだったけど、大宮さんとあの助っ人のおかげで全員無事だった。

　今思えばモンスターが狩られていたのも、私達をあの場所へ誘い込むための罠だったのかもしれない。トレインを先導していた男は逃げてしまったけど、証拠写真は撮れているのでナオトに状況報告と共にデータを送信し、判断は任せることにした。

（あの人についての報告は……どうしたらいいのだろう）

　危機から救ってくれたお面の冒険者は、休憩場所の片隅で大宮さんと肩を寄せ合って仲睦まじくお菓子を食べている。

　お面と古びたローブで体全体を覆っているので体格から判断するしかないけど多分女性だろう。ぱっと見た感じでは中学生くらいに見えるし、ローブ下には黒っぽい皮の鎧と小手――魔狼防具をしているだけなので全く強さは感じない。

　それでも巨体のオークロードを軽々と吹き飛ばし、上位個体のオークを一撃で斬り捨て、数十体の巨大トレインを瞬く間に壊滅させたのは夢でも幻でもない。それほどの強者なのに探そうとしないと目の前にいるのかどうか分からなくなる存在感の薄さ。何もかもがちぐはぐで素性が全く読み取れない。あの防具も魔狼製に見えるだけで、実は強大な力が秘められていたりするのだろうか。

　大宮さんの呼んだ助っ人だと紹介されたので、挨拶のために恐る恐る言葉を交わしたのだけど顔を背けて無視されてしまった。案外シャイな人なのかもしれない。

　そして謎があるのは大宮さんもだ。少なくとも何か隠しているはず。

　お面の冒険者ほどではないにせよ、あのときの動きと速さはレベル５のそれではなかった。私達のクラスで一番強いと言われているユウマより上と言われても納得できるくらいに。どうしてあれほどの力を隠していたのだろう。

　教室ではそれほど話す間柄ではないけれど誰にでも誠実で愛想がよく、あの颯太とも仲良くできる人格者ということは知っている。だからその大宮さんも、そしてその彼女が信じて呼び寄せたお面の冒険者も信じていいとは思っている。

　それにおかしなところがあったところで追及は後でいい。今はとにかくクラス対抗戦を全力で乗り越えなければならないのだから。

（……でも）

　あのお面の冒険者。たまに私のほうをじっーと見てくるときがあるけど何だろう。

『それでねっ、ほんとのギリッギリで華乃ちゃんが来てくれたんだよっ』

『今日も来ちゃったー！』

　サツキと仮面を付けたままの華乃とグループチャット。陽気な声で昨日あった出来事を伝えてくれているが、内容は深刻だ。

（トレインまでやってきたか……）

　ピンクちゃんがいたトータル魔石量グループがトレインに襲われたという。平均レベルが５にも満たないグループにオークロードなんてぶつけたら、どうなるかくらい誰でも予想できるはずなのに。

　最初は高校生の試験に助っ人が来たところで、嫌がらせ程度に抑えると考えていた。これはゲームでもそうだったからだ。だがやってきたことはＭＰＫ、つまり殺人未遂。将来を見据えて努力している高校生に大人が何をやっているのだ。

　それからリサが送ってきたトレインを主導したというこの写真の男には見覚えがある。いつぞや７階で華乃の足を斬りつけた男。背後にはソレルがいるに間違いない。まさかうちのクラスメイトにも攻撃を仕掛けるとはな。

　こんな悪質なことをやってソレルや上位団体にダメージがいかないと高を括っているか。それとも証拠さえなければ何をやっても構わないという考えなのだろうか。いずれにしてもここまでやってきたからにはもうただでは済まされない。というかこんなモラルの欠片も無く、有害でしかないクランはさっさと潰さねばなるまい。

　ソレルはいずれ潰す予定でいたが、放っておけばこの試験の最中にも何をしでかすか分からない。狙われたトータル魔石量グループにはガードを付けておくべきか。俺も２０階に着いたらすぐに引き返したほうがいいだろうな。

「華乃、時間あるときだけでいい。サツキ達を見守ってやってくれないか」

『うんっ。でも冒険者学校の生徒なのにどうしてこんな浅い階層で苦戦しているのかなぁ』

　それはね、お兄ちゃんと違ってゲーム知識を駆使できないからだよ。とまぁ、そんなことは言わないけども。

「また何かあったらすぐに知らせてくれ」

『うん、ソウタも気を付けてねっ』

「華乃はカヲルに正体バレないよう注意しろよ」

『はーい。でも全然大丈夫っぽいよ。あの人、鈍感みたいだし』

　はぁ……とため息をつきながら通信を切る。どうしたもんかね。ゲームではどんなルートだろうとここまではしてこなかったというのに。何が変わったのだか。

　頭を悩ませながらトボトボと休憩地点へと戻る。

「遅いぞ、糞野郎ッ」

　天摩家ブラックバトラーの長であるメイドさんが「お嬢様を待たせやがったら折檻してやるところだ」と拳を見せつけギロギロと睨みつけてくる。普段は清楚でお淑やかなお姉さまだというのに、近くに天摩さんがいないと容赦なく罵ってくる。ゾクゾクしてしまうではないか。

　見れば天摩さんはすでに昼食を食べ終わっており、出発に向けて執事達にフルプレートメイルを隈なく磨かれていた。汚れや傷一つ逃すまいとピカピカになるまで擦っているせいか光が乱反射して眩しい。一方、やや離れたところでお握りを齧っていた執事バージョンの久我さんが不機嫌そうな目でこちらを見ている。

「どこ行ってたの。逃げたのかと思った」

「逃げるもなにもこんな階層で……」

　ここはダンジョン１９階。古いレンガで作られた建物が立ち並ぶ廃墟ＭＡＰだ。とにかく死角が多く、さらにはスケルトンメイジやスケルトンアーチャーなどの飛び道具を使うモンスターが大量にポップする危険な階層でもある。遠距離攻撃対策も無しにのうのうと歩いていたらハチの巣になりかねない。

『それじゃ出発しよっか。黒崎、結界お願いねー』

「かしこまりました、お嬢様」

　メイドさんが恭しく頭を下げた後、ポットのような魔導器を手に持って“天”と書かれたスイッチ――天摩商会の商品だろうか――を押す。すると数秒ほどで半透明なドーム状の壁が現れた。これは遠距離攻撃を一定量防ぐ《アンチミサイル》の魔法が込められた魔導具だ。

　とりわけ危険な１９階の往来には、この魔導具の有無で大きく難度が変わってくる。個人なら隠密スキルを使えば事足りるかもしれないが、これほどの集団となるとそれもまず無理。パーティーで来るなら絶対に揃えておきたい必須アイテムだ。

　なお、この結界の大きさでは助っ人を含めた到達深度一行全員カバーすることはできないので、ＡクラスとＢクラス別れての移動となっている。

「天摩様、わたくし達も失礼しますね」

　取り巻きの貴族や助っ人と共に、世良さんが銀色に光り輝く髪を靡かせながら結界内に入ってくる。ダンジョン４日目だというのに一切の疲れを見せず、ダンジョンに入った時と同じ輝くような笑顔を振りまいている。

　だがこの階においても防具は着用せず、制服姿のまま。日本の国宝に指定されているアレはおいそれと着ることは許されていないのかもしれない。これだけ助っ人がいれば戦う機会などなさそうではあるが。

　そんな世良さんは相変わらずお喋りが好きなようで誰彼構わず色々な人に話しかけまくっているけれど、俺には一向に話しかけてくれない。むしろ視界に入っていないというか……もしかして《天眼通》で将来性が絶望的と判断されてしまったせいだろうか。長年憧れていたヒロインに全く相手にされなくなってしまい、この切なく寂しい感情にオラ挫けてしまいそう……

　――しかしだ。

　高校に入ってからはカヲルにセクハラなんて一度もしていないはず。それなのに何故に退学となってしまうのか、非常に気になるところではある。もしかして何をしようとも未来は変わらない、ということもありうるのか。

『それでねー黒崎が成海クンは野獣だ、性獣だと言ってくるんだけどどうなの？』

「どうなの、と申されても……」

「野獣だと思うけど、性獣の可能性も捨てきれない」

　隣には親しげに話しかけてくれる天摩さんと久我さんがいるので気分が晴れる……かと思いきや、何やら物騒な会話をしているではないか。メイドさんのほうを見れば黒い笑みでしたり顔だ。俺を近づけさせたくないのは分かるけど、こっそりと性犯罪者に仕立てようとするのはやめていただきたい。

　気分を変えるために周りの景色を見ながら歩く。

　この階層は直径１ｋｍほどの円状構造になっており、今までの階より狭いＭＡＰとなっている。とはいえレンガ仕立ての廃屋が所せましと敷き詰められるように建っているので、情報量は非常に多い。もしここに人が住んでいたら５万から１０万人くらいの都市になるのだろうが、今はアンデッドしかいない荒廃した死の都市となっている。

　街の中心に目を向ければ、いくつもの鋭利な塔が突き出た巨大建築物がそびえ建っているのが見える。高さが１００ｍ近くもあるゴシック様式の城である。あの城の中が今回の目的地、２０階だ。

　その城内は全域において安全地帯。内装も細やかな彫刻や色彩鮮やかなステンドグラスをふんだんに使われており、ダンエク時代は観光名所の一つでもあった。

『“悪魔城”に行くのは久しぶりだなー。二人は初めてだよね』

「もちろん初めてだよ」

「私も行った事はない。でも、どうして悪魔城？」

　当然行ったことはないと言っておく。この体では初めてなので嘘ではない。そういえばあの城にも悪魔城という名前が付いていたっけ。はて、理由はなんだったか。

『その昔にね、【聖女】様が伝説を作られた特別な場所なんだよー』

「【聖女】……それはとても興味がある」

　日本にダンジョンの入り口が現れたのは大正に入って間もない頃。出現当時は中に入る者なんてほとんどおらず、たった四人の冒険者が攻略を続けていたという記録が残っている。そのうちの一人が【聖女】だ。

　彼女らがやっていたダンジョンダイブとは、俺達のようにただ潜ってモンスターを効率よく倒しているようなヌルいダイブとはわけが違う。誰も踏み入れたことのない階層を攻略していくということは、情報も無しに凶悪なフロアボスを毎階層倒して進むことと同意義だからだ。

　例えば５階のフロアボスはオークロード――今は単なる隠しボス――なのだが、これを情報も攻略法も全く持たず、ぶっつけ本番で戦闘となったらどれほどの難度になるのか。レベルを上げて挑戦しようにもフロアボスを倒さねばその階層から先に行けないので十分なレベル上げなど当然できない。

　そんな状態なので攻略階層を一つ進めるだけでも死闘の連続なのである。やっていることは攻略クランの新階層攻略に近いが、それをたった四人でずっと続けていたのだ。命知らずにもほどがある。

　そして時は流れ、戦後まもなくの頃。

　この世界の“戦後”とは別に本土決戦などやっていないので日本は荒廃していたりはしない。むしろ魔石エネルギー特需のおかげでエネルギー産業が大きく育ち、好景気だったくらいだ。

　そんな経済成長期に日本政府は更なる魔石と資源を求め、２０階攻略を推し進めたわけだが……結果は惨憺たるもの。政府が手塩にかけて育て上げた子飼いの攻略クランが次々と半壊し、有望な若手も多く失われてしまったのだ。そのため奥の手として当時すでに引退していた【聖女】パーティーをわざわざ呼び戻して最前線の攻略に向かわせた、という経緯があったという。

『その舞台があの城で、中にいたのがかの有名な“大悪魔”ってわけさ』

「……攻略クランが束になっても勝てないのに、四人しか向かわせないなんておかしい。情報が操作されている可能性もある」

　確かにそれほど苦戦していたというなら【聖女】パーティー以外にも優秀な助っ人を追加で呼べばいいのに、何故四人だけだったのか。理由はいくつか考えられる。

　例えば【聖女】の機密情報がとんでものばかりなので誰にも知らせたくなかったとか。あるいは助っ人を呼んでいたことは伏せて【聖女】の功績を大々的に宣伝したかっただけとか。もしくは四人以外の冒険者など足手まといに過ぎないと考えていたからかもしれない。

　まぁとにかく、そんなこんなで【聖女】パーティーは見事大悪魔を倒し、無事に伝説となった。今でもその四人が多くの冒険者に崇められているのはそういった理由があるかららしい。

『ウチもその大悪魔がどんなのか見たかったけど、もう二度と出ないからなー』

「もう出ないって何故」

『フロアボスって一度倒したらでないんだよ。オークロードみたいな例外もあるけどね』

　現在の２０階はフロアボスを含めてモンスターは一切ポップせず、大きな通路と広間だけのエリアとなっている。通路の奥には大きな扉があって、そこを通り抜ければ熱帯ＭＡＰである２１階に行くことができる。

　悪魔城をどう見て回ろうか、そこでお菓子を食べようかと話しながら歩いていると急に前方が騒がしくなる。スケルトンライダーがＢクラス一行に襲い掛かったようだ。

『凄いねー。あの槍を正面から受け止めちゃうなんて』

　骨だけの馬に跨り、巨大なランスを構えて時速７０ｋｍくらいの速度で突進してくるスケルトン型のモンスター。骨だけとはいえ、あれだけの運動エネルギーを受け止める衝撃は相当なはずだが、それをやってのけるＢクラスの助っ人も相応の実力だと分かる。

　タンクが受け止めて動きを殺すと、間を置かず取り囲んで袋叩きモードに移る重騎士部隊。スケルトンライダーは騎乗しているとあって小回りが利かないという弱点はあるが、見上げる位置からランスを突き刺してくるという高さを持っているし、下にいる骨の馬も噛みついたり蹴りをしてきたりするので正面でなくても気は抜けない。

　しかしそこは慣れているのかタンクがヘイトを上手く集めてターゲットを固定させ、アタッカーもウェポンスキルを次々に叩き込む。短時間でスケルトンライダーは沈み、魔石と化した。

　途中、スケルトンメイジやスケルトンアーチャーの集団に何度か襲撃されたものの、安全な結界内からアーチャー部隊や巫女さん部隊がお返しとばかりに回復魔法や矢を打ち込み、あっという間に処理していく。いくら１９階が危険なＭＡＰとはいえ、これほどの戦力がいれば瞬殺である。

　その後もアンデッドを退けながら廃墟の中心に向かって歩き続ける。といっても狭いＭＡＰなので１時間もすれば目的地はもう目の前だ。

　いくつも突き出ている塔は見上げるほどに高く、形状も複雑。壁には儀式めいた人物の彫刻と楔形文字のような紋様がびっしりと彫られている。近くで見ると城というより聖堂のような雰囲気がある。

　正面には中に入るための巨大な鉄門があり、くぐった先が２０階だ。

「それでは、聖地の案内は私がいたしましょうか」

　先に到着していた周防が不釣り合いな笑顔をしながら歩み出てくる。コイツがこんな清々しい顔をするときは絶対何か企んでいるときだが……さて、どうしたものか。

「まずは私と世良殿、天摩殿の三人で行きませんか。きっと素晴らしいものをご覧にいれますよ」

　ゴールである悪魔城を目の前にして、最初に誰から入るかという議論になっていた。そんなものは皆で一緒に入るか到着順でいいだろうと思うのだけど、メンツとプライドの塊である貴族様にとっては重要な問題らしい。我が先だといがみ合う中、最初はクラスの代表者のみで入りたいと周防が提案する。

　その代表者に天摩さんも入れたのは学年次席として１年を代表する生徒だからだそうな。別の見方をするならば周防が認めるほどの実力者だということだ。

　ところがその天摩さんは「クラスの代表者資格なら成海クンもだぞー」などと余計なことを言ってしまう。確かに俺もクラスの代表者であるものの、単に厄介事を押し付けられただけ。それをこの場で言うのも気が引けるので何と言って断ろうかと考えていると「コイツが行くなら私も行く」と久我さんもゴネ出す始末。

「……そうですか。まぁいいでしょう」

　部外者二人の追加をあっさりと許可する周防。何かを企んでいるはずだが、その計画を実行するにおいて俺と久我さん程度なら障害にもならないと考えたのだろうか。

　私の目の届かぬところで野獣を近づけさせてなるものかとメイドさんも鼻息荒く付いて来ようとするも、天摩さんに却下され涙目になっている……いや、こっちを睨まないでくださいよ。

「お考え直し下さい、世良様！」

「中学時代のことをお忘れか。何か良からぬ事を企んでいるに決まっております」

「あちらは周防様ただお一人。それにこちらには天摩様もいらっしゃいます。何をそんなに恐れることがあるのですか」

　世良一門の貴族や巫女さんが詰め寄って諫めようとするものの、世良さんは聞く気はない模様。束縛を嫌い、どんなときも好きなように行動する性格なので警護役はさぞかし苦労することだろうが、そんな自由な世良さんも素敵である。

　それでも、あの周防がわざわざ案内役なんて買って出るわけがないのは同意見だ。何かを企んでいたとしても奴一人で何ができるのか。

　例えばこの城の中に暗殺者でも待ち伏せているとか。何か危険なトラップでも仕掛けられているとか。あるいは伝説の大悪魔とやらを復活させるとか。だがいくらライバルといえど世良家は侯爵位の嫡女であり【聖女】の後継者。そんな人物を傷つけたとあっては周防もただでは済むまい。気にしすぎだろうか。

「それでは周防様。エスコートを宜しくお願い致しますわ」

「承知」

『それじゃ一緒に行こうよ。成海クン』

　あれこれと考えているとプレートメイルの小手に手を掴まれエスコートされてしまう。まぁ俺がここで何を言おうが変わると思えないし、なるようになるしかないか。

　先頭に周防と世良さん。続いて俺と天摩さん、久我さんが並んで城内に入る。過度に装飾された玄関をくぐればシャンデリアで眩く照らされたエントランスホールが広がっており、左右には大きな扉が設置されている。左の扉に入れば熱帯の森が広がる２１階へ行くことができるわけだが周防はそちらには行かず、右にある扉を開けて入るよう促す。

　扉の先は城の大部分を占有するほどの巨大な広間があった。天井はとても高く、両サイドには大きなステンドグラスがはめられた窓がある。差し込まれた暖かい光が神聖な空気を作り出している。最奥には巨大なパイプオルガンが置かれていることから、やはり城ではなく聖堂みたいに宗教的な使われ方をしていた場所だろう。

　そしてこの広間こそが【聖女】と大悪魔が戦った舞台である。

「ここでの戦いについて、よく大婆様にせがんだものです」

　辺りを感慨深そうに見渡しながら言う世良さん。“大婆様”とは【聖女】のことで、曾祖母だったはず。日本の冒険者の始祖と言われる曾祖母と、いくつも攻略クランを葬ってきた大悪魔との死闘は今でも語り継がれる伝説になっており、世良さんも幼少のときから強く興味を引かれていたそうな。

『そうそう。どうしてそんなヤバい相手を四人だけで倒したのかって道中に話をしてたんだよねー』

「それは聞いてはいませんが……でも、大婆様が戦うときはいつも四人でしたし、そのほうがやりやすかったのではないでしょうか」

　信頼できる仲間だからこそ安心して背中を預けられる。即興で作られたパーティーなど足手まといにしかならないと常日頃から言っていたらしい。ゲームなら少しでも人数を増やして戦力を高めたいと考えがちだが、実際に命を懸けた戦いとなれば信頼という要素は無視できないものになるのだろう。

（まぁそれも方便な気がするけどね）

　俺としては隠匿スキルやジョブ特性を見られたくなかった、というのが理由だと考えている。【聖女】という存在そのものが特級のシークレットだけど、【聖女】というジョブも広域回復や死者蘇生などヤバい魔法を覚えるわけで、そんなものが世間に知れたら何が起こるかわからない。日本政府も情報管理には相当に気を使っていたはずだ。

　周防も知り得る情報を物語のように語る。大悪魔の正体は身長５ｍを超え、六つの腕を驚くべき力で振り回してくる屈強な鬼タイプのモンスターだという。またＨＰを削っていくと鬼の体が青い炎に包まれ、攻撃力、防御力が大幅に増加し、真の戦士以外では手が付けられなくなるとのこと。

　大悪魔を見て生き残った者は僅かしかおらず、凄惨な戦いだったせいもあり精神を壊している者も多い。正確な情報を集めるのも苦労したというけど、正解は――

（腕が４本で《魔闘術》を使ってくるマッチョなレッサーデーモンでした）

　レッサーデーモンは下位の悪魔に分類されるモンスターだ。下位といえどダンエクの悪魔は強力な個体が多く、肉体能力、魔力のみならず所持スキルも多いので倒すとなると非常に厄介だ。

　しかもこの部屋にいたのは悪魔のフロアボスという特別な個体。他のフロアボスと比べても討伐難度は大幅に高く、当時の攻略クランが倒せなかったというのも納得のいく話である。だからこそ【聖女】もよくそんな討伐要請を引き受けたなと思う。政府の頼みとはいえ誰も勝てなかったモンスターを相手にしろなんて言われたら、俺なら逃げるけどね。

　一方、久我さんは大悪魔談義をよそに広間の奥にあるパイプオルガンを興味深そうに眺めていた。試しにと何段もある鍵盤をいろいろと押しているけど何の音も鳴らない。上に並んでいる巨大なパイプはどれも綺麗な状態で壊れているようには見えないけど、俺は構造に詳しくないので見当が付かない。天摩さんも興味があるようで鍵盤や足鍵盤を覗き込んでいる。

『このオルガンはどうやったら音が鳴るのかなー』

「もしかしたら後ろにある送風機が壊れているのかもしれない……」

「いえ、壊れてなどいないそうですよ」

　何がおかしいのかクックックと低く笑いながら天摩さん達の会話に割って入る周防。何かを知っているようだ。

「この楽器は、大悪魔と戦うときのみ音楽が奏でられるそうです」

『大悪魔と？　でももう出ないから聞けないんでしょー』

「どういう仕掛けなの……」

　周防がボス戦のＢＧＭを奏でてくれる気が利いた楽器だと面白おかしく言う。久我さんはますます興味が湧いたのかあちこち引っ張ったり押したりして触り出す。これほどの規模のパイプオルガンを壊したらさぞかし値が張るだろうが、ダンジョンには修復機能があるので何の問題もない。天摩さんは「もう聞けないのかー」とがっくりと項垂れるポーズをしている。

「いえいえ。聞くことはできますよ？」

『えーでも、さっき大悪魔が出ないと聞けないって』

「ですから大悪魔をもう一度呼び出せばよいではないですか」

　コイツは何を言っているのだと皆が首を傾げて見ていると、周防はカバンから一冊の分厚い本を取り出す。表面には血管のようなものがびっしりと浮き出て脈動しており、タールのような《オーラ》が漏れ出している。不気味を通り越してグロテスクともいえるアイテムの登場により、先ほどまで和やかだった雰囲気が破壊される。

　なるほど、企んでいたのはこれか。

「何を……する気」

「それはまさかっ！？」

「せっかくここまで来たのですから、是非とも大悪魔を拝見したいですよね」

　久我さんは身を低くして警戒し、世良さんはあの本に見覚えがあるようで驚きのあまり後ずさりし、天摩さんはキョロキョロしているだけ。周防はそれがおかしかったのかますます笑みを濃くする。

　あの本は間違いなく“悪魔召喚の書”だ。それも恐らくここのフロアボス、レッサーデーモンを呼び出すための。

　元はアップデートにより追加されたもので、入手するためには面倒臭い手順をいくつも踏んでＤＬＣエリアにある特殊クエストをクリアする必要がある。てっきりゲーム知識がなければ入手不可能だと思っていたが……もしかして月嶋君が教えたのだろうか。

　しかしながら呼び出すというのはブラフだろう。一度あれを発動してしまえばこの部屋はロックされ、強制的に戦闘となってしまうからだ。そうなれば周防も巻き込まれる……って躊躇なく本に魔力を込めて発動させやがったぞ。何を考えているんだ！

　本を掲げるとドクンドクンと脈動が大きくなり、勝手に開かれて中から黒い何かが飛び出し石床に着弾する。するとその場に三角形と逆三角形を組み合わせた巨大な六芒星が描かれ赤黒く光り出す。召喚魔法陣が発動したのだ。

　大悪魔の召喚が確実と察知し、すかさず部屋から出ようとする世良さんと久我さんだが、それも叶わず。あの本に魔力を流した時点で悪魔召喚のトリガーは引かれ、全ての出入口は封鎖されたのだ。だからこそアイツと戦って負けた攻略クランはほぼ全滅していたわけだが。

　時を同じくして正面奥にあったパイプオルガンがひとりでに動き出し、悲哀と狂気が入り混じったような終末的な音楽が大音量で奏でられる。ボスステージのＢＧＭに相応しいといえばそうなのだけど、実際にその場にいる人間にとってはそれどころではない。

「ん～聞きしに勝る素晴らしい音楽ですね。さて、いよいよ出てきますよ、伝説の大悪魔が。私も見るのは初めてです」

　余程興奮しているのか周防は目を見開き、奏者のように手を広げながら上ずった声で悪魔召喚を実況する。

　振動とともに魔法陣の中央付近から大きな山羊頭がゆっくりと生えてきて、次いで赤黒い筋肉質の上半身に、アンバランスなほど太い四本の腕。そして悪魔族を示す矢印のように鋭く尖った尻尾がお目見えだ。

　身長は約４ｍと、見上げるほどに高い。こちらをじろりと睥睨する複眼のような目を見れば、絶対に人間とは理解しあえない存在だと理解させられる。ただひたすらに命を貪り尽くしたくて堪らない、そんな悪逆無道な感情が垣間見える。

（さて、どうする）

　モンスターレベルは２５。特殊スキルを多数持つ悪魔系フロアボスなので数値以上の強さがあるわけだが……やっぱり俺も戦闘に参加しないといけないのだろうか。こんな濃いメンツの前で本気なんて出せるわけがないぞ。

「あっ、あなたは何をしたのか分かっているのっ！」

『こんなもの呼び出してどうする気なのさー！？』

　あまりの無責任な行いに普段温厚な世良さんと天摩さんも大層ご立腹だ。俺も当然ご立腹である。呼び出したコレをどう始末する気なのか、何か良い対策でもあったりするのか。期待していいんだよな。

「大悪魔の腕は四本でしたかっ！　いやはや、これは強そうだ！　それでは拝見も済んだことですし私はお暇しようと思います。あなたたちも四人で倒せば【聖女】に並ぶ伝説になれますよ。健闘を祈ります」

　周防は胸元から透明な小石を取り出し魔力を込めると「まぁ四人のうち二人は劣等クラスのゴミですが」と言いながら光に包まれ、そのまま消えてしまった。

　聖女が倒したと言われる伝説の大悪魔。その姿を目の前にし、胸元から小石を取り出した周防は光に包まれて消えてしまった。悪魔を召喚するだけして何もせずに離脱しやがったのだ。

「えぇっ！？」

『に、逃げたー！　このー！』

　世良さんは口を両手で抑えながら平静さを失って動揺しているし、天摩さんはあまりの無責任な行いに地団駄を踏んで怒っている。普段みる事のない姿はとても新鮮……いや、そんなことを言ってる場合ではない。

　先ほど周防が使ったのは《イジェクト》の魔法が込められた脱出アイテム、別名、帰還石とも言われている。ダンジョンの外まで直接ワープする効果があり、命がかかっているこの世界では是非とも持っておきたい代物だ。あれ一つで家が一軒買えるくらいの値段がするため、おいそれと使えるものではないが。

「成海颯太。あなたはどこまで戦えるの？」

「俺は……」

　プロテクターを手早く装着し、短刀を携えた久我さんが俺の実力を聞いてくる。強敵との戦闘が不可避と分かった今、少しでも生存率を上げようと考えているのだろう。だが実力を見せればとんでもなく面倒になることは容易に想像できる。

　レッサーデーモンは魔法陣から完全に姿を現し、誰の命からすり潰そうか舌なめずりしながらゆっくりと吟味してくる。毒々しい《オーラ》が場を包み、清らかであった神聖な空間が重苦しい地獄へと変貌する。もう悩んでいる時間もない。

「さすがに私と天摩様だけで、あのようなものと戦うことはできません。申し訳ないのですが……」

（あれは。やっぱり持っていたか）

　首にかけていた透明な小石を取り出す。大貴族の嫡女であり、類まれな才能と容姿を持ち、【聖女】の後継者にも選ばれている希代の才女。彼女の家としてもあの程度の保険を持たせるくらい安いものだろう。

「天摩様、あなたも迷っていないで使うべきですわ。あのお二人については残念ですがそれも天命。お家のことを第一に考えて生きるべきです。それでは失礼」

　ぎゅっと握りながら魔力を通し、周防と同じように光に包まれ消えていった。

　こんな絶望的な状況で、大して仲が良いわけでもなく知り合い程度の同級生のために命を張るなんて愚かな事だ。それに彼女が言ったように貴族の跡取りであるならば家のことを第一に考えて生きるという選択肢も十分に理解できる。むしろ俺としては逃げるなら早く逃げて欲しいくらいなんだが。

「これ以上に無い最悪な状況ね……来るっ！」

　二人が離脱し、残りは三人となってしまった。レッサーデーモンはもう誰一人逃がすまいと地響きを鳴らしながら突進し、大きな拳を振り回そうとしてくる。

　それに割って入ったのは大きな両手斧を盾のようにして受け止めた天摩さんだ。俺の目の前で足を踏ん張って大質量の拳をギリギリと抑え込んでいる。うっすらと赤い《オーラ》が漏れ出していることから、彼女固有のスキル《怪力》を発動させているのが分かる。

　精霊に愛され祝福を受けたことで手に入れた超常の力、《怪力》。彼女を次席たらしめた力の根源だ。大幅に肉体能力を上昇させる効果がある反面、老いて醜い体になってしまうという悲劇のスキルでもある。それを使って助けてくれたのはありがたいけど、どうして脱出アイテムを使わないんだ。

『少しの時間だけウチが耐えてみせるっ！　だからっ、この部屋から出る方法がないか調べてみて！』

　四本の太い腕を暴風のように振り回し乱打してくるレッサーデーモン。その連撃を《怪力》頼みに耐えようとするが、あまりの速度と威力に対応できずぶっ飛ばされる。勢いはそのまま止まらず、何度もバウンドしながら壁に激突してしまった。

「天摩さん無理するな！　俺達のことはいいから遠慮なく脱出アイテムを使ってくれ！」

『嫌だ！　せっかく、せっかくできた初めての友達なのに……絶対に見捨てないからっ！』

　何度もぶっ飛ばされては自身を鼓舞するかのように声を上げて立ち上がり、再び挑みかかる天摩さん。自慢の鎧が傷つき凹んで血が流れているのもおかまいなしだ。そういえば俺の前では陽気に振舞っていたから想像はしにくいけど、中学時代から腫物扱いされていてずっとボッチだったっけ。それで彼女はあの鎧に閉じこもったのだ。

（まぁでも……嬉しいことを言ってくれる）

　学校から落ちこぼれ扱いされて避けられている俺を友達と言い、伝説と謳れる大悪魔相手に命まで張って立ち向かってくれるとは。その必死な姿から本心だということくらいは分かる。思わず胸が熱くなってしまったじゃないか。オラちょっとやる気が出てきたゾ。

　一方の久我さんは手に持っていた学校のレンタルナイフでレッサーデーモンの足を斬りつけるものの、ほとんどダメージを通せていない。分厚く硬い表皮に加えて再生スキルが働いているせいで実質ダメージはゼロだ。もっと強い武器を使うか本気で攻撃すれば別だろうけど、レッサーデーモンのヘイトが安定しない中では大きく踏み込めずにいる。

　だけど、久我さんも戦ってくれるなら俺も全てを出さずに済むかもしれない。見た感じ、あの二人に必要なのは優秀なタンクってところだろうな。

「分かった！　ならば俺がタンクを引き受ける。アタッカーは二人に任せた！」

『成海クン、無茶しないでっ！』

　無茶は天摩さんだよ。逃げようとすれば脱出アイテムですぐにでも逃げれたのにさ。天摩家総帥が溺愛する愛娘に持たせていないわけがないし。それでも見捨てず命までかけてくれたなら、俺だって少しくらい力を開放するさ。

　マジックバッグから純ミスリルの黒い小手を取り出し手早く装着。あとは使う予定はなかったが仕方がない……まだメッキを施していない純ミスリルの長剣も取り出す。まずは天摩さんに向いていたヘイトをはぎ取ろう。

「デカブツ、こっちだぁあ！　《イリテッド・ハウル》！」

　大音量の咆哮と衝撃波が俺の口から発せられる。強制的に対象のヘイトを持っていく挑発スキルだ。やっぱりこれがなければタンクは始まらないぜ。

　天摩さんに連打を浴びせていたレッサーデーモンは、磁石で引っ張られるかのようにくるりと振り返り、俺に向かって走ってくる。自分も何故注意を引きつけられたのか分かっていないようだ。

「そのスキルは……“帝国”の。やっぱり」

『なにっ？　何をやったの！？』

　【ナイト】はどこかの国の秘密ジョブらしいが、これくらいは見せても大丈夫……だと思う。あとで口止めすれば何とかならないだろうか。それと、コイツに攻撃を通すにはパワーが足りない。だからもういっちょ！

「アゲていくぜぇ！！　《フレイムアームズ》！！」

　両手を広げるようにスキルを発動すると赤い蛇のような《オーラ》が腕にまとわりつく。【ウォーリア】が覚えるバフスキルで、ＳＴＲを３０％上げる効果がある。これを使っても数値上はまだコイツと打ち合えるレベルに達していないが、受け流すくらいなら十分だろう。

「二人とも遠慮せず火力を上げていってくれ。ターゲットは俺が何としても固定する！」

　挑発スキルをやられ、煩わしそうにこちらに拳を振り落ろそうとするレッサーデーモン。まともに受ける気はないので側面方向に旋回しながら回避し、隙を見つけてミスリルの剣で斬りつける。しばらくはこれらを繰り返してクール毎に挑発スキルを重ね掛けし、ターゲット固定することを第一に考えればいい。

『何だか分からないけどいけるんだね！　それならウチもいっくよー！』

「……フンッ」

　俺が上手くヘイトを取ってタンク役ができると判断した天摩さんは、巨大な斧をぐるんぐるんと回転させながら勢いよく叩き込む。《怪力》のおかげで一発の火力が凄まじく、高い防御力を誇る表皮にいくつも深い傷跡を付けてＨＰをごりごりと削っていく。学年最強を誇る彼女の近接火力は伊達ではないようだ。

　久我さんも攻撃スキルを使っていないのにダメージを通している。あの手に持っている青白く光る短刀には、切断力を高める魔法がエンチャントされているようだ。

「グォギァア゛ァアア！！！！」

　レッサーデーモンは唸り声を上げながら腕を乱暴に振り回してくる。俺に思うように拳を当てられず、その上、背後からは怒涛の攻撃を叩き込まれているせいで相当に苛立っている模様。そんな状況を打開しようと胸を大きく反らしてスキルモーションの構えを取る。

　四本の腕全体に眩いほどの青い《オーラ》がほとばしり、咆哮と共に拳が振るわれた。

『成海クン、危ないっ！』

「大丈夫だ。けどちょっと離れてて」

　レッサーデーモンはリーチの長い四本の腕を高速で振り回してくるので、通常ならその全てを避けることは難しい。だが恐れず密着し、回り込むようなポジションを取っていけばほぼ当たらないという攻略法がある。重装備で余程のＳＴＲがあるわけでもないなら、タンクの基本的な立ち回りは同じようになるはずだ。

　だが、今からコイツが使おうとしている攻撃スキルは中距離だけでなく至近距離までカバーするので死角はない。回り込む回避方法も使えず、かといってまともに受けとめればダメージも免れない。初見で戦うとしたらさぞかし骨が折れる相手だろう。

（でも、俺は初見じゃないけどな）

　ダンエクでは、特殊クエストを受ければ特定のフロアボスに何度も挑める仕様になっていた。階層＝レベルになってしまう制限はあったけど、美味しいアイテムを貰えたのでゲーム時代には数えきれないほど挑んだものだ。ちなみに俺は、コイツのソロ討伐タイムアタック記録まで持っている。

　どれくらいダメージを負えばどういった行動をしてくるか、スキル発動直後の溜めを見れば何のスキルを使うのかくらい体で覚えているのでタイミングだって容易に取れる。この攻撃スキルの場合、初手は上腕からの振り下ろしでスタートするので、軌道から体を外しておいて冷静にカウンターを決めていけばいい。

　ゲームと同じく雄叫びと共に両腕を振り落としてくるのを見て、あらかじめ重心を動かしておき余裕を持って躱す。その後の二連突きをかいくぐって一閃。次に左方向から横に払うパンチが来るので俺も右方向にぐるりと背後に回りながら片手剣スキル《ボーパル・スラスト》の三連斬を叩き込む。

　野太い悲鳴を上げるが、一度発動したモンスターのウェポンスキルは止まらない。

　下から振り上げるようなアッパーが来るので先ほどのウェポンスキル硬直を《バックステップ》でキャンセルし、振りぬこうとする腕の軌道に《スラッシュ》を置いて肘から先を断ち切る。

　最後は一本腕を失ったまま上空にジャンプして落下と共に叩きつけてくる攻撃をしてくるので、落下地点から離れて見ているだけでいい。

「グア゛ア゛ァ゛アオ゛ォオ゛オォ」

『す、凄いよ！　どうなってるの、今の動きなに！？』

「全て見えていた……いえ。何が来るのか全て分かっている動きに見えた」

　さすがは久我さん。重心の移動を見られてたか。全くその通りなんだが実際はそれほど余裕があるわけでもない。

　戦う前はレッサーデーモンなんて俺一人でもどうとでもなると思っていたし皆にはさっさと逃げて欲しかったけど、共闘できて本当に良かった。

　攻撃が当たらないと分かっていても、轟音を響かせる拳を鼻先で振られて平気なわけがないのだ。見知った敵とはいえ、こんな奴と長期戦なんかしていたら精神が削られ事故率が急上昇していたことだろう。二人がアタッカーをやってくれているおかげで俺は回避に専念できている。感謝したいくらいだ。

　レッサーデーモンの落下により砂利や土埃が盛大に舞い上がり、同時に耳をつんざくような呻き声が響き渡る。落下地点では４ｍもの巨体をくねらせ転げ回っていた。斬り落とした腕からは血が噴き出ているが、再生スキルがあるせいで数十秒もすれば完全に修復されてしまうだろう。

　だが今は無防備に蹲っている。貴重な袋叩きタイムを逃す手はない。

「いまだ！　叩くんだ！」

『えへへ。おりゃーー！！』

「遠慮はしない……《ダブルスティング》！」

　大きな両手斧を振り上げて飛びかかり、ここぞとばかりに滅多打ちにする天摩さん。一発振るうたびに軋むような旋風を発生させ、ゴリゴリとＨＰを削り取っている。想像以上の火力にオラは若干引き気味だ。一方で短刀を持つ腕を高速で振るわせ、引っ搔くようにスキルを発動する久我さん。より効果的な場所を探して急所っぽいところを的確に切り刻み続けているのが頼もしくも恐ろしい。

　だがフロアボスのＨＰは莫大であり、これほどのダメージを与えてもまだ半分近く残っているはず。それにコイツは残りＨＰが少なくなれば“発狂”もしてくる。気を抜かず確実に処理していかなくてはならない――それでも。

『さっきはよくもやってくれたなーっ！　肉っ！　肉よこせーっ！』

「この角も……寄こしなさい」

　あの頼もしすぎる二人がいれば、労せずいけそうな気もしてきたぜ。

　――　久我琴音視点　――

　何の準備もできていないというのに大悪魔といわれるフロアボスが召喚されてしまった。周防にとってはほんのイタズラに過ぎないのかもしれないけど、脱出アイテムを持っていない私はここから逃げることすら叶わない。

　もとより、脱出アイテムは庶民が買えるような代物ではないことから、貴族でなければ死んでも別に構わないと判断したのだろう。これだから時代錯誤な貴族主義国家は困る。だが泣き言をいくら言ったところで状況は何も変わりはしない。退路が無いのなら覚悟を決めて戦うしかない。

　この階のフロアボス攻略動画は本国で見させられたことがある。あれはレッサーデーモンという悪魔族で、推奨される最低必要戦力は戦闘訓練を積んだレベル２０が十八人というもの。実際はその戦力でも勝率は半々といった厳しい内容だったことを思い出す。

　それなのに、ここには私と成海颯太、鎧女、聖女もどきの四人しかいない。レベルだけは２０近くあるようだが、しょせんは甘やかされて育った坊ちゃん嬢ちゃんばかり。ほとんどパワーレベリングで上げたようなものだろう。幾度の試練と死闘をくぐり抜け、己を追い込んできた本国の熟練兵と同等の戦力レベルと見なすのは贔屓目に見ても難しい。

　その中でも学年主席ということで少しは期待していた聖女モドキも早々に離脱してしまった。同じ貴族である鎧女も脱出アイテムを使うのは時間の問題。そうなれば成海颯太と私の二人だけになってしまう。果たしてあの男は使えるのだろうか……

（上手くすれば私一人でも“発狂”までは持っていけるかもしれない……でもそこまでだ）

　フロアボスは一定以上ＨＰが減ると発狂と呼ばれる状態となり、強力なスキルを使ってくる場合がある。この悪魔もＨＰを残り４分の１くらいまで減らすと全身が青い《オーラ》に包まれ防御力が大幅に上がり、桁違いの破壊力を持つ凶悪なスキルを放ってくる。そうなれば私だけで対応することは不可能。

　成海颯太も少しはやる様だが、これから迎えるであろうハイレベルな戦闘に付いてこられるとは思えない。絶望的――そんな言葉が脳裏を掠めたところで突然、思わぬ方向に流れが変わっていく。

　何を血迷ったのか鎧女が脱出アイテムを使わず悪魔に立ち向かっていくと、それに触発された成海がタンクをやると言い出したのだ。そういえば不思議に思っていた。悪魔が召喚されたときもあの目には怯えや恐怖が浮かんでいなかったことに。その理由もすぐに判明する。

「デカブツ、こっちだぁあ！　《イリテッド・ハウル》！」

（あれは……アウロラの使徒が何故こんなところに）

　この広大な広間全体が震えるほどの咆哮。あれは神聖帝国にしか存在しない最高機密ジョブ【ナイト】が使用する代表的なスキルだ。

　東欧に位置し、聖女アウロラを頂点とする神聖帝国。その帝国の中でも【ナイト】に就けるのは聖女アウロラに選ばれた超エリートのみ。将来は近衛騎士、またはアウロラの使徒となって国政に大きな影響を与えていく重要人物となると聞く。彼らは人前に現れること自体滅多になく、情報管理も徹底されており厚いベールに包まれていた。それなのに――

　その帝国の国家機密が目の前にいる！

　私は正直アウロラを、そして使徒の実力も舐めていた。神聖帝国はゴロツキ冒険者共がテロ紛いに作り出した歴史の浅い新興国だし、神輿に担がれただけの女が選んだ才能だからといって何の証明になるのかと。しかし目の前にいる【ナイト】を見れば、その異常性を嫌でも理解させられる。

　両腕に炎を宿した成海颯太は、巨大な四本の腕から振り下ろされる大質量の拳を、いとも簡単に受け流し、あるいは躱し、隙あらば懐に潜り込んで冷静にカウンターまで決めていく。動きの速度からして私よりレベルは低いだろうけど、呆れるほどの戦闘技術と戦術眼を持っていた。これほどの才能を発掘し育成まで施したのならば、アウロラと帝国の評価を大幅に改めざるを得ない。

　けど、おかしなことだらけだ。

　成海の動きは決して速いわけではない。むしろ私や悪魔のほうが数段速くパワーも上のように見える。それなのに私でもギリギリ躱せるかどうかの連打を必要最低限の力と動きだけで簡単に捌き、おまけに次の攻撃がどこに来るのかを分かっているかのような動き方まで見せる。その結果、悪魔は成海に全く対応できず翻弄されているのだ。

（何故そんな動きができるの……？）

　見てから躱しているのではない。拳を繰り出す予備動作をしただけで成海はすでに重心を動かし回避に移行している。ならば動きを予測したからか。それも違うだろう。

　攻撃を予測したからといってあの動きができるものではない。レッサーデーモンが繰り出すパンチの軌道予測に少しでもズレがあれば一撃でノックダウンしかねない。そのため予測からの回避はある程度、保険を掛けた大きな動きを取らざるを得なくなる。

　だが成海の動きには迷いが一切窺えない。致死の攻撃を紙一重で躱し、カウンターを狙うために立ち回りが効率化されすぎている。

（レッサーデーモンを……どこまで知り尽くしているの？）

　レッサーデーモンというモンスターを深く熟知していなければ不可能な動きを何度も繰り返している。その推察が確かなものになったのが、四本の腕で連撃スキルを放ってきたときだ。

　悪魔が斬撃のモーションを繰り出す前に、成海は重心を動かして安全な場所に体を入れており、まだ拳を振り抜いておらず隙も生じていないのに、片手剣スキルの発動モーションに入っていた。さらには目視することなく攻撃を避けていたり、腕の軌道にあらかじめスキルを設置し断ち切るという曲芸までしでかした。完璧すぎて気味が悪い。

　次に何の攻撃が来てどこに隙が生じるのか、あらゆる攻撃パターンを網羅し、思考ルーチンすらも把握していないとできる芸当ではない。それを可能とするには、動画を見るだけでは不可能。何十、下手すれば何百回という途方もない実戦経験が必要となってくるはず。果たしてそんなことが可能なのか。

（どれだけの数の悪魔の書を手に入れたらそうなるというの）

　レッサーデーモンを召喚するには悪魔の書が必要となる。だが入手には、より強いモンスターを倒す必要があり、そこまでの手順や道程も複雑。数を揃えるとなると途方もない人員と時間が必要となる。帝国にあるダンジョンを使って組織的に集めていたのだろうか。

　入手方法はアメリカだけの機密情報だと思っていたけど、周防ですら知っていたのなら帝国にだって知られていてもおかしくはない。しかし、そんなに悪魔の書を集めて何をしていたのかも気になる。

　帝国の情報は表に出てくることがほどんどなく、世界各国が工作員を送り込み情報を探っている。同期の仲間も何人か入り込んで諜報活動をしているけど、組織の中枢までたどり着けた者は、いまだ誰もいない。そういった意味でも、アウロラの使徒である成海颯太とのコネクションは一塊のミスリルにも匹敵する。

　何とかして篭絡し機密情報を引き出すことはできないものか。きっと驚くようなモノが出てくるに違いない。距離を縮めるために私はもっと愛想良くすべきだろうか。

「久我さんっ、コイツのＨＰが２５％切ったら《鑑定》でモニタリングしてくれ！」

「……なんで私がそのスキルを持っているのを知っているの？」

「それは後回しだ。とにかく体力が残り２割で発狂する。俺が合図したら二人とも一度離れてくれ」

『分かったよ、成海クン！』

　《鑑定》はとっておきだったのに……後で必ず問い詰めなければなるまい。それはともかく、この男ならば発狂まで問題なくタンクを続けられるだろう。だが発狂後は最深部のフロアボスにも劣らない強力無比なスキルを使ってくるわけで、専用の装備も無く、たった一人でどうにかできるとは思えない。

　何か思いもよらぬ手段があるのか。それとも帝国の更なる機密を見せてくれるのだろうか。非常に興味深いが、その前に一応聞いておこう。

「成海颯太。何をやる気なの？」

「俺が発狂スキルを避けるから、それが終わったらウェポンスキルを使って攻撃を再開してくれ。発狂後は通常攻撃が通らない」

　避けるとは何だ。この悪魔の発狂を一度でも見たことがあるのなら、そんなことは到底不可能だと知っているはずなのに。しかし、ここまでの成海颯太を見れば本当に避けきってしまうかもしれない。全くもって得体の知れない男だ。

「……いまＨＰ２６％」

『発狂って、“リッチ”の発狂みたいなヤバイのを使ってくるんだよね』

「あぁ。千発の魔法弾を撃ってくるな」

『千発！？　だ、大丈夫なの？』

「２３％」

　発狂が発動するＨＰが近づいてくるにつれ、苦戦を強いられ渋い顔をしていた悪魔が再び残虐な笑みを取り戻す。これでやっと惨たらしい死を与えられる、とか思っていそうな顔だ。

「２１％」

「くるぞ、二人とも離れて！」

『信じてるよ！　成海クン！』

「まかせろ！」

　急いで鎧女と共に広間の隅まで退避する。レッサーデーモンの発狂スキルはとにかく広範囲に壊滅的な被害をもたらす。十分な距離を取らねばならない。

「グシャァアグアアァア゛ア゛！　シヌガイ゛イ゛！」

　残り２０％となったその時、視界が青い光で塗りつぶされる。地鳴りのような低周波の雄叫びとともに、赤黒かった悪魔の全身が青く燃え盛る炎に包まれ、広場が重苦しいほどの《オーラ》に満たされる。

　この状態になってしまえばこのマジックウェポンでも通常攻撃は通らなくなり、攻撃力補正が付いたスキルでしかダメージを与えられなくなる。だが問題はそこではなく、この直後に撃つスキルの方だ。

　悪魔が四本の腕を掲げると、頭上に現れたのは直径３ｍほどの円環魔法陣。複雑な紋様が描かれており、文字のような場所から真っ黒いどろどろとした魔力があふれ出ている。これだけ離れていても肌がピリピリするほどの恐ろしい魔力密度だ。

　あの魔法陣から強力な魔法弾を召喚し連続で放ってくるのがレッサーデーモンの発狂スキル。単発でもそこらの建物を粉々にするほどの威力を誇るので、体に直撃したら余程の重装備でもなければ死は免れない。

　対策として行われているのは二つ。一つはいくつもの《アンチミサイル》魔導具を多重起動して結界を張りつつ、魔法攻撃に強い純ミスリルの盾を何枚も張って衝撃に耐える方法。これは本国が取る最も安全な戦術であるが、魔導具は非常に高価だし、魔法弾を受け止めすぎた純ミスリルも使い物にならなくなって廃棄処分となり、この戦術を一度やるだけでも巨額の資金が吹き飛ぶ。にもかかわらずこの戦いにそれだけ利益を見いだせないというのが最大のデメリットだ。

　もう一つは被害を覚悟して逃げ回る方法。必要とするものはなく安上がりなものの、被害が全く予測できないという致命的なデメリットがある。ターゲットを固定化させず魔法弾がばら撒かれれば、これだけ広い空間でもほぼ全ての場所に着弾してしまうだろう。下手をすれば全滅してもおかしくない。一般の攻略クランが取っていた方法だが、これははっきり言って博打そのものだ。

（そのどちらの選択も取らないというの？）

　まさに今、魔法陣の照準が目の前の男にロックされ、極大の魔法弾が放たれようとしている。それなのに成海は何か特殊なアイテムを使う様子もなく、かといって逃げ回るというわけでもなく、棒立ちしたまま動く気配がない。あのニヤケ面が気になるが見届けるとしよう。

　魔法陣が一瞬眩く光ると、何十個もの青い光球が同時に高速で噴射され、成海のいた周辺に光の線となって着弾する。同時に爆音が鳴り響き、綺麗に並べられていた石床がめくれ上がって土埃が勢いよく舞い上がる。さらに１秒も経たずに次の光球が同数召喚され、間を置かず撃ち込まれる。光球の召喚はまだまだ続く。まるで面制圧でもするかのような明らかに過剰な火力だ。

　爆撃範囲は拡大していく。召喚される光球の数もますます増えていき、それらが雨あられのように降り続ける。もう成海のいた場所は周辺含めて無事な場所などどこにもない。荘厳な雰囲気だった聖堂広間もクレーターだらけになり、見るも無残な姿に成り果てている。

　レッサーデーモンの発狂スキルを実際にこの目で見るのは初めてだったけど、動画で見たものと実際の現場はまるで違った。目の前に広がる壊滅的な惨状にどうしようもない恐怖がこみ上げてくる。隣にいる鎧女は一歩だけ後ずさったが踏みとどまり「頑張れ頑張れ」と斧を振って応援している。健気な事だが、大した装備もせずあれだけの爆撃を浴びてしまえば、いかに超人的なセンスを持つ成海でも生き残れないだろう……

（だけど、最大の問題はクリアされた）

　あの防御力を上げる《オーラ》は健在なのでここから先は長期戦になるが、勝機はあると考えていい。一人の犠牲で済んだと思って気持ちを切り替えていかねばならない。鎧女の火力にも頼らざるを得ないのだから。

「鎧女……ここは気持ちを切り替えて――」

『成海クン！』

「それじゃ二人とも――」

　土埃が晴れると、そこには何事も無かったかのように立っている男がいた。服に付いた汚れを呑気に払っている。本当にあの極大魔法弾の嵐を躱しきったというのか……いくら何でもありえない。

「――反撃といこうぜ」

「グシャァアグアアァア゛ア゛！　シヌガイ゛イ゛！」

（うほぉぉ……怖えぇ）

　レッサーデーモンが勝ち誇ったような顔で巨大魔法陣を動かし、俺に照準を定めてくる。単発でもそこらのモンスターが使う魔法より数倍高火力だというのに、それを千発も撃ち込んでくるとかゲームバランスを少しは考えろと言いたい。

　色んなアイテムやスキルをフルに駆使すれば対処も可能だろうけど、今の俺にはそのどちらの選択肢も取ることはできない。まともな防具だってミスリルの小手くらいしか付けていないし、鎧なんて家でホコリをかぶっていた豚革の軽鎧。もちろん何のエンチャントもかかっておらずダメージ軽減効果も見込めない。

（それに、あの二人も見てるしな）

　もう十分面倒事になっているとはいえ、見せるスキルは最低限に留めつつ、この難局を乗り切りたい。ならばどうするかだが、もちろん秘策はある。

　このボスエリア一面に敷かれている石床。ゲームではその一つを動かすとゲート部屋に通じる縦穴があったのだが、こちらでも同じ構造になっているのかどうか入ってきたときに真っ先に調べて確認済みだ。

　召喚して戦闘となってしまえば移動制限がかかり、外に出たりゲート部屋まで行くことはできなくなるが、縦穴と直下にある小部屋にだけは出入りが可能。コイツの無茶な発狂はその穴に入ってやり過ごそうという作戦である。

　注意しなければいけないのは、縦穴に入る際にレッサーデーモンに気付かれてはならないということ。もしバレれるようなことがあれば縦穴ごと破壊されるか、ヘイトがリセットされ、魔法弾の照準を天摩さん達に向けられるかもしれないからだ。

　流れとしては魔法弾を撃たれて土煙が上がり、俺の姿が確認しづらくなってから縦穴に入り込むという手はず。

　最初はいきなり直撃を狙わず恐怖を味あわせるために逃げ道を無くし、ぐるりと螺旋を描くように撃ち込んでくると思うので、爆風に注意しながら俺も同じように躱していけばいいだけ――だが、確信はない。ゲームではそうだった、というだけで違ったら俺は死ぬかもしれない。

　どうしてこなったのかと現状を冷静に把握しようとすればするほど笑えてくる。泣き言を言ったら手加減してくれないかなとレッサーデーモンのヤギ顔をそっと窺うが、どうにも許してもらえそうにないので、いつでも縦穴に逃げ込めるようこっそりと近くまで移動しておこう。

（さて。上手くいけばいいが……来るっ！）

　キラリと巨大魔法陣が輝き、同時に高密度の青い魔法弾が数十個召喚される。数秒ほどゆらゆらと浮いていたと思ったら急加速して閃光となって降り注ぎ、視界が真っ青に染まる。レベル２０となった俺でも魔法弾の軌跡はわずかにしか見えないほどに速い。

　それでもゲームと同じように螺旋状に撃ち込んできたのだけは確認できたので十分。咄嗟に着弾地点から渦を巻くように動くとその直後、間近に爆発したような破裂音がいくつも轟き、石床が砕け、破片が勢いよく飛散する。

　想定よりやや土埃が足りないので逃走用の土煙弾を地面に放ち、滑り込むように入り口を開けて体を入れる。

「はぁ……はぁ……いけたか？　マジで死ぬかと思った」

　上では爆音が鳴り続けているので一先ずは成功か。俺がまだあの場所にいると思って嬉々として撃ち込んでいるのだろうが、しょせんは下級悪魔。体はデカくとも知能はゴブリン並みである。これが上位の悪魔だと妙に頭が回るので同じ手は使えないだろうけど。

　呼吸を整えながら、小型の携帯ランタンで照らして梯子を下る。１０ｍほど下りると俺の部屋よりも狭いくらいの石壁で囲まれた空間があり、中央には鈍色に光る宝箱が置かれていた。マジックアイテムが確定で入っている[銀の宝箱]だ。やっぱりあったか。

　ダンエクではゲート部屋から近いこの宝箱は取り合いになっていて、いつ来ても中身は空っぽだったけど、こちらの世界では認識阻害が効いているせいか誰も取りに来ないようだ。早速、小物入れからオババの店で買った[宝箱の鍵・銀]を取り出して開けてみる。

　人が一人入れそうなほど大きな宝箱なのに、中に入っていたのは赤い宝石の付いた小さな指輪が一つだけ。だが大きさイコール価値ではないのでガッカリする必要はない。手に取ってよく見てみれば宝石の周囲にキラキラした粉雪のようなものが舞っている。

「これは……もしかして精霊が宿っているのか」

　マジックアイテムの中にはごく稀に精霊が宿っているものがあり、それらは使い続けると進化するという特性を持っている。手に入れたときは効果が弱くても上手く育てていけば強力な効果を発揮するので、プレイヤー間で驚くような値で取引されていたものだ。

　この赤い宝石に宿っている精霊は生命力を高めるカーバンクルだと思うので、ＨＰ回復の効果が見込めるはず。

「どうせかすり傷程度しか治せないと思うけど、一応装備しておくか……って、おい」

　どの指に付けようかコロコロと転がしているとイラっとした不機嫌な魔力を感じた。もしかして意志でもあるのだろうか。とりあえず無視して嵌めてみると効果はあったようで、体中にあった小さな傷がみるみる塞がっていく。効果は１分間あたりＨＰ＋１程度だったはず。それでも普段使いには十分すぎる性能だろう。

　上の方では爆発音と振動がより大きくなり、落ちてくる砂埃や破片も徐々に増えていく。そろそろ終わる頃合いだ。ならば最後の締めといきますかね。

　\*・・\*・・\*・・\*・・\*・・\*

「グォァア゛ア゛ア゛！！」

　青く濃密な《オーラ》を全身に纏って俺を握り潰そうと腕を伸ばしてくるが、動きが速くなったわけでもないので小さく旋回すれば余裕で避けられる。ついでに挑発スキルを重ね掛けしておこう。

『いっけぇーー！　《ぶった斬り》！！』

「もう一本いただくわ……《ダブルスティング》」

　大きく踏み込んでジャンプし、振り上げた巨大な両刃斧に渾身の力を乗せて、垂直に振り落とす天摩さん。衝撃波が発生するほどの斬撃は《オーラ》と分厚い表皮を容易に切り裂いてクリティカルダメージを与えている。

　レッサーデーモンはあまりの痛みに蹲り片手を突いて動きを止めると、その無防備となった腕に的確にスキルを当てて斬り落としに成功する久我さん。四本あった腕はすでに三本切り落とされ、残りは一本のみ。再生が間に合っておらず体中から血を噴き出し、満身創痍で動きも大分鈍くなっている。あとはもう煮るなり焼くなりという状態だ。

（それにしても、攻撃に専念した二人の火力は予想以上だったな）

　身体全体が《オーラ》で覆われ防御力が数段アップしたレッサーデーモンのＨＰを、まさか１０分足らずで削り切るとは。挑発スキルが無ければ、とてもじゃないがヘイトを持ち続けることはできなかっただろう。

「アイテムの分配はどうするの……この悪魔の角は良い素材になると聞くわ」

『伝説の大悪魔ってどんな味がするのかなー。わくわく』

「グァア……ァア……」

　すでにドロップ分配の話に入っていた。天摩さんは腰のあたりに斧スキルをブチかましながら『この辺りのヒレ肉、ドロップしないかなー』などと無慈悲なことを言い、久我さんは頻りに角を引っこ抜こうと短剣を振り回しながら飛び回っている。

　一方のレッサーデーモンは人間の言葉が分かるようで、最初に召喚されたときと比べ、見違えるような弱々しい呻き声を放っている。何やら弱い者いじめをしているような気もしなくもないが、俺にあんなスキルを撃ち込んできた悪魔に情状酌量の余地はない。もっとも、あの二人は素材欲しさに手加減など微塵も考えていないようだが。

　残りＨＰは数％となり勝利が確実となったところでレッサーデーモンが甲高い雄叫びを上げはじめる。これは悪魔系モンスター特有のＳＯＳスキルだ。

　近くにいるモンスター、もしくは魂が共鳴している他の悪魔族に「手下になるので助けてくれ！」と屈辱のヘルプコールをしているのだが、この階層にモンスターは出ないし、近くの階層にも悪魔なんてポップしない。つまりは無意味なスキルに成り果てているというわけだ。

「ということで命乞いも済んだことだし、終わりに――なっ！？」

『えっ。これなにー？』

　這いつくばるレッサーデーモンにトドメを刺そうと剣を振り上げると、俺のすぐ目の前に紫色に光り輝く幻影が現れた。何者かが《ゲート》を使ってここにやってこようとしている。

　何事かと三人とも離れて何事かと様子を見ていると、中から出てきたのは――

「ここかな？　やっぱりここだ……随分と魔素が薄いなぁ。おや？」

　人間でいえばまだ中学生に入ったかどうかくらいの幼さが残る顔。長くゆったりとした金髪に爛々と輝く赤い瞳。白い鱗のような全身鎧の上に赤く縁取られた漆黒のマント。頭には大きな巻き角が生えている。“戦闘モード”に入った魔人だ。

　俺はこの魔人を知っている。だけど記憶にあるのはもっと大人しく、オドオドとしていたはずだが……それがどうにも、いや、大分様子がおかしい。

「あれあれ。晶ちゃんに琴音ちゃん……と、なんでブタオまで？　どういった人選なのコレ」

　こちらを見て仰々しく驚くポーズをする魔人。どうして俺達の事を知っているのか。それは恐らくはそういうことなんだろう。

「あなたは何者なの。その角……悪魔の仲間？」

『悪魔？　でもどうして私達の名前知ってるのかなー』

　見た目が年下の男の子なせいで二人はあまり警戒していない様子。だがその考えは早々に改めなければならない。この世界において見た目と強さはそれほど相関性が無いのだから。現にこの魔人のレベルはレッサーデーモンを遥かに凌駕している。

「グォオォ……グォオォ……」

「ん？　そういえばお前がボクを呼んでたんだっけか。でも今は忙しいから。お邪魔虫にはー《アガレスブレード》」

　魔人が手首をひっくり返すようにスキルを発動させると、視界が光に包まれ、轟音と爆風が巻き起こる。突然の出来事に棒立ちしていた俺達三人は吹き飛ばされてしまう。

　後に残ったのは縦に抉れた地面の中で真っ二つになったレッサーデーモンの成れの果て。それもゆっくりと消え失せて魔石と角だけになる。

「それでボクさぁ、“外”に出たいんだけど。どうすればいいのか教えてくれないかな」

　這いつくばりながら見上げると、最初に現れたときと変わらず狂気に満ちた目が爛々と輝いていた。

　――　早瀬カヲル視点　――

「魔狼一匹、ご案内っ」

「グァウッ！　グァウッ！」

　遠くから大宮さんが一際大きな魔狼を連れて走ってくる。

　魔狼を普通に連れてこようとしても足が速く途中で追いつかれてしまうので、遠くから釣るための遠隔攻撃を使わないといけない。だけど大宮さんは弓の扱いがとても上手く、その上、偵察やアタッカーまでいくつものマルチロールをしてくれるので私達の狩り効率が飛躍的に向上している。

　ところどころに高い肉体能力が垣間見えるのでレベルでゴリ押しているような気もしなくもないけど、今はそれがとにかく頼もしい。

「早瀬さん頼んだよっ！」

「ええ、まかせて」

　そんな彼女の能力に感心していると魔狼の息遣いが聞こえてくるほど近くまで接近してくる。今度は私がタンクとして初撃を受け、ヘイトを保ち続けなくてはならない。盾を構えながらグループメンバーに合図と指示を出す。

「みんな所定の位置について。ヘイトを取りすぎないように」

「分かった！」「おうっ！」

　盾はあまり使ったことがなかったものの、今回のクラス対抗戦のためにたくさん練習してきたので何とかなっている。２ｍを超える魔狼の体当たりは重いけど、来るタイミングが見えていれば踏ん張れる。

　メインウェポンには右手だけでも扱いやすい細剣。攻撃力は弱いがヘイト稼ぐだけなら最適な武器だ。細かく攻撃を繋いでターゲットを私に固定していく。本当はタンクも大宮さんのほうが上手いのだけど、私達の経験と経験値稼ぎを考えて手は出さずに遠くで見守ってくれている。

　一方のグループメンバー達は、私からターゲットを取らないようヘイトを見ながら慎重に攻撃を加えていく。今日が初めての魔狼狩りだというのに浮足立つことなく、集団としての立ち回りも安定している。試験も後半戦に差し掛かったけど体も動かせているし体調管理は順調なようだ。

（思い切ってここまで来て良かったわ）

　６階での狩りは大きな賭けと考えていたけど、大宮さんの予想以上の能力に加えてグループメンバーもジョブチェンジを行えたので、十分やっていけるとは思っていた。

　この調子で魔狼を狩り続けられれば、もしかしたら魔石量でＤクラスに勝てるかもしれない。午後には精鋭チームの磨島君達が合流する予定で、流れは確実に来ている。今後の学校生活を乗り切っていくために、魔狼をどれだけ安定して狩れるかが勝負所となるだろう。

「よっしゃー。これで３匹目！」

「いい感じね。一息入れたらお昼までもう少し頑張りましょう」

「おう！」「がんばろー！」

　\*・・\*・・\*・・\*・・\*・・\*

「おう、お前ら。見違えるような面構えになったな……それにひきかえ俺達は不甲斐ない成績出してしまった。本当にすまない」

「ううん、磨島君達は頑張ってたって聞いてたよっ」

「磨島、心機一転頑張ろうぜ」

　昼食を食べていると合流のため磨島君達がやってきて、挨拶早々に頭を下げてくる。Ｅクラスの精鋭を集めたというのに最下位を取ってしまったと気に病んでいるけど、Ｄクラスも高レベルを集めた精鋭達だったし仕方がない結果だと思う。文句を言わず私達のサポートに動いてくれるだけありがたい。

「早瀬。俺達は何をすればいい」

「魔狼を狩れるのは確かめられたけど、周辺にゴブリンライダーがでる場合があるの。魔狼を狩るついでにそれも一緒に狩ってくれると私達の効率が上がるわ」

「確かに。６階に来たばかりならあれの対処は厄介だろうな。分かった、俺達が受けもとう」

　魔狼を従えて騎乗するゴブリンライダーは徒党を組んでいることが多く、また単体であっても不利になると逃げてしまうため倒しづらい。ここでの狩り経験が豊富な磨島君なら問題なく倒し続けられるだろう。

　その後もいくつか作戦確認を行っていると、突然小声になって聞いてくる。

「そういえば……助っ人の話は本当か」

「ええ、大宮さんが連れてきてくれたの。今日は来てもらえるか分からないけど」

「大宮の知り合いか。立木からは何か指示があったのか？」

　ナオトからは助っ人頼みの作戦は立てないとの通知がきていた。今回のクラス対抗戦は自分達の力で勝って自信に繋げたいという主旨が書かれていたけど、もうすでにこの先を見据えたクラス戦略を考えているのかもしれない。

「そうか。立木なりに思うところが……どうした？」

　見張りをしていたクラスメイトが慌てたように駆け込んでくる。何か起きたのだろうか。

「おい磨島！　向こうで魔狼がリンクしてるぞ。トレインだ！」

「数は？　皆、戦闘の準備しろっ！」

「うんっ、みんな急いで！」

　トレインと聞いて、あのソレルとかいうクランが頭をよぎる。ただ今回は数匹とのことで対処できない数ではない。すぐに防具を着用し盾を持って立ち上がる。

「私も前に出ようかっ」

「大宮さんはトレインを作った犯人を捕らえてほしいの。お願いできるかしら」

「そうだった、あのときは逃げられたしっ。分かった」

「くるぞ！　魔狼……５！」

　皆と息を吞んで身構えていると私達の手前１０ｍまで走ってくる男がいた。覆面をしていて顔は見えないけど、もじゃもじゃの髪型からオークロードを連れてきた犯人と同一人物だと推測できる。

　男の手には何かの魔道具らしきものが握られており、魔力を通すと突然気配が消え、姿も視認しにくくなってしまった。この目の前からいなくなるような感覚はお面の冒険者に似ている。

　魔狼のターゲットだった男が消えたことでヘイトがリセットされ、一斉にこちらに襲い掛かってくる。魔道具を悪用して擦り付けをやったのだ。

　私達が魔狼一匹、磨島君達のグループは三匹を担当。大宮さんは残りの一匹を一撃で仕留めて、まだ近くにいるはずの男を捕らえに走る。

「みんなっ、慌てないで！　私達なら大丈夫っ」

　\*・・\*・・\*・・\*・・\*・・\*

　最後の魔狼を倒し一息ついていると、大宮さんが私達の前に捕らえた男を引きずってくる。

「ハァハァ……だから、俺も絡まれて逃げてただけなんだってば」

　覆面が剥がされ、髭ともモミアゲがくっついた特徴的な風貌が露になった。苦しい言い訳を口にしてるけど、オークロードのときの写真は持っているので言い逃れはさせない。

「嘘だよっ。あなたの写真はもう出回ってるんだからっ」

「……あぁ？　俺がどこの誰だか分かって文句付けようって……って何すんだ！」

「汚いマネしやがって。ギルドへ突き出してやる」

　そんな言い訳など聞かぬと、魔狼を倒し終えたクラスメイトが取り囲んで取り押さえ込む。男は暴れながら何度もソレルの名を口にするけど、野放しにしてはまた同じことをやってくる。磨島君の言う通りさっさと冒険者ギルドに突き出してしまったほうが賢明だろう。

　するとタイミングを見計らったかのように、向こうから集団がわらわらとやってくる。Ｄクラスのトータル魔石量グループだ。近くで待機していたのだろうか。

「劣等クラスのゴミ共！　兄貴に手を出しやがってタダじゃ済まさねぇぞ！」

「助かったぜ善。コイツらが言い掛かりつけやがって」

　Dクラスのグループリーダー、間仲善。いつも私達のクラスを目の敵にし、この前は颯太に暴力を振るった男だ。今回も話し合いなどする気は全くないようで、有無を言わさず《オーラ》を使って威嚇してくる。今回のことをうやむやにして乗り切ろうとする意図だろうけど、間仲からはそれ以上に嫌なものを感じる。

「Ｄクラス共。こっちには証拠もあるんだから暴力に持ち込もうとしても無駄だぞ」

「変な言い掛かり付けやがって。ぶっ潰してやる！」

　磨島君が証拠の映像はある、悪いのはコイツだと言い返すものの、間仲筆頭にＤクラスの何人かは有無を言わせず武器を抜いて剣先をこちらに向ける。

　彼らが手に持っているあれらはモンスターだけでなく人だって殺傷できるものだ。たとえ殺意が無かったとしても当たれば腕の一本くらい簡単に斬り落とせるし、下手をすれば死者だってでる。そんなことにならないと思うけど万が一を考えて急いでギルドに電話を掛けなければ――

「この女ァ、何しようとしてた！」

「きゃっ」

「ちょっと！」

　髪を掴まれ振り回されてしまったところを大宮さんが手を掴んで割って入る。それが合図となって戦闘となって――しまいかけたけど、Ｄクラスが一歩踏み出す前に大宮さんが瞬く間に半数を制圧してしまった。本当に凄い。

「悪は許さないんだからっ！」

「テ……テメェ、何だその強さは……」

　彼女の予想外な強さに驚き狼狽えるＤクラス。データベースを見た限りではＤクラスのトータル魔石量グループのレベルは７か８くらいが多かったはずだけど、大宮さんの速さに対応できる生徒は誰一人としていなかった。ということは、レベル１０以上は確実だろうか。

　私と磨島君らは驚きながらもすぐに電話を取り出し学校とギルドに救助を呼びに入る。こんな事件を起こしたソレルという男も、私達に武器を向けて暴力で封殺しようとしたＤクラスも断じて許してはおくわけにはいかない。

　だけど、そうも言ってられなくなってしまった……

「かはっ……」

「何してくれっちゃってんのよ、コネコちゃん」

　何者かが風と共に見えない速さで部屋に入って来るや否や、大宮さんの横腹を蹴り上げ、吹っ飛ばしてしまう。突然の闖入者の登場に何が起きたのか頭が追い付かない。

　そこに立っていたのは大柄で筋肉質、だけど場違いなほどに派手な男だった。手や耳などには下品なほどアクセサリーを付けており、背中には金色に装飾された大きな大剣、胸には太陽のバッチと……金獅子の勲章が煌めいている。

（あの勲章は“指定攻略クラン”の……まずいわ）

　日本政府に高い実力と功績が認められたクランだけが授かることのできる称号、指定攻略クラン。攻略クランを自称する集団は数あれど、指定攻略クランはそう簡単に名乗ることは許されない。金獅子の勲章はそのクランメンバーだけが持つことのできる名誉の証だ。あれを最終目標にしている冒険者も多いと聞く。

　だけどソレルは指定攻略クランではない。恐らくもっと上の、有名攻略クランに属している可能性が高い。

　一方の大宮さんは数ｍほど転がって倒れたまま動かない。あの男の蹴りに全く反応できず、もろに受け気絶してしまったようだ。私と磨島君が状態を確かめに近づこうと一歩踏み出したところで、うねるような強烈な《オーラ》に見舞われる。

「ガキ共ォ、うちのモンに手を出してタダで済むと思ってんのか？」

　濃密でおびただしい量の《オーラ》に、私を含めここにいる全ての人が恐怖し、ひれ伏すように蹲ってしまう。どれほど強いのかなんて測ることはできないけれど、私達が束になったところで欠片も勝ち目がないことだけは理解させられた。

　クラスの未来のためにも脅しになんて屈してはいけない。それは分かっている。だけどこれほどの暴力を前にして、私に何ができるというのか。

　先行きの見えない暗鬱な状況に、心が折れないよう必死に祈るしかなかった。

　――　早瀬カヲル視点　――

　攻略クラン・カラーズは狂王リッチの討伐という、どのクランも成し得なかった偉業を達成し、今現在の日本において最も勢いのあるクランと言われている。

　元は五つの攻略クランが合併したものであり、それらのクランは今も下部組織としてカラーズを支えている。その下部組織の一つである金襴会にソレルは属している。いわゆる三次団体だ。

　いくら天下のカラーズ系列とはいえ、三次団体ともなればそれほど強い力があるわけではない。継続的に活躍し、昇格していけばトップであるカラーズに入れる可能性もゼロではないので、夢見る若い冒険者達にとっては憧れるクランの一つではあるが、ソレル自体はまだできてから数年と歴史が浅く、功績を上げようと躍起になっている若く小さなクランに過ぎない。金襴会の中での序列も、下から数えたほうが早いレベルであった。

　だが、それも一ヶ月前までの話。ソレルは未知エリアの発見という、とてつもない功績を上げたのだ。

　そこにはゴーレムというレベルアップ効率の良い新種モンスターがおり、さらには浅い階層にもかかわらずマジックアイテム入りの宝箱が出現する巨大建築物まであった。未知エリアを独占したカラーズは戦力の底上が容易になり、財政的にも強化され、カラーズ内においてソレルの名は轟くこととなった。

　その結果、当時のソレルクランリーダーは金襴会の幹部に昇格。新たなクランリーダーには金襴会メンバーが直々にソレルに出向し、総括するという異例の人事となった。そして出向してきた金襴会メンバーというのが――

「こちらの～加賀大悟様だ！」

　得意げになってソレルの歴史を誇りながら加賀の太鼓持ちをするトレイン犯。そして自分は未知エリアを発見した張本人だというけど、そんな凄い人物には見えない。

「金襴会……そんな大物が何故、俺達の試験に介入してくる……」

　強烈な《オーラ》を浴びてなお気丈に顔を上げ、加賀を睨みつける磨島君。間仲兄が言っていた話が本当なら当然の疑問だ。金襴会は、最上位に位置するカラーズほどではないにせよ、優秀な戦士が多く在籍する知る人ぞ知る有名な指定攻略クラン。そんなところに在籍していた人物がどうして高校生の試験に介入してくるのか。

「わざわざガキ共の遊戯に出張ってきた理由はなァ、使える奴がいるかどうか見るためだ」

　ソレルを武闘派で知られる金襴会の直参に相応しい強いクランにしたい。けれど現状ではそれに足る人材が乏しい。未知エリアを発見して名声が上がり、莫大なエリア使用料が入ってきた今なら好条件で優秀な人材をスカウトできるのではないかと、冒険者学校まで青田買いしに来たという。

　しかし実際に見てみれば、優秀な生徒は貴族や他のクランの関係者ばかりで手が出せず、フリーである生徒は期待を下回る者ばかり。もう帰ってしまおうかと考えていたらしい。

「けど……まさかＥクラスに使えそうな奴がいたとはなァ」

　気絶している大宮さんを横目で見ながら言う。近年は不作続きで劣等クラスと揶揄されたＥクラスについてはスカウト対象からは除外していたものの、これくらいの実力者がいるなら話は別。それにＥクラスなら優秀だったとしてもどこかの組織に紐付けされている可能性は少ないはず。生徒の情報が書かれたリストを寄こせと凄んでくる。

（やっぱり、魔狼トレインのときから遠くで見ていたのね）

　大宮さんのあの動きを見れば普通でないことくらいは私にでも分かる。でもＥクラスに同じくらい強い生徒が他にいるとは思えないし、いたとしても学校のデータベースに本当のレベルは載せていないのでリストを見ても無駄だろう。それ以前に……トレインなんてしてくる外道に渡す道理はない。

「お前らに拒否権はない。ウチのもんに手を出したことは償わせなきゃならんしな……それと、このガキは連れていくか」

「そんな勝手なことはさせるかよっ！」

　磨島君が立ち上がって殴りかかる――が、加賀はその攻撃を見もせずにふわりと躱して、振り返りざまに鳩尾に拳をめり込ませる。先ほどの《オーラ》を見て分かっていたけど、大宮さんですら躱せないほどの速さで蹴り飛ばした実力は本物だ。まともに拳を繰り出したところで掠りもしないだろう。

　磨島君が崩れ落ちるのを見て、ソレルメンバーとＤクラスがせせら笑う。劣等クラスのくせに。雑魚が粋がるなと。確かに私達の実力は低い。それでも譲れないものくらいある。

（何と言われようとも大宮さんは命の恩人で、大事な仲間。絶対に渡すわけにはいかない！）

　大宮さんの前まで走っていき両手を広げて立ち塞がる。強大な相手だからと震えて見ているだけの人間に、望む未来なんてやってくるわけがない。その程度の弱い心では何も掴めず挫けて折れて、腐った学校生活を送るだけだ。クラス対抗戦とかその後の成長だとか言ってる場合ではない。

「あァん？　何のつもりだ。まだ実力差を理解してないのか？」

「俺に任せて下さいよ加賀さん。コイツは前から狙ってたんです」

「雑魚に用はねェ、好きにしろ。おい連れていくぞ！」

　間仲が下卑た顔で私の全身を舐めまわすように見ながら任せろと言う。以前の颯太と比べても何十、何百倍も嫌な視線だ。何を仕掛けてくるのかと警戒して見ていると、構えも無警戒に取らず手を伸ばしてきたので掴んで投げ飛ばす。

「痛ってぇ……テメェ！　優しくしてやろうって思ってたがもう容赦しねーぞ！」

　メイスのようなものを取り出して地面を叩き威嚇してくる。私よりレベルは上だろう。だとしても絶対に負けてやるものかっ！

　私の気概を感じ取ってくれたのかクラスメイト達も続々と私の隣に立ってくれる。たとえ間仲に勝ったとしても背後には格上のソレルメンバーが何人も控えている。私達が束になって挑んだところで負け路線は変わらないだろう。それでも、一緒に立ち向かってくれる仲間とは何と心強いものか。

「おいおい面倒クセェな。そいつらにはソレルの怖さをきっちり叩き込んでおけよ。俺はそこのガキを連れて帰るわ」

「……かっ……はぁ……お前ら、大宮に手を出したら……俺らの助っ人が黙っちゃいねぇぞ」

「あァん？」

　倒れていた磨島君が咳き込みながら吐き捨てるように言う。大宮さんを連れて行こうとしていた加賀は歩みを止めて思考を巡らす。

「それはどこのどいつだ」

「ええと……そんな奴いたのか？　劣等クラス共、答えろ！」

「呼べ。その助っ人が俺に勝てたら今までのことを全てチャラにしてやるよ。お前ら陣を張れ！」

　大宮さんがどこかの紐付きだとは思わなかったのか、はたまたＥクラスに助っ人がいることに疑問を覚えたのか。何に興味を引かれたのかは分からないけど、ソレル達はキャンプ用品を取り出してこの場に陣を敷き始めた。私達が逃げ出さないよう出口に居座る気だ。

　だけどクラスメイトを救ってくれた恩人をこんな物騒な場所に呼び出すのは躊躇われる。それに大宮さんと相談も無しに決めることはできない。

「（磨島君、そんなことを言って大丈夫なの……？）」

「（助っ人だって大宮が連れ去られるよりはマシだろう……もとより、俺達だけではどうやったって守れなかった。その手しかなかったんだ）」

「（それは……大宮さんも目を覚ましたようだし、相談してみましょう）」

　クラスメイトが気絶した大宮さんの頭を抱きかかえて介抱していると、ようやく目を覚ましてくれた。脇腹を蹴られていたけど、骨や内臓に異常はなさそうに見える。

「私、お腹蹴られたんだね。気づかなかったよっ」

　まだ少し痛むけど軽い打ち身で済んでいると言う。吹き飛ぶくらい強く蹴られてたのにその程度で済む頑丈さには驚くけど……でも、本当に良かった。

　早速何があったのか説明してみる。お面の冒険者の連絡先は大宮さんしか知らず、呼ぶかどうかの主導権も彼女にある。どうするのか聞いてみると、元々この後に合流して狩りを手伝ってくれる予定だったようだ。

「でもあの子はとっても大事な人なの。そんな危ないことに巻き込むわけにはいかないよっ」

「だがお前を連れ去ると言っていた。それだけでなく俺達のトータル魔石量の辞退まで要求してきた。あいつらは何でも暴力で押し通そうとしているんだぞ」

「そ、そんなことまで……でも……」

　Ｄクラスは最初から私達トータル魔石量グループにトレインをぶつけて、駄目なら脅して辞退させる作戦だった。ソレルにいたっては大宮さんを連れていくとまで言っている。そんな理不尽な要求は受け入れるわけにいかない。かといって、この場を切り抜けるアイデアもない。

「なら私が倒してあげるっ。さっきは油断したけどもう負けないから！」

「無理だ。アイツの《オーラ》は異常の域だった。お前が強いのは認めるが、金襴会の名は伊達じゃない」

「やってみないと分からないよっ」

「いいぞ。お前らの助っ人が来るまで暇だからな、少し腕前を見てやる」

　こちらの様子を見ていた加賀が「拳で相手してやろう」と金ぴかの大剣を放り投げ、不敵な笑みをしながら近寄ってくる。いくら大宮さんが強いと言っても、あの《オーラ》を体感した身としては勝機があるとは思えない。止めようとしたけど「大丈夫だよ」と笑顔で言われて何も言えなくなってしまう。

「悪は……許さないんだからっ！」

「フハッハッハ、正義を貫くにも実力は必要なんだぜ？」

　大宮さんは拳をパチンと合わせて気合を入れると、重心を落としリズムを取りながら構えを取る。対する加賀はだらりと腕を垂らした自然体だ。金襴会という有名クラン出身の冒険者に、劣等と蔑まれたＥクラスの仲間が立ち向かっている。その姿に違和感と高揚が綯い交ぜになった不思議な感覚を覚える。

　Ｄクラスやソレルのメンバー達は負けるわけがないと高を括って笑いながら見ていたけど、それも戦闘が始まるまでの話だった。

　大宮さんが地面を蹴り上げて瞬く間に間合いを詰めて正拳突きを仕掛けると、加賀は腕をクロスさせ真っ向から受け止める。その速度と風圧にソレル陣営からも驚きの声が上がる。そこから目にもとまらぬ速さで突き蹴り、裏拳、回し蹴りの高速コンボをお見舞いする……だけど、余裕の表情で全て受け止められてしまっている。

「速さはまずまずだが、攻撃が素直過ぎるな」

「くっ」

　加賀は防御しながらも大宮さんの袖を掴んでバランスを崩し、躱せないようにしてから背中に蹴りを叩き込む。かなり重い一撃だったのかよろめいて咳き込んでしまう。それでもダウンせず、気丈にも構えを取ろうとする。

（凄い戦い……でも）

　今見た攻撃のどれもが速く、鋭く、はっきりいってＥクラスのレベルからは大きく逸脱していた。Ｃクラスの組手を一度だけ見たことがあるけれど、それと比べても全く劣らない攻撃だった。だというのにこれほどまでに通用していないのはレベル差があるからなのか、対人経験の差なのか。きっと両方だろう。

　予想以上の格闘戦に互いの陣営が静まり返っている。劣等クラスと馬鹿にしていたＤクラス達は口をぽかんと開けながら凝視しているし、ソレルのメンバーは目つきを変えて興味深そうに観察している。私達ももちろん驚いていたものの、絶望的な状況は何一つ変わっていないので険しい顔にならざるを得ない。

　――そんな緊迫した戦いの最中に、妙な鼻唄が聞こえてきた。

「ふんふんふ～ん、おっ金～おっ金、ふんふん♪」

　なんとも間の抜けたメロディーと歌詞……その場違いな鼻唄が聞こえてくる方向に目を向ければ、何者かがスキップをしながらこちらに向かってきているのが見える。

　一見、普通のスキップのようだけど、かなりの速度でクルクル回ったりジグザグしたりと不規則に動いているのに全く足音がしない。何故なのだろう。

　その異様な人物の接近を、この場にいる皆が目をしばたたかせて見ていた。

　――　早瀬カヲル視点　――

「ふんふん～……ふん？」

　高速かつ不規則なスキップで近づいてきたのは、やはりお面の冒険者だった。今日も助っ人として来てくれたのだろう。

　だけど私達と同じ部屋にＤクラスや見知らぬ男達がたくさんいることに気づくと部屋の入口で立ち止まり、盛んに首を傾げ始める。状況が掴めていないようだ。

「あァん……誰だ？」

「かっ……か、仮面ちゃん！　来ちゃ駄目！」

　大宮さんがいることに気づいたお面の冒険者は、まっすぐに走ってきて抱き着いてしまう。ただ髪や呼吸が乱れ、顔が紅潮しているのを見て再び首を傾げている。

「助っ人……のようには見えねぇな。どうなんだ、善」

「弱そうだし、違うんじゃないの」

　間仲兄弟がお面の冒険者を見ながら自分より弱そうだと言いつつも、足の速い魔狼がポップするこの６階をソロ行動するなんて普通ならしないはずだと訝しんでいる。

「早瀬、あれがそうなのか」

「ええ。私達を助けてくれた冒険者よ」

　磨島君が険しい表情をしながら小声で聞いてくる。私はお面の冒険者がオークロードトレインを１分足らずで壊滅に追い込んでいる現場に居合わせたし、その後にオークを一撃で斬り捨てたり、片手で投げ飛ばしたりしているのを目撃している。小柄だとしてもあの細腕には驚くべき力が秘められているのだ。

　だけど彼女の強さを見たことのない磨島君達は、がっかりした態度を隠しきれていない。肩を落とし嘆いているクラスメイトもいる。恐らく彼女の見た目だけで判断してしまったのだろう。

　一流の冒険者とは装備も一流というのが常識。強さを見せることは他の冒険者から一目置かれ、ギルドやクランに厚遇されることにも繋がる。加賀のように強い冒険者ほど派手な格好を好む傾向があるのも、そういった理由がある。

　だというのに彼女の装備はみすぼらしく見えるボロのローブと古びた木製のお面。その上、武器は装飾一つないシンプルなダガーを腰に差しているだけ。小さな体格と相まって見た目から強さが欠片も見て取れない。

（でも、あれはただの装備ではないはず）

　何かしらの魔法が付与されたマジックアイテムだと私はみている。存在感を消すような、もしくは弱くみせるような効果があるのかもしれない。

「あぁ……ごめんねっ。危ないことに巻き込んでしまって」

　大宮さんがやさしく抱擁して再会の挨拶をする。お面の冒険者はどうしてこんな状況になっているのか知りたいのだろう、頻りにこちらを無言で見て状況説明を求めてくる。私が前に出ようとするとソレルの男達が騒がしく割って入ってきた。

「このちっこいのがお前らの助っ人だって？」

「加賀さんの期待する実力には遠く及ばなそうだな。どうする」

「もしもということはある。《簡易鑑定》で見てみるか」

　ソレルの一人がお面の冒険者に向けて無遠慮に鑑定スキルを放つ。一体どのくらいの強さなのか、その結果を聞こうと誰もが耳をそばだてる。だけど男の表情を見るに、あまり良くない結果がでたようだ。

「あれ……“弱い”ってでたぞ」

「弱い？　お前レベル１０だったよな……ということはレベル８かよ」

「あ～あ、こりゃ加賀さんキレちまうぞ」

　《簡易鑑定》は使用者からみて相対的な強弱判定しかできない。レベル１０から見て“弱い”という表示は、スキル使用者よりレベルが２低いということ。つまり、お面の冒険者はレベル８ということになる。だけど。

（あれほどの強者がレベル８なわけがない……）

　目に追うのが難しいほどのスピードで走り回り、１００ｋｇ近いオークを片手で投げ飛ばす膂力。あのオークロードでさえ全く相手にならなかった。とてもじゃないけどレベル８でできる芸当ではない。鑑定阻害、もしくはステータスの偽装でもしているのだろうか。だとしたら何故そんなものを……

「レベル８かよ、ビビらせやがって！　加賀さんの手を煩わせるほどでもねぇ。こんなヤツ、俺が倒してやるぜっ」

「ん～もしかすると……まァいい。やってみろ」

　自分よりレベルが低いと分かると、お面の冒険者を挑発しだす間仲兄。睨みつけて、掛かってこいと露骨な挑発ポージングをする。先ほど大宮さんに投げ飛ばされたことを根に持っているのか、はたまた弟に良いところを見せたいだけなのか、随分とやる気を見せている。加賀は何か引っかかるような曖昧な態度を見せたものの、決闘の許可をだしてしまう。

「ワンパンだ。こんなチビ、ワンパンで仕留めてやらぁ」

「……」

　人差し指を頭上高くに掲げ、弟に向かって一発ＫＯ宣言する間仲兄。一方のお面の冒険者は受けて立つつもりなのか、ゆっくりと近づいて間仲兄の顔を……じっくりと見返す。睨み返しているのかと思いきや、何度も首を傾げていることから見覚えのある顔かどうか調べている様にも見える。

「かっ、仮面ちゃん、危ないことは駄目だよっ」

「だが大宮。あんな奴くらい大丈夫なんだろ？」

「でもっ。あの子は……」

　大宮さんとしては、どうしてもお面の冒険者を戦わせたくないようだ。負けることを危惧しているというよりも、純粋に危ない事から遠ざけたいという保護者みたいな振る舞いを見せている。

「いい見世物を期待してるぜ、間仲君よ」

「それじゃルールはいつものでいくか」

　ソレルメンバーが勝手に決闘のルールを決めていく。冒険者同士の決闘はよくある事らしく、武器は禁止、どちらかが戦闘不能、または降参するまでというルールでいくとのことだ。

　私闘は違法であるが、人目に付かないところで殴り合うだけならば冒険者ギルドも見て見ぬふりをしている。気性が粗くプライドの高い冒険者のガス抜きにもなるからだ。とはいえ、肉体強化された者同士で殴り合いの展開となれば死ぬことも普通にあるのでそれなりのリスクはでてくる。

　お面の冒険者にとってもこんな安い挑発を受ける理由はないと思っていたけど、先ほどからシャドーボクシングをして驚くほどやる気を見せている。彼女をそこまで駆り立てる理由でもあったのだろうか。

「そんじゃ立会人やってやるか。両者前へ出ろ」

「おうおうおうっ、俺に本気を出させてみろよ、チビ助」

「そんな奴、軽くぶっ飛ばしてソレルの強さを見せつけてくれ、兄貴！」

「……」

　ソレルやＤクラス陣営は「このままでは賭けにもならない」と笑いながら見ている者がいれば「一発で倒さず、ボコボコにして見せしめにしろ」とかいう過激な者までいる。加賀は先ほどまでと打って変わって大人しく見ている。

　一方の大宮さんはウロウロとして落ち着きがない。いつも前向きで多少のことでは動じない性格だと思っていたのに、こんな彼女を見るのは初めてだ。でも間違いなくこの決闘には勝てるはず。あの男はワンパンで倒すと言っているけど、お面の冒険者にパンチを当てることすら難しいのではなかろうか。

「（これはチャンスかもしれないぞ）」

「（どういう意味？）」

　磨島君がこっそりと耳打ちしてくる。これまでのどうにもならなかった絶望的な状況で、お面の冒険者が勝てば“二つの意味”で交渉カードとして使えるかもしれないという。

　一つはＥクラスの意地を見せられること。身勝手な挑発から生まれた私闘とはいえ、助っ人同士の勝敗には多少なりとも意味が出てくる。私達が勝ったのだからここは引けと交渉できるかもしれない。

　もう一つはこの決闘で加賀の関心がお面の冒険者に移ることだ。今も加賀はこの決闘の成り行きを注視している。このままＥクラスや大宮さんに対する興味を失ってくれれば、この場を乗り切れるかもしれないという。でもそれは自分達だけが助かりたいというあまりにも身勝手な考えだ。

「（お前の言いたいことも分かる。だが加賀の強さは別格だ。俺達でどうにかなるものじゃない。ならば奴の関心の矛先だけでも反らすしかないんだ）」

　確かにあれだけの《オーラ》を放つ加賀には、お面の冒険者でも勝つことは無理だろう。他に方法がないというのも分かる。でも磨島君の考えに乗るわけには――

「よぉし、それじゃ始め！」

　そうこう悩んで考えているうちに決闘が始まってしまった。互いが向き合って構えを取っていたところ、開始の合図と同時に間仲兄が最初に動く。

「すぅーぱぁーとるねーどぉぉ！」

　何かの技名を言いながら踏み込み、木製のお面に向かって一直線に拳を振り下ろそうとする。その速度はレベル１０と言われてもおかしくないほどに速くて鋭い。直後、その運動エネルギーに見合った「パァン！」という大きな音が鳴り響いた。

　だけどそれは当たったのではなく、拳を手の平で掴んで止められた音だった。

　首をコテリと傾げるお面の冒険者。間仲兄は自分よりレベル２も下の冒険者に、しかも片手で受け止められるとは思っていなかったのか、驚きのあまり目を見開いて固まっている。かなりの動揺が見られる。

「おぉっ……おっと。気づかないうちに手加減しちまったぜ……って放しやがれ！」

「フンッ」

「お？　おぉ……ぎゃっ」

　仕切り直して手を引こうとするが、お面の冒険者は掴んだ拳を離さない。そのまま振り回して地面に叩きつけてしまう。その際にビターンという大きな音がしたけど、さすがはレベル１０。あの速度で打ち付けられてもまだ意識はあるようで、決闘は止まらない。

「ぉ……ぉ……ま、参っ……」

「フンッ」

　何かを言おうとするけどその前に持ち上げられ、再びぐるりと振り回された後に反対側の地面にビターンと叩きつけられてしまう。それがトドメとなり地面に張り付いたまま間仲兄は動かなくなってしまった……

　圧倒的パワーを見せて勝利したことに唖然としたものの、我に返ったクラスメイト達が声を上げて喜びを爆発させる。

「ふっ、ふざけんなっ、兄貴があんなチビに負けるわけが無ェだろ！　何かやりやがったな！」

　ガッツポーズをしたり抱き合って喜んでいると、間仲弟が顔を真っ赤にして言い掛かりを付けてくる。剣を抜いて今にもお面の冒険者に斬りかかろうとしている――ように見えるが、一歩も踏み出さず威嚇するだけにとどまっている。レベル１０の兄でも全く勝負にならないほど強い相手なのだと、本心では分かってはいるのだろう。

「やはり“フェイカー”だったか……貴様の所属クランはどこだ？　まぁどこでもいいか。フェイカーだというなら旧貴族の狗に変わりはない」

　地団駄を踏む間仲弟を押しのけて、後ろで眺めていた加賀が前に出てきた。フェイカーとは一体何を意味する言葉だろう。

　背後のメンバーに「そこで伸びてる奴をどけろ」と指示すると、今までの緩い表情ではなく、殺気すらこもった鋭い目でお面の冒険者を睨みつける。その直後に凄まじい《オーラ》が放射状に吹き荒れた。

「うちの頭が戦争したがってたぜェ。とりあえず、その仮面を引っぺがえして晒し者にしてやる」

（うっ……またこの《オーラ》……）

　胸の奥底から込み上げてくる恐怖が「この男に服従しろ」と訴えかけてくる。抗いたくても本能がそれを許さない。それは皆も同じで、まるで王に跪くかのように頭を垂れて蹲っているのが見える。これほどの格を持った冒険者なら、私達程度の相手に戦うことすら必要ないのだ。

　そんな男の敵意と《オーラ》を一身に浴びているお面の冒険者は、ただただ首を傾げるばかりだった。

　――　成海華乃視点　――

「うちの頭が戦争したがってたぜェ。とりあえず、その仮面を引っぺがして晒し者にしてやる」

　ジャラジャラと金や宝石を大量に身に着けた派手な男がこちらを睨みながら意味不明なことを言ってくる。どうしてこんな状況になっていたのかさっぱりだけど、仮面を取ろうというのなら“あの女”に正体がバレるので阻止しなければならない。

「仮面ちゃん……逃げてっ！」

　後ろでサツキねぇが息も絶え絶えに言う。無遠慮に《オーラ》をばら撒いているせいで、この部屋にいる人達が蹲って苦しんでいるではないか。

　レベル差がある格上の《オーラ》は私も身をもって体感したことがあったけど、心が折れるまで一瞬だった。ただ諦めることしかできなかった。あの状況に陥っても立ち向うなんて……おにぃを除けば無理だろう。

　このまま放っておくと心身に大きな負担をかけるので早々に何とかしたほうがいいけど、どうやって止めようか。

　目の前の派手な男の胸には私が先ほど投げ飛ばしたバカと同じ太陽のバッジを付けているので、ソレルというクランなのだろう。サツキねぇの体を痣だらけにしたのも、この男の仕業に違いない。ソレルはどうしようもない悪党集団だとママも言っていたし、遠慮せずに叩きのめしてもいいのかもしれない。

「どうした。俺の《オーラ》に怖気づいたか？」

　余程の自信があるようで、私と数ｍも距離がない位置で武器も持たず棒立ちしながら挑発してくる。《オーラ》の量から察するに私より一つか二つレベルが高いかもしれないけど、この距離で棒立ちできるほどの余裕はないはずだ。

　私のレベルと速度を過小評価しているのか。それとも対抗できるほどの強力なマジックアイテムを持っているのか。とりあえず鑑定ワンドを使って調べてみよう。

　魔石が先端に付いた１５ｃｍ程の長さの棒切れ。それが入れてあるポケットに手を突っ込んで魔力を流す。すると――

＜名前＞　加賀大悟　かがだいご

＜レベル＞　Ｌｖ２２

＜ジョブ＆ジョブレベル＞　ウォーリア　レベル１０

＜ステータス＞

最大ＨＰ：６８

最大ＭＰ：５３

ＳＴＲ：４３　＋６

ＩＮＴ：４９

ＶＩＴ：５８　＋８

ＡＧＩ：３９

ＭＮＤ：４１

＜スキル　４／４＞

＜偽装確率＞　極小

　項目リストがいくつも脳裏に浮かんでくる。この鑑定ワンドは《簡易鑑定》よりも精度が高く、《フェイク》などの偽装スキルも突破できる。偽装確率も“極小”とでているので信用してもいいだろう。

　レベルは一つ上だけどステータス自体は全体的に私より低く、レベル差を考慮する必要はない。

　ジョブは中級ジョブのウォーリア。スキルが四つのみということはスキル枠を１つも拡張していない。ソレルはカラーズ系列のクランだと聞いているけど、末端のクランでは情報が制限されているのか。それとも、おにぃのダンジョン知識が凄いだけなのか。きっと両方なのだろう。

　――以上の鑑定結果から不安要素は何一つ見つからなかった。この決闘もさっきと同じように武器無しルールのようだし、私としても是非とも戦ってみたいと思っている。実戦形式で確かめてみたいことが山ほどあるのだ。

　それに、私にはいくつも取って置きがあるので、そう慎重にならなくてもいいかもしれない。負けるわけがないのだから。

「《簡易鑑定》かァ？　そんなスキルを入れてるとかなっちゃいねーな……まぁいい。少し遊んでやる」

　《簡易鑑定》は貴重なスキル枠を一つ潰すので、戦闘職が持っていると見くびられる要因になると聞く。だけど私は鑑定ワンドを携帯しているので鑑定スキルはもう消してあったりする。ちなみにこのワンドの存在は成海家マル秘ランキングの上位に記載されているので、誰にも言ってはならず、バレてもいけない。

　男は悪そうな笑みを浮かべて構えを取る。腕の位置は若干低く、後ろ足に重心があるオーソドックスな受けの構え。私が鑑定スキル持ちだと勘違いしたせいか先ほどよりも余裕の表情だ。向こうから仕掛けてこないというならば、私から行くとしよう。

（さぁ上げて行こう。《アクセラレータ》）

　足元に加速魔法の青白いエフェクトが表れると同時に地面を蹴り上げ、数ｍの距離を瞬き一つの時間で縮める。ガラ空きの左頬に拳を打ち込もうとするけど、私の速度に驚きながらも即座に反応して腕を上げ、ガードを間に合わせてきた。

　そのガードの上から手加減抜きの力で殴る。真横に吹っ飛んでいる間に側面に回り込んで今度は回し蹴りを入れる――が、これも見えていたのか瞬時に両腕をクロスしてガードをしてくる。それでも構わない、主導権は私にある。

　蹴り飛ばして壁際近くまで追い込むと、私の進行方向を読んでパンチを重ねてくる。でも、それは見えているので若干身を屈めてダッキングで躱しカウンターを合わせる。しかしこれも首の動きだけで躱され、すぐに距離を取られしまった。

（あれ。もしかしてこの人……強いのかな？）

　ステータスと《アクセラレータ》のおかげでＡＧＩは私の方が倍近くある。先手も取れたというのに全てをガードし、その上、反撃までしてくるとは。速度が早い相手との戦いに慣れているのかもしれない。

「ハァ……こりゃ、トンでもねーな。舐めていた……ハァ……だが、これでテメェの所属は確定した」

　また変な事を言い出した。けど所属とは何のことだろう。もしかしておにぃ達と作った秘密結社がバレたのだろうか。バレても別にどうということはないけど。

「フェイカーだから“くノ一レッド”傘下のどこかだと疑っていたが、まさか“朧”だったとはな……ボコボコにするくらいで済ましてやろうかと考えてたが、朧だけは許さねェ」

　くノ一レッド？　あそこのユニフォームは露出多めのくノ一スーツだ。こんな茶色くて地味な格好なのに、あんな破廉恥集団とどう間違えたというのか。

　そして朧といえば、「悪い子は朧に連れ去られてしまうぞ」と子供に躾として使う、架空上の悪の組織だ。そんなおとぎ話を大人になってまで信じているとは、意外と夢見がちな人なのかもしれない。

　だけど私の何かで朧のメンバーだと確信すると、態度は豹変し瞳の奥に憎悪に満ちた炎を灯す。武器無しルールだというのに後ろに置いてあった金ぴかの大剣を持ち出してくるではないか。この様子だと朧は本当に実在しており、過去にソレルとクラン抗争をやっていたのかもしれない。それにしても――

　先ほどの格闘戦を経験してもなお、勝てると思っているのは何故だろう。戦闘経験が豊富というのは分かったけど、それでも私のスピードに付いてこれてなかった。アドバンテージがこちらにあるのは変わらないはずだ。もしかしたら私と同じように戦況を覆す取って置きを持っているのだろうか。

「テメェのとろこにはウチのモンが何人もやられてきてんだ。お前の首を持ち帰ればカラーズに昇格できるかもしれねェ。この場で俺の糧となりやがれ！」

「まっ、まずいぞ。加賀さんがあの剣を使うぞ！」

　私に殺意を向けながら金ぴかの鞘から刀身を引き抜こうとする。それは淡く薄緑色に光っており、生暖かい風をゆったりと漂わせている。風系のエンチャントウェポンだろう。おにぃから教わった知識を思い出してみる。

（風エンチャントは切断力アップと……あと何だっけ？）

　同じ風エンチャントでも切断力アップは高周波音がすると言っていた。この風をまき散らすタイプは攻撃速度付与……でもない。衝撃付与だ。

　あの大剣は斬るというより叩き潰すもの。その上さらに衝撃付与まで加われば、まともな装備では防御するのも難しくなる。あんな武器を使ってくるのなら――私も遠慮しないでいいよね。

　後ろに置いてあった１寸ほどの大きさの巾着袋まで一っ飛びし、中から１ｍほどのブーストハンマーを２本取り出す。赤く周期的に光っている方にファイアエンチャント、ヘッドの部分にバチバチと電気が走っている紫色の方にライトニングエンチャントが付与されている。

　これらを使えば衝撃付与の大剣だろうと何だろうと十分に打ち合える。というかあんなピカピカな武器に負けるわけがないのだ。

「なっ、なんだありゃぁ！　あんな小さな袋からなんてものを取り出すんだ」

「あんな武器、見たことねぇ！　炎と雷を纏っているぞ。しかも２本だと！？」

「怪物同士の戦いだ、ヤバイ！　逃げろォ！」

「俺達では手に負えない。大宮、早く逃げるぞっ」

「でっ、でも」

　ソレルらしき男達が私の武器を見て驚き、騒ぎ出して一目散に逃げ出す。するとそれに釣られて冒険者学校の生徒も恐怖の表情を浮かべながら逃げ始める。目の前の男次第ではサツキねぇ達も巻き込んでしまうので、逃げるよう頷いて合図を送っておく。それはともかく。

（こんな純真可憐な女の子に向かって怪物とは失礼しちゃうんだけどっ！）

　苛立ちをぶつけるかのように１つ約６０ｋｇのハンマーをそれぞれの手に持って素振りをすると、ブンッブンッと小気味よい風切り音が奏でられる。

　レベル２１ともなれば私の体重以上の重さであっても片手で苦もなく持ち上げられるようになるけど、考えなしに振り回せば私自身があらぬ方向に飛んでいってしまう。最初はそれで苦労したものだ。

　それでもブラッドなんちゃらを毎日何時間もぶっ叩いているおかげで、重心を取りながら振り回すコツは掴めた。今日はその成果をとくと見せてあげよう。

「両手武器を２つ同時だとォ？　舐めやがって」

　そう言うと怒気を放ちながら金ぴかの剣にさらなる風を纏わせる。別に舐めているわけではないのに。そういえば私とおにぃ以外で二刀流を使っている冒険者は見たことがないけど、もしかしたら珍しいのかもしれない。

　私も武器に魔力を通し、ブーストハンマーを起動させる。するとモーター音と同時にヘッドの片方がパカリと開き、ロケットブースターのように展開して光りを放ち始める。この状態で勢いよく振るうと爆炎が出て加速支援してくれるという面白い機構が付いた武器なのだ。

　ブーストハンマーをくるりと回しながら構えを取り、あの時のおにぃを強く、強くイメージする。変幻自在の剣捌き、神速の如き立ち回り、決して折れることのない不屈の闘志。それらが今もなお色褪せず、くっきりと私の脳裏に再生される。うんっ、絶好調。

　まだおにぃには遠く及ばないけど、それでも少しずつ近づいているはず。そう思うと気分が高揚し、次から次へと勇気が溢れ出してくる。

（さぁ、行こうっ！）

　――早瀬カヲル視点――

　目にもとまらぬ速度でパンチが放たれ、そのたびに空気が弾けるように震える。あれだけの《オーラ》を放つ加賀を、まるでピンポン玉のように殴り飛ばし壁際まで追い込むとは。小柄な体躯からは想像もできないほどのスピードとパワーに、この場にいる誰もが目を丸くして言葉を発せずにいた。

（これほどだなんて……一体どれだけの実力を隠していたというの）

　オークロードを含む巨大トレインを１分で沈めたそのときよりも、さらに速く力強い。地味な見た目と実力とのギャップが彼女を一層底知れないものとしている。

　それでも流石は金襴会のメンバーだ。速度で負けていても加賀はしっかりとガードを成功させて間合いを取り、仕切りなおした。そんな十秒にも満たない格闘戦の最中、お面の冒険者の正体に心当たりがあるという。

「フェイカーだから“くノ一レッド”傘下のどこかだと疑っていたが、まさか“朧”だったとはな……」

（朧！？　噂では聞いたことがあるけど……）

　それを聞いてクラスメイト達もどよめき出す。

　秘密結社、朧。その噂は様々だ。数ある都市伝説や陰謀の背後にはこの組織の名がたびたび登場し、日本国民なら誰もが知っている悪名高き組織。所属メンバーは誰一人として知られておらず、一説によればその首に途方もない懸賞金が懸けられているとか。テレビや雑誌でも面白おかしく特集しているのを何度も見たことがある。

　私はそんな組織が存在していることに懐疑的……いえ、全く信じていなかったけど、加賀は確信しているようだ。素手で戦うという決闘ルールを無視して後ろに置いてあった派手な装飾が施された大剣を持ち出し、魔力を通しながら鞘から引き抜こうとする。

（あれは、エンチャントウェポン！）

　刀身が緑色に鈍く光っており、魔力の風が吹き込んでくる。エンチャントウェポンはとても珍しく高価で、第一線で活躍する冒険者でもそう簡単に手に入るものではないと聞く。あれにどんな効果が付与されているのか分からないけど、ソレルメンバー達の慌てた様子を見た限りでは相当に強力なもののようだ。

　それを見たお面の冒険者も後ろに走っていって、小さな革袋から巨大な武器を取り出してきた。あの革袋がマジックバッグだということに驚きながらも、取り出された異色すぎる武器に二度驚く。

　自身よりも重そうなハンマー型の武器を２本。しかも両方ともエンチャントウェポンのようだ。赤く光る方は恐らくファイアエンチャントだろう、有名なエンチャントなので知っているけど……もう一方はバチバチと紫電を纏っている。あれは何なのか。見ているだけでも不安に駆られてしまう。

　さすがにもう危険だ。あの二人が全力で戦うことになれば、この部屋に安全な場所などなくなってしまう。磨島君や周りにいるクラスメイト達も危険を察知し、慌てて避難し始める。

「怪物同士の戦いだ、ヤバイ！　逃げろォ！」

「ここにいては危ない。大宮、早く逃げるぞっ」

「でっ、でも」

　これから始まるのはルール無用の命を懸けた死闘。見学するにしても、この部屋からは出たほうがいだろう。渋る大宮さんの手を引っ張って部屋の入り口まで一緒に避難する。

　同じように避難したＤクラスやソレル達もこの超一流の決闘に興味あるのか、狭い部屋の入り口にぎゅうぎゅうになって集まって見学しようとしている。

　そのため「オイ押すなって」「ちょっとっ！　どこ触ってるのっ！」といった具合に接触の混乱が起きるのは必然だ。私もお尻を触られた気がするけど、こんな非常時にそんなことをするとは思えないので気のせいということにしておく。

　お面の冒険者が２本のハンマーをそれぞれの手に持ち、くるりと回して構えを取る。あれは二刀流というスタイルだ。それを見た加賀が怒気を放つけど、それはそうだろう。一般的に冒険者が使う二刀流は弱いとされているからだ。

　二刀流スタイル自体は珍しいものではなく、宮本武蔵が開いた二天一流など、現代でも二刀流古武術がいくつも継承されている。実際に戦場でも二刀使いは無類の強さを誇ったというし、私も剣道で何度か戦ったことがあるけど本当に手強い相手だった。しかし冒険者同士の戦いとなれば話は別だ。

　冒険者最大の攻撃であり要でもあるウェポンスキル。それを二刀流の状態で放てばどうなるのかというと、利き腕しか発動せず、さらに威力は半減。スキルによっては発動すらしなくなってしまうという致命的な問題を抱えることになる。そうまでして二刀流スタイルを貫くメリットがないというのが冒険者の常識だ。

（それでも二刀流をやる理由があるというの？）

　あのお面の冒険者が本当に朧所属なのかは分からないけど、ただ者ではないことは確かだ。ウェポンスキルの弱体化というデメリットを承知の上で二刀流を使うというならば何かしらの理由があってもおかしくない。

　そんな思惑はお構いなしに、お面の冒険者がハンマーを軽々と振り回して魔力を通す。すると２本のハンマーが妙な物音を立てながら変形し光を放ち始めた。超一流の冒険者とは、こうも未知が多いものなのか。

　数秒ほど睨み合い、両者がふらりと前傾姿勢になる。

（始まるっ！）

　最初の一歩を踏み込んだと思ったら一瞬にして間合いが詰まり、直後にドゴンッと重い音が鳴り響く。その衝撃により飛ばされ土煙が円環状に巻き起こる。ハンマーと大剣がぶつかる音というよりは、武器に付与されたエンチャント同士がぶつかる音だろうか。

　お面の冒険者はすぐにもう一方のハンマーも振り下ろして次々に連打を浴びせる。ハンマーが振るわれるたびに強烈な閃光が放たれ、恐るべき速度で撃ち込まれている。

　まるで右手と左手のハンマーが独立して襲い掛かっているような、それでいて互いの隙を補完しているような奇妙なまでに完成された動き。自分の体重よりも重い武器をあんなに自由に振り回していたら、いくら膂力があったところで自身が振り回されてしまう……と思うのだけど何故かそうはなっていない。

（２本のハンマーを振るうタイミングで上手くバランスを取っているのかしら……でもどうやって。速すぎてよく見えない）

　一方の加賀は、あの暴風のような連打を大剣で全て防ぎきっている。剣の傾きを変えて、あるいは一歩引いて。受ける衝撃も相当なはずなのに上手く勢いを殺し、一発も被弾せずにいる。やはり加賀の動体視力と戦闘経験は並ではないようだ。さすがは指定攻略クランのメンバーといったところか。

　それでも押されて苦しい立場なのは変わらずだ。加賀は反撃のためにここでスキルを発動してきた。

「金襴会を舐めんじゃねェぞ！　《フレイムアームズ》！！」

　両腕に赤く燃えるようなエフェクトが巻き付く。ＳＴＲを上昇させるスキルだ。そこで初めて受けていただけのハンマーをはじき返すと、先ほどまでのお返しと言わんばかりに数発の斬撃の後、上段の構えから大きく一歩踏み込んでウェポンスキルを放つ。

「弾けろォォ！！　《ぶった斬り》！！」

　目の前の全てを切断するかのように途方もない速度で大剣が振り落とされる。前方数ｍに衝撃波が吹き荒れ、ズンッと低い地響きが響き渡った。あれをまともに受けてしまえば重装甲を着ていたとしても深刻なダメージは免れないだろう。だけどお面の冒険者はスキルモーションを見た時点でスキルの効果範囲から回避に移行していた。さらにはハンマーを振りかぶり、カウンターを狙って疾走に入っている。

「させるかっ！」

　加賀は何かを起動させると脚に青白く光るエフェクトを纏わせ、急旋回してハンマーを受け流した。そして受けるだけでなくお返しとばかりに斬撃を何発も叩き込む。お面の冒険者と立ち位置を目まぐるしく入れ替えながらの攻防戦だ。

（加賀の動きが速くなった！？）

　あの足元が青白く光るスキルを使った直後から見違えるように速度が上昇している。お面の冒険者も同種のスキルを使っていたけど、速度アップ系のスキルに間違いない。発動直前に手首が光っていたので所持スキルではなく、腕輪の魔導具から発動したのだろうか。

　それにしてもかなり際どい攻防だ。速度は今や互角――とまではいかなくても速度において、お面の冒険者に明確なアドバンテージはなくなっているようにみえる。むしろ、対人経験に秀でている加賀の方に分があるかもしれない。

「死にさらせ！！」

　リーチの長い大剣による渾身の鋭い突き。さらに一歩踏み込んで至近距離から斬り返して袈裟斬りからの横なぎ。流れるような連続攻撃だ。踏み出しも攻撃速度も非常に速く、全ての斬撃がほぼ同時に飛んできているように見える。大剣使いの極致とも言える立ち回りだ。

　堪らず後ろに飛んで距離を取り、仕切りなおそうとするお面の冒険者。ギリギリの回避だったとしてもあの一連の攻撃を避けきれただけで途方もない実力の持ち主なのだろう。だけど――

「これで……《アクセラレータ》の優位性はつぶれたぜェ？　朧は、速度が通用しなけりゃただの雑魚に過ぎないからなァ……覚悟しろよォ」

　勝利を確信したかのようにニヤリと笑い、大剣の剣先を向けて挑発する。それを聞いたソレルやＤクラスの連中は大盛り上がり。「派手に殺してくれ」だの「所詮はＥクラスの助っ人だ」だの、先ほどまでの硬く渋い表情が嘘のようにはしゃいでいる。

　でも……その通りかもしれない。あの《アクセラレータ》という速度バフスキルのおかげでお面の冒険者は大きなアドバンテージを取ることができていた。それを戦闘経験で勝る加賀も使えるとなれば立場は逆転するしかない。

　クラスメイト達は沈痛な表情を隠しきれていない。自分たちの助っ人がこれほどまでに強者だったことに驚きながらも、それでも加賀に対して勝ち目がないという非情な現実に打ちのめされている。このままでは彼女は殺されてしまうかもしれない。なんとか止めたいとは思うものの、私達程度があの場に入ればかえって邪魔になるだけだろう。己の無力さに打ちひしがれながらふと横を見れば――大宮さんの、まだ何かを信じているような顔が気になった。

「速度がもう通用しねェと分かって、その仮面の下はどんな顔になってんだ？　焦りか。それとも恐れか。今すぐにその小汚ねェ仮面をはぎ取って晒してやる」

　再び大剣を突き出すように構えて重心を下げる加賀。窮地に追い込まれているはずのお面の冒険者は……ただ首を傾げているばかりだ。

『私の……速度？　本物の速度は……コレじゃない……』

　初めて聞く可愛らしい声色。か細く、小さな声であるというのに透き通るように響く。そこに焦りや恐れのようなものは窺がえない。それどころか、自信に満ち溢れているようにさえ感じるのは何故なのか。

　加賀も同じように感じ取ったのか笑みを消し、怪訝な表情で聞き返す。

「あァ？　本物の速度だと……何ふざけたことを」

『なら……見せてあげる。魔王をも討ち滅ぼした……真なる勇者の……力を』

　お面の冒険者はそう小声でつぶやくと、ハンマーを持った両手を広げ、ふわりと軽やかに舞う。そして――

『《シャドウ……ステップ》』

　――世界が、闇色に染まった。

　――早瀬カヲル視点――

『なら……見せてあげる。魔王をも打ち滅ぼした……真なる勇者の……力を』

　お面の冒険者はハンマーを持った両手を広げると、ふわりと軽やかに回って歌うようにスキル名が紡がれる。

『……《シャドウステップ》』

　消え入るような小さな声がかすかに響くと、それなりに明るかった広間が急に暗くなり、彼女の足元にぼんやりとした霧が立ち込めた。もとより希薄だった存在感がさらに少しだけ薄くなった気がする。だけど変わったことと言えばそれくらいだ。薄暗くして見えにくくする“視覚阻害系”のスキルかもしれない。

「初めて見るスキルのようだが……魔導具からの発動じゃねェな」

　お面の冒険者を上から下まで、じろりと睨みながら加賀が言う。先ほどのスキルを随分と警戒しているようだけど、姿が若干見えにくくなったところで加賀の優位性が崩れるとは思えない。それは周りで見ているソレルメンバーも同じように考えていたのか、次々に野次を飛ばし始める。

「ハッタリだっ！」

「苦し紛れで何かをやったところで加賀さんには通用しねぇんだよ！」

「小賢しいチビっ！　早くくたばれぇ！」

　Ｄクラスの生徒も一緒になって大きく声を荒らげて野次を飛ばしている。だけどその声の内にはどこか苦しさが混じっているようにも感じる。圧勝すると思われた加賀とここまで渡り合えた事実は、彼らにも相当なプレッシャーとなっていたに違いない。

　とはいえ私達の立場が苦しいというのも変わっていない。もし負けるようなことがあれば私達Ｅクラスは二度と浮上できないよう徹底的に叩かれ、未来が絶たれる可能性がある。彼女にいたっては最悪命を取られるだろう。

（でも、このまま何事もなくやられるとは思えない）

　加賀が放つ濃密な殺気の前でも、お面の冒険者は逃げる素振りを見せず飄々としていて、とても追い込まれているようには見えない。それに伝説のクランに所属しているというのが事実なら特別な何かを隠していても不思議ではない。そう、例えばあのスキルだって……

「大宮。あれにどんな効果があるのか知っているか？」

「すっごく速くなるスキルだよっ。やっぱりあの子も覚えてたんだね」

「……なに？」

　大宮さんによれば周囲を暗くする視覚阻害系スキルではなく、速度バフスキルらしい。だけど、さっきの口ぶりでは他にも――

「始まるぞっ」

　磨島君の声に我に返って前を見れば重心を大きく下げ、大剣の剣先をお面の冒険者に向けて構えている加賀がいた。先ほどまでの嘲るような顔ではなく、眼光は鋭く随分と険しい表情になっている。もしかしてあのスキルがはったりではないと感じ取ったのだろうか。

　対するお面の冒険者は構える、というより、ふわふわと飛んでいるように舞っている。二つの武器を合わせるとかなりの重量だというのに、あのように軽やかに動けている姿に高い実力を感じざるを得ない。そこに加賀が大きく一歩踏み込み、地面を蹴り上げた。

「うォおおォおおお！！」

　爆発的な加速力で距離を縮め、お面の冒険者の喉元に大剣の剣先をねじ込もうと腕を伸ばす。疾風のような速さに外野から歓声が上がる。

　そんな高速突きをお面の冒険者は半回転ほど舞ってふわりと躱すと、その場から消えてしまった――と思ったら、加賀の真後ろにハンマーを振りかぶって現れた！

　加賀は必死の形相で振り返ってガードするものの、恐ろしい速度で叩きつけられたハンマーの衝撃を殺しきれず勢いよく飛ばされてしまう。その先に、再び瞬間移動するかのように現れたお面の冒険者。

「……あれはなんだ。ワープでもしているのか？」

「速すぎて見えないだけだよっ、あのスキルは本当に凄いの」

　あまりの速さに磨島君が訊ねると、握りこぶしをぶんぶんと振るいながら凄く速くなるのだと力説する大宮さん。少し前までかろうじて見えていたはずの立ち回りが、すでに私の目で追うことは不可能な領域となっている。注意深く見れば、ほんの僅かに黒い影があることに気づくくらいか。

　吹き飛ばされながらも身を翻して身構える加賀に、お面の冒険者が見えない影となって縦横無尽に襲い掛かる。大剣とハンマーが勢いよくぶつかって大きな金属音が鳴り響き、周囲にいくつもの火花が上がる。そのたびにお面の冒険者の立ち位置が変わっているため、クラスメイト達が目をしばたたかせて見ている。

　ハンマーから強烈な光が噴射して、攻撃速度がさらに上がる。大剣にぶつかる音から察するに、一発の威力も相当に跳ね上がっているようだ。四方から無数に放たれる攻撃に対処するため釘付けとなっていた加賀は、苦し紛れに無理な体勢からスキルモーションに入ろうとする。

「糞がァァァ弾けろっ！　《ディレイスラッシュ》！！」

「ダブル……《フルスイング》！」

　強力な斬撃を２回飛ばす大技、《ディレイスラッシュ》。最前線の攻略クランでもメインの火力として扱われる前衛最強格のウェポンスキルだ。お面の冒険者はそれに合わせてハンマーを横に大きく振りかぶり、《フルスイング》のスキルモーションに入る。

　《フルスイング》は単発技だ。単発としては火力の高いスキルではあるが、《ディレイスラッシュ》の火力には及ばない。

　だけど、お面の冒険者が振りかぶる右手と左手の両方には、ウェポンスキルのオーラエフェクトが発生している。あれではまるで２発の《フルスイング》を放つようではないか――

　うねる様な風を纏った２発の斬撃がほぼ同時に放たれ、赤と紫色のエンチャントを纏った２発の《フルスイング》と真正面からぶつかる。部屋全体に切り裂くような衝撃波が吹き荒れ、そして――かき消えた。

　加賀が驚きのあまり目を見開いているけど、それは２発の斬撃がかき消されたことに対してなのか。それとも《フルスイング》が左右両方のハンマーから放たれたことに対してか。

　スキル硬直で動けない僅かな時間。先に動いたのはお面の冒険者だ。紫電を放つハンマーが爆発的な速度で加賀の左足に撃ち込まれ、ついに均衡は破れる。

「ぐあっ……」

　加賀の下半身は合金の軽装甲で覆われているものの、あれだけの速度でハンマーを撃ち込まれれば多少の装甲があったところで意味を成さない。その一撃で足はあらぬ方向に折れ曲がり、追加で電気のようなものが身体を駆け巡る。よろめきながら呻き声を上げて、もう崩れ落ちる寸前だ。

　それでも大剣を支えにして何とか倒れるのを回避し距離を開けようとするが、お面の冒険者はそれを許さない。すでにハンマーを振り上げて追撃に入っている。数発の打ち合いこそ発生したものの、左右のハンマーが怒涛のように撃ち込まれて大剣が飛ばされ、次に利き腕を折られ。ついには気絶し動けなくなってしまった……

（つ……強すぎる……）

　金獅子の勲章の持ち主を一方的に圧倒するとは……想像を遥かに超えた強さに震えが走る。格闘戦のときも、加賀が《アクセラレータ》とかいうスキルを使って挑発してきたときも、本気なんて出していなかったのだ。あの状態となった彼女を止めるためには、金襴会よりさらに上のカラーズを呼ぶしかない。

　スキルを解除したのか、足元の靄が収束し部屋全体の光量が元通りになる。その部屋の中央でポツンと立っていた少女は何を思ったのか、マジックバッグからワイヤーのようなものを取り出して加賀をグルグル巻きにし始めた。

　右手と左足は折れて使えないはずだけど、それでも私達程度なら十分に殺せる強さはある。目が覚めても暴れないよう縛ってくれているのだろう。一方でソレルメンバー達はそれを捕食しているように見えたらしく、恐慌状態となっている。

「ありえねぇ！　あの加賀さんがやられるなんて！」

「加賀さんを喰おうとしているぞ！」

「ば……化け物だああああ！」

「俺等も喰われるっ、早く逃げろっ」

「ちょ、ちょっと待ってよー！！」

　自分達が次のターゲットになると思ったのか、ソレルメンバーが恐れ露わに一目散に離脱し、その後にＤクラスの生徒たちがパニックになりながら慌てて逃げ始める。だけど、もし彼女が本気なら誰一人として逃げることは叶わないだろう……そのつもりはないようだけど。

　そんな混乱の最中に大宮さんが真っ直ぐに駆け出していった。

「もうっ、危ない事しちゃだめでしょっ」

「……」

　小柄な体を優しく抱擁し、お面の冒険者も抱き着き返す。その姿は仲睦まじい姉妹のよう。武器を持ち出して戦っている最中は気が気でなかっただろう。二人には聞きたいことは山ほどあるけど、今はそっとしておこう。

「まさか、攻略クランまで出張ってきたとはな。参ったぜ」

　気難しい顔をしながら磨島君が話しかけてきた。ソレルの男達に奪われていた腕端末を取り戻し、クラス対抗戦の運営本部に連絡を取っていてもらっていた。軽く今までの状況を説明したところ、先生がここまで直接来られるそうだ。幸い、この階に近いところにいたようで、２０分もあれば到着するとのこと。

「先生は何か言ってたの？」

「この場にいる全員は活動を止めて待機してろってさ。まぁここまで大事になれば先生も出張って判断せざるを得ないだろ。あそこで倒れてる男の処遇も決めなきゃならないしな」

　磨島君の視線の向こうには、うつ伏せになって縛られている加賀がいる。お面の冒険者がいてくれたから難を逃れられたけど、本来ならあれほどの猛者が介入してきた時点で私達ではどうにかなるものではなかった。学校側は今回のことをどう捉えようとしているのか。

「まぁ、しかしだ。Ｄクラスの奴らの慌てた顔が見られてスッとしたぜ」

「ふふっ。そうね」

　色々あったけど、いつまでもへこたれてはいられない。しばし休憩を取った後は気持ちを切り替えて、最後まで戦い抜く算段をつけるとしよう。

　それから大宮さんと磨島君、私の３人で今後どうするかを話し合う。時間を大分ロスしてしまったため計画を修正する必要があるからだ。Ｅクラスは他種目の成績が厳しく、ここから巻き返すには私達トータル魔石量グループの得点が重要となってくる。失敗は絶対にあってはならないので、残りの時間でどれだけの魔狼を狩れるか念入りに計算していく必要がある。

　だけど今回の件は悪い事だけではない。大宮さんが強いということは分かったし、後ろには金襴会メンバーすら倒したお面の冒険者も控えている。安全性が増した今では、より積極的な狩りができるだろうし、頑張ればＤクラスに十分届くはずだ。

　意見を出し合って詳細な狩り計画を立てていると加賀が目を覚ます。すでに武具は取り上げ、ワイヤーできつく縛っているので大丈夫……とはいえ、恐ろしくもある。

「ぐっ……俺を、殺さねェのか？」

　この期に及んでも眼光鋭く睨んでくるとは、呆れた精神力だ。その視線からお面の冒険者を守るように前に立つ大宮さん。

「あなたは先生方に引き渡すわっ。この子は朧なんかじゃないし、もう関わらないでっ」

「ふっ、そういうことにしておくか……誰かきたな」

　後ろを振り返れば、遠くから凄い速さで走ってくる人達が見える。先頭にいるのは……Ｅクラス担任の村井先生だ。手に細長い剣を持って、絡んでくる魔狼を一撃で切り殺している。

　その勢いのまま、あっという間に部屋に入ってきて縛られている加賀とお面の冒険者のいる方へ歩いていく。あの速度でここまで走り続けていたにもかかわらず、息一つ切らしていない。

「冒険者学校で教師をしております村井、と申します。金襴会の加賀大悟様ですね。至急、救急班へ運ぶ手配を。それとお面を被っている貴女は……Ｅクラスの補助要員として登録されておりませんが、冒険者ＩＤはお持ちでしょうか？」

　村井先生が腕端末から出した画面を操作しながら加賀とお面の冒険者の素性を調べようとする。いつもの指導的な口調ではなく、上客に接するような丁寧な口調だ。違和感を抱きつつも登録という言葉が気になる。

「あぁ。立場というものがおありでしょうし無理に提示していただかなくても結構です……が、お前達」

　こちらに振り返ると、低く冷徹な声色に変わる。

「補助要員名簿に記載されていない、外部からの助けを借りた場合は……即失格になることは知っているのか？」

「ちょっと待ってくださいっ。そんなルールはお聞きしていませんっ。それは何ですか」

「俺達は助っ人が許されていることすら聞かされていなかったんですよ！」

　登録されていない人に手助けしてもらうことは失格対象……それには大宮さんと磨島君が猛抗議する。助っ人が許されていることすら聞かされていないのに、それが登録制だったなんて知るわけがない。理不尽すぎるのではないかと食い下がるものの、先生の態度は相変わらず冷え切っている。

「トータル魔石量グループの処遇について、これから審議に入る。だが結果には期待するな。この場にいる生徒全員、ギルド前広場にある運営本部へ速やかに移動し、そこで待機を命ずる」

「そ、そんなっ」

　クラス対抗戦は今日を合わせて残り２日しかない。ここはダンジョン６階。今から外まで行って戻るなんてことをしていたら、狩れる時間はほとんど残らない。Ｄクラスからの妨害がなくなって、これからだというのに……私達が止まってしまえば逆転の目は完全に潰えてしまう。

　しかし、どうして村井先生は助っ人ルールを教えてくれなかったのか。教えても大した助っ人を呼ぶことができないと思っていたのだろうか。それに失格だなんて……これではまるで私達を勝たせないよう仕組んでいたようではないか。

　酷く底冷えするような目で見降ろす村井先生。トータル魔石量グループ一行は疑心暗鬼になりながらも、その場を後にする他なかった。

「それでボクさぁ“外”に出たいんだけど。どうすればいいのか教えてくれないかな」

　天摩さんと久我さん俺の３人でレッサーデーモンとの激闘を制し、やっと終わりが見えたその時、魔人が現れた。

　まだ幼さの残る柔和な顔立ちに相反する、狂気に満ちた赤い瞳。俺の記憶にある大人しそうな魔人の面影からは随分とかけ離れている。その上、俺達のことまで知っていたとなれば、これはもうプレイヤーの可能性を疑わざるを得ない。

　以前にリサと真夜中の公園で話し合いをしたときに、プレイヤーがＥクラスの生徒だけでなく、モンスター側にも入り込んでいる可能性を想定したことはあったけど……まさか魔人とは。少々チート過ぎる気もするが。

「ねぇ。黙ってないで教えてよ」

「……あなたは何者。さっき使ったスキルは何」

「関係ない質問はダメー。質問してるのはボクなんだよ。はい、減点１ね」

　久我さんが最初の声掛けのときとは打って変わって距離を取り、警戒しながら質問する。素性と、レッサーデーモンにトドメを刺したスキルは何なのか聞きたいようだ。一方の魔人は無邪気な笑顔で「３点減点したらオシオキしちゃうからね」と言い返しをしてくるが、目が澱んでおり、まともな状態ではないように思える。そう、あの目だ。

　何というか人を殺しかねない危うい精神状態に見える目。もしかしたら俺の《大食漢》やリサの《発情期》のように、プレイヤーの固有スキルが精神に負荷をかけているのかもしれない。もしくは魔人という特異な身体に入り込んだ副反応、という線もあるか。魔人は見た目こそ人間と同じようだが、肉体能力や魔力特性、精神構造が人と大きく異なっていると聞いたことがある。

　とにかく、こんな奴の近くにいつまでもいるのは危険だ。ここは俺が率先して答え、早めに開放してもらったほうがいいだろう。

　この魔人は“外”に出たいと言っていた。ダンジョンの外に出たいという意味なら、普通に《ゲート》を使ったり、歩いて出て行けばいいだけではないのか。

「外というのはダンジョンの外という意味だよな。どうして普通に出て行くことができないんだ」

「えーとね。《イジェクト》は何度やっても使えなかったし、帰還石も《ゲート》もダメ。歩いて出ようとすると迷ったり、体が疲れたり、それでも無理やり行こうとすると元いた位置まで勝手に飛ばされちゃうんだ」

　脱出魔法《イジェクト》や脱出アイテムはあらかた試したけど全て駄目。移動も何らかの力で阻害または封じられている。途方に暮れていたところ、たまたま悪魔のか細い悲鳴が聞こえたのでその方向に飛んでみたら奇跡的にここまで来れたという。魔人は悪魔の魂と共鳴でもしているのだろうか。

「ボクがこの世界にきたときから毎日ずっと、ずーっと出ようと頑張ってきたけど……やっと掴んだチャンスなんだ。だから、出られると分かるまで誰も帰さないからね。《ディメンジョン・アイソレータ》」

　拳を突き上げて空を強く掴むようにスキルを放つ。すると広間全体から軋む音が鳴り、直後に幾何学的に歪みだす。突然のスキル発動に、天摩さんが驚いて辺りを頻りに見回している。

『な、何したのー。目がチカチカするんだけど』

「この一帯の空間を閉じたのさ。帰還石で逃げられないようにね」

『ええっ、そんなことできるの？』

　レッサーデーモンとの戦闘時に自動でこの広間の出入口を封鎖されたが、あれと似たようなスキルだ。だが今この魔人が使ったのは帰還石や脱出魔法をも封じるより高位の空間封印スキル。主に深層の特殊ボスモンスターが使ってくるのだが、プレイヤーでも覚えられるものなのか。

「でも……あなたが出られる手段なんて知るわけない」

「じゃあ分かるまで出さないよ。考えて」

　この部屋に閉じ込められることが問答無用で決定され、不服の表情を露わにする久我さん。脱出方法を考えろと言われても、この魔人だってプレイヤーなのだからゲーム知識を併用して模索していたはず。それにもかかわらず答えがでないというなら誰にも……いや、同じ魔人なら知っている可能性もあるのか？

　確か、以前にブラッディー・バロン討伐クエストを受けたときに、オババが「店から自由に離れられない」と言っていたことがあった。だから“アレ”の収集を冒険者にクエスト発注していたわけだが、もしかしたらこの魔人と同じ状況になっていた可能性もある。

「他のお仲間には聞いてみたのか？　それは魔人の特性かもしれないぞ」

『魔人？』

「今までどこにも行けなかったから、他の魔人とは会ったことも話したこともないよ……でも良い案かもしれないね。ボクは動けないから、とりあえず呼ぶか聞くかしてきてよ」

　呼ぶのは無理だが、フルフルに聞いてくるくらいならできるかもしれない。でもその前にここから出してもらわないと。

「じゃあ一応封鎖は解くけど、逃げてしまわないように……人質として“お前”を氷漬けにしておこうかな。カッチカチーン！　《氷結牢獄》」

「何を……」

『あぶない成海クンっ！』

　魔人が俺の方に手の平を向けてスキルを使おうとしてきやがった。それを見た天摩さんが、とっさに身体を入れて庇ってくれたのだが、代わりに《氷結牢獄》を受け一瞬で氷に覆われてしまった。

「あぁっ！？　なんでブタオなんかをかばうのさっ！」

　先ほど使ってきたのは魔法系上級職が使う行動阻害魔法。ただの氷ではないので《怪力》を使ったとしても脱出は不可能だろう。解除しようにも俺では無理。だが今すぐに命の危機というわけではないはずだ。

「まぁいいや。でも早く行って来ないとこの娘は凍えて死んじゃうかもよ？　急いでね……おっと」

「全てのスキルを解除しなさい。さもなければ……」

　このまま魔人のいう通りにしても良い未来が見えなかったのだろう、気配を殺した久我さんが背後に回り込み、魔人の首元にナイフをあてがってスキル解除を要求する。だがその脅しは微塵も効いていない。それどころか逆効果だ。

「無駄だよ。そんな物ではボクに傷一つ付けられやしない。でもオシオキはやっぱり必要かな？」

　その返答を聞くや否やナイフに力を入れて押し込もうとする――が、首元の刃を見えない速さで摘ままれ、それだけで押し下げられてしまう。圧倒的なＳＴＲの差を実感した久我さんはナイフを手放して距離を取ると、メインウェポンである短刀を引き抜いて構える。

　恐らく《鑑定》を使ってレベル差を確認し、勝機があると考えて仕掛けたのだろう。だがレベル差が大きくなると鑑定結果は誤差が大きくなり、さらにはデタラメな数値表示になってしまう。

　今までこれほどのレベルの相手と出会ったことがないのだから仕方がないとも言えるが……だとしてもあの魔人をいたずらに刺激するのはまずい。精神状態が悪いだけでなく、俺達の命を何とも思っていない節がある。

「とりあえず……」

「待て！　落ち着け！」

　狂気の色に染まった目を見開き、久我さんに向かって手を伸ばして何かを掴もうとする。あの魔法は嫌な予感がする……絶対に止めなければ。急ぎ剣を抜いて斬りかかるが、見もせずに片手で刃を摘まれてしまう。

「琴音ちゃんは～死刑……《デス》！　なんちって」

「……あっ……」

　魔人が何かを握り潰す。それだけで彼女は糸が切れたように崩れ落ち――ピクリとも動かなくなってしまった。

「どう今の。面白かった？」

「テメェ！！　今何をしやがっ……ぐぁっ」

　全力で殴りにかかるが、その腕を掴まれ殴り飛ばされる。視界がぐるぐると回り、気絶するほど右腕が熱い。というか痛ってぇ！　見れば腕がおかしな方向にねじ曲がっている。

　あの一瞬で壁までぶっ飛ばされたのか。何が起こったのか見えなかった。魔人はつまらない物を見るかのように俺に視線を投げかける。

「ブタオごときがボクに勝てるわけないでしょ。次に歯向かってきたら、その首を引っこ抜いちゃうよ」

「はぁ……はぁ……あ゛あ゛あぁぁっくっつけぇ！　《中回復》！」

　気絶しそうなほどの痛みに耐えながら、折れ曲がった腕に向けて回復魔法を唱える。確かこうすれば折れた骨もくっついたはずだ……手先は問題なく動いたので神経と骨の接続は成功したはずだが、痛みと腫れはあまり引いていない。千切れた皮膚から血もじんわりと流れ続けている。けど、ひとまずはこれでいい。

「うわっ。そのやり方、凄いね。だけどやっぱり……ボクの知っているブタオとは違うように見えるなぁ。成海颯太だよね？　思っていたより何だか痩せてるし」

　顎に手を当て「あのセクハラ男がこんな階層に来れたっけ」と頭から爪先まで訝しみながらじろじろと観察し、オマケに《鑑定》までしてくる。俺はと言えば脂汗流しながら痛みが引くのを待つことしかできない。それでも、現状を打破するために必死に息を整えて考えを巡らす。

（三人で……力を合わせて悪魔を倒し、仲良く大団円で戻ろうとしていたというのに……）

　ピクリとも動かない久我さんを見る。裏協定を結び、これからは静かに学校生活を送れると思っていたのに……胸がはち切れそうだ。一方、心優しき親友の天摩さんは俺を庇ったせいで氷漬けになってしまった。あのまま体温を奪われ続ければ、どこまで体力が持つか分からない。早く手を打たねば……

　素直にフルフルに聞きに行くことが最善なのか。のこのこと聞きに行ったとして、天摩さんを解放してくれる保証はあるのか。そも、邪魔だからと久我さんを即死させたコイツは約束を守るような奴なのか。

　やはりこの世界を生きる人々にとってプレイヤーは危険だな。なまじ力と知識があるせいで想定外のことばかりしてきやがる。この魔人が外に出たとしても、何もせず平穏に過ごしていくとは思えない。なら――

（あぁ……そうか）

　コイツをぶっ殺せば解決するかもしれないな。空間封印スキルも氷結魔法も、コイツが死ねば問答無用で解除される。久我さんだって時間もそれほど経っていないので蘇生は高確率で成功するはずだ。急ぎ戻り、世良さんに相談すれば【聖女】に頼んで貰えるかもしれない。

　記憶通りなら、この魔人のレベルは３０後半だったろうか。途方もないレベル差のように思えるけど、ここで諦めるくらいなら死んだほうがマシだ。当然、無駄死になんてしないし何としても勝つつもりだが……このレベル相手に長期戦なんてできるわけがないので、一撃で確実に仕留める作戦を立てなければならない。

　そのためには今の俺にできる最高のバフをてんこ盛りにしてスキルを放つ必要があるが、目の前でそんな悠長にバフスキルを重ね掛けしていたら確実に殺されてしまうだろう。ならばどうするか。

「ねぇねぇ。ＮＰＣの分際でボクを無視するとか何なのさ」

　やれやれと言う口調であるが、俺を見る目には多量の殺気が混じっている。次に無視したら殺すとの警告なのだろう。

「俺は……成海颯太だ。すぐにゲートを使ってオババのところに行ってこよう」

「んー？　やけに素直になったね。でもフロアゲート（※１）で行ったら戻ってこられないと思うから、ボクがこの場に《ゲート》を作って開きっぱなしにしてあげるよ」

「あぁ、助かる。すぐに帰ってくる」

　目の前で作られたゲートに魔力を通して潜り抜けると、一瞬で視界が書き換わりオババの店前広場へと転移が完了する。今にも砕け散りそうな精神力を総動員し、即座に《サタナキアの幹細胞》の魔法陣を描き上げ、そして発動。強烈なＨＰリジェネ効果により雑に繋がっていた右腕が血煙をあげて瞬く間に修復される。

「ハァ……このレベルでもまだ負荷は高いな……だが十分許容範囲内だ」

　立ち眩みのような症状に耐えながら震える手でミスリルの小手とファルシオンを装着し、次に俺の使える中で最強のバフスキル《オーバードライブ》の魔法陣を描く準備に移る。これを使うのも、あの骨野郎のとき以来だ。

「待っててくれ天摩さん、久我さん……すぐに、助けに行くから」

（※１）フロアゲート

ダンジョンのエリア内に設置されているゲートのこと。１階以外の特定の階層に飛ぶには事前にその階での魔力登録が必要となる。スキルで覚えられる《ゲート》と区別するときに使われる言葉。

　――　天摩晶視点　――

　頭に大きな角が生えた少年が現れ、成海クンに向けて何かを放とうする。咄嗟に間に入ったのだけど、気づいたら透明な結晶の中に閉じ込められていた。

　初めてみる魔法だ。見た感じ、氷だと思うけど……冷たくはないし呼吸もできているのでよく分からない。というのも、ウチの着ているこの鎧には湿度と温度を快適に調節にする空調機能が付いているので氷点下数十度にも耐えられるし、酸素を作り出す機能も搭載されているので、たとえ水に沈んだり氷に完全密閉されたとしても１時間くらいなら問題はない――いや、実はある。

（トイレ……どうしよう……）

　元々の予定では綺麗な広間を見て回りつつ、成海クンとここまでの道のりを総括しながらお菓子を食べ、楽しく談笑する予定であった。だというのに、あのバカが大悪魔を呼び出したせいで予想外の戦闘となってしまい、それが終わったと思ったらこの有様。驚きと緊張の連続でトイレに行きたくなってしまったのも自然の摂理というもの。

　前もってこんなことがあると分かっていたら重装備用のオムツをはいてきたというのに……油断した。

　どうしたものかと考えていると、新入り執事――名前は久我とかいったか――が目の前で妙な魔法を撃たれ、糸が切れたかのように倒れてしまった。一瞬、死んでしまったのかと驚いたものの、よく見れば微かに呼吸しているので生きてはいるのだろう。睡眠魔法だろうか。

　でも勘違いした成海クンは取り乱し、その場の勢いで殴りかかってしまう。逆に壁まで勢いよく殴り飛ばされてしまったようだけど、この角度からでは……よく見えない。あれだけ強い成海クンでも避けきれないとは、あの少年はどれほどの強さなのか。

　成海クンは怪我をしたようだけど大丈夫だろうか。様子を見たいので一刻も早くこの氷をなんとかしないと……おおぉお！　……はぁ。ウチの《怪力》でもびくともしないなんて。やっぱり普通の氷ではない。このままでは成海クンが危ないし、乙女としても終わりを迎えてしまう。

　氷の中でしばし藻掻いていると、何やら紫色の光を呼び出して成海クンはそこに入って消えてしまった。何かの移動魔法だろうか。

「もう少しだけ我慢してね。晶ちゃん」

　ふと気づけば目の前まで来て親しげに話しかけてくる。ウチのことを知っているようだけど全く見覚えがない。親戚の子……じゃないよね。というかその側頭部から生えている大きな巻き角がとても気になってしまう。取り外しは可能なようには見えないけど何だろう。

「あのセクハラ野郎は死なない程度に懲らしめて、二度と近づけさせないようにするから安心してね。ボクは君の……君だけの味方だから」

　そう言いながら氷にそっと触れてウインクするボクッ子。セクハラ野郎とは一体誰の事を言っているのだろう。ウチには随分と優しげな視線を送ってくるけど、成海クンに対しては殺気立った目で見ていたのは何故なのか。

　新入り執事が倒れたことについては「暴れたので仕方がなく気絶させただけ」だと身振り手振り説明してくる。その際に即死魔法のように見せかけたドッキリを仕掛けたら真に受けて取り乱してきたので、返り討ちにしてやったとのこと。

　どうやらセクハラ野郎というのは成海クンのこと言っているらしい。あんなに優しい人だというのに勘違いにも程があると思う。

　その後もいろいろと語りかけてくる。「ボクは強いから外に出たらボディーガードとして雇ってくれ」だの、「学校にいきたいから手続き頼みたい」だの、「彼氏候補としてどう」だの、色々と無茶を言ってくる。そんなこと今はいいから早く氷から出してほしい。さっきから大声でそう言っているのだけど、ウチの声は全く聞こえていない模様。ボクッ子の声はちゃんと聞こえるというのに、この氷はどういった仕組みになっているの。

　体を捩じったり変なポーズをしながら興奮して語り掛けてくるボクッ子のすぐ後ろ。紫色の光から出てこようとしている人影が見えた……成海クンだ！　だけど何やら様子がおかしい。

「ただいま。そして――」

　体全体から暗い赤色の《オーラ》を漂わせ、手には黒い霧を纏った不気味な曲剣を持ち、すでに何かのスキルを撃つ構えを見せている。その手元に目を見張るほどの濃密な魔力と《オーラ》が収束していく。普段は温厚で優しいはずの彼の表情は、憤怒と殺意の色で染められていた。

「――死にやがれぇ！　《アガレスブレード》！」

　ただならぬ気配に気づいたボクっ子が振り向いた瞬間、視界が光に塗りつぶされ、轟音が響き渡る。これは大悪魔にトドメを刺したものと同種のスキルだろうか。

「ちっ、浅かったか」

「ぐぅっ……《フライ》」

「逃がすかよっ！」

　ふわりと浮いた後、上方向に落下するように加速度的に上昇して距離を取ろうとするボクッ子。腕を押さえながら飛んでいるけど、よくみれば右腕がない。さっきのスキルで断たれたようだ。

　それに対し、成海クンは空中を蹴り上げてジグザグに駆け上がっていく。二人して当然のように空を飛び始めたけど、そんなことができるなんて聞いてないんだけど！　何が起きようとしているの。

　追ってくる成海クンを撃ち落とそうと数百発はあろうかという大量の青い魔法弾が同時に召喚され、間を置かずに放たれる。白かった広間が青く眩い光に染め上げられ、コブシ大の大きさの魔法弾がシャワーのように降り注ぐ。

　その弾幕の中を弾けるように動いて躱し、あるいは直撃しそうな魔法弾は剣で弾きながら進んでいく成海クン。あっという間にボクッ子の数ｍ手前まで接近すると黒いモヤモヤした曲剣を振りかぶる。

「くたばれクソガキィィ！！」

「糞ブタオがぁあああ！」

　ボクッ子も即座に左腕を上に掲げ、何もないところから身長を超える長さの巨大な鎌を取り出して振りかぶる。刃が青白く輝いているけど、何のエンチャントが込められているのか不明だ。

　上空で赤黒い霧と輝く白い光が残像を残して交差すると、目にも止まらない速度で斬撃戦が繰り広げられる。天井付近、壁際。その直後には石床を衝撃波で捲り上げながら、雄叫びと共に渾身の斬撃を幾重にもぶつけ合う。

（な、なんなのー！？）

　１分も経たずに壁や床、天井にいたるまで傷だらけだ。あの二人にはこれほど大きな聖堂広間でも窮屈だというのか。

　氷の中にいても響くほどの重い衝撃と金属音。壁や地面に残る爪痕から、あの斬撃の１つ１つにウチの放つスキルと同等以上の威力が込められていると推測できる。その合間に何発もの光が煌めき爆発音も鳴り響いているので、魔法スキルも同時併用して戦っているのだろう。

（でも……す、凄い）

　上空では魔法弾が入り乱れる中を二人が驚くべき速度で縦横無尽に飛び回り、雄叫びを上げながら斬撃が叩き込まれている。斬撃もただ打ち込まれるのではなく、いくつもフェイントがかけられ、魔法弾がウェポンスキル発動の駆け引きに使われている。今までに見たことがない想像を超えた戦いだ。

　ウチの知る限りの冒険者とは、剣士なら剣を、斧使いなら斧を、魔術士は魔法をひたすら磨き、その道の極致を目指す者達ばかりだった。

　それは当然だ。近接職と魔法職ではスキルも装備もまるで別物だし、同じ近接職でも短剣使いと両手斧使いとでは立ち位置や戦術が大きく変わってくる。そんな性質の異なる分野に手を出していれば全てが中途半端になるのは明白。野球とサッカーを同時にやっていけるプロがいないのと同じような理屈だ。天摩家随一の実力を持つ執事長・黒崎もやはり１つの武器ばかりを使い続け、達人と呼べる領域に入った。

　でも今、上空で行われている戦闘は、近接武器と魔法という全く違う分野が見事に融合している。武器の間合いに誘導するために魔法を使い、あるいは連続攻撃の手段として流れるように魔法が撃ち込まれている。初めて見る戦術だけど、これこそが武の極致といえるかもしれない。

（どうやってこんな戦い方を学んだのだろう）

　これほどの戦術は、冒険者学校のカリキュラムをこなしているだけで身に付くようなものではない。天性というわけでもないだろう。勘だけであのような駆け引きは行えない。戦術の完成度が高すぎる。きっと膨大な戦闘知識を得た上で、途方もない鍛錬と戦闘経験を積んでいるはずだ。なら一体どこで……

　つい高度な戦闘に見惚れてしまったけど、元はと言えば成海クンの誤解から殺し合いが始まっていることを思い出す。ボクッ子は話を聞いてみても決して悪い子に見えなかったし、ボクッ子の方だって成海クンを大きく誤解している。なんとかこの戦いを止めないといけないけど、この氷のせいで身動きができないし声も届かないのでどうしようもない。

（というか、早く……トイレに行かないとウチは……）

　そんな孤独な葛藤をしている間にも、戦局は目まぐるしく変わっていく。

　切断されていたボクッ子の右腕はいつの間にか元通りになっており、その右手を使って連続で魔法弾を撃ち込みながら、大きな鎌を持った左手で空中に巨大な魔法陣を描くという器用なことをやってのけている。魔法陣が完成に近づくにつれ急速に周囲の魔力密度が高くなっていくのが分かる。大悪魔が使った魔法陣の魔力を遥かに超える規模だ。まさかあんなものをここで放つつもりだろうか。

　だけど魔法陣完成前に成海クンの接近が成功し、ボクッ子の頭にある大きな角を掴んで聖堂の壁に叩き付けてしまった。それにより魔法陣は霧散する。

「すり潰れろぉぉ！！」

「い゛ぃでっ！　い゛でででで！」

　壁に頭を押さえつけたまま成海クンが勢いよく壁を駆けていく。大根おろしのようにすり潰そうとしているようだけどボクッ子の頭は驚くほど頑丈で、逆に壁や石柱の方が粉砕されていく。石頭にも程があるでしょ！

　数十ｍほど壁を破壊しながら進んだところで身をよじり、やっとのことで逃れたボクッ子。頭に付いた砂埃を払いながら怒りを漲らせる。

「ハァハァ……《エアリアル》に《オーバードライブ》……おまけにそのムカつく立ち回り……どこの糞プレイヤーかと思ったらお前！　『災悪』じゃないかっ！　ダンエクでの狼藉に加えてボクの晶ちゃんにも手を出しやがって！　ぶっ殺してやるからなっ！」

　もう容赦なんてしないと言うと《オーラ》を開放し、大きなうねりを作り出す。《オーラ》には物理的な効果はないはずなのに周囲の瓦礫は吹き飛ばされ、球状にバチバチと閃光が迸っている。

　それにしても。あれほどの攻撃を受けたというのにぴんぴんとしているとは、もしかして身体全体がミスリルでできているのだろうか。あとウチに手を出したとは何のことなの。

「ハァ……お前もこっちに来てたとはな……俺も、丁度ぶっ殺したかったところだ」

　ふらつきながらゆっくりと曲剣を構える。先ほどの戦いを見た限りでは成海クンのほうが押していたと思っていたけど、息は上がり、まさに疲労困憊といった様子。あの爆発的な立ち回りの代償として相応の体力を持っていかれたのだろうか。それに……なんというか……あれっ！？

（や、痩せている！？　それも別人のように！）

　ふっくらとしていた四肢はスラリとしており、トレードマークというべき見事な太鼓腹はどこにも見当たらない。顔もシャープになって何だか別人のようになっているけど、気だるげな目つきと面影は今もはっきりと残っている。ど、ど、ど……どいうことなのっ！

「う……うぅ……」

　氷の中で一人驚愕しながら打ち震えていると、すぐ近くで倒れていた新入り執事が目を覚ます。しばし夢うつつの状態だったものの、周囲が荒れて激変していることに気づくと即座にナイフを構えてキョロキョロしだす。

　そういえば、聖堂の大部分は瓦礫の山になっているにもかかわらず、ウチと新入り執事がいる周辺だけ無傷なのは、あの激闘の中でもちゃんと避けていてくれたからだろうか。

　新入り執事が殺されたと勘違いしていた成海クンは、驚きのあまり目を見開き、口をぽかんと開けている。そんな呆けた表情で――

「げふぁっ！」

　――ボクッ子に殴り飛ばされていた。

『ああぁっ、もうっ！　解除するの遅いよー！！』

「晶ちゃん、どこいくのー？　ボクも――」

『ついてこないでっ！』

　魔人が《氷結牢獄》を解除すると、覆われていた氷がみるみるうちに小さくなり、内股になった天摩さんが転がり出てきた……と思ったら急いでどこかへ走り去ってしまった。魔人がついていこうとするもののピシャリと拒絶され、しょんぼり顔になっている。

「どういうことなの、成海颯太……私が気絶していた間に何が起きていたのか説明して」

「どうもこうも、全部コイツのせいだ」

「引っかかるお前がバカなんだよーだ。バーカバーカ」

　現状を把握できない久我さんが、何が起こっていたかを聞いてくる。目が覚めたら聖堂広間がズタボロだったのだからそりゃ気になるだろうけど、全ての元凶はこのキャッキャと飛び跳ねながらバカと連呼する魔人のせいなのだ。

　しかし、こんなのでも“プレイヤー”なので、情報や意見の摺り合わせはしなくてはならない……が、この態度を見ていると激しくやる気が失せてしまう。なにより腹が減ってオラはもうフラフラだ。

　先の戦闘で異常なほど体力を使ったせいか体が萎んでしまい、全身の筋肉が軋んで痙攣も起きている。エネルギーが枯渇状態になっているので、今すぐにでもカロリーを取り入れたい衝動に駆られるが、それは後回しだ。

「ということで琴音ちゃん。ボク、アーサーって言うんだけど、お友達に――」

「ちょっと先にコイツと話をさせてくれ」

「ブタオなんかと話すことはないと思うんだけど」

「……」

　もじもじと近寄って久我さんと友達になりたいとか抜かす不審者モードの魔人。さっきまで極めて険悪な状況だったのに、そんな態度をしたところで引かれるだけだ。

　そして、アーサーというのはダンエク時のプレイヤー名であって、この魔人の名前ではない。まだダンエクプレイヤーの気分でいるようだが……

「お前に取っても大事なことなんだから、とりあえずこっちに来い」

　不貞腐れている魔人を広間の隅まで呼び出し、言い聞かせるように言う。最初にこの場で会ったときは話の通じない輩かと思ったが、ダンエクでのコイツを知る限りではそれなりに聞く耳を持つ奴だった。それを信じて説得を試みることにする。

「あのな。俺達がいるこの世界はダンエクそのものだが、もうゲームじゃないんだ。血なまぐさい危険な世界に俺達はいるんだぞ」

「え。ゲームじゃない？　まぁそりゃ別物というくらいリアリティは上がってるし、モンスターを倒す感覚も生々しいものはあったさ。けど、どうみてもダンエクそのものじゃないか」

　辺りを見渡し、この広間もスキルも、そして出てくるモンスターも全てがダンエクそのものだと言うアーサー。システムや設定はダンエクそのものであるけど、それでもやっぱり現実なのだ。

「天摩さんや久我さん、そしてこれからいろんな人達と話していけば彼女らが決してＮＰＣではないことくらいはお前も分かる。この世界の人々は、元の世界と同じように地に足を付けて必死に生きているんだ」

　仮に「この世界がゲームであり、人は皆ＮＰＣ」という考えを変えようとしないなら、今後において手を取り合うことは不可能。正体がバレている以上、再度殺し合うことも視野に入れなければならない。これは俺にとって譲れないラインなのだから。

「ふーん。でも確かに、晶ちゃんや琴音ちゃんを見た限りではＮＰＣには見えなかったなぁ。本当に生きているって感じはした」

「そうだ。そこを絶対に履き違えるな。それを前提に今から言うことを良く考えろ」

　俺がこれまでに知り得た情報を端的に説明していく。

　この世界はダンエクと同じようではあるが、現実世界であること。ここの住人の一般的なダンジョン知識は、ダンエクのサービス開始当初のまま。アップデートされた内容は世間ではほぼ知られていないこと。そのせいでゲートも使えず一流冒険者ですらレベル３０そこそこで止まっていること。肉体強化により世界情勢が混沌とし、アンバランスになっていること。プレイヤーが俺とお前以外にも何人か来ていること。などなど、さらっと説明していく。

「ゲートも知らないの？　ジョブもサービス開始と同じまま？」

「そうだ。プレイヤー知識がどれほどの価値になっているのか想像できるか」

「こっちに来て以来、ずっとダンジョンの中にいたから分からなかったよ。３８階にあるボクの“城”で、ずーっと待ってたのに誰も冒険者が訪れなかったのはそのせいなのか」

　ダンジョンから出るために冒険者の力を借りようと自分の城で待っていたものの、誰一人として訪れる者はいなかった。それがどうしてなのか今分かったと肩を落としながら、しょんぼりする魔人。

「それとプレイヤーって、災悪……お前だけじゃないのか」

「俺以外にもプレイヤーはいるが今は言えない。全体として何人来てるのかはまだ把握できていないな」

「一応これだけは教えてくれ。晶ちゃんはプレイヤーじゃないよな？」

「……多分な」

　そういうと顎に手を当てて考えをめぐらすアーサー。コイツはこう見えてもゲーム時代に“ＡＫＫ”という、ダンエクでも１位２位を争う大規模攻略クランを率いて暴れまくっていた経歴がある。ダンエク界隈ではかなりの有名プレイヤーで、“閃光”という二つ名で呼ばれていたほどだ。

　俺もダンエクのときに何度か戦ったことがあるので分かるが、個としての実力も、クランを率いて成してきた功績をみても、一流プレイヤーだと認めざるを得ない。だが、このＡＫＫというクランは別の顔もある。

「……晶ちゃんはプレイヤーでもＮＰＣでもない。それってお前、もしかして、つまりあれか？」

　と言いながら興奮を抑えきれず突然グルグルと回り出すアーサー。

　ちなみにＡＫＫというのは、“Ａｋｉｒａちゃん・Ｋｕｄｏｓ・Ｋｎｉｇｈｔｓ”の頭文字を取ったもの。“天摩晶を称賛し愛でるための騎士団”という意味だったか。要するに天摩さんのファンが集まって作ったクランなのだ。

　天摩さん関連のイベントがあるときは、攻略クランとしての活動も運営公式イベントも全て放り出し、クランメンバー全員が特殊なユニフォームを着て狂ったように突撃していたことを思い出す。そして、アーサーにいたっては天摩さん親衛隊長という役職も持っており、熱狂的を通り越して狂信的とも言えるそのファン活動を見て、ダンエクプレイヤー達は恐れおののいたものだ。

「うっひょーー！　本物の晶ちゃんが本当に生きているだなんて！　これはチャンスじゃないのかっ！？　ボクが絶対に守ってあげるからねーっ！」

「落ち着け。天摩さんはまだ“解呪”してないから、あまり距離を縮めると心象を悪くするだけだぞ」

「ええっ、まだ解呪してないの？　ボクが何とかして……あげたいけど、ここに来られたのだけでも奇跡だったからなぁ」

　今の天摩さんは呪いのせいで姿を変えられ、全身鎧で隠している状況。不用意に近づくのは避けたほうがいいだろう。それに俺だって天摩さんの解呪を手伝ってあげたいのは山々だがまだレベルが足りないし、本来なら天摩さんを救うのは赤城君なのだからその兼ね合いも考えなくてはならない。

「赤城ぃ？　あのいけ好かないイケメン主人公か。でも別に遠慮することはないんじゃないの」

「どちらにしてもすぐにできることではない。だから後で話し合うとして……それよりもだ。久我さんや天摩さん、その他の人達に「他の世界から来た」とか「未来に起こる出来事が分かる」とか余計なことを言うと、彼女らが危険にさらされかねない。これは分かるな？」

「ダンジョン情報を狙ってる奴がわんさかいるってわけか。なるほどねぇ。外はそんなにヤバそうな感じなんだ」

　顎に手を当て「晶ちゃんはボクが必ず助けるからまぁいいとして……」といって考え込む。頭の回転はそれほど悪いヤツじゃないので、ある程度の情報さえ渡せば後はそれなりに動いてくれる、と信じたい。そしてこれも大事な事なので聞いておきたい。

「アーサー。お前は変なスキルを持っていなかったか？　デバフ効果が付いていて消せないスキルだ」

「……あるよ。全然発動しなかったから忘れてたけど、でも最初に晶ちゃんと一緒にいるお前を見たときに初めて発動したよ。とっても《ジェラシー》してブチ切れそうになった。あのときの沸き上がった感情にはボクも驚いたよ」

　やはり最初に現れたときの狂気に満ちた目は、デバフスキルによるものだったか。このデバフ効果を自分の精神力でコントロールすることが難しい。それは俺も身をもって体験しているので仕方がないとは言えるが……

　仮にアーサーが外に出たとして、天摩さんと誰かがいるところを目撃するたびに殺意を振りまいてたらトラブルになるのは目に見えている。さっさと対処法を教えておいたほうがいいかもしれないな。

「これ、《フレキシブルオーラ》なんかで抑え込めるの？」

「やり方は後で説明する。次に会うまでにそのスキルを覚えておけ。でなければ危なくて外になんて出せないからな」

「次って……ちょっと待ってよ。ボクをダンジョンに置いてけぼりにする気！？」

　涙目になりながら、ゆらゆらとした高密度の《オーラ》を垂れ流そうとする。だが俺にも準備をしなければいけないし、調べたいことや都合もある。気の毒だが少しの間だけ我慢してもらいたいのだ。

「通信手段としてこれを渡しておく。ここ２０階にも魔力登録しておくから会おうと思えばいつでも会えるはずだ」

「何これ。腕時計？」

「まぁスマホみたいなもんだ。ここを押せばアプリが立ち上がって俺と繋がるようになる。こちらからも連絡はするから肌身離さず付けておいてくれ。オババにもちゃんと出られる方法を聞いておくから」

「待ってよ。せめて晶ちゃんと話を――」

　そんな話をしていると天摩さんがメイド服姿の執事長・黒崎さんを連れて戻ってきた。執事長は入ってくるなりズタボロになった聖堂広間を見て目を丸くし驚いている。

「なっ、どうしてこんなことになっているのですっ！　何があったのですかっ」

『色々あってねー。でもそれは成海クンと相談してからじゃないと言えないかなー。あっ、あの子なんだけど』

　天摩さんがアーサーを指差し、執事長に紹介する。何をするのかと見ていたら、ボディーガードとして天摩家で雇いたいとのことだ。いつの間にかそんな話をしていたのだ。

『この子はとっても強いし、それに優しい子だと思うから。どうかなー』

「何か事情があるようですが……おい、そこの小僧。後でキッチリと話は聞かせてもらうからな」

　俺をキッと睨みながらもアーサーの方に振り返り、急に優しげな表情をする執事長。

「私も路頭に迷っているときに、お嬢様に拾われ救われた身だ。お前ももし行く当てがないのなら、いつでも歓迎しよう」

『だからまずは、ちゃんと成海クンと仲直りしてねー』

「あ……あぁっ」

　大粒の涙を流し、何度も「ありがとう」と連呼するアーサーの頭を、優しく撫でる天摩さん。こちらの世界に来て以来、ずっとダンジョンの中に閉じ込められていたのだ。わけも分からず不安定な精神状態のまま誰にも出会えなかったのは辛かっただろう。今すぐ助けてやれるならそうしたいが俺にも準備が必要だし、相談したい相手もいる。だからもう少しの間だけ辛抱してもらいたい。

「ありがとう、晶ちゃん。でもボク、今はまだダンジョンから出られないからついて行くことはできないみたい。いつか出られたら……そのときまたお願いしてもいいかな」

『もちろんっ。脱出方法を見つけたときはウチも一緒に迎えに行くからねー』

「お嬢様に相応しき執事になれるよう、我らブラックバトラーの流儀を一から叩き込んでやる」

　アーサーは気丈にも天摩さんと執事長の前で笑顔を見せて強がっているけど、また一人になってしまえば寂しくなるだろう。そのときは話相手になってやるから俺に電話でもしろとでも言っておく。

　さてと――

（それじゃ帰るとしようか）

　これで俺のクラス対抗戦は一段落がついた。予想外の出来事が連続で起こったせいで身体の各部位が悲鳴を上げている。一刻も早く休息を取りたいが、調べることや考えることは山積みである。これだけの労力を支払わされるのだからアーサーには利子を付けて返してもらいたい。

　隣では目の据わった久我さんに無言でゆさゆさと服を引っ張られ、後ろからはメイド服の執事長にギロギロ睨まれながら、長き戦いが続いた大広間をようやく後にするのであった。

　――　立木直人視点　――

「失格だと！？　何故だ」

　カヲルから「トータル魔石グループが審議にかけられた」というメッセージが来た。そこで急遽、僕とカヲル、磨島の３人で端末を使ったグループチャットを行なったわけだが……審議にかけられた理由を聞けば「許可されていない助っ人の手を借りた」ので失格対象になったとのことだ。

「他のクラスの助っ人は全員登録していたとでもいうのか」

『そうみたい。名簿を見せてもらったけど金蘭会の加賀やソレルの名前もしっかり載っていたわ』

　目を伏せながら肯定するカヲル。確かに仮面の助っ人の手は借りたが、それはモンスタートレインに襲われたときや、大宮が拉致されかけたときの暴力に対してだ。それを跳ねのけてもらったからといって手を借りたことになるのか。もとより、助っ人ルールなんてものがある時点で公平な試験は臨めない。

「何を言ってもクラス対抗戦運営本部は聞き入れてくれなかったわけだな」

『あぁ。あの様子じゃ失格はほぼ確実だろう。たとえ奇跡的に失格を回避したとしても、もう魔狼を狩る時間なんざほとんど残されていない。つまり……俺達のクラス対抗戦は事実上、終了だ』

　気難しい顔をさらに顰めるクラスリーダーの磨島。僕らの指定クエストグループはそれなりに上手くいっていたものの、この１種目だけが良かったところでＤクラスには遠く及ばない。残り時間が僅かしかないこの状態では、もう打つ手はない。

『もしかしたらというところまで行ったのに、残念ね……』

『確かに助っ人ルールは不条理ではあったが、今回のクラス対抗戦は収穫もあった』

　悔しがるカヲルに対し磨島は意外と前向きだ。というのも、大宮のような非常に優秀な戦力がいることも分かったし、Ｅクラスの士気も高く、長丁場となった集団行動でも思った以上に団結して動けていた。最低限の感触は掴めたので次のクラス対抗戦ではもっと良いところまで戦えるという自信もできたと言う。

（だが、負けは負けだ……）

　その事実は動きようがない。悔しさのあまり思わず拳に力が入る。だが考える仕事の僕が熱くなってはいけない。どんな状況であっても冷静に逆転の目を探し続けねばならない。

「……とりあえず今はゆっくり休息を取ってくれ。僕らは次回のクラス対抗戦を想定し、最後までやっていくことにする」

『分かった。結果は散々だったが次は負けねぇ』

『何か情報が入ったらまた報告するわ』

　腕端末の通信を切り、一息吐いてから後ろで見ていた新田のほうに振り返る。彼女も先ほどのグループチャットは聞こえていたはずなので、考えを纏めるためにも話を聞いておきたい。

「助っ人ルール。先生はわざと黙っていたとみるべきか」

「一教師の判断とは考えにくいから、そういった指示がされていた、と考えるほうが自然ね～」

　僕らは経験を積み重ねて着実に強くなっている。だが、助っ人ルールなんてものがあると、生徒同士の公平な競争が一瞬で破壊され兼ねない。このルールは本来、重要な跡取りである子息や息女に不測の事態が起きぬよう導入されたシステムなのだろうが、これをＥクラス叩きに悪用されているわけだ。

　次のクラス対抗戦を見据えるならクラスメイトの強化はもちろん、この助っ人ルールをなんとかしなければならないが……僕達に向けられている悪意は何も助っ人ルールに限ったことではない。先月の部活動勧誘式や決闘騒ぎもそうだったし、この先も事あるごとに悪意を向けられるだろう。

　これら全てに対処していくにはどうすればいいか――

「そうね～。例えば、私達も悪意に対抗できる後ろ盾を用意するとか？」

「……相手が“八龍”だとしてもか」

　今のところＤクラスとの揉め事が多いので、Ｄクラスさえ何とかすれば悪意は止まる、と勘違いしそうになるが……本当の敵は彼らではない。その背後の背後、ずっと奥にいる大元の元凶は、八龍だ。

　八龍とは冒険者学校を仕切る８つの大派閥のこと。８つ全ては知らないが、現在僕が知っているのは“第一剣術部”、“第一魔術部”、“第一弓術部”、“Ａクラス同盟”、“シーフ研究部”、そして“生徒会”の６つ。

　これら派閥の背後には官僚や大貴族、大企業が連なっており、学校の運営にも大きな影響力を及ぼす。学校の上層部を動かし、村井先生に助っ人ルールの口止めをさせたのもこの八龍だろう。そんな強大な相手に対抗できる後ろ盾とは何なのか。それを僕らが用意するなんて普通に考えれば不可能だ。

　だが新田は微笑みを崩さない。その様子から相手が八龍だと見当は付いていたのだろう。そしてその手段も。ならばこの機会に僕の考えを聞いてもらおう。

「もうすぐ生徒会長選がある。そこで次期生徒会長の席を巡り、候補者同士が争うことになるわけだが……」

　生徒会長選とは、生徒たちの投票によって生徒会長を決める選挙イベントだ。だが投票というのは建前で、実際には八龍のパワーバランスによって生徒会長が決められていく。

　この冒険者学校の生徒会長とは生徒でありながら巨額の資金を動かし、学校の運営陣や他派閥に対しても強い影響力を与えることのできる特別美味しい役職である。仮に自分の派閥から生徒会長を輩出することができたならば、八龍が１つ“生徒会”を自分たちの有利なように動かし、他の八龍に号令をかけることもできる。

　だからといって、次期生徒会長の席はそう簡単に手に入れられるものではない。それは八龍の力をもってしてもだ。どこかの派閥が出し抜かないよう、八龍同士が目を光らせて牽制し合っているためだ。

　とはいえ、水面下では八龍内で多数派工作や駆け引きが盛んに行われていることだろう。そして近いうちに候補者が決められ、誰彼に投票しろと僕達Ｅクラスに通達してくるはずだ。

「だから前もってＥクラスの票を手土産にし、八龍のいずれかに近づき交渉する……というのはどうだ」

「一筋縄ではいかないわよ～？　相手は貴族様だしＥクラスを見下してもいる。下手を打てばただではすまないかもね～」

「そうだな……だが、それくらいの覚悟がなければ僕らは這い上がることなんてできない。今回のクラス対抗戦で身に染みたんだ」

　これまで何度も絶望の淵に落とされてきた。悪意はさらに苛烈さを増し今後も襲い掛かってくることは確実。だからこそ、全てを終わらせるために決死の覚悟で切り込むしかないと考えている。Ｅクラスが前に進むために八龍は避けては通れない相手なのだ。

　どこの誰に近づくか。票を捧げたところでそれだけで済むものではないだろう。ならばどこまで要求を呑めるのか。もし交渉が失敗し睨まれることになれば、完膚なきまでに叩き潰される可能性だってある。針の穴を通すような行動と決断力が求められ、決してミスは許されない。そんな重圧の中で、はたして僕は最適解を掴み取れるのか。

　だが過去の生徒会長選を見れば、八龍は決して一枚岩でないことも分かっている。突破口は必ずあるはずだ。徹底的にリサーチして分析し、何ができるか対策を纏め上げねばならないが、一人でそれら全て行うことは無理がある。だから――

「僕だけでは力が足りない。だが新田。そして大宮もいれば立ち向かえると思う。力を貸してもらえないだろうか」

　ユウマ達なら二つ返事で力を貸してくれるだろうし、もちろん当てにもするつもりだ。しかしながら踏み込む先は権謀術数が渦巻く貴族社会、八龍。そんな相手にでも怯まず適切に対処でき得る新田と大宮の智慧は是非とも借りておきたい。

　可愛らしい眼鏡の奥にある、優しげでありながらも理知的な瞳を見つめて手を差し出す。だが新田は手を取らず、ニコニコと微笑んでいるだけだ。駄目なのだろうか……

「う～ん。私とサツキが手伝うのはいいけど～、それなら“ソウタ”も仲間に入れてほしいかな～」

「……なに？」

　あっさりと力を貸してくれるという新田だが、同時に誰かの名前も口にする。ずいぶんと信頼しているような、そして親しみがこもった物言いだが、ソウ……タとは一体誰なのだ。

　その名前は、僕と新田との間に立ちはだかる最大の障壁のようにも聞こえた。

　\*・・\*・・\*・・\*・・\*・・\*

　　――　成海颯太視点　――

『ということがあったのっ。失格だなんて酷いよねっ』

『助っ人が登録制というのは、私も知らなかったわ～』

　腕端末の画面の向こうでは不満顔のサツキと困り顔のリサが映っている。アーサーと別れ、天摩さんと執事達に紛れて集団で帰っているところにサツキからメッセージが来たため、臨時の会議となったのだ。今現在は１２階のとある寂れた安全地帯で一人画面に向き合って話している。

（……プレイヤーでも知らない情報か）

　華乃が助っ人として参加していたことは承知していたが、まさか登録が必要だったとは。それはプレイヤーである俺やリサでも知らなかった情報だ。もっとも、ゲーム時代は勝手に助っ人なんて呼ぶことはできなかったので知るわけがないのだが。

『でも華乃ちゃんに無理させちゃって……ソウタには本当に何と謝ればいいか……』

「いや、大丈夫だ。華乃には余程の格上でもなければ問題なく逃げられる手段を持たせていたしな」

　クラス対抗戦の助っ人として行く前にどうしても【シャドウウォーカー】になりたいと駄々をこねた妹。しょうがないので徹夜でジョブチェンジアイテム集めに付き合ってやった経緯があった。今の華乃を捕まえるには相当苦労することだろう。ついでに離脱アイテムの取得クエストもやって持たせてあるので、強敵相手でも逃げるだけなら問題なく可能。

　しかしサツキによれば戦った相手は金蘭会のメンバーだったらしい。金蘭会はゲームのサイドストーリーの中盤くらいに登場する“そこそこ強い相手”だというのに、こんな序盤で登場してくるとは……何かがおかしいぞ。１年最初のクラス対抗戦で登場するＤクラスの助っ人は、ソレルだけだったはずなのに。

『金蘭会が出てきたことも気になるけど～、ソウタのその痩せっぷりも気になるわね～』

「あぁ、色々あったんだ」

　その“色々”を思い出し、思わず遠い目になってしまう。そのせいで体重が激減し、恐ろしいほどの空腹感に苛まれているという状況が今も続いている。しかしあの野郎……まさかドッキリを仕掛けてくるとは。しかもその後、天摩さんが何をしているのか昼夜問わず数時間毎に電話してきやがる。俺を天摩さん観察係か何かと勘違いしている可能性が高い。それはともかく。

「俺が２０階まで行って、そこで何が起きて誰に会っていたか。後でゆっくり話し合う時間を作って欲しいんだ。今後の指針を決めておきたい」

『もちろんだよっ。でも２０階って凄いね！　到達深度のポイントがかなり入ってくるよね』

『同率１位みたいだし、そうなるのかな～？』

　レッサーデーモンの魔石は無理やり天摩さんに押し付けたらいいとして、２０階までついていってしまったのはどう言えばいいのか。まぁ護衛に囲まれながら付いて行っただけとゴリ押せば何とかなるだろう。

『でもそれだけでは点数は厳しいよね……やっぱり負けかな』

『助っ人ルールは問題ね～。そのせいで立木君も覚悟を決めたみたいだけど』

「何かやるつもりなのか」

　７月にある生徒会長選を前に、八龍のどこかにＥクラスの票を手土産にして、後ろ盾になってもらえないか交渉しにいくとのことだ。その際に手を貸してくれと頼まれたらしい。確かに頭が回るリサとサツキが手伝えば上手くいく可能性は高くなる……が、俺にも手伝えとはどういうことだ。

　それ以前に不安要素もある。

「八龍とやり合うには、それなりのレベルが必要になると思っていたが、大丈夫なのか？」

『立木君達はまだレベル６だったかな～。レベル上げが遅れてるのは気になるわね』

『ゲートを教えてあげられないなら、せめてパワーレベリングくらいはしてあげたいかなっ』

　八龍相手に投票権という武器を持って弁舌を振うというのはいい。だがそれだけでは押し切れないはずだ。というのも、八龍とその周辺にはとにかく喧嘩っ早い脳筋野郎が多く、説得するには交渉術だけでなく腕っぷしも問われることが多いからだ。推奨レベルは１５から２０近くは必要だったはず。ゲームのときでも１年生のこの段階で相手にするには無理があった。

　にもかかわらず、肝心の立木君やカヲル達のレベルは低いままだ。ゲートが使えないせいで狩場までの移動時間が長くなり、レベル上昇速度がますます鈍化するのは目に見えている。主人公チームにしか対処できないイベントも多くあるので、俺達が平和に過ごすためにもサツキのいう通り、多少のパワーレベリングくらいさせたほうがいいかもしれない。

『サツキと一緒にいつもダンジョンに潜っている私のレベルも立木君にバレているだろうし～、今は私達二人だけで手伝ってあげたほうがいいかもね～』

『それもそうかも。リサ、一緒に頑張ろうねっ。あ、そろそろ“発表”の時間だ』

「俺も何かできることがあったら手伝うよ」

　また後で話し合うことを約束し、通信を切る。

　クラス対抗戦が終わっても生徒会長選という厄介イベントが始まる。ダンエクの通りならば今後も頭を抱える問題が目白押しだ。でもその前。クラス対抗戦終わったくらいにもう１つ厄介イベントがあったような気がするようなしないような。まぁ思い出せないなら大したことではないか。

　時間を見ればクラス対抗戦の試験期間が終了時刻となっている。今頃は冒険者ギルド広場で結果発表が始まっている頃だろう。腕端末からもライブ映像を見ることはできるが、疲れていて見る気がしない。途中経過の点数もあまり良くなかったし。

「はぁ、腹減ったな……」

　ゆっくりと横になって手足を伸ばす。ここはアンデッドが出没するＭＡＰなので、空はどんよりとし不気味に雲が渦巻いている。それでも洞窟ＭＡＰと違って開放感があってよろしい。近くではＢクラスがスケルトンを相手に遊び始めたようだ。元気なこった。

「まぁ、やる事なんて荷物持ちくらいだしな。ちんたら帰りますか……って、何だぁ！？」

　腕端末に何十もの通知が一斉に入り始めたではないか。通知音が連続で鳴り響き、カヲルや磨島君からは電話まで来た。何かが起きたようだ。

　――が、どうせ面倒事なので電源を落とし無視することに決めた。

　――　早瀬カヲル視点　――

　試験の終了時刻となり、各生徒の腕端末に終了を知らせる通知が一斉に発せられる。クラス対抗戦運営本部が設置されている冒険者ギルド前広場では、順位や点数などの結果発表が行われることになっているので、それを見に各クラスの生徒たちが続々と集まってきており、上位クラスではどこが勝つのか話に花を咲かせている。

　一方の私達は散々であった。順位も最下位は確実。それでも次回に活かそうと悔しさを目に焼き付けるためにＥクラスの皆と一緒にやってきた。他のクラスからも分かりきった結果を何故聞きに来たのかと白い目で見られているけど、それも承知の上だ。

　そんな視線を無視するように時計を確認する。そろそろ結果発表の開始時間になる頃。前を見れば運営本部内で先生やスタッフの方達が慌ただしく動き回っていた。

『それでは集計が済みましたので、クラス対抗戦の結果発表に移ろうと思います。映像の方は……大丈夫のようですね』

　広場に特設された壇上にて、三十代くらいのスーツを着た女性がマイクを持ち、後ろにある大きなスクリーンを確認しながら説明する。冒険者学校１年の学年主任だ。

　その少し離れたところでは数人が大きなカメラを構えている。あのカメラで撮っている映像は、指定のアドレスを入力すれば腕端末からでもアクセスして視聴できるようになっている。まだダンジョン内にいる生徒でもライブ映像で確認することが可能だ。

「はぁ……間に合ったぜ。思ったより手こずった」

　後ろから私に声をかけてきたのは「大きな魔石を取ってくる」と豪語して勝手にグループを抜け出した月嶋君だ。約束の魔石はすでに取ってきて登録を済ませたというけど本当だろうか。

「ま、Ａクラスでも取ってこられないような魔石を取ってきたから期待してくれよな」

　ウィンクしながら自信ありげに胸を張って言う月嶋君。期待してと言われても……できることなら最後までトータル魔石量グループを支えてほしかったのに。仮に言っていることが本当だとしたら何故そんなことが可能なのか気になってしまうけど、とりあえず今は結果発表を聞くことに注力しよう。

『では発表します。１位はＡクラス。８４６点。内訳は――』

　後ろのスクリーンには１位であるＡクラスと点数、その内訳が表示される。今朝の朝９時に発表されていた途中経過では、いくつもの種目でリードしていたので驚きはない。

「おっしゃー！」

「やりましたわ、世良様！」

「皆様、頑張ってくれましたわね」

　前方にいるＡクラスの集団から歓声が上がる。内訳は「指定ポイント到達」、「到達深度」、「指定クエスト」の３種目で１位。特に指定ポイント到達では他クラスを圧倒した点数を叩き出していた。ユウマもこの種目では最後まで頑張っていたものの、経験とレベル、そして助っ人の有無の差は大きく、覆しようがなかった。

「あのクラスは層が厚すぎる。うちのクラスと違って雑魚は一人もいねぇからな」

　月嶋君が辟易しながら呟く。Ａクラスには落ちこぼれなどおらず、誰が出てきてもそれなりの戦力になる強みがある。また、首席で入学した世良桔梗さんや次席の天摩晶さんなど突出した生徒がいるため多少の無理も通せる。何の種目でも、どんな振り分け方にしたところで隙がない学年最強のクラスがＡクラスだ。

　あの場所をずっと目指して頑張ってきたけど、今の私では遥か遠くに霞んで見えてしまう。弱気になりかけた考えを払拭するように頭を振って、次の発表に耳を傾ける。

『次。２位はＢクラス。８２８点』

　僅差でＡクラスに敗れたと分かり、Ｂクラスの方からため息と残念がる声が聞こえる。Ａクラスとは強烈なライバル意識を持っている生徒が多いようで何人かは睨み合っているのが見える。

「くそっ、たった１８点差か」

「周防……すまない」

「皆、頑張りました。次こそは勝ちましょう」

　１位となったのは「指定モンスター討伐」、「到達深度」、「トータル魔石量」で、それ以外は２位。Ａクラスとは実力差がそれなりにあると思っていたけど、こうして点数の内訳を見るとほぼ互角。実力者も多く在籍しているようだ。到達深度の同率１位というのは、Ａクラスと協定でも結んでいたのだろうか。

　集団の中央ではクラスリーダーらしき長い黒髪の男子生徒――たしか周防君だったか――が周囲のクラスメイトに声をかけて宥めている。もしかしたらこれだけ健闘したのも彼の人望や統率力が高いから、という線も考えられる。あとでナオト達と情報を分析、共有しておきたい。

『次。３位はＣクラス。４３８点』

　２位のＢクラスから大きく引き離されたＣクラス。ほぼ全ての種目の２位以内をＡクラスとＢクラスが独占していたために、これほど点差が開いたのだ。だけどレベルや装備を見た限りではそう劣っているようには見えない。個々で見てもあの和風の鎧を着た男子生徒など優秀な生徒もいる。どうしてここまで点数差が出たのだろうか。

「Ｃクラスは助っ人が来ないからな。バックにゃ強力な組織がいるんだろうが、貴族連中のように過保護じゃねぇ。いちいち生徒同士の試験なんかに介入してこねぇよ」

　確かに助っ人がいなければ厳しい戦いとなるのは身をもって体験している。結局、上位クラスと渡り合っていくためには対抗して助っ人を用意するか、助っ人ルール自体を排除しなければならない。いずれにしても難しい問題だ。

　次は４位の発表のはずだけど……なにやら先生方がごたついている。何かが起きたようだ。様子を見ていると磨島君が状況を教えてくれる。

「早瀬。集計直前で点数の加算があったみたいだぞ」

「点数の加算？　Ｄクラスかしら」

「オレが取って来た魔石のせいかもな」

　私達のクラスに点数加算なんて思い当たらないのでＤクラスかと思いきや、隣で「オレに期待しろ」とニヤケ顔で言う月嶋君。でもそこそこの高レベルの魔石を取ってこられたとしても、それだけではＤクラスの点数には届かない。つまり順位の変動は起こりえない。

　――そう思っていたのに。

『失礼。それでは４位。Ｅクラス。３４９ポイント』

「何っ！？」

「え、どういうこと？」

「内訳が出るぞっ」

　Ｅクラスだけでなく、上位クラスまでもが一斉にどよめき驚きの声を上げる。それはそうだろう、今朝の点数発表まで４位のＤクラスに１００点以上引き離され、ダントツでビリだったのだから。私も、そしてクラスメイト達も理解が追いついていない。何が起きていたのか、皆がスクリーンに映された点数内訳を食い入るように見つめる。

　ナオトが率いる「指定クエスト」が３位ということに驚きはない。途中経過で上手くいっていたということは知っている。だけど「指定ポイント到達」と「指定モンスター討伐」は最下位で点数はほとんど入っておらず、「トータル魔石量」にいたっては失格で０点。

　そう、ここまでは今朝見たときと同じで絶望的ともいえる点数だ。ここでＤクラスに逆転できるなど誰が考えよう。でも――

（到達深度が……１位！？　どういうこと。颯太は何をしていたの……）

　トータル魔石量グループが失格となったことを颯太に伝えようと昨日から何度かメッセージを投げていたのだけど返信はなし。その前にも現在どこにいて何をしているのか確認を取ろうとしても反応はなかった。同率１位ということは２０階まで……まさか上位クラスに最後までついていっていただなんて。なんという無茶を。

　そこまでいったのなら、高レベルモンスターの《オーラ》を少なからず何度も浴びたことだろう。金襴会の男の《オーラ》ほどではないにせよ、遥か格上のそれは精神を蝕み弱らせてしまう。小心者の颯太なら無茶はしないと思っていたのに、どうしてそんなところまで……

　さらに疑問が浮かぶ。ＡクラスとＢクラスはどうして颯太の帯同を許したのか。相手は貴族様ばかりで大量の助っ人を囲っていたし、わざわざＥクラスと協定を結ぶ理由はない。気まぐれで帯同を許してくれたにしても、レベル３の颯太を２０階まで連れていくのは危険すぎる。無事なのだろうか。

「だが……これでも逆転にはほど遠いはずだ。どうなっている」

　隣で磨島君が訝しむ。そう、仮に到達深度が１位だったとしてもＤクラスとの点数差が開きすぎて逆転は無理のはず。他に理由がないか、大きなスクリーンに映された項目を念入りに探しているとその理由が新たに表示され、生徒達が再度どよめくことになる。

「”魔石格”！？」

　魔石格。魔力の一番多い魔石を取ってきた順に点数が入るという種目だ。魔石の格が高いものほど特別ボーナスも入る。当然そのような魔石を取るためには、首席や次席でも倒せないほどの高レベルモンスターを倒す必要がでてくる。魔石格は点数が大きいものの、Ｅクラスの戦力ではそんな魔石を取ることは不可能なので作戦上、最初から除外していた種目――だったはずなのに。

　しかも取ってきたのはただの魔石ではないようだ。

「レベル２５の……それもレイドボス級の魔石をうちのクラスの誰かが取ってきたというのか！？」

「もしかして……月嶋君が取ってきたの？」

「……いや。オレが取ってきたのはアレじゃねぇな。誰だ」

　魔石格を私達Ｅクラスが取ったことに驚きつつも、大きな声で周囲から情報を聞き出そうとする磨島君。月嶋君が「大きな魔石を取ってきた」と言っていたので一応聞いてみると、取ってきた魔石はあれとは違うという。じゃあいったい誰が。

　レイドボスとは特殊な条件下でのみ呼び出すことのできる特別なボスモンスターで、フロアボスよりも強力な個体が多いと聞く。落とす魔石の魔力量も一般モンスターのそれと比べて桁が二つほど変わるという。レベル２５のレイドボス級ともなればもはや貴重すぎて財宝ともいうべき代物だ。

　問題は、そんなモンスターを倒す難度。恐らく金襴会の加賀と同等以上の冒険者をダース単位でバランスよく集める必要がでてくるだろう。助っ人を頼りにできないＥクラスの生徒にそんなものを取って来られるとは到底思えない――けど、実際に点数として加算されているのだから信じざるを得ない。

　クラスメイトがそれぞれ思いを巡らせていると、上位クラスのほうから大きな声が聞こえた。

「どういうことですかっ、世良桔梗！」

「私も存じません。でもまさか……そうとしか考えられませんわ」

「劣等クラスのレベルは確認済み。ならばアレを天摩一人で倒したと言うのですかっ！？」

　突然の大声に皆が振り返って注目する。目を剥いて怒声を放っていたのはＢクラスリーダー周防君だ。あのような取り乱し方はしないと思っていただけに私も驚いてしまった。話しかけている相手は学年首席である世良さん。彼らは何かを知っているのだろうか。

「先生。その魔石は“大悪魔”の魔結晶でしたかっ！？　データを見せてください」

　周防君が壇上にいる学年主任に詰め寄ってデータ開示を求める。クラス対抗戦では倒されたモンスターと、倒した人数、名前まで腕端末は細かく自動集計している。もしレイドボスを倒したのなら、誰が倒したのか分かる仕組みになっている。

『場所は２０階、大悪魔の討伐を確認しています。討伐者は天摩晶、久我琴音、成海颯太の３名』

「な、なんだと！　あの大悪魔を！？」

「３名？　ありえないだろっ！　助っ人が手伝ったのかっ」

「天摩は分かるが、残りは誰だ」

　レイドボスの名を聞いて誰もが驚く。しかもたった３名で……助っ人の力を借りた？　それなら「討伐３名」とは表記されない。大悪魔とは有名なモンスターのようだけどどんなモンスターなのか……ユニークネームが付くくらいなので、まともなモンスターではないのだろうけど。

　それに驚くべきポイントはまだある。颯太はもちろん、久我さんまでいたことだ。彼女もトータル魔石量グループを抜け出していたけど、まさか２０階でレイドボスと戦っていただなんて。想定外のことばかり起きてその時の状況が皆目見当つかない。

「ブタオは違うな……あいつは単なるモブ野郎に過ぎない。天摩も現時点ではレベルが足りてないはず。久我はどうなんだ……仮に本気を出したなら……」

　ブツブツと独り言を言う月嶋君。最近の颯太がどれほど実力を伸ばしているかは分からないけどレイドボス戦なんて明らかに無理だと分かるし、ちょっと前までＥクラスの落ちこぼれだった久我さんも同様に違うはず。なら天摩さんが一人で倒したのだろうか。たとえ倒せたとして、どうしてその魔石がＥクラスのものになっているのか。

（何もかも分からない……それなら）

　そう思い立つと腕端末から電話画面を呼び出し、颯太に通話をかけてみる。だけど何度コールしても一向に繋がらず、送ったメッセージも既読にならない。もうっ、何をしているの。せめて無事かどうかだけでも知りたいのに。磨島君や他のクラスメイトも同じようにメッセージを送ったり通話を試みるものの、結果は同じようだ。

『静粛に。最後に５位を発表します。Ｄクラス――』

　衝撃の事実により、もはや結果発表どころではなくなっており誰も聞いていない。多すぎる疑問が憶測を呼び、情報が錯綜している。クラスを飛び越えて情報を交換し合う姿も見える。磨島君も上位クラスから颯太と久我さんがどういった人物なのか問われているけど、私達ですら何がなんだか分かっていないのに、答えられるものなんてないと思う。

　そんな雑多とした人混みの中を鮮やかな碧色の髪を靡かせて優雅に歩く者がいた。佇まいからしてただ者ではない。

　ふと私と目が合うとにこりと微笑み、真っ直ぐこちらに向かってくるではないか。

「ちょっとそこの貴女。ここに成海颯太というものはいるかしら」

　折りたたまれた黒扇子を私の方へ向けた後に、パッと開き、上品に口元を隠す女生徒。スカーフの色が青なので二年生。胸には金色に輝くバッチが付いていることから貴族様だと分かる。思いもよらぬ身分の人に話しかけられ、心臓が跳ねてしまう。

「……颯太はまだダンジョンの中だと思いますが……あの、どちら様でしょうか」

「楠雲母と申しますわ。明日、予定通りお茶会が開催されますので、くれぐれも遅れのないようにと伝えておいてもらえるかしら」

　そう言うと、スクリーンに目を移し「ずいぶんと目立つことをするのね」と独り言ちる。楠雲母といえば、確か八龍のリーダー的存在ではないか。そんな大物がどうして颯太と……お茶会？

　驚きの事実が怒涛のごとく襲い掛かり、もう頭がオーバーヒート寸前。颯太の電話番号を見つめながらその場で立ち尽くすことしかできなかった。

　２０階の大聖堂から帰る道中、久我さんと執事長の厳しい追及を何とか躱し、やっとのことで我が家に辿り着く。

　ゲートを使えばすぐに帰ることはできたのだが、もちろん秘密にしているためそんなことはできない。また実力も隠しておきたいので適当に話題をそらしたり時には黙秘を続けていたのだが、俺の一挙手一投足を監視されるようになってしまい、ずっと針のむしろの時間を過ごしてきた。オラはもう心身共にクタクタだ。

『ピンポーン』

　２階の自分の部屋に行くのも億劫だったため居間にある古びたソファーにぱたりと倒れ込む……と同時に家のチャイムが鳴った。今日の成海家はダンジョンダイブデーなので「雑貨ショップ　ナルミ」は休店。家族は狩りに出かけて家には俺しかいないはず。眠いが店の客かもしれないので出るとしよう。

　誰かと思ってドアを開けてみれば、腕を組みジト目で睨んでいる幼馴染が立っていた。

「どうして電話にでてくれなかったの？」

「……カヲルか」

　電話。そういえば腕端末にはクラスメイトから数百件もの着信とメールが届いていたのは知っているが……疲れ果てていたため全て無視していた。何か起きていたのだろうか。

　どう言い訳をしようか逡巡していると、幼馴染は俺の顔をまじまじと見て、大きな目をさらに大きくし驚いている。まぁこんな短期間でここまで痩せればそりゃビックリするだろうが、ちょっと驚きすぎな気もする。

「ど、どうしたの。そんなに細くなって……颯太よね？」

「男子、三日会わざればってな。まぁ折角来たんだ、茶くらい出すぞ」

　いくつか聞きたいこともあるだろう。といっても大して言えることはないけど、カヲルには心配をかけてしまったし多少は説明しておきたい。

　一方のカヲルは少しの間、考えるような仕草をするものの微かに頷いて靴を脱ぐ。そういえば家には俺しかいなかったので警戒されていたのかもしれない。疲れていてその程度のことも頭が回らなかったのは良くないな。何もしないから安心してほしい。

　俺も一息入れたいので二人分の茶を入れることにする。美味しい新茶があそこにあったような……これだ。熱めの茶を入れた湯呑をテーブルに置いてカヲルをふと見てみれば、こちらの様子をじっーと見ていた。

「口に合えばいいけど……どうした」

「……あ、ありがとう。いただくわ」

　慌てたように湯呑を取ると、姿勢を正し両手でゆっくりと茶をすするカヲル。いつもだけど何でこうも綺麗な飲み方をするのか分からないが、目の保養になるので特に言うことはない。俺も向かいのテーブルに座って茶をすすりながら一息入れるとしよう。よっこらせと椅子に座り湯呑を取ろうとすると、カヲルがおずおずと聞いてくる。

「……クラス対抗戦のことだけど。いいかしら」

「いいぞ」

　腕端末は電源を切っていたりロッカーに預けていたりしていたので連絡ができなかったわけだが、そのせいでグループを総括する立場だったカヲルには手間と心配をかけてしまった。話せることは話そうと思う。

「本来なら７階で引き返して私達と合流する予定だったのに……どうして２０階なんて危険な階層までいったの？」

「俺も引き返そうとしたさ。でもＢクラスの貴族様がな――」

　荷物持ちのために集団についていっただけ。何十人もの助っ人に囲まれていたので生徒が戦わなければならない状況なんてなかったと説明する。まぁ最後だけはあったけど。

　一つひとつ確認するように聞き、本当かどうか俺の瞳の奥を覗き込むように見つめてくるカヲル。その目で見つめられるとどうにも落ち着かなくなる。言っていいことと悪いことを選別し落ち着いて対応すれば何とかなると思いながらも、俺の中のブタオマインドが嬉しい悲鳴を上げそうになるため、ちぐはぐな思考になってしまう。

　続いて何故、大悪魔の魔石がＥクラスのものになっていたのかと怪訝そうに聞いてくる。

　これは後で気づいたことだが、天摩さんに押し付けたと思っていた魔石をいつの間にか俺のものとして登録してしまったようだ。だがレッサーデーモンと戦ったことは言えないので「俺は特に何もしていなかった仲良くなったからくれたのかもしれない」とゴリ押す。が、やはり納得はしてもらえない模様。

「それであんな貴重な魔石をくれるのかしら……売れば１０００万円はするような貴重なものなのよ」

「１０００万！？」

　聞けばレイドモンスターの魔石は魔石エネルギーとしての価値よりもお宝としての価値のほうが高く、市場では高額取引されているらしい。それが有名なモンスターのものとなれば金額は跳ね上がるとのこと。最近の成海家は景気が良くなってきたとはいえ、これほどの金額の商品は取り扱ったことがない。額が額だけに天摩さんと久我さんには分け前を渡さないといけないな。

「でも、学年次席とずっと一緒にいたって情報は入ってきているわ。余程気に入られたようだけど……最近の颯太は妙に顔が広いというか……例えば、楠雲母先輩にしても」

　昨日あったクラス対抗戦の結果発表。そこに楠雲母が一人で現れ、俺に伝言をしてくれと頼まれたとのこと。

「今日の夜に“お茶会”をやると言ってたわ」

「……そういえば誘われていたな」

　１ヶ月ほど前に楠雲母から“くノ一レッド”のクランパーティーに誘われたことを思い出す。くノ一レッドのクランリーダーはお色気女優としてテレビで度々登場するので一般人からの認知度は高く、俺としてもくノ一レッドは芸能人グループのようなイメージであったが……リサから教えてもらった情報では非常に保守的なクランで攻撃的。諜報・工作を専門とする裏世界のクランだそうな。

　そんな危険なクランに招待されたところで何も嬉しくはないし断りたいところではあるが、そうもいかない。なにせ、くノ一レッドのクランリーダー御神遥直々の招待状を送られたからだ。

　俺もこの御神遥という人物について調べてみたところ、伯爵位を持つ貴族で父親が軍方面に強い貴族院政治家で大臣経験者、母親が侯爵位の流れをくむ大資産家の娘ということは分かった。この御神家というのは政界、財界に強いコネクションを持つ金満貴族のようだ。ちなみに楠雲母は御神遥の姪である。

「楠雲母という人がどんな人なのか、知っているの？」

「まぁ。一応な」

「前に聞いたときは知人ですらないと言っていたはずだけど……でも昨日話した限りでは颯太のことを知っているようだったわ」

　と言うと俺が何者であるのか、何を考えているのかを見極めようと再び目の奥を見つめてくる。

　高校まで平凡な生活を送ってきたはずの幼馴染が、いつの間にか貴族と知り合いになっていた。しかも相手は冒険者学校の中でも指折りの貴族。そんな人物がわざわざ俺と会うために一人で接触しに来たとなれば何かあったと思うのも無理はない。

　大抵の貴族はプライドが高く、一般庶民がどうなろうと気にも留めない。何かあれば司法すらも捻じ曲げようとしてくる輩だっている。天摩さんのように寛容で誰にでも分け隔てなく接する貴族なんてまずいないと思ったほうがいい。

　いわば貴族とは庶民にとって災害のようなものであり、カヲルはそれを危惧して探りを入れているのだろう。

「それでお茶会というのは……」

「あぁ……まぁ。なんというか」

　俺が呼ばれているのは、お茶会という名の魔境だ。向こうも俺の素性を調べた上で直に見極め判断したいという思いから招待したはず。相手は貴族なので無視するわけにもいかないが、行けばトラブルになる可能性もなくはない。家族には今夜だけでもダンジョンに退避して待機するよう言っておくつもりだし、当然カヲルも巻き込みたくはない。

　――と思うのだが、内なるブタオマインドが全てを晒して味方に引き込めと訴えかけてくる。早瀬カヲルという人間はとても賢く誠実。それでいて信頼もできる女性だと。

　そんなことは重々承知だ。俺としても味方に引き込みたいと何度も考えたことはある。だが、何せ今までの行いのせいで嫌われすぎてカヲルの俺に対する信用はゼロどころか大きくマイナス。ここまで人間関係が破綻しているなら他の人を引き込んだほうがまだやりやすい。

（とはいえ、赤城君達のこともあるしな）

　今回のクラス対抗戦。赤城君達はレベルが基準に満たないまま試験に突入し、案の定、成果は上げられず様々なトラブルに苦しめられていた。このまま放置しておけば今後のイベントにおいても苦戦は必至。下手すればメインストーリーが失敗に終わる可能性もある。ならば赤城君達を強くするために苦労してでもカヲルを引き込み、彼女経由で支援に回ったほうがいいのではないか。

「何か、言えないことでもあるの？」

　大きな瞳で「何か隠しているなら話してほしい」と訴えかけてくる。無論、カヲルを引き込みたいのは赤城君達をどうにかしたいということだけが理由ではない。こんなにも才能豊かで可愛く優しい子が味方になってくれればどれほど頼もしいか。どれほど毎日を華やかに過ごせることか。ブタオマインドも心躍るように「手を差し伸ばせ」と何度も訴えかけてくる。だけど――

「――いや。料理をご馳走してくれるってさ。せっかくなら楽しんでこようかと」

「そう……」

　核心は話さないと悟ったのか残念そうに長い睫毛が伏せられる。カヲルはサツキのように破滅的な状況に追い込まれる未来はないし、特段酷いバッドエンドもないはず。たとえ苦難があったとしても頼りになる仲間に恵まれているし、不屈の精神があれば乗り越えていける高いポテンシャルも持っている。そんな輝かしい未来が待ち受ける彼女を、俺の欲で勝手に巻き込んでいいわけがない。

　それにだ。もし苦難を乗り越えられそうにないなら、いつでも駆けつけるつもりではある。これまでの罪滅ぼしというわけではないが陰から全力でサポートしよう。リサとサツキも立木君経由でバックアップするというし、カヲルを内側に引き込むかどうかはそれを見て判断してからでも十分だろう。

　無言でお茶をすすりながら相手の出方を見るという気まずい空気を過ごす。このお茶こんなに苦かったっけ……とか思いつつ何かいい話題がないか思案していると、ポツポツという音が聞こえてくる。雨が降りだしてきたようだ。

　カヲルは、憂うような表情で窓の外をぼんやりと見る。長い睫毛に切れ長の目。整った鼻や輪郭。その美しい横顔を見ていると、ダンエクで次期生徒会長やピンクちゃんほどではないにせよ、とても人気の高いキャラだったことを思い出す。幼馴染がこれほどの美人なら取られたくないと必死になるのも頷ける。

　俺の中のブタオと共にしばし見惚れていると――突然、目を見開き立ち上がったではないか。

「颯太っ――いえ。ちょっと私にも考えることができたから、今日のところは帰るわ」

「あ、あぁ。気を付けてな……っていっても家はすぐそこだし大丈夫か」

　てっきり見ていたのを怒られたと思い、オラびっくりしてしまったぞ。

「クラスメイトには私の方からそれとなく説明しておくから……それではまた」

　先ほどまでのゆっくりとした時間が嘘のように、風のように去っていくカヲル。急用でも思い出したのだろうか。何にせよそんな忙しい中、わざわざ伝言を届けてくれた上にクラスメイトに説明までしてくれるとはマジで助かる。玄関まで送り届けて感謝の言葉をかけておくとしよう。

　ドアが閉められ再び静寂が訪れる成海家。凝り固まっている筋肉痛を伸びでほぐしながら居間へと戻る。

「しっかし。やっと家に帰ってゆっくりできると思ったのに、クランパーティーがあったとはなぁ」

　全力で逃げだしたい。思う存分ベッドにダイブしたい。そんな衝動に駆られるものの、頭を振って誘惑を断ち切ることにする。貴族連中に歯向かうにしても家族のレベルを３０くらいにまで上げてからだ。それまでは目を付けられるような行動は控えるべきだろう。

　服は制服でもいいとか言ってたっけか。とりあえずシャワーでも浴びてからどうするか考えよう。

　着替えを持って浴槽に向かっていると、上からドタドタと階段を下りる音が聞こえる。静かだったから誰もいないと思っていたけど、華乃がいたようだ。

「おにぃ。おっかえり～！　ほんとに痩せてるねっ！」

「いたのか。部屋が真っ暗だったからお前もダンジョンに行ってるのかと思ってた」

「寝てたのー！　あ、もう結構降ってる！　早く洗濯物いれないとっ」

　急いで洗濯カゴを取り出し、外に干してあった洗濯物を取り入れる妹。こんなどんよりした天気なのに洗濯物を干したまま寝てたとは。呑気な奴だ。

「風呂から上がったら話がある。後で時間くれよなー」

「タオルとぉ、Ｔシャツとぉ、仮面とぉ……このローブ、乾きにくいのに濡れてる！」

　１週間ぶりのシャワーだ。体は《浄化》で綺麗にしていたとはいえ、やっぱりお湯は使いたくなるもんだな。

　くノ一レッド主催のクランパーティーに行くため、髪をセットしながら鏡を見る。すると元のブタオのイメージからはかけ離れたイケメンがそこに映っていた。両親も妹もそれなりに見た目はいいので、ブタオも痩せればひょっとするのではと思っていたが、多少やつれてはいるものの期待通りと言っていいのではなかろうか。

　そして制服。上着はともかく、ズボンがダボダボになっていて見た目があまりよろしくない。ここまでウェストのサイズが変わったのなら買い替えも検討したほうがいいだろうか。今日のところは時間もないのでベルトできつく締めておくとしよう。

　さて。準備はできたわけだが、その前に華乃と話しておかねばならない。

「華乃。ちょっと話がある」

「どうしたの。こんな時間に制服なんか着て」

　居間で寛いで雑誌を見ていた華乃が顔を上げると、制服姿の俺を見て何事かと聞いてくる。

「親父とお袋がスケルトン狩りしてるけど、今夜はお前も一緒にいろ」

「そのつもりだったけど、何かあるの？」

「もしかしたら危ない場面があるかもしれないから、念のために華乃には退避しててほしいんだ」

「え、危ない？」

　状況が飲み込めず盛んに首を傾げる華乃。これから招待状に書かれていた場所――恐らく、くノ一レッドの拠点――に向かうことになる。向こうも俺を攻撃するくらいならとっくにやっているはずなので戦闘にはならないだろうが、それでも万一のことを考えて家族には退避していてもらいたいのだ。

　両親達は今、スケルトンウォーリアが多数ポップする狩場にいる。お袋が魔法を覚えたことで乱射魔になっているとの動画が送られてきたが、親父もまんざらでもない顔をしているので楽しんではいるのだろう。華乃も向かうなら３人でブラッディ・バロン狩りもできるし、今夜はダンジョンで頑張っていて欲しい。

「大丈夫だ。ちょっと人と会って飯を食ってくるだけ。危ないことなんてまず起きない。起きたところで俺にはとっておきがいくつもあるから余裕だ」

「ふーん。まぁー、おにぃを倒せる人なんてコタロー様くらいだしねっ！」

　カラーズのクランリーダー、田里虎太郎か。ゲームでも様々なストーリーで登場する有名人。１対１で戦う場面はゲームでは出てこなかったので強さは不明だが、どれくらいの実力なのかは興味がある。

「そうそう、ダンジョンに行くときは仮面とローブも持っていけよ。対人には滅法強いからな」

「うん。ちょっと濡れてたけどもう乾いたかなー。ふんふんふん♪」

　妹が変な歌を口ずさみながら部屋干ししてあったローブの様子をみる。あのローブには存在感を低下させる効果が、そして古びた木の仮面には鑑定系スキルを阻害する効果がある。モンスターには効かないものの、対人には絶大な効力を発揮するので俺と両親の分も早いところ買い揃えておきたいところだ。

「それじゃ行ってくる。何かあったら連絡しろよ」

「はーい。気を付けてねー」

　再びソファーに寝ころび雑誌を見ながら手を振る妹。クラス対抗戦も終わったし、そろそろ家族のパワーレベリングも本格的に再開させたいところだ。そのためにも面倒事はさっさと終わらせてこよう。

　\*・・\*・・\*・・\*・・\*・・\*

　玄関から出て時計を取り出し、時間に余裕があることを確認する。空を見上げれば、本来ならまだ明るいはずの空はどんよりとして、かなり薄暗い。もう雨は止んだようだが天気予報によればまた降るらしいので、折りたたみ傘がマジックバッグに入っているかも確認しておく。

「くノ一レッドか。穏便に終わればいいが……ん？」

　どうにも気の進まないパーティーをどうにかポジティブに捉えて夜の街へ踏み出そうとすると、向こうから黒塗りの高級車がやってきて我が家の前に停車したではないか。誰が乗っている車なのか様子を見ていると窓が開き、中にいたのは――碧色の長い髪に赤い花飾りを付け、ノースリーブのドレスを着た楠雲母であった。

　パッと見た感じでは深窓の令嬢のようでとても似合っている。そんな彼女は俺を見て柳眉を寄せていた。

「……あら？　成海颯太……のご兄弟かしら」

「ど、どうも。こんばんはぁ」

　俺の姿を上から下まで見ながら「もっとタヌキっぽい雰囲気だったような」と呟きつつ、顎に手を当てて訝しむキララちゃん。オレだオレだと言うものの信じてもらえず、貰った招待状を見せてようやく俺だと認めてくれた。

「では改めて。楠雲母ですわ。わたくしが送ったメッセージはお読みになって？」

「メッセージ？」

　腕端末から一覧を急いで開いて確認すると「クランパーティーの１時間くらい前に迎えに行く」という趣旨のメッセージが今朝届いていた。クラスメイトからの大量のメッセージを放置していたため埋もれて気づかなかった。後で整理しておかねば。

「まあいいでしょう。こちらへお乗りなさい」

　キララちゃんが合図をすると中から執事服を着た人がでてきて、ここに乗れと後ろのドアを開けてくれる。軽やかで上品な身のこなしから執事というより士族かもしれない。それでは遠慮なく乗せてもらうとしよう。

　やけにフカフカな後部座席に腰を下ろしドアが閉じられる。すると外の喧騒が全く聞こえなくなり、静かなクラシック音楽が流れていることに気づく。白い革張りの内装を見てもとんでもない高級車だと分かるが一般庶民を地で行くオラにとっては逆に居心地が悪い。ケツがむずむずするぜ。

　キララちゃんが再び片手を上げるとモーター音がして、スムーズに発車される。そんな彼女の横顔をふと見てみれば微笑をたたえており、最初に会ったときと比べるとずいぶん表情が柔らかい。まぁ……最初は不審者扱いされてたからな。特に会話がなさそうだし外の景色でも見ることにしよう。

　元の世界では閑静な住宅地だったこの街は、ダンジョンができたことによりビルがたくさん建てられ、多くの人が行き交うダンジョン都市に変貌している。飲み屋が連なっている通りにはダンジョン帰りの冒険者が鎧を着たまま飲み交していたり、「俺に勝ったら１０万円」とかいう路上パフォーマンスで客が騒いでいたりと活気がある。

　そんな繁華街を走り抜けて、向かってる先は貴族街。もう少し行くと小高い台地があり、そこに貴族達がこぞって屋敷を構えている。別の名前はあるのだが地元の人達は貴族街と呼んでいる。冒険者学校の貴族達も寮からではなく、この貴族街から車で通っているようだ。

　もちろん庶民は仕事でもない限り貴族街に行くことはない。歩いているだけでも貴族連中にどんないちゃもんを付けられるか分からないからだ。本来なら俺も立ち入るべきではないのだが……貴族とはどんな生態をしているのか、これを機にちょっと探ってみたいという気持ちはある。初めて行く場所に内なるブタオマインドも興味津々のようだし、せいぜい美味いもんも食いながら楽しむことにしよう。そんな風に考えながら窓の外を眺めていると隣にいるキララちゃんが話しかけてきた。

「成海……成海君。クラス対抗戦では大活躍したようですわね」

「はぁ。いろいろと手違いがありまして」

「隠さなくてもよろしいですのよ。貴方がただ者ではないことは知っています」

　ただ者ではない……か。くノ一レッドが水面下で動いて調べていた可能性は想定していたが、どれくらい情報を集めていたのか少し気になるな。少し探りを入れてみるか。

「ただ者ではないとは買いかぶりすぎでは。俺は劣等クラスと言われるＥクラスの中でも出来損ないの扱いなんですけどね」

「貴方の正確な強さは分かりませんが“フェイカー”だということは知っています。それだけで一定の実力が保障されているようなものです」

　フェイカーとは……まぁ大体の予想はつく。恐らくステータス偽装スキルの《フェイク》を所持している人のことを指すのだろう。このスキルはどうやら一部の組織や団体しか知られていない隠匿スキルのようで、くノ一レッドがわざわざキララちゃんを使ってコンタクトを取ってきたのも、このスキルを持っていることがバレたせいだ。だが俺から何を聞きたいのだろう、素性はすでに調べて何もないと分かっているはずだ。

「そう警戒しなくてもよろしいのですのよ。叔母様からも友好的に接するよう言われておりますし」

「叔母様……御神遥さんですか」

「ええ、とても美しくて素晴らしい方ですわ。寛容な方ではありますが失礼のないよう気をつけてくださいね」

「……肝に銘じておきます」

　貴族には余り良いイメージを持っていない。それでも天摩さんや世良さんのように庶民に対して割と友好的な貴族もいる。くノ一レッドのクランリーダーもそうであってほしいと僅かな可能性を願いながら再び窓の外に視線を移すことにした。

　緩やかな坂を上がっていくと、見慣れた無機質の街灯からアンティーク調の街灯に、歩道もアスファルトから天然石の舗装に変わっていることに気づく。貴族街に入ったのだろう。この付近の家は豪邸ばかりでフェンス越しに見える庭は広く、垣根や木々も綺麗に手入れされているのが見て取れる。

　夕闇の中、その通りを数分くらい走っていると前方にライトアップされた城のような巨大な建物が見えてきた。迎賓館か何かだろうか。

「あちらが叔母様の私邸ですの。とっても素敵でしょう？　クランで催し物があるときは使わせていただいておりますのよ」

「……なんというか、中世の城みたいなんですけど」

　３階建てで横幅は５０ｍはあるだろうか。それがコの字に建てられている。外から淡い暖色系の光で上品にライトアップされており、屋敷の正面にある大きな噴水の水に光が反射して外壁がキラキラと輝いている。というか日本でこんな城みたいな建築物を個人所有できるものなんだな。

「ここで降りますわよ」

　想像以上の豪邸っぷりに度肝を抜かれていると、車が鉄製の門扉の前につけられる。執事にここで降りろと言うかのようにドアが開けられたので、よっこらせっと降り立つことにする。門扉の横にある表札には「御神」と書かれているのでここで間違いないようだ。

　見ればキララちゃんは仮面舞踏会で付けるような仮面を付けているではないか。目鼻だけを隠すファッション性の高いカーニバルマスクだ。でも俺はそんなもの持ってきていないぞ。

「これを付けるのはわたくし達メンバーだけですのでお気になさらず。それでは参りましょう。ついてらして」

　キララちゃんの後を付いて行き、開かれていた門から御神邸の中へと入る。入り口付近には街灯に照らされた２色のアジサイが咲き誇っており、その中にある小道を通ってゆっくりと歩いていく。芝などは綺麗に刈り揃えられており、奥にある花壇には様々な種類の草木が植えられている。これほどの庭を管理するには何人の庭師が必要なんだろうか。

　丸い噴水を迂回し正面玄関までいくと、待ち構えていたのは剣を携えて武装した人達。スーツを着ているものの荒事に慣れていそうな雰囲気を纏っているので雇われた冒険者達だろうか。このエリアはマジックフィールドではないが、いざとなれば人工マジックフィールドの魔道具を展開するのかもしれない。

　そこで招待状を見せ、簡単なボディチェックを受けた後に中に入る許可をいただく。

（さて。中はどうなっていることやら……）

　中庭も家の外観も凄まじく金がかかっていただけに、この豪邸の中はどれだけ凄いのか俺の中の一般庶民魂が震え上がる。恐る恐る巨大な正面玄関をくぐり抜けると案の定、煌びやかなロビーが広がっていた。

　吹き抜けの天井には２ｍはあろうかという大きなシャンデリアが吊り下げられており、ピカピカに磨かれた大理石の床に光が反射して眩しい。インテリアとして美術品や調度品がそこかしこに置かれ、壁には大きな絵画が連なって飾られている。こんな入ってすぐの場所に堂々と金目のものを置くとは泥棒に盗ってくださいと言わんばかり……と思ったが、貴族の私邸であり攻略クランの拠点でもある場所を襲う馬鹿などいるわけがないので大丈夫なのだろう。

（しっかし、これは貴族の中でも上位ランクじゃないのか）

　派手であると同時に歴史と血統、気品が感じられる豪奢な内装。調度品１つとっても細かく文様や彫刻が刻まれており、それなりの職人が手掛けたものだと分かる。これだけの財を築き上げられる家は貴族と言えどほんの一握りだろう。御神家は伯爵位だったはずだが、もしかしてさらなる金持ちもいるのだろうか……

　窓際に置いてある応接ソファーにふと目を移せば、黒と赤が織り交ざったようなドレスを着た女性がゆったりと座っており、こちらに小さく手を振っていることに気づく。仮面で目鼻を隠しているので誰だか分からないが、目の前にいたキララちゃんが突然背筋を伸ばし会釈したことから上司的な人だということは推測できる。

　その女性は優雅に立ち上がって近くまで来て、真っ赤な口紅が塗られた口元をにっこりとさせる。胸元が大きく開かれているのでなんというか目のやり場に困るのだが……

「ようこそ～成海颯太君♪　お久しぶりね」

「こちらは副リーダー。成海君とは以前にダンジョンでお会いしたと聞いていますけど」

「あぁ。あのときはお世話になりました」

　艶のある声で挨拶をしてくる女性。以前に冒険者階級の昇級試験を受けたときに出会った、やけに色っぽいくノ一さんか。そのときの黒いくノ一スーツも良かったが、今着ている体のラインが強調されたドレスも負けず劣らずセクシーだ。

「今日は他にも何人かの賓客をお呼びしているのだけど、私達は、あなたに精一杯おもてなしするつ・も・り・よ♪」

「そ、それはどうも。よろしくお願いします」

「うちのクランリーダーも後でお話をしてみたいと言ってたわ。でもその前に、ご馳走を用意したので遠慮なく食べていってね」

「さぁ成海君。いきますわよ」

　ドレスを着た美女二人にエスコートされながらパーティーホールへと誘われる。

（両手に花な上にご馳走までありつけるとは。来てよかったかもしれん）

　気を良くして浮かれていた俺は、ここが伏魔殿であることをすっかり頭から抜け落としてしまっていた。

　ドレス姿のくノ一さんとキララちゃんに付き添われながらパーティーホールへと続く長い廊下を歩く。そのつきあたりには観音開きの扉があり、俺達が近づくとスタッフの人達が笑顔で開けてくれる。

　扉の向こうは体育館ほどの広さの豪奢なホールとなっており、中に入るとウェイトレスや執事達十数人が一斉に頭を下げて「ようこそ」と出迎える。こんな大層な待遇を受けても庶民にとってはストレスになるだけだが、それも狙いの１つなのかもしれない。少しばかり怯んでしまったけど上手くごまかしながら、くノ一さんとキララちゃんの後ろをおずおずとついて行く。

　奥の方には大きなテーブルの上に料理が乗った大皿が並べられており、ここに置かれたものは全て自由に食べてもいいとのこと。予定より到着が早かったため今は数種類の料理しか置かれていないが、これからたくさん持ってきてくれるそうだ。

「好きなものをお皿に取って食べてね。これとか今日のために仕入れた料理だから、おすすめ♪」

　赤いマニキュアの塗られた指先でくノ一さんが教えてくれたのは、金属製の大きな丸い蓋が被せられた大皿。開けると現れたのは飴色に焼けた鳥の丸焼き。これは北京ダックだろうか……実に美味そうだ。

　物欲しそうに見ていると近くにいたコックが早速切り分けてくれる。それをクレープのような薄餅の上に乗せてタレを付け、野菜と一緒にくるくると巻いて食べるようだ。ダンジョン２０階であのアホと戦った後からずっと空腹を耐えてきたせいでもうフラフラ。遠慮なくいただくとしよう……ぱくりとな。

「うんめええぇえ」

　こんがりと焼けた鳥皮とふんわり野菜をパリッとした薄餅が包み込み、何とも言えない香ばしさが鼻腔を通り抜ける。俺の反応を見てコックが次々に切って巻いてくれるので、そのたびに口に入れさせてもらう。こりゃ止まらん。

「ふふっ。いい食べっぷりね。じゃあ次はあれとかはどう？」

　向こうから運ばれてきたのは大きな海老の乗った大皿。蓋を開けてみれば５０ｃｍ近くある巨大な伊勢海老が乗っていた。その上にはホワイトソースがかかっており、新たなコックが小皿に切り分けて差し出してくれる。

「うほぉ……なんだこのぷりっぷりの食感は」

　口に入れてみれば伊勢海老とソースが見事に絡み合い、嚙むごとに海老の旨味とクリーミーな香りが溢れ出てくる。こんな美味い海老は初めてだ。

　本来ならゆっくり味わって食べるような食材であるが、ちまちまと小皿に分けてくれるのが待ちきれず大皿を持って丸々一匹を口いっぱいに頬張り平らげさせてもらう。感動に打ち震えながら隣にあったフルーツを齧っていると、今度は新たな大皿が３つもやってきたではないか。非常に食欲をそそる香りがするぜ……どれから食・べ・よ・う・か・な。

「そ、そんなに食べても大丈夫なんですの？」

「彼は大事なお客様なのだから、あなたもぼ～っとしてないで、もてなしなさい」

「はっ、はい……」

　慌てたように炭酸ジュースを注いでくれるキララちゃん。くノ一さんが料理をどんどん持ってくるように声をかけるとコックやウェイトレスが慌ただしく動き出し、色とりどりの高級料理が所狭しと並べられる。どうせタダ飯だし食って食って食いまくってやるぜぇ。

　気を良くして次々に料理を胃に流し込んでいると、ウェイトレスと執事が部屋の入り口に集まり始めたではないか。誰が来るのかと横目で見ているとドアが開かれ、俺のときと同じように一斉に頭を下げて出迎える。入ってきたのは左右に妖艶な仮面美女を侍らせた、でっぷりした男だった。

（はて……あの顔はどこかでみたことがあるような）

「あちらは私達が日頃お世話になっている先生よ。でもちょっと気難しい方なのよね」

「先生ですか」

　誰だったか思い出そうと見ているとくノ一さんが何かの先生だと教えてくれる。胸にはきらりと光る金色のバッチがつけられているが、それだけでは政治家、弁護士、闇の組織などいろいろあるので特定はできない。

　その男はホールの中を大股で歩いていき大きなソファーへ乱暴に腰を下ろすと「おい、もっとネーちゃんを呼べ」を神経質な声を出す。

　すぐに奥から仮面をしたドレス姿の女性が数人出てきて接待に入るが、今度はその女性達の肩に遠慮なく手を回して引き寄せ、酒を注げと騒ぎ始めたではないか。うらやま……けしからんっ。

　しかし接待する側の女性たちは嫌そうなそぶりを一切見せず「大臣様」と笑顔でもてなして酒を注いでいる。大臣様ね……まさか日本の大臣じゃなかろうな。そういえば御神家も軍の大臣経験者だったからその繋がりかもしれない。

　この世界の日本は戦前のものに近い政治体制を敷いており、国防に対しても自衛だけしていればいいという認識ではない。大臣の名称も防衛大臣ではなく陸軍大臣、海軍大臣とかいう名前になっている。その２つの大臣の中で“くノ一レッド”と繋がりがあるとすれば冒険者ギルドを管轄している陸軍大臣だろうか。だがそんな偉い人と一緒の場所で呑気に飯など食っていていいものなのか不安になるな……

「ほらほらぁ。美味しい料理はまだまだあるんだから遠慮しないで食べてね」

「成海君。はい、あーん」

　そんな心配をよそに、くノ一さんとキララちゃんが手に持った肉料理を押し込んでくるので口を開けて食らいつく。噛むとジューシーな肉汁がじゅわりと溢れ出し、後からスパイシーな味付けが効いてくる。これだけのものが食える機会は滅多にないのだから今は深くは考えず食うことに集中するか。

　ベルトを何度も緩めながらもっちゃもっちゃと口を動かしていると、再び入り口にウェイトレスと執事が集まりだした。また客人だろうか。

　ドアが開かれ、次にそこに立っていたのは薄縞の高級スーツを着た、３０代くらいの白人の男。ポケットに手を突っ込み前を睨みながら不遜な態度で入ってくる。だが眼光は鋭く、明らかに堅気ではない空気を纏っている。もてなしのための仮面美女も後ろにいるが、表情は硬めで警戒するかのように距離を開けてついてくる。

（ん？　あいつは確か……）

「あちらは私達と長らく交流をしていた海外のとある組織の方なんだけど、たまたま日本に来ていたのでお声をかけたの」

「んぐんぐ……なるほど」

　とある組織ね。だがあの顔は知っている。東欧に冒険者達が集まって作った神聖帝国という国があるのだが、そこの要職についているヤバイ奴だ。ゲームでは終盤に登場するボスキャラ的な存在であるにもかかわらず、この時点から来日していたとは。いったい何の用事で来ているのか気になるな。子飼いの部下達も入国してきているはずだけど、この場にはあいつの姿しか見えない。

（これはさすがに楽しまなきゃ損とかいう段階ではなくなってきたか？）

　今後ストーリーに沿って順調に進んでいけば、赤城君達と殺し合いが発生しかねない相手でもある。そんな奴と同じ空間で飯を食うというのは精神的によろしくない。くノ一レッドも長らく交流していたというくらいなので神聖帝国の要人だと承知で招待しているのだろうが、アイツの危険性まで正確に把握しているのかはなはだ疑問だ。

「あの～凄そうな方達を呼んでいるみたいですけど、俺なんかがここにいて大丈夫なんですかね」

「今日は３人の賓客をご招待したのだけど、主賓は成海君なのよ？」

「……俺が主賓？　それまたどうして」

　一国の大臣と冒険者大国の要人を差し置いて一般庶民の俺を主賓にするとかありえないだろ……いや、ありえなくもないがそこまで俺の情報を掴んでいるとは思えない。最初は《フェイク》絡みでどこの組織の者か探りを入れるだけかと思っていたけど、他に何か重要な情報でも掴んだのだろうか。

　それとなく聞いてみると、クランパーティーに誰を呼ぶかどうかの判断はリーダーである御神遥が独断で決めるらしく、詳細は分からないとのこと。後でじっくりお話をしてみたいと言ってたので気になるなら直接聞いてと言われてしまう。どうにも嫌な予感がしてきたぞ。今さら帰るなんて言えないし、こうなったら開き直ってとことん食ってやる。

「あの……ところで成海君。何だか体が横に大きくなっているような……」

「ほんとだわ。不思議な体してるのねぇ」

　柳眉を寄せながら「最初に見た時くらいまで膨らんでいますわよ」と言うキララちゃんに、珍獣を見る目つきで俺を見てくるくノ一さん。そういえば腹が苦しいからベルトを何度も緩めていたけど、腹だけじゃなくてなんかこう……全体的に膨らんでいる気がする。今の俺の体どうなってんだ。

　鏡を見たいような見たくないような、そんな複雑な心境に駆られながら次なる皿に手を伸ばしていると、ステージのような場所にスポットライトが当たり、閉じられていたカーテンがゆっくりと上方向に動き始めた。

「叔母様の登場ですわっ」

　カーテンが上がるとそこには弦楽器やサックスをもった奏者達が並んでおり、ジャズっぽい軽快な音楽が奏でられる。それと同時に真っ赤なドレスを着た女性――御神遥が満面の笑みで登場し、執事や仮面の美女達から拍手で迎え入れられる。

『ようこそいらっしゃいました。お三方にはたくさんの催し物を用意しておりますので、今夜はどうぞ楽しんでいってください』

　暗めの赤い髪をアップに編み込み、紫紺のドレスの上から大きな宝石の付いたイヤリングやネックレスなどで着飾っている。目鼻は非常にくっきりしており、その美貌はテレビで見たときよりも輝いている。

　御神がアイコンタクトで合図を取ると光量が少し落とされ、ピアノによるゆっくりとした曲調の前奏が始まる。やがて小気味のよいドラムのベースと共にしっとりとした甘い声で歌いだした。

「この歌声を生で聞くことができるのは本当に限られた人だけですのよ」

　隣で目を潤ませながら聞き惚れているキララちゃん。ジャズにはあまり詳しくないけど、それでも抜群の歌唱力だというのは分かる。高音から低音まで透き通るような声質がとても心地良い。こういった曲は酒をちみちみ飲みながら聞きたいものだけど、この身は未成年なので我慢するしかない。

　歌が終わるとスタッフ執事総出で大きな拍手が沸き起こり、キララちゃんも立ち上がって興奮気味に熱烈な拍手している。確かにこれほどの歌唱力なら拍手の１つもしたくなるってもんだ。ブラボー。

『それでは銘酒と料理、名うての奏者が奏でる音楽を引き続きお楽しみください。私は一人ひとり挨拶を兼ねてお話させていただきたく存じます』

　御神は軽く一礼してステージから降り、最初に向かったのはあのでっぷりした――大臣がいるテーブルだ。まるで入学前のブタオのようなニヤニヤしたいやらしい目つきを向けているけど、御神は笑顔を崩さず面白そうにコロコロと笑っている。調子に乗って肩に手を回そうとする大臣だが、その手をするりと躱して酒を注ぐ。御神はこういった対応にかなり手慣れているように見える。

　だが一番大事に扱うと思っていた大臣には１～２分しか話をせず「もうお帰りです」といって退散させてしまう。「ワシはまだ楽しむんだっ」とか言って椅子にしがみついて抵抗するものの、黒服の執事が出てきて羽交い締めにし、ホールの外に連れ去ってしまった……見た限りでは何らかの交渉が決裂したようだ。

　次に向かったのはつまらなそうに飲み物を飲んでいる白人の男がいるテーブル。簡単な挨拶を交わした後、男の方は不機嫌そうに顔を歪めて足を机の上に乗せ、横柄な態度で話し始めた。対して御神はそんな態度は一向に気にしないと言うかのようにコロコロと笑っている。本当に同じ話題をしているのか疑いたくなる光景だ。

　何を話しているのか聞き耳を立てようとしていたところ、くノ一さんが冒険者学校のことを聞きたいようであれこれと質問してくる。

「成海君はこの子と同じ学校に通っているそうだけど、やっぱり成績は優秀なの？」

「え？　いえ。俺のクラスはＥクラスといって……」

「はい。クラス対抗戦でも大暴れしていたようですわ。わたくし見ましたもの」

　聞けば俺のおかげでＥクラスはＤクラスに打ち勝ち４位となり、結果発表の会場にいた１年生全員がどよめいていたという。確かに２０階までついて行って到達深度の点数を取れたのは大きいが、貴族の護衛が全てモンスターを排除してくれたので俺の実力ではない――と言ったところで聞く耳を持ってくれない。

「初めて会ったときの動きを見た限りだとレベル２０くらいに見えたから、２０階まで行けたとしても不思議じゃないわね」

「そのようですわ。そんな逸材がどうしてＥクラススタートなのか不思議でなりません……学校の上層部は何を見ていたのでしょう」

　くノ一さんには冒険者階級の昇級試験を受けたとき、クソ試験官をぶん殴るところを見られていたんだっけか。あれくらいの相手を圧倒するならレベル２０くらい必要だとみたのだろう。あながち間違いではないが……

「そういえば、あなた。シーフ部に強力な新人が欲しいと言ってたじゃない。成海君は誘ったの？」

「まだですわ……成海君は入部する気はありまして？」

「俺は帰宅部で――」

　ドンッ！　ガシャン！

　大きな物音が聞こえたので見てみれば、テーブルがあらぬ方向にひっくり返っていた。机の上に乗っていたグラスや皿が割れ、料理があちこちに散らかっている。あの白人の男が蹴り上げたようだ。その際に飲み物が御神のドレスに少しかかったようでウェイトレスが慌てたように布巾を持って駆け寄っている。

「なっ……叔母様――」

「待ちなさい」

　キララちゃんは殺気を放ち駆けつけようとしたものの、瞬時にくノ一さんが肩を抑えて制止させる。だが周囲にいた執事や仮面美女達は殺気を抑えきれておらず、中にはスカートの中から武器を取り出そうとしたウェイトレスさんまでいた。

（白……ただのウェイトレスさんじゃないのか）

　仮面をせず素顔のまま料理やドリンクを運んだりしていたので普通のウェイトレスかと思いきや、あの女の子も立派なくノ一レッドメンバーのようだ。ちらりと見えた白く輝くシークレットエリアを脳裏に留めておきながら、辺りを見渡して状況を確認する。

（戦闘には……ならなそうだな）

　一部の者が取り乱した以外、非常に統制がとれているようだ。先ほどのウェイトレスもすぐに武器をしまって笑顔で業務をこなしている。戦闘が始まるかもしれないと思ってオラは少し焦ったぞ……というのも、あの男に喧嘩を売ることは浅はかな行為であるからだ。

　冒険者大国と言われ、ヨーロッパの並み居る国家群を一国で抑え込んでいる神聖帝国。その中でも十指に入る実力者で、伊達に枢機卿というポストに就いているわけではない。くノ一レッドが集団としてどれほどの強さなのかは分からないが、戦えば無事では済まないだろう。

　ただ……アイツは残虐ではあるが冷徹で計算高く、無暗に怒気を放つような男ではない。にもかかわらずあれほど怒りを隠さなかったのは、御神の方から何か挑発的な話題を振った可能性も考えられるな。

「申し訳ございません。すぐに代わりの料理をお持ちしますので少々お待ちください」

「――ッ、――！」

　やけに落ち着いている御神が新たな料理を持ってくるよう指示を出そうとするが、男は何かを吐き捨てるように呟いてこの場から立ち去ろうとする。周りの執事達はそれを止めもせず頭を下げるばかり。また交渉事が決裂したのだろうか。

　残された御神は肩をすくめた後に最後の客である俺のほうに振り返り、微笑みながら優雅に近づいてくる。

　目の前まで来ると軽く会釈して対面の椅子にゆっくりと腰を掛ける。近くで見ると恐ろしいほどの端麗な顔立ちと容姿をしているのが分かる。その細い手で２回軽くパンパンと叩くと、ステージの上の奏者が心地良い音を奏で、執事がおつまみとドリンクを用意してくれる。

「先ほどはお見苦しいところをお見せしてしまいました。初めまして成海颯太様。私は御神家当主、御神遥と申します」

　深く丁寧に頭を下げて自己紹介する御神。伯爵位を持つ高位貴族が庶民に頭を下げるなど考えもしなかったことなので驚いてしまう――と同時に警戒感も高まる。

　何故ここまで礼を尽くすのか。神聖帝国の男、なんちゃら大臣、そして俺。共通点があるとは思えないこの三人を、ただもてなすためだけにこの場に呼んだのではないだろう。それが証拠に二人はすでに退散し、残りは俺一人となっている。だけどいったい何を聞きたいのか、あるいは交渉したいのかさっぱり見当がつかない。

　まぁそれも話してみれば分かることだ。

「これはご丁寧に。冒険者高校１年Ｅクラスの成海颯太です」

　くノ一レッドのクランリーダーである御神とテーブル越しに向かい合い、互いに挨拶を交わす。俺としては延々と回りくどい社交辞令などしたくないので、呼んだ理由を直球で聞くことにする。

「それで俺を呼んだのは、《フェイク》を所持していたことではないんですか」

　《フェイク》はステータスや名前を偽装して鑑定スキルから自分の情報を守るスキルだ。この世界では《簡易鑑定》を使って冒険者の身分確認を行っているところが多く、社会のシステムとして有効活用されている。そこに《フェイク》なんてものが知れ渡ってしまえば混乱が起きてしまうのは明らかである。

　仮に《フェイク》の存在が公にバレて一般化してしまっても、より上位の《鑑定》というスキルで見破ることはできるのだが、この《鑑定》はアメリカだけの国家機密であり、それ以外の国に習得方法は公開されていない。一方で《鑑定》の魔法が込められたマジックアイテムは出回っているものの、１回鑑定するだけで数百万円が飛ぶほど高価であるため乱用はできない。

　以上の理由から世界の国々は《フェイク》というスキルが広まる前に有害指定し、情報や習得方法を制限したのだと推測している。

　そんな隠匿スキルを俺が持っていたため、くノ一レッドは問題視した――少なくともクランパーティーの招待状を送った当初はこれが気になっていたはずだ。御神はゆっくりと頷いて肯定する。

「確かに《フェイク》の所持についても興味を持っていたわけですが……その前に。成海様は私どものクランについてどれほどご存じですか？」

　御神とくノ一レッドはテレビや雑誌によく登場するので、普通の人なら芸能グループ、または芸能事務所を連想するだろう。俺もそう答えようと思ったが惚けていても話は進まないので率直に答えることにする。

「冒険者ギルドの運営……以外にも、諜報活動などをやられているそうですね」

「はい。《フェイク》は私どものような組織にしか開示されないスキルなのですが、調べてみたところ成海様には国からの開示許可が下りた形跡がございませんでした。にもかかわらずどうしてそのスキルを所持していたのか……私なりに考えてみました」

　最初に疑ったのは外国の工作員。つまり久我琴音のようなエージェントだ。海外でも国家直属の工作員なら大抵が《フェイク》を覚えている。俺についても同様に、冒険者学校という日本の特殊機関を諜報すべく海外からやってきたエージェントなのではないかと疑ったそうだ。冒険者学校のリサーチやセキュリティーを掻い潜って侵入してきた人物に、御神はとても興味を持ったと言う。

　だが俺の家族構成や経歴がそれを否定する。詳しく調査したところ成海家の誰もが一般人にしか思えなかったからだ。

「エージェントならば過去が消え去っていたり、経歴が操作された跡が残るものですが、成海様も、そしてご家族様についてもそれまでの人生の全てを追うことができ、純然たる一般人との確証が得られました。であれば――」

　国内の暗部組織の可能性。普段は一般人として過ごし、任務のときだけ裏の顔を持つ同業者だ。

「国内でも《フェイク》を所持する組織はいくつか存在しておりますが、その中で構成員が全く把握できていない組織といえば……一つだけ心当たりがあります」

　心当たりね。多分、というか絶対違うと思うが御神は確信を持っているとでも言いたげな顔つきだ。とりあえず聞いてみるか。

「ダンジョンに出たそうですね――“朧”が」

「……朧？」

　正体を暴いてやった、とでも言うかようなドヤ顔気味の笑みを浮かべる御神。隣で聞いていたくノ一さんは知っていたらしいが、キララちゃんは朧と聞き、目をぱちくりして驚いている。

　朧とは様々な陰謀の影にいるとされている秘密結社で、都市伝説にもなっている有名な組織だ。ダンエクではサブストーリーにも登場し、正体を突き止めて幹部を捕まえるという討伐クエストがあったのを覚えている。その朧が俺とどう関係があるというのだ。

「一応聞きますが、それってあの有名な秘密結社のことですよね」

「その朧です。なんでも、成海様が所属するクラスの助っ人として現れたそうではないですか」

　うちのクラスの助っ人だと？　妹以外に助っ人が来たという情報は知らないので多分妹のことだろうが、どうして朧ということになっているのか。

「ソレルというクランのリーダーが、仮面を被った正体不明の少女に倒されたと私どもは把握しております。その倒されたクランリーダーというのが実は金蘭会のメンバーでして――」

　攻略クラン金蘭会の実力者が何者かに倒され、医務室に運ばれたという情報を掴んだくノ一レッド。その後にギルド職員として駆けつけ事情聴取をしたときに、正体不明の少女は朧であると証言したそうだ。

　金蘭会メンバーを倒したということは妹に直接確認したので間違いない。レベルも２０を超えていたらしく、本気を出さざるを得なかったと言っていた。しかしその男は華乃の何を見て朧と勘違いしたのかが分からない。

　俺がいまいち事情を飲み込めていないと察したのか、御神は説明を補足する。

「その少女はフェイカーでした。それだけでは朧と断定はできないのですが、なんと“速度上昇スキル”も使用したそうです」

「速度上昇スキル？　それは朧だけしか知らないスキルなんですか？」

「朧を強者たらしめているスキルです。私どもはそのスキルを何としても手に入れたいのです」

　どうやら御神は俺と仮面の少女が共に朧メンバーであり、速度上昇スキルの情報を持っていると疑っているようだ。

　妹が覚えていた速度上昇スキルといえば、移動速度を３０％上げる《アクセラレータ》と、回避も上がる《シャドウステップ》だが、《アクセラレータ》については久我さんも使っていたので朧と断定するのは早計だろう。

　わざわざ間違いを指摘して正しい情報を与えてやる必要はないが、一応ツッコミを入れておく。

「手に入れたいと言われても、俺はそんなスキル知らないので取引しようがありません。それに速度上昇スキルを所持していたくらいで朧と断定するのもどうかと。勘ぐりすぎではないですかね」

「お言葉ですが……《フェイク》と速度上昇スキルを両方習得している正体不明の実力者が、都合よく成海様のクラスに助っ人として現れた……これを怪しむなと言われましても無理がございます。それに――」

　たとえ仮面の少女が朧でなかったとしても、速度上昇スキルを覚えていたということに変わりはない。くノ一レッドが欲しいものは朧の情報ではなく、あくまで速度上昇スキルなのだと言う。

　速度上昇スキルさえあればくノ一レッドは飛躍し、様々な任務を遂行できるようになる。それはこの国の安定にも繋がる――などと、どれだけ国や社会のためになるのかを説くが、正直どうでもいい。俺にとって重要なのは俺の大事な人達を守れるかどうかであり、その点においてくノ一レッドなどに期待していないのだから。

　御神は説得が効いていないと見るや上品な顔つきをやや崩し、交渉カードを１枚切ってきた。

「成海様はきっと私どもの力を必要としますわ」

「……それまたどうして」

　また変なことを言い出したぞ。くノ一レッドなんかを頼りにするくらいなら家族もろともダンジョンに引きこもるが、まぁ一応理由を聞いてみるか。

「これは私どもが入手した極秘情報なのですが、金蘭会が近々、朧へ宣戦布告するそうです」

　と言って足を組みなおしながら金蘭会がどういったクランなのか説明してくれる。

　カラーズの傘下になる前の金蘭会は今よりも規模が大きく、利権を巡り様々なクランとの抗争に明け暮れていたそうだ。大規模攻略クランであれば抗争は付き物。日本最大のクラン“十羅刹”も年がら年中抗争の日々を送っているので想像に難くない。

　金蘭会も数多の抗争で勝利を重ね、スポンサーや優秀な人材を次々に確保。日本でも有数のクランにまで急拡大し絶頂期を迎えていた――が、それも長くは続かなかった。

　１０年ほど前のある日。何かがきっかけで朧との抗争が始まり、１ヶ月もせずに半壊。金蘭会メンバーの半数以上が死亡し、味方であったクランやスポンサーも次々に離反。クラン存亡の危機に陥ってしまう。そのため当時勢いのあったカラーズの傘下に入るという苦渋の決断を下し、再建を目指したという経緯があったそうな。

「カラーズ合流前からいる古参の金蘭会メンバーは、今も朧に対し激しい憎悪の感情を抱いています……ですが先日、朧と思わしき冒険者に敗れてしまいました」

　冒険者ギルドから朧に負けたという知らせが伝わると、金蘭会の幹部達は「クランの名に泥を塗った」と激怒。すぐにクラン総会が開かれ、報復にでるべきか、命を取られたわけでもないため静観すべきか、怒鳴り合いとも呼べる論戦が続いたという。

「大揉めの末、汚名返上という名目でソレルの先代クランリーダーであった幹部が朧討伐の陣頭指揮を取ることに決まったそうです」

「……ソレルの先代クランリーダーですか」

「はい。霧ケ谷宗介という男です。仮面の少女に負けた男――加賀大悟はソレルの現クランリーダーですが、つい最近に襲名したばかり。先月までのクランリーダーは霧ケ谷でした」

　霧ケ谷宗介……そういえば以前に家族会議で「ソレルのクランリーダーは危険な男だ」とお袋から聞いたことがあったけど、この短期間で２次団体の幹部にまでなるとは随分と出世したものだな。

「なんでも“途轍もない功績”を挙げ、金蘭会のナンバー２まで異例の昇格を決めたそうです。二つ名は“狂犬”、人物については調査中ですがその名の通り相当に気性の荒い性格だと聞いております」

　狂犬ね……そんな悪そうな奴が陣頭指揮するとなればどうなるか。朧の情報を集めようと暴力をちらつかせて聞き出そうとするに違いない。そうなれば妹だけでなくサツキやカヲルも心配になる、か。

「……ご推察の通り、仮面の少女だけでなく学校のご友人方にも被害が及ぶ恐れがあるというわけです。成海様のお心を慮れば胸が痛みます」

　俺が僅かに眉を寄せたのを見て、あたかも心を痛めたかのように両手で胸を押さえる演技をする御神。その物言い全てが交渉の内だろうによく言うものだ……が、先ほど言ったことにはいくつか穴があるのでしっかりとツッコミを入れておこう。

「仮に、霧ケ谷が冒険者学校に乗り込んで生徒を傷つけるようなことになれば、学校や政府も相応の対応に出ると思いますけどね。それくらい金蘭会だって分かっているはずでしょう」

　冒険者学校は日本政府が威信をかけて作り出した冒険者育成機関だ。そこに在籍する生徒に手を出したら政府も黙っちゃいないだろう。攻略クランとて厳しい制裁は免れまい。

「おっしゃる通り、表立って生徒に危害など加えれば政府が動くことでしょう。しかしながら校外やダンジョンの中など目の届かない場所はいくつもございます。狂犬と呼ばれた男が何をしでかすか、予測できないものと存じ上げます」

「……確かに。それともう一つ。１０年前の今より規模が大きかったときでも朧に半壊させられたと言ってましたけど、今の金蘭会が宣戦布告したところで勝算なんてあるんですかね」

　当時の強かった金蘭会でもたった一ヶ月で壊滅的な敗北に追い込まれたというのに、大した準備もなくどうして朧に勝てると思ったのか。背後には上位団体であるカラーズが控えているとはいえ、たかが下部組織の一人が負けた程度で朧と敵対する理由にはならないしメリットもない。かといって金蘭会だけで事に当たって勝てると思うのも楽観的すぎる。

「勝算ができた、と考えるべきでしょう。恐らく霧ケ谷が挙げた“途轍もない功績”に関係していると思われます。何かの強大なマジックアイテム、スキル。もしかしたら新たなジョブを発見したのかもしれません。それくらいの算段がなければ朧に宣戦布告などしないでしょう」

　最近のカラーズは下部組織も含め明らかに空気が変わった。必ず何かがある。それはまだ御神も把握できていないが、その正体を掴むのも時間の問題だと言う。

「金蘭会周辺にはすでに部下を忍ばせてあります。諜報能力に優れた私どもであれば、それが何であるか分かるまでそう時間はかかりません。同時に、成海様のご友人を彼らから守ることは可能と判断しております」

　くノ一レッドが動いて金蘭会を監視し、情報収集しつつ、クラスメイト達を守る。必要とあらば間に入って交渉だって請け負う。そうしてくれるなら確かに俺にとって大きなメリットとなるだろうが……

「なるほど、御神さんの力が必要になるとはそういう意味でしたか。ですが、やはり取引に応じることはできません」

「……理由を伺っても？」

「御神さんの提案を受けるにもまず互いの信用が必要だからですよ。仮にこちらが情報を出したとして、都合が悪くなれば反故にされる可能性もある。まずは御神さん達が信頼できる相手なのか確認してからですね……もっとも、俺が速度上昇スキルとやらを知ってたら、という前提がありますが」

　リサから聞いた話によれば、くノ一レッドというクランは正義の味方などではなかった。クランまたは国家の利益にそぐわないと判断すれば執拗に攻撃を仕掛けてくる過激な集団だと聞いている。いつどのタイミングで敵とみなされ攻撃されるか分からない相手に背中を守ってもらうわけにはいかないのだ。

「小僧……我々が契約を違えるとでも？」

「成海君。すぐに訂正して叔母様に謝りなさい」

　御神の提案を断ると、笑顔で後ろに控えていた執事が突如憤怒の表情に変わり、ウェイトレスさん達の殺気も膨れ上がる。隣に座っていたキララちゃんも血の気の引いたような顔で謝れと言ってくる。確かに礼儀は必要だろうが、俺の大事な人達の安全がかかっている状況では慎重にならざるを得ない。

（だけど、後ろの人達の怒りがなかなか収まらないな……こりゃマズいか？）

　数十人から睨まれて針のむしろのごとき居心地である。これだけの数を相手に戦闘なんてしていられないし、逃げる準備でもしておくべきだろうか。一方の御神を見てみれば周りの部下共を落ち着かせることなく何か考える素振りをしている。もしかしたらこれらの圧力も手の内なのかもしれない。

　今のところ襲ってくる動きは見せていないし、とりあえず目の前に並んでいるおつまみセットでも食いながら御神の判断を待つとしよう。ところで……謝ったら本当に許してくれるのかね、キララちゃん。

　――　楠雲母視点　――

　くノ一レッドの本拠地で深謀遠慮の叔母様と正面から対峙しつつ、背後には特攻隊長である執事長、周囲にはくノ一レッドの先輩方が放つ怒気を一人で受け止めて平然としている成海颯太。

　このパーティーホールにはあらゆる任務を熟し対人戦にも精通している本物の戦闘員しかいない。執事長や副リーダーにいたってはレベル２５とトップクランにも劣らない実力者達である。

　一方、成海のレベルは２０前後と調べがついている。非常に優秀と言えるものの、いざ戦いとなってしまえば戦闘経験豊富なわたくし達に何もできず取り押さえられてしまうのは明白。にもかかわらず執事長の睨むような眼光も、先輩方の怒気も全く意に介していないかのようにポリポリとおつまみを貪っていられるのは何故なのか。

「（あのぉ、コレ美味しいのでちょっと持って帰っていいですかね）」

　などと耳打ちしてきてわたくしの返答を待たず、こっそりとポケットにおつまみを入れ始めた。図太いを通り越して異常にしか見えない。これだけの面々に睨まれて怖くはないのだろうか。

　実は恐怖に震えているけれど、あの丸々した見た目のせいで表情が読み取りづらいだけなのかもしれない。そういえば、とんでもない量の食事を食べて急に太り出したけどあれは感情をカモフラージュまたは隠蔽する特殊能力なのかもしれない。常識というものから色んな意味で逸脱していて推し量ることができず、ただただ困惑してしまう。

　そんな状況が３０秒ほど続いただろうか。長考していた叔母様が動く。

「分かりました。今日のところは引き下がるとしましょう。ですがその前にこちらをお目通しください」

「これは……依頼書？　依頼主は……金蘭会」

　手渡された一枚の紙に目を落とす成海。わたくしも横目でこっそりと覗いてみれば「仮面の少女とその関係者の情報収集または身柄の引き渡し」「調査費用は前金で１億」などと書かれていた。これは金蘭会から調査依頼があったということだ。成海は依頼書から目を上げると相変わらず何を考えているのか分からない表情で叔母様に問いかける。

「これを俺に見せた真意は何ですかね。金蘭会につくということでしょうか」

「そうは申しません。私どもは成海様との関係を重視したい、そのことをご承知おきくださればと。それと――」

　そう言いながらその場で依頼書を縦に引き裂く叔母様。そして執事に合図を送り新たに一通の封筒を受け取る。中には金色のカードが複数入っており、その内の一枚を成海の目の前に置く。

「こちらもお渡ししておいたほうがいいでしょう」

「これは何ですかね……クランパーティーの招待状？」

「はい。近く金蘭会でもパーティーが催されるとのことです。懇意にしているクランだけでなく多方面に招待状を出しているようで、私どもにも招待状が届いておりました」

　メディアや政府関係者、企業など幅広く招待状を送っており、そこで大々的に“重大発表”を行う予定とのこと。もしかしたら霧ケ谷の挙げた功績に関することかもしれないと叔母様が言う。

「金蘭会は今後、成海様の敵となるやもしれません。直に見て回られた方が良いかと」

「確かに俺の顔はまだバレちゃいないし、このカードがあれば堂々とクランパーティーに潜り込めるかもしれませんが……」

「私どもの何人かを護衛に付けますのでご安心ください」

　その後は２、３ほど簡単な確認しつつ、話し合いは比較的和やなムードのまま終了となった。叔母様は接待を続けようとするものの、成海は考えることができたので帰ると言い出し立ち上がる。眉を寄せて何やら難しい顔をしているけれど、おつまみでポケットがパンパンに膨らんでおり非常に不格好である。

「それでは彼を送ってまいります」

「あなたは残りなさい」

　成海がホールから出たので迎えのときと同じように送っていくつもりで立ち上がると、副リーダーに止められる。

「はい。では成海君をどなたがお送りするのでしょうか」

「その彼のことについて遥から話があるそうよ。あちらへ」

　副リーダーが指差す方向に目を向ければ、叔母様が何かを思案しているような表情で窓際に立ち、庭を見下ろしていた。先ほどまで浮かべていた柔和な笑みはない。わたくしが隣に立つとイヤホンのようなものを手渡され、耳に装着するように言われる。

「今から成海颯太の戦闘が始まります。彼の実力をその目に焼き付けておきなさい」

「……えっ？」

　戦闘とはどういうことなのか。話し合いの終わり方からして友好的に接していくものと思っていたので驚いてしまう。急いで窓の向こうに目を向けると、噴水の辺りで執事長と向かい合っている成海の姿が見て取れた。同時にイヤホンから声が聞こえてくる。

『おい小僧。さきほどの御神様と我らに対する無礼。ただで帰れると思っているのか』

『……はぁ。それは申し訳ありませんでした』

　執事長が恫喝とも取れる言葉を投げかけている。ということはつまり――

「今日の３名。どうして呼んだのか覚えていますね」

「はい。我が国の“希望”となるか、仇なす“厄災”となるかを見極めるためと」

　くノ一レッドは表向きはモデル業や芸能人のようなことをやっているけれど、本業は国や社会を脅かす人物や組織の情報を集め、ときには暗殺まで行う国家直属のクランである。今夜もクランパーティーという名目で要注意人物を呼び出し様々な情報をぶつけ、その反応から敵性を判断することが主目的となっていた。

「執事長の様子を見る限り、成海颯太は厄災になるということでしょうか」

「……あなたはどう思いましたか？」

　叔母様と成海のやり取りを思い返す。成海が朧かもしれないこと。金蘭会と揉める可能性があるということ。叔母様に対する敬意は足りなかったものの、いずれのやり取りもそれほど問題があるようには思えなかった。

　それに成海はわたくし達の求めるスキルや情報を持っているかもしれず、この場で排除に動くのは性急すぎるとすら感じている。

「正直、厄災となるような人物には見えませんでした。それにまだ速度上昇スキルの取得方法や朧の情報を聞き出していないというのに、今すぐ排除に動く理由があるのでしょうか」

「それらの情報は確かに欲しいけれど、最優先事項はあくまで彼の処断です」

　だけど絶対に目的をさとられるわけにはいかない。そのためにもっともらしい文言を並べて内情を探っていたのだと叔母様は言う。もちろん速度上昇スキルや朧の情報を欲しているのは本当のようだ。

「国家に対する忠誠心がいささかも無いことは不安要素ではありますが、暴力に酔っていたり危険な思想を持ち合わせているようには見えませんでした。しかし肝心の背後関係が分からず処断は保留にせざるを得ません」

　あの年であれだけのレベルならば海外、または未知のダンジョンに潜っている可能性が高く、背後に朧かそれに匹敵する大きな組織がいてバックアップしているはず。まずはそれが何であるか確実な情報を掴んで成海の処断を決めたいと叔母様は言う。しかし……

「だとしたら、あれは執事長の暴走なのでしょうか」

　眼下では執事長がここまで届くほどの豪快な《オーラ》を放っている。つまりこのエリア一帯が|人工マジックフィールド《ＡＭＦ》へと変移し、ダンジョン内と同じく肉体強化とスキルが使用可能な状態になっていることを意味する。

　あれが排除でないのなら、イヤホンで聞こえていた通り叔母様に不遜な態度を取ったことに対する制裁なのだろうか。

「私の指示です。これで彼の情報が多少でも見えればいいのですが……」

　そう言うと叔母様は薄っすらと目を細めて注意深く見つめる。成海の戦闘スタイルや使用スキルから素性を調べるつもりのようだ。仮に未知のスキルなどを使ったのならどこの誰なのか事細かに追うこともできる。高レベル冒険者同士の戦いというのは多くの情報に触れることができる絶好の機会にもなるのだ。

（あくまで情報収集を優先しますのね……でも相手が悪い気もしますわ）

　成海と向かい合っているのは岩をも穿つ拳で過去に数えきれないほどの強敵を葬ってきた対人戦のスペシャリスト。レベルだって成海より５つほど高い。そんな格上すぎる相手とまともな戦闘が行えるとは考えにくい。同じように窓から眺めている先輩方も「勝負になるわけがない」と口々に言っている。

「いくら成海颯太とはいえ、あの執事長が相手であれば情報を掴む前に何もできず圧倒されるだけかと思います……」

「そう思っているメンバーも多いようですね。だけど彼は本物の怪物よ。一方的になることはないとみています」

　年齢は１５歳に間違いはない。であるにもかかわらず、くノ一レッドの面々や執事長の怒気に当てられても全く動じる様子は見られず平然としていた。あれほどの胆力は相当修羅場をくぐり抜けてこなければ身に付かないと叔母様は言う。

　それは単に図太いだけでは……なんて言葉が出そうになるけど必死に飲み込む。聡明な叔母様には別の見え方がしているのかもしれない。ならばそれを信じて見守るとしよう。

　なんとか話し合いに持っていきたい成海は焦ったように『ちょっちょ落ち着いてくださいよ』などと言うものの、執事長は問答無用とでも言うかのように構えを取る。体を横に向けたまま顔は正面、左手を相手の中段に据えた、いわゆる半身の構えだ。あれは強敵を相手にするときによく使う構えだと聞いているけど、成海を警戒しているのだろうか。

　対して、成海は僅かに重心を下げて両手を小さく前に出すという構えを取る。執事長への説得を諦め、迎え撃つ覚悟を決めたようだ。しかし見たことがない変わった構えだけど、どこの武術だろう。

「見慣れない構えですが、何が狙いでしょうか」

「……あれは中国の拳法、八相構えね。中段攻撃を誘って狙い撃つつもりよ」

　叔母様も様々な武術を修めている近接格闘術の使い手。あの前に出した両手で中段突きを受け流し、カウンターを狙うという中国少林寺拳法の構えだという。確かに執事長の得意技は正拳突きだけど、まさか撃ってもいない段階で見抜くとは……あの年齢で格闘術まで精通していることに驚くほかない。

　とんでもなくハイレベルな戦闘になりそうな予感に固唾をのんで見守るわたくしと、情報を１つも見逃すまいと注視する叔母様。

『いくぞ、小僧……』

　張り詰めるような緊張感の中、先に動いたのは執事長――ではなく成海だ。低い姿勢をさらに這うように低くして――いや、地を這った！？

『しゅみましぇんでしたーっ！』

　この距離でも響くような情けない大声を上げる成海。勢いよくしゃがんだせいでポケットに入ってたおつまみがいくつも散らばる。窓越しで見ていた先輩方も何が起こったのか理解できず目を見開いて驚いているけど、かく言うわたくしも混乱の最中だ。

　プライドの全てを投げ捨てたお手本のような土下座をする成海を前にして、執事長が困惑した表情で指示を仰いでくる。

「……こほんっ。あの状況でも本性を出さないとはさすがね。いいわ、戻ってらっしゃい」

（あれが本性なのでは……）

　執事長の本気の【オーラ】に恐れをなし降伏したように見えたのだけど違うのだろうか。だけど成海ほどの実力があるのならあそこまで自分を卑下する行動を取る必要はないし、こちらに情報を何も掴ませることなく事を乗り切ったというのも見事と言える。全ては計算づくの可能性も……ゼロではないのかもしれない。

　叔母様はイヤホンを外して一度大きく息を吐くと、わたくしの方に向き直る。

「雲母。あなたに成海颯太の調査を命じます。学校では適度に接近し、情報を集めなさい」

「はい。金蘭会はいかがいたしましょうか」

　ソレルと金蘭会については暴力的な事件を何度も引き起こすので冒険者ギルド内でも問題のクランとなっている。背後にカラーズがいるので安易に制裁を科すことはできないが、いずれ潰す方向で動いているとも言っていた。今回の金蘭会の動きを叔母様はどうお考えなのか。

「金蘭会についても当分は情報収集を優先します。重大発表を前に大々的に動くことはないと思いますが、もし学校に何か仕掛けてくるようなことがあればすぐに知らせなさい」

「承知しました」

「上手く成海颯太を使って追い込みたいところね……」

　そう言い終えると叔母様はアップにしていた髪をほどきホールから出て行く。わたくしも大きく息を吐き、成海について思案する。

　今回のためにあれだけの情報を揃え、執事長をけしかけるという強引な手段まで使ったというのに大した情報は得られなかった。今後もちょっとやそっとでは尻尾を出すことはないだろう。気を引き締めて任務に当たらねばならない。

　窓の向こうには散らばったおつまみに息を吹きかけ、ポケットに詰めなおしている姿が見える。あんな人畜無害そうな人物が本当に我が国の希望となりえるのだろうか。それともやはり厄災に？　いずれにしても――

（わたくしが必ずや貴方の正体を暴いて見せますわ）

「いやいや……こんなことってあるのか？」

　昨晩のクランパーティーでは御神の出方を窺うことだけでも大変なのに、金蘭会や執事の対処など考えることが多く気疲れし、ヘトヘト。そのため帰ってきてすぐにベッドへダイブし気絶するように寝てしまった。翌朝起きて鏡を見てみれば……見慣れた姿が映っていた。

　クランパーティーに行く直前の俺は顎や腰回りの贅肉なんてものは無くなっており、腹筋も割れて細マッチョと言えるほどスリムになっていた……はず。だけど鏡の向こうにいる俺は見事な贅肉が復活している。この太り具合からして、ざっと２０ｋｇ近くは増えているのではなかろうか。

　普通の人ならどれだけ食ったところで１日にせいぜい数ｋｇ増える程度だろう。にもかかわらずどうしてここまで太ったのかを考えてみれば、俺には《大食漢》という厄介なスキルがあることを思い出す。過剰なカロリー摂取をした場合に強制的に脂肪へ変換するという副次的効果があるのかもしれない。

「……いや。もしかしたら痩せたこと自体が俺の妄想だったという線もあるな」

　日頃からダイエットに励んでいたものの、食べすぎたり死闘をするたびにこれほど体重が増減するほうがおかしい。全ては妄想だった、そう言われたほうが納得できるものはある。いずれにせよ、今の俺が太っていることには変わりないのだから気を取り直してダイエットを続けていくしかない……はぁ。

　やや鬱モードになりながら居間に戻って歯を磨いていると、机の上に置いてあった腕端末が鳴る。画面をタップし映像モードにすると、にんまりと笑みを浮かべた華乃とお袋の顔が映しだされる。後ろの薄暗く物寂しい風景から察するに、ブラッディ・バロンのでる“亡者の宴”からの通信のようだ。

『おにぃー！　ママとパパがレベル１７になったよー！　これで次の狩場にいけるかなっ』

『颯太～【ウィザード】になれたわよー。燃え上がる炎よ、来たれ！　ふぁいやー……ぼーーるッ！』

　お袋が手に人の頭ほどの大きさの火の玉《ファイアボール》を浮かべ、それを数十ｍ先にポップしたコープスウォーリアに向けて勢いよく射出する。足元に着弾するとドンッという低い音と共に砂煙が舞い上がり、数ｍほどのクレーターが出来上がる。コープスウォーリアは１０ｍほど吹き飛んだところで魔石となった。

　あのクラスの魔法が当たればモンスターレベル１６くらいの相手なら一撃で仕留める威力があるようだ。もっとも、クールタイムが長く一発撃ったら１０分は再使用できないので使いどころが難しい技でもあるが。

　そしてカメラがくるりと回り、別方向になる。奥の方には全身金属の重装備を着用した冒険者が大剣を持って走り回っている姿が見えた。ヘルムを被っているので顔は分からないが親父だ。俺がこちらの世界に来た頃は腰が痛いとか言っていたのに、今では自分の体重を超える重量の鎧を着つつ、大剣を振り回しながらあれ程の力強い走りができるようになっている。肉体強化は偉大である。

　両親のレベルアップ具合を映して興奮気味だった華乃は、何を思ったのか急にこちらをじっと見てドアップの顔になる。

『ちょっと待って。おにぃ、また太った？』

『そう？　前と変わらないように見えるわよ』

『昨日はすっごい痩せてたのっ！　ほらこれ見て写真』

　華乃が昨晩撮った俺の写真をお袋に見せ、ワイのワイのと騒ぎ始めた。やはり昨日の俺が痩せていたのは気のせいではなかったようだ。もう無茶食いは止めようと心に誓いながら話を進める。

「前々から決めていた通り、新しい狩場に行くとするか」

『やったー！　ゲートのところで待ってるねーっ』

『パパ～颯太が新しい狩場に連れてってくれるって。準備するわよー』

　無駄に元気な妹とお袋の顔を眺めつつ通信を切る。俺がクラス対抗戦で動けない間も親父とお袋のレベルアップは順調だったみたいで何よりだ。それでは俺も準備をして合流するとしよう。

　\*・・\*・・\*・・\*・・\*・・\*

　玄関を出て鍵を閉めていると、道路を挟んで向かいの家――つまりカヲルの家――から赤城君、立木君、ピンクちゃん、カヲルの四人が黒っぽい魔狼の防具を着て出てきた。いつもお馴染みの主人公パーティーだ。

「おや？　おはよう！」

「……お、おう。おはよう」

　俺に気づいた赤城君が急接近して挨拶してきたので、後ずさりながら挨拶を返す。ずいぶんと晴れやかな笑顔をしている。Ｄクラスの刈谷に負けた後くらいから闇落ちしたかのように影が差した彼であったが、再び明るい笑顔を取り戻している。まるで入学時点のときのようだ。クラスにとって良い傾向ではあるかもしれないが、ゲームでこの状態になるのはもっと後だったので気にはなるな……クラス対抗戦で何かあったのだろうか。

　その後ろでは目を丸くしたカヲルが「また太ってるけど何故なの」と言って驚いている。何故なのか、それは俺が聞きたいくらいなのだが“食い過ぎたから”としか言いようがない。しかしクラス対抗戦が終わって次の日も、こうして四人で集まって狩りに行くとは感心だね。

「いや違うよ。今日は練習に行くんだ。良かったらキミも一緒に行くかい？」

　狩りと思いきや練習とな。しかし空気を読まず嫌われ悪役の俺を誘おうとするところはゲームと変わらない。これが勇者の素質ってやつなのだろうか。だが後ろではギョッとした顔でピンクちゃんが小さく首を横に振って拒否反応を示している。この小動物っぽい仕草は何だか癒されるね。一方のカヲルは、軽く顎に手を当て何かを考えるような仕草をしたあとに――

「……そうね。たまには一緒に行くのもいいと思う」

　とか言い出した。てっきり断るのかと思っていたら赤城君に同意するとは何か変なものでも食ったのだろうか。その真意を探りたいところではあるものの、立木君が即座に反対へ回る。

「今日は大宮が、俺達のレベルに合わせたレクチャーをしてくれると言っていた。なのにレベルが合わない者を混ぜたら困らせてしまうんじゃないか？」

「……（コクコク）」

　立木君が懸念を示すと、その通りだと言うように高速で頷くピンクちゃん。そういえば赤城君達はゲートが使えないせいでレベルアップが上手く行えておらず、手助けしたいとサツキが言ってたことがあった。リサもサポートするようだし俺はいなくても問題はなかろう。

　それに一応俺は空気が読める男なのである。わざわざ仲の良い主人公パーティーに割り込むなんてマネはしない。そも今日は家族と一緒に狩りをする先約があるので断るしかないのだ。

「ちょっと用事があるから遠慮しておくよ。でも誘ってくれてありがとう」

「そっかぁ。でもオレは、キミが実は凄い人なんじゃないかって思ってるんだ。今度一緒に狩りをしてみたいから、よかったら考えておいてくれないかな。よろしくね」

「……それはどういう意味？」

　「実は凄い人」とはいったいどういう意味なのか、横で聞いていたカヲルが怪訝な表情で食いつく。赤城君によれば、クラス対抗戦の到達深度で俺がダンジョン２０階まで行けたのは、Ｅクラスを絶対に勝たせたいという強い覚悟があったに他ならない。そうでなければ格上モンスターが蔓延るアンデッド地帯に足を踏み入れることすら難しい、そう考えたそうな。

「ふむ。確かにユウマの言うことも一理あるな。それなら今度よろしく頼む」

　立木君も何か思うことがあったのか軽く頭を下げながら今度一緒に行こうと誘ってくれる。実際には荷物持ちを断り切れず、ずるずるとついて行っただけなのに……人を悪く疑おうとしないイケメンならではの考えに心苦しくなるね。

　だけど立木君については普段からクラスのために尽力してくれている人なので、俺としても何かしてあげたいとは思っている。とりあえず今日はサツキに応援メッセージでも投げておくとしよう。

「それじゃオレ達は行くよ。またね、えーと……」

「成海だ、ユウマ」

「成海君、またね」

　そう言って主人公パーティーは行ってしまった。よく気が利いて誰にでも優しく接するので人気の高い赤城君だけど、どうやら俺の名前は憶えていないらしい。まぁ所詮はモブキャラだしな。仕方がないか。

　　\*・・\*・・\*・・\*・・\*・・\*

　足を忍ばせながら学校地下１階の薄暗い教室前まで来る。顔だけ出してそっと中を覗くと、灯りの魔道具と手入れ用具を並べてダガーを磨いているローブ姿の少女がいた。でも一人だけしかいない。

「華乃。親父とお袋はどうした」

「あ、おにぃ。パパとママは１０階で買い物中……でももう戻ってきたみたい」

　二人がどこにいるのか聞いていると後ろにあるゲートの紋様が紫色に光りだし、中から全身金属鎧を着た男が大きな革袋を背負ってサンタのように現れた。こちらに気づくとフェイスマスクをクイッと上げて笑顔を見せる。

「来たか颯太。たんまり持って来たぞ」

　全身をミスリル合金製の防具で固めている親父。買えば総額一千万円はくだらない装備であるものの、材料は全て自前で揃えたので加工賃として２００万円ほどで一式を揃えられた。昔からフルプレートアーマーに憧れがあったらしく、揃えたときは抱いて寝ていたほどだ。

　続いてゲートから出てきたのはお袋だ。牛魔というミノタウロス系モンスターの皮でできた赤茶けた色の軽鎧を着ている。ほとんどの金属武具は魔力の通りを悪くするため、魔法使いとの相性が悪い。そのため魔法使いは基本的に布か皮製品を使用するのだが、お袋もそれに倣っている。

　その二人は背負っていた革袋をよいしょと降ろす。重量的にはそれぞれ１００ｋｇくらいあるだろうか。その近くにいた華乃は鼻を摘まんで眉をひそめる。

「臭っ……やっぱりそれ臭い～」

　革袋からは酸っぱいようなアンモニア臭が広がってくる。中にはアンデッド系モンスターが落とす“腐肉”がたくさん詰まっているからだ。今まではドロップしても大した額で売れるわけでもなく使い道もなかったので拾わず放置していたが、今日はこれがたくさん必要になるので集めておいてくれと連絡しておいたのだ。

「数百個はあるけど……こんなに集めてどうする気なのー」

「これでモンスターを釣るんだよ。通称、ミミズ狩りだ」

「ミミズ？　そんなのを釣るのぉ？」

　これから向かうは２１階のＤＬＣ拡張エリア。サバンナのように背の低い木が疎らに生えたフィールドＭＡＰだ。クラス対抗戦で２０階の魔力登録できたので２１階に行くだけならすぐである。狩りのやり方とモンスターの説明は現地でしたほうがいいだろう。

「それじゃゲートを開くから入ってくれ」

「２０階って悪魔城って言われてる建物内よね。写真では見たことあるけど楽しみだわ」

「そうだな。一流の冒険者しか辿り着けない場所らしい。ついに行けるときが来たか」

　そわそわしながら言うお袋と、感慨深げに言う親父。だがまだこんなレベルで満足してもらっては困る。２０階前後のモンスターなんて鼻唄交じりにワンパンで仕留められるくらい強くなってもらわないと困るのだ。

　幾何学的な紋様が彫られた壁に手を置いてゆっくりと魔力を流す。するとすぐに紋様の溝にそって紫色の光が走り、低い周波数の音と共にゲートが開く。

「初めての２０階、一番乗りいただきっ」

「パパそっち持ってね」

「分かった。よーし頑張るぞー！」

　華乃が意気揚々と真っ先に飛び込み、続いてお袋と親父が革袋を背負って入っていく。今回の狩りは簡単なので気楽に行くとしよう。ということで俺も入るとしよう。

「真っ暗。灯りを点けるねっ」

　華乃がポケットから小型のランタンのような魔道具を取り出して魔力を流すと、電球色の光が辺りを照らす。

　このゲート部屋は先ほどの教室と同じくらいの広さはあるものの、全面が大きな石のタイルに覆われているせいで遺跡の中にいるような閉塞感を感じる。しかしそんな場所でも家族はキョロキョロして興味深そうに周囲を見ている。

「ここを真っ直ぐ進んでも２１階に行けるけど、左の狭い通路から梯子を上っていくのが近道だ。とりあえず２０階のＭＡＰデータを共有して……ん？　何か聞こえるな」

　説明していると遠くから何者かの歌声が聞こえてきた。声変わり前の少年のようなハスキーで高めの声。しかもこのメロディーは……ダンエクのオープニングテーマじゃないか。あれから数日経っているけど、いったい何をしているのやら。

　２０階のゲート部屋に到着し、これから狩りの作戦説明をしようとすると遠くから何者かの歌声が聞こえてきた。この聞き覚えある声からして知り合いである可能性が高いのだが、一応確かめに行きたい。

「ちょっとここで待っていてくれ。誰がいるのか様子をみてくる。多分知り合いだと思うけど」

「うん、待ってるー」

　知り合いでなかった場合、このゲート部屋はバレるわけにはいかないので物音を立てないよう慎重に梯子を上る。石床を僅かに上げてこっそり広間内の様子をのぞき見ると――

「ふんふっふーんっ、ふんふっふーん、だっだらだっだー♪」

　やや小さな体躯に赤いマントを靡かせ、長さ５ｍはあろうかという巨大な丸太を担いで組み上げている姿が見えた。ときどきリズムに合わせて激しく踊っている。あのような細い体付きでも容赦なく肉体強化させてしまうダンジョンシステムに驚きながらも、何を作っているのか目を凝らして様子を探る。

（何だあれは……家か？）

　一般冒険者が来るような場所に、しかも建物内に家を建てようとしているのか。あまりにも非常識な行いにたまらず声をかける。

「おい、アーサー。お前は何をやっているんだ」

「んあ？　“災悪”じゃないか。何って拠点を作ってるんだよ。見れば分かるだろ」

　丸太を担ぎながらクルリと振り返る魔人。確かにログハウスのようなものを組み立てているのは分かるが……ちょっと待て。節が多くて青みがかったあの丸太、ただの木材じゃないな。しかも奥に積み上がっているほど数があるぞ。

「その丸太、もしかしてフローズントレントのドロップ品じゃないのか。お前のレベルでよく取って来られたな。もしかして魔人はモンスターに襲われないのか？」

「んや、ちゃんと襲われるよ。でもこの丸太はボクのアジト内に生えてくるトレントのドロップ品だからいっぱい取れるんだ」

「なにっ！？」

　フローズントレントはモンスターレベル４０。群生しているためリンクしやすく狩るのは難しい。その上、丸太のドロップ率もかなり低いので入手難度が非常に高いのだ。それをあんなにたくさん……あの丸太を加工すればエンチャント・フロストが付与された強力な弓矢が作れるはず。少し売ってくれるよう交渉できないだろうか……いやその前に、こんなものを作る理由を聞いておこう。

「こんな屋内に、しかも冒険者がたくさん来るような場所で家なんて作ってどうするんだ」

　ステンドグラスがふんだんに使われ大聖堂のように荘厳な雰囲気のあるこの広間は、かつて聖女が大悪魔と死闘を繰り広げた場所として崇められている場所だ。今ではモンスターがポップしない安全地帯のため憩いの場として冒険者がよく立ち寄る場所でもある。そんな場所に家を建てるとは何を考えているのか。

　ちなみに数日前に俺とアーサーの戦闘により壁や天井にいたるまでズタズタになって崩壊しかかっていたけど、今ではダンジョンの修復効果によりすっかり元の姿に戻っている。

「この２０階はゲートで来られることが分かったから新たな拠点にするんだ。冒険者と話して情報集めたいからね」

「情報だと？」

　３８階にはアーサーの拠点があるのだけど、冒険者が誰も来ないので情報が全く集まらない。なのでモンスターがポップしないこの安全な場所に新たな家を作って住み、冒険者から外界の情報を集め、分析したいのだそうな。

　しかし大きな問題をいくつか見落としている。まず、ダンジョン内に建物を作ったところで半日もすればダンジョンの修復効果により吸収されてしまうという問題だ。それを阻止するには素材にゴーレムの核を埋め込む必要がある。

「あ～っ、そうだった！　でもゴーレムってボクが行ける範囲にポップしないんだけど……持ってない？」

「持ってるぞ。その丸太とウッドゴーレムの核１０個で交換どうだ」

「お前な。これはフロストトレントのドロップ品だぞ、分かってるのか？　２０個だ」

「だがゴーレムの核はそこらの冒険者でも持ってないぞ。通常では行くことのできない場所ばかりだからな。１５個だ」

　互いに足元を見ながらガンを飛ばし合って交渉する。まぁウッドゴーレムの核なんて数百個はあるし２０個と交換でも全く問題ないのだが、それでは負けた気がするので頑張って交渉し丸太１つあたり１５個で締結となった。これで強力な武具が作れるぜ、しめしめ。

「（おにぃ……出ていいの？）」

　思わぬところで武具強化計画が上手くいきそうになりほくそ笑んでいると、後ろで華乃が顔を半分だけ出してこちらの様子を窺っていた。話に夢中になり心配させてしまっていたようだ。今のアーサーなら大丈夫だろうと判断し、ＯＫのサインを送る。

「あれぇ？　大きな角が生えてる！　フルフルさんのお仲間かな」

「あら、どーもー。うふふ」

「この穴は狭いな……よっこらせっと。ほぉ、ここが世に聞く悪魔城か」

　出てきてすぐに思い思いの行動を取る成海家の面々。だがアーサーは近づいて来た華乃を見ると呆けた顔をして固まっている。そしてどうしたことか俺の横に立って耳打ちしてきた。

「（あのツインテールの娘、めっちゃ可愛いんだけど……お前とどういう関係なの？）」

「俺の妹だ。それで後ろの二人が――」

「（いやいやいや、調子乗るなよ。何がどうなったらお前とあんな可愛い娘が兄妹になるんだよ。生物学的におかしいだろっ！）」

　隠すんじゃない、本当のことを言えと揺すってくる。そういえば俺もこちらの世界に来て初めて家族を見たときはブタオとあまりのギャップにおったまげた記憶があったな。

「こんにちはっ、成海華乃っていいまーす。おにぃとお知り合い？」

「……なっ、成海？　おにぃ？　ほんとに兄妹なの？」

　俺と華乃を高速で見比べながら動揺しているアーサー。終いには混乱のあまり俺の事を「お義兄さん」などと呼んできたので脳天に強めのチョップを叩き込み、状態異常を解除しておく。華乃は呪いが解けて元気になった天摩さんの雰囲気と何となく似ている部分があるのだけど、ああいう天真爛漫な感じの子に弱いのかもしれない。

「それで、組み立てているこれはなんですか？　家……ログハウス？」

「そうなんです！　ボク、これからここに拠点を――」

「いたぞっ。リーダー、あれですよあれ！」

　カクカクした変な動きになっているアーサーと華乃の様子を眺めていると、広間入り口の扉が勢いよく開き、武装した冒険者が十人ほど入ってきた。武具から察するにレベル２０くらいだろうか。一番前にいる身長２ｍ以上ありそうな大男はそれよりもやや高そうだ。手には短杖を持っているけど、恐らく《簡易鑑定》の魔道具だろう。

「レベルは……存外低いな。レアモンスターだというからフロアボかと思っていたが」

「えーと、どちらさまですかね」

「うるせぇ、雑魚は引っ込んでろ！」

　あまりにも物々しい雰囲気なので何者か尋ねようとすると、俺達にも容赦なく《簡易鑑定》を仕掛けてきやがった。そこで自分よりレベルが低いと分かると《オーラ》を放って威圧してきたではないか。ちょっとは話を聞けよ。

「おうおう。コイツは俺達“大熊猫ブラザーズ”が先にツバ付けてたんだ、手を出すんじゃねーぞ」

「巣を作ってたみたいですけど新種のモンスターですかね」

「倒して魔石をギルドに引き渡せば、たんまり報奨金でますよ」

　アーサーを指差し、手を出すなと怒鳴るように言うリーダーの大男。手下も舌なめずりしながら金勘定をしている。頭に角が生えているのでモンスターと勘違いしているのかもしれない。

　しかし大熊猫ブラザーズか……その名の通りパンダのような白と黒の斑模様の防具をしているけど、パンダ好きを拗らせたのだろうか。一方のアーサーはパンダ共に見覚えがあるらしく何やら怒っている。

「お前達は……さっきボクの家を壊そうとした奴の仲間か。これ以上邪魔をするならお仕置きしちゃうぞっ」

「人語を喋れるとは珍しい。殺さずペットにするか、へっへへ」

「高く売れるかもしれないから適当に力を見せて生け捕りにするぞ、囲めっ」

　俺達が来る前にログハウスを壊そうとしたり大声で叫んだりしていたので、これ以上邪魔をするなと忠告するアーサー。だがそんな忠告は全く意に介さず武器を抜いてアーサーを取り囲んでしまう。

「おにぃ……あの子。助けてあげられないのかなっ」

　華乃が心配そうにアーサーを見つめているが、たとえ１０人が相手だとしてもレベルが高い上に対人戦のスペシャリストでもあるアーサーが後れを取ることはない。むしろパンダ共のほうが心配である。やりすぎるようであれば止めなければならないな。

「殺すなよ、適当に手足を折る程度にすませろ。いくぞっ」

「こんな弱そうな奴、楽勝だぜぇ！　おらあああああ……あ？」

「飛びやがった！」

　メイスを振り上げて飛びかかるパンダその１と、その２。そんな攻撃を見るまでもなく躱してふわりと浮くと、肌がひりつくほどの魔力を指先に宿し、両手で素早く魔法陣を描き上げる。あの魔法陣は――

「いでよ！　チャッピー！！」

　魔法が発動すると同時に広間の石床に転写され、直径５ｍほどの巨大な魔法陣が赤黒い光を放ちながら浮き出てきた。召喚魔法のマニュアル発動だ。広間全体が小さく振動し、パンダ共や華乃がこの異常事態に何事だとキョロキョロしている。

「キィ！」

　その中央から現れたのは……魔法陣の大きさと不釣り合いな体長２０ｃｍほどの白い蜘蛛。縦２列に並んだ目はルビーのように真っ赤で、丸っこいフォルムのふっくらした胴体。だけどどうみてもおかしいぞ。

「うぉ……お、驚かせやがって。とんでもねぇ魔力濃度だったからびびっちまったじゃねーか」

「でもこの白い蜘蛛も新種モンスターっすかね。見たことねぇですけど……」

　アーサーは“チャッピー”とか言っていたが、先ほどの魔法陣は紛れもなくアラクネ系最上位の召喚魔法《アラクネ・モナーク》のものだった。モンスターレベルは７０と他のトッププレイヤーが使う召喚獣ほどは高くないが、大きく速度を上げるバフと周囲の敵の速度を下げるデバフが使えるため、スピード重視のプレイヤーに好まれる召喚獣である。

　だけど俺の知っている《アラクネ・モナーク》は２ｍほどの白い蜘蛛の上に成人女性の上半身が生えている、まさにアラクネの姿だった。にもかかわらずアーサーが呼び寄せたのは片手で簡単に掴めそうな大きさの蜘蛛で、女性の上半身はどこにも見当たらない。白いので王種には間違いなさそうだが……

「チャッピー、黒い防具を着た奴を全員グルグル巻きにしてくれ」

「キィキィッ！」

「あぁん？　なにを……なっ」「ぉああっ」

　白い蜘蛛は指示を受け取ると目にも留まらぬ速さで動き回り、噴き出した白い糸で次々にパンダ共を絡め取ってしまう。あの速度からしてモンスターレベル３０くらいのスピードはありそうだが、７０のそれには明らかに届いていない。俺の《真空裂衝撃》のように大幅な弱体化がされている可能性も考えられる。

「んぐぉっご」「放せっ！」

「次に会ったときは容赦しないからなっ！　それじゃバイバイッ《イジェクト》」

　マニュアル発動で渦を巻いた黒いゲートのようなものを呼び出し、糸でグルグル巻きに縛られたパンダ共を次々に放り込んでいく。《イジェクト》はダンジョン外に脱出する魔法だが、こうやって邪魔なものを捨てるのに便利なスキルでもある。

　あまりにも想定外でスピーディーな結末に華乃と両親が唖然としている。あの蜘蛛を呼び出して無傷でパンダ共を追い返したのもアーサーなりに手加減を考えてのものだったのだろう。全て放り投げ終わると、帰っていいぞとばかりに帰還の指示を下し、蜘蛛は光の渦に溶けていった。

　静かになった広間の真ん中でアーサーが項垂れている。見ず知らずの冒険者と出会い、話をして仲良くなっていきたいと考えていたらしいが見事に思惑が外れたわけだ。だが一応言うべきことは言っておこう。

「アーサー。こっちの冒険者はダンジョンに楽しさを求めて潜っているわけじゃない。富と名声を求める我の強い奴らがほとんどだ。こんなところに居を構えてもトラブルが増えるだけだぞ」

「うん……そうかもしれないね。でも良い考えだと思ったのになぁ」

　ダンエクにてダンジョンに潜っていたプレイヤーとこちらの世界の冒険者は考え方が大きく異なっている。そこを履き違えていては、いつか足をすくわれてしまうだろう。とはいえ外の世界を見たことがないアーサーなら勘違いするのも無理はないのかもしれない。

　そんな重い空気を吹き飛ばすかのように目を輝かせた華乃が猛ダッシュしてきた。

「す、すっごーい！　あの白い蜘蛛ってどんな魔法なのっ！？　空も飛んでたよねっ！」

　意気消沈していたアーサーの両手を取って凄い凄いと連呼する華乃。一方のアーサーは顔を上げると一瞬で破顔し「こんなの大したことないよ」とまんざらでもないような顔で自慢を始める。お前はどこまでも調子のいい奴だな。

　雑草が疎らに生えているだけの乾燥したエリアを雑談しながら移動する成海家と、一匹の蜘蛛。

「召喚魔法ってこんなこともできるんだねっ。でもその乗り移るってどんなスキルなの？」

「キィ？　キィ！」

　華乃が俺の肩の上に乗っている白い蜘蛛をツンツンと突っつく。２０階広間での一悶着の後、アーサーが一緒に行くと言い出したのだ。しかしＭＡＰを自由に行き来できないという“魔人の制約”があるため、目的地である２１階について行くことはできない。そこで召喚獣の五感を借りるスキルで蜘蛛に乗り移り動かしているのだ。

　蜘蛛は華乃に何か言いたそうだが声帯の無いバージョンのアラクネになっているので話すことができない。そのため俺に向かってキィキィと鳴き、説明をしてあげろと訴えてくる。

「《憑依》といって召喚獣が覚えるスキルだな。こうやって乗り移ることで偵察などに使えるけど小さな召喚獣は大抵弱いし、戦闘能力が高めの大きな召喚獣だと動きにくい。それに《憑依》の状態では召喚獣のスキルしか使えなくなるから使いどころの難しいスキルなんだ」

「へぇ……でもいろんな召喚獣になれるなんて面白そうっ」

「飛行タイプとかは面白いかもしれないな。でも召喚獣もスキル枠に限りがあるから《憑依》なんてスキルを残す人は少ないんだよ」

　偵察目的なら召喚獣にならずとも隠密スキルを使える本体で行なったほうが成功率は高いし、戦闘能力という面でも大抵の召喚獣は召喚者自身よりも弱いので微妙。そも、召喚魔法は召喚者と一緒に戦えることが最大の強みなのに、それを捨て去っている時点で死にスキルにならざるを得ない。そんなスキルがあること自体、俺もすっかり忘れていたくらい価値のないスキルであったのだが、こちらの世界では色々と使い道がありそうだ。

「召喚獣は死なないから危険はないし、アーサーの本体が入れないエリアでもこうしてアラクネの体なら入れる。消さずにいてよかったな」

「キィ！」

　４本の脚で立ち、もう４本の脚で器用にぱちぱちと叩いて喜びの気持ちを表す蜘蛛。どういう感覚で体を動かしているのか気になるので後で聞いてみよう。ちなみに本体は誰も来ない３８階の拠点にいるので安全である。

「ねねっ、私にも覚えられるかな？」

「召喚魔法が使える【サマナー】は魔法系のジョブをいくつも覚えて行かないと無理だぞ。それ以前に華乃はシーフ系のジョブを極めるんじゃなかったのか？」

「そうだった……先にこっちを頑張らないとっ」

　そう言いながら華乃がそこらを駆け回り、蜘蛛も追いかけて戯れる。それを横目に俺と親父、お袋がゆっくりとついていく。気温も湿度もそれほど高くはなく、爽やかな風も吹いているので大変心地が良い。

「長閑ね～、本当にダンジョンの中なのかしら」

「そうだな。壁はないし天井も青いし、襲ってくるモンスターも見えないし」

　お袋と親父が大きな皮袋を背負いながら寄り添うように歩いている。このフィールドＭＡＰはルートを間違えなければ積極的に攻撃をしかけてくるアクティブモンスターに出会わず移動することができるので、すっかりピクニック気分だ。

　遠くには角が２本生えたサイのようなモンスターの群れがもそもそと草を食べているのが見える。あれもアクティブモンスターではないが、先制攻撃できたとしてもＨＰが多い上に周囲の仲間と確実にリンクしてしまうため、狩りには向かないモンスターだ。

　上空には豆粒のように小さく見える鳥型モンスターが単体で飛んでいる。あれは翼を広げると５ｍ近くある大きな鳥なのだが高高度過ぎて小さく見えているだけだ。あの高さでは並みの魔法や矢は届かないため、あれも通常の手段では狩ることができない。

　では何を狩れるのかといえば、２２階へ行くメインストリートを歩いていけばマムゥという巨大人食いトカゲがポップする。以前に天摩さんと食べた美味い肉を落とすので、見かけたら何匹か狩りたいところだ。だが今日のターゲットはこれらとは別である。

　景色を見ながらさらに３０分ほど歩き続けていると、前方に赤茶けた色の砂丘が見えてきた。

「あの砂漠みたいなところ、あそこがおにぃが言ってた目的地かなっ？」

「キィ！」

　そうだと言わんばかりに蜘蛛が声を上げ、俺の肩からぴょんと飛び出していくと、華乃も一緒になって駆けていく。砂丘自体はそれほど広くはなく、せいぜい１ｋｍ四方ほど。近くにある適当な広さの岩盤を見つけ、そこをキャンプ地とする。

　荷物を置いて狩りに必要なものを取り出したら作戦会議だ。

「それじゃあ“ミミズ狩り”の説明するから聞いてくれ」

「こんな乾いたところにミミズなんかいるのか？」

「岩と砂しか見えないわね」

　ミミズとはもっと水が多い場所にいるのではないかと親父とお袋が疑問を呈する。前方にはポツンポツンと大きな岩が点在しているものの、それ以外は全て砂。植物どころかモンスターの姿も一切見当たらないのでそう思うのも当然だ。華乃は本当にこんなところにミミズがいるのか砂を手に取って確かめている。だが目的のモンスターはあの砂の中に潜んでいるのだ。

「華乃、砂には入るなよ。襲ってくる可能性があるからな」

「この砂の中？」

「そうだ、見てろよ」

　置かれた皮袋から腐肉を１つ取り出し、持って来たワイヤーに引っ掛けて放り投げる。待つこと３０秒足らず。砂がもぞもぞと動き、勢いよく腐肉が砂の中に引きずり込まれた。食いついたのを確認してからワイヤーを引っ張ると――

「モンスターレベル２１のサンドワームだ」

　長さ２ｍ強、太さ３０ｃｍほど。ミミズのようにうねうねしたモンスターが釣り上がる。重量も優に１００ｋｇは超えているが今の俺の肉体能力があれば問題はない。岩の上まで引っ張るとビチビチと活きの良い魚のように跳ねまくる。

「でっかっ！　ミミズって言うからもっと小っちゃいのかと思ってた」

　華乃と蜘蛛が近寄って覗き込む。吸盤のように丸い口をしているが、よく見ればその中は牙が螺旋状にびっしりと生えていてグロい。普段は砂の中に隠れていて、上を歩く獲物をあの口で噛みついて引きずり込む獰猛なモンスターなのだが、こうして岩盤に上げてしまえば潜って逃げることもできず、ただ跳ねるだけの巨大ミミズにすぎない。

「口に注意しながら叩いてくれ」

「パパ、いくわよ！」

「ああ！」

　お袋と親父がそれぞれ持っていたメイスと大剣を振り下ろす。一方的に攻撃できるためリスクはほぼない。俺も混じってエイエイと袋叩きにしているとやがて動かなくなり魔石と化した。華乃がその魔石を拾い上げて首を傾げる。

「おっきな魔石……だけど他には何も落とさないの？」

「稀にマジックバッグの材料となる[サンドワームの胃袋]を落とすぞ。売ればいい金稼ぎにもなる」

「そういえばギルドの知り合いがマジックバッグは何かの胃袋だって言ってたけど、サンドワームのことなのねぇ」

　サンドワームは自分の体の大きさの何倍もの容量を食べることができるのだが、それも胃袋に“空間収縮”と言う特性が備わっているからこそ。その胃袋で作ったマジックバッグも同様に見た目以上の体積が入るので、一流冒険者のダンジョンダイブには欠かせないアイテムとなっている。

「でもこんなに簡単に倒せるのにマジックバッグはどうして安くならないのかしら」

「キィ……？」

　冒険者ギルドで買うとなると安い物でも数百万、大きなサイズになれば一千万円を超えてくるとお袋が言う。ダンエクでは二束三文であっただけに、アーサーも何故そんなに高額なのか納得がいかないようだ。

「腐肉で釣るという簡単な倒し方が一般的冒険者に広まっていないのもあると思うけど、普通のエリアでサンドワームがポップするのはもっと下の階層だからじゃないのかな」

　この砂丘一帯はＤＬＣで追加された拡張エリアなので認識阻害がかかっていて、普通の冒険者では来ることのできない領域だ。通常ＭＡＰでサンドワームがポップするのは２５階以降になるのだが、そこまで潜ることができるのは攻略クランや大貴族に囲われている一握りの冒険者のみ。その上、往復で１カ月近くかかるため、ほとんどのドロップアイテムが高額化している。

「あとは、抽選ポップ（※１）でたまにギガントワームっていうのが引っかかることがある。そいつが釣れたら皆で引っ張り上げるぞ」

「ギガント？　さっきのよりもおっきいのがいるの？」

「ああ。１日に一匹だけしか釣れないレアモンスターだけど、俺たち以外に誰も来ていないし、あの砂の中にいるはずだ。その胃袋で作ったマジックバッグは容量だけじゃなく重量も軽くなるので絶対に手に入れておきたいんだ」

　サンドワームで作ったマジックバッグは容量が小さくなっても重さは変わらないので持ち運びは疲れるし、皮自体の強度もそこまで強くはないので下手に物を詰め込めば皮が破れてしまう危険がある。一方、ギガントワームのマジックバッグ改は丈夫だし重量も軽くなるのでポケットに百ｋｇ級の鎧を詰め込むことも可能。戦略的に幅が広がるのだ。

「重量も軽くなるバッグなんて市場で流れた記憶はないわね。凄いわ～」

「とんでもない値段が付きそうっ。国宝指定されるかも！？」

「キィ！？」

　売ったら果たしていくらの値が付くのか。お袋と華乃、そして蜘蛛が目を輝かす。十分な数のマジックバッグ改が手に入ったら売ってもいいのだが、足が付きやすいので個人売買、もしくは安全なルートを確保するなど市場に流すときは慎重に期すべきだろう。

「じゃあいっぱい倒してたんまり稼ごー！」

「そうだな、腐肉ならたくさん持ってきたし」

「アーサーちゃんもはい、これ」「キィ！」

　金が儲かると知って華乃が号令をかけ、いそいそとワイヤーに腐肉を引っかける現金な成海家。アーサーもお袋からワイヤーを手渡され釣りに参加する。アラクネの体は俺の手を広げた程度の大きさしかないが力はあるので大丈夫だろう。

　誰もミミズ釣りをしていなかったからか放り投げればすぐに食いつく、まさに入れ食い状態。これだけ釣れるならギガントワームもすぐに引っかかることだろう。アーサーも体を器用に動かしながら腐肉をワイヤーにセットして放り投げている。

「キィキィ！！　キィーーー！」

　誰かが釣りあげたらみんなで叩くということを繰り返し、３０匹ほど倒した頃だろうか。次の腐肉を括り付けていると蜘蛛がキィキィと大声を出し始めた。見れば白く小さな足を岩盤に固定させ、はち切れそうなワイヤーを口で必死に引っ張っている。この張力からしてギガントワームの可能性が高い。

「アーサーのワイヤーを引っ張ってくれ！」

「わ、分かったっ！」「いくわよー！」「凄い力だ、どれだけデカいんだ」

　総動員でワイヤーを引っ張ると１ｍほどの巨大な口が現れる。あの大きさからして砂の下にある体は優に５ｍを超えているだろう。砂の中で暴れているのか視界が暗くなるほど砂煙が巻き上げられる。

「ぺっぺっ、このワイヤーは大丈夫かっ？」

「大型車でも牽引できるワイヤーだから大丈夫なはずだ」

「でもこのままじゃ時間かかりそう。ママ、あれやって！」

　口の中の砂を出しながら親父がワイヤーの強度を心配するが、ギガントワームを見越して頑強なワイヤーを買ってきてあるので問題ない。だが思いのほか抵抗が強い。長期戦になりそうな気配に華乃があれをやってとお袋にねだる。

「じゃあまずはアーサーちゃんから。力持ちになーれ♪　《ストレングスＩ》」

　お袋が腰に下げていた短いステッキをタクトのように振るうと蜘蛛がほんわりと赤く発光する。《ストレングスＩ》はＳＴＲを２０％上げるだけだが、それでも引っ張る力が明らかに跳ね上がる。

　全員にバフをかけ終わると大きなカブを引っこ抜く物語のように「うんとこしょ！　どっこいしょ！」とみんなで引っ張るタイミングを合わせる。そしてついにギガントワームの全身が姿を現した。

『ギュオォ！　オオオォオオオッ！！』

「でっかーい！　さっきまでのと全然違うっ！」

「キィ！」

　砂を吹き上げながら、ところ狭しと打ち上がった巨木サイズのギガントワーム。全長７ｍほど、それがビタンビタンと暴れまくっているので近寄るにも注意が必要だ。華乃とアーサーが見上げながら感嘆の声を上げている。

「モンスターレベル２６か、これはもうフロアボス級だな」

「下敷きにならないように叩いてくれ！」

「分かったわ！　いくわよー！」

　《鑑定》の魔道具でチェックした親父がギガントワームのモンスターレベルに驚く。ダンエクで見たものよりも一回り以上デカいのは誰も釣らなかったせいだろうか。四人ならいけると思っていたけど、これほど巨大ならアーサーがいなければ無理だったな。

　この日の狩りの成果はサンドワーム２００匹ほどと、[ギガントワームの胃袋]も無事にゲットし大成功を収めた。アーサーもしばらくはミミズ狩りに付き合ってくれるようなので遠慮なく手を借りるとしよう。

（明日からは学校だな……）

　ゲーム通りにいくならば学校ではこの先、要注意イベントが立て続けに発生することになる。変に目立たず空気に徹することがイベントを乗り切る最良の手段だと思っているが、普段通りにしていれば空気なのだからその点は抜かりない。

　アーサーにはさらにその先のイベントについても手を借りたいし、早いところ“魔人の制約”を解除する方法を見つけておくとしよう。

（※１）抽選ポップ

　敵が再出現時する際に、一定確率で違うモンスターが出現すること。よりレアなモンスターが出る場合が多い。ギガントワームの場合、１日に一匹出てしまえばその後２４時間はポップしない制限が加わる。

　洒落た照明に大きなペルシャ絨毯が敷かれた豪奢な部屋。その中央にはコの字になったテーブルがあり、距離を開けて“五人”が向かい合っている。

「――それでは、時刻になったので定例会議を始める」

　最奥に座るは八龍が一角“生徒会”の長であり、八龍全てを取り仕切る相良明実。百億円規模の資金を扱い、教職員や冒険者ギルドにも大きな発言力を有する特別な存在である。眼鏡越しに鋭い眼光を放ちながら会議の開始を宣言する。

「今日の議題は、月末に予定されている選挙についてだが――」

「待て、相良。喧嘩屋が来ないのはいつも通りだが、“弓術部”と“Ａクラス同盟”はどうした」

　相良が議題を述べようとすると、顎髭をたくわえた大柄で筋肉隆々の男がまだ全員揃っていないと口を挟む。“第一剣術部”部長であり八龍が一角、館花左近だ。冒険者学校において近接戦闘をやらせれば右に出る者はいないと言われるほどの大剣の使い手である。

「……対人研究部は今日の議題に興味がないようですね。弓術部は推薦する子が通らないなら参加する意味がないと仰って、不参加を決めました。Ａクラス同盟は存じ上げません」

　その館花の質問に答えたのは、赤く長い髪を編み込みサイドに垂らした小柄な女性。“第一魔術部”部長であり同じく八龍が一角、一色乙葉。まだ２年生であるにもかかわらず、類まれな才能で冒険者学校――だけではなく、世界にも名を轟かす魔術の天才である。

　八龍内において第一魔術部がここ１～２年で急速に発言力を増しているのは紛れもなく彼女の名声によるもの。椅子の右隣には大きな杖が立て掛けられ、頭部分についた紫色の宝石が怪しげな魔力を放っている。

　ちなみに喧嘩屋とは、八龍が一角“対人研究部”の蔑称である。

「ふん。なら次期生徒会長はこの５派閥で決めるってことか」

「そのようですねェ、このような大事な議題に八龍が揃わないとは全くもって遺憾なことです。クックッ」

　やや顔色が悪くひょろひょろした高身長の男が館花に同意する。“武器研究部”部長であり八龍が一角・宝来司。武器研究部とは武具を作ったり集めて研究する部活だが、日本有数の金満貴族である宝来家の強力なバックアップにより、人、物、金を集めて八龍まで上り詰めた新鋭の派閥として注目されている。傘下には多数の工房サークルを従えている。

　生徒会長の相良が八龍の面々を睨みながら強制的に会議を進行させる。

「続けるぞ。次期生徒会長の立候補者の名前を預かっているので発表する。第一剣術部が推薦する２年Ａクラスの足利圭吾。そしてもう一人は第一魔術部、武器研究部、シーフ研究部が推薦する１年Ａクラスの世良桔梗――」

「おいっ、１年は時期尚早だと言ってるだろうがっ！　まだ高校に入って間もないガキが俺ら八龍を纏められるわけがねぇ！」

　テーブルを叩き、抗議の声を上げる第一剣術部の館花。一癖も二癖もある八龍が１年の言うことを素直に聞くわけがないというもっともな理由だ。しかしそれにもすぐに反論の声が上がる。

「世良さんの活躍には中学時代から誰もが一目置いていましたでしょう？　それに彼女は【聖女】様の血を引く特別な存在。家格も実力も十分すぎるほどあり、我々の上に立つのに不足はありません」

「そうそう。まだ１年なのにあのサポート能力は目を見張るものがあるよねェ。それ以上に、国宝に指定されているあの武具……一度だけ見たことあるけど本当に驚いたョ」

　呼吸を置かずすぐに世良の擁護に回る第一魔術部の一色。決して大きな声ではないのだが異様な圧力を乗せられており、館花の大声にも負けない迫力がある。その一色に続いて武器研究部の宝来も擁護に回る。うっとりするような表情で世良桔梗を賛美し、その武具がどれほど凄い物なのか説明しながら手放しで褒める。

　書記がホワイトボードに「足利圭吾１票、世良桔梗３票」と書くと、それを見た館花はあからさまに不機嫌となり、濃密な《オーラ》を放ちながら唸るような低い声をだす。

「おめぇら、どんな条件で結託したんだ？　おいっシーフ部。お前も黙っていないで何か言ったらどうだ」

「……その鬱陶しい《オーラ》をしまってくださいまし。わたくしは世良桔梗という女生徒を推したつもりはございません。面倒なのでその方でもよろしいのでは、と言っただけですわ」

「なんじゃそりゃ。それなら俺が推している足利を推せよっ！　それで２票ずつのイーブンだ」

　ウェーブのかかった碧色の長い髪。凛として気が強そうな目と小ぶりな鼻を持つ女生徒が、館花の質問に投げやりな態度で答える。２年Ａクラス、“シーフ研究部”部長であり八龍が一角、楠雲母だ。

　学校外では同じ２年生でも一色乙葉の名の方が大きく知れ渡っているが、学校の試験においては一色と幾度も首席争いをしてきたほど高い実力を持ち、同学年からは双璧とも言われている。またシーフ研究部は多くの貴族や部活動を従えているため、２年生であるにもかかわらず八龍内での発言力は大きい。

　そんな彼女は冒険者学校内で最高レベルと言われている館花の《オーラ》を向けられて、手に持っていた黒い羽扇子で払いながら「鬱陶しい」と苛立つように言う。

「埒が明かないねェ。どうせ候補者を呼んであるのだろう？　なら目の前で喋らせて決めればいいじゃないの」

「おら、二人共。さっさと入れ！」

　宝来が候補者の話を聞いて判断しようと提案し、館花が入れと大声を上げる。その粗暴な物言いに楠が柳眉をひそめる。

　会議室の重厚な扉が開き、最初に入ってきたのは細身だが首や肩回りに筋肉が盛り上がるようについている男子生徒。腰には日本刀が差してあり、歩く姿はどこか軍人のよう。館花が推薦する足利圭吾だ。

　続いて入ってきたのは、腰の近くまで伸びた艶のある銀髪を揺らし、優雅な足取りで歩く女生徒。１年Ａクラスの世良桔梗。八龍が集まって鋭い視線を向けているというのに緊張感は全く窺えないどころか、すみれ色の大きな瞳を輝かせ、笑みまで浮かべている。

「予定より少し早いがまぁいい。それでは自己紹介をしろ。足利からだ」

「はい」

　相良が二人の顔を確認し、最初に男子生徒のほうに向かって命令を下す。それを聞いた足利は一歩前にでて手を後ろで組み、胸を張る。その際に胸ポケットに付けられた貴族位の金バッチがキラリと光り輝く。

「２年Ａクラスの足利です。私は八龍を従えようなどと思っておりません。各派閥の独自性はそのままに、この偉大なる冒険者学校の名をいかに世界へ知らしめるか。それこそが私の成すべきことと考えております」

「剣術の腕は２年にして俺の次くらいに上手いぜ。もし生徒会長になれないなら第一剣術部の部長をコイツに継がせようと思っているくらいだ」

　八龍の無言の圧迫にもたじろぐことなく自己紹介を終えただけでも並みの生徒ではないことは確か。また館花の補足によれば、剣術の腕も部長の館花に次いで２番手。たとえ生徒会長になれなくとも次期八龍入りは確実視されている名門貴族の嫡男だ。

　考え方は保守。今までの伝統はそのままに、より名声を高めていく方針を探っていくと言う。１年のときには生徒会にも属していたエリートで成績も優秀……ではあるものの、同じ２年生の一色や楠と比べてしまうと見劣りするのは否めない。

　次に軽くお辞儀をしてから世良が一歩前に出る。

「皆様ご機嫌麗しゅう、世良でございます。生徒会長になるのは宿命。わたくしはただそれを受け入れるのみ」

「……宿命？　噂に名高いその目か」

「はい。わたくしの《天眼通》は未来を見通す力がございます」

　宿命と聞いて思い当たることがあったのか、相良が世良の目について聞き返す。

　今はすみれ色の瞳をしているが、力を使用するときは燃えるように真っ赤な瞳となり、人物や出来事の未来を的確に見通すことができるようになると言う《天眼通》。これまでも優れた逸材を見つけたり危機を何度も回避してきた実績があり、この場にいる八龍の面々の誰もが知っている有名過ぎる固有スキルだ。

　その上、彼女は中学時代、変幻自在の剣を操る周防皇紀や、怪力と天性の近接戦能力を併せ持つ天摩晶らを抑え込み、常に成績首位を独走してきた経歴がある。また日本の冒険者の始祖である【聖女】の孫でもあり、その才能の高さから【聖女】の後継者とまで言われているほど。１年生の中では圧倒的なまでの存在感を放つ。

　世良の挨拶が終わると一色が立ち上がり、大きく拍手をしながら世良を賛美する。

「その自信に満ちた表情、その稀有な能力。今までに見せてきた実力も経歴も素晴らしく、血統、家格についても非のうちどころがありません！　我が第一魔術部に入ってくれるのならば、すぐにでも部長の座もお譲りしてもいいとすら思っていますが……世良さんはそれ以上の器。次期生徒会長に推さざるを得ません」

「足利君も少しはやるようだけど、世良君と比べるとやっぱりねェ。ボクら武器研究部も全力で推すつもりだョ」

　一色と宝来が諸手を挙げて称賛する。すでにいくつもの派閥が世良と接触したとの噂が立っているが、この場を見る者がいれば第一魔術部と武器研究部を真っ先に疑うことだろう。

　館花は不機嫌な態度を崩さず、楠は興味がなさそうに窓の外を見ている。

「――ところで、生徒会は誰を推すつもりなんだい？　それにシーフ部だって去年の次期生徒会長選ではあんなに熱心に動いていたのに今年はさっぱりだし。他に気になる生徒でもいるのかい？」

　生徒会とシーフ研究部の動きのなさを怪しむ宝来。次期生徒会長選は自派閥の行方を左右する大きなイベントであるにもかかわらず、二人の立候補者にさして興味を示していないのはおかしい。もしかして他に気になる生徒がいるのではと相良と楠の表情から真意を探ろうとする。

「今のところ生徒会では推薦する人物を決めかねている。だが気になるといえば……１年の名前は何と言ったか」

「まぁ！　相良様が気になるだなんて、それはとても興味がございます。どちら様でしょう？」

　それを聞いて前のめりになる一色。生徒会長・相良明実は魔術では一色と、武術では館花と競い合えるほどの実力があり、学力においては一度も１番以外の成績を取ったことがないという鬼才である。その相良が気になる人物とは一体どれほどの実力者なのか。

　一色だけではない、この場にいる全ての者がそれぞれが自身の記憶を探り始める。八龍でも最大権力を有する生徒会が推すとなれば、次期生徒会長選にも大きく影響を及ぼす可能性があるためだ。

「１年ねェ……もしかして天摩君かい？　天摩商会が作っているブランド武器“ＤＵＸ”はボクも一目置いているョ。でも彼女はボクら武器研究部が狙っているんだけどねェ」

「大方、周防か鷹村だろうよ。１年にしては実力が抜けているしな。だが周防は第一剣術部に入部が内定しているから手を出すんじゃねーぞ」

「でもその辺りの１年生なら相良様でもすぐ名前がでてくるのではなくて？　それ以外となると……まさかっ」

　天摩、周防、鷹村。１年生の錚々たる実力者の名が挙げられるが、それらは八龍を率いる者なら知っていて当然の大型ルーキー達。すぐに名前がでてこないというならば必然的にそれ以外の人物になると言う楠だが、突然はっとした表情になり口をつぐむ。どうやら彼女も心当たりがあるようだ。

「楠さん。知っているなら秘密にしないで教えてくださいな」

「相良が気になっているという１年坊……シーフ部も狙ってんのかぁ？」

「これはこれは。予想しないところからとんでもないルーキーの存在が発覚しましたねェ」

　知っているなら教えてくれと楠に縋るように食いつく一色に、思わぬ大型ルーキーの存在に驚きながらも冷静に思考を巡らす館花と宝来。あれこれと議論するものの一向に思い当たる人物がでてこず、膠着状態になる。

「先ほど挙げられた方達でもないのなら……もしかしたらＥクラスの方ではないですか？」

　そこに割り込んだのは世良桔梗だ。優秀な人材は思いもしないところに転がっているものだと、好奇心旺盛な笑みを浮かべて身を乗り出しくる。隣にいた足利は目を見開き「八龍同士の話に割って入るなど何を考えている」と小声で苦言を呈すが、全く聞いていない。

　だが世良の意見を聞いた館花は太い眉を逆立て、苛立ちを隠さず食ってかかる。

「馬鹿いってんじゃねぇ！　１年Ｅクラスといえば、つい数か月前までレベル１だった平民だろうが。どこに注目する要素があるってんだよ」

「確かにねェ。高貴なる血が流れていないＥクラスに才能や将来性を期待できるとは思えないけど……でも。相良君と楠君の表情を見る限りではあながち的外れでもないかもしれないョ？」

「ほ、本当なのですかっ、楠さん。私もＥクラスの平民に大型ルーキーがいるだなんて考えにくいのですけど……」

　平民というだけでも見下す要因になるというのに、まだ入学して３ヶ月程度のダンジョン初心者がどうやって天摩、周防、鷹村と並ぶというのだと憤慨する館花。

　優秀な貴族はもちろん、たとえ貴族でなくとも真に才能ある者ならば日本政府が冒険者中学の推薦状を出すので入学できているはず。一方で高校からの入学ということは“平民にしてはそれなり”という程度の才能しか持ち合わせておらず、中学組らの才能と比較すれば何枚も劣る。それが冒険者学校関係者のＥクラスに対する一般的かつ常識的な見解だ。

　ゆえに世良の意見は貴族至上主義である八龍にとって受け入れがたいものであるわけだが、宝来と一色は押し黙った楠の態度を見て疑いを強め、名前を教えろと詰め寄る。しかし楠は口をつぐんで顔を背けたままだ。

　この場は次期生徒会長について話し合うためのものだというのに話が脱線し混乱が収まる様子がみえない。相良は余計なことを言ってしまったとため息をつきながら、会議の締めを宣言する。

「少し時間を置いたほうが良さそうだな。後日、改めて会議の場を設けるとしよう……それと楠。後でお前とはいくつか確認しておきたいことがある」

「奇遇ですわね、相良様。ですけど、わたくしとて彼を譲るつもりはございませんわ」

　それぞれの思いが交錯する中、一人だけ恋い焦がれるような表情で遠くを見ながら想いを馳せる者がいた。世良桔梗だ。

「Ｅクラス……まだ見ぬ才能が埋もれていたのですね。後でこの目に焼き付けに行かなくては。待っていてくださいね。私の【勇者】様……」

『悪魔城でのことは全部秘密にって？　成海クンがそう言うならもちろん秘密にするよ！』

　俺は今、長い黒塗りリムジンの後方席にいる。左側には頭の先から爪先まで金属に覆われた女の子、天摩さんが座っている。今日もピカピカに磨かれており、朝の太陽光が反射してとても眩しい。

　そして俺を挟んで右側には艶のあるロングな黒髪にカチューシャをかけ、ばっちりとメイド服を着こなした美人メイドが座っている。天摩家お抱え執事“ブラックバトラー”を率いる執事長の黒崎さんだ。

　とても似合っている、と言いたいところだが「ちょっとでもお嬢様に触れたら、お前は即終了だ」と小声で呟いてくるので何とも居心地が悪い。まだ俺は人生を終了したくないので天摩さんに触れないように極力頑張ってはいるのだけど、大型リムジンとはいえ一列に３人座るとかなり姿勢が苦しい。

『でもダンジョンから帰ってくるときは凄いスリムになってたのに、また戻っていて驚いちゃったよ。体調は大丈夫なの？』

「大丈夫。ちょっと食べ過ぎたたけだから」

『そうなんだ。ウチもつい食べ過ぎちゃう癖があるから気を付けないとっ』

　復活した見事な太鼓腹をポンポンと叩き大丈夫だとアピールする。ダイエットの話にとても興味がある天摩さんには衝撃だったらしく、俺の姿を見たときは変なポーズで固まっていたほどだ。

『ところでさ、夏休みなんだけど一緒に狩りに行こうよ。成海クンとなら結構いいところまで潜れると思うんだよねー』

「なりませんっ！　ケダモノと一緒に潜るなんて絶対になりませんっ！」

『もうっ。黒崎は成海クンを何か誤解してるね。まぁー考えといてくれると嬉しいかな』

　冒険者学校の生徒は夏休みを利用して長期のダンジョンダイブ計画を組むのが一般的だ。天摩さんの場合は去年までお抱えの黒執事達をお供にして潜っていたらしいが、今年の夏は俺と一緒に潜りたいと誘ってくれる。それを聞いた執事長は「絶対に二人きりにさせてなるものか」とついて行く宣言をして息巻いている。

　しかし夏休みか。今のところ何かをやろうという計画はない。いつも通り家族かサツキ達とダンジョンダイブするくらいだと思うので時間はあるといえばあるのだが、ゲートを使わず潜るとなれば１ヶ月以上拘束されるのは間違いなく、往復の時間が非常に無駄になる。その問題をなんとかしない限り一緒に行くというのは……

（……いや。アーサーにゲートを出してもらえれば行けるのか？）

　最初にアーサーが登場したときを思い出す。通常、《ゲート》の出口はダンジョン外かゲート部屋にしか指定できないものだが、アーサーは何故か聖堂広間の中央に《ゲート》出口を作って出てきた。もしかしたら任意の場所にゲートを出す方法を知っているのかもしれない。それを利用すれば天摩さんとお供を連れて一気に２０階まで行けるはずだ。

　それに俺の方だって天摩さんと一緒に潜りたい理由はいくつかある。一つは呪いを解いてあげたいことだが、もう一つはアーサーからメールと電話で何度も天摩さんを引き込めと言われていることだ。俺とサツキのように共闘関係になりたいのだろう。そうなるためにはプレイヤー知識の一部を共有することが前提となる。

『前に潜ったときに“マムゥ”がいっぱいいるところを見つけてねー。それはもう食べ放題だったんだよ。今年は成海クンと一緒に食べたいなー』

「お嬢様っ！　あの後体重を落とすのにどれだけ苦労したか思い返してくださいっ」

　隣でコロコロと笑いつつ楽しげに話す天摩さんだけど、大悪魔を前にして俺を見捨てず命を張って庇ってくれた姿は今でも鮮明に覚えている。信頼に値する人物であることに疑いようはなく、プレイヤー知識を渡すことについて異論などない。

　だがゲートを含めたプレイヤー知識は漏れた場合の影響が甚大であり、貴族であっても危険な状況に陥らせてしまうヤバい代物だ。味方に引き込む際は慎重に事を進めなければならない。早めにリサとアーサーとで集まって協議を行いたいところではあるが――

「ありがとう、前向きに考えておくよ。あと……天摩さん。俺を迎えに来なくても大丈夫だよ？」

『ええっ、迷惑だったかな』

　実は先ほどちょっとした騒動が起きていた。学校行くために準備をしていたところチャイムが鳴ったのでドアを開けて出てみれば……サングラスをかけた十数人の執事が玄関に立ってこちらを睨んでいたのだ。家の前にはこのリムジンを含めた黒塗り高級車が５台も停まっており、近所の人や道行く人が何事かと集まる始末。腕を掴まれ強制的に後部座席に乗せられてみれば天摩さんが座っていたというわけだ。

　友達のよしみでこれから毎日迎えに来てくれるとのことだけど、俺の家は冒険者学校まで歩いて５分もかからないほどに近く、それ以前にこんな騒動が毎日続くのはちょっと気が引けてしまう。なのでやんわりと断りを入れておくことにした。

『分かったよ。でも迎えに来て欲しいときはいつでも言ってね？』

「その気持ちだけでも嬉しいよ」

　右隣では黒崎さんが「お嬢様のお誘いを断るとは……いや、これでケダモノと距離を置くことが……」などと言いながら拳を振り上げたり下げたりと忙しない動きをしていた。

『それじゃーまた後でねー！』

　そう言って車から降り、颯爽と去っていくリムジンを見送る。俺の後ろにはジト目でずっと様子を見ていた幼馴染が立っているではないか。さて何て言おうか。

「今の、Ａクラスの天摩晶さんよね。随分と仲が良さそうに見えたけど」

「こないだのクラス対抗戦で気が合ってさ。友達になったんだ」

「友達って……でも彼女は歴とした貴族様よ。大丈夫なの？」

　貴族は社会の上流であるがゆえに庶民にとって憧れの対象であるものの、同時に気に食わなければいつでも権力を振りかざし、庶民を封殺することも厭わない恐怖の象徴でもある。今は気を許して仲良くなれたとしても、いつ気が変わるとも知れないし、たとえ天摩さんの気が変わらなくても周囲がその関係を許さない。だから庶民である自分達は貴族と安易に近づくべきではない、と遠回しに忠告してくる。

　確かに普通はそう考えるしそれが正解なのだろう……が、最低でも天摩さんの呪いを解くまで離れるつもりはない。とはいえ余計なトラブルを起こさないためにも皆が見ている前では気安く天摩さんと接することは控えたほうが良いだろうな。

「でも……颯太は変わったわ。ちょっと前までは誰かと仲良くなろうとするなんて……それどころか私以外とまともに会話すらしなかったのに」

　そういって中学時代の俺を思い出すカヲル。当時の俺はツンケンとしていて誰にも気を許すことなく孤立していたらしい。ゲームに登場するブタオもそんな感じだったし想像に難くない。

　だけど昔を語るカヲルは微笑むような、そして少し寂しそうな何とも言えない複雑な表情をしていた。中学時代の俺はカヲルに滅法嫌われていたのは確かだろうが、それだけではない何か複雑な思いが垣間見えた気がする。

「さぁ早く行きましょう。もう大分遅れてしまっているし」

　そう言いながらカヲルが歩きだしたので、すぐにカバンを持ってその後ろをついていく。ここがいつもの俺の定位置だ。

　すでに６月も終わりが近づき例年なら梅雨入りしていてもおかしくない季節なのだが、空は雲一つない快晴である。朝っぱらから気温も高く、この太った身体には少々堪えるね。

「来たぞ、ヒーローのご登場だ！」

「やるじゃーんブタオ君。ちょっとだけ見直したかもー」

　教室に到着してみれば、俺を見たクラスメイトの何人かが“ヒーロー”と言って拍手をして迎えてくるではないか。何かと思えばクラス対抗戦で俺が稼いだ点数によりＤクラスに勝てたからだそうな。

　今までは存在すら認識されない空気の扱い、良くて足手まとい扱いだったのに、急に好意的な眼差しを向けられるとケツがムズ痒くなるぜ。だけど好意的でない声のほうが多く聞こえてくる。

「ただついて行っただけじゃねーか。あーあ、到達深度は楽でいいよなー。俺も選べばよかった」

「そうそう。ついて行くだけでいいならあたしだってできるし」

「何にもしてないのにヒーローとかズルくない？　ブタオのくせに」

　クラス対抗戦では誰もがボロボロになりながらダンジョン内を駆け回ってクラスのために必死に頑張っていた。食事は最低限、岩肌の上で雑魚寝という極限状況でモンスターと連戦も珍しくなかった。だというのに戦闘もせず上位クラスについて行っただけの奴がヒーロー扱いだなんて納得できないと口々に言う。

　確かに２０階に行くまでモンスターは全部倒してくれてたし、俺は後方でその姿と眺めていただけ。特に難しい局面に出くわすことも――最後以外は――なかった。豚のしっぽ亭では豪華な食事を奢ってもらったし、途中で何度か家に帰ってベッドの上で寝てもしていた。後ろめたい気持ちもなくはないのだ……てへっ。

「だけどよぉブタオ。お前モンスターの圧は大丈夫だったのか？」

　明後日の方向を見ながら俺の肩に手を回して話しかけてきたのは、金髪ロン毛がトレードマークの月嶋拓弥君だ。教室での彼は仲の良い友達かカヲル以外に話しかけるところを見かけたことがないのでオラ驚いたぞ。

「距離をあけて戦っててくれたからね。俺のいるところまでモンスターの《オーラ》はほとんど届かなかったんだ」

「ま、そんなところだろうな。けっ……カヲルのために頑張ってデカい魔石取ってきたのによ。モブのくせにでしゃばるんじゃねーよ」

　そう言いながら俺のケツを蹴ってつまらなそうに席に着く月嶋君。魔石格という種目で一番になり、カヲルに良いところを見せたかったようだけど……頑張って取ってきた魔石とはいったいどれほどの物だったのか。それが分かれば月嶋君のおおよそのレベルが分かるのかもしれない。後でこっそり情報収集でもしてみようか。

「ソウタ、おはよっ」

「お～っはよ～。ヒーロー君」

　教室の最後方にある席に着いて机の横にカバンを引っ掛けていると、スカートから伸びたスラリとした脚と、ほど良く肉付きのある脚が見えた。見上げてみればにっこりと微笑んでいるサツキとリサだ。いつも通り変わらぬ笑顔で接してくれると何だかホッとするね。

「随分と活躍した割に、みんなの態度はそっけなかったわね～」

「みんな勝手なことばかり言うんだからっ」

「ふふっ。でもソウタにとっては都合がいいのかな～？」

　先ほどの様子を見られていたようだ。小心者の俺としてはヒーロー扱いなんてされても困惑するだけだし、ケツを蹴られる程度で丁度いいと思ってるくらいだ。

「ついて行っただけというのは本当だし、楽もしてたしな……それはそうと赤城君達はどうだった？　練習に付き合ったんでしょ」

「昨日は１階で訓練しただけ。でもみんな本気で強くなりたいっていう意志を感じたよっ。四人とも戦闘センスが凄く高いからびっくりしちゃった」

「あとは～土曜日だけレベル上げに付き合うって約束もしたわね～」

　赤城君、立木君、カヲル、ピンクちゃんの四人を誘って訓練に付き合ったサツキとリサ。パワーレベリングをする前に基礎知識の共有と、そのための戦術指導を行なったそうだ。

　パワーレベリングではモンスターを大量かつ効率的に倒しまくるので、事故が起きないよう事前にロールや立ち位置の確認などコーチングをするのが一般的だ。パワーレベリングなんて普通は高額の依頼費を払うか貴族しか受けることができないので、当然赤城君達も初経験。一度くらいは事前講習をやっておいたほうがいいだろう。

　戦術指導では実際に打ち合ってみたというサツキ。四人とも戦闘センスの高さは予想以上で技術の吸収も早く驚いたという。まぁ主人公パーティーだけあってゲームで登場するキャラクターの中でも基本性能は最上位クラス。驚くのも無理はない。

　そして今週末には７階の魔狼を使ったパワーレベリングがすでに決まったようだ。通常の狩りならＤＬＣ拡張エリアでゴーレム狩りをするほうが手っ取り早いのだが、パワーレベリングであれば大量に釣って集めることができる魔狼のほうが好都合なのである。

　後々のことを考えれば夏休みまでにレベル１０くらいまで上げてもらいたいところだ。特に赤城君は、天摩さんの解呪イベントなど様々なイベントのトリガーとなれる人物なので、早くレベルを上げるほど俺の余裕も生まれることになる。それに……赤城君が強くなればＥクラスの空気が良くなるという副次的な狙いもあるのだけどね。

「なるほどな。手伝えることがあったら何でも言ってくれ。積極的に支援するつもりだ」

「ん……やっぱりみんなの防具集めかなっ？　私達もやっと１５階で“モグラ叩き”ができるようになったけど、素材を集める速度はとっても遅いからねっ」

「ミスリル合金なら大量にあるからそれを譲るよ。なんなら今度一緒に行くか？」

「デートのお誘い～？　ふふっ」

　サツキ達はモグラ叩きはできてもブラッディ・バロンはまだ倒せないので十分なミスリル合金を集めるのは難しく、赤城君達の分までは揃えられないと言う。それならたくさんある在庫の一部を譲ればいいだろう。

　そんな感じで近況報告をしていると廊下側が急に騒がしくなってきた。悲鳴の混じった声まで聞こえてくる。何か起きたのだろうか。クラスメイト達も会話をやめて教室の入り口に注目する。

「どけっ！」

　教室の引き戸が乱暴に開けられ、木刀を持ちジャージを着た集団が男子生徒二人を投げ入れてきた。うつ伏せになっていたので一瞬誰だか分からなかったが、あの赤い髪と角刈りは赤城君と磨島君ではないか。よく見れば顔は腫れあがり、手足も傷や痣だらけになっている。ただ殴ったというより足腰立たなくなるまでサンドバッグにされていたようなやられ方だ。

　物々しい突然の出来事に皆も息を呑むように見ている。しかもやられているのはＥクラスのリーダー格。それが二人揃って痛めつけられていることに恐怖で泣き出しそうな子までいる。

「どうする。絶対に探し出せとの厳命なのに」

「足利さんがキレたらマジ怖いからな。何て言えば……」

「だがもう時間がない。いったん出直すしかないぞ」

　闖入者達の胸元には“第二剣術部”の文字が刺繍で入れられている。第二ということは貴族ではないものの、レベル１０くらいは軽々と超えている実力者集団だ。まだレベル６でしかないあの二人を捕まえてあれだけ痛めつける理由とは何なのか。というか、足利って誰だ。

「おいっテメェ、こんな雑魚を教えやがって。次嘘ついたらお前らタダじゃおかねーからな！」

「また聞きに来る。逃げんじゃねぇぞ」

　手に持った木刀で床をバンッと叩きながら吐き捨てるように言って去っていく第二剣術部の部員達。その姿が見えなくなると同時にピンクちゃんが駆け寄り、サツキは「保健室の先生を呼んでくる」と言って教室を出ていく。立木君は状況を把握するために事情を知っていそうな人がいないか聞いて回っている。

「あの人達にこのクラスで一番強い奴は誰かと聞かれて、それで赤城と磨島の名前を言ったんだ。でもまさかここまでしてくるなんて……」

「第二剣術部なんて俺達が逆立ちしても敵う相手じゃないのに。何がしたかったんだよ」

「ユウマ達の怪我が治ったら何が起きたのか僕が事情を聴いてみよう。大丈夫だ。【プリースト】の先生ならこのくらいすぐに治してくれるさ」

　名前を言ってしまったクラスメイトは激しく動揺していたので、立木君が大丈夫だと言って落ち着かせる。こういうときでも気配りのできる立木君は頼もしいね。

　しかし、第二剣術部はウチのクラスの一番強い奴なんて聞き出して何をしたかったのか。味方に引き込みたかった？　それなら実力を試すとしてもあれほどズタボロにする必要はないだろう。あの痛めつけ方には苛立ちをぶつけたような悪意が感じられる。だがその悪意を向けられる理由は何なのか……ＤクラスがＥクラスを叩いてくれと泣きついた？　その程度で第二剣術部は動かないだろう。さっぱり分からん。

（何にせよ、サツキを守らないといけないな）

　クラスメイトを守るためだったので仕方のないことではあるが、サツキは実力の一端を見せてしまったことがある。“一番強い奴”を探しているという第二剣術部らがその噂を聞きつければターゲットにされてしまう可能性が高い。ただでさえゲームでのサツキは上級生に狙われて退学に追い込まれていたわけで、対策はきっちり講じておくべきだろう。

　週末に開催予定の成海家ミミズ狩りツアーに招待しようか考えていると、同様に思考を巡らしていた立木君が何かを思いついたのか神妙な顔でリサの名前を呼ぶ。

「新田。後で話がある。例の件では早めに動いたほうがいいかもしれない」

「ん……分かったわ。じゃあそういうことで、ソウタも一緒によろしくね～」

　例の件で動くと言う立木君と、それが何かを察し俺に向かってよろしくと言うリサ。俺を引き入れるということは、前にビデオチャットで言っていた“次期生徒会長選挙”についてのことだろうか。つまり立木君はこの騒動の原因を選挙関連と睨んだようだ。

　ゲームでの次期生徒会長選挙イベントは、Ｅクラスの票を巡っていくつかの派閥から要請――という名の恫喝を受ける形でスタートしたはず。このようにズタボロの赤城君と磨島君が放り投げられる形ではなかったと思うのだが……

　ゲーム知識があっても事情をよく飲み込めない。立木君が何を考えてどう動くつもりなのか知りたいし俺も混ぜてもらうとしよう。

「おっせーぞ。早く渡せっ」

「ちょっと混んでてさ。でも全員分はちゃんと買えたから……」

「せっかくソウタが買ってきてくれたのにっ。磨島君はもう少し言い方を考えてっ」

　昼食の時間となり、俺と立木君、サツキ、リサの四人は人気のないところへ行き、赤城君と磨島君に今朝のことを事情聴取することとなった。教室や食堂にいればまた第二剣術部に絡まれる可能性があるためだ。

　昼食を食べながら話し合うつもりだったので、買い出し役は一番目立たない俺。購買でもみくちゃにされながら何とか全員分のパンと牛乳を確保できたわけだが……磨島君に遅いと叱られながら手早く皆に配っているところである。サツキの優しいフォローが目に染みるぜ。

　ちなみに赤城君と磨島君は【プリースト】の先生に治療してもらったことで打ち身や傷はほぼ消失し、今は絆創膏をいくつか貼っているのみ。教室に投げ込まれたときは自力で立てないほどズタボロであったというのに魔法治療を行えばあっという間である。

「ありがとう、えーと名前は……まあいいか。それで登校時にいきなり捕まったんだよ。実力を見せろとか言って」

「俺もだ。やり返してやろうと頑張ってみたが手も足も出なかったけどな」

　俺からパンを受け取った赤城君が捕まったときの状況をぽつぽつと話し始める。それによると、寮を出たところで実力を見せろと言われ、わけも分からず第二剣術部の訓練場まで連れてこられ袋叩きにされたようだ。負けん気が強い磨島君はやり返そうとしたものの格上が複数人相手では抵抗すらできなかったと拳で地面を叩いて悔しがる。

「実力といっても、二人のレベルは分かっていたのでしょ～？」

「うん。オレは端末画面を見せて何度もレベル６だと言ったんだけど、問答無用だったよ」

「レベルなんて偽ったり隠すもんじゃねーと思ってたが……まぁ大宮の例もあるしな」

　向こうも二人のレベルは承知のはずなのに何故試したりしたのかとリサが首を傾げる。生徒に配布されている端末では各生徒のレベルが一覧で閲覧できるようになっており、誰がどの程度のレベルなのか一目瞭然。赤城君も一覧に載っている通りレベル６だと言ったのに信じてもらえなかったようだ。

　一方の磨島君はサツキの方を見ながら訝しむ。普通は自分が弱いと見られると学校内の立場も弱くなるだけなので、レベルが上がればすぐに鑑定マシンを使ってデータベースを更新するものだが、サツキは更新しないままだった。もしかしたらレベル申告をしない生徒も少なからずいるのではと疑っているのだ。

「それと殴られてるときに何度も「Ｅクラスで一番強い奴は誰だ」と聞かれたな。現状、俺らの中で一番強いっていったら大宮だろ。あいつらが探しているのも大宮じゃないのか？」

　磨島君のダンジョンダイブ経験から言えば、入学してからこれまでの短い期間でサツキ以上にレベルを上げることはまず不可能。だからこそＥクラスで一番強いのはサツキだと断言できるのだそうな。まぁそれもプレイヤーというチート的存在を除けばの話だけど。

「でも～第二剣術部がサツキを何のために狙うというのかしら」

「“足利”の命令だと言っていたな。データベースでその苗字を検索してみたところ、ヒットしたのは一人のみ。この人物は少々問題があるぞ」

　立木君がパンを齧りながら端末を操作して画面を見せてきたので皆でのぞき込む。そこには、とある男子生徒のデータが表示されていた。

　足利圭吾。２年Ａクラス。子爵家嫡男。第一剣術部所属。校内の武術大会では剣術部門で準優勝。

　目つきは鋭く、相当に鍛え上げられていると分かる体つき。顎の引き方や姿勢などからも上流階級というのが一目でわかるような人物だ。校内でも幅を利かせているであろうことは容易に想像できるが、俺のゲーム知識には入っておらず顔を見ても情報は何も浮かばない。リサの様子を見ると同じように俺を見て首を傾げていたことから、やはりゲームでは登場しない人物の可能性が高い。

「今朝のあの人達を動かしていたのは第二ではなく第一剣術部？　カヲルから聞いた大宮さんのレベルって１０くらいって聞いているよ。失礼な言い方かもしれないけど……第一剣術部が警戒して動くほどではないと思うんだけど。どうなのかな」

「……ごめんねっ。私のレベルとか詳細は言わないようにしてるの。でも足利という人よりレベルは大分低いし、それにどちらの剣術部にも狙われる心当たりは無いよっ」

　カヲルはクラス対抗戦でサツキが戦っているところを見てレベル１０相当だと判断したとのこと。一方の足利はデータベースによればレベル１９。第一剣術部には他にもレベル１５以上がごろごろいるわけで、わざわざサツキを警戒するほどなのかと疑問を投げかける。一方のサツキはそれを遠回しに肯定し、狙われる心当たりもないと言うが……理由もないのにあれほど強引な手段を使うだろうか。何らかの理由があるはずだ。

「何を考えて第二剣術部を動かしたのか、足利に直接問い質したいところではあるが、相手は貴族。僕らなんて相手にしないだろう。仲介してくれる貴族に心当たりはなくもないが……それは最後の手段と思っている」

　聞けば第一魔術部に伝手があるという立木君。彼のストーリーを進めていくと第一魔術部を動かしている女の子の話が出てくるのだが、彼女はゴリゴリの貴族主義だったはず。立木君本人の悩みならともかく、Ｅクラスの問題を持ちかけたところで親身になって考えてくれるとは到底思えない。

「……さて、二人に聞けることはこれくらいか。この先は僕らなりに動いてみることにする。ユウマと磨島は大丈夫だとは思うが、何かあったらすぐに連絡をくれ」

「あぁ分かった。だがまぁクラス最強の大宮に、参謀の立木、クラス一の学力を持つ新田がサポートについて動いてくれるなら俺としても頼もしい限りだぜ」

「確かにね。新田さんとナオトなら大宮さんを守れるって気もする。でも気を付けてね」

　教室へ戻っていく二人に向けてにっこりと微笑み手を振るリサと、俺を横目で見ながら苦笑いをしているサツキ。当然「あの、俺もいるんですけど……」なんて野暮なことは言わない。目立っても動きにくくなるだけだからだ。ここはサツキとリサに頑張ってもらわないと。

　事情聴取も終わりこれでゆっくり食べられると思いきや一人、俺に厳しい視線を送ってくる者がいた。

「――ところで成海。お前はどれくらいの強さで何ができるのだ」

　立木君は何かを考えるように人差し指で眼鏡を上げてから、再度鋭い視線を向けてくる。

「え？　えーと、さっきみたいな雑用くらいなら――」

「ふざけるな。そんなことのためにわざわざ新田が呼ぶわけないだろう。僕の勝手な予測だが……お前と新田は、大宮と一緒のパーティーを組んでいるんじゃないのか。レベルだって大宮と同程度まではいかなくとも、データベースに載っている数値ほど低くはないはずだ」

　さすがは立木君、鋭いね。ゲームでも機転を利かせて幾度も主人公パーティーを救ってきたインテリキャラだけのことはある。だけど今は言うつもりはない。言えばきっと俺の強さを勘定に入れたクラス運営や作戦を考えてしまうからだ。ここは惚けることに徹しよう。

「言わないか……まぁいい。だがこれからはお前を新田や大宮と同列に扱うことにする。それは僕の信じる新田が、お前を信じているからだ。見た限りでは大宮からの信頼も厚そうだしな。この先、危険を伴うかもしれないけど遠慮なく頼るぞ」

「ふふっ。頼りにしてるからね～」

「で、でもでもっ。基本的には前に出ないで後方支援のほうがいいかな？　ねっ、ソウタ」

　サツキがさりげなくフォローしてくれるものの、立木君は俺の立ち位置をどうするかは後回しにすると言って今朝の出来事の振り返りに入ってしまう。

「まず、現在分かっていることと言えば。第二剣術部がＥクラスで一番強い人を探していること。その第二剣術部を動かしているのは第一剣術部の足利という男。このくらいだが……気づいたことはあるか？」

　といっても、この少ない情報から相手の意図を読み取るのは不可能に近い。ズタボロにされた赤城君と磨島君ですら状況がよく飲み込めていなかったくらいだし。それでもサツキが気づいたことを言葉にしていく。

「第一剣術部といえば、いくつも部活動を傘下に置く大派閥のドンだよねっ」

「この学校を事実上動かしている“八龍”という８つ派閥の内の１つね～」

「足利が単独で動いている可能性もあるので、相手が第一剣術部と決まったわけではないが……もし第一剣術部が動いていた場合は深刻だ」

　八龍は部活動だけでなく試験や進路など様々な学校運営にも深く関わっている。その八龍と戦うということは冒険者学校に立ち向かうのと同義。挑んだところで勝敗はすでに見えていると主人公パーティーの参謀らしからぬ弱気な発言をする立木君。

「保健の先生や村井先生に今朝のことを言っても訓練の一環としてしか見てくれず問題視してくれなかったし……このまま暴力を振るわれ続けても指をくわえているしかないのは、嫌だよねっ」

　スカートを掴み、悔しそうに俯くサツキ。ゲームでは上級生や貴族相手でも真っ向から立ち向かってしまったので過剰な報復の対象となってしまった。目の前にいるサツキも同じように立ち向かうのではないかと少し心配だ。

「そもそもだが、今朝のことだけが問題だったわけではない。先のクラス対抗戦においても不公平な“助っ人ルール”を採用してきたり、トータル魔石量グループが失格にされたこともだ。いや、もっと前の決闘騒ぎだって仕組まれたものだろう。明らかに外部生であるＥクラスを潰そうとしている。これら全てに八龍が絡んでいたのではないかと僕は睨んでいる」

　八龍の悪意によりＥクラスは不当に押さえつけられていると主張する。まぁゲームでも黒幕は八龍だったし立木君の推測は当たっているのだろう。問題はその対策だ。

「なら立木君は、Ｅクラスを守るにどうしたらいいと思うの～？」

「ふむ。これは以前、新田に話したことだが――」

　まともに戦っても勝ち目がないのなら従属し攻撃の対象から外してもらえばいい、とのこと。八龍の傘下に入ることができれば上位クラスはもちろん、足利のような上位貴族や第一剣術部であっても簡単には手を出せなくなる。

　今考えているのは、もうすぐ始まる次期生徒会長選挙を利用した策。八龍が次期生徒会長の座を巡って争うのは例年行われていることであり、今年も必ずＥクラスの票も狙ってくる。そこでこちらが先に動いて票を手土産にし、八龍のいずれかに近づこうというわけだ。

「交渉に成功すれば理不尽なルールや暴力から守られ、Ｅクラスの立場も少しは向上するだろう。だが失敗すれば……八龍の全てから睨まれる可能性もある。その場合は今よりも劣悪な状況に追い込まれるのは必至だ」

　その考えは俺もリサから聞いていたし、ゲームのときの立木君も八龍のいずれかに従属しようと動いていたので驚きはない。しかしこの次期、この段階での接触はどうなのか。

　本来なら八龍に接触するのは、生徒会長となった世良さんと赤城君に良い関係が構築できた後、時期的には次期生徒会長選挙の何ヶ月も後のことだった。世良さんが生徒会を動かしてＥクラスに対する融和策を打ち出したため、いくつかの八龍が反発。Ｅクラスの生徒が次々に暴力に巻き込まれたり決闘イベントが多発したため、致し方なく八龍に接触したという流れであった。立木君が動くタイミングがゲームのときよりも大分早いのだ。

　それにＥクラスの票を手土産に八龍を口説き落とすという作戦にも懸念が残る。リサも同じように思ったのか懸念点を指摘する。

「でも、票をあげたところで八龍は満足してくれるかしら。本当に自分達の傘下に入れる価値があるのか、きっと試してくるはずよ～？」

「価値を試すって……やっぱり決闘を求めてくるのかなっ」

　基本的に八龍は戦闘系の部活動ばかりなので、頭を使った交渉術よりも拳で物事を決めようとする脳筋が多い。そんな相手に自分達の価値を認めさせるようとするなら、それこそ決闘で幹部共と戦って黙らせるくらいの力を見せる必要がでてくる。

　もちろんそんなことができるクラスメイトなどいないと立木君も十分承知のはず。恐らく捨て身で舌戦を仕掛けようとでも考えているのだろう。だが懸念されることはそれだけではない。

「あとはどこに交渉するのかも問題。八龍といっても価値観や考え方は色々あると思うし、ちゃんと狙いは絞ったほうがいいわね～」

「確かにっ。八龍の色んなところ声をかけていたら信用も失うしね。でも私達Ｅクラスを理解してくれるところなんてあるのかな……」

　八龍によってはＥクラスを蛇蝎のごとく嫌っているところもある。ゲームで言えば第一剣術部、第一魔術部などがそうだった。この２つの派閥は貴族第一主義なので避けたほうが無難だろう。

「どの八龍に交渉するかだが、今のところ僕が考えているのは――生徒会だ」

「せ、生徒会？　これから選挙で生徒会長が変わるのにっ？」

「う～ん……」

　世良さんの前の生徒会長、つまり現時点での生徒会長はゲームにおいて無能の代名詞だった。名前や顔もでてこないモブで、いわゆる世良さんの業績を良く見せるための踏み台キャラである。高位貴族なのでレベルだけは高いかもしれないが大した実績はなく、世良さんと違って八龍を動かそうともせず、また大きな改革をするわけでもなく、八龍の傀儡という低い評価だったはずだ。

　そんな暗愚な生徒会長の傘下に入ったところでまともに八龍を牽制できるのだろうか。

（――いや。逆に言えば現生徒会長を口八丁で手玉に取る作戦はありといえばありなのか？）

　気位だけは高そうなのでそこを的確にくすぐるような交渉スタイルで臨めば意外に何とかなるかもしれない。他の八龍は脳筋が多い上に頭のキレるインテリもいるので、それらと比べれば交渉難度は大分低いと思われる。

　そして仮にも生徒会。権限が多く与えられているおかげで八龍内では最大権力を有する。対八龍に関してはまず取り入って何ができるか精査してから考えてもいいだろう。ただし、現生徒会長の任期が残り少ないため動くなら早いタイミングで仕掛けないといけない。

「反対はしないけど～どうして生徒会なのかな～？」

「それは簡単だ。今の生徒会長は理知的で公平。実力も高く優れた人物であると聞いているからだ」

「え～！？」

「そうなのっ？　それなら期待できるかもっ」

　現生徒会長が有能であるならば八龍に対して強力な牽制にもなるし、公平ならばＥクラスの陳情も聞き入れてくれる可能性がある。また噂通りできた人物というならば、たとえ交渉に失敗してもリスクは少ないと付け加える立木君。

　その思ってもいなかった理由にリサも俺も驚くしかない。ゲームで言われていた通りの人物ではないのか、はたまた立木君の仕入れた情報に誤りがあるのかは判別できない。

　そんな中、俺の端末に一通のメールが届く。送り主は――生徒会だ。

『今すぐに生徒会室へ来ること。以上』

　――　立木直人視点　――

　冒険者学校６階にある生徒会会議室前で、これから突入しようとする四人が並び立つ。

　成海が生徒会に呼ばれた理由はメールに書かれていなかったため定かではないが、生徒会長に近づくことのできる千載一遇のチャンスを逃す手はない。ここは皆で成海について行き、生徒会を探ろうということに決まった。

「いいか。先ほど話した作戦通りに進めるぞ」

「まずは生徒会長の人となりを見るんだよねっ。押せそうなら今朝のことを陳情するっ」

「それで生徒会と～、できれば会長選挙の情報収集もするんだよね～」

「……」

　大宮は両方の手を胸の前で握りしめながらやる気を見せており、新田はいつもどおり自然体で微笑んでいる。校内最大権力者のいる部屋を前にして物怖じしないその姿は実に頼もしい。

　一方の成海は、眉を下げて怖気づいているように見える。相手を油断させるため小心者に擬態しているのか、もしくは見た通りなのか。その弱気な目からは何を考えているのか窺い知れない。だが大宮達はそんな成海を全く問題視しているように見えないので大丈夫なのだろう。

「それでは成海。ノックを頼む」

「う～ん……嫌な予感が……」

　成海は若干へっぴり腰になりながら生徒会会議室の扉を控えめにノックする。

『……入れ』

　数秒後、向こうから男の声が聞こえた。重量のある木製の扉を押し開けると――中は高級ホテルのような応接間が広がっていた。家具は単なるアンティークではない。机、椅子、照明の全てが名のある名匠の作品だ。これらを揃えるには数千万、下手をすれば億に届く金額がかかるだろう。どれほど寄付金の額があればこのようなものを揃えられるのだろうか。

　部屋の最奥には革張りの椅子に腰掛けた眼鏡の男子生徒が、こちらを探るように睨んでいた。この生徒会会議室であの場所に座ることができるのはただ一人。生徒会長しかいない。僕の仕入れた情報によれば十年に一人の秀才と聞いているが、はたしてその実力はいかほどか。

（しかし、あの女生徒は誰だ……）

　生徒会長のすぐ隣にはもう一人。碧色の長い髪の女生徒が黒い扇子を動かし、ゆったりと扇いでいた。スカーフの色は青なので２年生。同じ生徒会の人だろうか。

　生徒会長以外にも別の人物がいると分かり、計画を見直すべきか逡巡するものの、意を決して一礼し「失礼します」と言いながら四人は生徒会室へと入る。分厚い絨毯のせいで足音は消され、窓や壁も防音されているのか静寂に包まれている。

　目の前にいるのは身分も立場もレベルも遥かに格上。やろうと思えば僕らを退学に追い込むことすらも可能な人物だ。緊張からか早くも喉が渇いてきた。

「――それで。私はそこの男だけを呼んだつもりなのだが、お前達は何だ」

「同じ１年Ｅクラスの立木と申します。こちらは同じクラスの大宮と新田――」

「帰れ」

　有無を言わさず睨みを利かして追い払おうとする生徒会長。あまりの迫力に思わず後退りしそうになってしまう。剣では第一剣術部部長、魔法では第一魔術部部長が最強と言われているが、冒険者学校最強といえばと生徒会長だともっぱらの噂だ。そんな凄腕に睨まれれば怯みの１つくらいは致し方ない。

　だけれども、皆の未来がかかっているのだから僕がここで帰るわけには行かない。生徒会長の人物像を探る猶予は些かも貰えなさそうなので計画を変更し、率直に核心に触れていくことにする。

「僕達は陳情に参りました」

「……なに？」

　陳情と聞いて目を細める生徒会長。またこちらの発言を却下してくると思い、間を置かず勢いで今朝の出来事に話を繋げる。第二剣術部からの暴力。背後に第一剣術部の足利という男のこと。Ｅクラスはこれまでに何度も不当な暴力とルールに晒されている、など。

　もし噂通り公平な人物だというなら、これらを聞いて何か思うはずだ。だというのに続いて生徒会長が発した言葉は期待から大きく外れているものだった。

「お前達などに構っている暇はないし、知ったことではない」

　あまりにも無情。僕達の問題には微塵も取り合う気がないということか。その冷え切った回答に堪らず大宮が一歩前に出る。

「生徒会長は公平な人だって聞いていたけどっ、全然公平なんかじゃないねっ。前に話し合いに来たときも私達を門前払いしたしっ」

「サツキ。落ち着いて、ね？」

　興奮した大宮が食って掛かるがすぐに新田が止めに入る。相手は大貴族であり冒険者学校運営陣に影響を与えるほどの大物。刺激するにはリスクが大きすぎる。冷静になって考えるべきだろう。

（言葉を間違えてはいけない。次の機会はもう得られないかもしれないのだ。だが何と言えばいい……どうすれば話を続けられる……）

　先ほど第一剣術部の足利の名前を出したときに、隣に立っている女生徒が一瞬だけ目を見開き思案するような仕草を見せていた。思い当たることがあったということだ。それは第一剣術部についてか、それとも足利か。いや、もしかしたら――

「僕達のクラスを襲わせた足利なる人物。生徒会の関係者なのではないのですか？　もしくは次期生徒会長選挙に関連しているとか」

「お前たちに話す必要はない」

「僭越ながらこうして暴力を受けている身として聞くべき正当な理由があると思いますが。それだけでなく――」

　突然、バンッという音がする。隣にいた女生徒が机を手で叩いた音だ。腕を下ろしこちらに振り向いたことから胸に煌めく金パッチが垣間見える。やはり貴族であったか。

「ぴーぴー煩わしい劣等生共ですわね。さっさとその方を置いて出て行きなさい。さもなければ」

　言葉の終わりと同時に膨大な魔力が放たれる。それにより肌が粟立つほどの恐怖に包まれて体が硬直し、本能的に跪きそうになってしまう。あの女生徒も生徒会のメンバーというならそれなりにレベルに達しているとは思っていたが、予想以上の実力者だ。

「……あら～？　これは意外ですわね」

　膝を突きそうになるのをぐっと堪えていると、少しだけ魔力の風が和らぐ。大宮と新田が前に出て盾となり、荒れ狂う【オーラ】を防いでくれたのだ。生徒会長はその様子を静かに見つめ、女生徒は興味深そうに笑みを濃くする。

「軽く気を当てればすぐに尻尾を巻いて逃げ出すかと思いきや……もしかしてただの劣等生ではないのかしら。あなた達、名前は？」

「大宮皐！　逃げも隠れもするつもりなんてないよっ」

「新田利沙でーす。普通の女の子でーす」

　胸の前で腕をクロスさせて身構える大宮と、こんな状況でも“普通”をアピールするマイペースな新田。生徒会会議室という特異な場所で、学校最上位の権力者と対峙しても一歩も引かない彼女達の胆力には感嘆する他ない。だが――

「久しぶりに見る生意気な子達ね。ついイジメたくなってしまいますわ」

　碧色の髪の女生徒は口をぺろりと舐めると更なる魔力を練る。微かに床が揺れたと思ったら空気が慌ただしく振動し、視界を赤黒く塗り潰すかのような濃密な魔力がゆっくりと動き出す。まさか……最初に放った【オーラ】はあれでも手加減していたとでも言うのか。

　今から放たれようとするものは明らかに異常の領域。相当にマズい人物を相手にしているのではないかと不安がよぎる。

「その辺にしておけ、楠」

「……承知しました、相良様。少々遊びが過ぎました」

　生徒会長の一言で女生徒は魔力放出を急停止させ、世界が日常へと回帰する。

　僅かな時間であったというのに冷や汗が止まらない。これほどの高みに達している生徒が同じ冒険者学校にいると分かり、あらゆる自信が揺らいでしまう。僕達はこの先こんな化け物と戦っていかねばならないのか。後ろにいた成海を横目で見てみると同じように冷や汗をかいているので僕と同じような気持ちになっているのかもしれない。

　生徒会長は目を閉じて一度深い息を吐いた後、言い聞かせるように話し始める。

「まずだ。私にはお前たちに構っている余裕がない。たとえ余裕があったところで私が付くとしたらお前達ではなく第一剣術部の方となるだろう」

「どうしてっ。悪いのは第一剣術部のほうだよっ、私達は困っているのにっ」

　先ほどの《オーラ》を見せられた後でも食い下がろうと前に出る大宮には驚いてしまう。その心の強さはどこから来るものなのか。対して、目の前に座る生徒会長は感情を表に出さずに淡々と説明を続ける。

「この学校は価値ある冒険者を生み出し輩出する育成機関だ。国や企業はそれらを求めて多額の血税や献金を納めている。ゆえにその価値は何よりも優先される。お前達の言う善悪よりもだ」

　……言っていることは分かる。だがこの学校が価値を生み出す育成機関と謳うなら、価値がでる前に潰してどうするというのだ。生徒が自由に競争し切磋琢磨させることこそ国や企業にとって最大利益を享受できるのではないか。

　僕だって自身の未来をかけてこの場に立っている。震えそうな足に活を入れ、大宮に負けず食い下がろう。

「僕達だって成長し第一剣術部を追い越すかもしれません。その可能性を見極める前に理不尽なルールで潰そうとするのは、価値を求めている人達にとっても損ではないですか？」

「この１０年もの間、お前達Ｅクラスはどいつもこいつも腐るか隷属するだけだった。にもかかわらず、第一剣術部より価値が出る可能性だと？　それを誰が信じる。大言壮語でないのなら今すぐ何らかの価値を示せ。できないのなら立ち去れ。私は忙しいのだ」

　価値の無い者など守るに値しないということか。確かに目の前にいる無類の【オーラ】を放った女生徒は……巨大な宝石だ。今後、国や組織にどれだけの価値を齎すのか計り知れない。それに比べれば今の僕らなど無価値な石ころに過ぎない。

　だからといって自らの可能性を諦めるつもりなど毛頭ない。思考をフル稼働させて反論の言葉を繋ぎ合わせる。すぐにでも言い返そうとすると――

　前触れもなく部屋の中央に縦２ｍほどの紫色に輝く光が現れた。いきなりの出来事にここにいる全員が目を見開いて光に注目する。だが僕はこれが何なのか知っている。そしてこれを扱える人物も。

「――失礼いたします。こちらから巨大な魔力源を感知し、馳せ参じました」

　光の中から現れたのは大きな杖を持ち、黒いベルベットマントを纏った一色乙葉様だ。赤く長い髪を靡かせて周囲の状況を一通り確認する。

「相良様と楠様はともかく……どうしてナオちゃんがこの部屋に？　それに……もしかして相良様が気にしていた子というのが、こちらの中にいるのでしょうか」

　突然現れた乙葉様に面を食らっている大宮と新田。そして存在感をなくすように壁際に立っていた成海を遠慮なくジロジロと観察し始めた乙葉様。すぐに左腕を掲げ、腕端末からステータスを読み取る。

「やっぱり全員１年Ｅクラス。ナオちゃん、この中で相良様に呼ばれた、または気にかけていたのは誰なのか教えてください。名前はもう控えましたので後でしっかりと調べますし、逃すつもりもありませんが」

「勘違いしないでくださいまし、一色様。その者達はクラスのことで陳情に来ただけですわ。邪魔なので先ほど気を当てて追い返そうとしましたの」

　誰が呼ばれたのか……か。そういえば何故成海が呼ばれたのかはまだ分かっていないが、八龍である生徒会長や乙葉様に関心を持たれているのは気になるな。しかしそれを碧髪の女生徒――楠といったか――が否定する。どうやら乙葉様に事情を知られたくないと見える。

「陳情……もしかしてそれは“第一剣術部がちょっかい出してきた”というものではありませんか？　なるほど。どうやら次期生徒会長選挙の件で焦っているのですね」

「一色。会議のことは話すな」

　僕達が何も答えなくとも、その表情と反応から答えを導きだしてくる乙葉様。新たな情報が色々と出てきたが、それ以上は踏み込ますまいと生徒会長が割り込んできた。そして再び深い息を吐き、僕達に向かって忠告するように言葉を放つ。

「お前達。今日のところはもう帰れ」

「……はい。失礼いたしました」

　生徒会長と碧髪の女生徒、乙葉様がそれぞれ何度も視線を交差させる。そのやり取りにどんな意図があるのかは分からないが、決して良い関係には見えない。これ以上長居をするのは危険を感じる。

　それに「今日のところは」ということは次回のアポイントが取れたと解釈してもいいだろう。時間を置いてじっくり策を考えつつ、次に接触する機会を伺うとしよう。

　\*・・\*・・\*・・\*・・\*・・\*

「あの光から出てきた人って、第一魔術部の部長さんなんだっ。すっごい目が怖かったけど……」

「まるで～モルモットを観察する科学者みたいな目だったわね～」

　逃げるように生徒会会議室を出て行くと、途中から魔法で現れた乙葉様の話題となる。話す声色は柔らかいものであったというのに、僕達を見る目はあまりに無機質で冷たく、ギャップが凄いことになっていた。昔は優しい笑みを浮かべる少女であったというのに、この冒険者学校に入学してから随分と変わってしまわれたようだ。

「でもっ、真犯人は第一剣術部ということと、会長選挙絡みで襲ってきたってことは分かったねっ」

「颯太を呼び出したのは生徒会と、シーフ研究部ということもね～」

　あの【オーラ】を放った女生徒はシーフ研究部部長で八龍の一人、楠雲母ということが判明した。成海は過去に楠雲母の上司と仲良くなり食事に誘われたことがあったようで、それに関連した呼び出しではないかと説明する。

（だがその言い分はおかしい）

　上級貴族が平民を食事に誘うなど余程のことがなければありえない。それに今回呼び出された場所は生徒会会議室で、生徒会長も同席していた。八龍が二人も揃って呼び出したのなら、もっと重要な理由があったはずだ。それはいったい何か。

（……もしかして、これも生徒会長選挙が関係しているのか？）

　たとえばこういう筋書はどうだろう。

①　生徒会とシーフ研究部が成海を“次期生徒会長”に推薦しようとした。

②　それが“１年Ｅクラスの誰かが立候補するかもしれない”という程度の断片的かつ不確かな情報として足利の耳に入った。

③　警戒した足利は、第二剣術部を使ってその人物を特定しようとし、今朝の暴力が起こった――

　とすれば、全ての事象が繋がる。だがそれは特大級の問題を無視して無理やり話を繋げただけだ。はたしてＥクラスの生徒を次期生徒会長にするなどありえることなのか。

　仮にそのようなことをすれば新貴族の台頭を阻止する目的で作り上げた“八龍システム”に亀裂が入りかねないし、下手をすれば古貴族達が政治権限と資金を使って排除に動いてくることも考えられる。自身の立場や冒険者学校の秩序を犠牲にしてまでそのような行動にでることは考えにくい。

　だがこの時期に生徒会長とシーフ研究部部長が成海に接触しようとしていたことは紛れもない事実であるし、同じ八龍の乙葉様も警戒を露わにして生徒会会議室に呼ばれた人物を探ろうとしていた。となればその可能性を疑うべき……なのか？

（お前は何者なんだ）

　大宮と新田に話しかけられ、背中を丸めて受け答えしている太った男、成海颯太。冴えない表情は相変わらずで、覇気などは微塵も見当たらない。やはりあの態度は擬態しているだけなのだろうか。

　この先、僕らが這い上がるための鍵となれるのか、単に考えすぎなだけなのかを判断するにも情報が不足しすぎている。僕だけでは情報収集する手段に限りがあるので、ここは成海と近い立場にいるカヲルを巻き込んで調べてみるべきだろうか。

ＨＪノベルス様より２巻が発売中です。

活動報告にてコミカライズ情報も公開しました！

「面白い！」「続き読みたい！」など思った方は、ぜひブックマーク、高評価をよろしくお願いします！